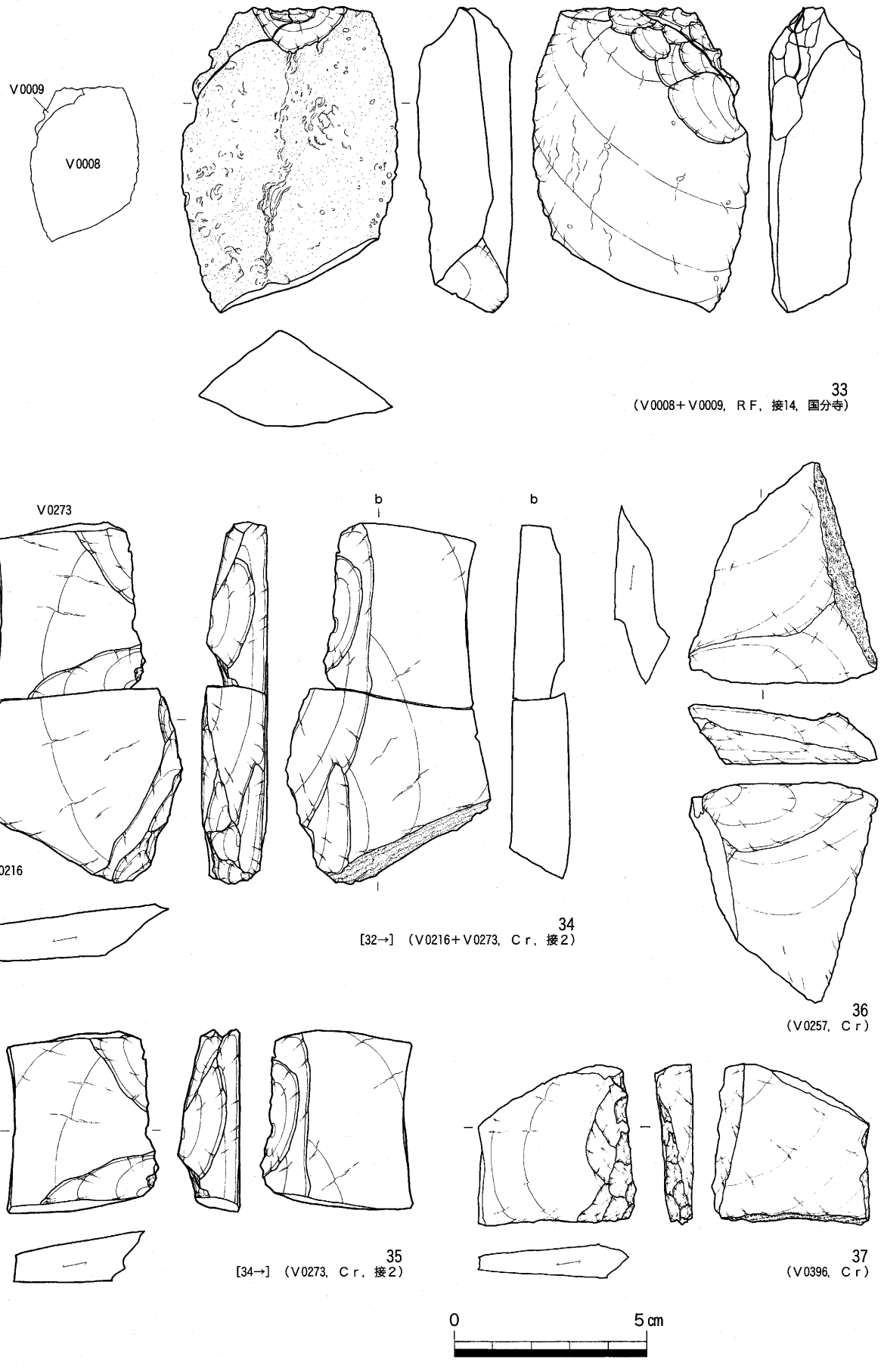
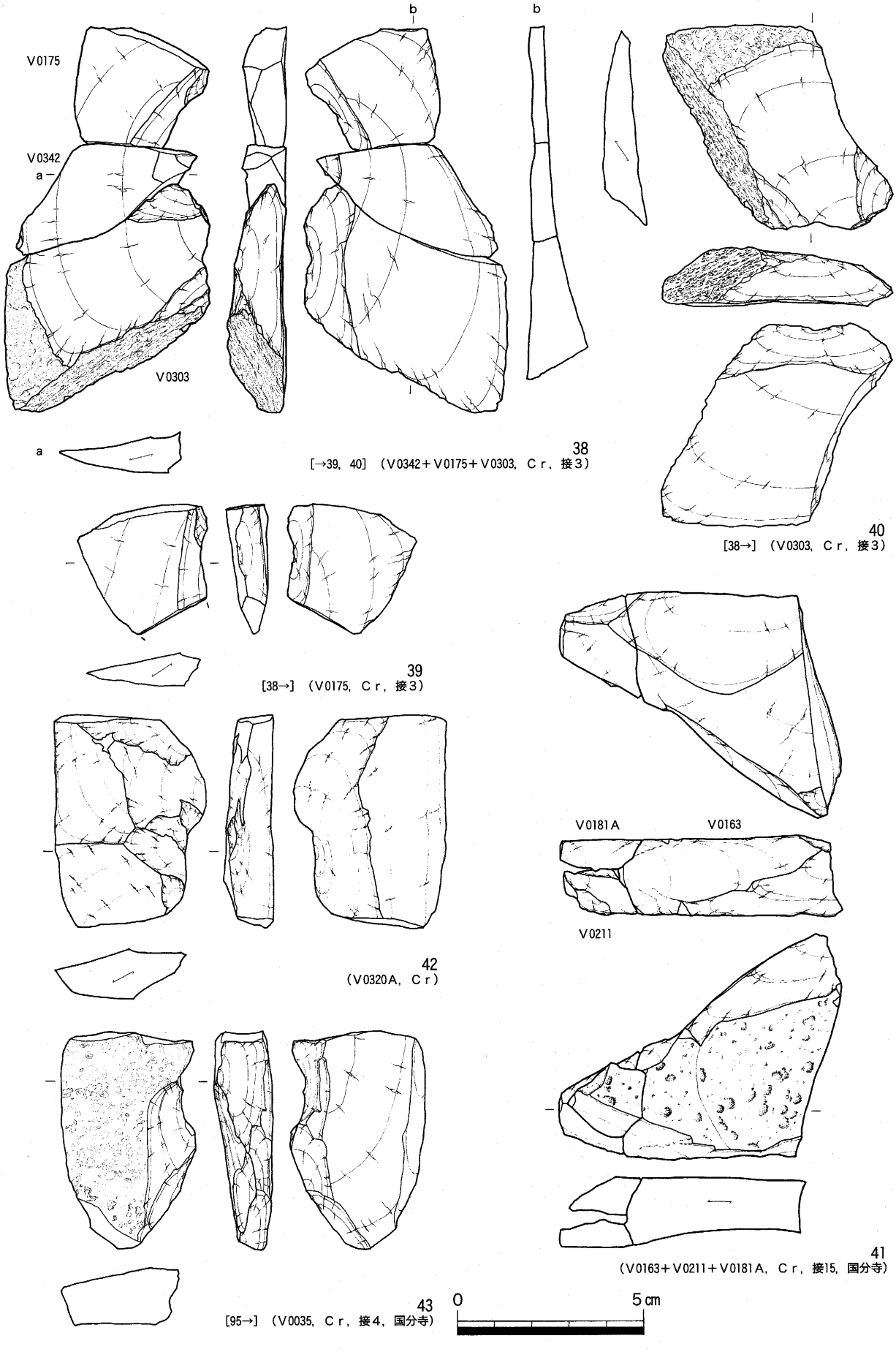


第39図　３ｂ区出土石器実測図３　RF・Cr（S＝2／3）



第40図　3b区出土石器実測図4　Cr（S=2／3）

H類は，やや小さめの剥片を素材とするもので，5点（45～49）ある。45･46は背面に自然面を大きく残す剥片を素材とする。素材の打面側に作業面を設定し，山形の石核調整を施す。47は極小の剥片の背面が剥離稜線となるところを打面に設定し，小形の剥片を得ている。48・49は素材剥片の主要剥離面側を打面に設定するものである。

F類は5点（50・55・96・98・102）ある。うち55の1点がチャート石材である。薄青色のやや節理が目立つ石質で打面転移を頻繁に繰り返し，寸詰まりの不定形剥片を剥取する。ブロック3出土。50･96･98・102は剥片剥離の作業方向が一定せず，求心状に剥片剥離が進行した残核である。

B類は末尾に自然面を留め，厚さが30.0㎜以上と推定される石核。残核が断面肉厚の棒状を呈する点が特徴である。4点（51～54）ある。51・52は石核底面に自然面を取り込むまで消耗した最終段階の残核で，交互剥離状に打面が転移した可能性をもつ。53は自然面を打面として，石核調整なしに剥片剥離を行うもの。54は厚さ20.0㎜程度の剥片を素材として小口部に交互剥離の痕跡をとどめる。

以上の，3b区出土石核に共通する点をまとめておく。素材と石材に関することとして，自然面を付着させるものが多いこと，またその自然面は水磨状態のものが多いこと，白色風化系（An-C）と普通サヌカイト系（An-A）に明瞭に区分できること，受熱の可能性がある亀裂をもつものが多いことなどが指摘できる。また，剥片剥離の特徴として，石理に沿った石核幅一杯の剥片を剥離するものが多く，ややラフではあるが石核調整を施して打面を山形に整えるものが多いこと，石理に沿った分割，あるいはそれに直交する分割が多いこと，分割後の剥片剥離は作業面を再生して石核幅一杯の剥片剥離を継続するものと打面転移や球心状の剥片剥離を行うものの二者があること，などを指摘できる。

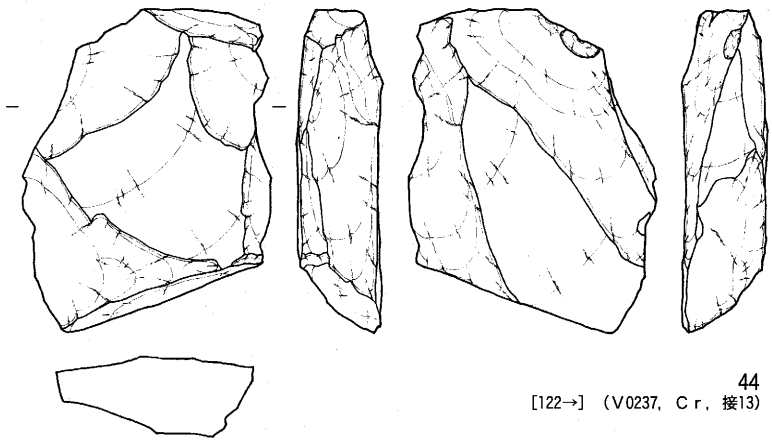
分布傾向としては，表に示したようにA類がブロック1多く分布し，F類がブロック3に分布する傾向がある。

	ブロック1	ブロック2	ブロック3
A類	13	1	
B類	3	1	
H類	4	1	
F類	1	1	3

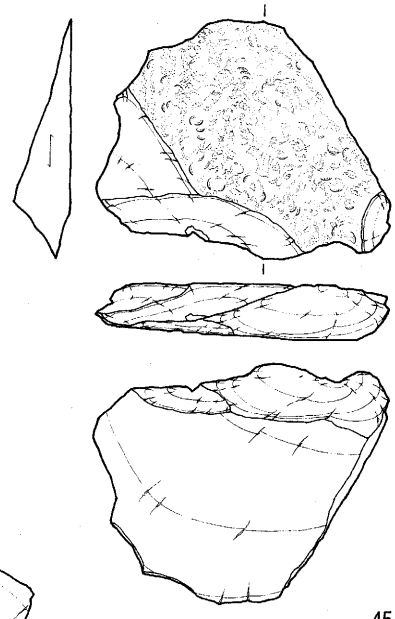
第13表　石核分類別分布状況

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚(㎜)	重量(g)	遺存状態	石材	打面調整	面転移	ブロック	グリッド	接合	備考
45	41	32	15	V0173	58.0×47.5×11.0	22.9	完形	An-C	○	×	1	F5		分類H
46	41	32		V0332	65.0×69.0×15.0	49.6	完形	An-C	○	×	1	F5		分類H
47	41	32		V0251	45.0×19.0×7.5	5.8	完形	An-C	×	×	1	F6		分類H
48	41	32		V0152	86.0×53.5×18.5	50.3	完形	An-C	○	×	1	F6		分類H
49	41	36		V0020	50.0×30.5×12.5	15.5	完形	An-C	×	×	2	C3		分類H
50	41	36		V0048	48.0×45.0×14.0	28.3	同割	An-A	○	○	2	D4		分類F　国分寺
51	42	32		V0210	82.0×44.0×29.0	111.5	分割	An-C	○	○	1	F5	接6	分類B　国分寺
52	42	36	16	V0059	97.3 ×39.0×32.0	80.9	完形	An-C	○	×	2	D3		分類B
53	42	32		V0186	36.0 ×75.0×20.5	50.0	分割	An-C	×	×	1	F5		分類B
54	42	32		V0147	78.0×21.5 ×23.5	28.7	完形	An-A	×	○	1	F6		分類B
55	42	36	16	V0007	41.8×28.5×24.8	30.7	完形	チャート	×	○	3	C2		分類F
56	43	32		V0352	22.0×26.2×13.0	5.2	欠損	An-A	○	×	1	F6		
57	43	32		V0302	29.0×21.7×12.0	5.3	欠損	An-C	○	×	1	F5		
96	49	36		V0005	50.0×56.5×20.0	48.2	分割	An-C	×	○	3	C2	接4	分類F
98	49	36		V0013	60.0×60.5×28.0	69.1	分割	An-C	×	○	3	B2	接4	分類F
102	50	32		V0269	58.0×50.0×21.0	38.8	分割	An-C	×	○	1	F5	接5	分類F

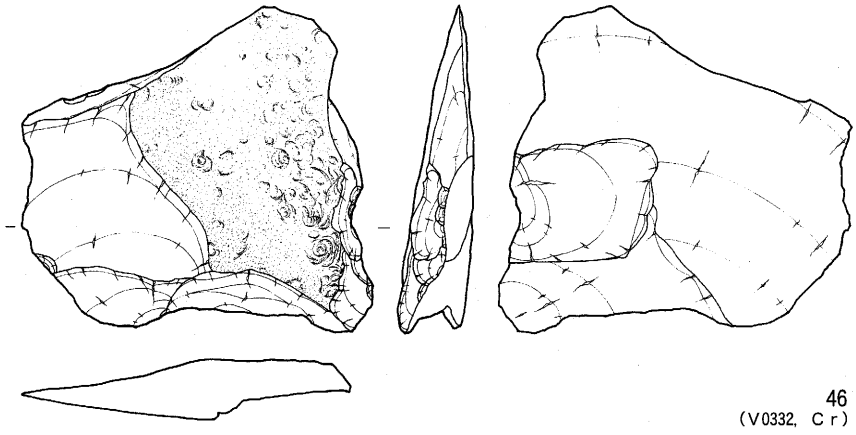
第14表　3b区　石核　属性表2（H・B・F類）



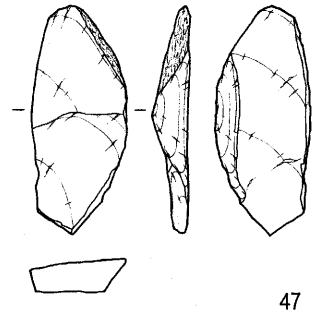
44
[122→] (V0237, Cr, 接13)



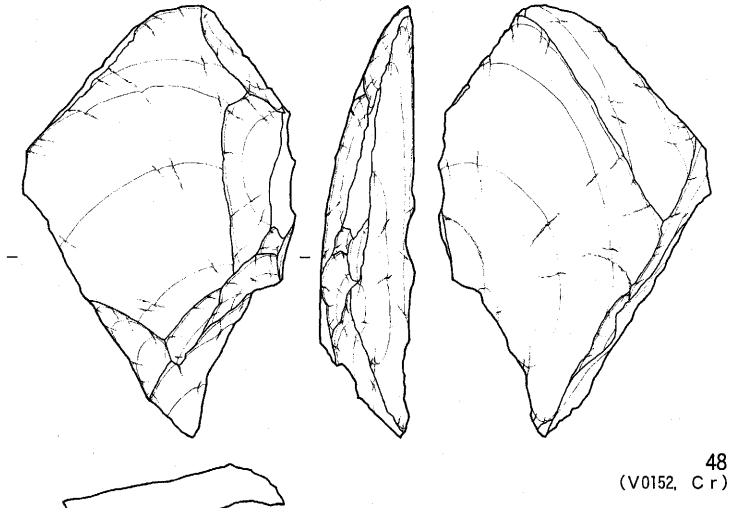
45
(V0173, Cr)



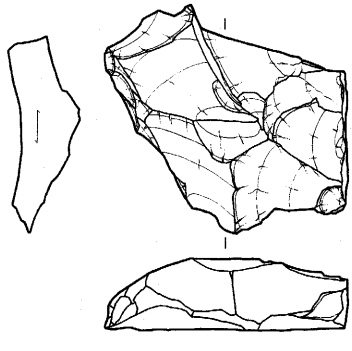
46
(V0332, Cr)

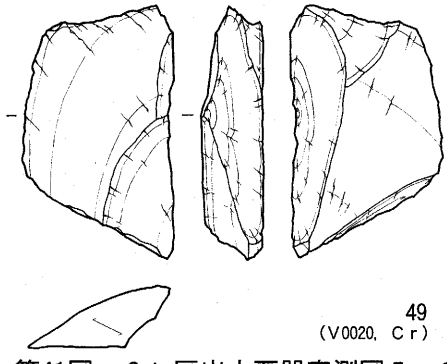


47
(V0251, Cr)

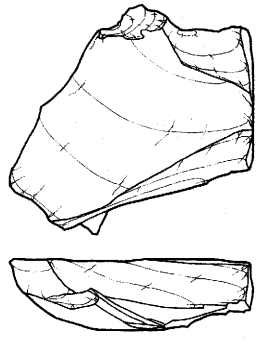


48
(V0152, Cr)



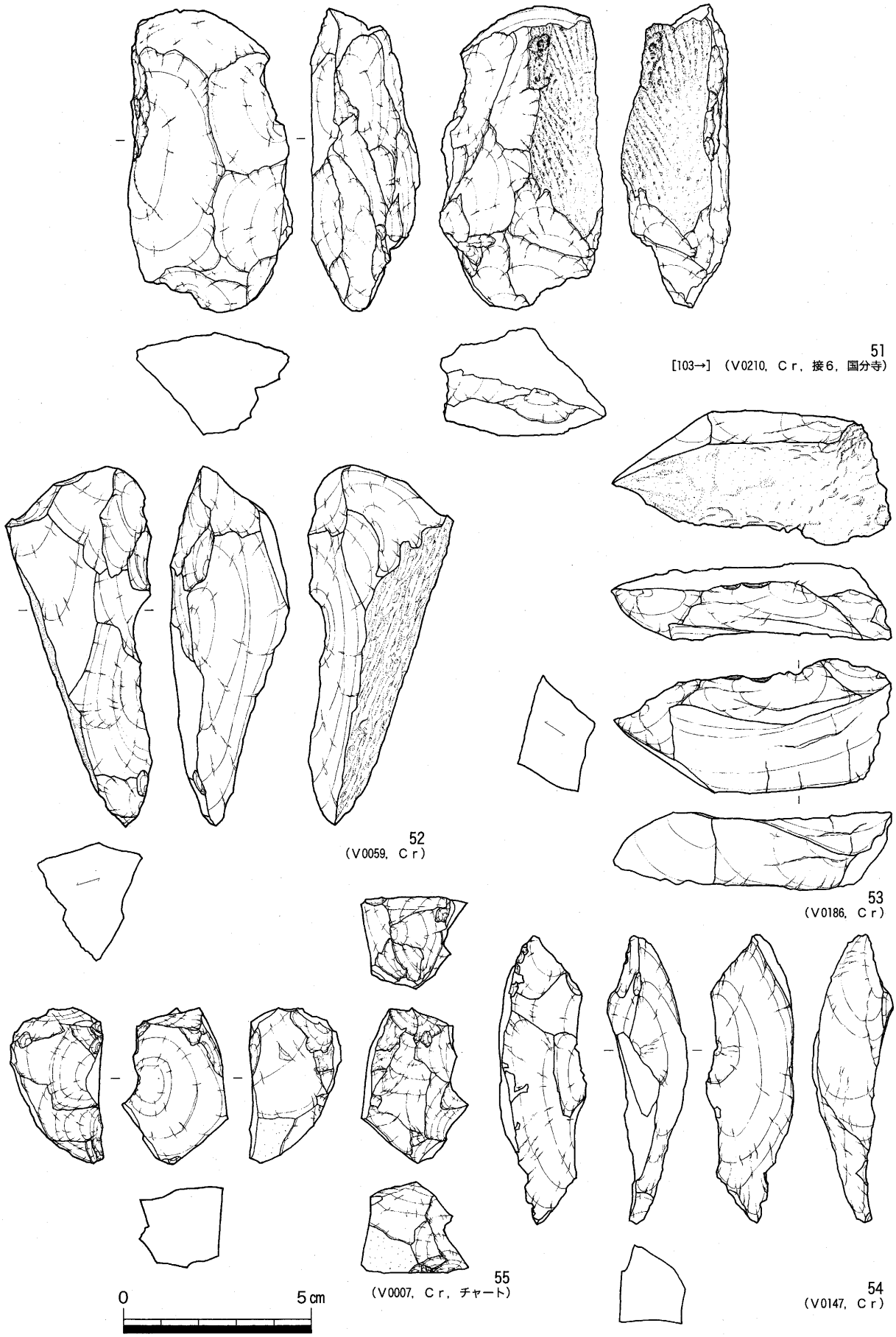


49
(V0020, Cr)



50
(V0048, Cr, 接13, 国分寺)

第41図　3b区出土石器実測図5　Cr（S=2／3）



第42図　3 b区出土石器実測図6　Cr（S=2／3）

剥　片（第43図　58～第45図　82）

剥片は総計307点出土している。

58は背面に自然面を大きく残しており，初期段階の剥片と推定される。59～67は打面が山形に整形された石核から剥取された翼状剥片である。59・61・63・64は打撃時に垂直割れを生じた剥片，60・63は主要剥離面のリングに沿って末端側を欠損した剥片である。65は底面の取り込みが不十分，逆に66は底面が大きく取り込まれすぎた剥片である。67は非常に薄い剥片であるが，打面と底面を備える。以上は石核Ａ類あるいはＢ類の初期段階に剥離された剥片である。

68・69は平坦で幅の広い打面をもち，背面に打面を共有する細かな調整剥離を認める。これらは石核調整段階に生成された剥片である。打面が概ね石理に併行する。

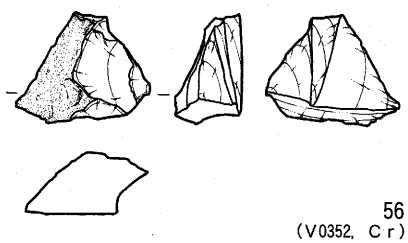
71～80は打面に石核調整が施されず，多くが平坦面を打撃することによって得られた剥片である。形状は一定せず，背面に分割面や不定方向の大きな剥離面を留める。これらは，石核Ａ類やＢ類の石核整形，あるいは石核Ｈ類の素材を剥出する際に生じる石核整形時の剥片などに相当する。

81・82も同様に平面あるいは側面に不定方向の剥離面を留めるもので，寸詰まりでやや厚めの剥片である。石核形状はサイコロ状の求心状の剥片剥離を行うものに対応可能である。先出の70は打面部にやや細かな石核調整がみられるが，背面には剥離方向のことなる先行剥離面がみられ，並列的に剥片剥離を進める石核から剥出されたものと言える。

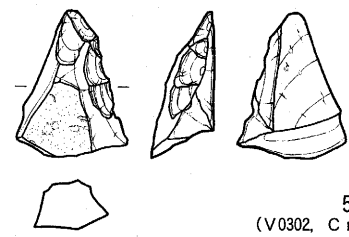
ここで，翼状剥片をＦＬ-１，その他のものをＦＬ-２とした場合の各ブロック別の出土量は，ＦＬ-１が18点（うちＢ１に９点，Ｂ２に６点），ＦＬ-２が275点（うちＢ１に200点，Ｂ２に46点，Ｂ３に14点，外縁部に13点）となる。それぞれの重量分布と主要石器の重量分布を比較すると，まずＦＬ-１が2.0ｇ以上にのみ分布するのに対して，ＦＬ-２は分布の中心が0.8～2.0ｇまでにある点で，概してＦＬ-２の方が小形である。また，ナイフ形石器，スクレイパー，加工痕有剥片のうち８割以上が2.0ｇを超えた重量を示し，大形の翼状剥片を素材とするスクレイパーはＦＬ-１の分布が途切れる部分に分布の中心がある。

重量（g～）	Kn	Sc	RF	Fl-1	Fl-2
0.1	0	0	0	0	2
0.2	0	0	0	0	31
0.4	1	0	0	0	56
0.8	0	0	2	0	74
2	3	0	1	6	56
5	0	0	2	8	21
10	0	2	2	3	16
20	1	3	1	0	16
40	0	1	0	0	3
80	0	0	0	1	0
100	0	0	1	0	0
合計	5	6	9	18	275

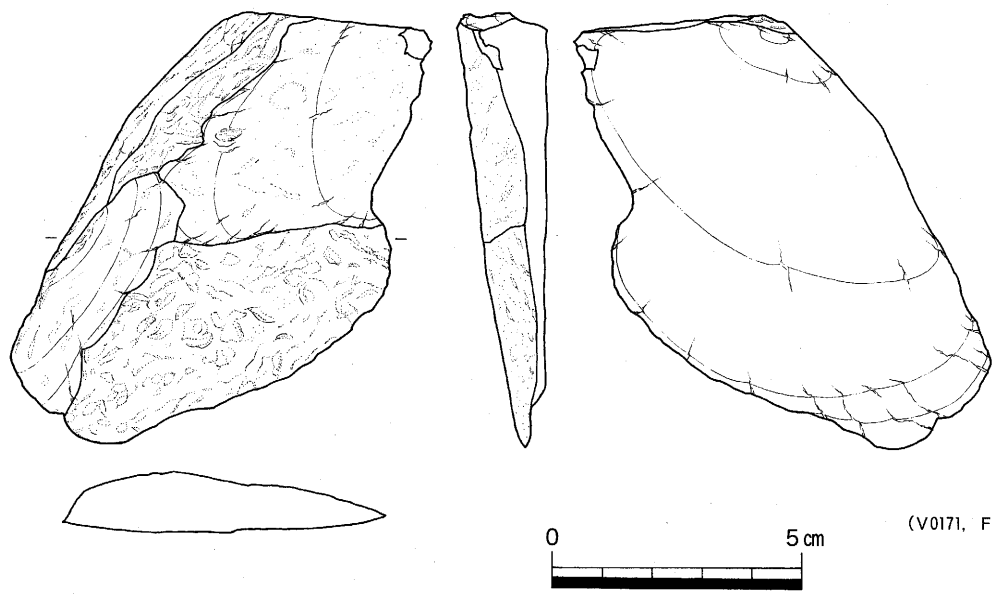
第15表　３ｂ区　主要石器・剥片の重量分布



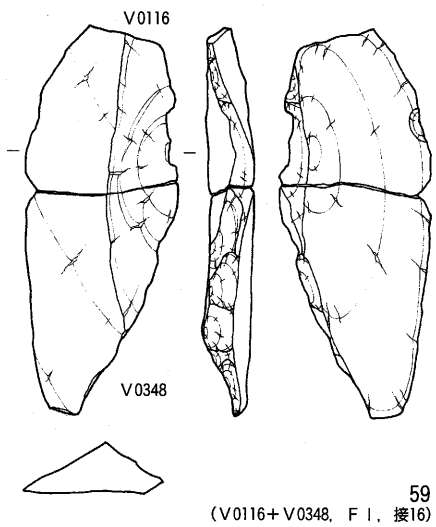
56
(V0352, Cr)



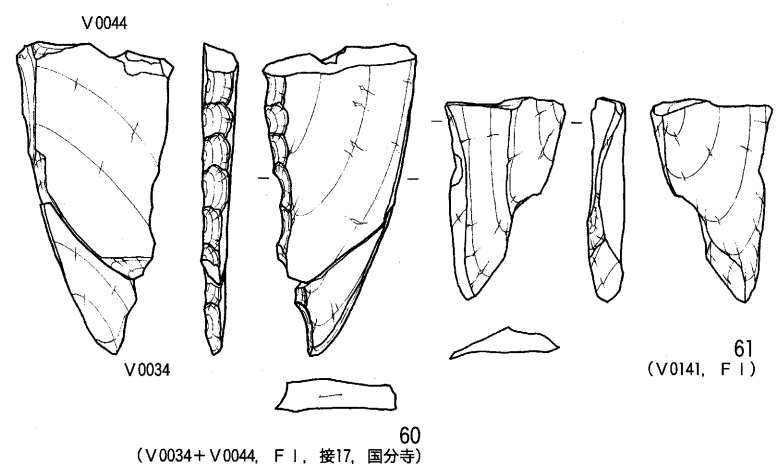
57
(V0302, Cr)



58
(V0171, FI)

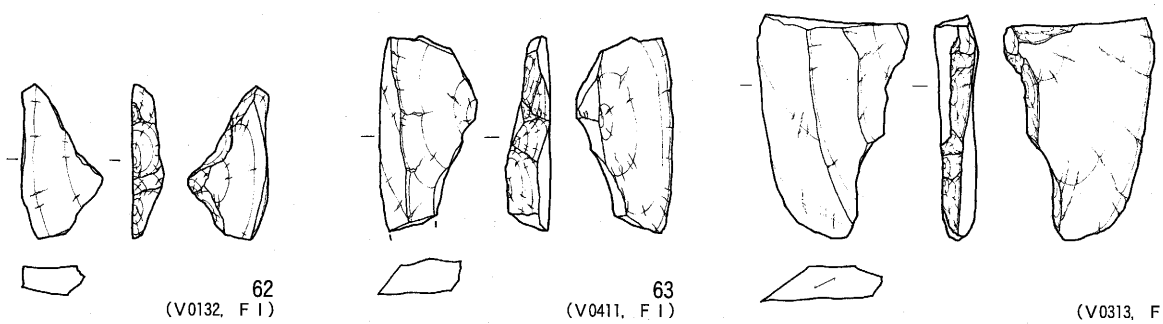


59
(V0116+V0348, FI, 接16)



60
(V0034+V0044, FI, 接17, 国分寺)

61
(V0141, FI)

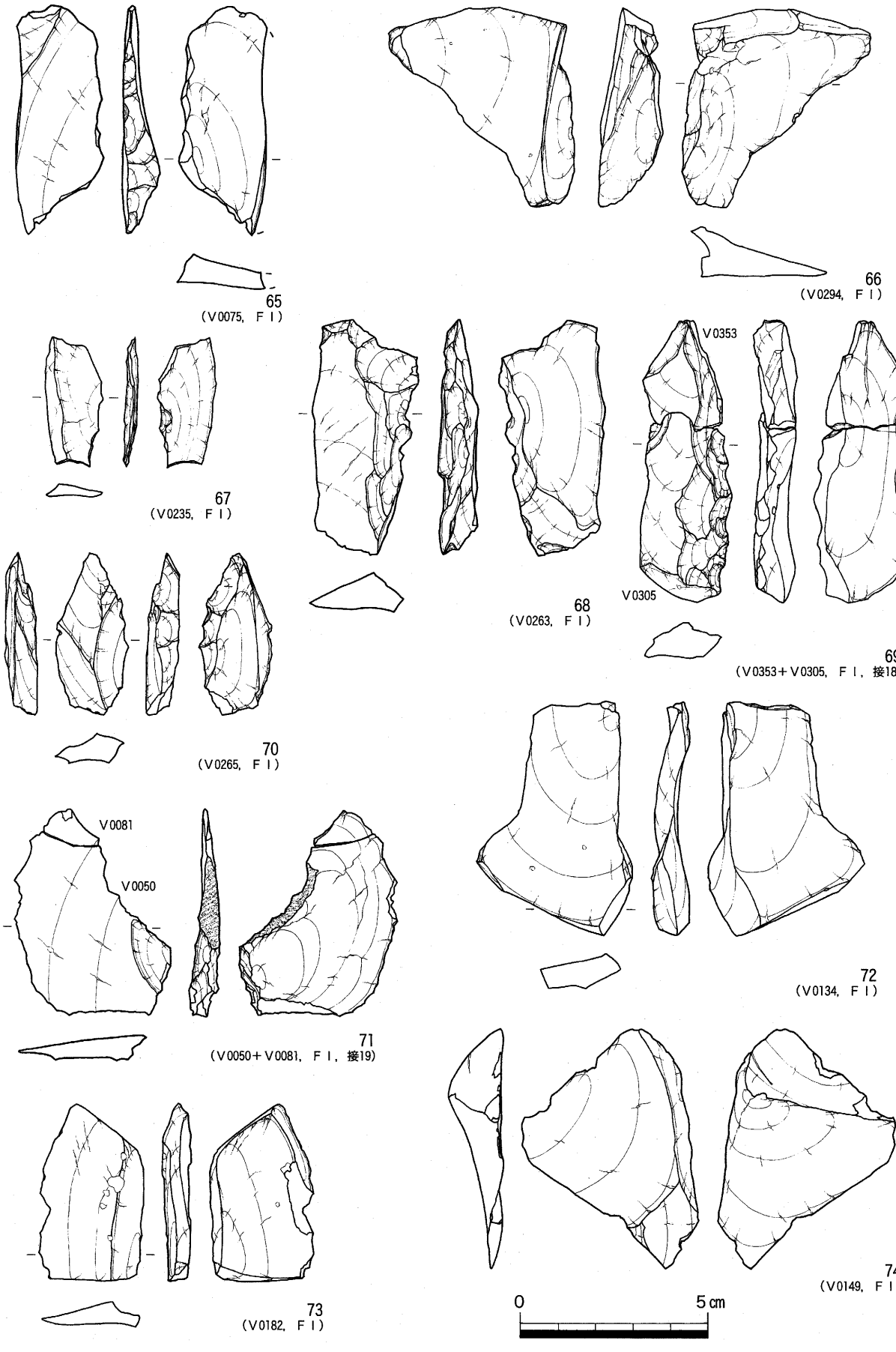


62
(V0132, FI)

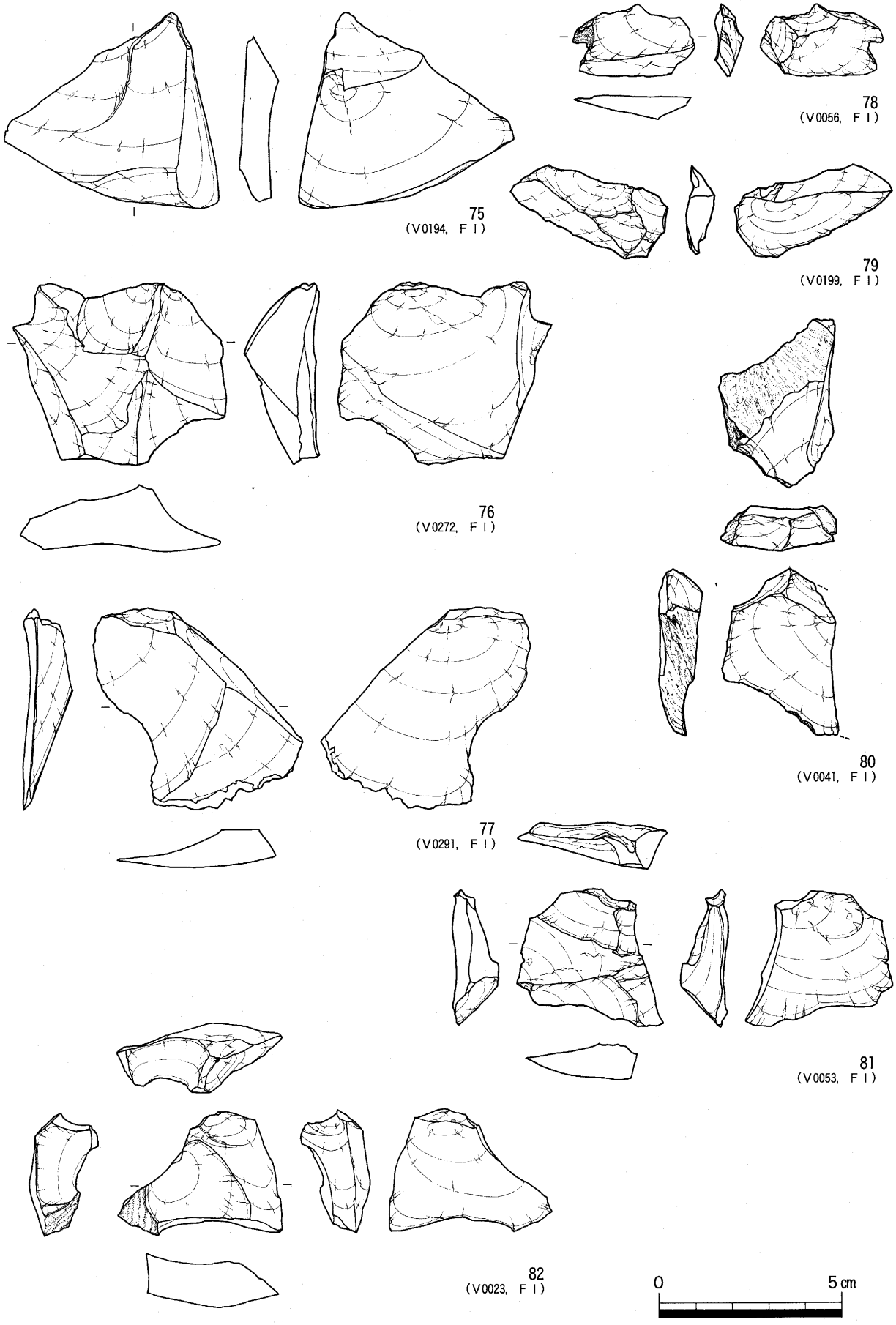
63
(V0411, FI)

64
(V0313, FI)

第43図　3b区出土石器実測図7　Cr・FI（S=2／3）



第44図　3b区出土石器実測図8　FI（S=2／3）



第45図　3 b区出土石器実測図 9　FI（S=2／3）

（6）接合資料

3b区では合計21件の接合資料がある。構成剥片点数は58点。全出土石器数である397点を母数とした接合率は15%，重量で算出すると，全体の約50%を接合個体が占める。つまり大形の石片に接合例が多い。

内訳を示すと第16表のとおりである。接合種別は剥離面における接合（Ⅰ種接合）を含むものが11点，折面における接合（Ⅱ種接合）が10点である。

各ブロックにおける接合率をみると，第8表にみられるようにブロック3が26.9%と最も高く，ブロック1の13.8%，ブロック2の9.5%と続く。ブロック間の接合状況は，ブロック1の接合資料はすべてがブロック内で収まるが，ブロック2・ブロック3は相互にブロック間で接合するものが1件ある。資料中に石核を含むものはブロック1に多い。

以下，各資料毎に剥片剥離の流れを概説する。

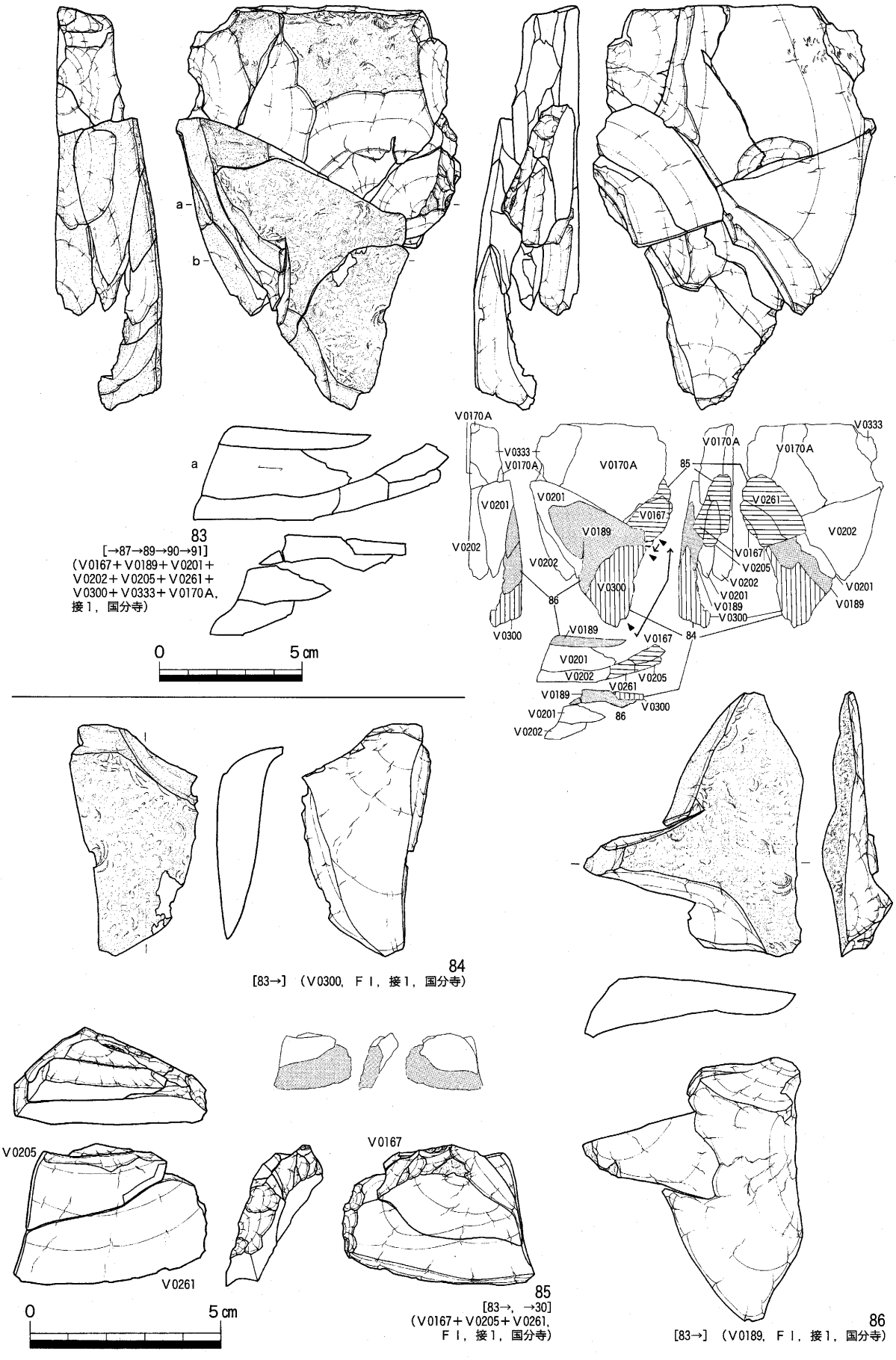
番号	挿図	写真	剥離概要（遺物掲載番号）（器種）	石材	石核分類	種別	出土位置	構成数	重量（g）
1	第46図～第48図	17	V0300(84)→V0167+V0205(85)→V0189(86)→V0333(92)→V0170(Cr)(91)+V0261(RF)(30)→V0201(Cr)+V0202(Cr)(92･94)	An-A 国分寺	A	Ⅰ	1	9	387.0
2	第38図	15	V0166(32)(RF)→V0216(34)(Cr)→V0273(35)(Cr)	An-C	A	Ⅱ	1	3	122.2
3	第40図	15	V0342(38)(Cr)→V0303(40)(Cr)→V0175(39)(Cr)	An-C	A	Ⅱ	1	3	67.8
4	第49図	18	V0035(43)(Cr)→V0005(96)(Cr)･V0018(97)(Cr)･V0013(98)(Cr)	An-C 国分寺	F	Ⅰ	2･3	4	179.3
5	第50図	18	V0196A(101)→V0290(100)→V0269(102)(Cr)	An-C	F	Ⅰ	1	3	61.7
6	第50図		V0180(104)→V0210(51)(Cr)	An-C 国分寺	B	Ⅰ	1	2	113.8
7	第51図	18	V0136+V0356(107)→V0256(106)	An-A		Ⅰ	1	3	81.2
8	第51図		V0191(109)→V0212(108)	An-C		Ⅰ	1	2	48.1
9	第52図	18	V0139(111)→V0177(112) ※同時割れ	An-C		Ⅰ	1	2	45.7
10	第52図		V0155(115)→V0159+V0242(114)	An-A		Ⅰ	1	3	5.2
11	第53図	18	0004(117)→V0002(118)	An-C		Ⅰ	3	2	67.4
12	第53図	18	V0337(121)→V0286(120)	An-C		Ⅰ	1･out	2	53.9
13	第54図	18	V0126+V0165(123)→V0237(44)(Cr)	An-C	B	Ⅰ	1	3	78.4
14	第39図	15	V0008+V0009(33)(RF)	An-C 国分寺		Ⅱ	3	2	115.9
15	第40図		V0163+V0211+V0181(41)(Cr)	An-C 国分寺	A	Ⅱ	1	3	84.8
16	第43図	16	V0116+V0348(59)	An-C	(A)	Ⅱ	1	2	17.1
17	第43図	16	V0034+V0044(60)	An-C 国分寺	(A)	Ⅱ	2	2	14.5
18	第44図	16	V0305+V0353(69)	An-C	(A)	Ⅱ	1･out	2	16.2
19	第44図	16	V0050+V0081(71)	An-A		Ⅱ	2	2	11.1
20	未掲載		V0078+V0082	An-A 白峰		Ⅱ	2	2	3.3
21	未掲載		V0234+V0285	An-A		Ⅱ	1	2	2.1

第16表　3b区　接合資料総括表

接合資料1（第46図～第48図）

接合状態で長さ143.0㎜，幅102.0㎜，厚さ38.5㎜である。上面が自然面に覆われ，石理に沿って剥離した板状の剥片を素材とする。第1図83の上面側の図を基準にして，石核の上端および左側縁は摩滅した古い剥離面がみられる。石核上面との稜線付近には無数の打撃痕が残る。作業面側となる右側縁には，目的剥片85の背面に長さ70㎜程度の目的剥片（①）のネガ面が確認できるが，それ以前の剥片剥離は不明である。

石理に影響を受けた「潜在割れ」が剥片剥離の過程で多数生じている。目的剥片（85）の剥離に先行する84は，打面作出のための石核調整剥片である。85背面の先行剥離面の下端部（あるいは石核底面の可能性もある）を作業面の側縁側から打撃し，剥離は途中で停止するものの，山形の打面を準備している。石核上半部の石核整形剥片は未接合であるが，85の打面部には2～3面の石核調整の痕跡が認められる。



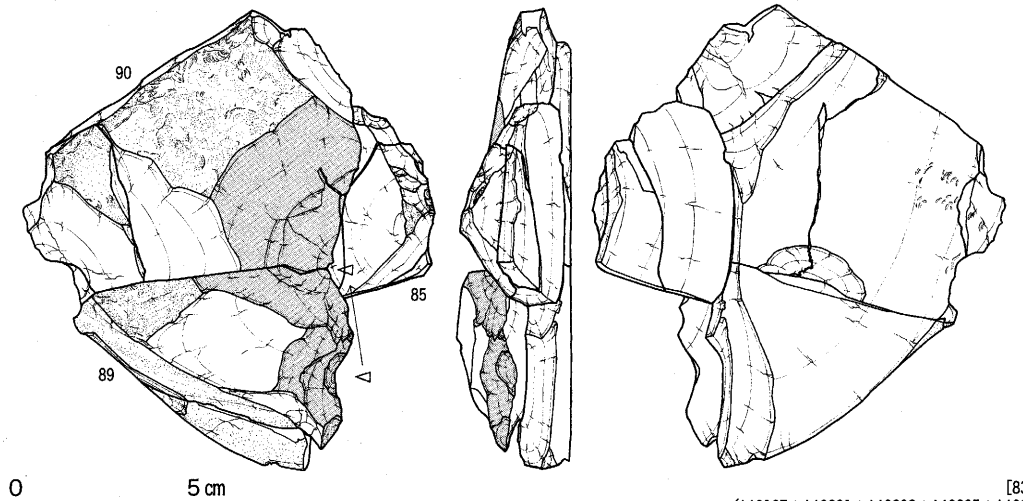
83
[→87→89→90→91]
(V0167＋V0189＋V0201＋V0202＋V0205＋V0261＋V0300＋V0333＋V0170A, 接1, 国分寺)

84
[83→] (V0300, FⅠ, 接1, 国分寺)

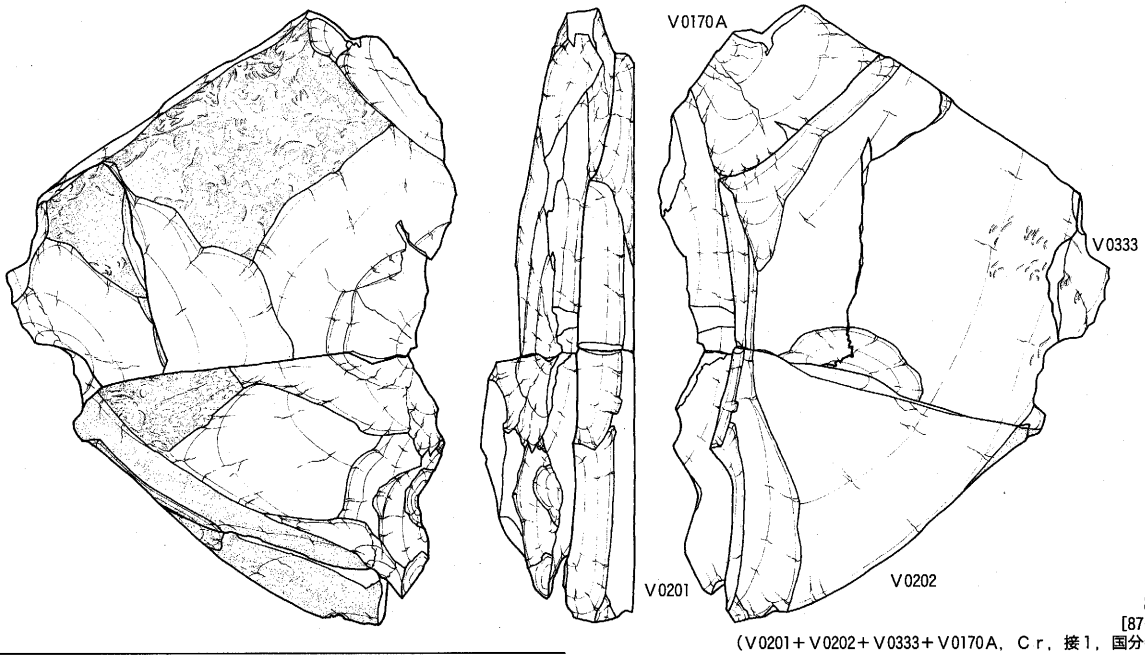
85
[83→, →30]
(V0167＋V0205＋V0261, FⅠ, 接1, 国分寺)

86
[83→] (V0189, FⅠ, 接1, 国分寺)

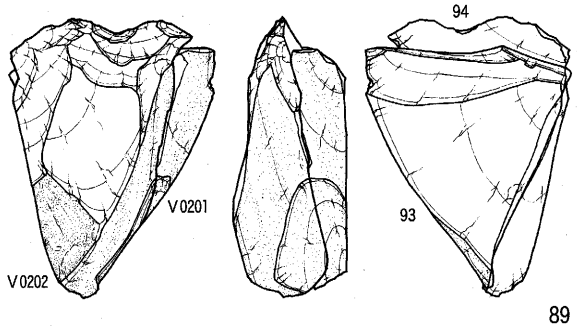
第46図　3b区出土石器実測図10　接合資料1 (S=2／3, 1／2)



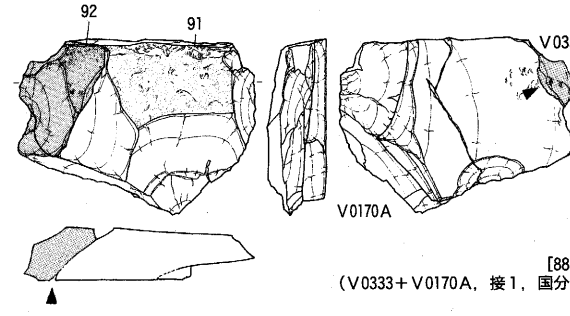
87
[83→]
(V0167＋V0201＋V0202＋V0205＋V0261＋V0333＋V0170A，接1，国分寺)



88
[87→]
(V0201＋V0202＋V0333＋V0170A，Cr，接1，国分寺)

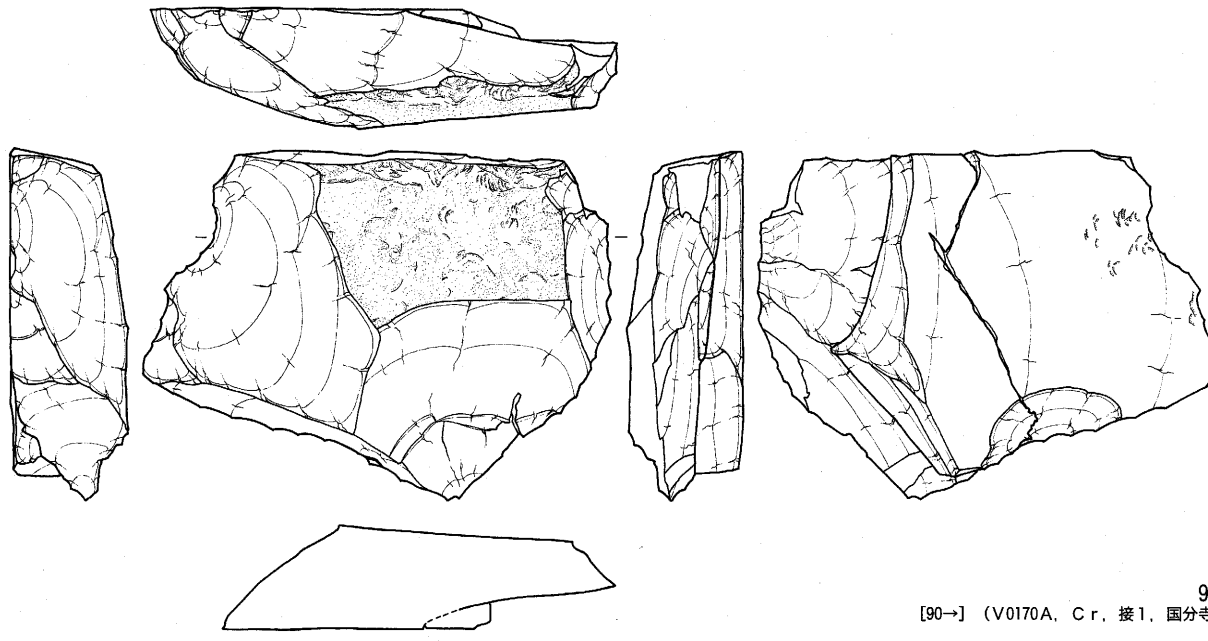


89
[88→，→93・94]
(V0201＋V0202，接1，国分寺)

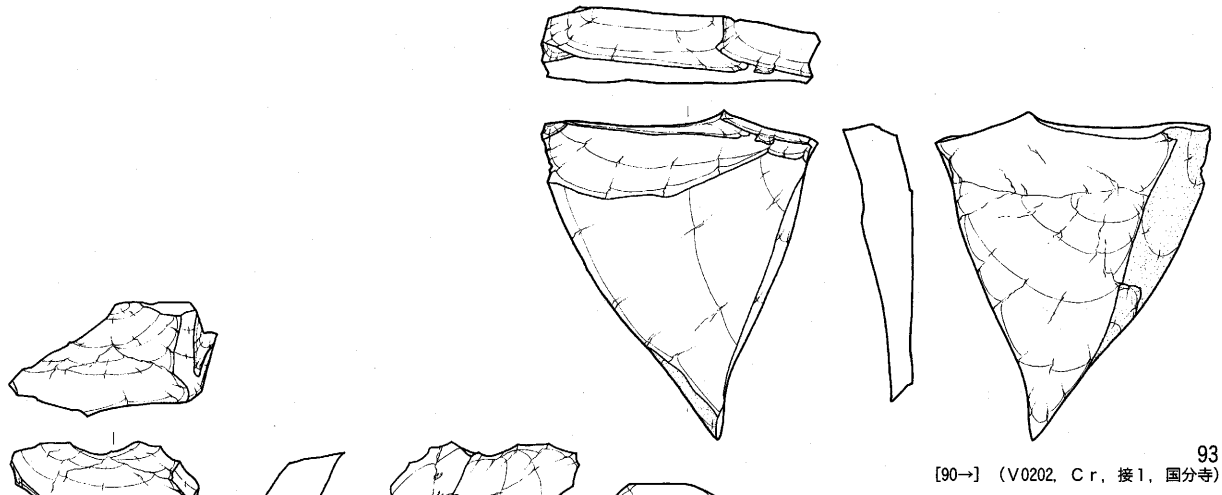


90
[88→]
(V0333＋V0170A，接1，国分寺)

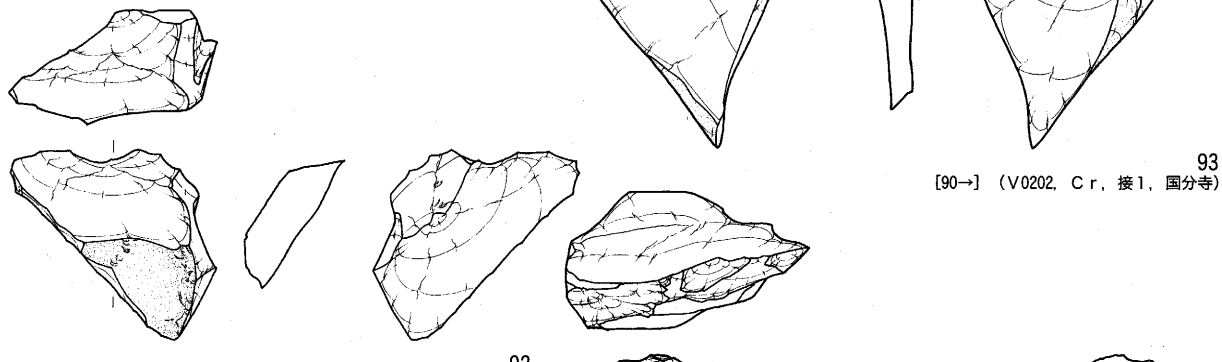
第47図　3ｂ区出土石器実測図11　接合資料1（S＝2／3，1／2）



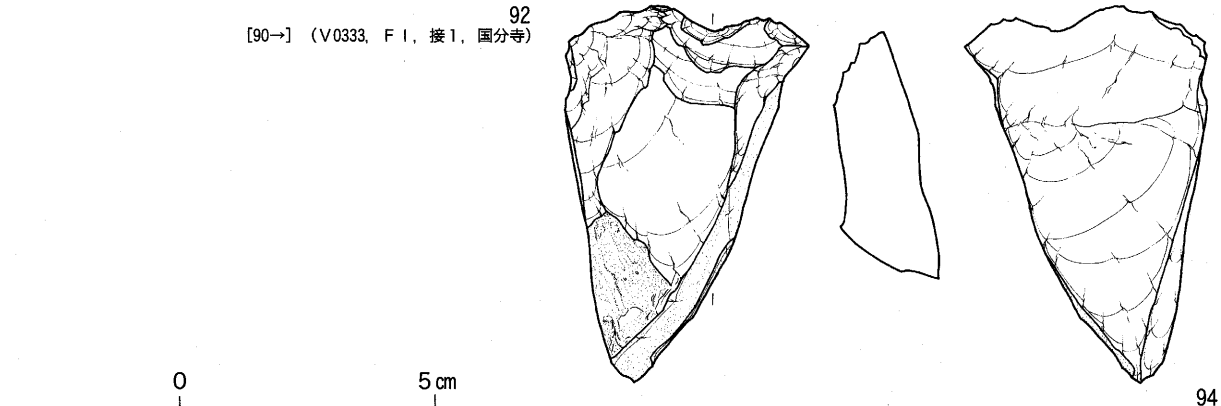
91
[90→] （V0170A, Cr, 接1, 国分寺）



93
[90→] （V0202, Cr, 接1, 国分寺）

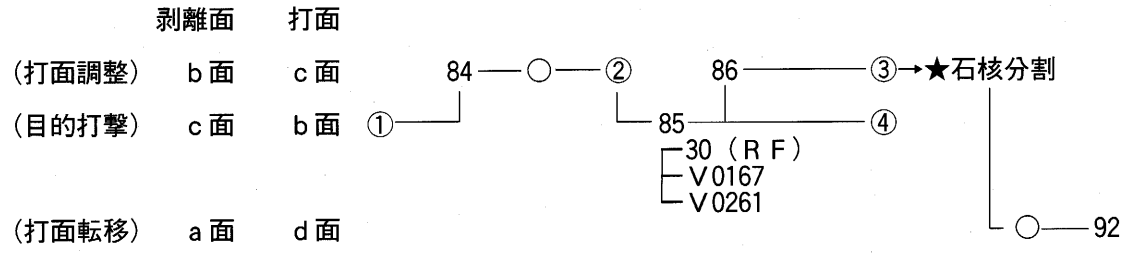


92
[90→] （V0333, FI, 接1, 国分寺）



94
[90→] （V0201, Cr, 接1, 国分寺）

第48図　３ｂ区出土石器実測図12　接合資料1（S＝2／3）



85の打点は打面部に僅かに残った自然面にある。山形に作出されたの打面のほぼ中央付近に相当するが，打点付近の亀裂や打撃痕の状況から，85が剥出するまでに２～３回の打撃を繰り返したことがわかる。その潜在割れで85は打撃時にいくつものパーツに分割される。また第48図93と94の間の分割線もこの際の潜在割れである。さらに，第47図の石核88の底面の潜在割れもこの段階に生じている。なお85の分割片には二次加工が施される（第38図30)。

85の打撃後，石核上端には作業面補正１回，打面の再生のために４回の打撃が行われる。最初の打面再生の剥片が86であり，最後の打面再生打撃の際に石核が垂直割れを生じて89と90に分割する。89が93と94に分割したのもこの段階と考えられる。先述のように目的剥片85打撃の際の潜在割れ部分でほぼ石理に沿って分割するものである。

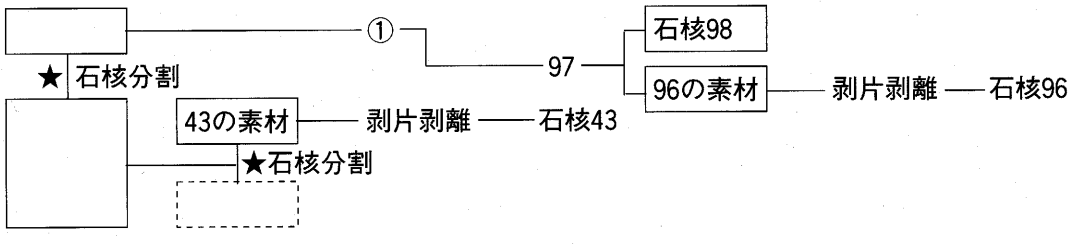
石核分割後，石核91は石核右端側に作業面を移し，石核底面を打面とする二次加工が数回みられる。新たな作業面の作出を目的とするものかもしれないが，92剥離後に作業は停止している。もう一方の分割片である94にも若干の二次加工がみられるが，大きな形状の変更なく作業が停止する。

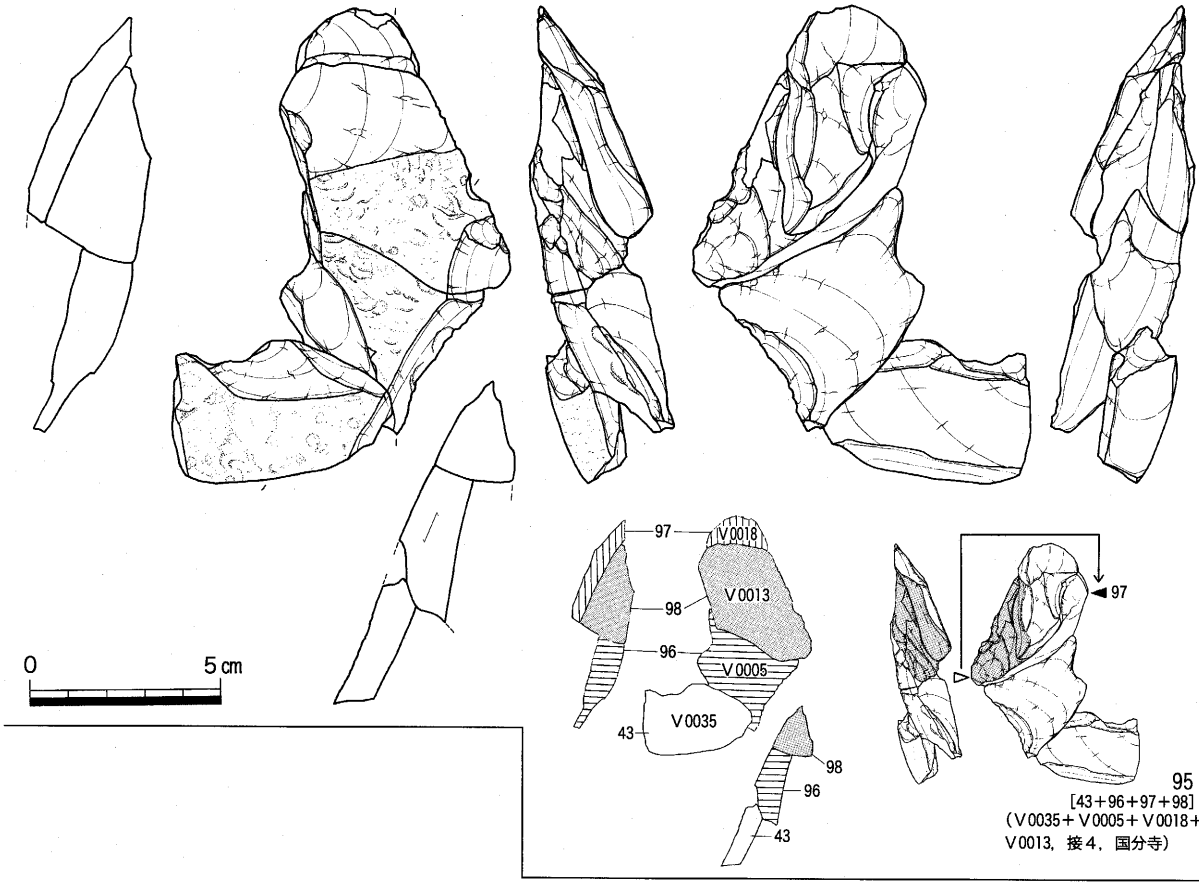
接合資料４（第49図）

96～98の接合体に石核43の素材面が接合する，2つの石核素材の接合事例である。先後関係は43の素材が先行して剥離されていることが明かだが，43の接合面は96の接合面より小さく，また43の石核底面の形成以前の素材面である。したがって，96～98の接合体に先行して剥離された石核素材からは，43の石核を含む複数の石核素材が剥離されたことがわかる。43がブロック２に分布し，そのほかはブロック３にまとまる。

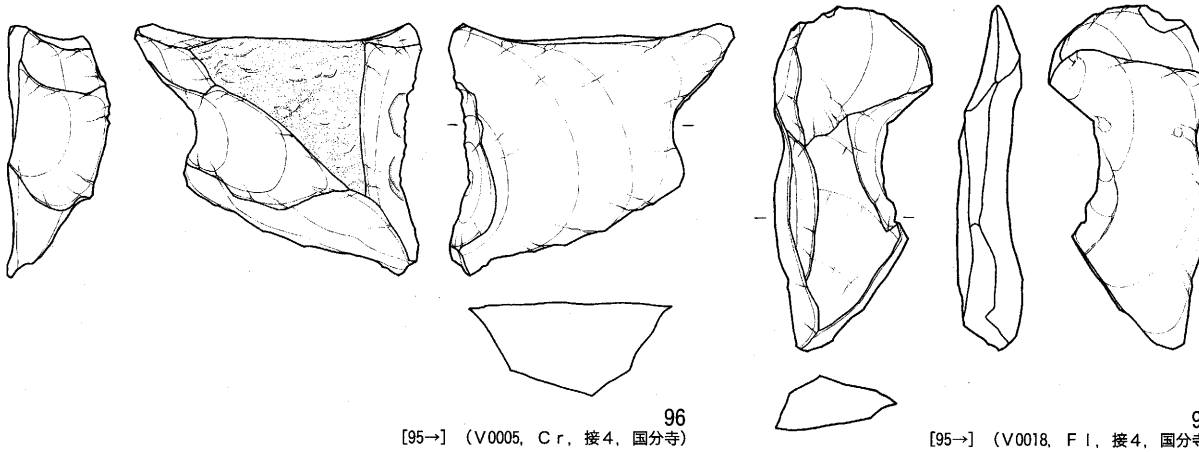
96～98の接合体は長さ113.0㎜以上，幅63.0㎜以上，厚さ39.0㎜の板状の素材である。現存重量は179.3ｇ。石核上面には水磨の自然面を残す。接合する剥片97は打点部で垂直割れを生じており，同時に96と98も分割する。元来の作業面は180度反対側にある。打面調整を行わず自然面を打撃して石理に沿った横長剥片を数枚剥取した剥離面の末端部が２面ある。しかし，最終の剥離面（①）は多数の階段状剥離を生じて乱れており，これにより打面を転移したものとみられる。97の打撃も打面調整はいっさいみられず，平坦面を打撃している。

石核分割後96には平坦面をさらに打撃した痕跡と，石理に沿った分割面があるが，それ以上の剥片剥離はみられない。



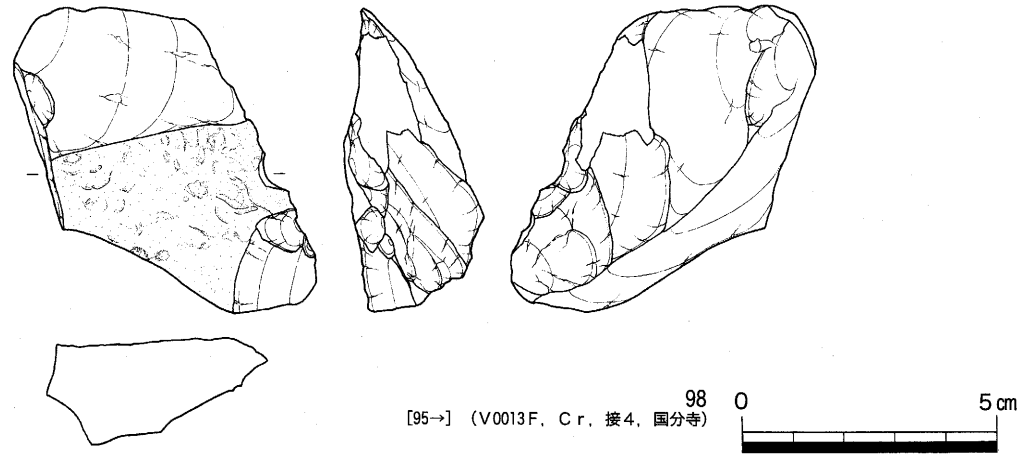


95
[43+96+97+98]
(V0035+V0005+V0018+
V0013, 接4, 国分寺)



96
[95→] (V0005, Cr, 接4, 国分寺)

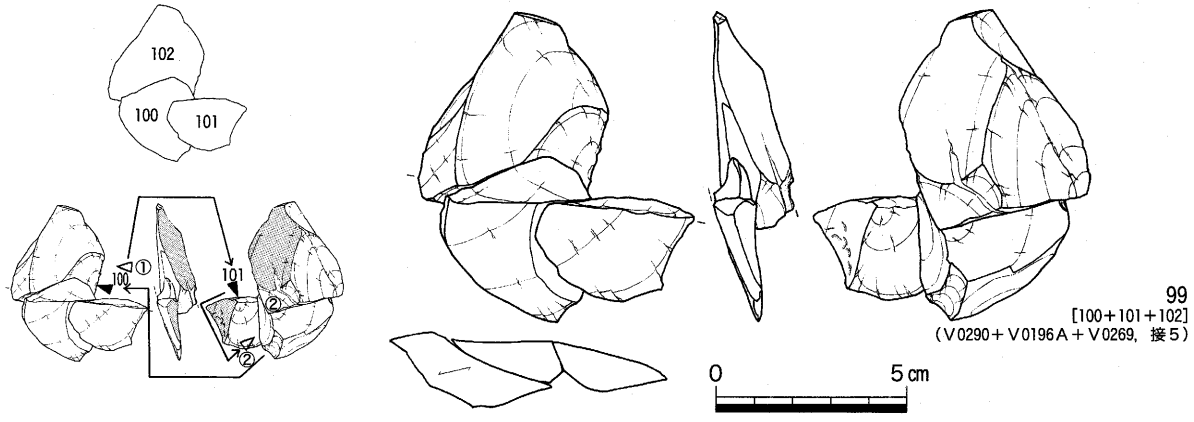
97
[95→] (V0018, FI, 接4, 国分寺)



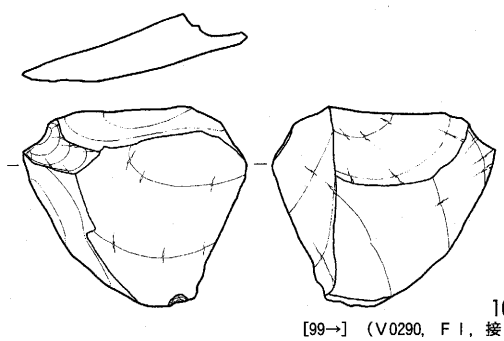
98
[95→] (V0013F, Cr, 接4, 国分寺)

0 5cm

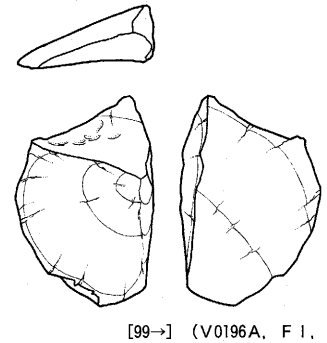
第49図　3b区出土石器実測図13　接合資料4 (S=2/3, 1/2)



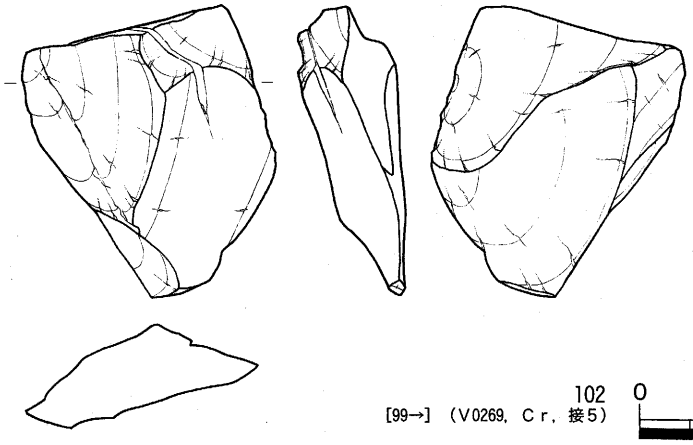
99
[100+101+102]
(V0290+V0196A+V0269, 接5)



100
[99→] (V0290, FI, 接5)

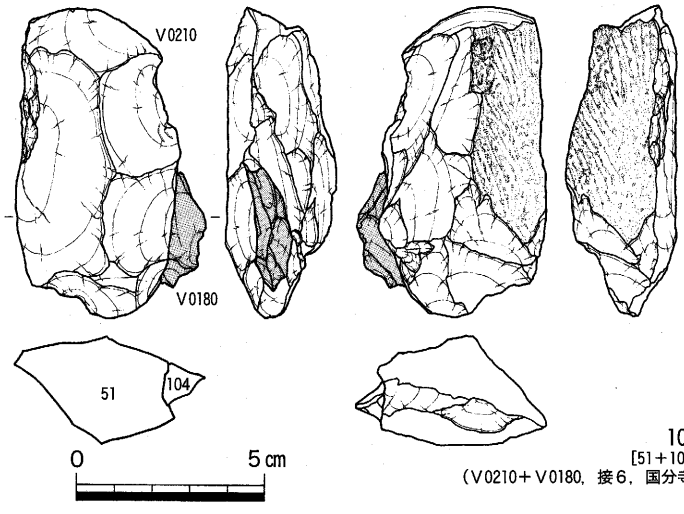


101
[99→] (V0196A, FI, 接5)

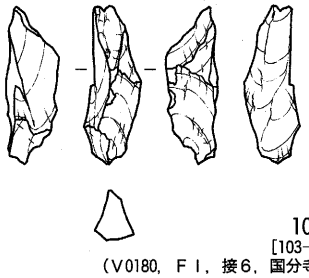


102
[99→] (V0269, Cr, 接5)

0 5cm



103
[51+104]
(V0210+V0180, 接6, 国分寺)



104
[103→]
(V0180, FI, 接6, 国分寺)

0 5cm

第50図　3b区出土石器実測図14　接合資料5・6（S=2／3, 1／2）

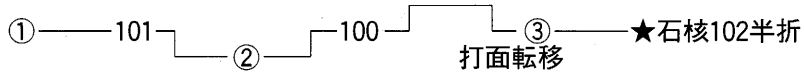
接合資料５（第50図）

剥片剥離の最終段階の接合資料である。残核102は現状で厚さ25㎜ をはかる。ａ面が石核素材剥片のポジ面，ｃ面がネガ面である。ポジ面を作業面として，素材剥片の末端側から剥片剥離が進行する。

遺存する剥片剥離作業は，素材のネガ面側を打撃して①の大きなネガ面を形成する。その際の打面の状態は明かでないが，遺存部に打面調整を施した形跡はない。引き続き素材の背面を打撃して剥片101を得ている。平坦な打面のを直接打撃するものである。その後打面を入れ替えて，ネガ面②に相当する剥片を得た後，素材の背面側を打撃して剥片100を得ている。100の打面部は打撃時に折損する。

次に打面を180度転移して素材のネガ面を作業面に設定して作業を進めようとするが，③の打撃で石核が半折し，剥片剥離作業が停止する。

以上の剥片剥離は，打撃に先行して打面を整形した形跡が全く認められず，平坦面を直接打撃するものが目立つ。また，打面の入れ替えや転移を繰り返しながら作業を進めている。石核Ｆ類の典型例と言える。現存重量は61.7ｇ。



接合資料７（第51図）

板状の石核素材から剥離された，背面に自然面を大きく留める剥片同志の接合資料である。石材はＡｎ－Ａで，自然面の形状と，自然面周辺部稜線付近の顕著な敲打痕の状態が接合資料１に極めて類似しており，同一の石核素材の可能性がある。

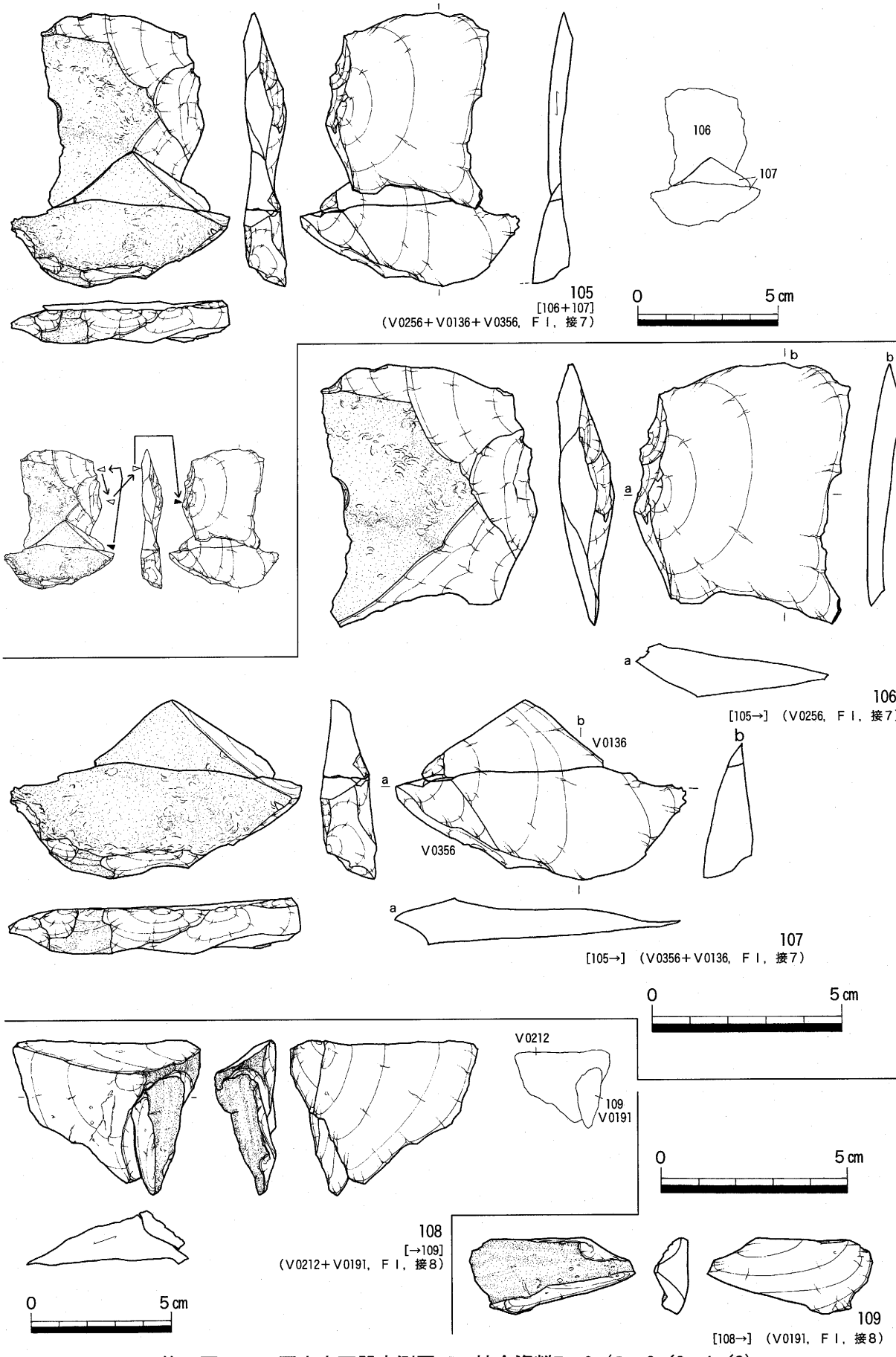
107の打面部には，自然面を打面として浅い角度で石理に沿った横長剥片を剥離した痕跡がみられる。107はそのネガ面の横を打撃して石核の側縁部から上面の自然面にかけての形状を整えた石核整形の剥片である。引き続き106の背面にみられる剥離面２枚（①・②）で打面が整形された後，106の打面にみられる数枚の剥離面（③→）から横長剥片を剥取したことがわかる。さらに作業面を後退する際の石核整形剥片が106である。石核Ａ類に相当する剥片剥離作業を行ったものと言える。現存重量は81.2ｇ。

接合資料８（第51図）

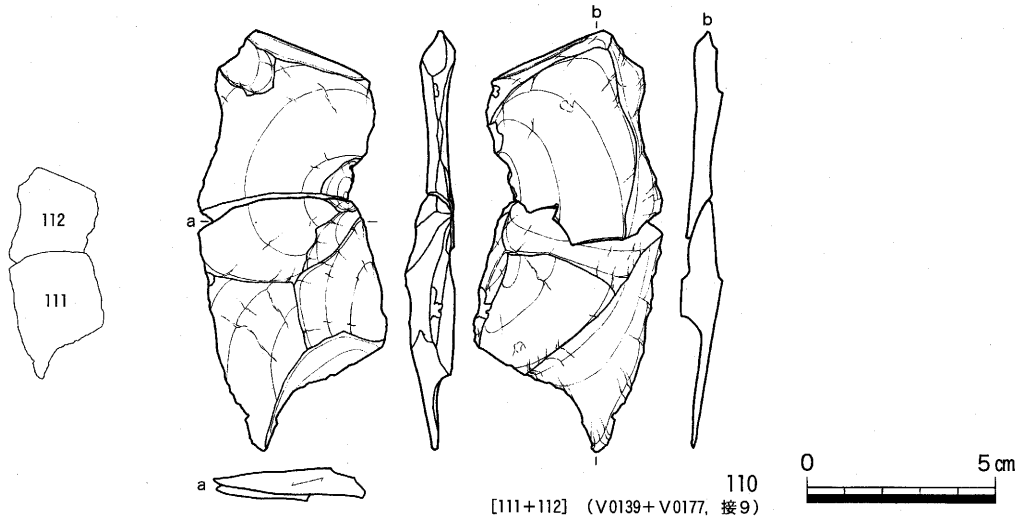
背面が素材面のみに覆われた剥片同志の接合資料である。自然面は顕著な水磨により平滑化する。その自然面を打面として剥離された石核素材の主要剥離面は，ポジティブな打点が残るにもかかわらず，石理に沿うために平坦である。108の打面は石核素材の剥取に先行するネガティブで平坦な剥離面で，その平坦面を横方向に打点をずらしながら自然面を除去している。作業面あるいは打面の設定に先立つ，初期の石核調整であろう。現存重量は48.1ｇ。

接合資料９（第52図110・111）

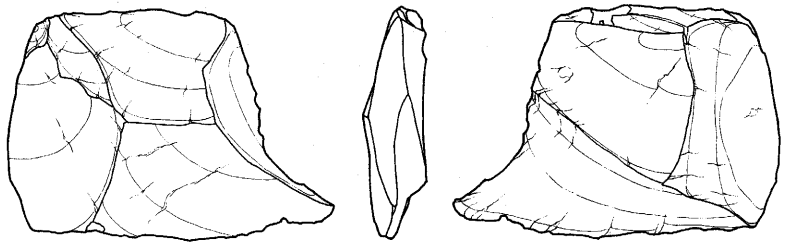
平坦な打面をもつ横長剥片同志が，同時割れの剥離面において接合した例である。背面には打面を共有する剥離面が３面あり，打点を左右にずらしながら剥片剥離を進めている。遺存する打面部が狭小なために，目的剥片の作業面として位置づけられるかどうか不明であるが，打面は石理に合致する。現存重量は45.7ｇ。



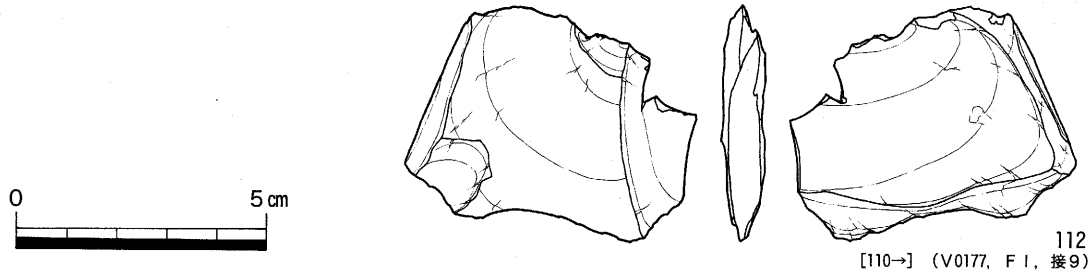
第51図　3 b区出土石器実測図15　接合資料7・8（S＝2／3，1／2）



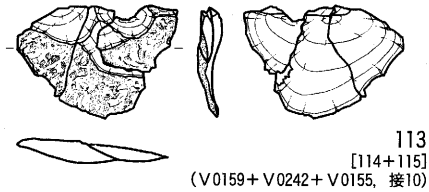
110
[111+112] (V0139+V0177, 接9)



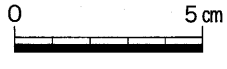
111
[110→] (V0139, FI, 接9)

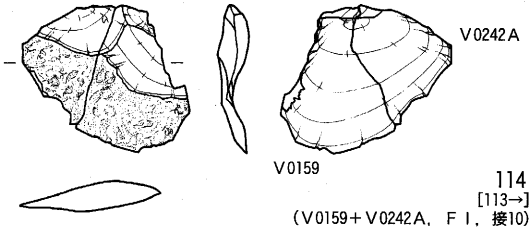


112
[110→] (V0177, FI, 接9)

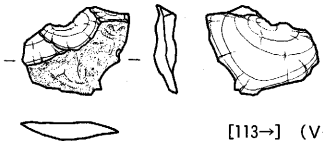


113
[114+115]
(V0159+V0242+V0155, 接10)

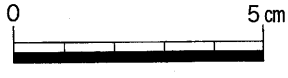




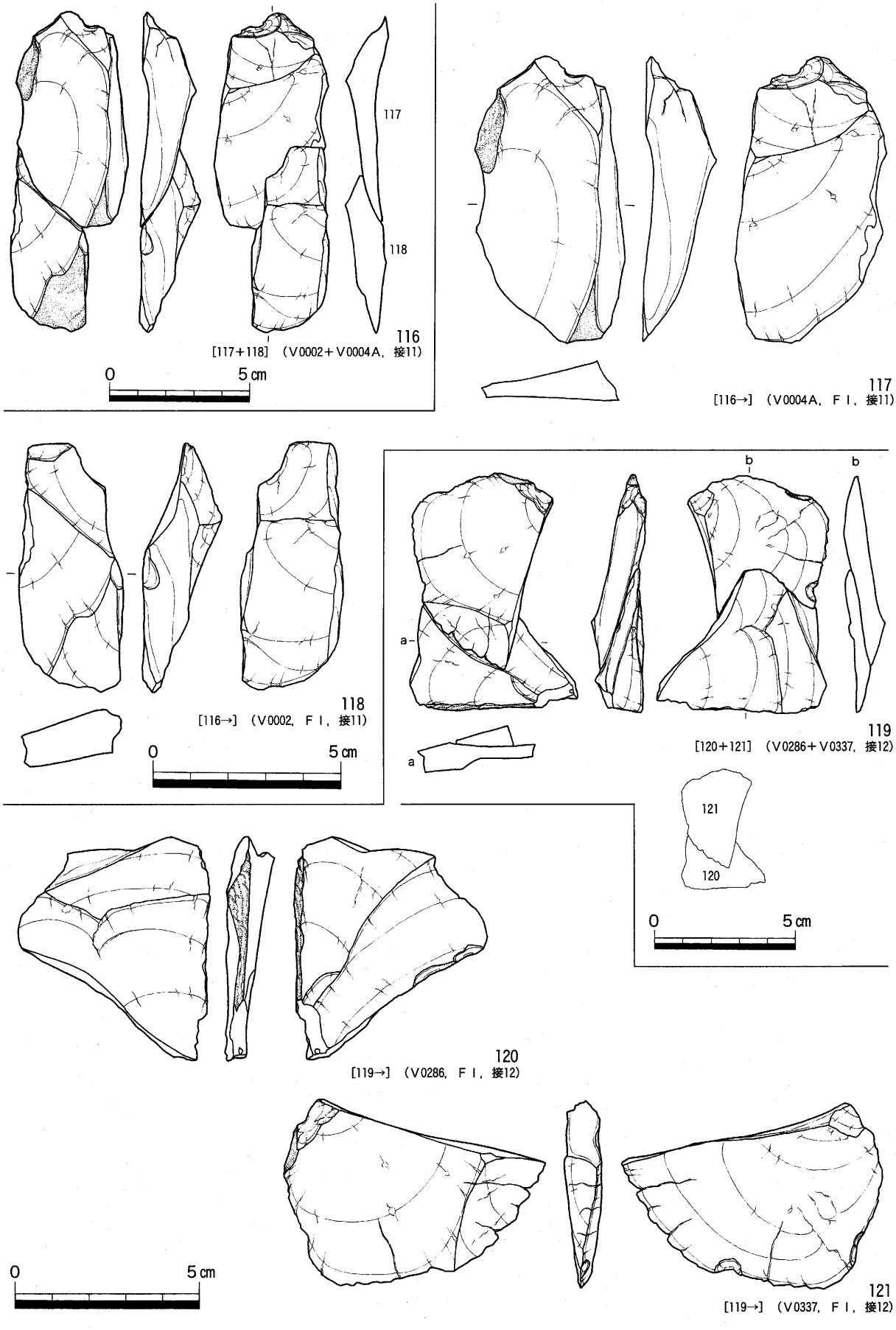
114
[113→]
(V0159+V0242A, FI, 接10)



115
[113→] (V0155, FI, 接10)



第52図　3b区出土石器実測図16　接合資料9・10（S=2／3，1／2）



第53図　3 b 区出土石器実測図17　接合資料11・12（S=2／3, 1／2）

接合資料10（第52図　113～115）

背面に自然面をもち，平坦な打面を共有する剥片の接合資料である。いずれの剥片の背面にも，当該打面の形成に先行する打点を残さない剥離面がみられ，それらを含めて打点を左右にずらしながら小形の剥片を剥取している。打面は石理に沿った平坦面。石核A類に相当する打面調整剥片の接合資料と考える。現存重量は5.2ｇ。

接合資料11（第53図　116～118）

一部に自然面を留める厚さ30.0㎜ほどの板状剥片を素材とする。素材の側縁部分に剥片剥離作業面を設定し，打点を表裏交互に入れ替えながら，20.0～25.0㎜ の厚みのある剥片を連続的に剥取するものである。剥片剥離に先行する打面調整は行わず，表裏の平坦は剥離面を直接打撃する。

遺存する剥片117・118はいずれも打点部で垂直割れを生じて欠損した剥片であるが，主要剥離面のリングの形状からみて，厚みのある幅広の剥片と推定できる。石核A類の石核素材剥片の剥取を目的とする作業と考える。現存重量は67.4ｇ。

接合資料12（第54図　119～121）

厚さ30.0㎜，幅90.0㎜ ほどの板状の石核から，平坦な石核底面を取り込みながら剥離された２つの剥片の接合資料である。打面部がほとんど遺存せず，剥片剥離に先行する石核調整の状況は不明である。121の表裏面には，末端から打点に向かって幾筋かの亀裂がみられる。その亀裂は接合面を介して，120の剥片表面には接続しないことから，121の剥離後に生じたものである。剥片の受熱によるものである可能性もあるが，すべて打点に向かって亀裂が延びることから，垂直方向の潜在割れの一種であるかもしれない。現存重量は53.9ｇ。

接合資料13（第54図　122・123）

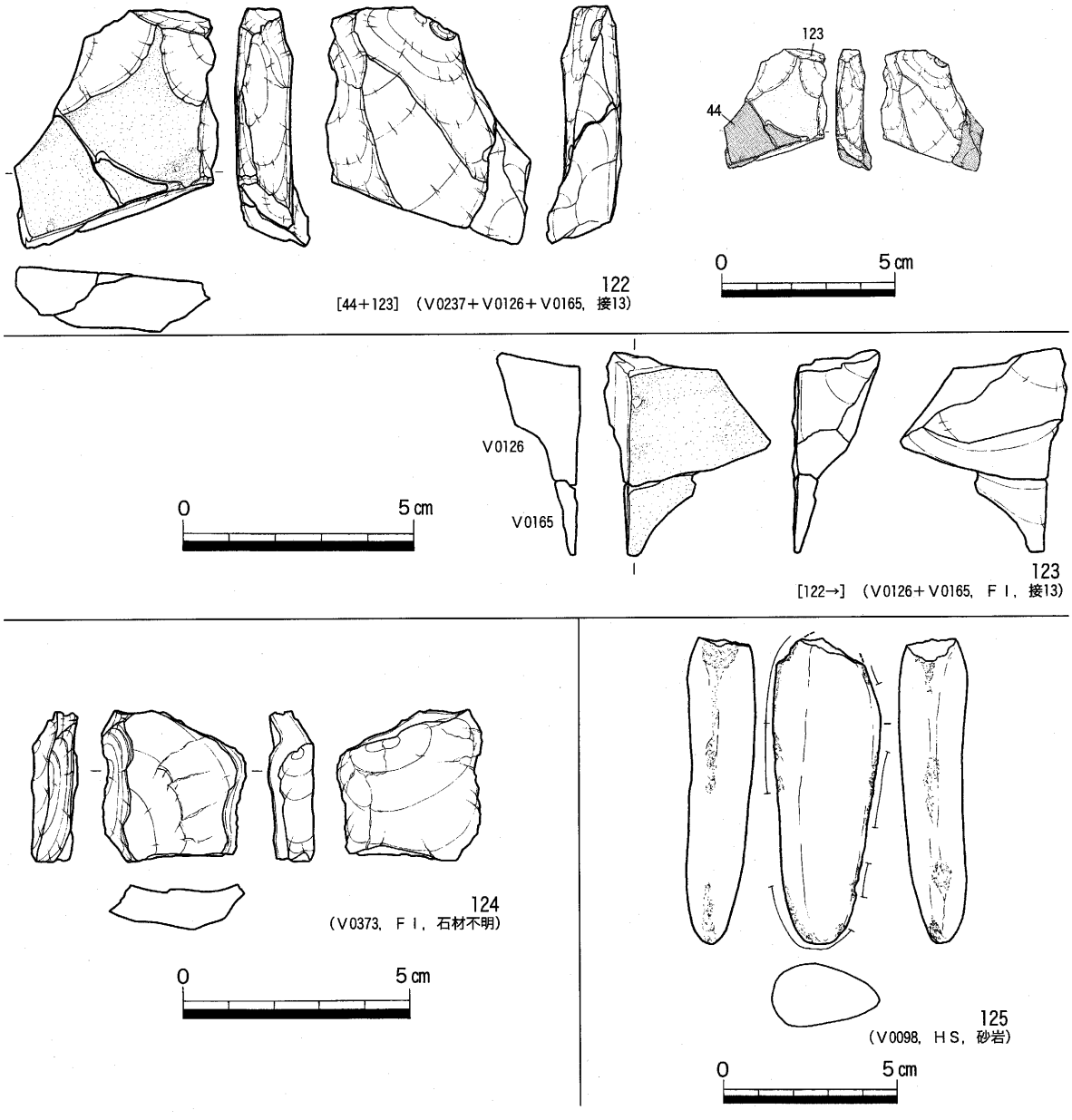
厚さ20.0㎜ 以上の板状素材の180度対峙する両小口部を打撃して得られた剥片の末端部における接合事例である。先行して剥離した123は長さ40.0㎜足らずの小形剥片であるが，44は長さ70.0㎜以上の幅広の剥片と推定され，石核A類の素材に供される。現存重量は78.4ｇ。

その他の石器（第54図）

その他の石器として，異質石材片と叩石を説明しておく。

124は強い石理層界をもつ石材で，風化面において茶褐色の薄層と灰白色の薄層の緻密な交互層が観察できる。風化が著しく，自然石である可能性もあるが，側縁部分が凹凸に富み，剥離面状に観察できる部分がある。堆積岩系の石材と推定され，備讃瀬戸地域で石器石材に供される種類ではない。他所から持ち込まれた可能性の高い石片と言える。

125は長さ90.0㎜，幅32.0㎜，厚さ20.0㎜ の砂岩製の棒状叩石である。頭頂は一部欠損するが頭部の側縁付近にあばた状の敲打痕が観察できる。基部・体部にも若干の敲打痕があるが，頭部ほど明瞭でない。重量は68.4ｇで，備讃瀬戸島嶼部においても同様の叩石が確認されている。



第54図　3b区出土石器実測図18　接合資料13・その他の石器（S=2／3，1／2）

第5節　3a区の調査

（1）概　要

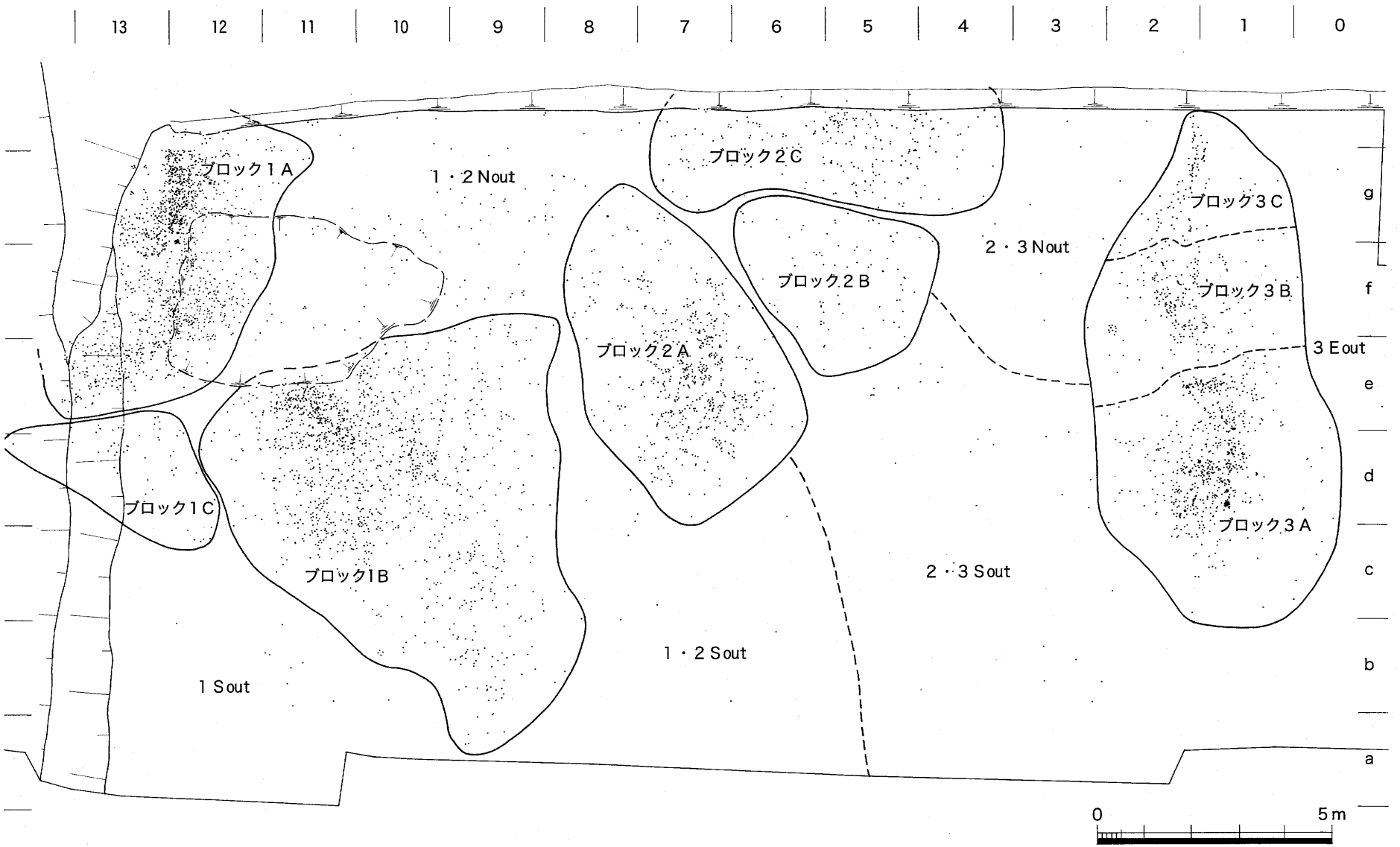
3a区は谷C東岸の北端に位置する調査区である。当遺跡では，最も多くの石器が出土しており，石器総数は5，300点に達する。南北16m，東西30mの長方形の調査区で，西側は古墳時代の谷Cの開析により抉られ，北側は中世以後の耕地開発で包含層が抉られる。北に緩やかに傾斜する地形である。

石器はいくつかの集中部を形成するが，出土数が多いために集中部の境を設定する方法に苦慮した。整理作業を進める上で，まず最初にグリッド毎の出土点数をもとに，西からエリア1，2，3という大区分を設けて出土石器をまとめることとした。石器の内容と詳細分布が明らかになるにつれて，小区分の必要が生じ，最終的にはそれぞれのエリアをブロック区分するに至った。ブロック区分はブロック1A・1B・1C，ブロック2A・2B・2C，ブロック3A・3B・3Cとし，いずれにも所属しないものを外縁部としてまとめた。さらに外縁部出土石器は近隣のエリア番号と方位を組み合わせた区分名称を使用した。たとえば，エリア1とエリア2の間の北側に分布する外縁部出土石器は，「1・2Sout」として表現している。ブロック区分は，大まかな基準としては石器間で50cm未満の距離のものを連鎖する方法をとったが，この場合は殆ど連結してしまう。逆に20cmなどの極めて細かい距離を設定すると，視覚的まとまりと数値的まとまりに差が生じて，現実的な区分になりそうにない。また，記録の不備で出土位置が把握できない個体を無視できないグリッド（d9グリッドは台風到来前に急ぎ取り上げをしたために，Q0710からQ0760までの石器の平面的な位置の記録がない。）などもあり，厳密な区分が難しい。そこで，原則は50cmとして，集中部が連結するところは，視覚的・想定的に任意に区分することとした。

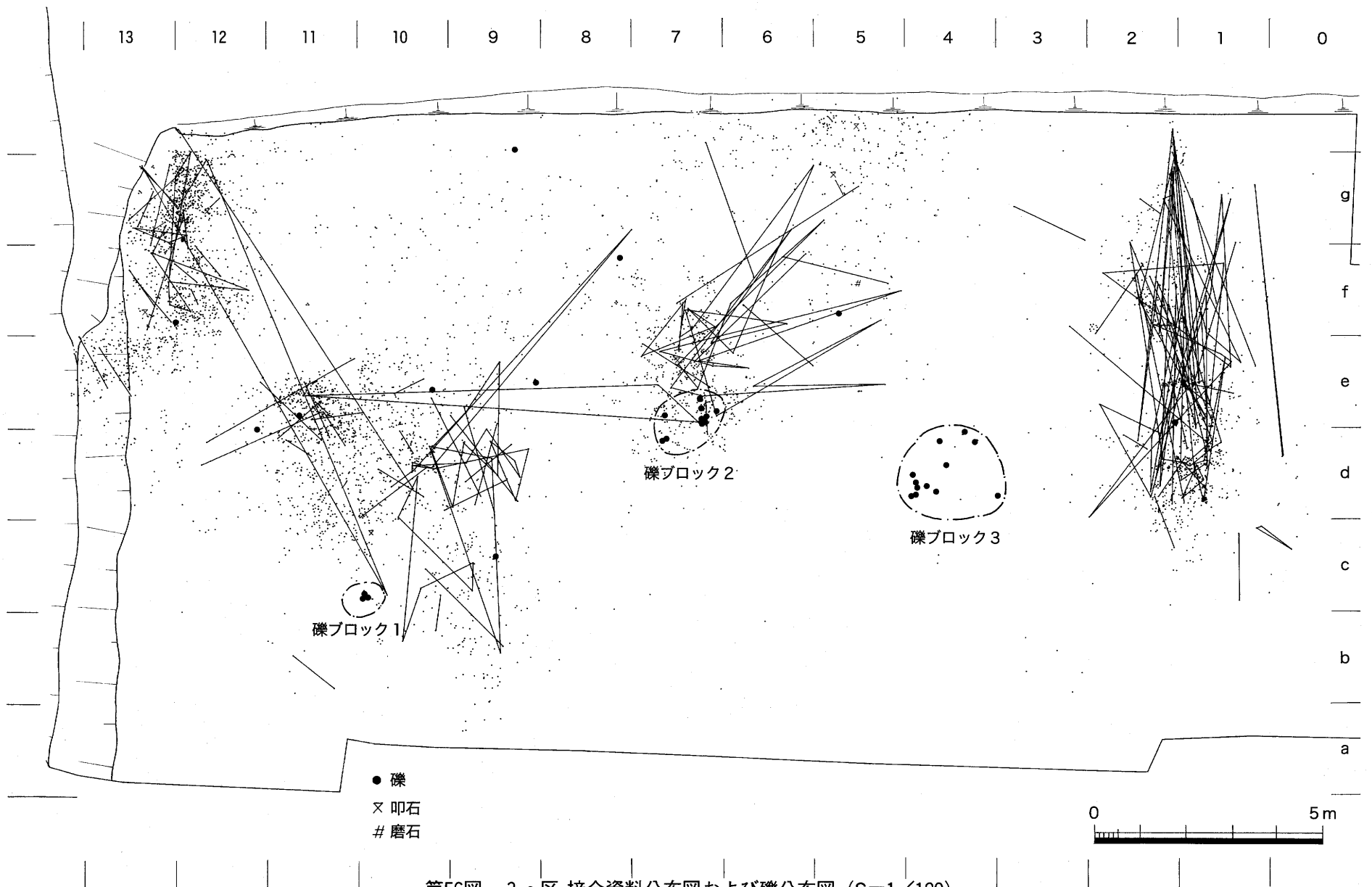
一方で，垂直分布を検討する過程で，ブロック1Bが層位的に2分できることが判明した。当初，撹乱や記録段階の混乱も念頭に置きながら慎重に検証作業を行ったが，結果として層位的に区分するのが妥当と判断した。次項で詳しく述べるが，上層をブロック1BH，下層をブロック1BLとした。ただ，両者を明確に区分できた訳ではなく，境界付近に多くの定形石器が集中することから，地形上の部分的な窪みが反映している可能性も全く否定はできない。

接合資料は合計117件312点が抽出できている。また3a区エリア1・2については，石材表面の色調や風化状況が特徴的なサヌカイトを中心として，個体識別作業も一部で行った。それらの分布を図化すると，まずエリア3は3A・3B・3Cの3つのブロック間で頻繁な接合があるが，他のエリアとの接合は1点もないこと，またエリア1・2はエリア間での接合や個体の共有などが，ブロック単位で認められることなどがわかった。さらにブロック区分した範囲内においても，さらに小ブロック区分する必要があるとの認識まで至ったが，作業時間の関係もあり，小ブロック区分をこの章で反映するには至っていない。部分的なブロック細分作業を後章に送った。

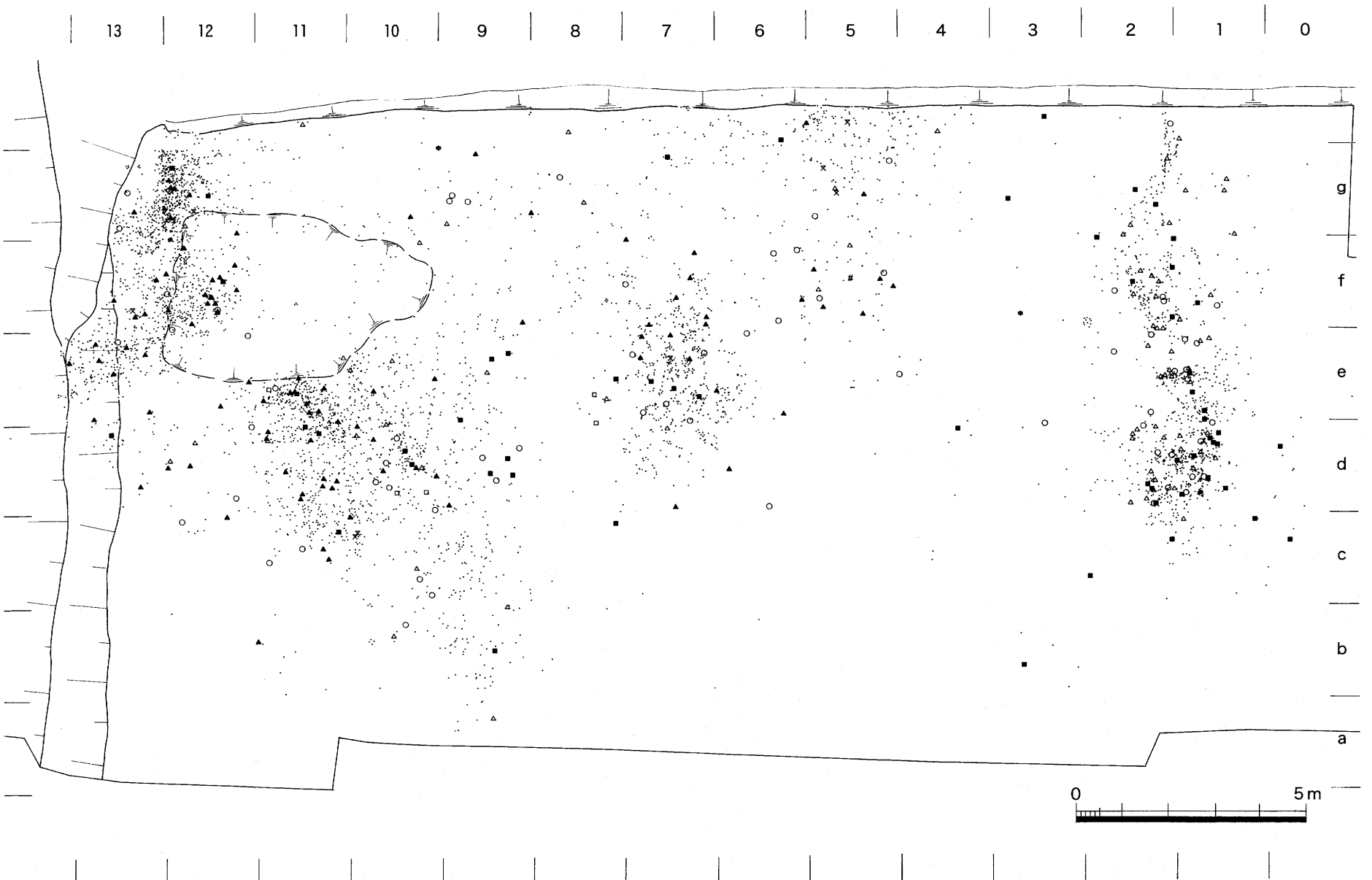
礫は調査区内で合計36点が出土している。石材は花崗岩・流紋岩を主に使用し，砂岩は敲石の1点以外には認められない。数量的には石器全点に対して，礫の個体数が非常に少ないことを特記しておかなければならない。ブロック1B，ブロック2A，ブロック2・3Soutで3～12点の礫が集中する箇所があり，それらはいわゆる「礫群」として捉えるべきものと考えられるが，そのほかはきわめて散漫な分布である。礫は赤化や亀裂などの被熱痕を留めるものが多い。



第55図　３ａ区 石器全点分布図およびブロック区分図（S＝1／120）



第56図　3 a区 接合資料分布図および礫分布図（S＝1／120）



第57図　3 a区 器種別石器分布図（S＝1／120）

（2）層位と石器分布の概要

石器分布は概ね直径2m程度の集中部をもつもの，散漫ながら4mほどの集中部を形成するものなど様々である。エリア1は極めて密集する南北の2群（ブロック1A・ブロック1B）と，やや西に外れた散漫なブロック（ブロック1C）からなる。南の密集部（ブロック1B）は細かく見ると小規模な石器集中部に分けられる。一方で，北側の密集部（ブロック1A）は特に密集する部分が3箇所ほどあるが，それ以外の場所でも多くの石器が出土している。

垂直分布から石器の出土層位と接合関係などを点検した。

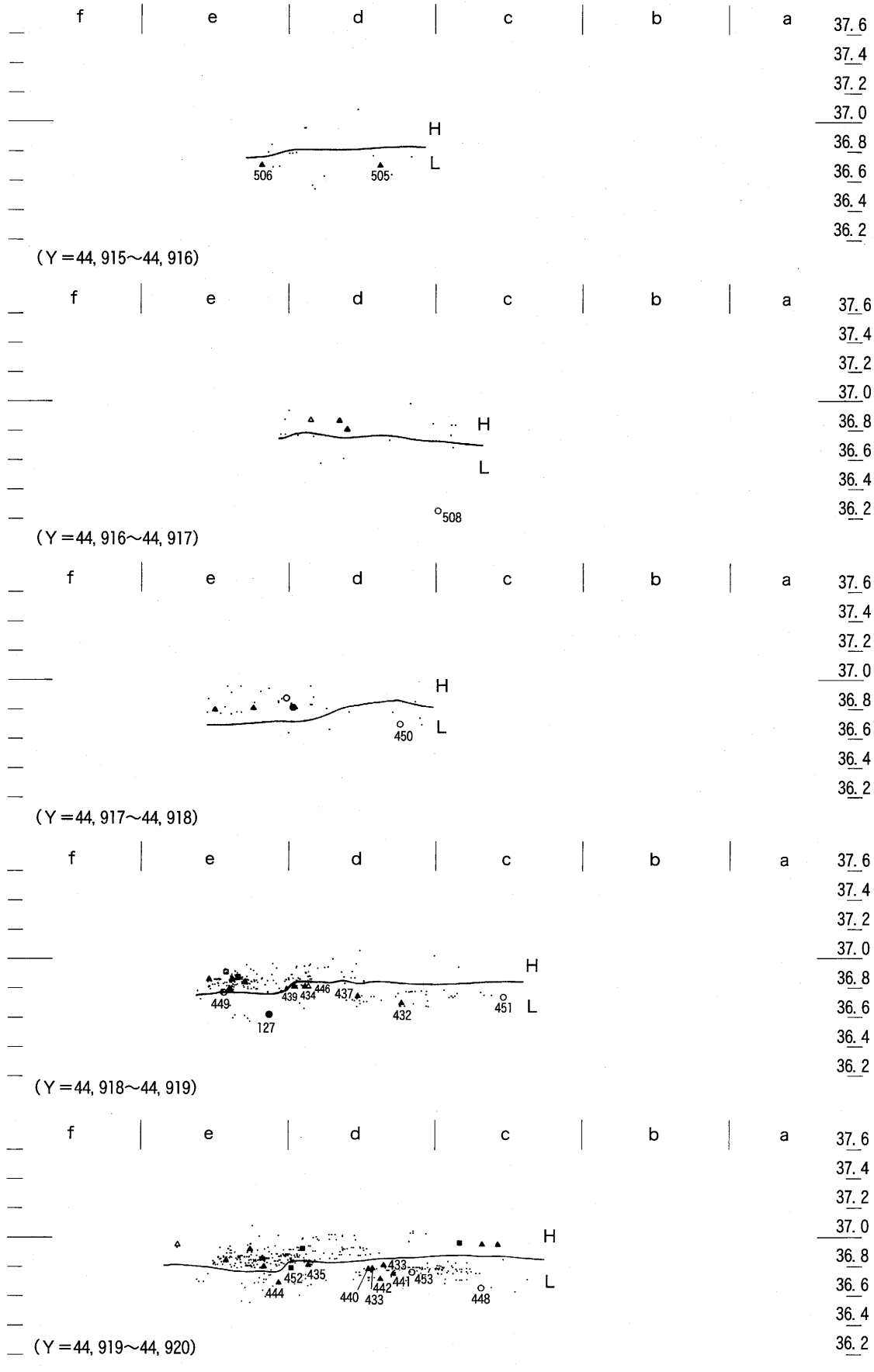
第2節でも述べたように，石器出土層位はⅡ層を主体として，一部ではⅢa層にまで達するものである。しかし，ブロック1Bでは垂直分布から出土石器を上下2群に区分することが可能である。上位はⅡ層を主体とするが，下位はⅢa層を出土層位の主体とする。同じくブロック1A・1Cにおいても同様にⅢa層に多くの石器が含まれており，平面的には重複するものの，元来上下に区分することが可能な単位であることがわかる。これを詳細に提示するために，2mを最小単位とする取上時のグリッド毎に，石器の垂直分布を第58図にグラフ化した。これによれば，対象となるすべてのグリッドにおいて上下2群に区分することがほぼ可能であり，それを平面図に示すと，集中部が各々微妙に異なる。これを，石器接合関係で観察すると，上下のまとまりが一層明瞭になる。また，後述する個体識別資料においてもその傾向は矛盾せず，ブロック1Bが出土レベルから上下に区分できる。土層堆積からみて上層はⅡ層主体，下層はⅢa層～Ⅲb層最下位にまで達することがわかる。

ブロック1B付近のⅢb層は，ATの二次堆積層ではあるが，比較的純度が高いことが注意される。調査中もこれをAT層として取り扱っている。この層準の火山灰分析によれば，Ⅲb層最下部において約60%の火山ガラス濃集があることがわかった。ブロック1B付近は，谷3に向かって西に緩やかに下降する微地形である。ブロック1BLの垂直分布が西に窪むのは，この微地形の影響である。AT火山ガラスピーク層の下位には，炭化物を含む黒色粘土層があり，さらに下位には谷3の流路堆積がある。したがって，ブロックが形成されたのはAT降灰段階の窪みが埋没し終える前の段階と考えられる。

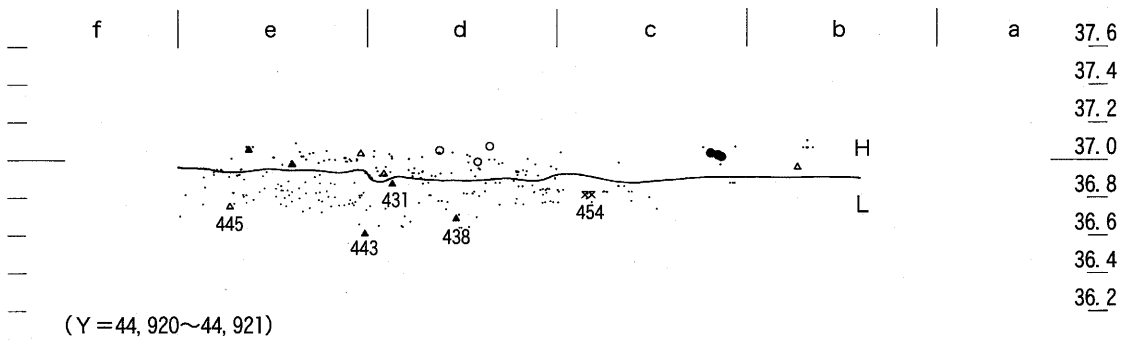
一方，ブロック1BHの垂直分布はほぼ水平である。この段階ではAT降灰段階の窪みが埋没し終えていると考えられる。したがってその埋没過程に関わる時間が両ブロックの実質的な時間差と考えることができる。その時間差をどれほど見積もるか，その材料は残念ながらないが，少なくとも，周辺が平坦化する以前に形成され始めたブロックという意味で，エリア1出土石器中では時間的に古い可能性がある。

エリア2の各ブロックは，いずれもⅡ層にそのピークがあり，またエリア1のブロック1B上位との接合関係もみられる。したがってエリア1とエリア2は，層位的にブロック1A・1B下位・1Cとブロック1B上位・エリア2の各ブロックの2群に区分することができる。後者は上述のように，包含層下位の小流路がほぼすべて埋没した後に形成されたブロックである。

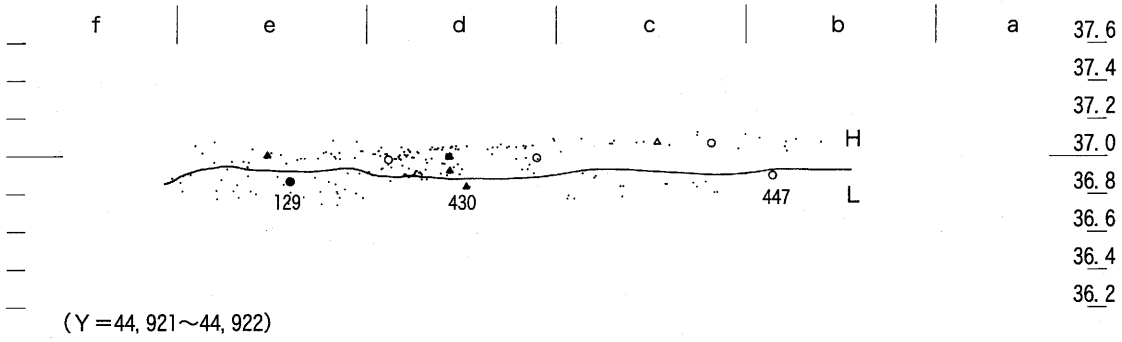
エリア3はやや様相が異なり，南北に細長い分布のまとまりがある。そしてブロック3A・3B・3Cともに接合関係があり，接合の順序を追跡すると，必ずしも一方向の動きではない。南北方向に細長く分布する傾向から見て，小流路状のやや窪んだ微地形において，それが二次的に下方へ押し流されたものである可能性が高い。土層断面では明瞭な流路を検出するには至っていないが，この部分において，ⅢaとⅢb層の区分が不明瞭なことから，Ⅲa層の堆積過程で流路状の地形が存在した可能性が指摘でき，大局的には周辺地形の平坦化前とみたエリア1A・1B下層・1Cと同様の石器出土層準であるといえる。



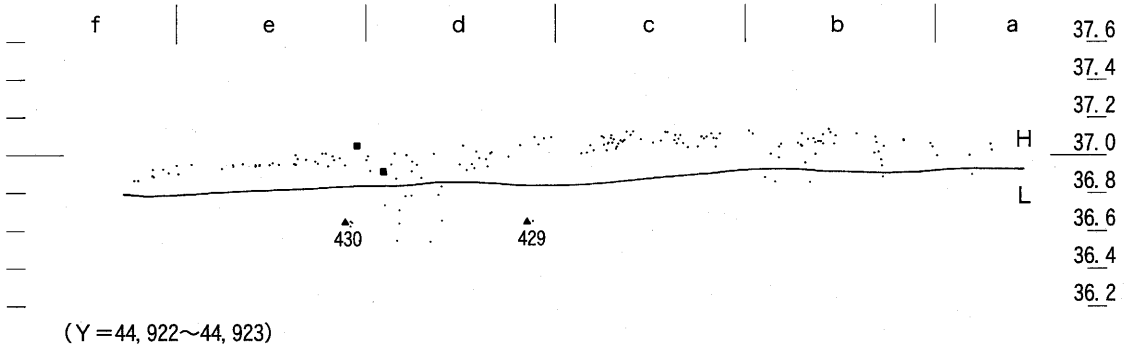
第58図　３ａ区ブロック１Ｂ・１Ｃの垂直分布図１（S＝1／40）



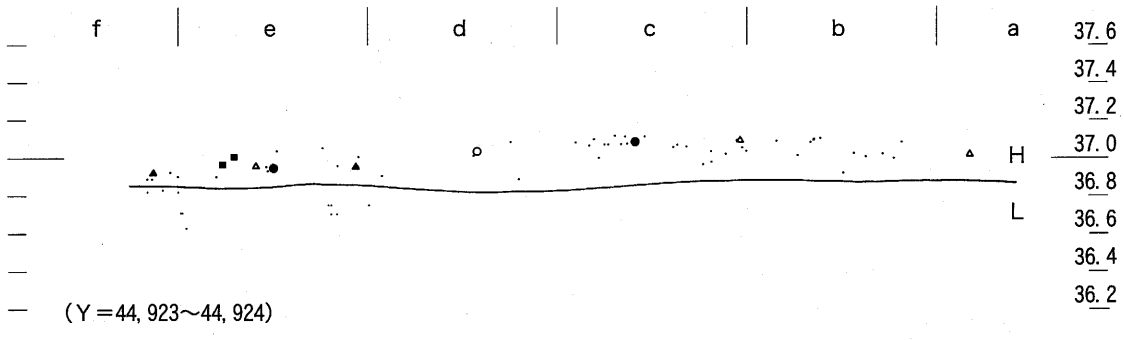
(Y＝44, 920～44, 921)



(Y＝44, 921～44, 922)



(Y＝44, 922～44, 923)



(Y＝44, 923～44, 924)

第59図　３ａ区ブロック１Ｂ・１Ｃの垂直分布図２（S＝1／40）

（3）礫

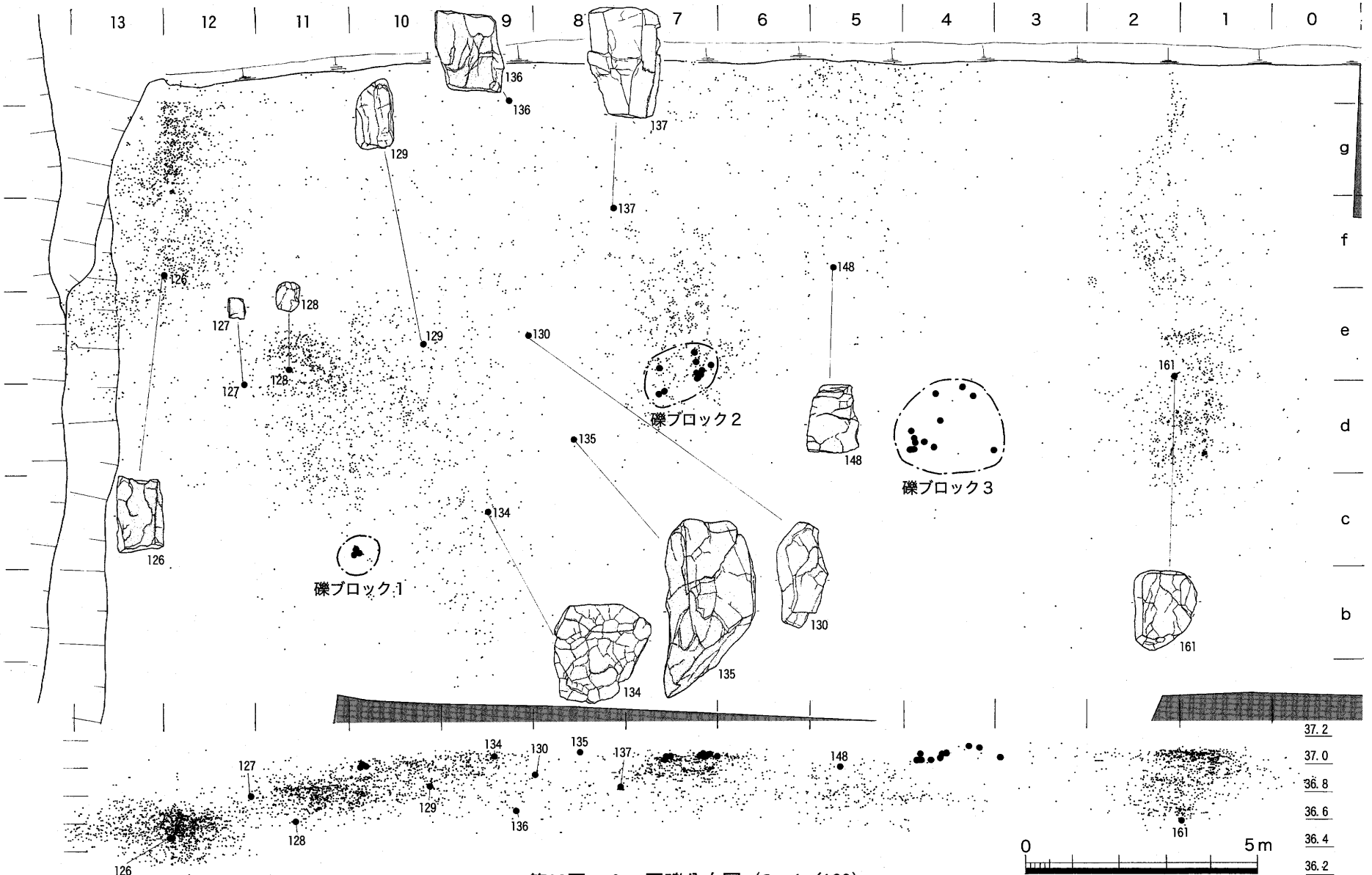
礫は3a区で合計36点が出土した。これらは石器ブロック1B・石器ブロック2A・石器ブロック2・3外縁部（2・3Sout）で若干のまとまりがある。これらを礫ブロックとして報告する。いわゆる「礫群」として捉えられるものである。集中部に所属する礫は24点，全体の67％である。残りの12点の礫は，各地点に散漫に分布する。

礫は花崗岩28点，安山岩7点，凝灰岩1点で構成され，砂岩は含まない。これらの礫はは亀裂や赤化など被熱痕を残すものが多い。花崗岩の23点には顕著な亀裂があり，うち4点に顕著な赤化が認められる。また，破損する個体が多く，破損面における接合が1件（138＋140）ある。安山岩は特に亀裂が顕著である。

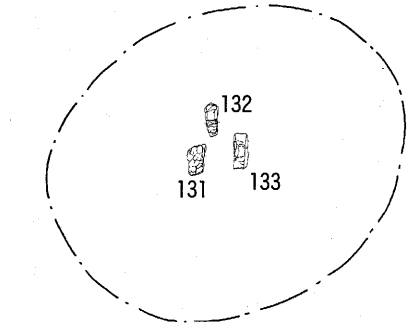
重量は135の1,516gが1点あるほかは，すべて600g以下で，600g以下のものの最小5.6g，最大559.8g，平均重量183.9gである。合計重量は1,000g以上のものを含めて7,956.0g，除いて6,439.1gである。

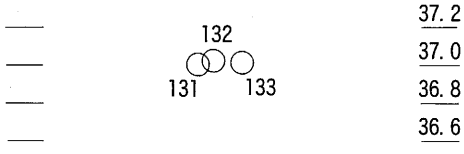
番号	取上番号	長×幅×厚(cm)	重量(g)	石　材	亀裂	赤化	付着物	表面摩滅	備　　考
126	Q4581	8.0×5.0×5.0	319.7	花崗岩	◎	○	×	×	1A
127	Q2704	2.2×1.9×1.0	5.6	花崗岩	△	×	×	×	1B
128	Q4175	3.2×2.6×2.2	13.2	凝灰岩	○	×	×	○	1B
129	Q3510	7.4×4.1×3.0	107.1	安山岩	◎	×	×	○	1B
130	Q4510	11.0×5.0×3.1	132.5	安山岩	◎	×	×	○	1B
131	Q0587	8.2×5.0×3.4	145.0	花崗岩	◎	○	×	×	1B礫ブロック1
132	Q0588	8.6×3.7×3.0	98.7	花崗岩	◎	×	×	×	1B礫ブロック1
133	Q0589	9.2×4.2×3.8	170.3	花崗岩	◎	◎	×	×	1B礫ブロック1
134	Q1626	10.5×10.4×3.4	308.9	安山岩	◎	×	×	○	1B
135	Q4926	19.1×10.0×8.1	1516.9	安山岩	◎	×	○	○	1・2Sout
136	Q4925	9.1×7.4×6.3	550.0	花崗岩	○	◎	×	×	1・2Nout
137	Q2023	12.0×7.8×4.8	559.8	花崗岩	◎	◎	×	×	2A
138	Q0927	8.3×5.3×3.2	108.3	花崗岩	◎	◎	×	×	2A礫ブロック2　140と接合
139	Q0522	6.8×5.1×2.8	161.3	花崗岩	○	○	×	×	2A礫ブロック2
140	Q0520	10.0×8.0×6.1	446.8	花崗岩	◎	◎	×	×	2A礫ブロック2　130と接合
141	Q0937	10.5×8.8×4.0	372.4	安山岩	◎	△	×	○	2A礫ブロック2　欠損面赤化
142	Q0934	6.7×4.1×3.2	81.3	花崗岩	◎	○	×	×	2A礫ブロック2　欠損面赤化
143	Q0904	8.2×8.1×2.8	140.7	花崗岩	○	×	×	×	2A礫ブロック2
144	Q0911	8.0×8.0×4.7	298.7	花崗岩	◎	○	×	×	2A礫ブロック2
145	Q0910	6.6×6.5×3.0	114.8	花崗岩	△	×	×	×	2A礫ブロック2
146	Q0909	8.2×4.8×4.1	161.3	花崗岩	○	×	×	×	2A礫ブロック2
147	Q0908	4.7×3.8×2.3	44.2	花崗岩	○	○	×	×	2A礫ブロック2
148	Q0237	7.2×5.6×5.6	264.4	花崗岩	◎	×	×	×	2B
149	Q0998	11.5×5.8×5.5	361.4	安山岩	◎	×	×	×	2・3Sout礫ブロック3
150	Q1011	12.5×8.2×4.4	413.6	安山岩	◎	△	×	×	2・3Sout礫ブロック3
151	Q1008	4.5×3.4×2.7	42.7	花崗岩	◎	×	×	×	2・3Sout礫ブロック3
152	Q1006	7.8×2.8×2.0	57.1	花崗岩	○	×	×	×	2・3Sout礫ブロック3
153	Q0998	8.6×5.0×2.0	117.7	花崗岩	△	×	×	×	2・3Sout礫ブロック3
154	Q0999	7.2×5.0×3.5	155.7	花崗岩	○	×	×	×	2・3Sout礫ブロック3
155	Q1000	4.3×3.2×2.5	39.1	花崗岩	◎	×	×	×	2・3Sout礫ブロック3
156	Q1002	5.8×2.9×3.0	47.3	花崗岩	○	×	×	×	2・3Sout礫ブロック3
157	Q1001A	5.5×3.5×3.2	54.1	花崗岩	○	×	×	×	2・3Sout礫ブロック3
158	Q1001B	6.8×4.1×3.4	96.8	花崗岩	○	×	×	×	2・3Sout礫ブロック3
159	Q1003	5.6×4.8×1.6	51.1	花崗岩	△	×	×	×	2・3Sout礫ブロック3
160	Q1005	7.5×4.0×3.0	85.1	花崗岩	○	×	×	×	2・3Sout
161	Q4520	8.7×6.8×4.2	312.4	花崗岩	◎	×	×	×	3A

第17表　3a区礫属性表

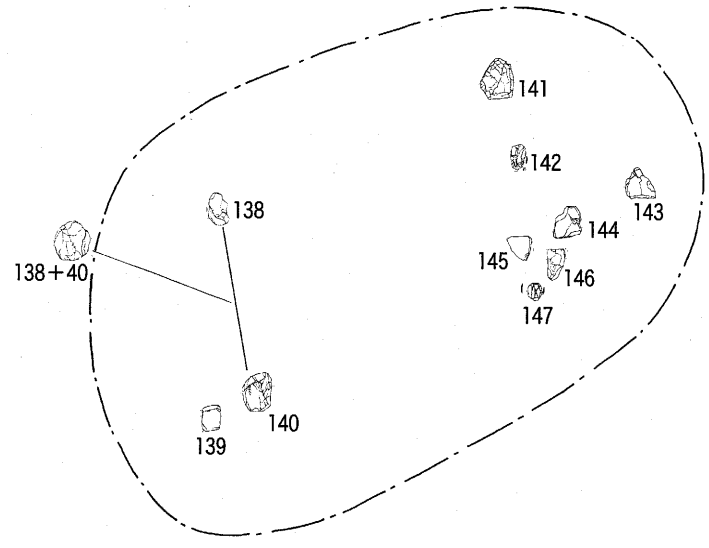


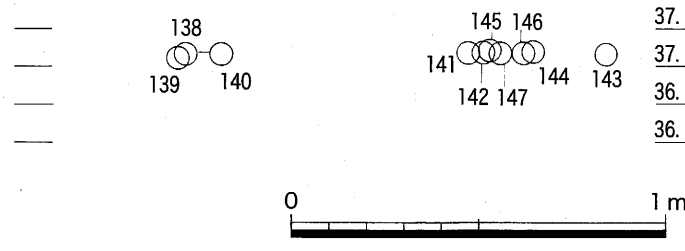
第60図　３ａ区礫分布図（S＝1／120）





第61図　３ａ区礫ブロック１
礫分布復原図（S＝1／20）





第62図　３ａ区礫ブロック２
礫分布復原図（S＝1／20）

礫ブロック１（第61図）

石器ブロック１ＢＨに伴って直径20㎝ ほどの範囲に131～133の礫がまとまって出土した。石器ブロック範囲の南寄りの位置である。周辺で出土する石器の出土レベルとほぼ同じで，３点の礫ともほぼ同じ高さで検出している。礫はいずれも花崗岩で100～170ｇと重量にさほどのバラツキがない。３点の合計重量は414ｇとなる。132は器表面が風化し脆い。132・133は破断面を有し，133は一部が赤化する。

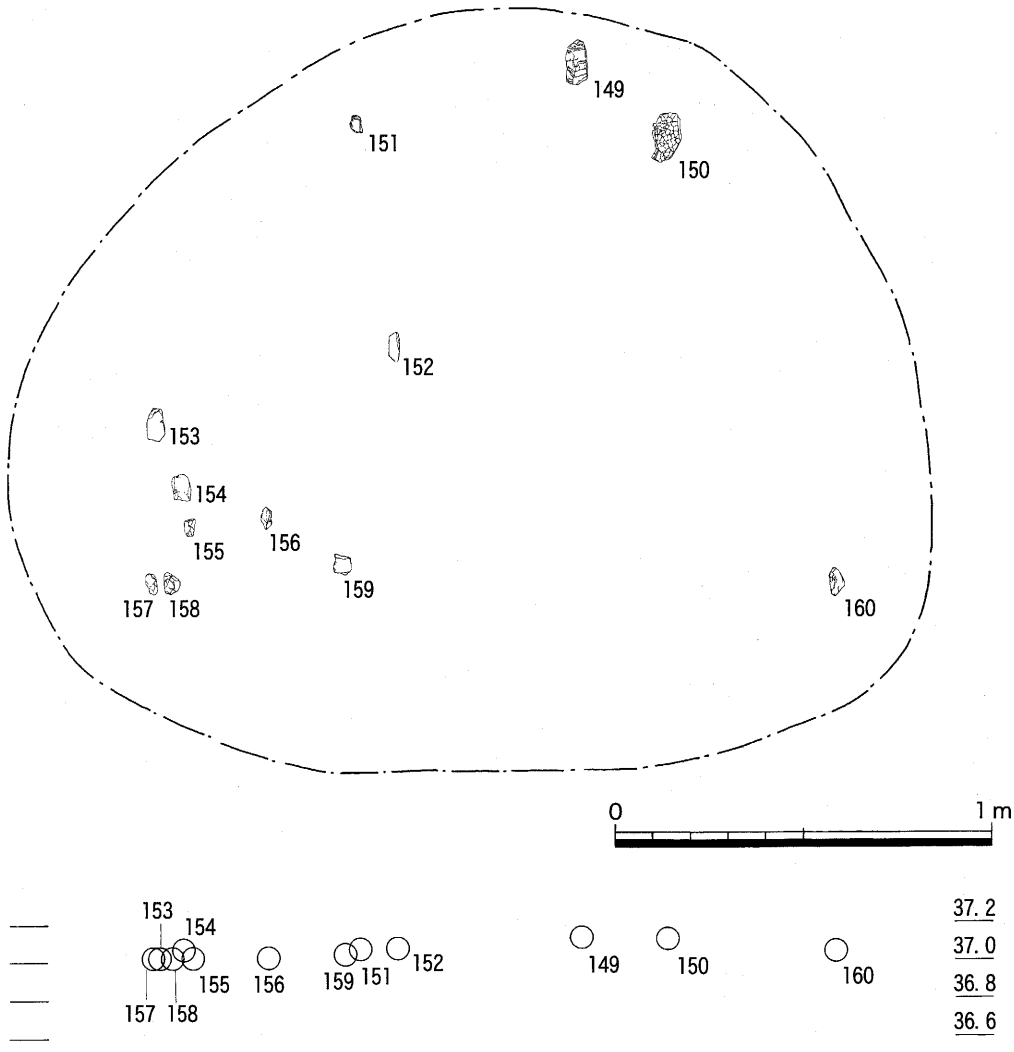
礫ブロック２（第62図）

石器ブロック２Ａと重複して検出した礫ブロックである。138～147の10点の礫が，長辺1.5m，短辺0.7mの範囲に細長の形状で分布する。出土レベルは均質で，他の石器と変わらない。

構成礫は花崗岩９点と安山岩１点である。うち花崗岩の２点が破断面で破損面で接合（138＋140）する。接合距離は0.5m。構成礫総重量は2,000ｇをやや下回る。全体の７割が赤化する。全個体に亀裂がある。

石　材	点数	合計（g）	平均（g）	最大（g）	最小（g）	赤化率
安山岩	1	370.0	370	370	370	100%
花崗岩	9	1,557.9	173	447	44	67%
合計	10	1,927.9	193	447	44	70%

第18表　礫ブロック２　重量表



第63図　3 a区礫ブロック3　礫分布復原図（S=1／20）

礫ブロック3（第63図）

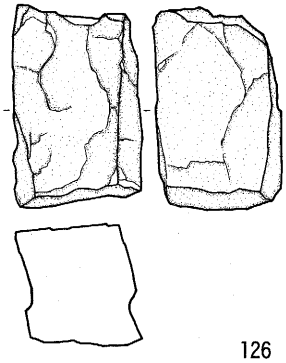
エリア2とエリア3にまたがって，その南側で検出した礫ブロックである。149～159の11点の礫が，直径2mの範囲にまとまる。範囲内に10数点の石器が含まれる。それらと出土レベルは変わらず，ほぼ同一レベルで検出している。そのうちブロック内で出土した石核251は，表裏面に著しく細かい亀裂が入る。礫とともに被熱した痕跡を示すものと思われる。

構成礫は花崗岩9点と安山岩2点である。接合する事例はない。構成礫総重量は石核を除いて1.5kg弱，石核を入れて1.8kgとなる。石核251を含めた場合の重量組成は，礫ブロック2に類似する。一方，赤化率は礫ブロック2と比較して，かなり低い。特に花崗岩の赤化が皆無である。亀裂は全個体に認められる。

石　材	点　数	合　計（g）	平　均（g）	最大（g）	最小（g）	赤化率
安山岩	2（3）	776.4（1,142.7）	388（381）	415	362	50%
花崗岩	9	661.8	74	156	39	0％
合計	11（12）	1,438.2（1,804.5）	131（150）	415	39	9％

（　）内の数値は石核251を含めた場合の数値

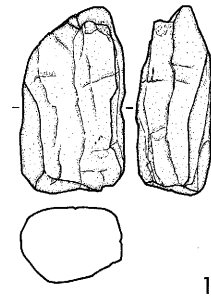
第19表　礫ブロック3　重量表



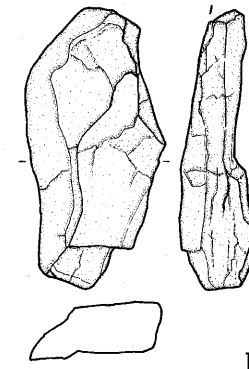
126
（Q4581, Ｐb, 花崗岩）

127
（Q2704, Ｐb, 花崗岩）

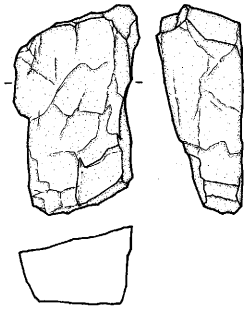
128
（Q4175, Ｐb, 凝灰岩）



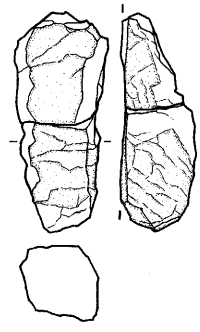
129
（Q3510, Ｐb, 安山岩）



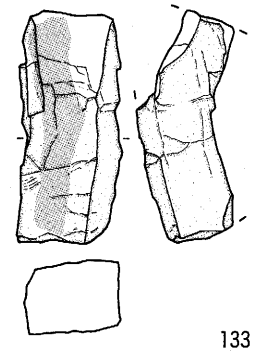
130
（Q04510, Ｐb, 安山岩）



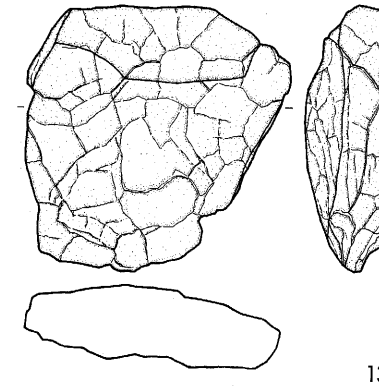
131
（Q0587, Ｐb, 花崗岩）



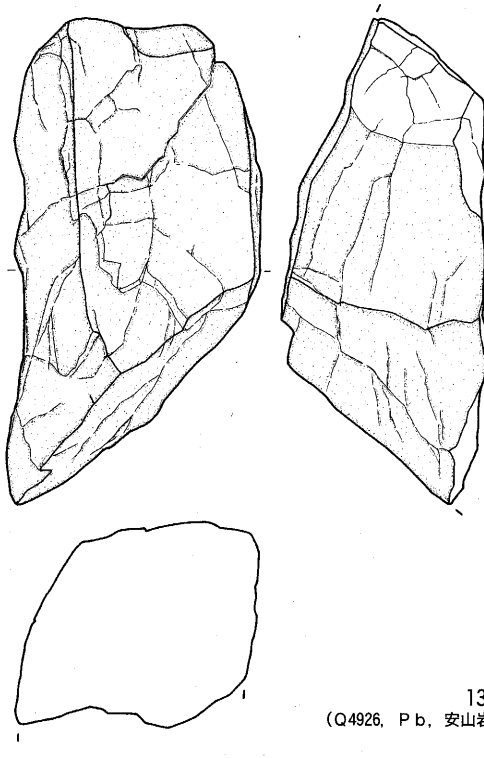
132
（Q0588, Ｐb, 花崗岩）



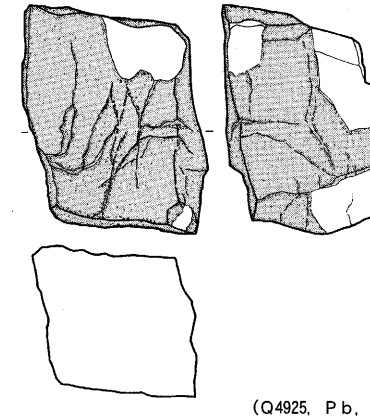
133
（Q0589, Ｐb, 花崗岩）



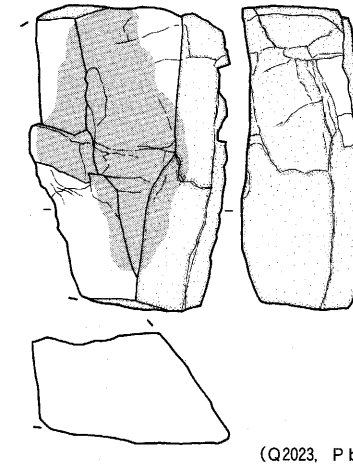
134
（Q1626, Ｐb, 安山岩）



135
（Q4926, Ｐb, 安山岩）

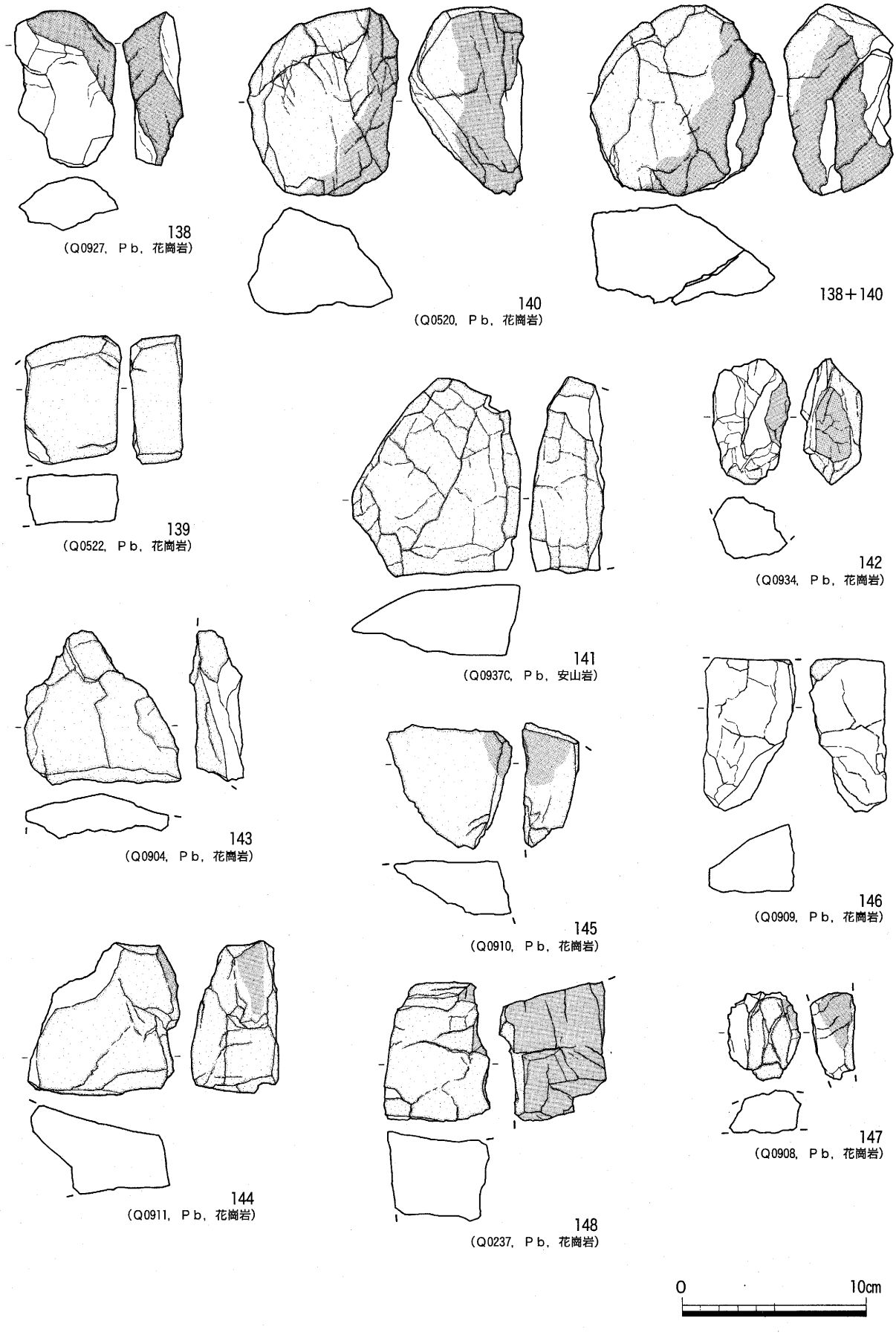


136
（Q4925, Ｐb, 花崗岩）

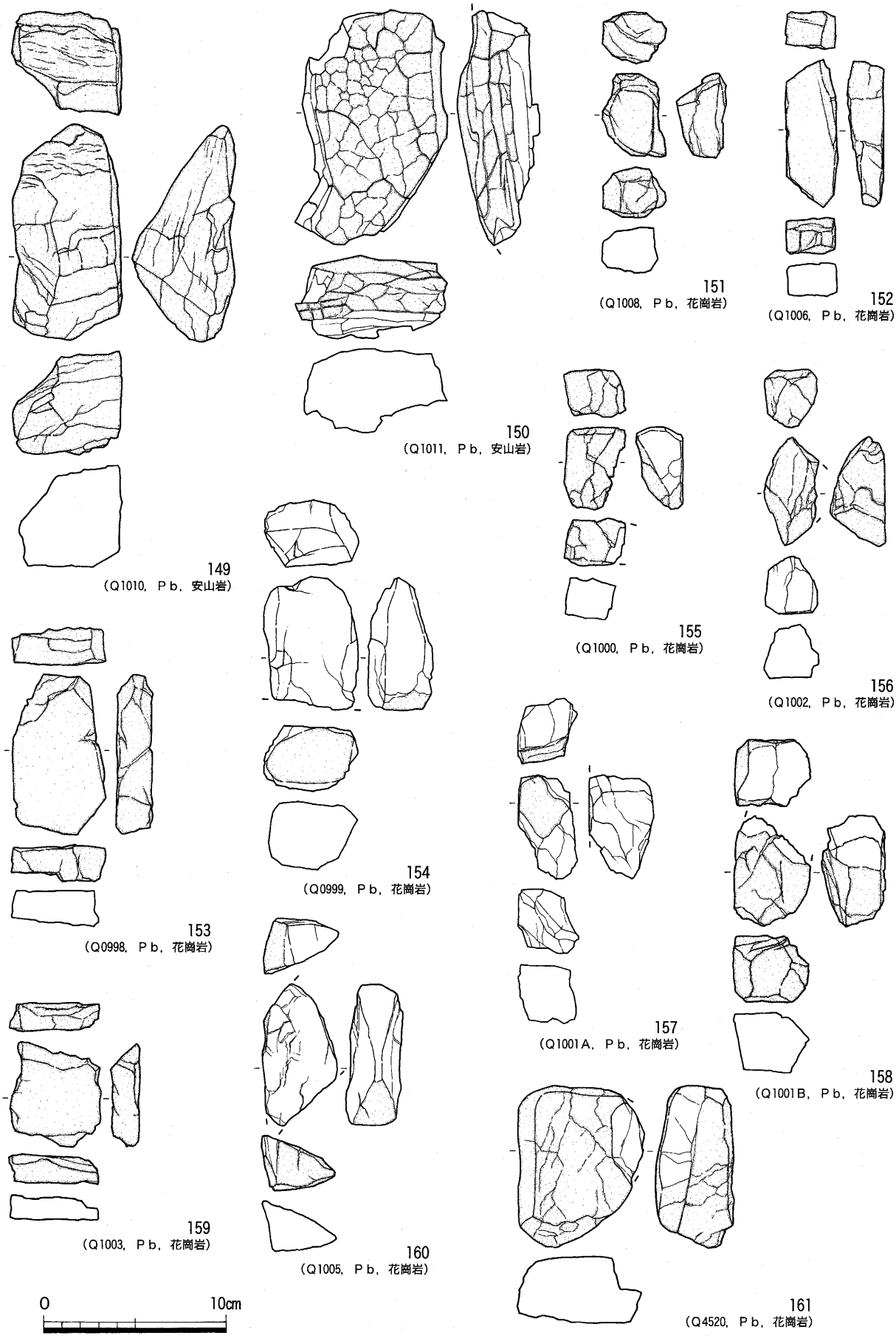


137
（Q2023, Ｐb, 花崗岩）

第64図　３ａ区出土礫実測図１（S＝1／3）



第65図　3 a 区出土礫実測図 2 （S＝1／3）



第66図　3 a区出土礫実測図3 (S=1／3)

（4）3a区エリア3

＜概要＞

3a区東側の南北11.0m，東西5.5mの細長い範囲で，合計1,081点の石器が分布する。前々節で述べたように，分布を細かく見ると南から3A・3B・3Cの3ブロックに区分することが可能である。ブロック内に所属する石器は1,071点，外縁部に所属する石器が10点ある。

分布の内訳は下表に示したとおりである。南のブロック3Aに全体の65%を超える数量・重量の石器が分布する。そして北ほど少なくなる。分布形状も北に向かって先細りとなる平面形である。

3a区エリア3ブロック別器種組成

ブロック＼器種	Kn	RF	UF	Cr	Fl	Ch	HS	Sa	Po	合計（点）
ブロック3A	24 （2）	11	5	14 （6）	235 （4）	404				693 （705）
ブロック3B	14 （1）	5	2	5	120 （1）	108				254 （256）
ブロック3C	4 （4）	1		3	55 （1）	42				105 （110）
合計	42 （7）	17	7	22 （6）	410 （6）	554				1,052 (1,071)

3a区エリア3ブロック別器種組成比

ブロック＼器種	Kn	RF	UF	Cr	Fl	Ch	HS	Sa	Po	合計（%）
ブロック3A	3.5 3.7	1.6	0.7	2.0 2.9	33.9 33.9	58.3				100.0
ブロック3B	5.5 5.9	2.0	0.8	2.0	47.2 47.3	42.5				100.0
ブロック3C	3.8 7.2	1.0		2.9	52.4 50.9	40.0				100.0
合計	4.0 4.6	1.6	0.7	2.1 2.7	39.0 38.9	52.7				100.0

3a区エリア3ブロック別器種重量組成

ブロック＼器種	Kn	RF	UF	Cr	Fl	Ch	HS	Sa	Po	合計（g）
ブロック3A	172.2	63.9	72.5	965.8 393.4	1,679.8 12.9	114.9				3,475.4
ブロック3B	147.7	39.5	21.4	270.9	716.0 45.7	42.5				1,283.7
ブロック3C	20.8 36.9	13.3		83.6	313.1 14.2	11.7				493.6
合計	340.7 36.9	116.7	93.9	1,320.3 393.4	2,708.9 72.8	169.1				5,252.7

3a区エリア3ブロック別器種重量組成比

ブロック＼器種	Kn	RF	UF	Cr	Fl	Ch	HS	Sa	Po	合計（%）
ブロック3A	5.0	1.8	2.1	27.8 11.3	48.3 0.4	3.3				100.0
ブロック3B	11.5	3.1	1.7	21.1	55.8 3.6	3.3				100.0
ブロック3C	4.2 7.5	2.7		16.9	63.4 2.9	2.4				100.0
合計	6.5 0.7	2.2	1.8	25.1 7.5	51.6 1.4	3.2				100.0

3a区フエリア3ブロック別分布属性

ブロック＼項目	面積(m²)	石器数	分布密度(個/m²)	重量比(%)	平均重(g)	定形石器保有率	接合個体数	接合率	接合重(g)	接合重量比
ブロック3A	20	693	34.7	66.2	5.0	7.8%	71	10.2%	1,993.1	57.3%
ブロック3B	11	254	23.1	24.4	5.1	10.2%	28	11.0%	616.4	48.0%
ブロック3C	6	105	17.5	9.4	4.7	7.6%	18	17.1%	205.1	41.6%
合計・平均	37	1,052	28.4	100.0	5.0	8.4%	117	11.1%	2,814.6	53.6%

第20表　3a区エリア3出土石器総括表

ブロック間には，互いに顕著な接合関係がある。全ブロックにおける接合件数は43件，点数で117点，接合率は11％である。接合率をブロック別にみると，ブロック３Ａから３Ｃへ北へ行くほど接合率が増す。一方，接合する個体の重量は，接合率が最も低いブロック３Ａが57％と高く，逆北へ行くほど接合する個体の重量比が低くなる。これは，接合資料に所属する個体のうち，より大形のものがブロック３Ａにあり，北に離れるほど軽量のものが多いことを示す。また，これは後述するが，接合資料の接合順序を検討すると必ずしも規則性がみられる訳ではない。以上を勘案すると，ブロック３Ａから３Ｃまでの南北に細長い分布は，ブロック形成途上かあるいはその後に，一部が北へ流出した痕跡と見ることが可能である。

ここでは，上記理由により石器の報告をブロック毎に区分せず，主要石器については属性表に出土したブロックを記載した上で一括して行うこととした。

なお，エリア３出土石器の石材は，１点のチャート製の使用痕有剥片を除くと，すべてサヌカイトである。

＜主要石器＞

ナイフ形石器（第68図～第70図）

42点のナイフ形石器がある。うち40点が一側縁加工，2点が二側縁加工である。ナイフ形石器の素材は，刃縁全面に石核底面が取り込まれた剥片（Ａ類），刃縁の一部に石核底面が取り込まれた剥片（Ｂ類），不定形な剥片（Ｆ類）がある。そのほか，背部整形により断面が三角形となるために素材の形状が不明なもの（Ａ？としている）も多い。いずれも素材剥片の背面を表面とし，主要剥離面を裏面として整形する。

－ナイフ形石器Ａ類－162～181，202・203

合計22点，うち完形品が８点ある。長さ80.0㎜ 以上の大形品が１点（203），長さ60.0～80.0㎜ の中形品が５点（162・167・168・176・178・202），長さ35.0㎜ 以下の小形品が１点（173）ある。そのほか177はほぼ完形で長さ75.0㎜ である。また，171は半折品で現存長60.0㎜ をはかる。

ナイフ形石器Ａ類の素材剥片には石核底面の剥離方向が素材剥片の主剥離面と同一方向のものと，そうでないものがある。同一方向のものは162や163のように刃部側が緩やかでスムーズなカーブを描く正面形を呈す。一方で，方向が異なるものは，接19に所属する168・169・177のように刃部が直線的かあるいは内彎気味となる。石核底面の剥離方向の認定は，剥離面の大きさに対して器体における遺存部が僅少のため，正確な判断を行うのが難しいが，上記の刃部形状を目安として両者を分けると，剥離方向が同一のものが11点，90度異なるものが５点，180度異なるものが４点となる。後二者を一括すると，剥離方向が同一のものとそうでないものが概ね半数ずつとなる。

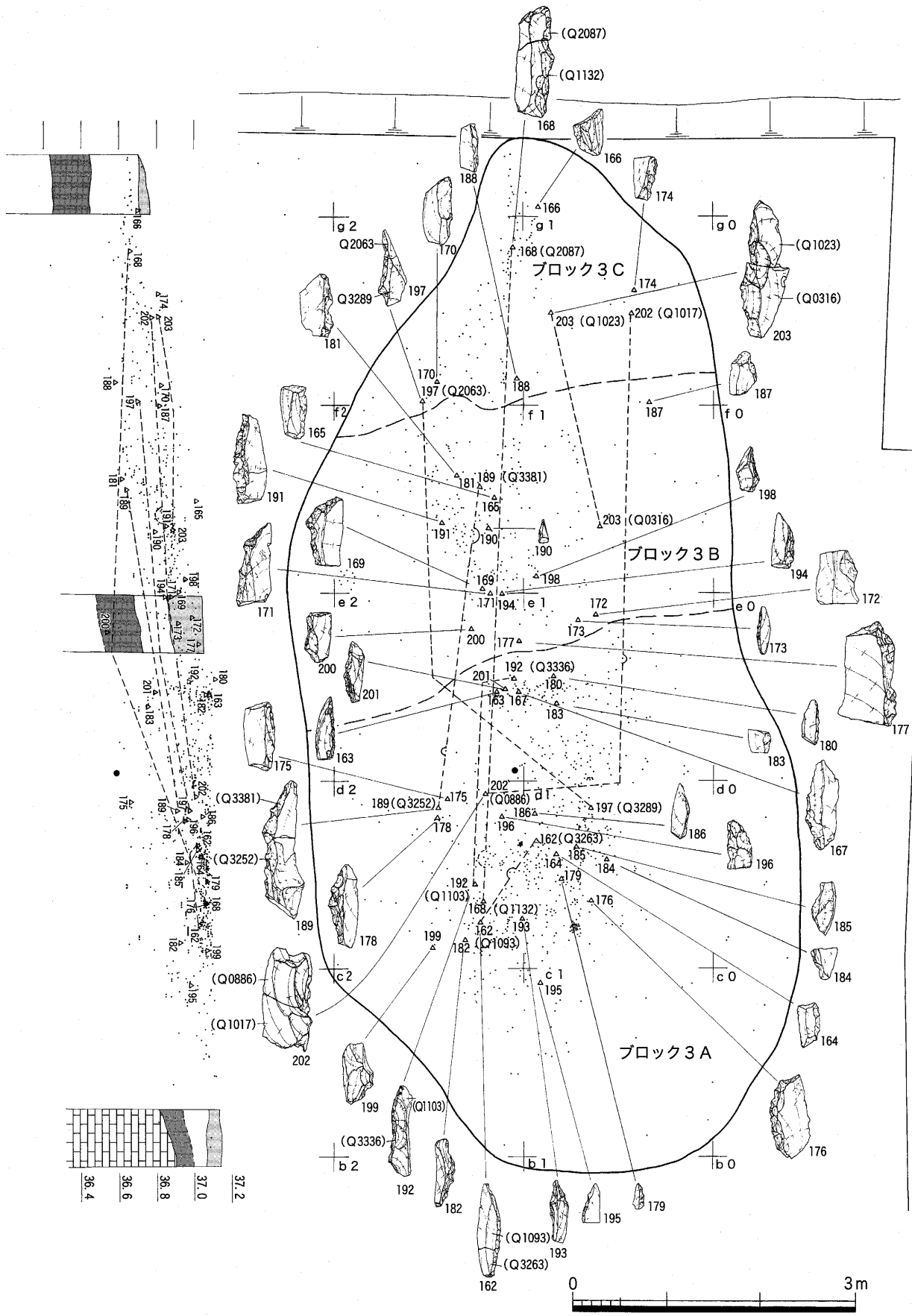
		石核底面の剥離方向と素材剥片の主剥離面の剥離方向の関係		
		同一方向	90度異なる	180度異なる
断面形	□	８点（162～166・170・202・203）	３点（167～169）	２点（171・172）
	△	３点（173・174・176）	２点（177・178）	２点（175・181）
先行剥離面	単一面	４点（162～165）	３点（167～169）	２点（171・172）
	複数面	４点（166・170・202・203）		

第21表　３ａ区エリア３　ナイフ形石器Ａ類形態分類表

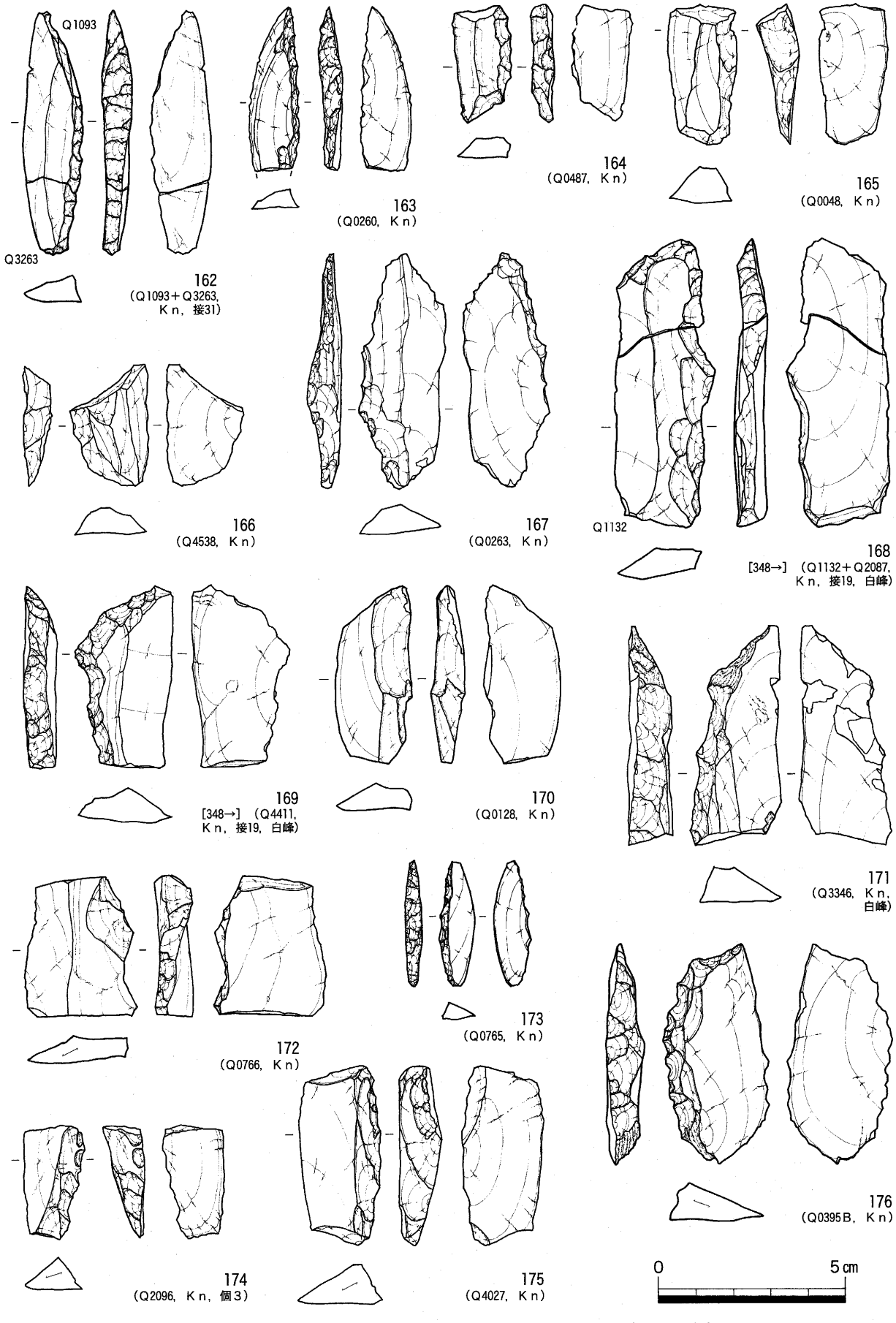
断面形は素材剥片の先行剥離面が残る断面四角形のものと，先行剥離面が整形加工によって除去される断面三角形のものに分かれる。前者は13点，後者は９点。石核底面の剥離方向との関係は，断面四角形のものほど石核底面の剥離方向が同一のものが多い。また，背面の先行剥離面数は単一面のものが９点，複数面のものが４点である。石核底面の剥離方向が同一のものは単一面と複数面が４点ずつと伯仲し，石核底面の剥離方向が異なるもの５点はいずれも先行剥離面が単一面である。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚(mm)	重量(g)	遺存状態	断面形	石材	整形加工	ブロック	グリッド	個体･接合	備考
162	68	67	19	Q1093＋Q3263	66.5×16.5×8.0	8.0	完形	□	An-A	1-S	3A	d1＋d2	接31	自然面残置
163	68	67	19	Q0260	44.5×12.5×6.5	3.5	基部欠	□	An-A	1-S	3A	e2		
164	68	67	19	Q0487	31.5×16.5×6.5	3.3	先端欠	□	An-A	1-S	3A	d1		
165	68	67	19	Q0048	38.0×18.5×11.5	6.9	先端欠	□	An-A	1-S	3B	f2		
166	68	67	19	Q4538	32.5×21.0×8.0	4.3	半欠	□	An-A	1-S	3C	h1		
167	68	67	19	Q0263	23.3×63.0×9.0	9.4	完形	□	An-A	1-S	3A	e2		
168	68	67	27	Q1132＋Q2087	78.5×27.5×8.5	19.4	完形	□	An-A	1-S	3A＋3C	d2＋g2	接19	素材の打面残置　白峰
169	68	67	27	Q4411	49.0×26.5×9.5	12.2	基部欠	□	An-A	1-S	3B	f2	接19	白峰
170	68	67	19	Q0128	48.0×20.8×8.8	8.0	先基欠	□	An-A	1-S	3C	g2		
171	68	67	19	Q3346	59.2×24.5×11.8	15.7	半欠	□	An-A	1-S	3B	e2		自然面残置　白峰
172	68	67		Q0766	38.0×30.5×10.5	12.1	先基欠	□	An-A	1-S	3B	e1		
173	68	67	19	Q0765	33.5×9.2×4.4	1.2	完形	△	An-A	1-S	3B	e1		
174	68	67	19	Q2096	30.5×16.5×11.0	4.1	半欠	△	An-A	1-S	3C	g1	個3	
175	68	67	19	Q4027	48.5×22.0×11.5	11.2	先基欠	△	An-C	1-S	3A	d2		素材の打面残置
176	68	67	19	Q0395B	60.0×28.5×10.5	15.3	完形	△	An-A	1-S	3A	d1		自然面残置
177	69	67	27	Q0250	74.0×41.0×14.8	42.7	先端欠	△	An-A	1-S	3B	e2	接19	素材の打面残置　白峰
178	69	67	19	Q3251A	59.2×21.2×11.7	11.4	先端欠	△	An-A	1-S	3A	d2		白峰
179	69	67		Q0387	18.5×8.0×5.0	0.4	半欠	△	An-A	1-S	3A	d1		
180	69	67	19	Q0049	32.5×12.5×5.7	1.8	基部欠	△	An-A	1-S	3A	e1		
181	69	67	19	Q3468	44.0×23.5×10.0	8.8	先端欠	△	An-A	1-S	3B	f2		自然面残置
182	69	67	19	Q3228	48.0×14.5×10.0	5.0	完形	△	An-A	1-S	3A	d2		自然面残置
183	69	67		Q4490	17.0×16.0×8.0	2.4	小片	△	An-A	1-S	3A	e1		
184	69	67		Q3375	23.0×19.0×8.2	2.3	半欠	△	An-A	1-S	3A	d1		
185	69	67		Q3297	38.0×17.0×8.0	3.8	先端欠	□	An-A	1-W	3A	d1		
186	69	67		Q0294	39.0×13.5×8.0	3.2	基部欠	△	An-A	1-W	3A	d1		稜上調整による欠損
187	69	67		Q1015	31.0×20.0×7.2	3.6	完形	□	An-A	1-W	3B	g1		自然面残置
188	69	67		Q2099	34.0×13.5×9.5	4.4	先基欠	△	An-A	1-W	3C	g2		
189	69	67	25	Q3252＋Q3381	99.0×30.0×16.5	25.9	完形	△	An-A	1-S	3A＋3B	d2＋f2	接7	白峰
190	69	67		Q2138	16.5×7.0×4.5	0.4	小片	△	An-A	1-S	3B	f		
191	69	67	21	Q2154	63.5×23.5×12.5	16.8	先基欠	△	An-A	1-S	3B	f2	接1	自然面残置
192	70	67		Q1103＋Q3336	64.3×15.5×6.5	5.8	完形	□	An-A	1-S	3A	d2＋e2	接32	自然面残置
193	70	67	19	Q0013	44.0×13.5×8.0	4.0	基部欠	□	An-A	2-S	3A	d2		
194	70	67		Q3345	39.2×16.0×11.5	5.9	半欠	△	An-A	1-S	3B	e2		
195	70	67		Q4003	27.5×13.0×6.0	1.8	半欠	□	An-A	1-S	3A	c1		
196	70	67		Q3485	34.5×17.5×11.5	6.0	半欠	△	An-A	2-S	3A	d2		
197	70	67	19	Q2063＋Q3289	54.5×20.5×8.0	5.8	完形	△	An-A	1-	3C＋3A	d1＋g2	個2･接18	白峰
198	70	67	19	Q0314A	32.0×16.5×8.0	2.7	基部欠	△	An-A	1-S	3B	f1	個3	
199	70	67		Q1081	43.5×21.5×8.5	5.8	先端欠	□	An-A	1-S	3A	d2		
200	70	67		Q4937	35.0×18.5×11.0	7.0	先端欠	□	An-A	1-S	3B	e2		裏面にネガティブな素材面残置
201	70	67	19	Q4030A	43.0×　14.2×8.5	4.5	完形	□	An-A	1-S	3A	e2		
202	70	67	27	Q0886＋Q1017	74.0×35.5×14.0	30.6	完形	□	An-A	1-S	3A＋3C	g1＋d2	個1接17	整形途上の欠損 自然面残置　白峰
203	70	67	19	Q0316＋Q1023	98.0×35.0×12.5	30.2	完形	□	An-A	1-S	3B＋3C	g1＋f1	接33	整形途上の欠損 素材の打面残置

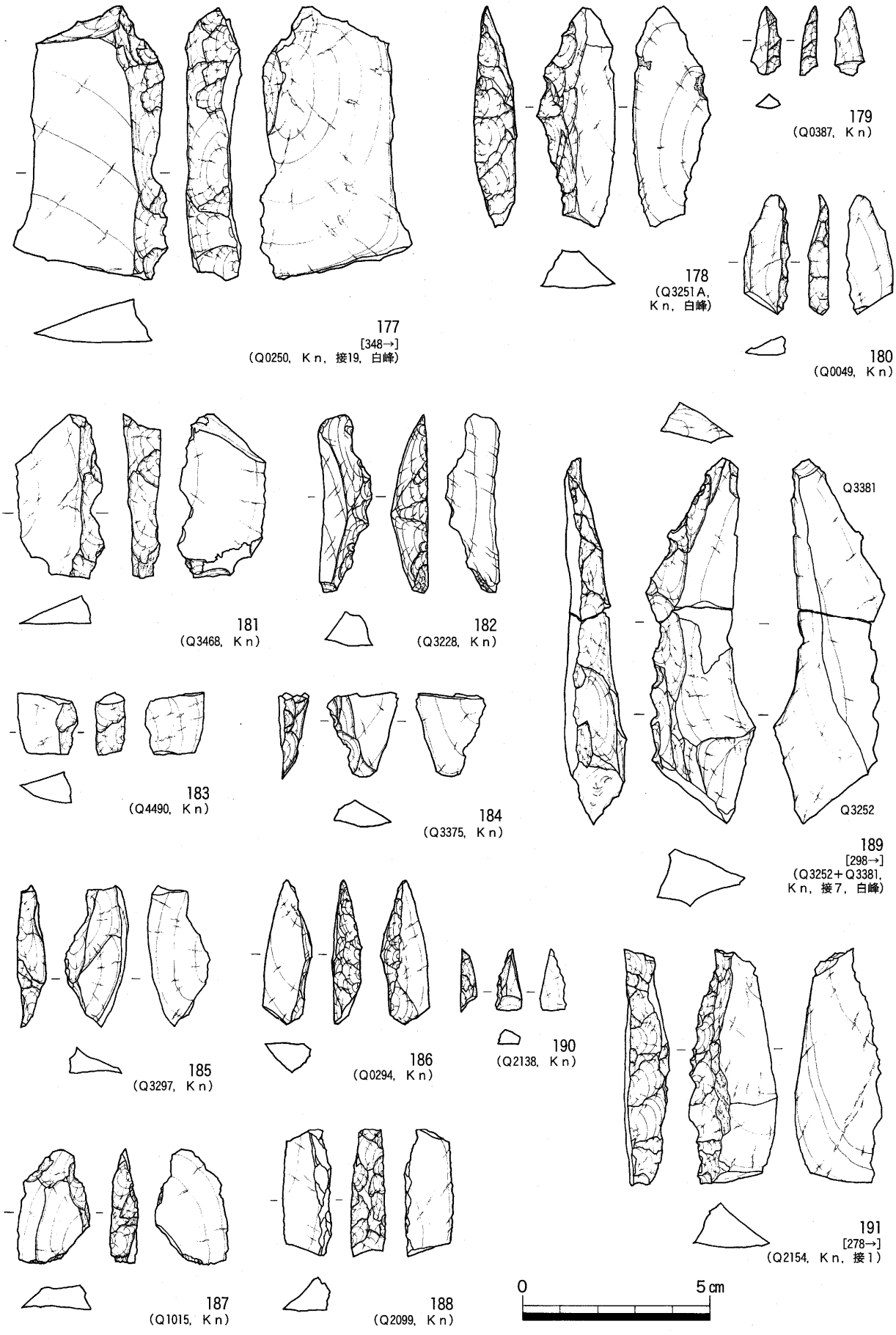
第22表　３ａ区エリア３　ナイフ形石器　属性表



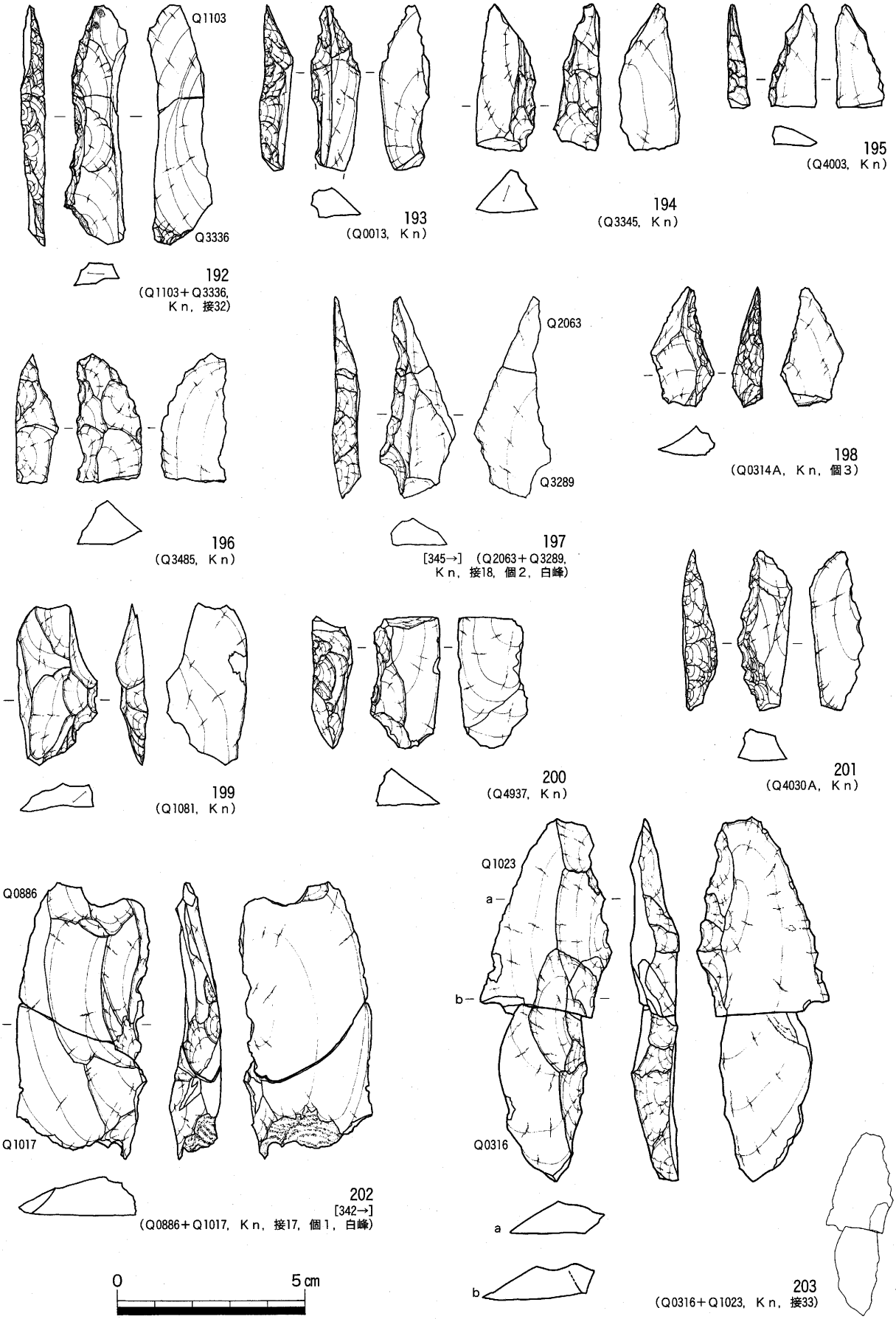
第67図　３ａ区エリア３　器種別石器分布図１　Kn（S＝1／60　垂直分布S＝1／30）



第68図　3 a区エリア3　出土石器実測図1　Kn（S＝2／3）



第69図　3a区エリア3　出土石器実測図2　Kn（S=2／3）



第70図　3 a区エリア3　出土石器実測図3　Kn（S=2／3）

－ナイフ形石器Ｂ類－197～199・201

刃縁の一部に石核底面が取り込まれた剥片を素材とするナイフ形石器をＢ類としている。４点ある。いずれもほぼ完形品で，長さ35.0㎜以下のもの１点（198）と，長さ45.0～55.0㎜のもの３点（197･199･201）がある。Ａ類と比較してやや小振りである。

形態的特徴として，部分的に取り込まれた石核底面と主剥離面とで形成される刃部が直線的であることが挙げられる。これはいずれも石核底面の剥離方向が素材剥片主剥離面の剥離方向と90度ないし180度異なることによる。また，石核底面と先行剥離面との剥離境で形成する稜線が，素材剥片に取り込まれる際に突出状となり，二次加工が施されず刃部側にその形態を留める。つまり左右非対称形の正面形を呈す。外見上，両側縁が直線的で左右対称の細長形状を呈するナイフ形石器Ａ類と比較して対照的である。なお，197は接18に所属し，素材剥片剥離過程がわかる事例である。

－その他のナイフ形石器－

上記以外のナイフ形石器については，剥片剥離過程で生じた不定形剥片の一部を刃縁に使用して，Ａ類の形態を指向したものが多い。189や191は接合資料に所属しており，目的剥片を素材として使用したものではないことがわかる。また，193と196は全体のなかで２点しか組成しない二側縁加工ナイフ形石器である。193は石核底面が複数の剥離面で構成されており，その剥離境の突出を部分的な対側縁加工によって微調整するもの，196は厚めの素材に間隔を置いた粗い整形加工を施しており，形態的に他のナイフ形石器とは異なり，角錐状石器に近い。

また，185～188は整形加工にあたって，表面側からも打撃を加え，「対向調整」の形態を備えるナイフ形石器である。ただし，上下に均質な整形加工が施され，断面三角形を呈する典型的な事例は188の１点のみである。Ａ・Ｂ類を含めて，エリア３出土のナイフ形石器は全般に対向調整が低調と言える。

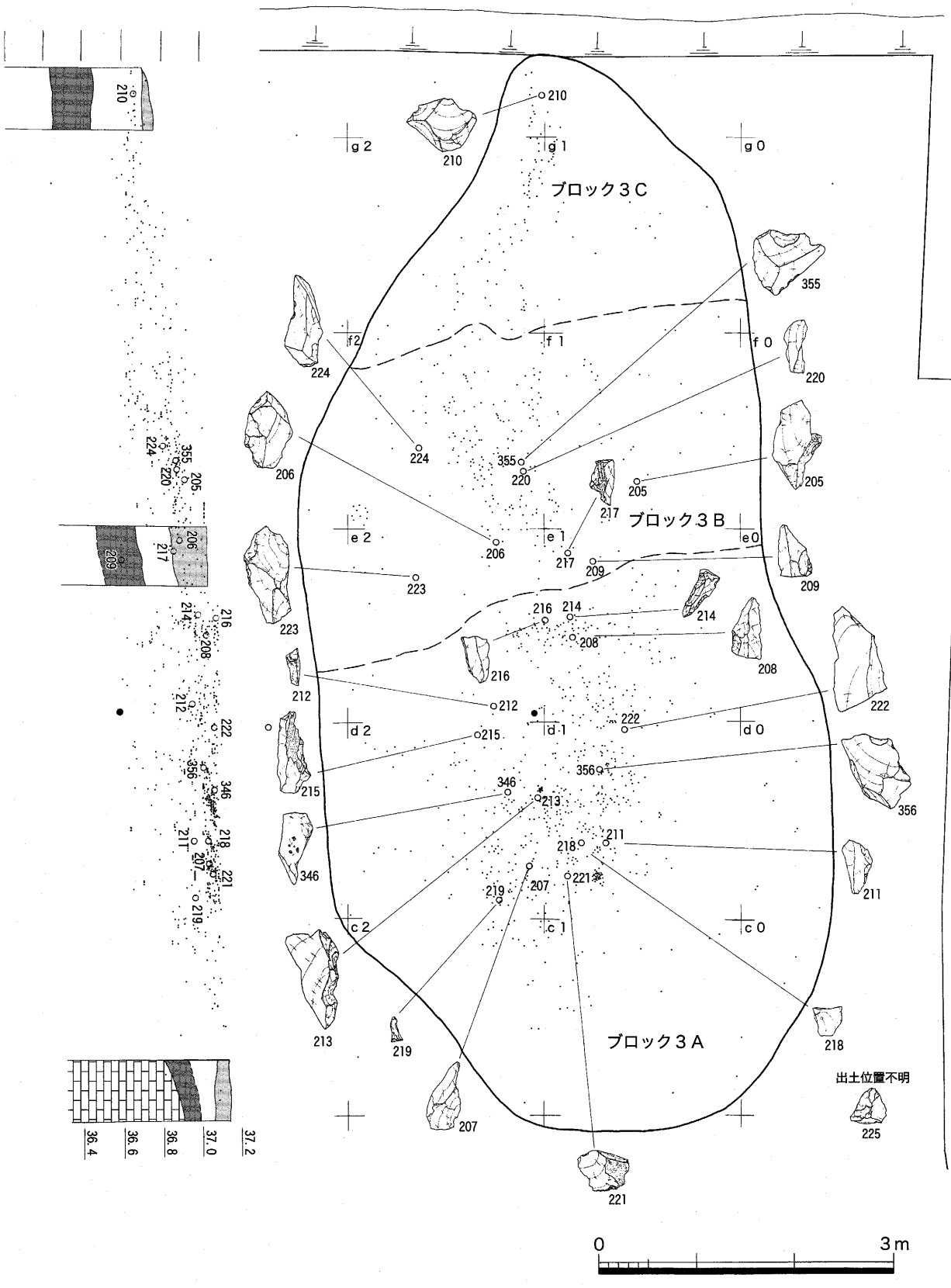
加工痕有剥片・使用痕有剥片（第72図，第73図，第23表）

両者合わせて，合計25点が出土した。そのうち７点は，明確な二次加工がなく，側縁もしくは末端部に微細剥離痕のみを留めるものである。二次加工を施すもののうち，３点には微細剥離痕が認められる。したがって，二次加工を基準に考えれば，加工痕有剥片18点，使用痕有剥片７点となり，使用痕を基準とすれば，後者に３点追加される。なお，チャート製のものが１点含まれる。

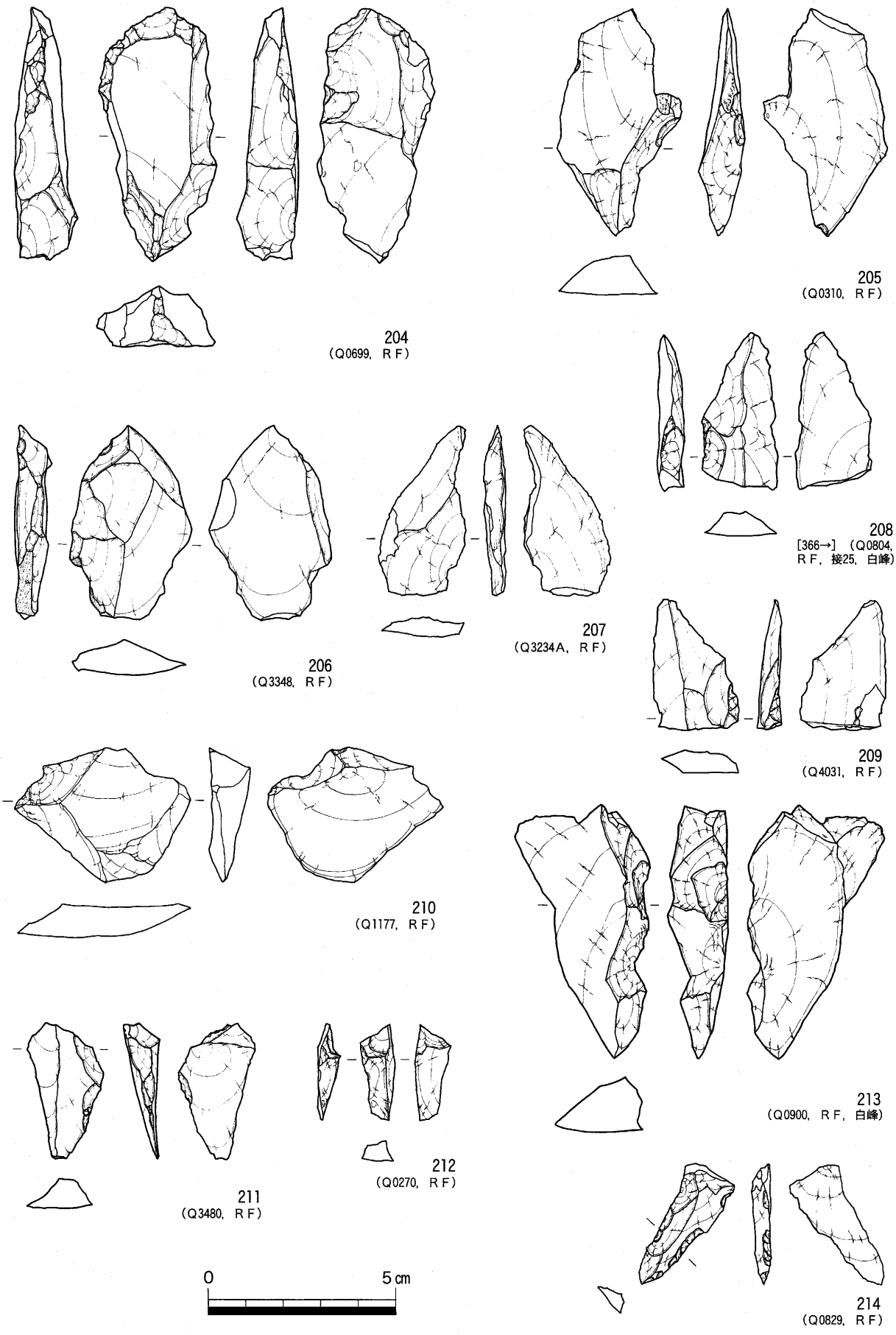
素材は不定形な横長剥片が多い。二次加工は打面側に施されるものが多く17点中15点を数える。これらには，ナイフ形石器の整形加工の初期段階のものを含む可能性が高い。

なお，204は大形の剥片の背面側からほぼ全周に粗く急角度の加工が施されるもので，裏面にも一部加工がある。角錐状石器の可能性もあるが，形態的にみて細身ではなく尖端部が作出されていないことから，加工痕有剥片とした。ただし，エリア１・２の角錐状石器に近似する加工痕有剥片に類似し，出土位置も２・３Soutでエリア２に近い。

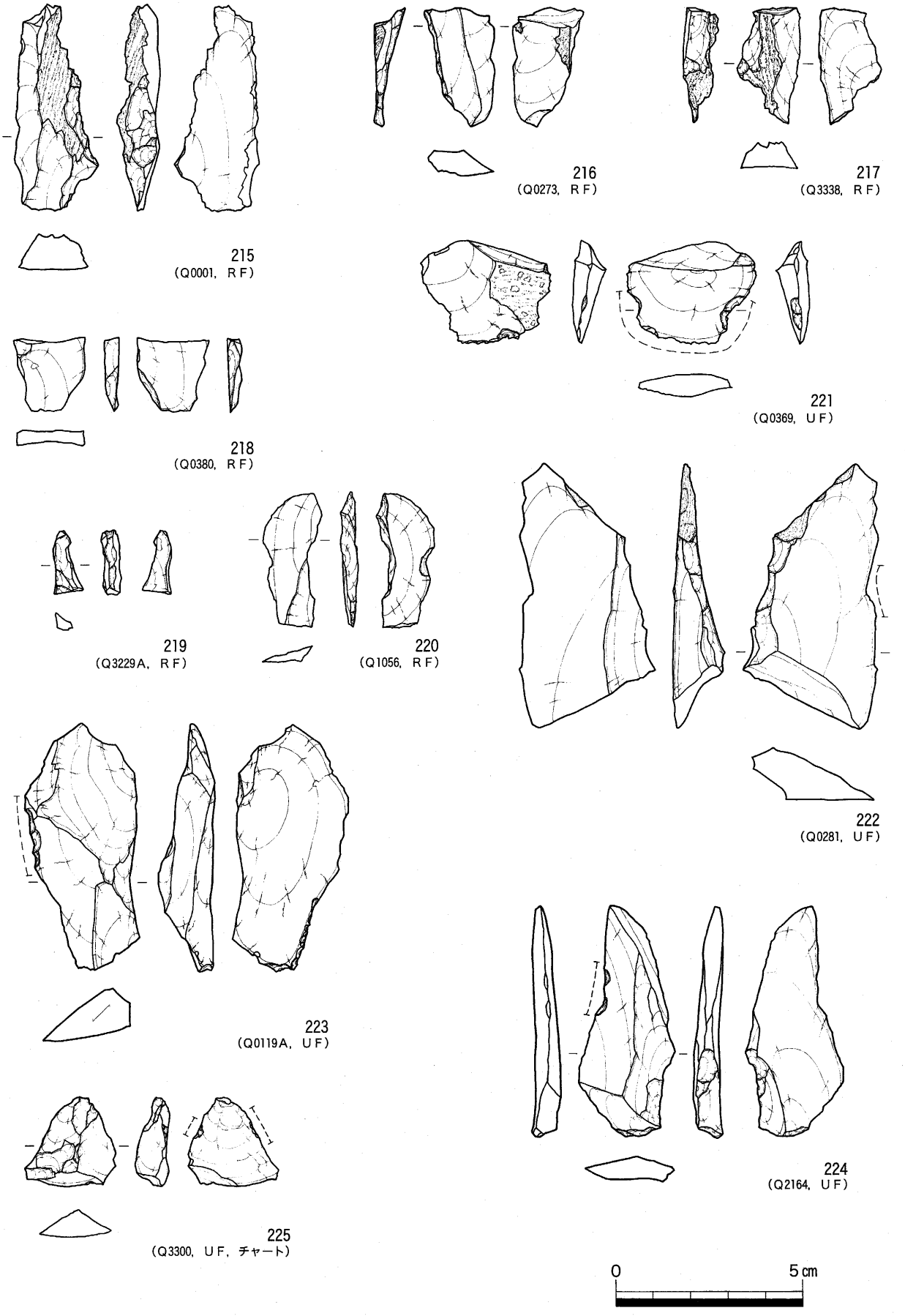
225は茶褐色系チャートの裾広がりの幅広の剥片で，側縁部に微細剥離痕がみられる。詳細な出土位置は不明であるが，エリア１･２で出土しているチャートとは石材の色調や質が異なっており，225と共通する石材はほかには認められない。



第71図　３ａ区エリア３　器種別石器分布図２　UF・RF（S＝1／60　垂直分布S＝1／30）



第72図　3 a区エリア3　出土石器実測図4　RF（S＝2／3）



第73図　3a区エリア3　出土石器実測図5　RF・UF（S＝2／3）

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚(mm)	重量(g)	遺存状態	石材	打面	側縁	末端	ブロック	グリッド	個体・接合	備考
204	72	151	20	Q0699	68.7×32.0×17.0	33.7	完形	An-A	○	○	○	2·3Sout	d3		石核か？
205	72	71		Q0310	33.3×60.5×12.5	15.8	一部欠	An-A	○	×	×	3B	f1		
206	72	71		Q3348	52.0×32.5×10.0	14.5	完形	An-A	×	○	△	3B	e2		微細剥離痕
207	72	71		Q3234A	23.0×45.5×6.0	4.8	折損	An-C	○	×	×	3A	d2		
208	72	71		Q0804	20.4×42.0×7.2	5.2	折損	An-A	○	×	×	3A	e1	接25	白峰
209	72	71		Q4031	23.0×35.0×6.5	4.1	折損	An-A	○	×	×	3B	e1		
210	72	71		Q1177	36.0×47.5×11.0	13.3	完形	An-A	×	○	△	3C	h2		微細剥離痕
211	72	71		Q3480	36.5×20.5×10.0	3.9	完形	An-A	○	○	×	3A	d1		
212	72	71		Q0270	25.7×9.0 ×5.6	1.0	折損	An-A	○	○	×	3A	e2		
213	72	71		Q0900	36.0×68.0×16.5	26.5	折損	An-A	○	×	△	3A	d2		微細剥離痕 白峰
214	72	71		Q0829	32.3×25.0×5.5	2.2	欠損	An-A	×	○	○	3A	e1		石錐か？
215	73	71		Q0001	22.5×56.0×11.5	9.8	完形	An-A	○	×	×	3A	d2		
216	73	71		Q0273	32.0×19.0×8.5	3.2	折損	An-A	○	×	×	3A	e1		
217	73	71		Q3338	31.0×17.0×9.5	3.4	折損	An-A	○	×	×	3B	e1		
218	73	71		Q0380	19.5×20.0×4.0	1.7	折損	An-A	○	×	×	3A	d1		
219	73	71		Q3229A	17.0×8.0×5.5	0.6	折損	An-A	○	×	○	3A	d2		整形剥片か
220	73	71		Q1056	16.0×36.5×4.4	1.7	完形	An-A	○	×	×	3B	f2		
221	73	71		Q0369	27.5×35.0×9.5	6.4	完形	An-A	×	△	△	3A	d1		微細剥離痕
222	73	71	20	Q0281	36.5×71.5×14.0	21.7	折損	An-A	×	×	△	3A	d1		微細剥離痕
223	73	71	20	Q0119A	31.0×67.0×15.0	22.1	完形	An-C	×	×	△	3A	e2		微細剥離痕
224	73	71	20	Q2164	26.0×63.0×8.5	9.7	完形	An-A	×	△	△	3B	f2		微細剥離痕
225	73	71	20	Q3300	24.0×24.5×9.5	4.0	完形	チャート	×	△	×	3A	d1		微細剥離痕
346	104	71		Q1110	23.5×49.5×8.5	5.0	折損	An-A	○	×	×	3A	d2	個2·接18	
355	107	71		Q1058	45.0×48.6×9.2	11.7	完形	An-A	×	×	△	3B	f2	接21	微細剥離痕
356	107	71		Q1166	50.2×47.4×12.4	18.3	完形	An-A	×	△	△	3A	d1	接21	微細剥離痕

第23表　3a区エリア3　加工痕有剥片・使用痕有剥片　属性表

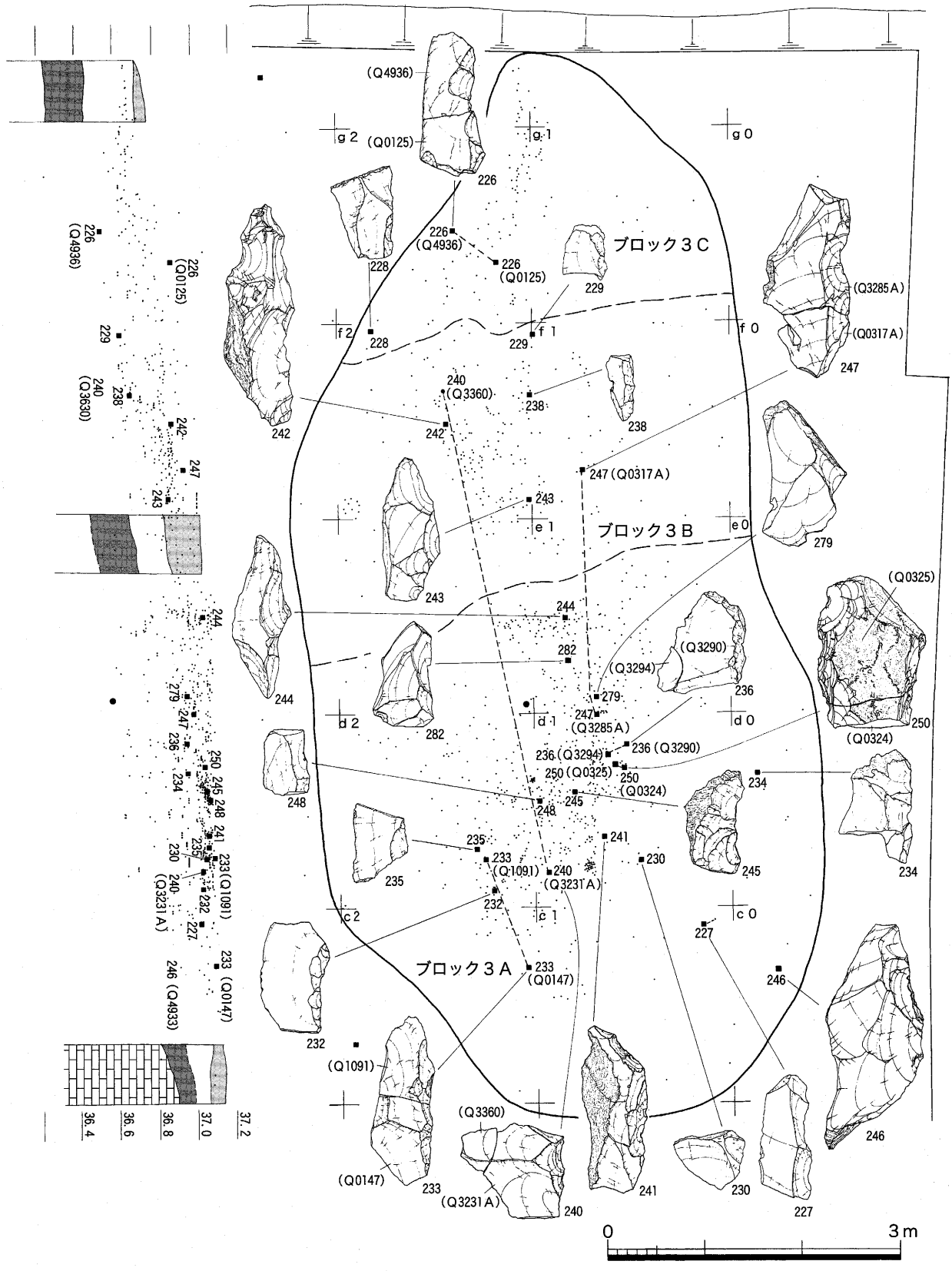
石核（第75図～第82図，第24表）

エリア3出土の石核は，作業面の設定によって大きく分けて3群に分けることが可能である。石核A類（226～239）は3b区と同様に，作業面を固定し，打面を山形に整形して作業面が石核幅一杯かあるいは大部分にわたってみられるものである。14点ある。B類（240～248）は作業面が固定的でなく，左右あるいは表裏交互に入れ替わり，いわゆる交互剥離，あるいは並列剥離を行うものである。9点ある。F類（249～252）としたものは，厚みのある大形の剥片の周縁部を打撃して剥片を求心状に順次剥離するもので，作業面が石核の周縁部を全周するものが多い。4点ある。

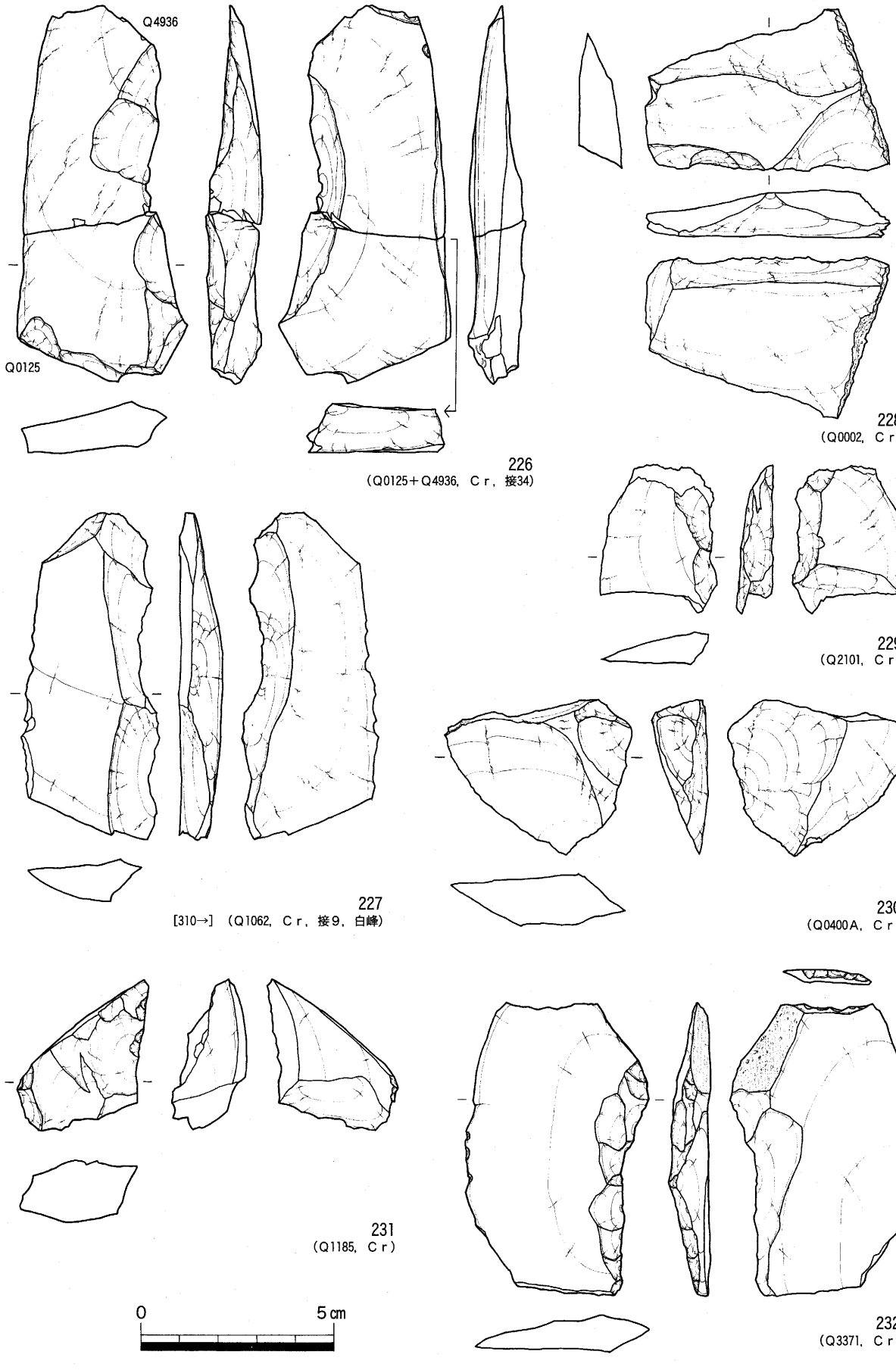
A・B類とも作業面の長さが50.0～70.0㎜のものが多いが，B類には長さ100.0㎜を超えるサイズものもある。打面調整はA類によく見られるが，特に入念に施されるのは2点のみである。

石核素材の形状は，素材面を留めるものが多く比較的理解しやすい。A・B類ともに大きく分けて2種類ある。長さ100.0㎜内外の幅広の剥片の打面側を作業面に設定し，作業面と反対側に素材剥片の末端が残るものと，節理にそって分割された厚さ35.0～40.0㎜の板状剥片を素材として，作業面と反対側にサヌカイトの原礫面を留めるものの2者である。接合資料では，後者のB類石核の作業面に，前者のA類石核の石核素材面が接合する事例がある。

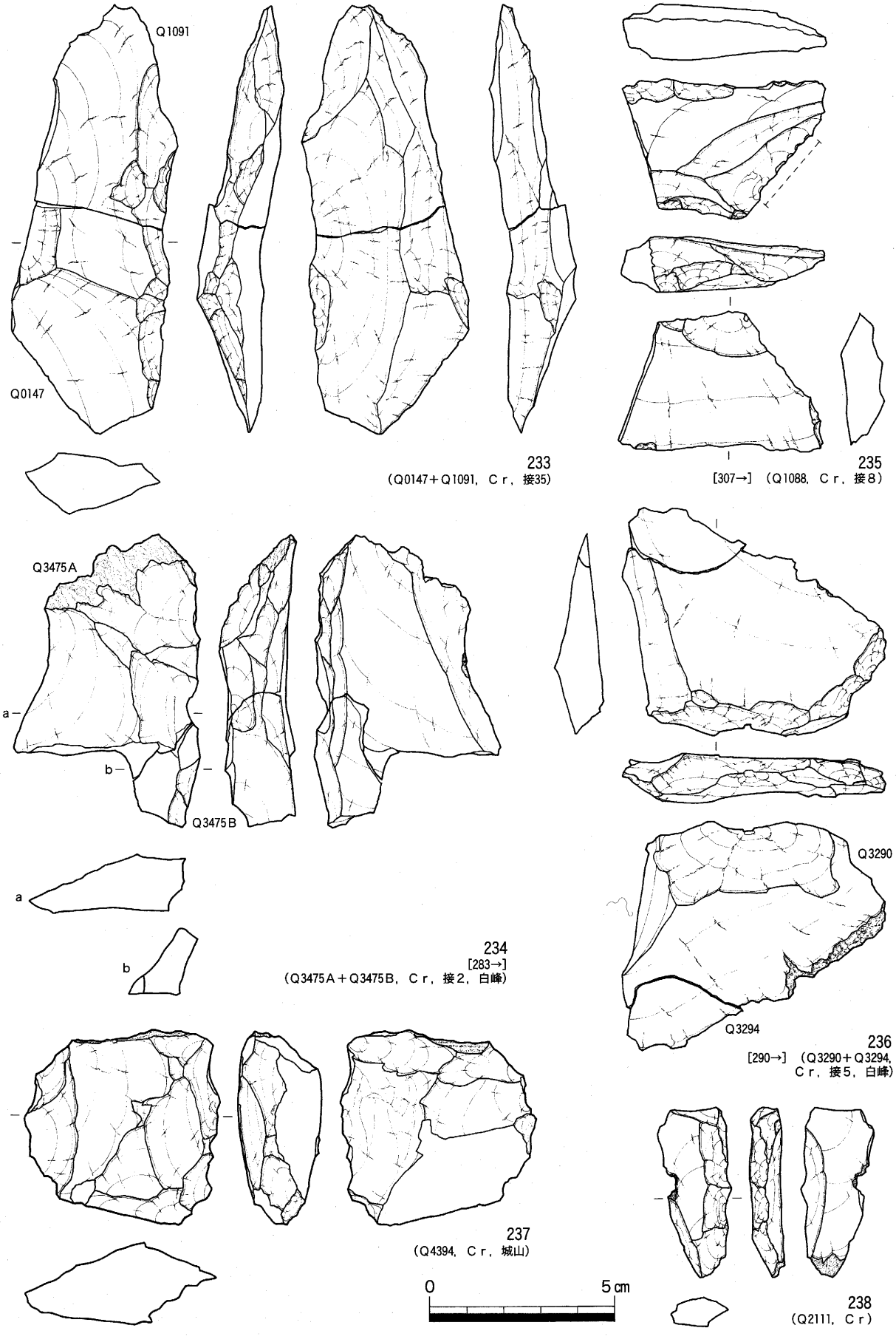
なお背面に自然面を留める大形の石核F類の251は，作業面となる裏面側に細かな亀裂が全面にみられる。自然面側では2枚の剥離面に亀裂があり，その面を切って亀裂のない剥離面が認められる。剥片剥離の途上で亀裂が入ったものと言える。出土位置は2・3Soutで礫ブロック2の分布域に含まれ，エリア3の石核とは切り離して考えた方がよい。



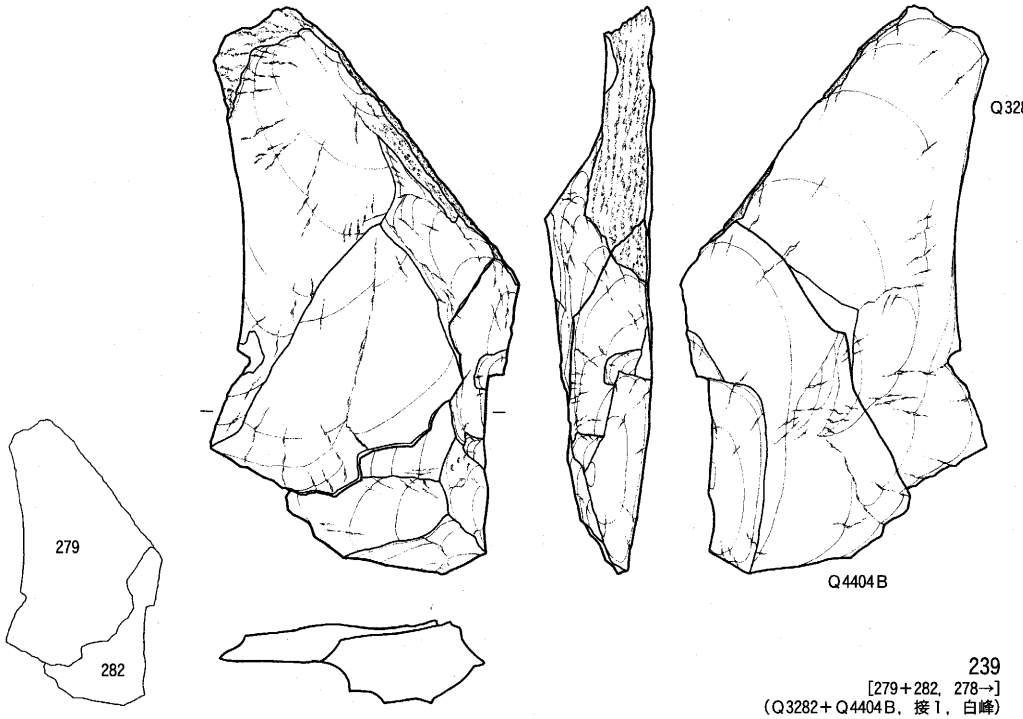
第74図　３ａ区エリア３　器種別石器分布図３　Cr（S＝1／60　垂直分布S＝1／30）



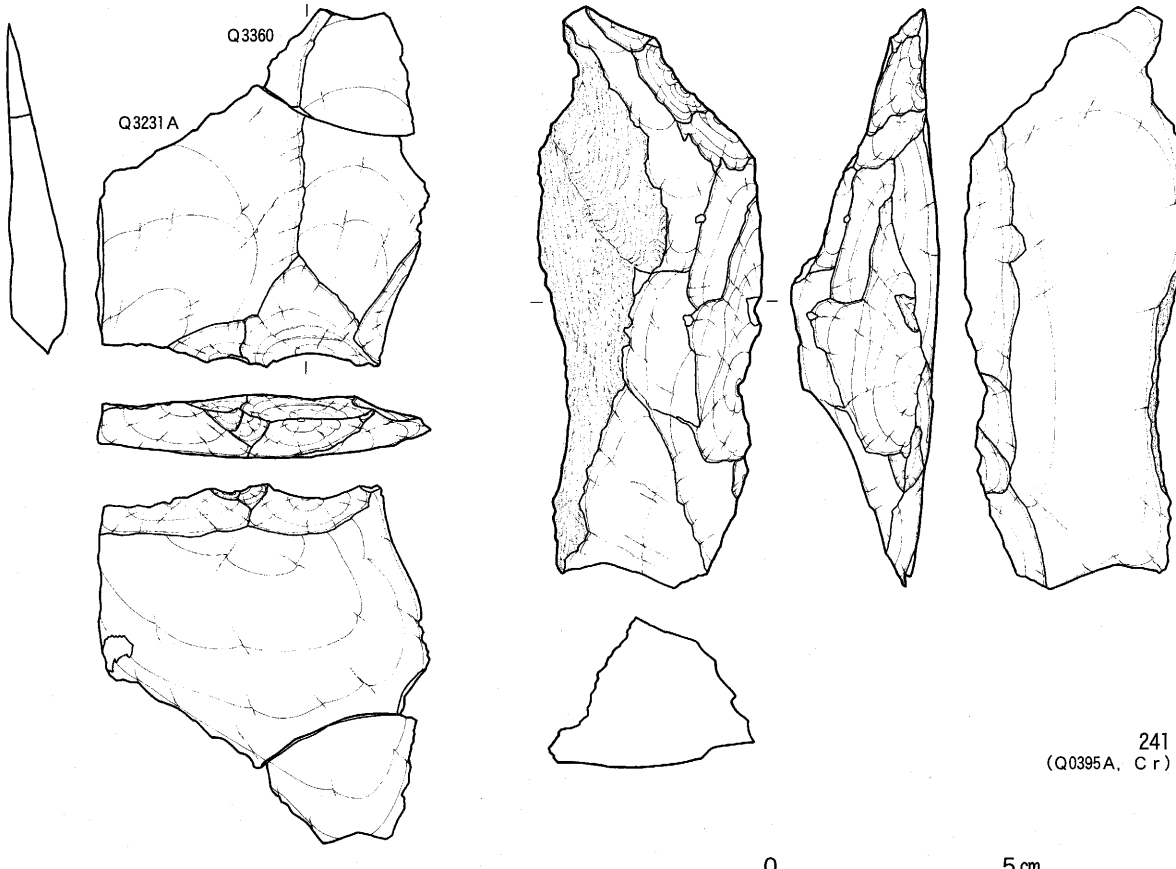
第75図　3 a 区エリア 3　出土石器実測図 6　Cr（S＝2／3）



第76図　3 a 区エリア 3　出土石器実測図 7　Cr（S＝2／3）



239
[279＋282, 278→]
(Q3282＋Q4404B, 接1, 白峰)

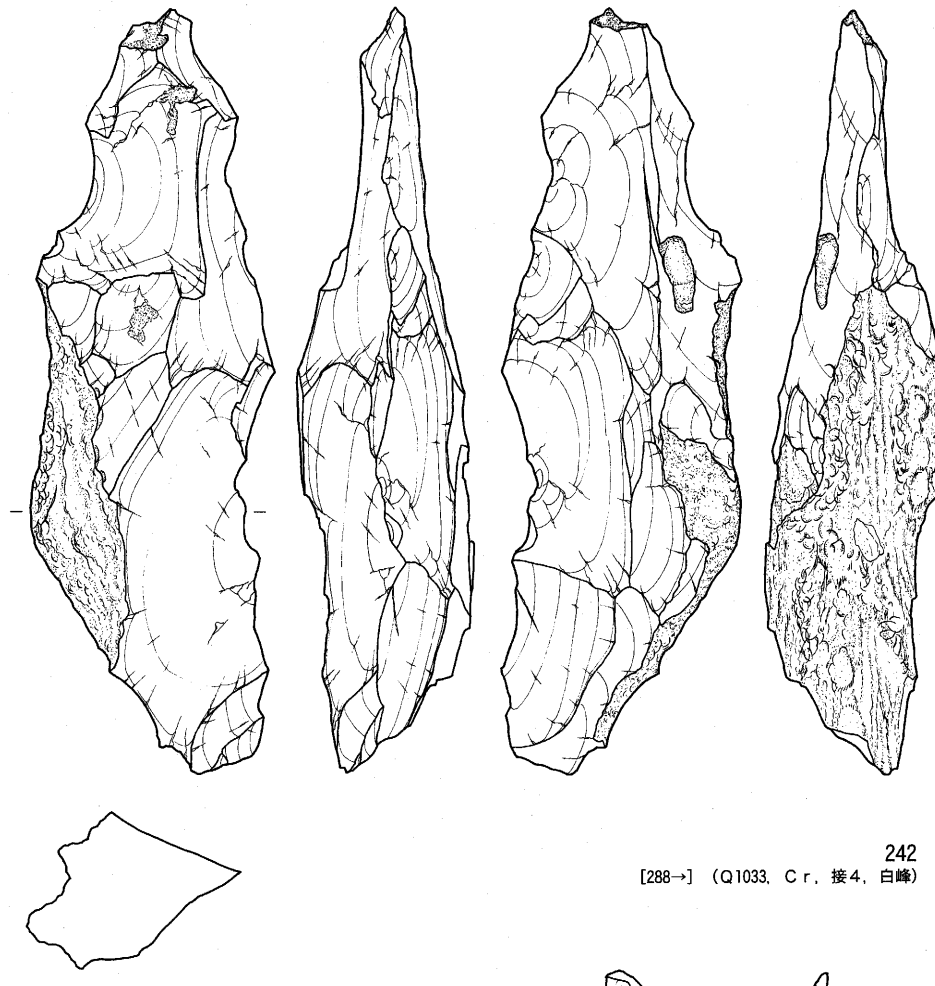


240
(Q3231A＋Q3360, Cr, 接36)

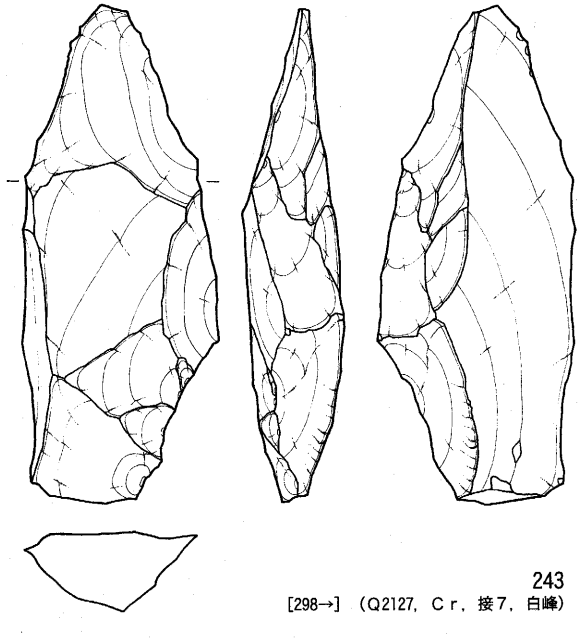
241
(Q0395A, Cr)

0 5cm

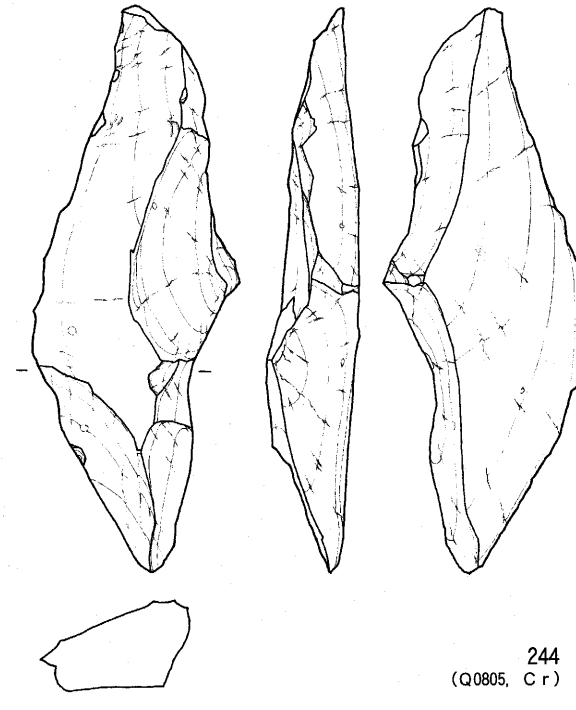
第77図　3a区エリア3　出土石器実測図8　Cr（S＝2／3）



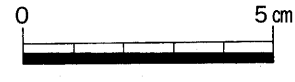
242
[288→] (Q1033, Cr, 接4, 白峰)



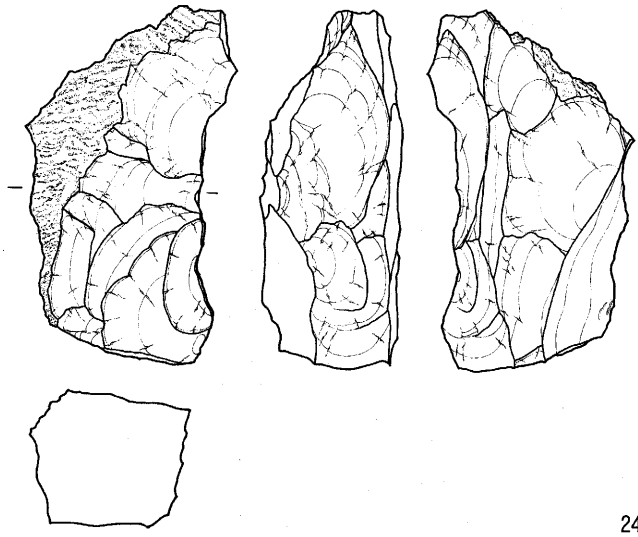
243
[298→] (Q2127, Cr, 接7, 白峰)



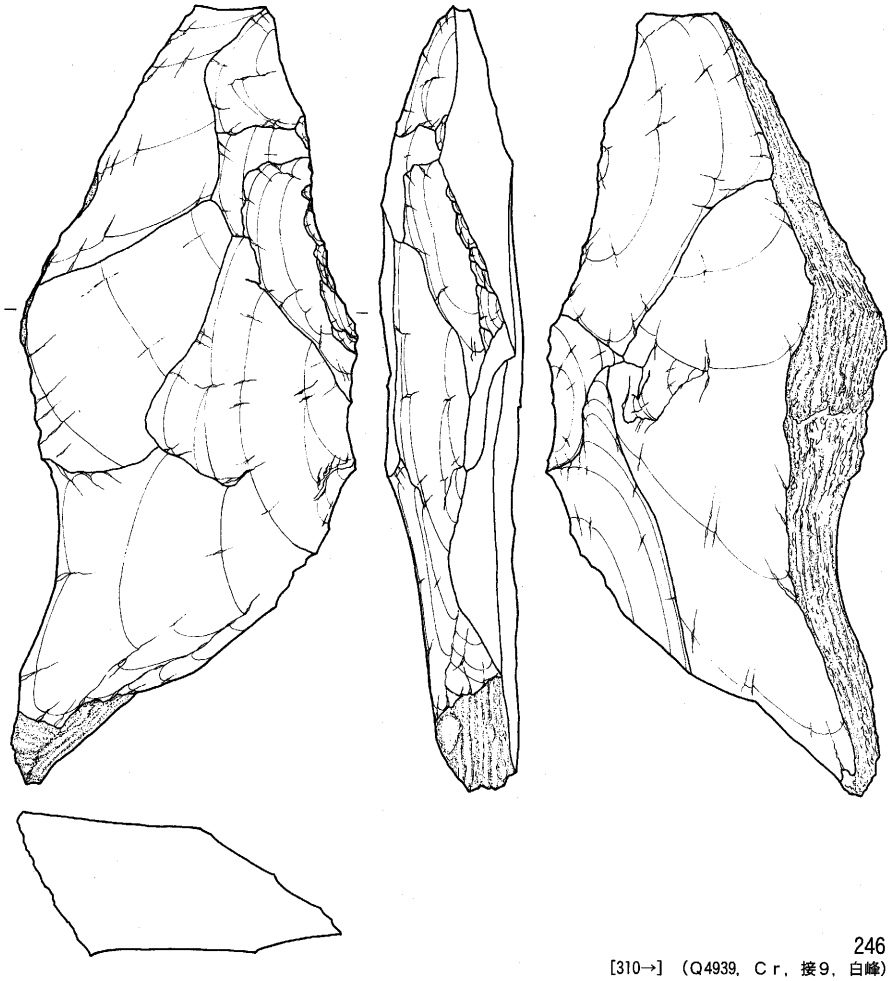
244
(Q0805, Cr)



第78図　3a区エリア3　出土石器実測図9　Cr（S=2／3）



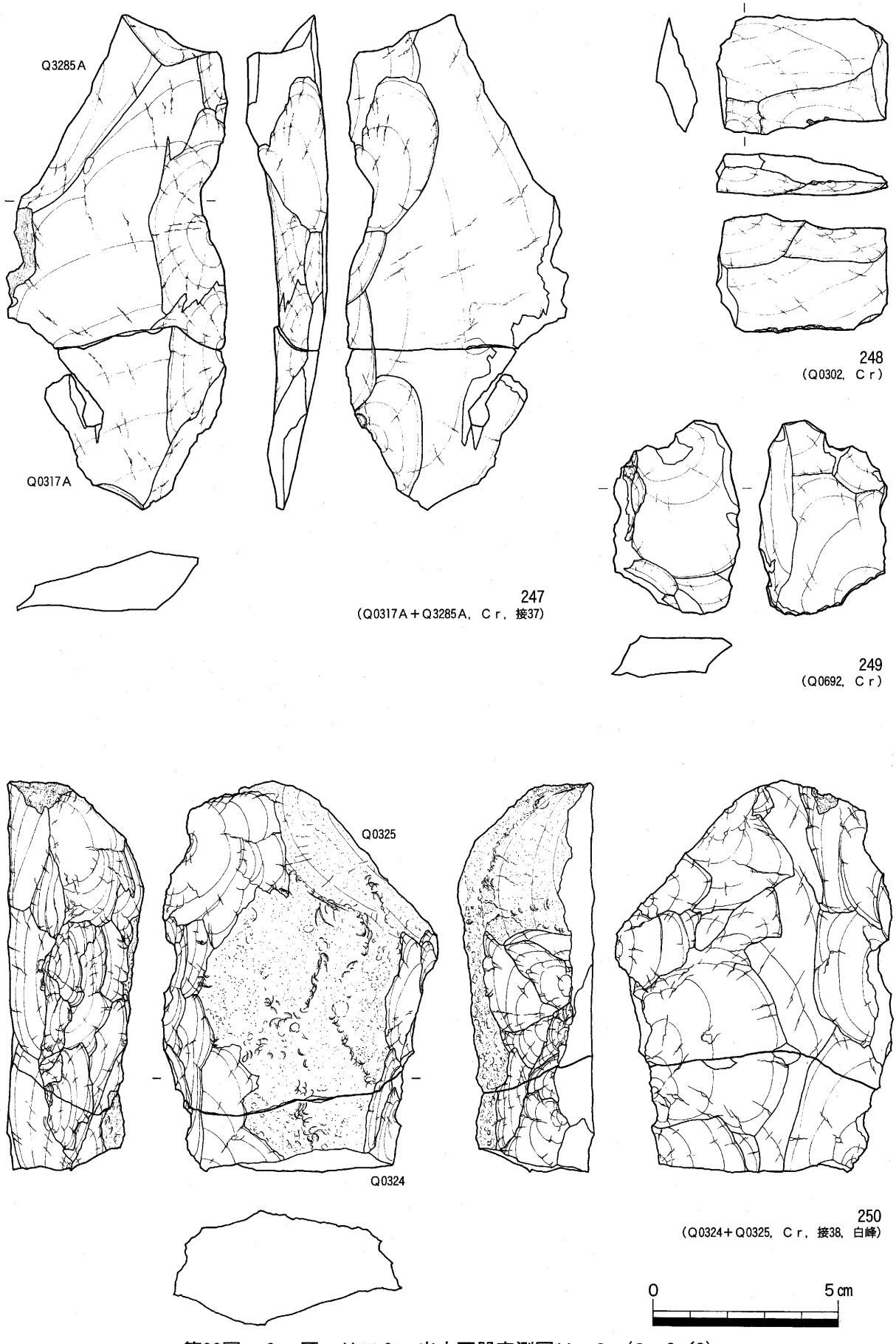
245
[285→] (Q0488, Cr, 接3, 個1, 白峰)



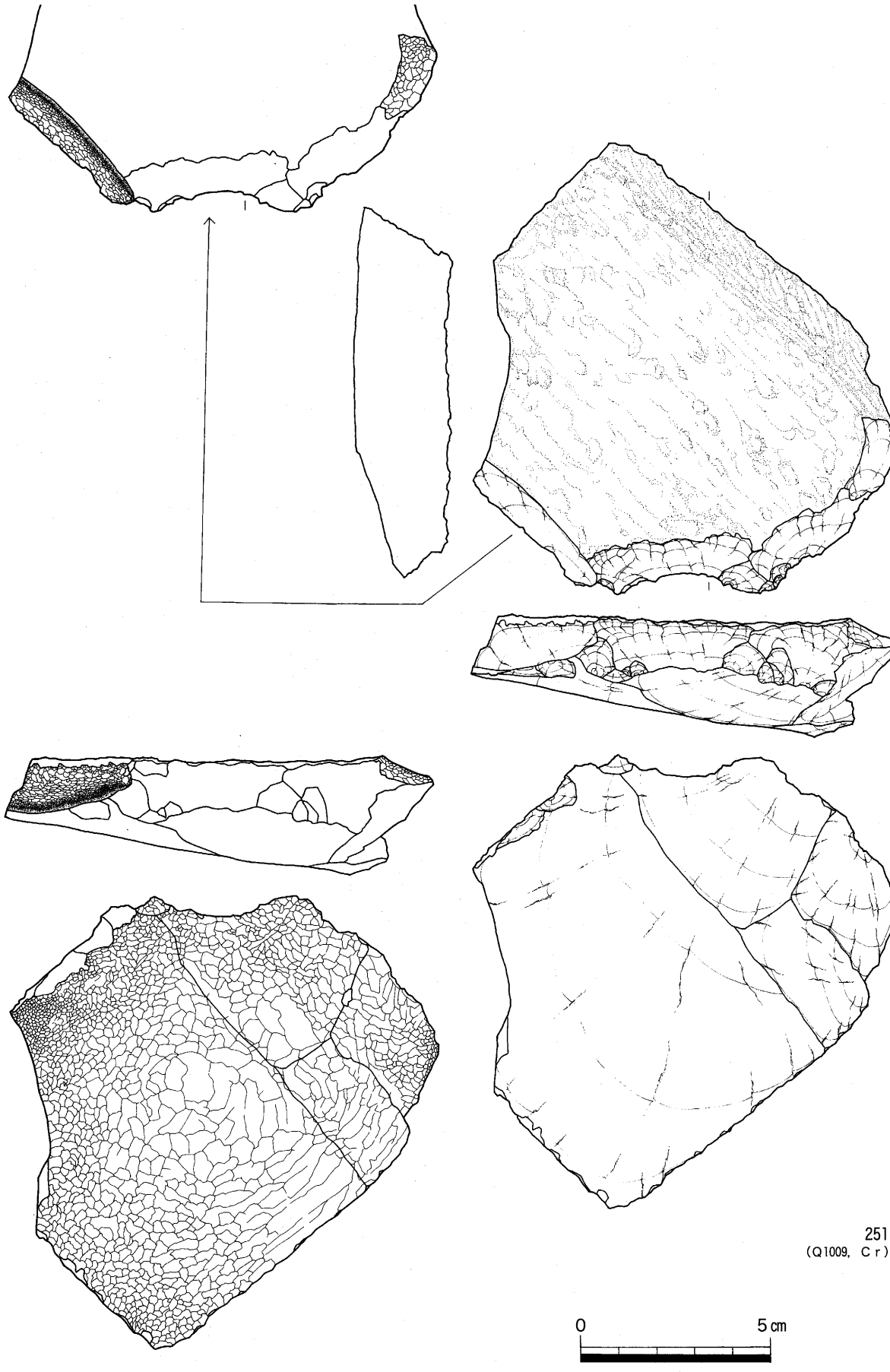
246
[310→] (Q4939, Cr, 接9, 白峰)

0 5cm

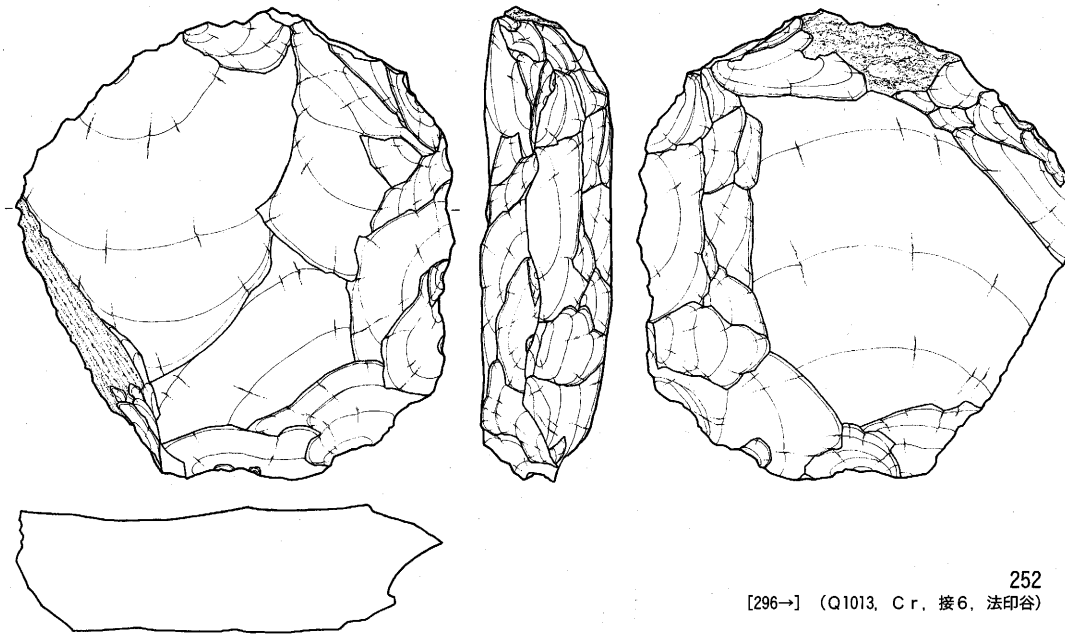
第79図　3 a区エリア3　出土石器実測図10　Cr（S＝2／3）



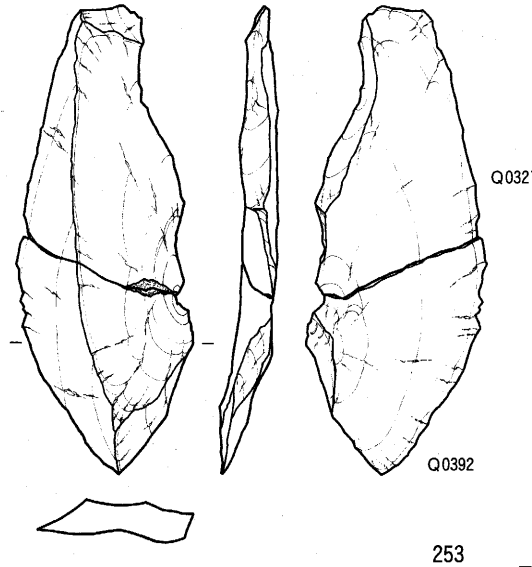
第80図　3 a 区エリア 3　出土石器実測図11　Cr（S＝2／3）



第81図　3 a 区エリア 3　出土石器実測図12　Cr（S＝2／3）



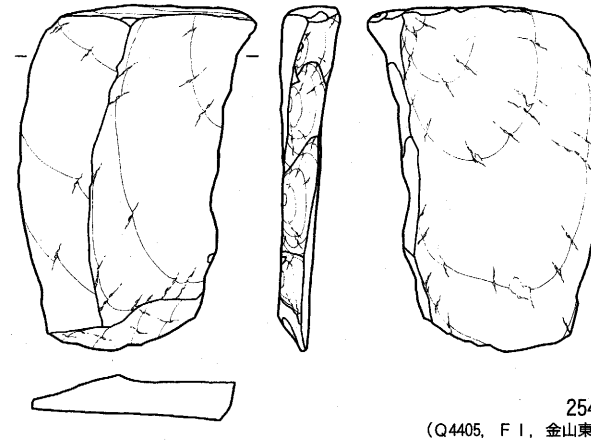
252
[296→] (Q1013, Cr, 接6, 法印谷)



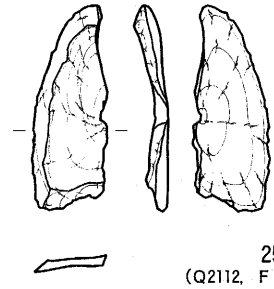
Q0321

Q0392

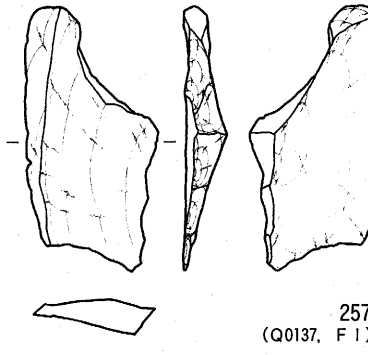
253
(Q0321+Q0392, FI, 接39)



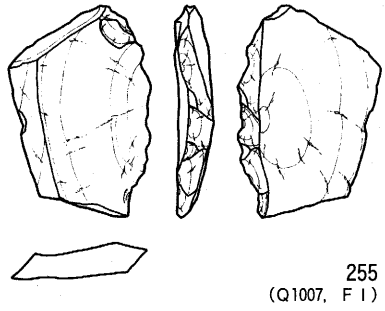
254
(Q4405, FI, 金山東)



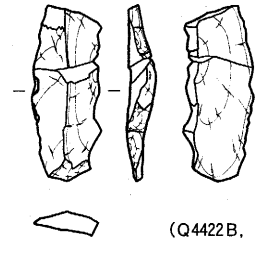
256
(Q2112, FI)



257
(Q0137, FI)



255
(Q1007, FI)



258
(Q4422B, FI)

0 5cm

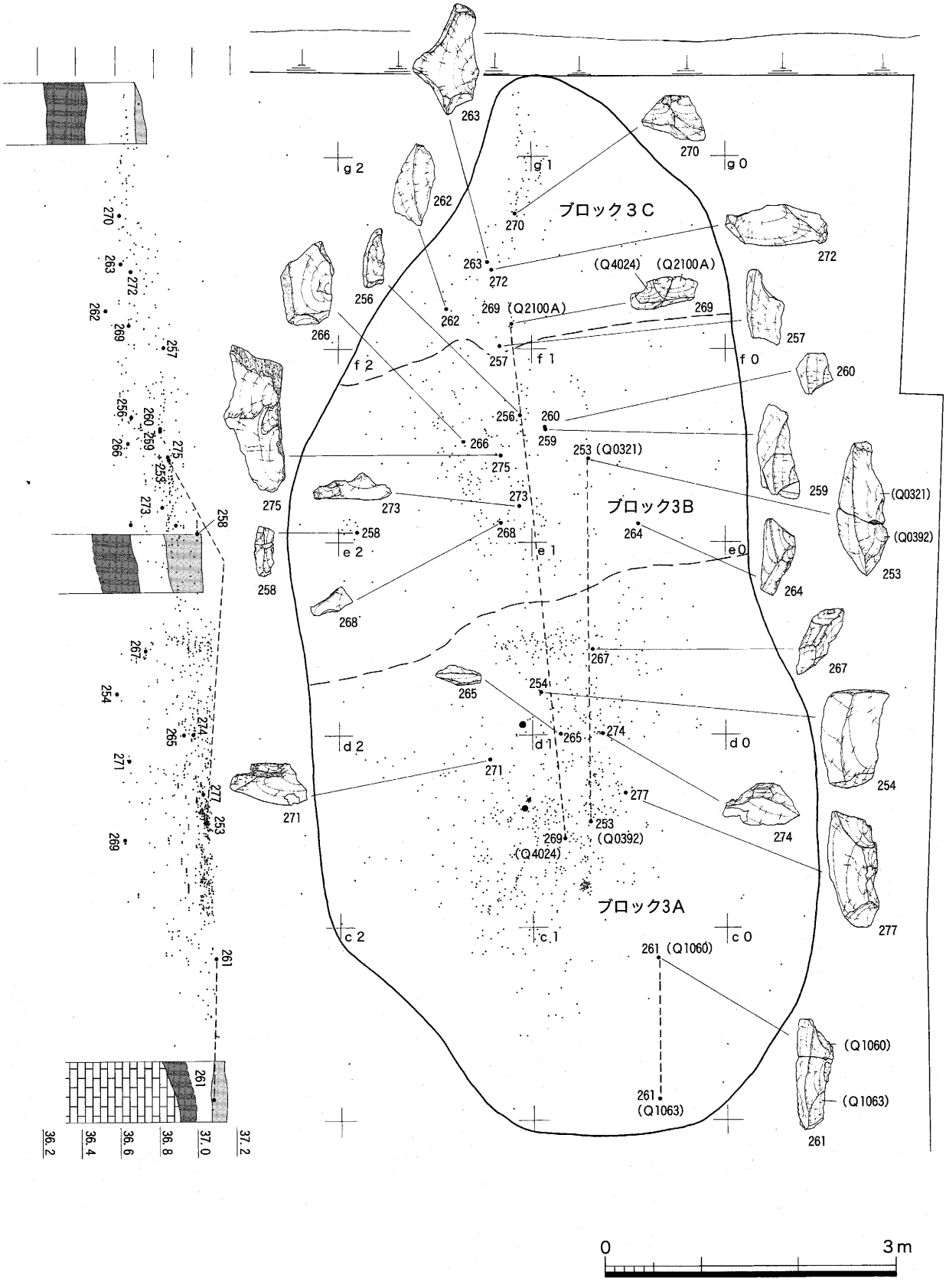
第82図　3a区エリア3　出土石器実測図13　Cr・FI (S=2/3)

番号	実	分	図	取上番号	長×幅×厚(mm)	重量(g)	遺存状態	石材	打面調整	面転移	ブロック	グリッド	個体・接合	備　考
226	75	74	20	Q0125＋Q4936	99.0×44.0×14.0	52.2	完形	An-A	○	×	3C	g2	接34	半折
227	75	74	26	Q1062	85.2×36.8×11.2	29.5	完形	An-A	○	×	3A	c1	接18	白峰
228	75	74	20	Q0002	63.8×42.1×12.8	31.4	一部欠	An-A	○	×	3C	f2		
229	75	74		Q2101	38.5×30.5×9.5	8.7	半欠	An-A	○	×	3B	f2		
230	75	74		Q0400A	40.5×49.0×15.0	23.4	完形	An-A	○	×	3A	d1		側縁に敲打痕あり
231	75	151		Q1185	39.0×35.2×20.8	17.9	半欠	An-A	○	×	2·3Nout	h3		
232	75	74		Q3371	76.5×48.0×11.0	33.0	完形	An-C	◎	×	3A	d2		微細剥離痕あり
233	76	74		Q0147＋Q1091	115.5×44.5×23.0	68.1	完形	An-A	○	×	3A	d2＋c2		作業面調整剥離を行う
234	76	74	24	Q3475A＋Q3475B	78.0×50.0×20.7	58.9	一部欠	An-A	○	×	3A	d0	接2	潜在割れ剥片が接合　白峰
235	76	74		Q1088	54.0×37.5×15.0	26.9	折損	An-A	○	×	3A	d2	接8	
236	76	74		Q3290＋Q3294	70.0×61.0×13.0	44.0	完形	An-A	○	×	3A	d1	接5	白峰
237	76	151	21	Q4394	52.1×52.0×22.0	57.5	欠損	An-A	○	○	2·3Sout	c2		城山
238	76	74		Q2111	45.5×20.0×8.0	7.1	完形	An-A	◎	×	3B	f2		
239	77	86		Q3282＋Q4404B	115.5×62.5×21.5	116.3	完形	An-A	○	×	3A	e1		剥片剥離時に分割　白峰
240	77	74	20	Q3231A＋Q3360	65.5×71.0×12.5	39.6	完形	An-C	○	○	3A＋3B	f2＋d1	接36	
241	77	74	24	Q0395A	114.8×44.5×30.0	116.4	完形	An-C	○	○	3A	d1		
242	78	74	23	Q1033	152.0×47.5×35.0	168.2	完形	An-A	×	○	3B	f2	接4	白峰
243	78	74	21	Q2127	98.5×39.0×20.0	67.8	完形	An-A	○	○	3B	f2	接7	白峰
244	78	74	21	Q0805	112.0×40.5×18.5	51.8	完形	An-A	×	○	3A	e1		
245	79	74	21	Q0488	71.2×41.3×28.0	83.8	折損	An-A	○	×	3A	d1	個1·接3	白峰
246	79	74	26	Q4939	68.0×154.0×28.2	243.7	完形	An-A	○	○	3A	c0	接9	白峰
247	80	74	21	Q0317A＋Q3285A	133.0×59.0×22.2	97.2	一部欠	An-C	○	○	3B＋3A	d1＋f1	接37	
248	80	74	20	Q0302	45.6×32.0×11.2	15.6	半欠	An-A	×	○	3A	d1		微細剥離痕
249	80	151	21	Q0692	52.0×34.5×11.5	21.2	一部欠	An-A	×	○	2·3Sout	b3		
250	80	74	22	Q0324＋Q0325	105.8×74.0×36.4	340.8	折損	An-A	○	◎	3A	d1	接38	白峰
251	81	151	22	Q1009	112.0×117.0×32.0	366.3	完形	An-A	○	○	2·3Sout	d4		亀裂
252	82	151	22	Q1013	94.0×86.0×26.0	267.9	完形	An-A	×	○	2·3Nout	g3	接6	法印谷

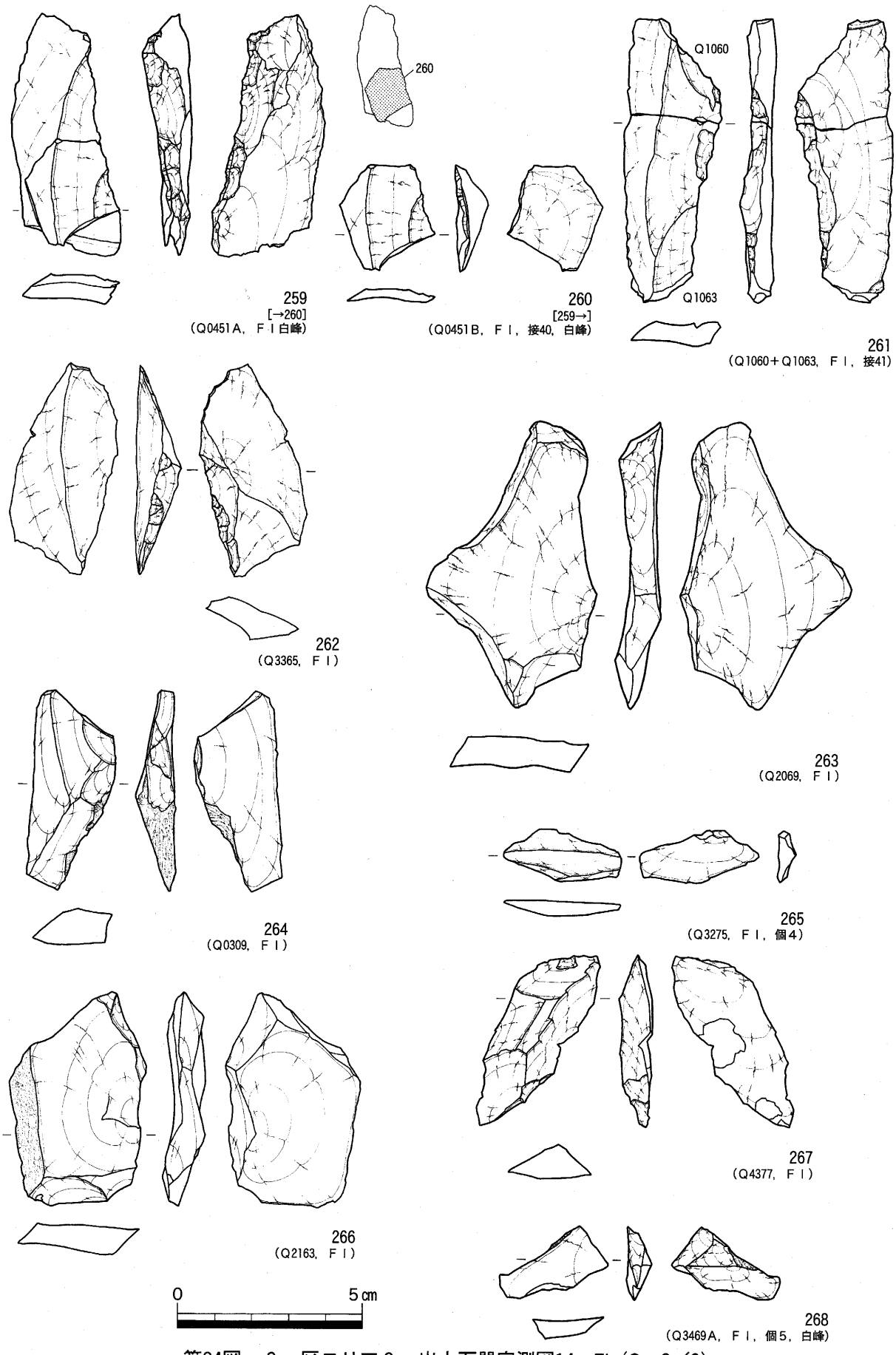
第24表　3a区エリア3　石核　属性表

剥片・砕片（第84図，第85図）

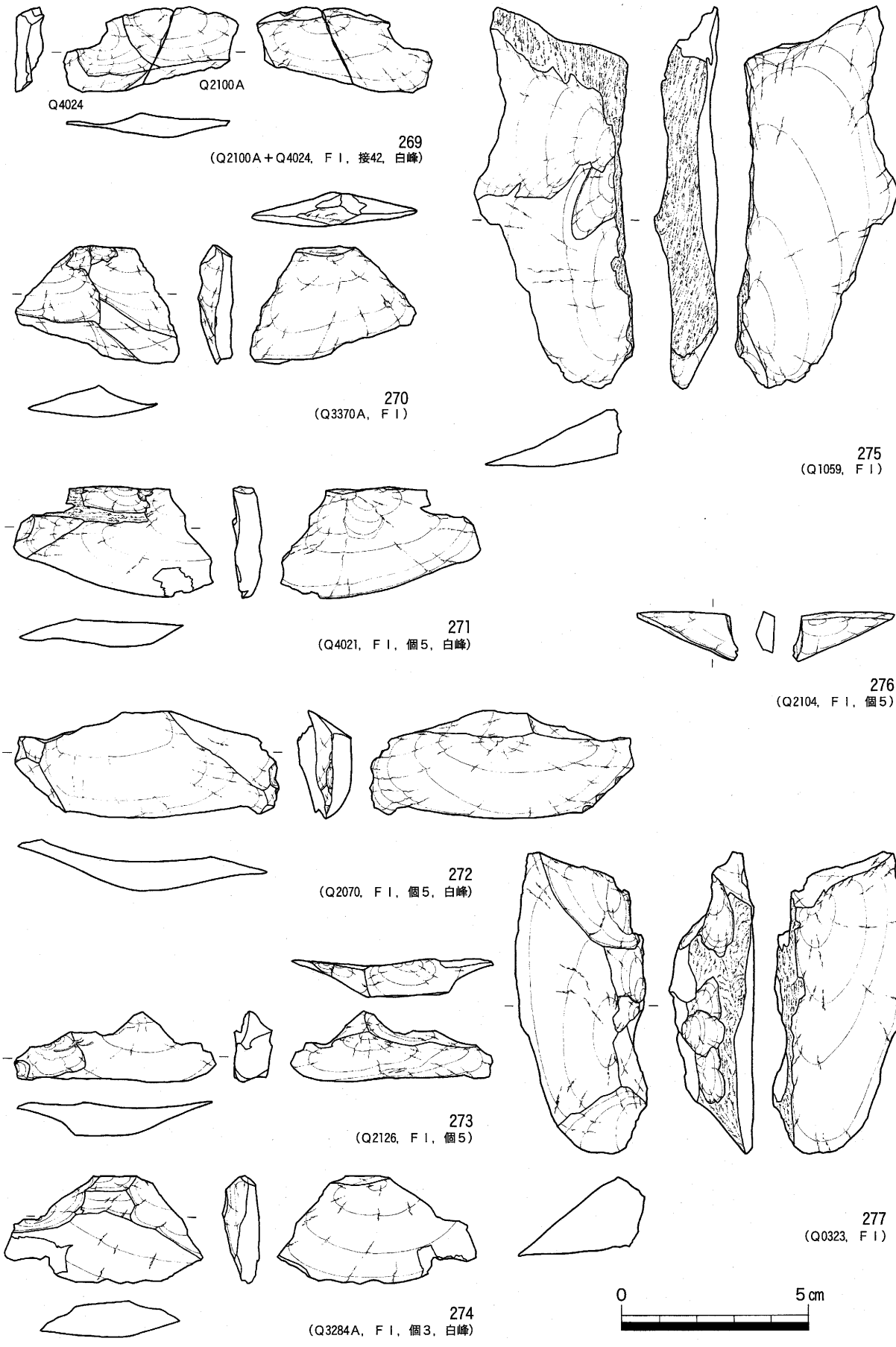
エリア3出土の剥片は，石核形状を反映して，打面部が山形に整形され背面に剥離方向を同じくするネガ面を留め，石核底面を保持するいわゆる「翼状剥片」が多い。253～263はなかでも形状良好な一群で，長さ40.0～100.0㎜で70.0㎜ほどの大きさが主体となっており，石核作業面のサイズと一致する。265～277は打面が平坦で打面幅が狭いものが多い。石核A類の打面調整剥片か，あるいはB類から剥離された剥片である。



第83図　３ａ区エリア３　器種別石器分布図４　Fl（S＝1／60　垂直分布S＝1／30）



第84図　3a区エリア3　出土石器実測図14　FI（S＝2／3）



第85図　3a区エリア3　出土石器実測図15　FⅠ（S＝2／3）

（5）３ａ区エリア３接合資料

３ａ区エリア３では合計43件の接合資料がある。構成剥片点数は121点。全出土石器数である1,102点（外縁部含む）を母数とした接合率は11％，重量で算出すると，全体の約54％を接合個体が占める。つまり大形の石片に接合例が多い。内訳を示すと第25表のとおりである。接合種別は剥離面における接合（Ⅰ種接合）を含むものが30点，折面における接合（Ⅱ種接合）が13点である。

各ブロックにおける接合率をみると，第20表にみられるようにブロック３Ｃが17.1％と最も高く，ブロック３Ｂの11.0％，ブロック３Ａの10.2％と続く。ブロック間の接合状況は顕著で，先述のように南から北へ一定量流出したものを含むものと思われる。以下，各資料毎に剥片剥離の流れを概説する。

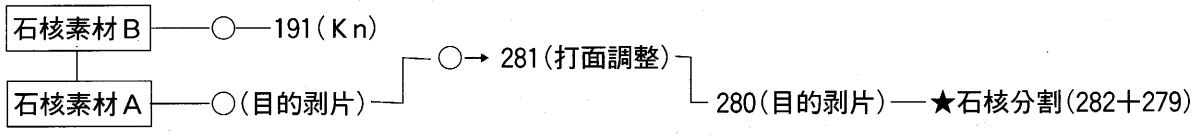
番号	挿図番号	写真	剥離概要（遺物掲載番号）（器種）	石材	石核分類	種別	出土位置	構成数
1	第87図	23	Q2154（kn）(191) →Q2090 (281) →Q4404A (280) →Q3282＋Q4404B (Cr) (239)	An-A	A	Ⅰ	3A・3B・3C	5
2	第88図	24	Q3475B (→) Q3475A (Cr) (234) →Q1018 (284)	An-A	A	Ⅰ	3A・3C	3
3	第88図	23	Q3373A (287) →Q3231B (286) →Q0488 (Cr) (245)	An-A	B	Ⅰ	3A	3
4	第88図	23	Q0246 (289) →Q1033 (Cr) (242)	An-A	B	Ⅰ	3B	2
5	第90図・第91図	24	[Q0296 (293) ＋ [Q0454 (295) →Q3290＋Q3294 (Cr) (236)]] →Q0308 (291)	An-A	A・F	Ⅰ	3A・3B	5
6	第91図	22	Q4424 (297) →Q1013 (Cr) (252)	An-A	F	Ⅰ	2・3Nout	2
7	第93図～第95図	25	[Q0777＋Q0768 (305) →Q1046 (306) →Q2127 (Cr) (243)] ＋ [Q3381＋Q3252 (Kn) (189)] →Q1181 (300) →Q3328A (301) →Q4737 (302)	An-A		Ⅰ	3A・3B・3C	9
8	第95図	23	Q4026 (308) →Q0047 (309) →Q1088 (Cr) (235)	An-A	A	Ⅰ	3A・3B	3
9	第97図	26	Q1062(Cr)(227)→[Q1061(312)＋Q4939(311)](Cr)(246)	An-A	B	Ⅰ	3A	3
10	第98図	24	Q0702 (315) →Q3287A (314)	An-A		Ⅰ	3A・3B	2
11	第99図	26	Q0778＋Q4423 (317) →Q0122＋Q2073 (318)	An-A		Ⅰ	3A・3B・3C	4
12	第99図		Q2080 (320) →Q2125 (321)	An-A		Ⅰ	3B・3C	2
13	第101図・第102図	26	Q0775 (326) →Q2175 (325) →Q0347 (323) →Q0823A (327) →Q0274 (324) →Q0340 (328) →Q1021 (329)	An-A		Ⅰ	3A・3B・3C	7
14	第102図		Q3298 (331) →Q0771 (332) →Q3243A (333) →Q0298 (334)	An-A		Ⅰ	3A	4
15	第103図		Q1027 (336) →Q0838 (337)	An-A		Ⅰ	3A・3B	2
16	第103図	27	Q0320 (340) →Q1179 (341) →Q3321A (339)	An-A		Ⅰ	3A・3B・3C	3
17	第104図	27	Q0403 (343) →Q0886＋Q1017 (Kn) (202) →Q1089 (344)	An-A		Ⅰ	3A・3C	4
18	第104図	26	Q1110(RF)(346)→Q2063＋Q3289(Kn)(197)→Q0301(347)	An-A		Ⅰ	3A・3C	4
19	第106図	27	[Q2083 (350) →Q0842 (349) →Q0250 (Kn) (177)] →Q1132＋Q2087 (Kn) (168) →Q4411 (Kn) (169)	An-A		Ⅰ	3A・3B・3C	6
20	第106図	26	Q2140 (352) →Q3331 (353)	An-C		Ⅰ	3A・3B	2
21	第107図		Q1166 (UF) (356) →Q1058 (UF) (355)	An-A		Ⅰ	3A・3B	2
22	第107図		Q0807 (358) →Q3330A (359)	An-A		Ⅰ	3A	2
23	第108図		Q0112B (362) (→) Q0779 (361)	An-A		Ⅱ	3A・3C	2
24	第108図		Q0784 (364) →Q3328B (365)	An-A		Ⅰ	3A	2
25	第108図		Q0804 (RF) (208) →Q1014 (367)	An-A		Ⅰ	3A・3C	2
26	第109図		Q3250 (370) →Q3253 (369)	An-A		Ⅰ	3A	2
27	第109図		Q3237 (372) →Q0467 (373)	An-A		Ⅰ	3A	2
28	第109図		Q3230 (376) →Q2117 (375)	An-A		Ⅰ	3A・3B	2
29	第110図		Q3481 (378) →Q3260 (379)	An-A		Ⅰ	3A	2
30	第110図		Q3352B (382) →Q4380 (381)	An-A		Ⅰ	3A・3B	2
31	第68図	19	Q1093＋Q3263 (Kn) (162)	An-A		Ⅱ	3A	2
32	第70図		Q1103＋Q3336 (Kn) (192)	An-A		Ⅱ	3A	2
33	第70図	19	Q0316＋Q1023 (Kn) (203)	An-A		Ⅱ	3B・3C	2
34	第75図	20	Q0125＋Q4936 (Cr) (226)	An-A	(A)	Ⅱ	3C	2
35	第76図		Q0147＋Q1091 (Cr) (233)	An-A	(A)	Ⅱ	3A	2
36	第77図	20	Q3231A＋Q3360 (Cr) (240)	An-C	(B)	Ⅱ	3A・3B	2
37	第80図	21	Q0317A＋Q3285 (Cr) (247)	An-C	(B)	Ⅱ	3A・3B	2
38	第80図	22	Q0324＋Q0325 (Cr) (250)	An-A	(F)	Ⅱ	3A	2
39	第82図	28	Q0321＋Q0392 (253)	An-A		Ⅱ	3A・3B	2
40	第84図	28	Q0451B (→) Q0451A (259・260)	An-A		(Ⅰ)	3B	2
41	第84図		Q1060＋Q1063 (261)	An-A		Ⅱ	3A	2
42	第85図		Q2100A＋Q4024 (269)	An-C		Ⅱ	3A・3C	2
43	未報告		Q3363＋Q4422	An-A		Ⅱ	3B	2

第25表　３ａ区エリア３　接合資料総括表

接合資料１（第86図，第87図）

接合状態で長さ62.5㎜，幅115.5㎜，総重量は150.0ｇである。合計５片で構成され，内訳はナイフ形石器１点（191），目的剥片１点（280），打面調整剥片１点（281），それに石核が不規則に分割した２片がある（279・282）。このうち，191のナイフ形石器は当該石核（石核素材Ａ）石核の素材面に接合する。当該石核に先行して剥離した別素材（石核素材Ｂ）に帰属する。自然面を打面に設定し，背面が自然面に覆われた不定形剥片の側縁を刃部に設定するナイフ形石器である。一方，ナイフ形石器を除く一群は，石理に沿って剥離された裾広がりの大形剥片の打面部を作業面に設定する。少なくとも１枚の目的剥片を剥ぎ取った後，281を含む細かな打面調整を施して，280の目的剥片を剥取する。280は側面に折れが生じて途中で剥離が停止する。

280剥取後にさらに同じ打面を打撃した打撃痕が282の打面側に残るが，その際，以前の潜在割れの影響を受けて279と282が分割し，剥片剥離が停止する。作業が順調に進めば，石核幅から考えて，50.0～70.0㎜長の目的剥片が得られたものと考えられる。



接合資料２（第86図，第88図）

長さ94.5㎜，幅50.7㎜，厚さ27.0㎜のＡ類石核を含む接合資料である。総重量70.8ｇ。側面に自然面を留め，石理と30度ほど角度をもって剥離された板状剥片を素材とする。素材の側面を作業面，ネガ面を底面に設定する。打面調整を施しながら長さ46.0㎜以上の目的剥片を剥取した痕跡をとどめる。

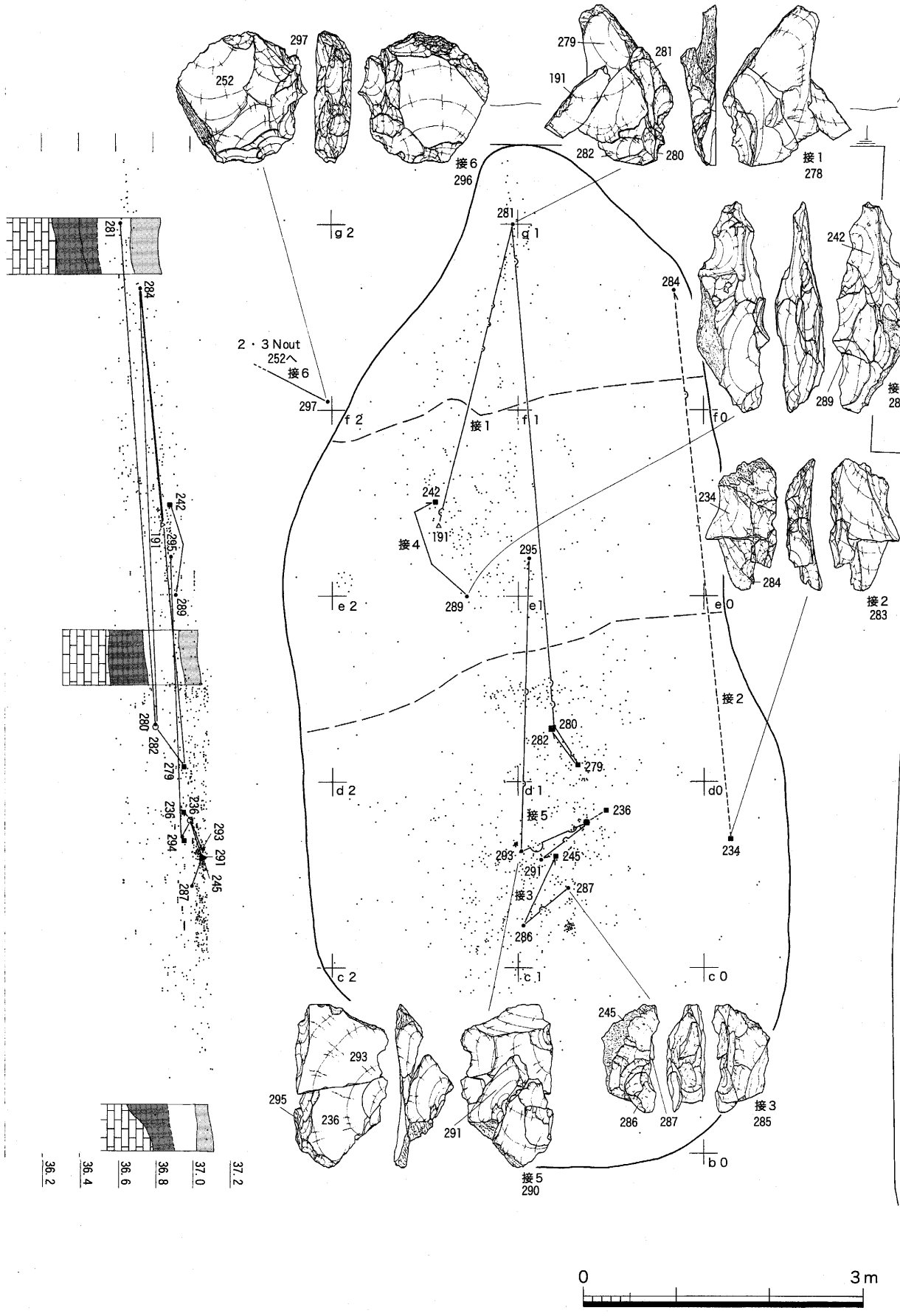
石核Ａ類の234は目的剥片剥離の打撃時に半折する。その際に生成された目的剥片Ｑ3475Ｂは石核234に欠損面で接合する（接合面の半分は剥離面，残りの半分は欠損面である）潜在割れ剥片である。石核欠損後も一方の石核では剥片剥離が続けられる。剥片284はその一方の石核に所属する剥片である。素材の折損面で石核234と接合する。

なお，284の打面には大小の剥離痕がみられる。折損後に大きな石核調整を施しつつ284を剥取したものと思われるが，すでに残核が小さくなっており，連続的に横長剥片を剥取する目的で284を剥取したか，やや疑わしい。

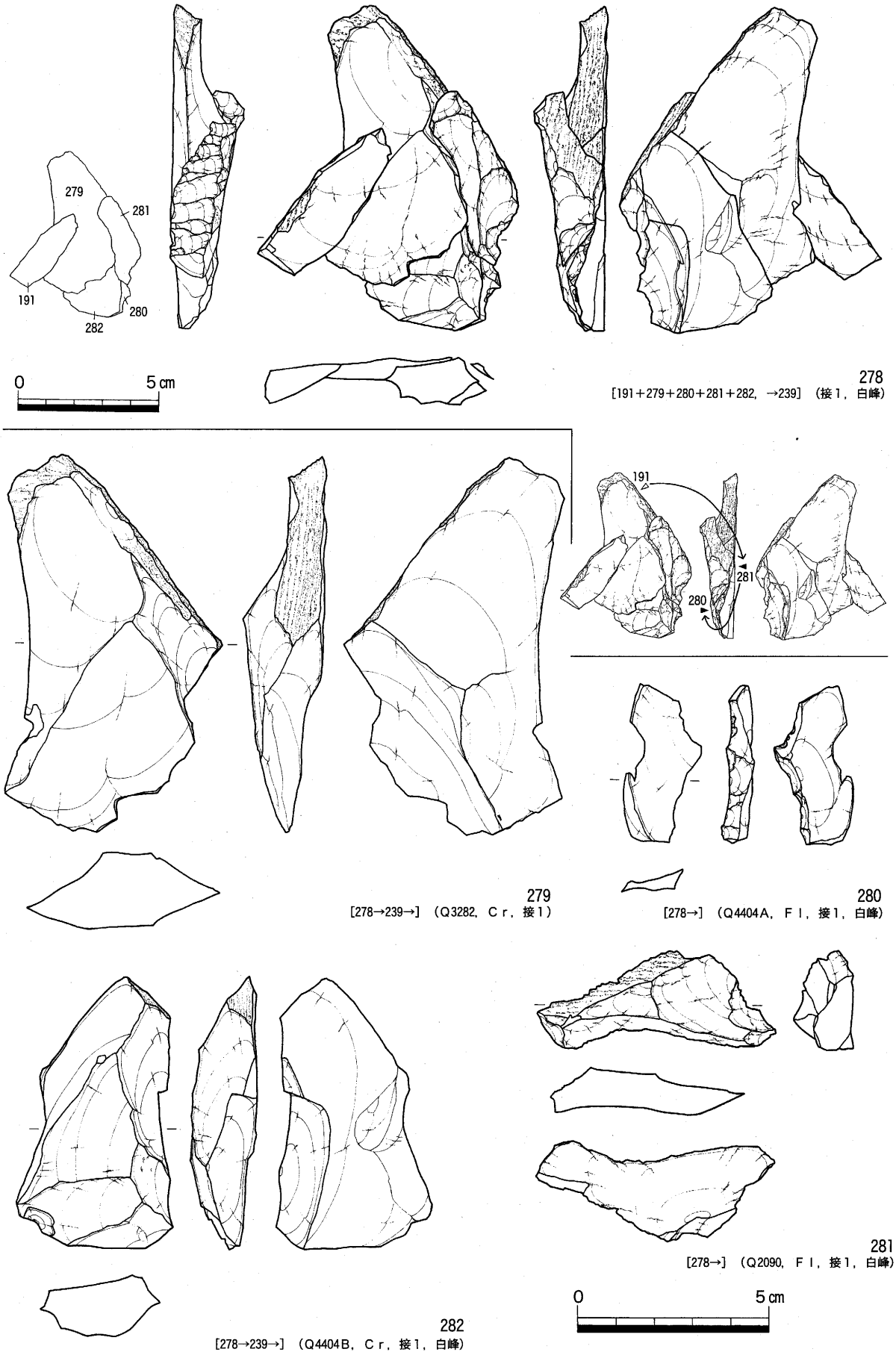
接合資料３（第86図，第88図）

長さ78.5㎜，幅41.2㎜，厚さ27.8㎜の石核Ａ類を含む接合資料である。総重量85.1ｇ。剥片剥離後半の資料である。打面調整剥片１枚（286）と，折損した横長剥片の一部（287）が石核（245）に接合する。石核245は後尾に自然面をとどめ，表裏面に平坦面を留める。したがって板状の石核素材をそのまま石核として用いたものと考えられる。ただし，石核の底面側には作業面と反対側から打撃された剥離痕が２～３面認められる。このことから，求心状に剥片剥離を進める石核Ｆ類が途中でＡ類に転化した可能性もある。

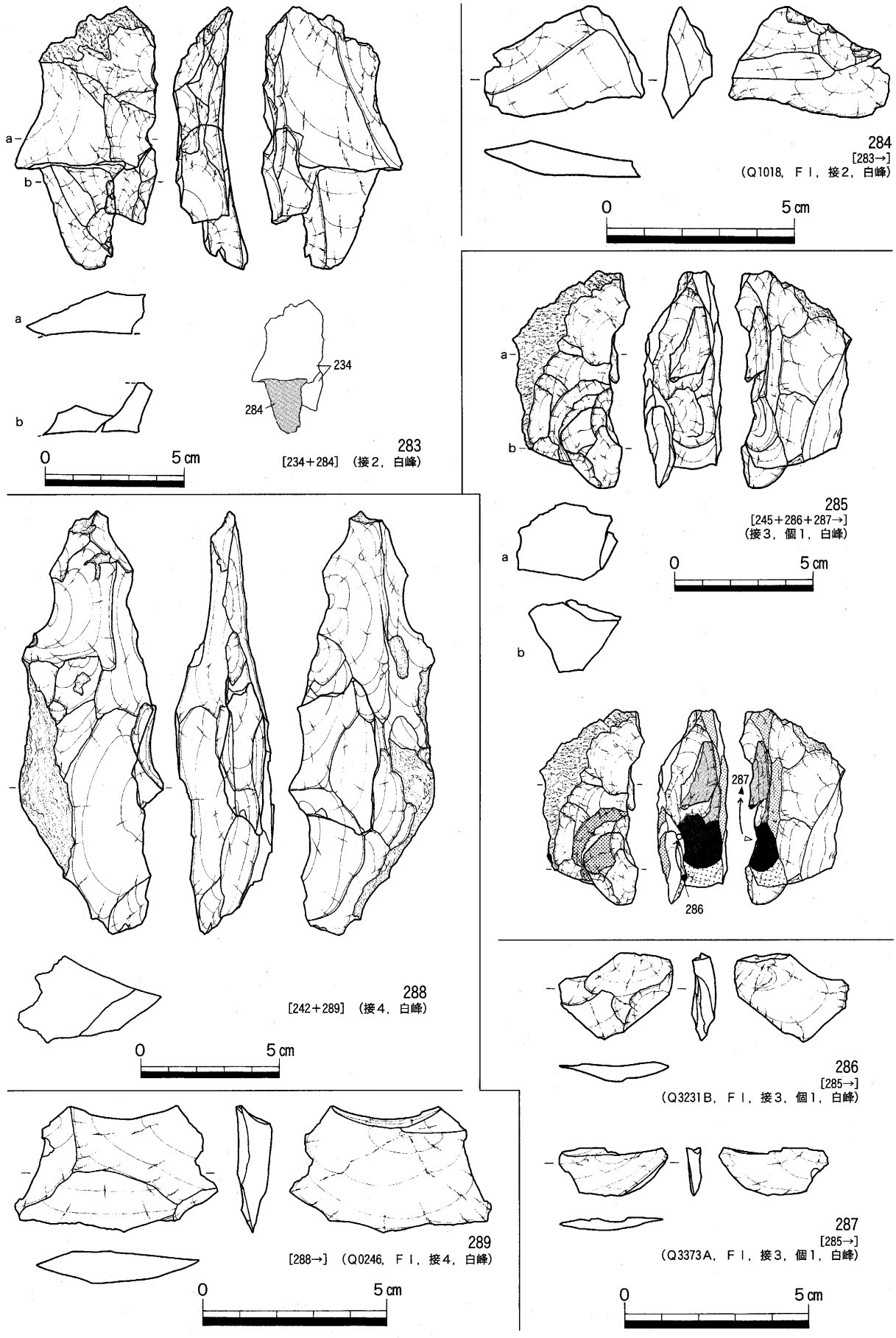
石材は灰色と白色の細縞状の石理が顕著にみられる普通サヌカイト（Ａn-Ａ）で，細縞の間隔から後述の接合資料17と同一個体と推定できる。これらをエリア３の個体１とした。なお，当該接合資料の作業面は石理に合致する。



第86図　3 a区エリア3　接合資料分布図1　接1～6（S＝1／60　垂直分布S＝1／30）



第87図　3 a区エリア3　出土石器実測図16　接合資料1 (S=2／3, 1／2)

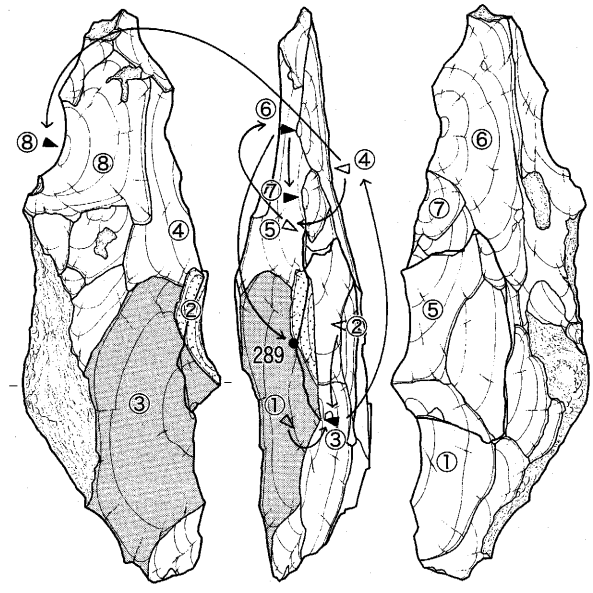


第88図　3 a 区エリア 3　出土石器実測図17　接合資料2～4（S＝2／3, 1／2）

接合資料４（第86図，第88図）

長さ152.0㎜，幅51.4㎜，厚さ35.0㎜の石核Ｂ類を含む接合資料である。総重量は181.9ｇ。側面に自然面を留めた板状剥片を素材とする。自然面を石核尾部に設定し，交互剥離により剥片剥離を進める。最終残核の242は棒状を呈する。最終作業面に幅55.0㎜，長さ34.0㎜の不定形な剥片289が接合する。289は打面が２面で構成され，その稜線付近を打撃するが，打面調整を施さないことから，剥片は横に広がらずに寸詰まりとなる。

289剥離前の剥片剥離作業を右図に示した。いずれの剥片剥離においても細かな打面調整は施した形跡がなく，元来石核幅一杯の横長剥片を得る目的は看取できない資料である。石核後尾にも若干の交互剥離を施した剥離面（⑧）を留める。

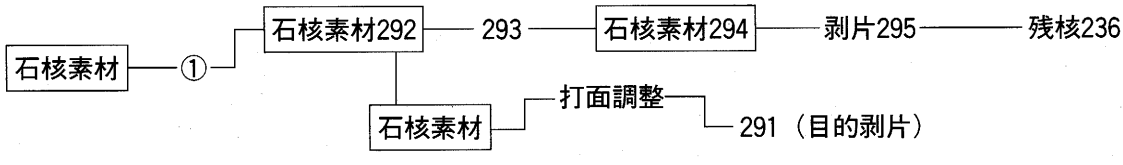


第89図　３ａ区接合資料４　打点移動模式図

接合資料５（第90図，第91図）

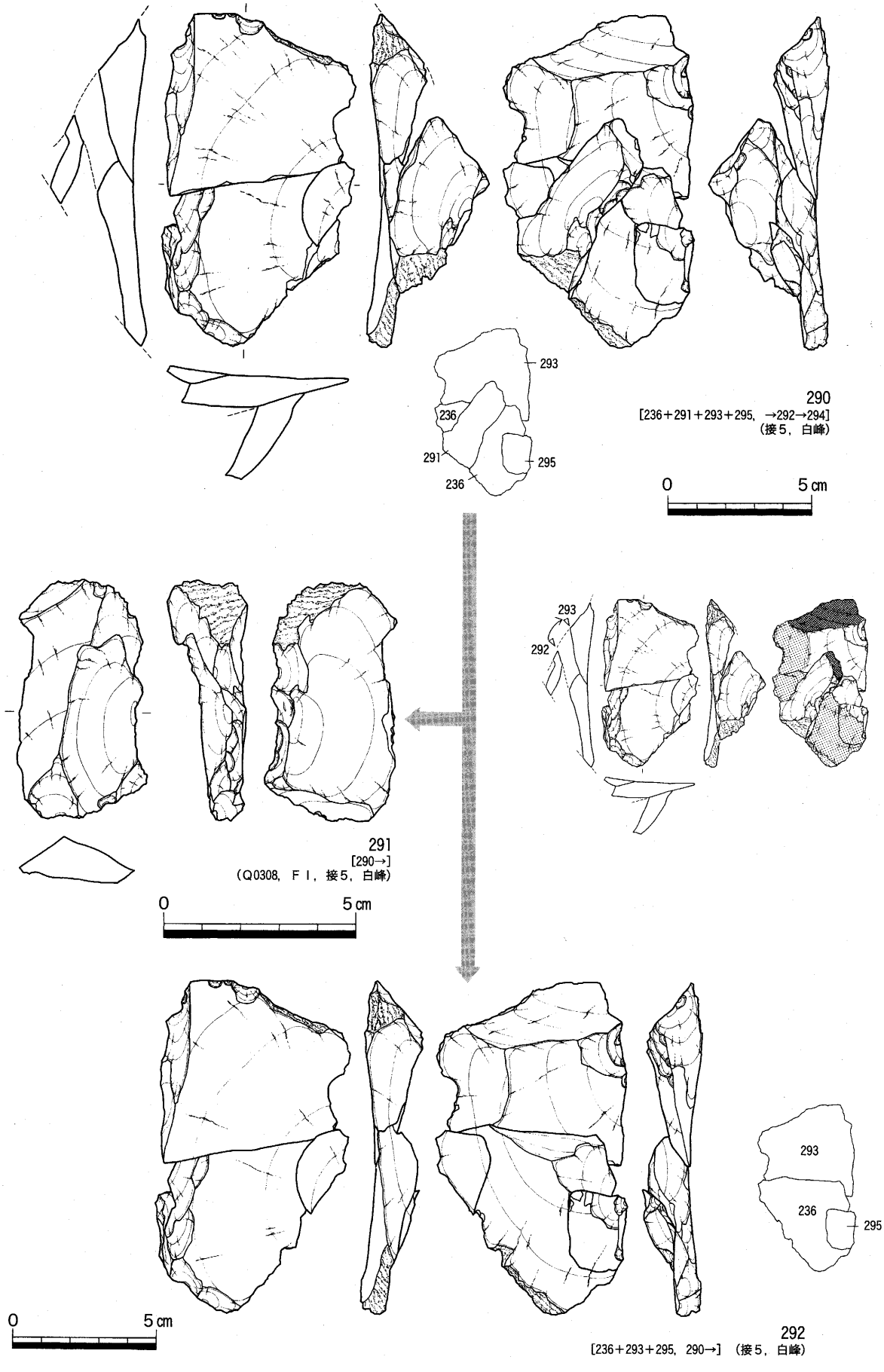
長さ116.5㎜，幅68.2㎜，厚さ41.8㎜で，剥片素材の石核Ａ類を含む接合資料である。総重量は138.5ｇをはかる。石核素材になりうる剥片293と，横長剥片の半折片295を伴う石核Ａ類236がそれぞれ素材面で接合し，素材剥片剥離作業の工程を示す。さらに，素材剥片が剥取された残核部分を石核に使用して，そこで行われた剥片剥離に伴う目的剥片291の底面と，石核Ａ類236の主要剥離面側の素材面が接合する。さらに236の末端には折損した小片が接合しており，都合５片の接合資料である。

なお，293と236の背面となる図の左面は，石理に沿ったネガティブな平坦面で，また293と剥片291の側面に同一面と目されるネガティブな剥離面（濃網）がある。したがって，厚さ40.0㎜を超える塊状の母岩から大形の石核素材を剥ぎ取った後の石核が，この一連の素材剥片剥離の素材と目される。

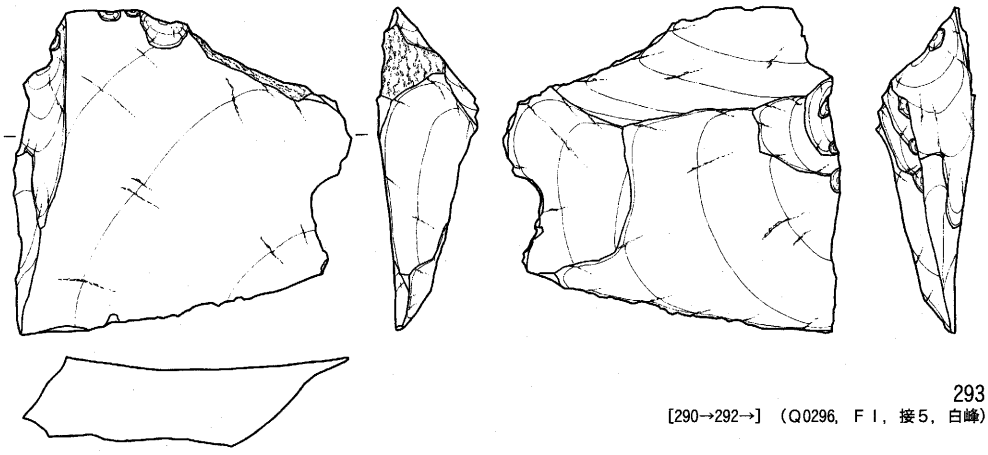


接合資料６（第86図，第91図，第151図）

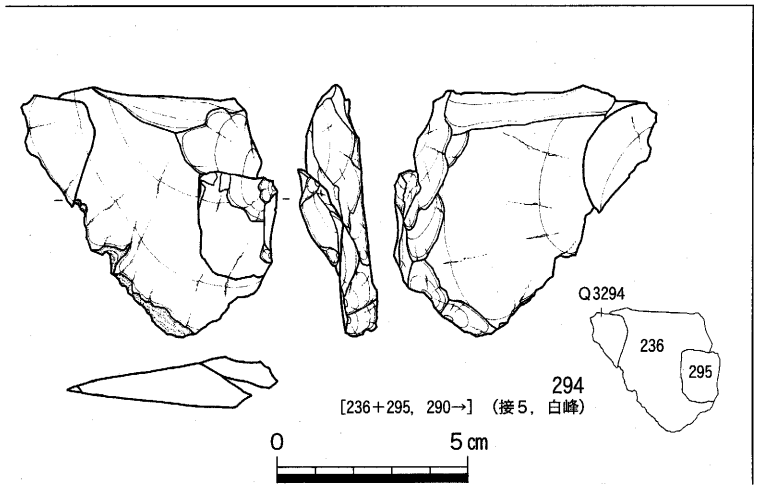
長さ95.4㎜，幅93.5㎜，厚さ26.2㎜，総重量272.1ｇの接合資料である。求心状の剥片剥離を進める石核252と剥片297の２片で構成される。出土位置は２・３Noutで，いずれもエリア３の中心的な分布域から外れる（第86図・第151図）。素材は石理に沿った板状剥片で周縁に石理を有する自然面が残る。図の右側縁を中心に作業面をずらしながら求心状に剥片剥離を進める。剥片297はネガティブな平坦面を打面に設定し，裾がやや偏りながら末尾に向かって広がる平面形をもつ。石材はＡn-Ａとしたが，分析結果は「法印谷群」である。器面の気泡とフィッシャーがやや目立つ。



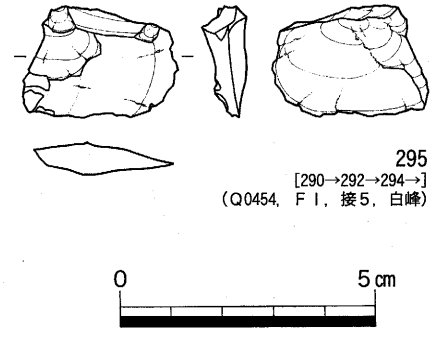
第90図　3 a 区エリア 3　出土石器実測図18　接合資料5（S＝2／3，1／2）



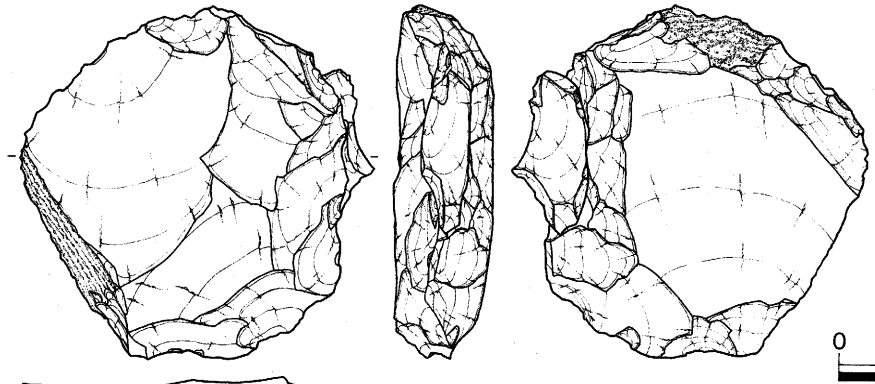
293
[290→292→] （Q0296, ＦⅠ, 接5, 白峰）



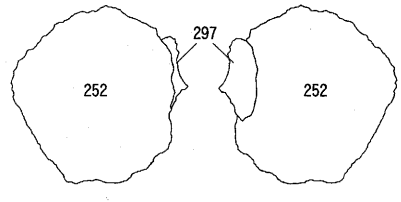
294
[236＋295, 290→] （接5, 白峰）

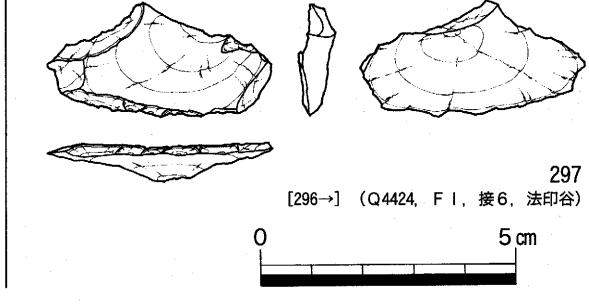


295
[290→292→294→]
（Q0454, ＦⅠ, 接5, 白峰）



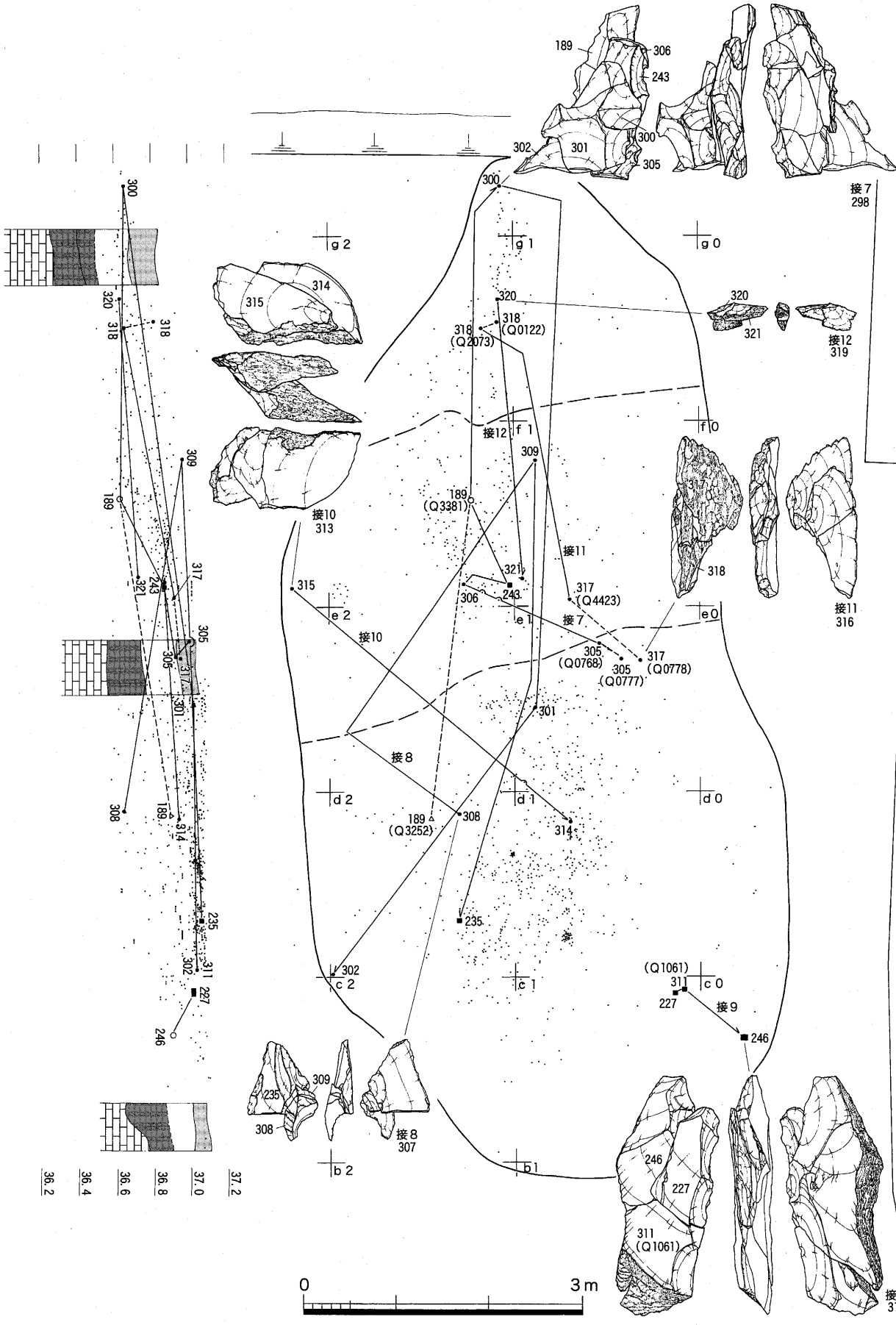
296
[252＋297→] （接6, 法印谷）



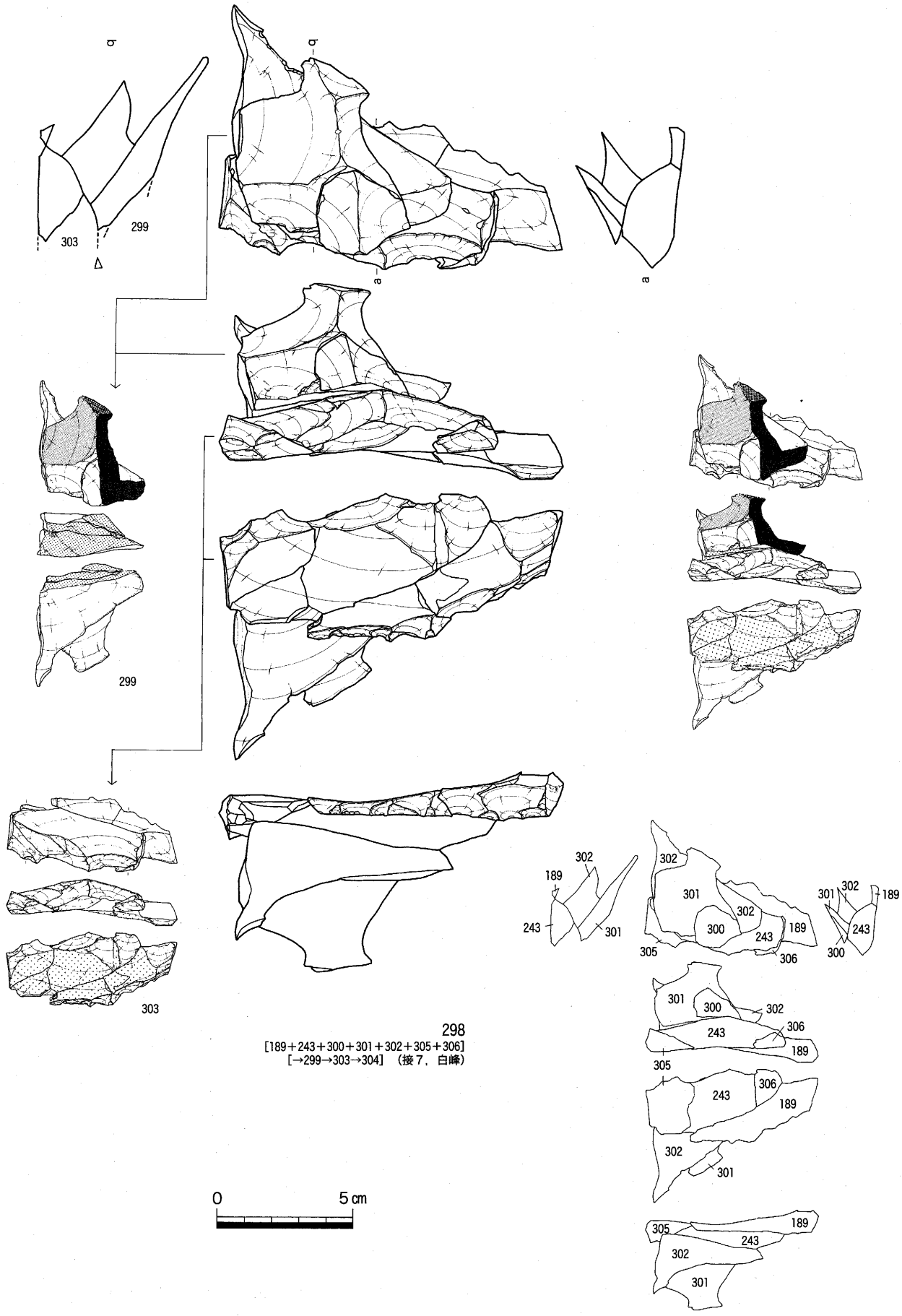


297
[296→] （Q4424, ＦⅠ, 接6, 法印谷）

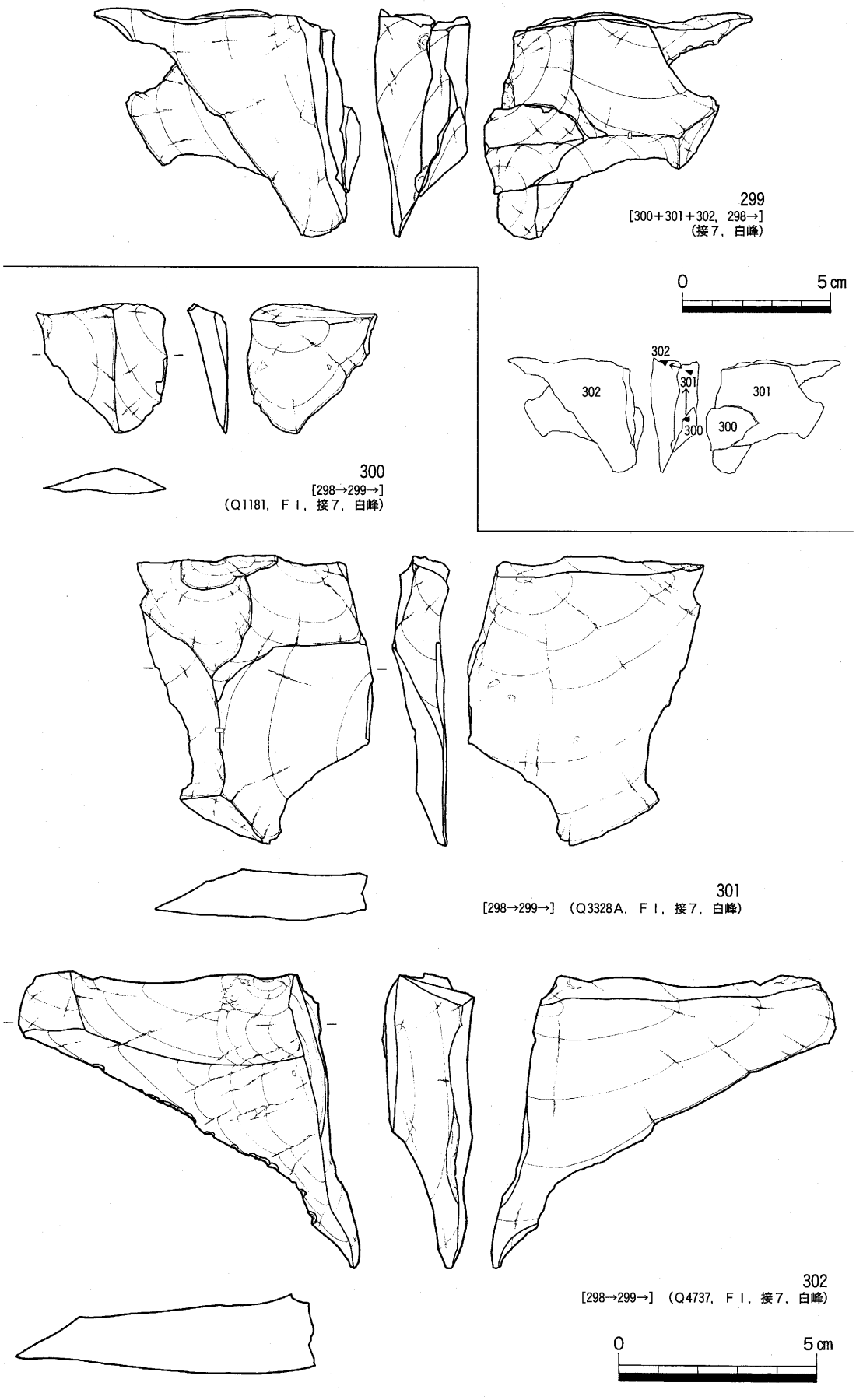
第91図　3ａ区エリア3　出土石器実測図19　接合資料5・6（S＝2／3, 1／2）



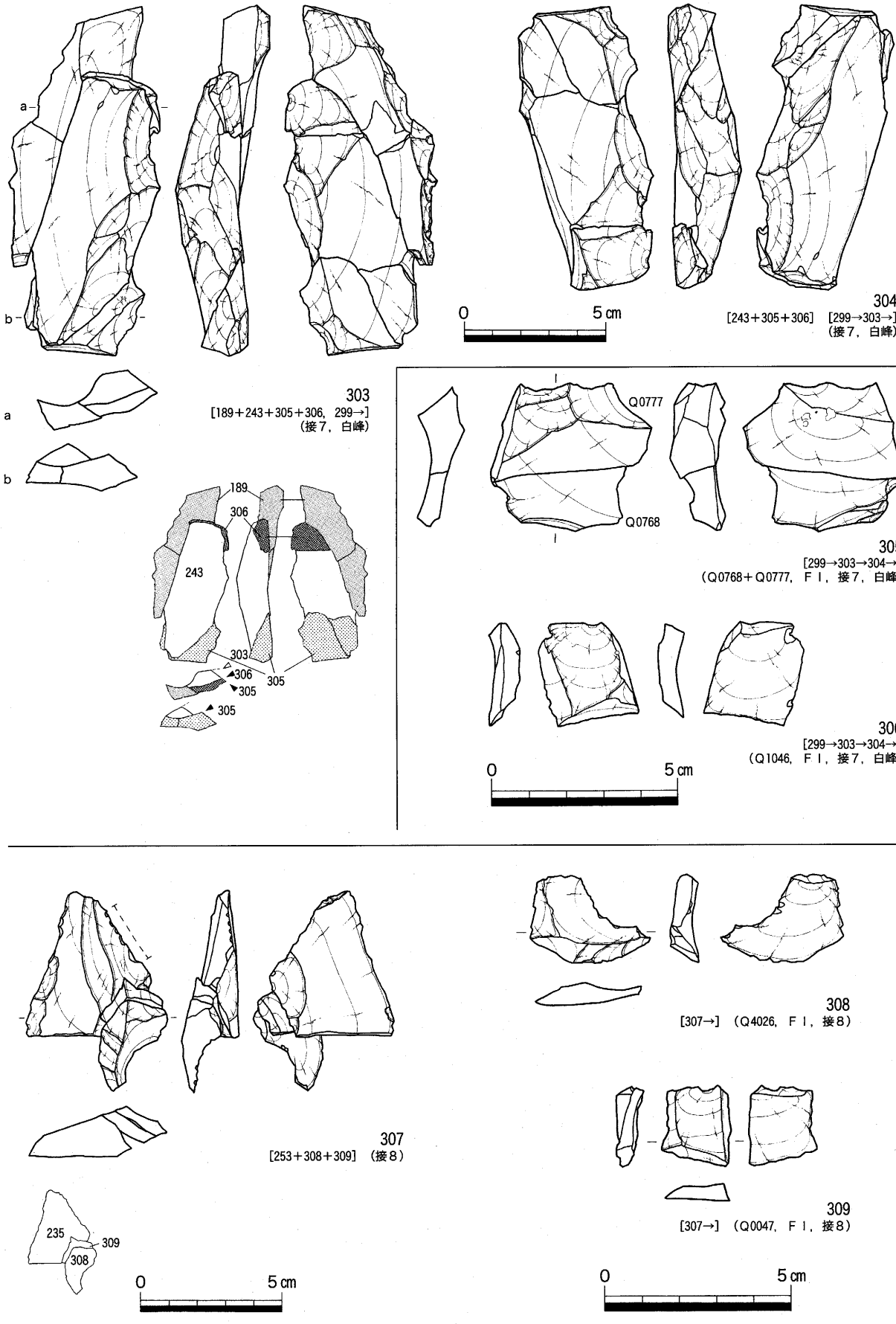
第92図　3 a区エリア3　接合資料分布図2　接7～12（S＝1／60　垂直分布S＝1／30）



第93図　3 a 区エリア 3　出土石器実測図20　接合資料7（S＝1／2）



第94図　３ａ区エリア３　出土石器実測図21　接合資料7（S＝2／3，1／2）



第95図　3 a 区エリア 3　出土石器実測図22　接合資料7・8（S＝2／3, 1／2）

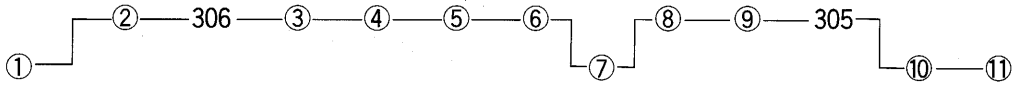
接合資料７（第92図～第95図）

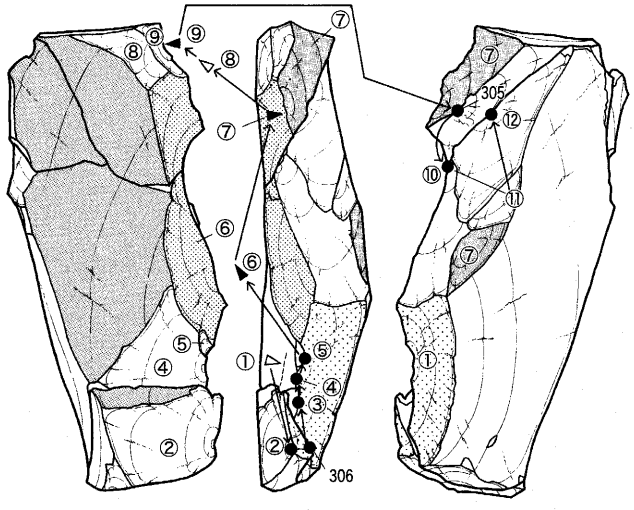
長さ125.0㎜，幅96.0㎜，厚さ72.5㎜，総重量239.1ｇの接合資料である。剥片剥離の中盤の資料である。石核素材になりうる大形の剥片を不定方向から剥取する工程（299＋303）と，剥取された石核素材がさらに石核Ｂ類として剥片剥離が進められる工程（299～302）（303～306），さらに，石核素材剥離段階の折損片にブランティングが施されナイフ形石器に仕上げられた個体（189）が接合する。都合９個体となる。石核素材獲得に伴う残核は含まれない。

全接合状態の298には片面（底面）に大きなネガ面（第93図の粗網）がみられ，母岩の一端を示す素材面と見られるが，上面側には素材面が遺存しない。現状では，50.0㎜を超える厚さを備えており，母岩の厚みはそれ以上と想定できる。また，図左側はいずれの剥片にも別個の折損面がみられる。したがって母岩はさらに横方向に広がっていたものと言える。

まず石核素材獲得段階の剥片剥離は，第93図の○濃網→○細網－接合状態303の順で行われる。○細網と303の先後関係は定かでないが，いずれにしても打面を大きく転移して強い打撃が施される。接合状態299には303剥離後のネガ面を打面として，打点を左右にずらしながら○→○→剥片300→剥片301→剥片302の順で連続的に打撃し剥片剥離を進める。301･302は石核素材として転化した形跡はないが十分にその大きさを備える。残核は検出できなかったが厚さは依然として維持しており，さらに石核素材剥離が続行した可能性が高い。

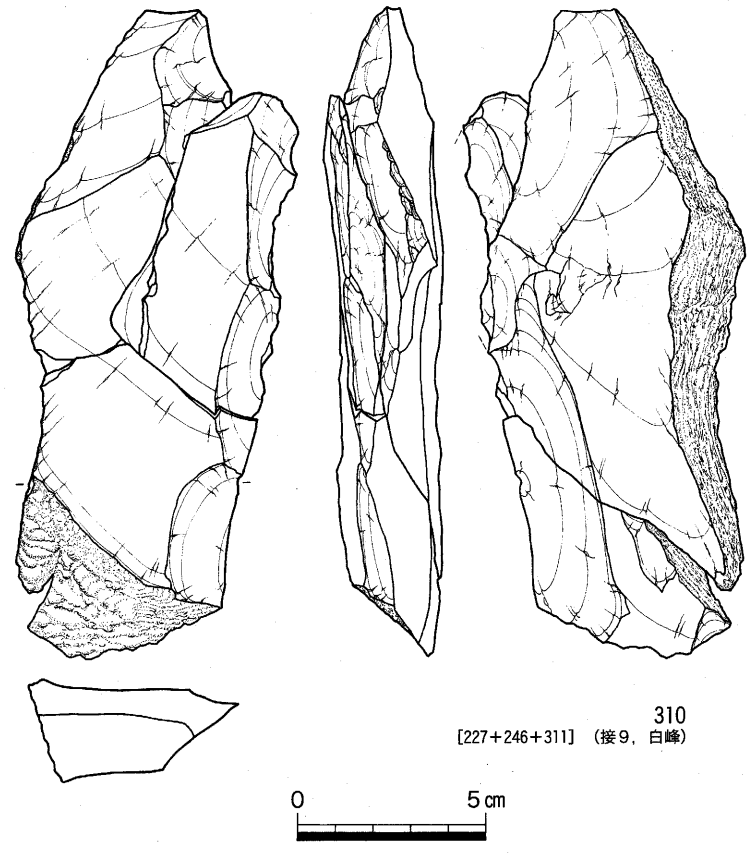
最初に剥取された接合状態303は主要剥離面の凹凸が著しく，その末端が折損して，折損片がナイフ形石器（189）に加工される。残核の石核Ｂ類の243には，2片の打面調整剥片が接合する。剥片剥離の流れは次のとおりである。作業面を固定せず交互に打面と作業面を入れ替えながら剥片剥離を行う。目的剥片と目される剥離面は，①・⑥・⑦・⑩・⑪で，それ以外は部分的な打面調整である。石核幅一杯の作業面を設定する意図はみられない。

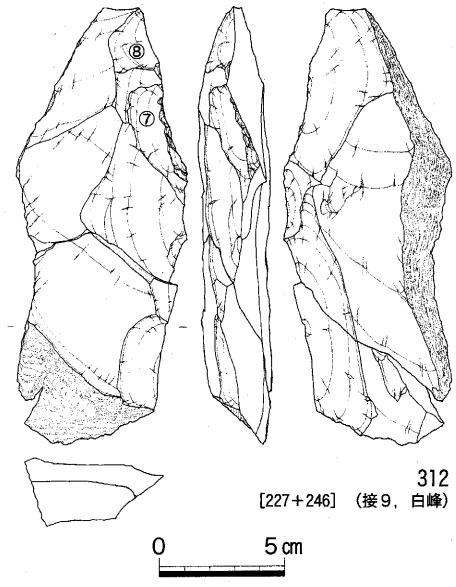


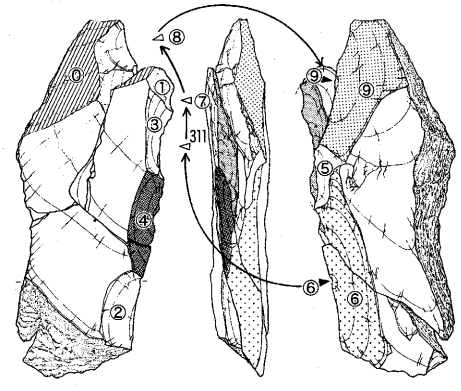


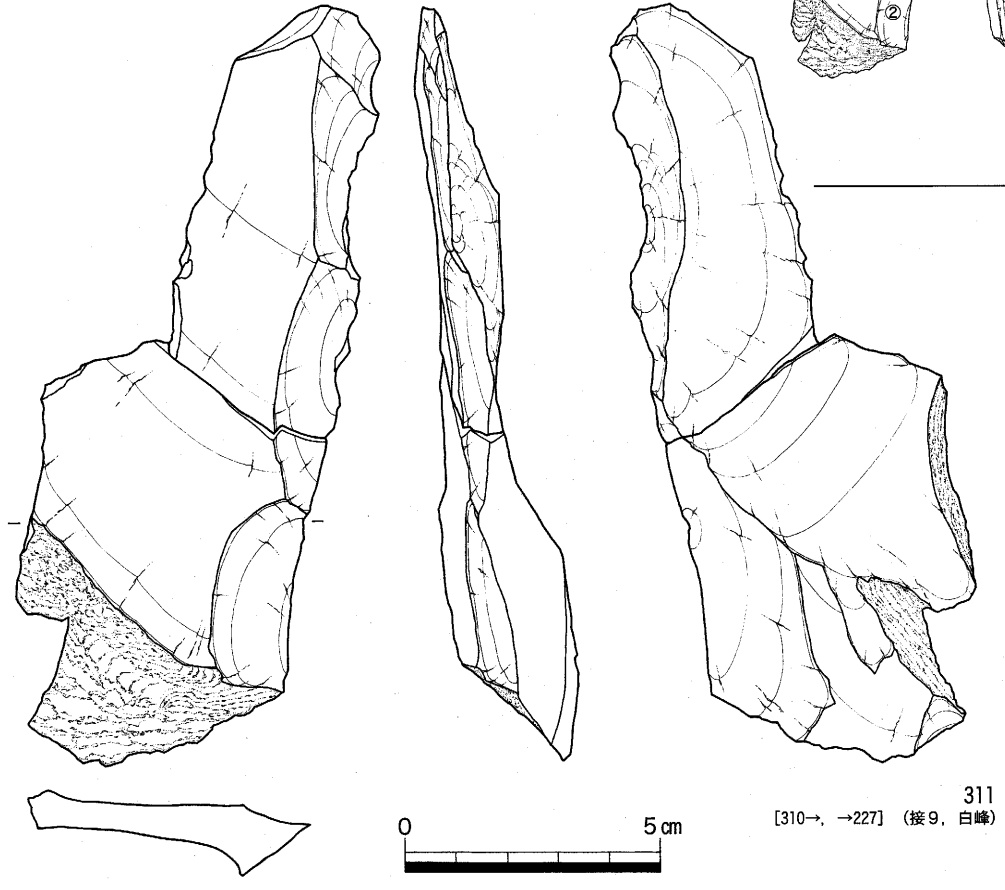
第96図　３ａ区接合資料７　打点移動模式図

以上の分布は，３Ｂの南を中心分布するが，ナイフ形石器の半折片，剥片剥離後半の不定形剥片２点が３Ａに離れ，さらに301から剥取された300が３Ｃに大きく離れる。

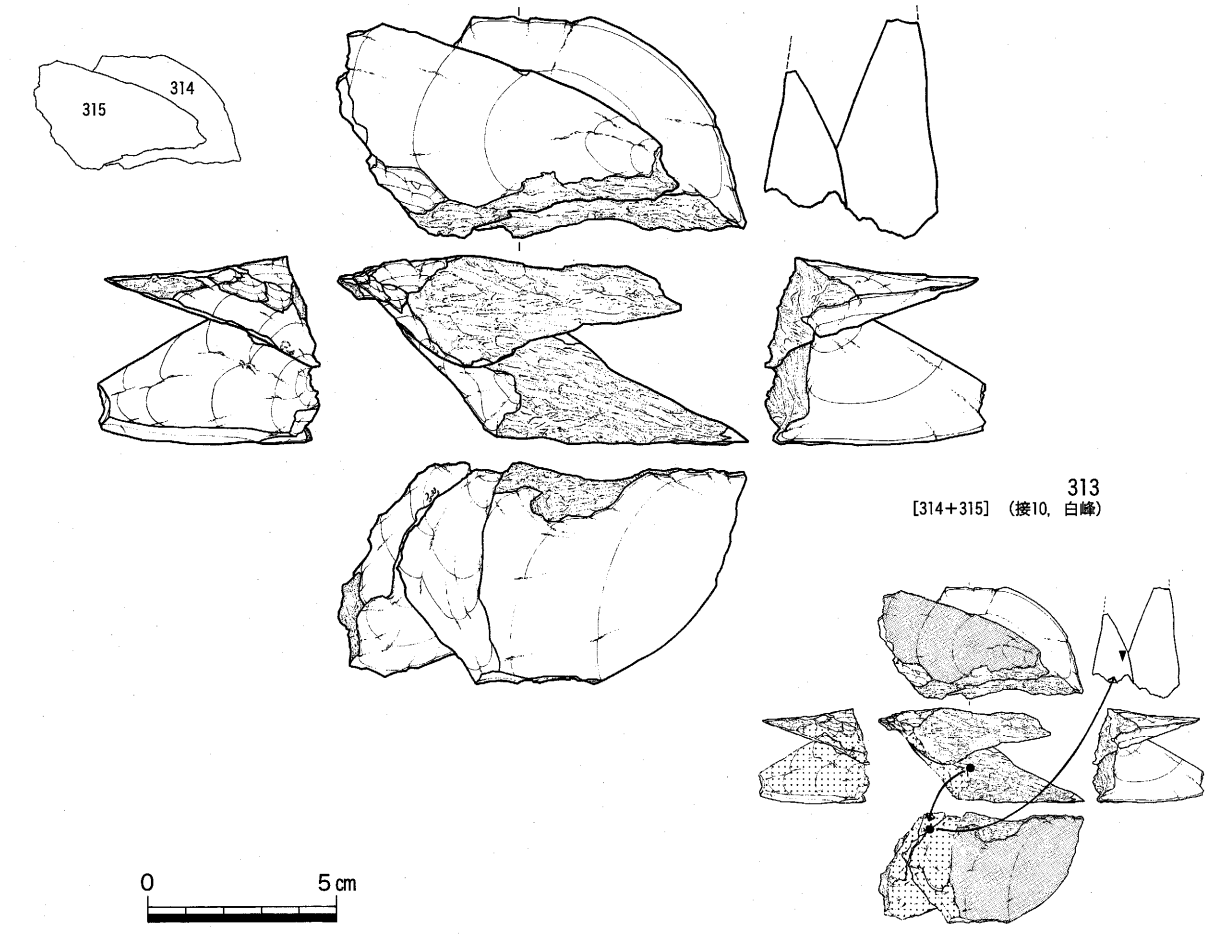


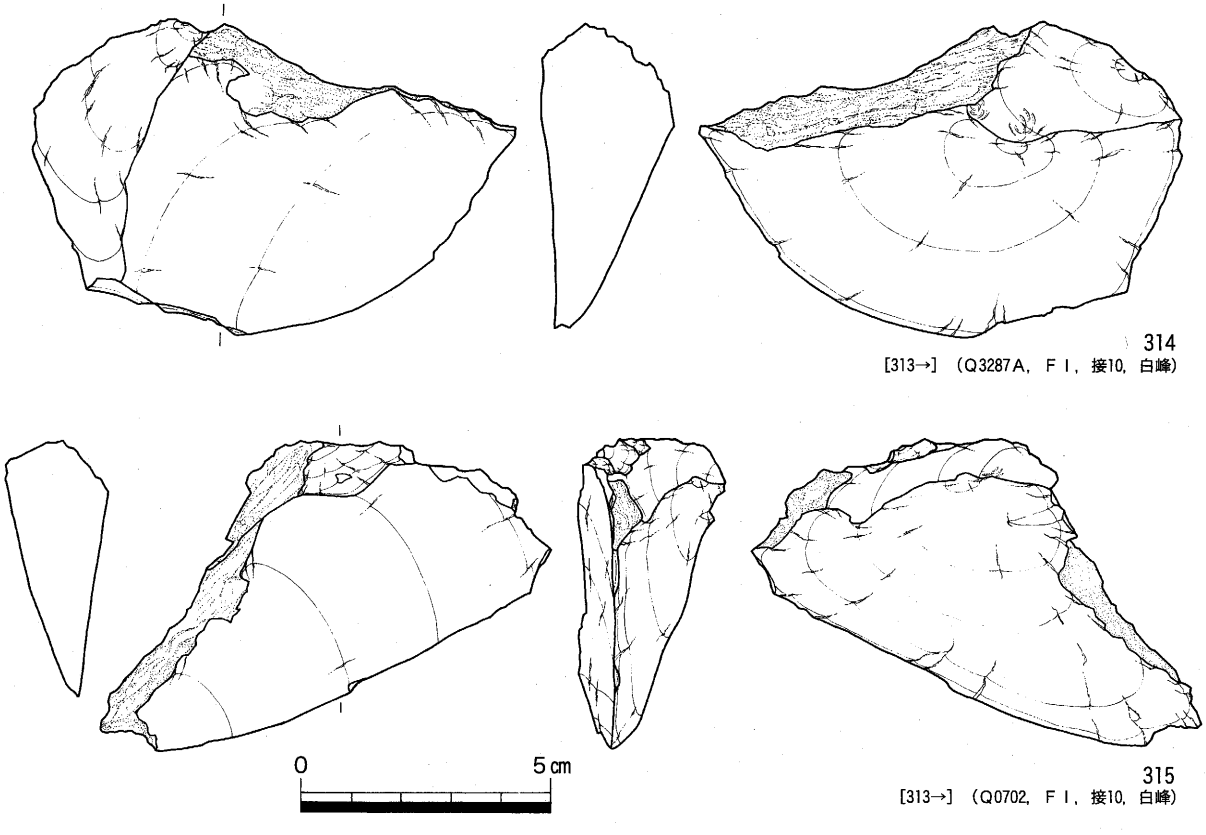






第97図　3 a 区エリア 3　出土石器実測図23　接合資料9（S＝2／3, 1／2）





第98図　3 a 区エリア 3　出土石器実測図24　接合資料10（S＝2／3, 1／2）

接合資料８（第95図）

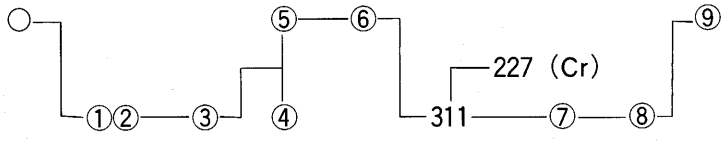
長さ74.0㎜，幅48.5㎜，厚さ19.7㎜，総重量32.3ｇの接合資料である。剥片素材の石核Ａ類（235）に打面調整剥片２片が接合する。剥片剥離は素材剥片の打面側から進み，幅40.0㎜ほどの作業面が形成される。打面調整剥片308･309の打面および石核235の作業面の図下端に先行する目的剥片のネガティブバルブがみられる。308は剥片の幅に比べて打面の幅が狭く，また末端が一方に捻れた不定形な剥片である。打点を左右にずらしつつ剥離している。一方で次の309は，前回の308とほぼ同じ位置を打撃する。縦に半折するが，打面の幅が比較的大きい。打面調整を施した後，石核235の最終作業面にみられる目的剥片が剥離される。

なお，石核235と308は３Ａブロックに分布するが，308は３Ｂブロックに離れて分布する。

接合資料９（第97図）

石核素材剥離の最終工程を示す接合資料である。長さ171.5㎜，幅74.0㎜，厚さ32.0㎜，総重量341.9ｇの接合資料である。側面小口に自然面を留め，石理に沿って板状の大形素材を剥離する工程である。○は作業面と90度異なる方向から剥離された剥片ネガ面である。石核整形と目される。素材剥片311は打撃時に石核の大部分を取り込んで折損し，打点側が石核Ａ類227に転化する。剥離後は石核上半において打面調整が施され，長さ70.0㎜大の目的剥片を剥離して作業が停止する。

剥片剥離の流れは次のとおり。３点とも，３Eoutにまとまって分布し，３Ａの外縁線とは約60㎝ほど隔たる。



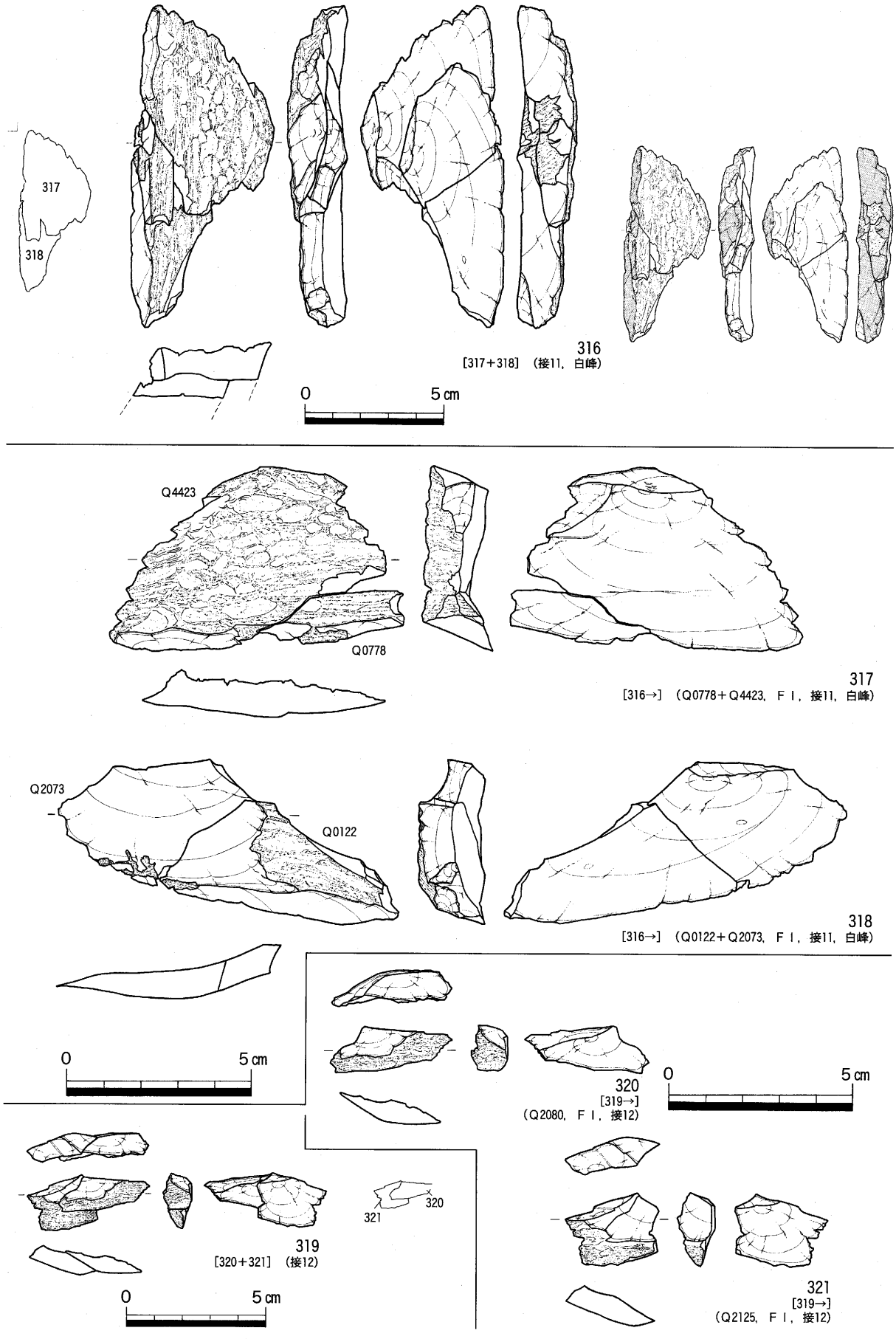
接合資料10（第98図）

石理に沿って剥離された大形板状剥片から，初期段階に剥離された大形の剥片同志の接合資料である。長さ108.0㎜，幅58.0㎜，厚さ49.0㎜，総重量は196.9ｇである。剥片の打面側には自然面が，背面には板状剥片の素材面が認められる。遺存する剥片剥離に先行して，自然面を打面とする打撃が１回みられる。そのネガ面を打撃して315を，さらに315のネガ面を打撃して314を得ている。分布は一方が３Ａブロックに，一方が３Woutに外れる。

接合資料11（第99図）

接合資料10と同様に，石理に沿って剥離された大形板状剥片を素材とする，その初期段階の接合資料である。剥片２片で構成され，長さ115.0㎜，幅50.6㎜，厚さ21.0㎜，総重量140.9ｇをはかる。

剥片はいずれも背面に自然面をとどめ，打点を若干横方向にずらしながら石理に反して剥離した剥片で，接合状態において打面が約10.0㎜ずれる。したがって317の剥離後，石理に沿った剥片を剥離していることがわかる。317・318の底面には素材の平坦な剥離面が残る。317の打面を素材面とすると，厚さ約40.0㎜の板状素材が復元される。石器分布は，317がブロック３Ａと３ｂに，318がブロック３Ｃに分布する。318のⅡ種接合２片はいずれも近い位置で出土している。



第99図　3 a 区エリア 3　出土石器実測図25　接合資料11・12（S＝2／3, 1／2）

接合資料12（第99図）

平坦な打面を連続して打撃して得られた２つの剥片の接合資料である。長さ43.0㎜，幅19.5㎜，厚さ10.0㎜，総重量5.2ｇ。いずれの剥片も尾部に自然面が付着する。３Ｂと３Ｃに分かれて分布する。

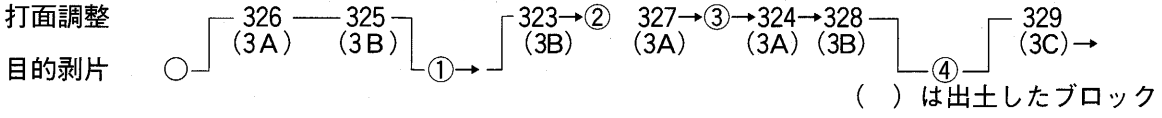
接合資料13（第100図～第102図）

側面に自然面を留める塊状の素材。打面を交互に入れ替え，打点を左右にずらしながら剥片を剥離する作業の中盤付近の接合資料である。石核は接合しないが，石理に沿った目的剥片を得るための打面調整剥片の接合例と考えられる。長さ102.0㎜，幅49.0㎜，厚さ37.0㎜，総重量89.7ｇをはかる。

326→325は石理に沿う剥片ネガ面に打面を設定し，打点を横にずらして連続的に剥離することにより目的剥片の打面を整形する。その後，打面を転移し，①の目的剥片を剥離する。さらに打点のを横方向にずらして，石理に沿う目的剥片を剥離した痕跡が328の打面部に残る。

次に323→②→327→③→324→328の順で，打面を整形し，目的剥片④を剥ぎ取る。目的剥片④の打点は遺存面が狭く不明瞭だが，329の打面の角度からみて石核のほぼ中央部に概ね復元できる。

最後に，再び打面を転じ329で打面の整形を行うところまでが，当接合資料に残る。以上の剥片剥離の流れから復元される目的剥片の幅は約80.0㎜となる。出土位置と剥離の流れを下に示す。

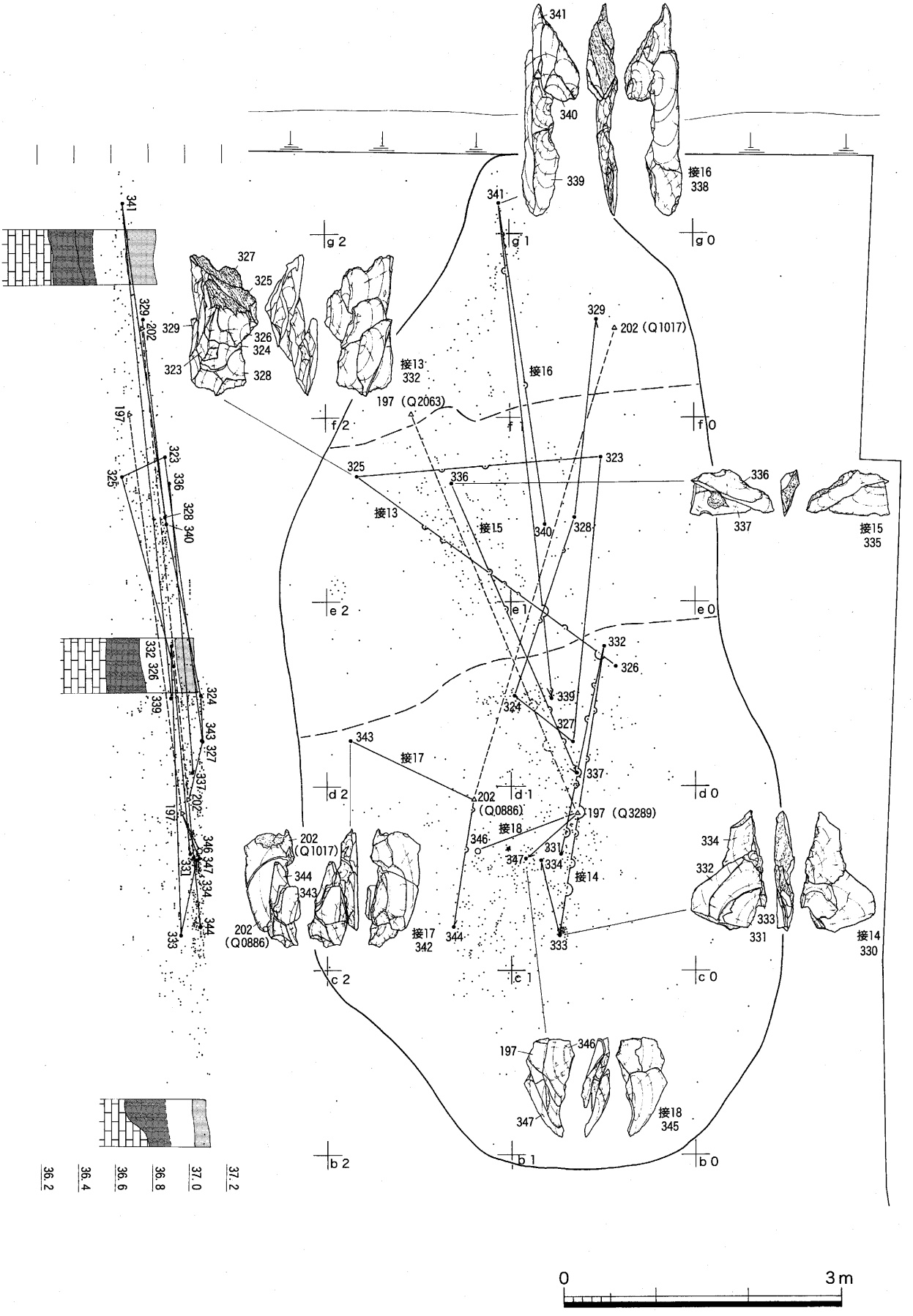


接合資料14（第100図，第102図）

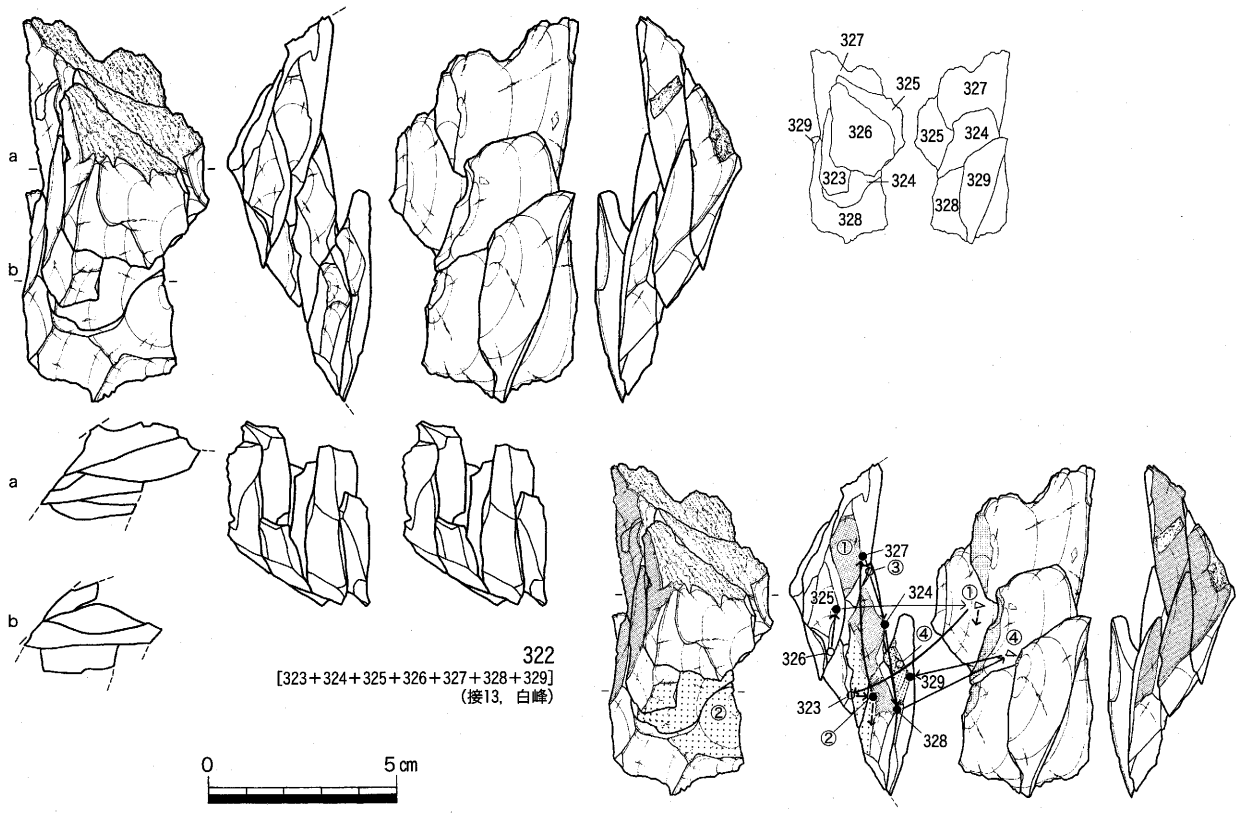
自然面上を横方向に打点をずらしながら表裏交互に剥片を剥取する接合資料である。４枚の剥片で構成し，長さ87.0㎜，幅54.0㎜，厚さ14.0㎜，総重量40.8ｇである。333と334の打面には自然面を打面とした剥片のネガ面が遺存する。334の背面には自然面を打面とする素材剥片の主要剥離面が残る。素材は石理に沿って剥がされた幅100.0㎜以上の板状の大形剥片で，当該資料は剥片剥離の比較的初期の段階の工程を示す。遺存する剥片は，幅35.0～55.0㎜の不定形な横長剥片である。打面を入れ替えて剥取された剥片も，そのネガ面を観察する限りその法量と大差はない。したがって剥片剥離工程の初期の石核調整の可能性が高い。主としてブロック３Ａの南側を中心に分布するが，最もサイズの大きい332がブロック３Ａの北端で出土する。

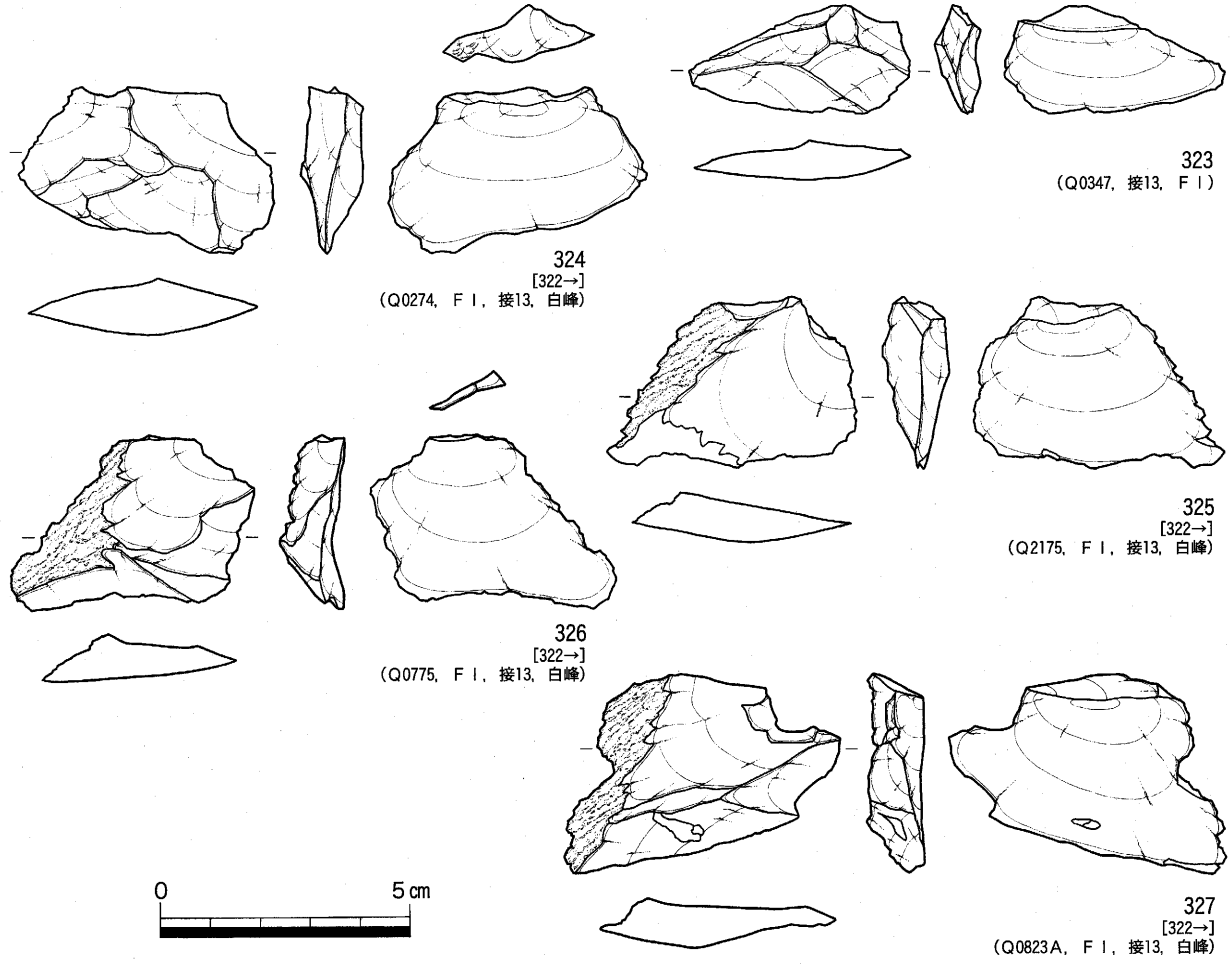
接合資料15（第100図，第103図）

打面付近に自然面をとどめる２枚の剥片の接合資料である。長さ60.0㎜，幅33.0㎜，厚さ13.0㎜，総重量は12.6ｇ。接合資料14と同様，打点を交互に入れ替えながら剥片剥離を進める工程である。遺存する剥片の打面にはいずれもネガティブな剥離面が観察できる。剥片のサイズは幅65.0㎜ほどで，剥片の背面には石核素材面と目される底面が取り込まれる。336は比較的形状の整った剥片であるが，二次加工の痕跡はみられない。ブロック３Ａとブロック３Ｂにまたがって分布し，接合距離は3.4ｍをはかる。

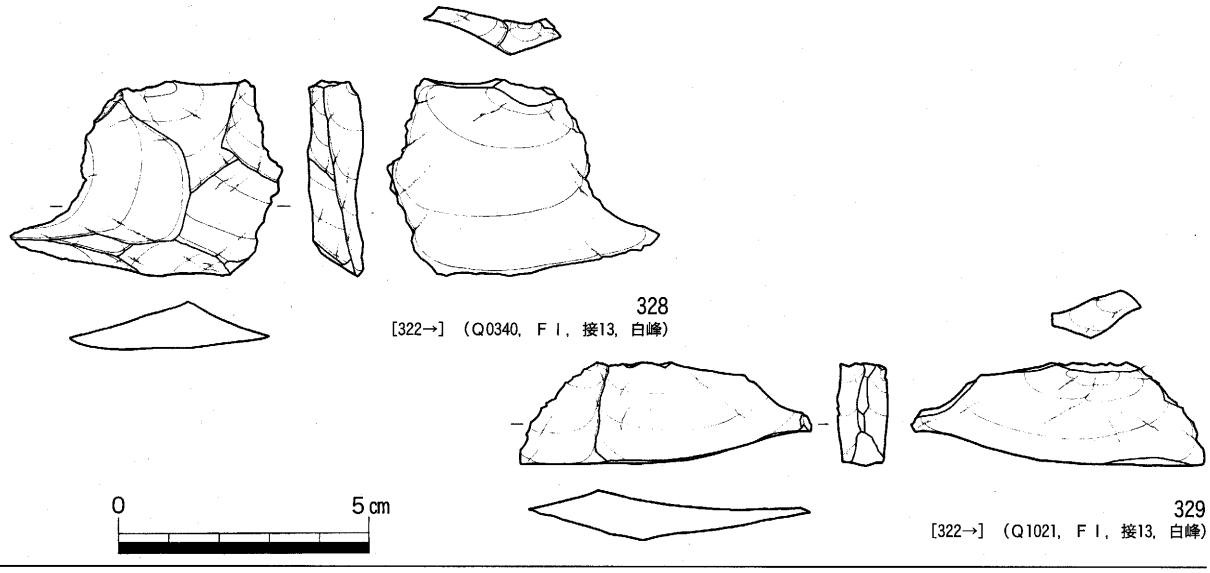


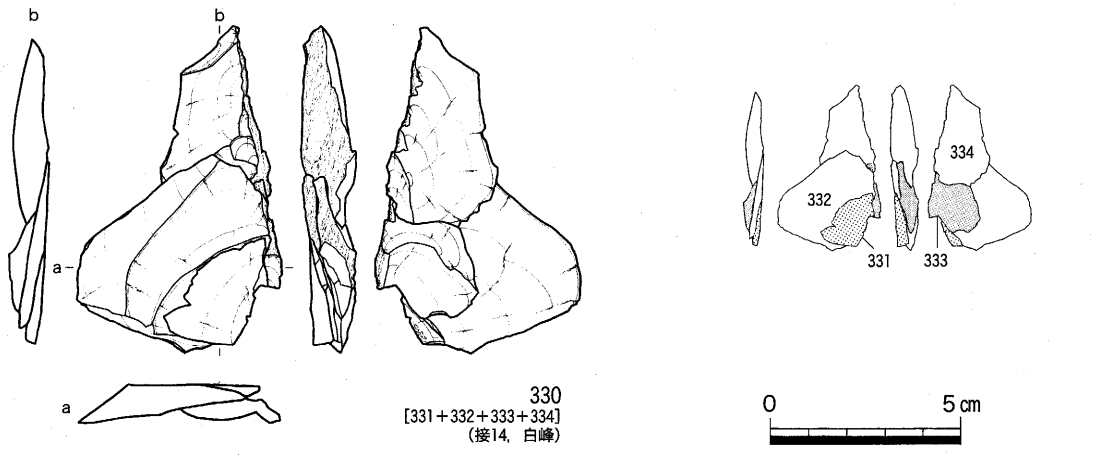
第100図　3 a 区エリア 3　接合資料分布図 3　接13～18（S＝1／60　垂直分布S＝1／30）

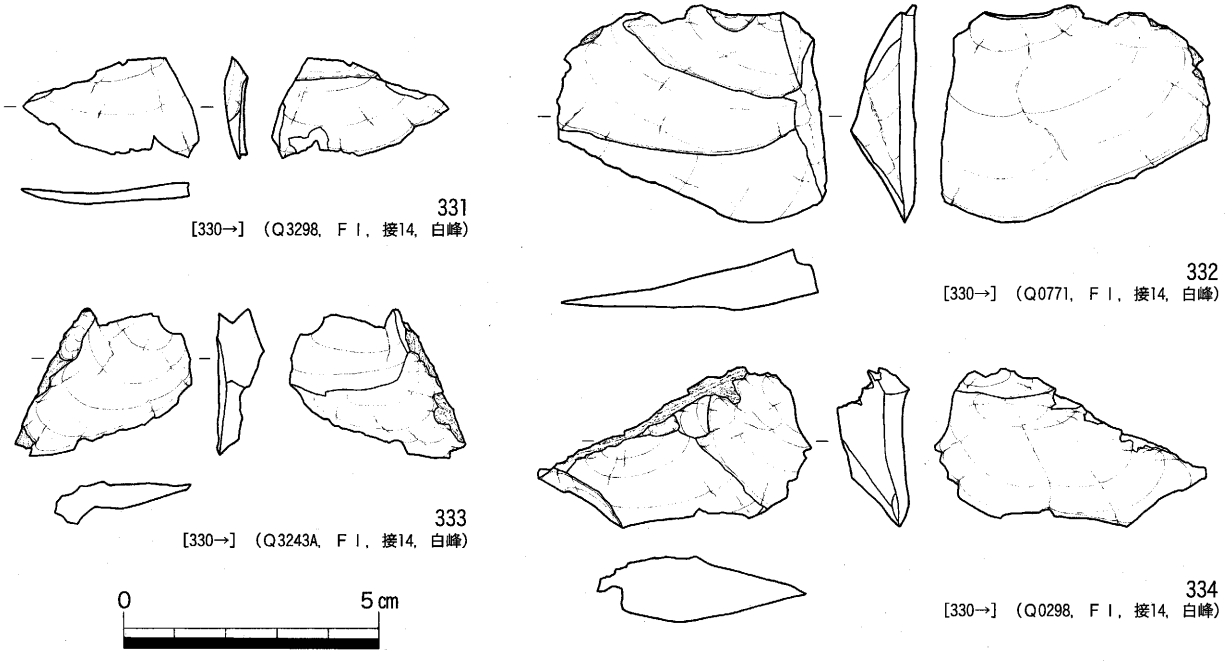




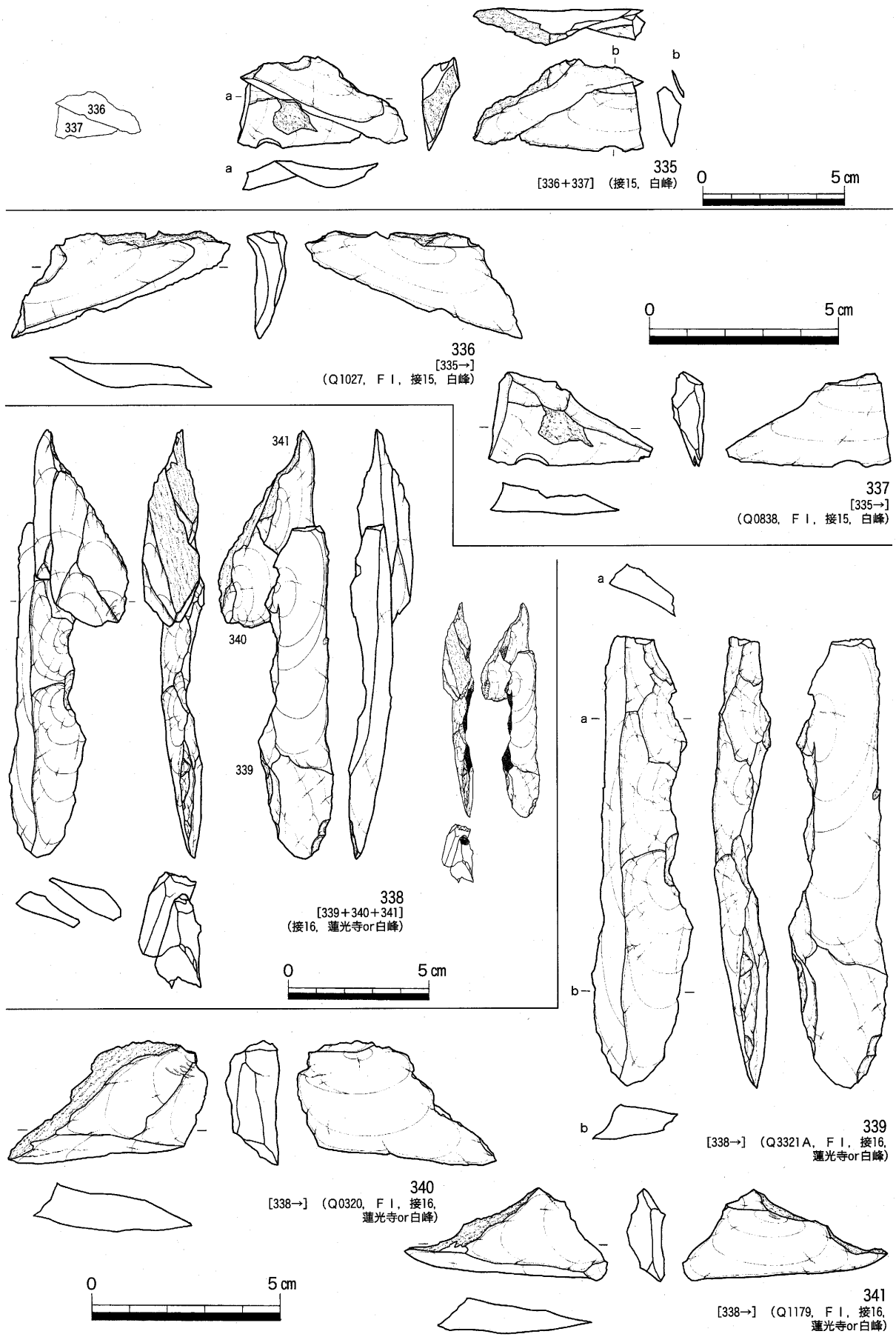
第101図　3 a 区エリア 3　出土石器実測図26　接合資料13（S＝2／3，1／2）







第102図　3 a 区エリア 3　出土石器実測図27　接合資料13・14（S=2／3, 1／2）



第103図　3 a 区エリア 3　出土石器実測図28　接合資料15・16（S＝2／3，1／2）

接合資料16（第100図，第103図）

338は板状の素材剥片の打面部側から表裏交互に，かつ打点を左右にずらしながら剥片を剥離する工程を示す接合資料である。遺存する剥片は３枚で，長さ154.0㎜，幅42.0㎜，厚さ22.0㎜，総重量56.2ｇをはかる。側縁部には石理顕著な自然面が残り，図の左には素材剥片の主要剥離面が観察できる。また，339の主要剥離面の横にはポジティブな剥離面が１面あり，これが素材剥片の背面と考えられる。したがって，素材剥片の幅は当該接合資料の長さを大きく越えるものではないことがわかる。

側縁に自然面を取り込む340･341は不定形な横長剥片であるが，339の背面には打点を横方向にずらしながら石核底面を取り込む幅60.0㎜ ほどの良好な横長剥片を剥取した痕跡がみられる。また339の打面にもほぼ同サイズの剥片のネガ面がみられることから，素材剥片の中央付近で交互に剥取されるこれらの剥片が当該剥片剥離工程の目的剥片であったものと考えられる。339は剥離が素材の背面にまで及んだものである。339の両側縁下端付近に若干の調整痕があるが，いずれも主要剥離面との先後関係は明かではないため，二次加工とは認定していない。

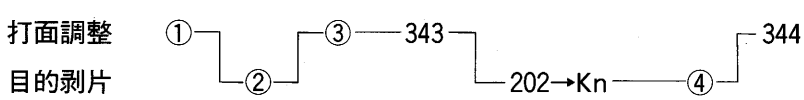
接合剥片の分布は，３つのブロックにそれぞれがバラバラに分布する。順序を追うと，３Ｂ（剥片340）→３Ｃ（剥片341）→３Ａ（剥片339）となる。

接合資料17（第100図，第104図）

342は，折面でⅡ種接合した加工途上のナイフ形石器（202）の素材面に，２片の剥片が接合する事例である。接合状態で長さ86.0㎜，幅40.0㎜，厚さ36.0㎜，総重量47.0ｇをはかる。側縁および上面に自然面をとどめる。

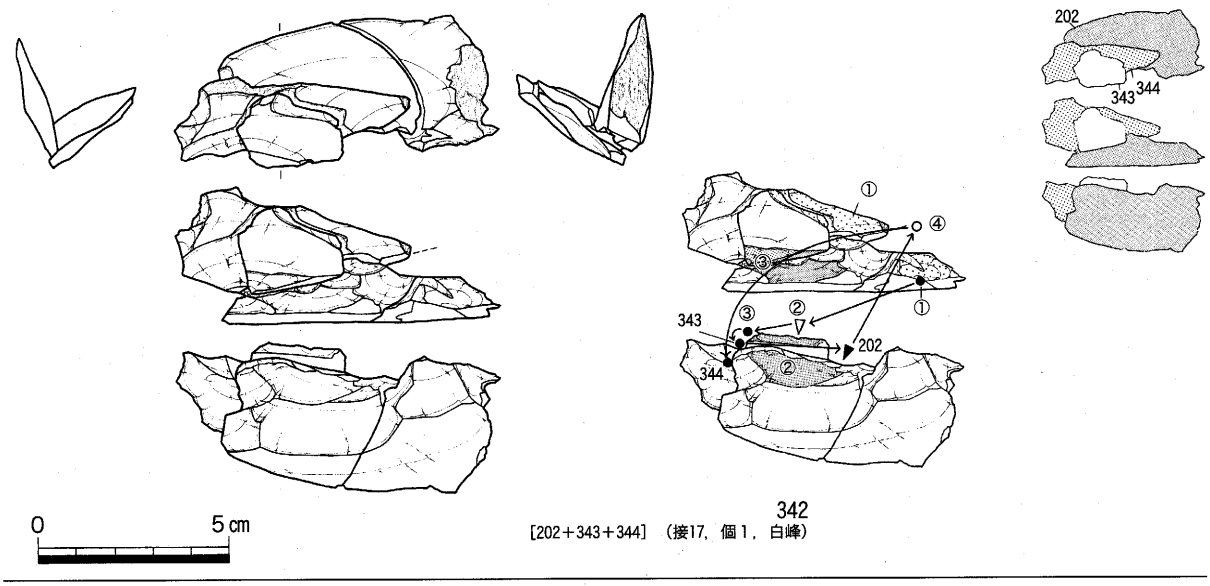
343・344の２片は，いずれもナイフ形石器（202）の素材となる横長剥片の剥取に前後して石核から交互に剥がされた不定形な剥片である。343がナイフ形石器素材剥片剥取に先行してその打面に，344が同剥取に後出して主要剥離面にそれぞれ接合する。剥片剥離の流れは以下のとおり。細かな打面調整を施した形跡はなく，石核に粗い打面調整を施して目的剥片を得ている。

接合する剥片は主にブロック３Ａに分布するが，ナイフ形石器（202）の半折片（Q1017）１点が5.3ｍ離れてブロック３Ｃに分布する。

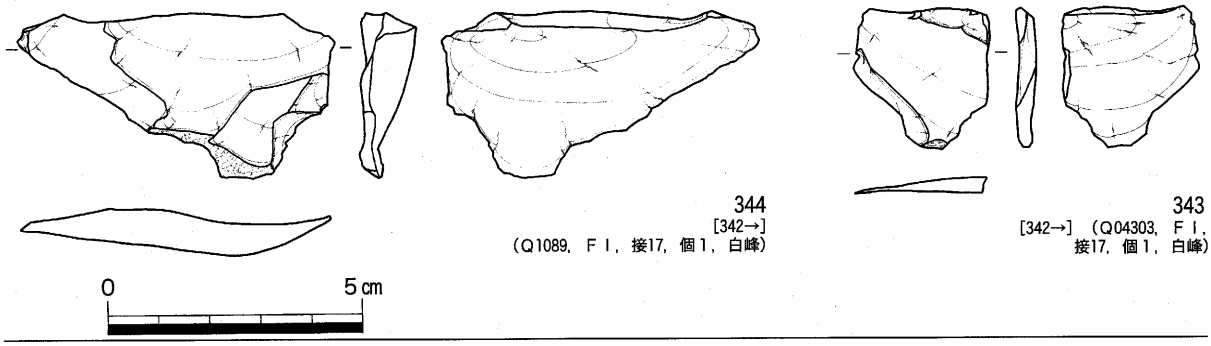


接合資料18（第100図，第104図）

345は，折面でⅡ種接合したナイフ形石器（197）の素材面に２片の剥片が接合する資料である。接合状態で，長さ72.0㎜，幅36.0㎜，厚さ20.0㎜，総重量21.7ｇをはかる。346・347の２剥片は，いずれもナイフ形石器（197）の素材となる横長剥片の剥取に相前後して石核から剥がされた不定形な剥片である。346がナイフ形石器素材剥片剥取に先行してその背面に，347が同剥取に後出して主要剥離面にそれぞれ接合する。これらは，いずれも打面にネガティブバルブが観察できる。したがって，打面を石核表裏交互に入れ替え，打点を左右にずらしながら剥片剥離を進める工程であることがわかる。得られた剥片は背面末端部に石核底面が部分的にしか取り込まれず，尾部に突出をもつ正面形を呈してナイフ形石器Ｂ類の素材となる。剥片は主にブロック３Ａに分布するが，ナイフ形石器（197）の半折片１点が4.7ｍ離れてブロック３Ｃに分布する。

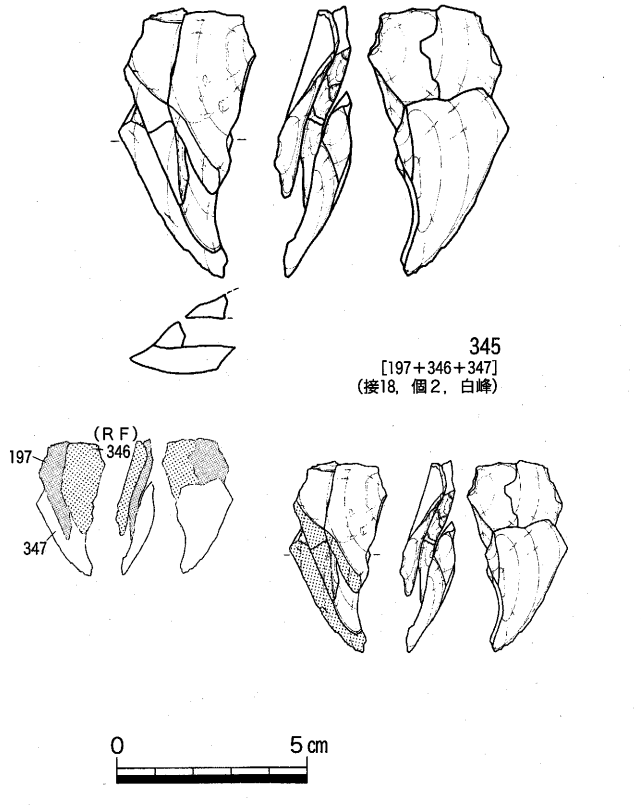


342
[202+343+344] (接17, 個1, 白峰)

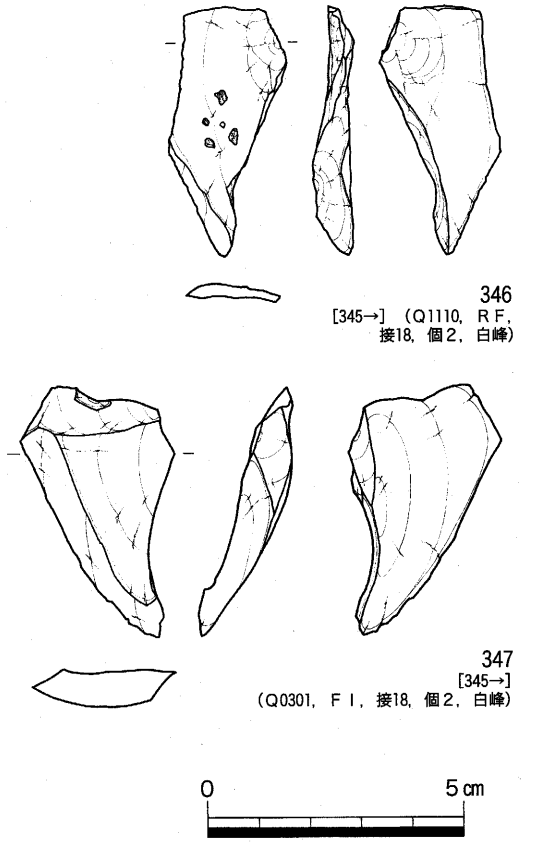


344
[342→]
(Q1089, F I, 接17, 個1, 白峰)

343
[342→] (Q04303, F I,
接17, 個1, 白峰)



345
[197+346+347]
(接18, 個2, 白峰)



346
[345→] (Q1110, R F,
接18, 個2, 白峰)

347
[345→]
(Q0301, F I, 接18, 個2, 白峰)

第104図　3 a 区エリア 3　出土石器実測図29　接合資料17・18（S＝2／3, 1／2）

接合資料19（第105図，第106図）

348はナイフ形石器３点（177・168・169）が素材面で接合する資料である。またナイフ形石器の整形加工に伴う剥片２片も接合し，折面での接合も加えて，都合６片の接合資料となる。接合状態で，長さ83.0㎜，幅71.0㎜，厚さ38.0㎜，総重量81.2ｇである。

ナイフ形石器３点は平坦な石核底面を背部に取り込みながら，石核から断続的かつ直線的に打点を後退しつつ剥離した横長剥片を素材とする。177・168に残る素材の打面には，いずれにも複数の石核整形の痕跡がある。両打面の間隙は約25.0㎜と大きく，素材剥片剥離前に入念に石核調整が行われたか，あるいは交互剥離により打面側においても目的剥片が剥離されているか，いずれかである。ただ，図下端の折損面は当該剥片剥離以前に形成された面であり，図の下方に石核が広がることはない。したがって打面側で目的剥片を得たとしても，長さ50.0～60.0㎜に収まる大きさである。作業面は固定していたものとみて良いであろう。

349･350はナイフ形石器177の背部整形面に接合する剥片である。349は素材の打面を打撃し，350は素材の主要剥離面を打撃する。いずれも素材の打面部除去に先行して剥片の側縁部分に施される初期の背部整形剥片である。

接合する剥片はエリア内に広く分布する。ブロック３Ａに２片，３Ｂに２片，３Ｃに２片があり，接合順にみても，軌跡は不規則である。

接合資料20（第105図，第106図）

平坦な打面を共有する２剥片の接合資料である。長さ76.0㎜，幅49.0㎜，厚さ21.0㎜，総重量48.4ｇをはかる。石材は白色に風化するＡn-Ｃである。

側面に風化が顕著な古い剥離面をとどめ，背面側には素材面が残る。素材面を切って，相互に180度異なる方向からのネガティブな剥離面がある。また，遺存する剥片の背面には剥取に先行する小規模な剥離が施され，両剥片の打撃の間に，打面を共有する剥片面が１面ある。

分布はブロック３Ａとブロック３Ｂにまたがる。

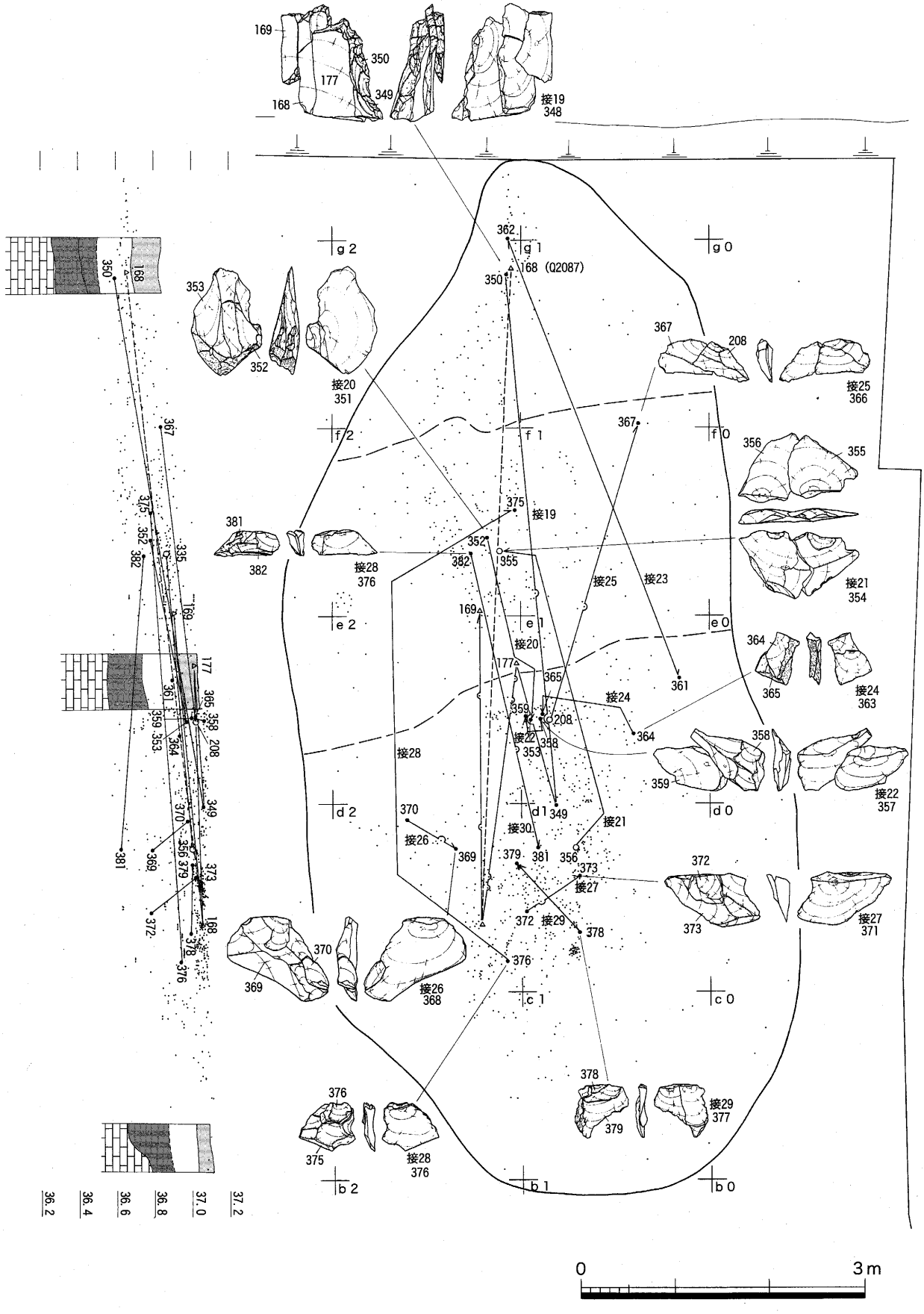
接合資料21（第105図，第107図）

354は平坦な打面を共有し，打点を横にずらして剥離された２剥片の接合資料である。長さ83.0㎜，幅49.0㎜，厚さ10.0㎜，総重量30.0ｇをはかる。いずれも多角形の正面形を呈し，背面の剥離面の剥離方向は一定でない。２剥片とも側縁，もしくは末端に使用痕と目される微細剥離痕がある。分布はブロック３Ａとブロック３Ｂにまたがる。

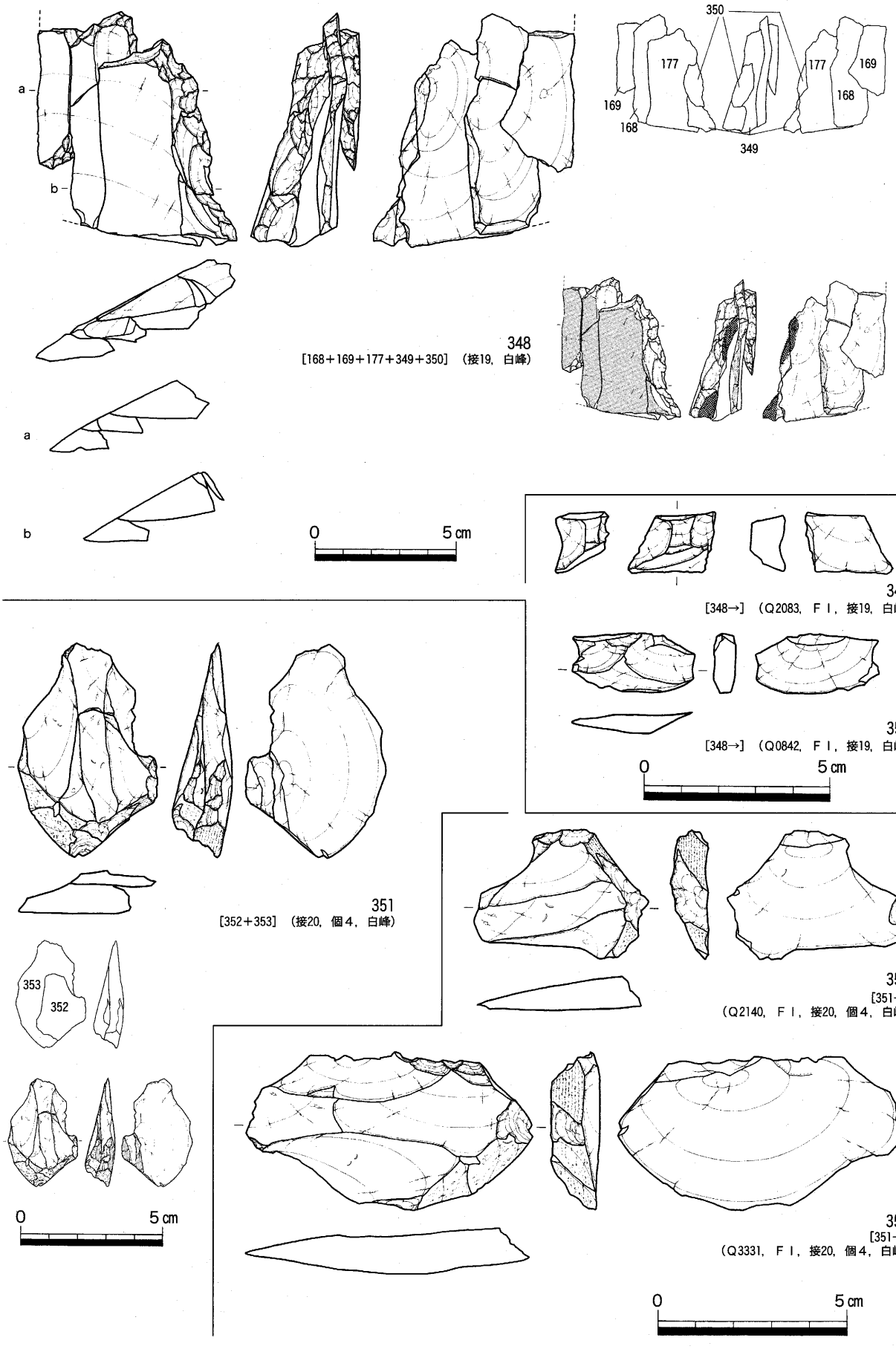
接合資料22（第105図，第107図）

357は打面を違えて剥離された２剥片の接合資料である。長さ77.0㎜，幅44.0㎜，厚さ15.0㎜，総重量20.1ｇをはかる。打面はいずれも平坦でネガティブな打点をとどめる。石核から①→358→②→359の順で打面を交互に入れ替えて剥片剥離を進行したものと考えられる。石核底面と目される背面側の大きな剥離面は，当該２剥片とは剥離方向が180度異なるネガティブな面である。剥取された剥片はいずれも不定形で，二次加工は認められない。

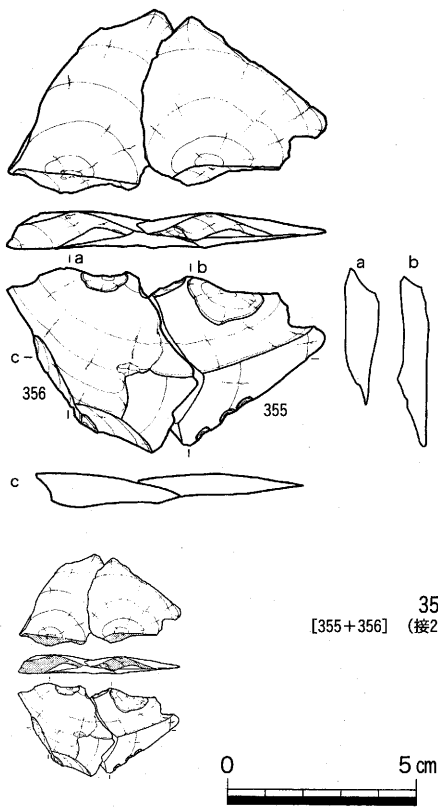
分布はブロック３Ａ内で収束する。

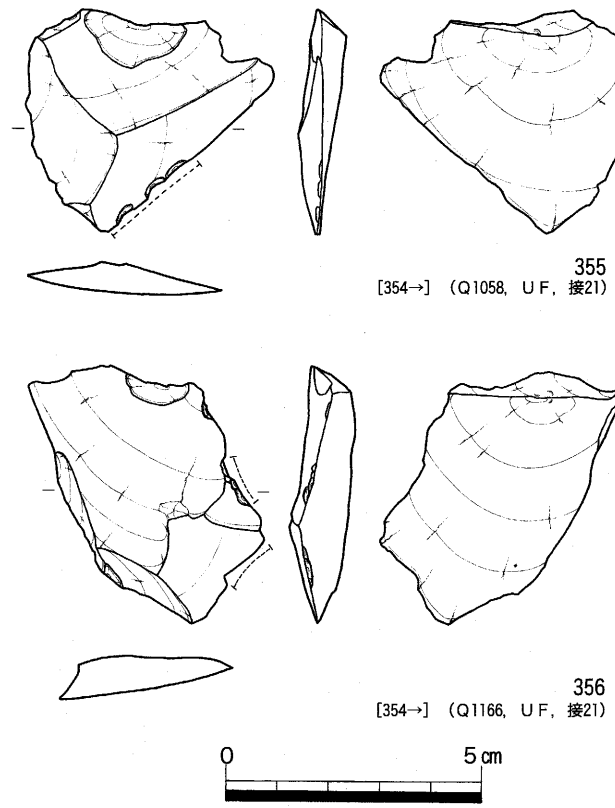


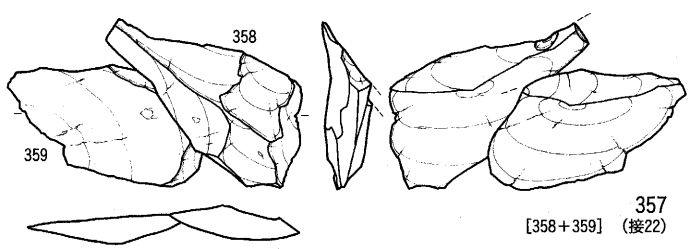
第105図　3 a 区エリア 3　接合資料分布図 4　接19～30（S＝1／60　垂直分布S＝1／30）

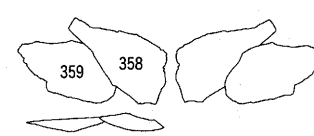


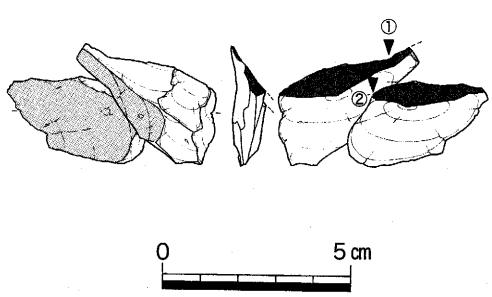
第106図　3ａ区エリア3　出土石器実測図30　接合資料19・20（S＝2／3，1／2）

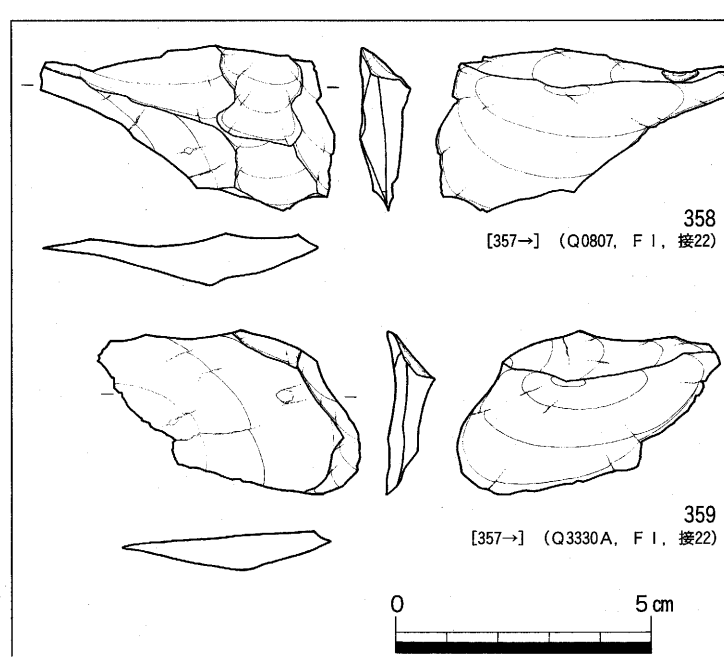












第107図　3 a 区エリア 3　出土石器実測図31　接合資料21・22（S=2／3, 1／2）

接合資料23（第105図，第108図）

360は長さ100.0㎜以上と推定されるやや縦長の大形剥片の折損面における接合資料である。長さ88.0㎜，幅60.0㎜，厚さ23.0㎜，総重量26.9ｇをはかる。側面には石理の顕著な自然面をとどめ，狭小な打面を打撃して得られた，裾広がりの縦長状の剥片（362）を想定できる。剥離面中ほどで半折し，末端側の石片をさらに打撃した得られた剥片361が，折損面および自然面で接合する。打面側の側縁には主要剥離面と先後関係が微妙な（二次）加工が施される。分布は361がブロック３Ａ，362がブロック３Ｃ。

接合資料24（第105図，第108図）

363は打面を違えて接合する２剥片からなる資料である。長さ37.0㎜，幅30.0㎜，厚さ10.0㎜，総重量5.6ｇをはかる。いずれの剥片も打面が狭小で剥離面の観察が困難であるが，365の背面には複数の剥離面があり，364の剥離後，365が剥離されるまでの間に，打面を入れ替えながら複数の剥片剥離を行っているものと推定される。二次加工等はみられない。分布はブロック３Ａ内に収まる。

接合資料25（第105図，第108図）

366は加工痕有剥片208と不定形な横長剥片367の接合資料である。長さ63.0㎜，幅30.0㎜，厚さ11.0㎜，総重量10.7ｇをはかる。367の打面を見る限り，剥片剥取前の石核整形は顕著でない。

分布は加工痕有剥片208がブロック３Ａ，剥片367がブロック３Ｂに位置する。

接合資料26（第105図，第109図）

368は不定形な横長剥片の側縁の一部に小剥片が接合する資料である。長さ59.0㎜，幅72.0㎜，厚さ15.0㎜，総重量44.7ｇをはかる。

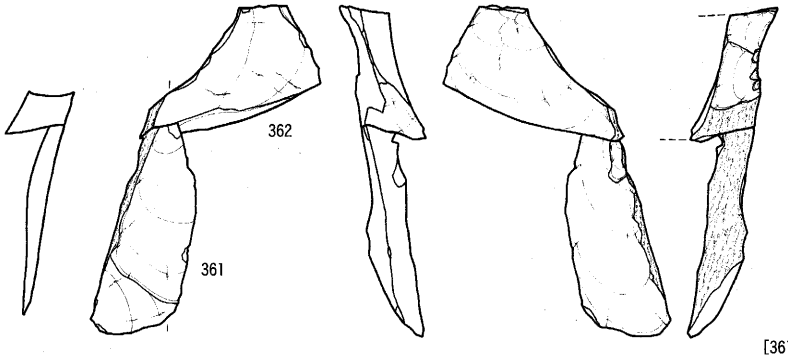
369は背面に剥離方向が一定しない複数の剥離面をとどめ，球心状に剥片剥離を進める石核から剥離された剥片と考えられる。小剥片の370は，369の背面側を打面として剥離されるが，打面はそれに先行する末端方向からの剥離に切られて遺存しない。分布はブロック３Ａ内に収まる。

接合資料27（第105図，第109図）

平坦な打面を連続して剥離した大小２剥片の接合資料である。長さ66.0㎜，幅38.0㎜，厚さ16.0㎜，総重量25.3ｇをはかる。打面は幅60.0㎜以上のネガティブでやや大きめの剥離面で，背面の剥離面を含めて同一打面に６回以上の打撃をジグザグに加えて剥片を剥取する。石核底面は373の背面に僅かに残るが，素材の形状を示すほどの材料はない。分布はブロック３Ａ内で収まる。

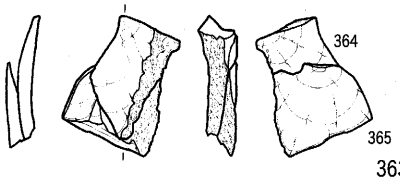
接合資料28（第105図，第109図）

374は平坦な打面を連続して剥離した不定形な２剥片の接合資料である。長さ34.0㎜，幅40.0㎜，厚さ8.0㎜，総重量7.0ｇ。375と376の間に空隙があるが，375背面のネガティブな剥離面は剥離境が明瞭でないことから，376打撃時に同時割れが生じたものと考えられる。打点の動きは，平坦な打面上を直線的に後退する。したがって両剥片とも打点部が強く窪む打面形状となる。一カ所を集中的に整形する石核整形の痕跡とみられる。分布はブロック３Ａとブロック３Ｂにまたがる。



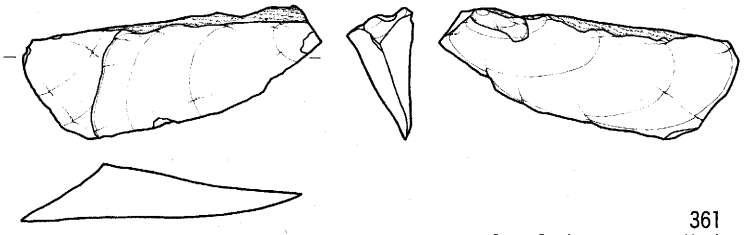
360
[361＋362] （接23）

0 5cm

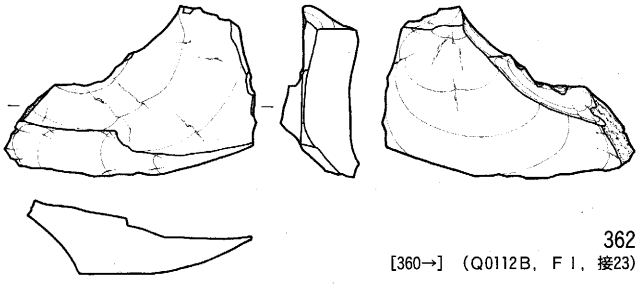


363
[364＋365] （接24，白峰）

0 5cm

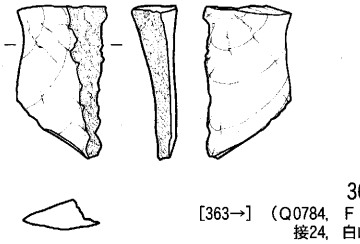


361
[360→] （Q0779，ＦⅠ，接23）

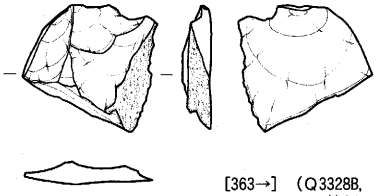


362
[360→] （Q0112B，ＦⅠ，接23）

0 5cm

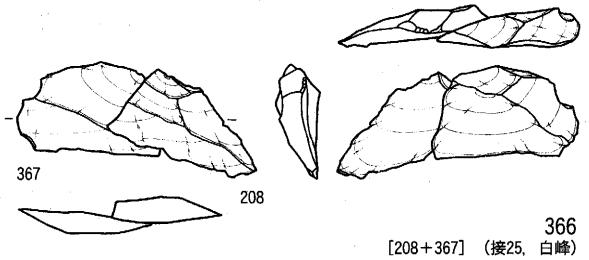


364
[363→] （Q0784，ＦⅠ，
接24，白峰）



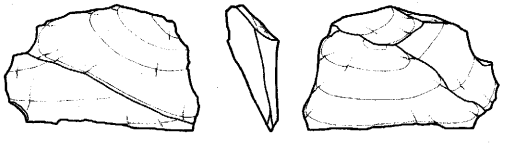
365
[363→] （Q3328B，ＦⅠ，
接24，白峰）

0 5cm



366
[208＋367] （接25，白峰）

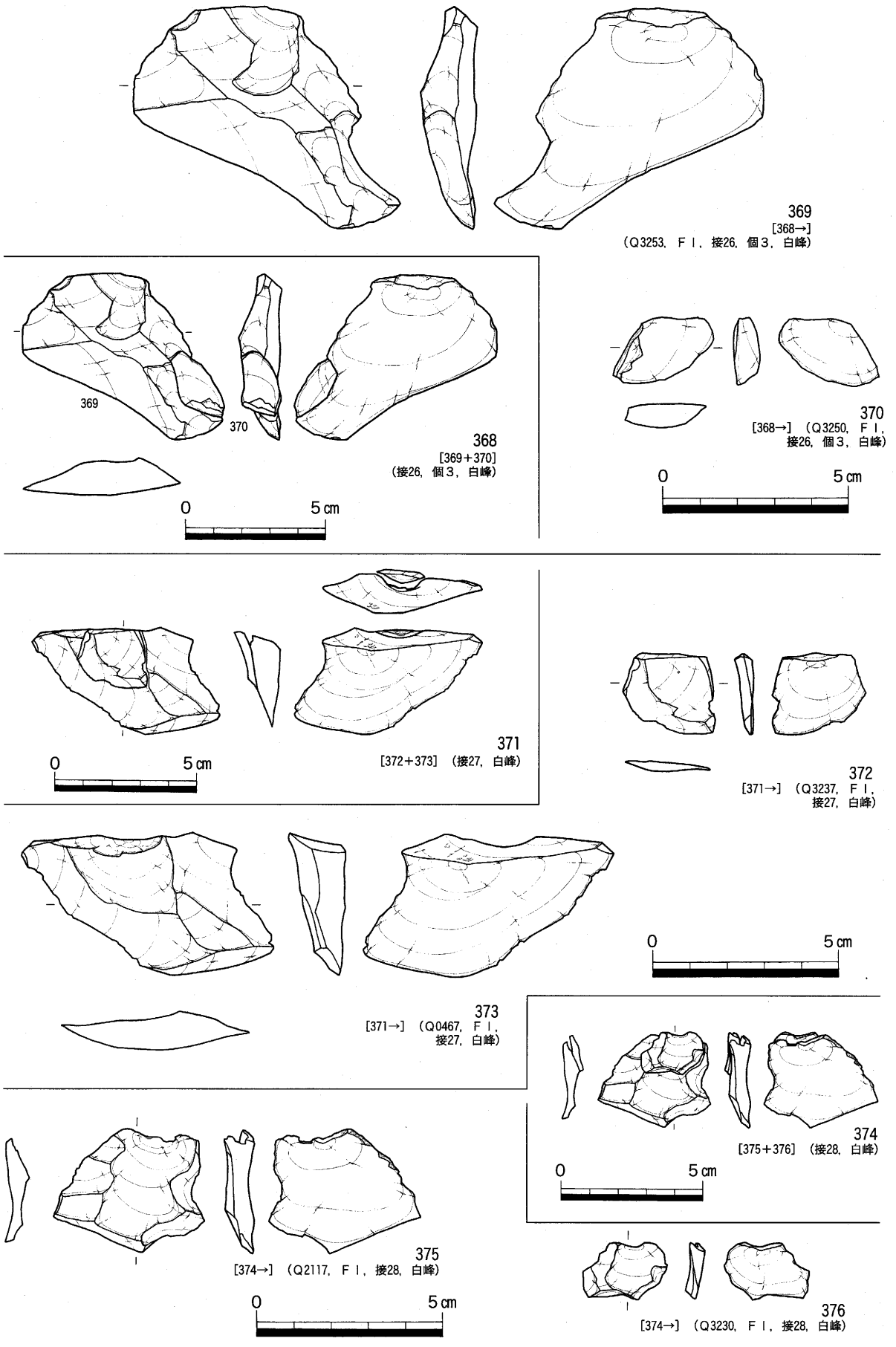
0 5cm



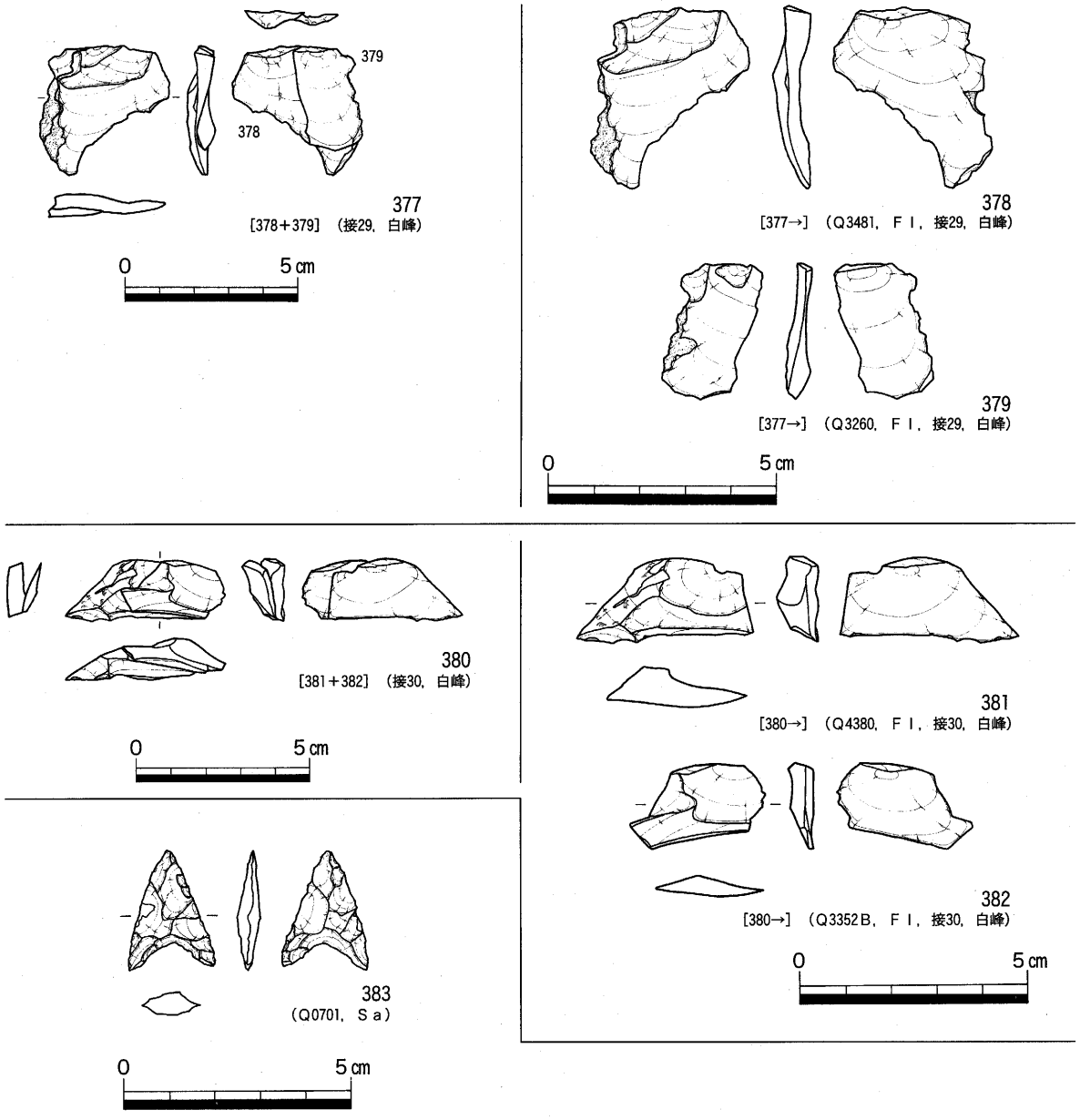
367
[366→] （Q1014，ＦⅠ，接25，白峰）

0 5cm

第108図　３ａ区エリア３　出土石器実測図32　接合資料23～25（S＝2／3，1／2）



第109図　3 a 区エリア 3　出土石器実測図33　接合資料26～28（S＝2／3，1／2）



第110図　3a区エリア3　出土石器実測図34　接合資料29・30（S=2／3，1／2）

接合資料29（第105図，第110図）

平坦な打面を，打点を横方向にずらしながらやや縦長形状の剥片を剥離する工程を示す接合資料である。側縁に自然面をとどめる2剥片からなる。長さ，幅とも37.0㎜，厚さは8.0㎜，総重量6.4ｇをはかる。いずれの剥片も石核底面が取り込まれず，不定形。分布は2点ともブロック3Ａ。

接合資料30（第105図，第110図）

平坦な打面を，打点を横方向にずらしながら不定形な横長剥片を剥離する工程を示す接合資料である。長さ18.0㎜で奥行が短く，幅は46.0㎜，厚さは12.0㎜をはかる。総重量6.8ｇ。薄身の石核の小口部分における剥片剥離と考えられる。分布はブロック3Ａとブロック3Ｂにまたがる。

その他の石器として，石鏃が1点ある。縄文期の混在である。

（6） 3a区エリア1ブロック1A

調査区北西隅で，南北８m，東西3.2mの範囲に広がる石器分布である。西は後世の谷地形の削平により滅失するので元来はもっと分布が広がっていたものと考えられる。また，南東側は古墳時代の埴輪焼成土坑のために一定の削平・撹乱が及ぶ。ただし，削平は概ね標高36.8mまでで収まっており，当該ブロックの主要垂直分布域にまで及んでいない。それにもかかわらず，石器分布が南東側で希薄になることから，元来の石器分布の形状をかなりとどめているものと考えられる。石器分布密度は平均密度55点／m^2と，他のブロックと比較して極めて高い。視覚的には北半部と南半部などで特に集中する部分も抽出できそうであるが，間隙なく石器が分布しており，明確に境界を定めることはできない。垂直分布は標高36.3～36.8と約50cmの範囲をもち，標高36.55m付近に分布の中心がある。土層断面との対比により，３a層を主体として下位はＡＴガラス含有率の高い３b層にまで及び，上位は２層中でおおむね収まる。礫は南側に１点のみ，亀裂が顕著な花崗岩である。

出土石器総数1，410点，主要石器は角錐状石器が大半を占め，ナイフ形石器は１点のみである。石材は叩石２点が結晶片岩，それ以外はすべてサヌカイトである。なかでもAn-Dとした緻密な白色系サヌカイトが主体である。接合資料には角錐状石器の素材となる大形の剥片を剥離する作業などがみられる。

接合はブロック内で22件（Ⅰ種18件，Ⅱ種４件），ブロック１ＢＬと１件，ブロック１ＢＨと２件がある。

器種	点数	比率（全）	比率(定形)	重量（g）	重量比（全）	備考
Tr	31(2)	2.3%	73.3%	422.4	12.3%	（ ）はⅡ種接合片で外数とした
Kn	1	0.1	2.2	3.1	0.1	
Sc	0					
RF	6	0.4	13.3	174.7	5.1	
UF	2	0.1	4.4	81.0	2.4	
Cr	3	0.2	6.7	537.2	15.6	
Fl	564(1)	40.2	－	1,965.7	57.2	
Ch	795	56.5	－	250.2	7.3	
RM			－	－		
GS			－	－		
HS	2	0.1	－	－		
Sa			－	－		
Po			－	－		
合計	1,404(3)	99.9%	99.9%	3,434.3	100.0%	

属性項目	数値
面積	25.6m^2
石器数	1407点
分布密度（点／m^2）	55.0点／m^2
平均重量	2.4g
定形石器保有率(%)	3.2%
定形石器重量比	35.5%
接合個体数	53点
接合率（%）	3.8%
接合重量（g）	1312.2g
接合重量比（%）	38.2%

標高(m)	点数
36.25	0
36.3	21
36.35	59
36.4	64
36.45	110
36.5	225
36.55	274
36.6	240
36.65	258
36.7	104
36.75	33
36.8	2
36.85	0
36.9	0

第26表　3a区エリア1　ブロック1A石器分布内容総括表

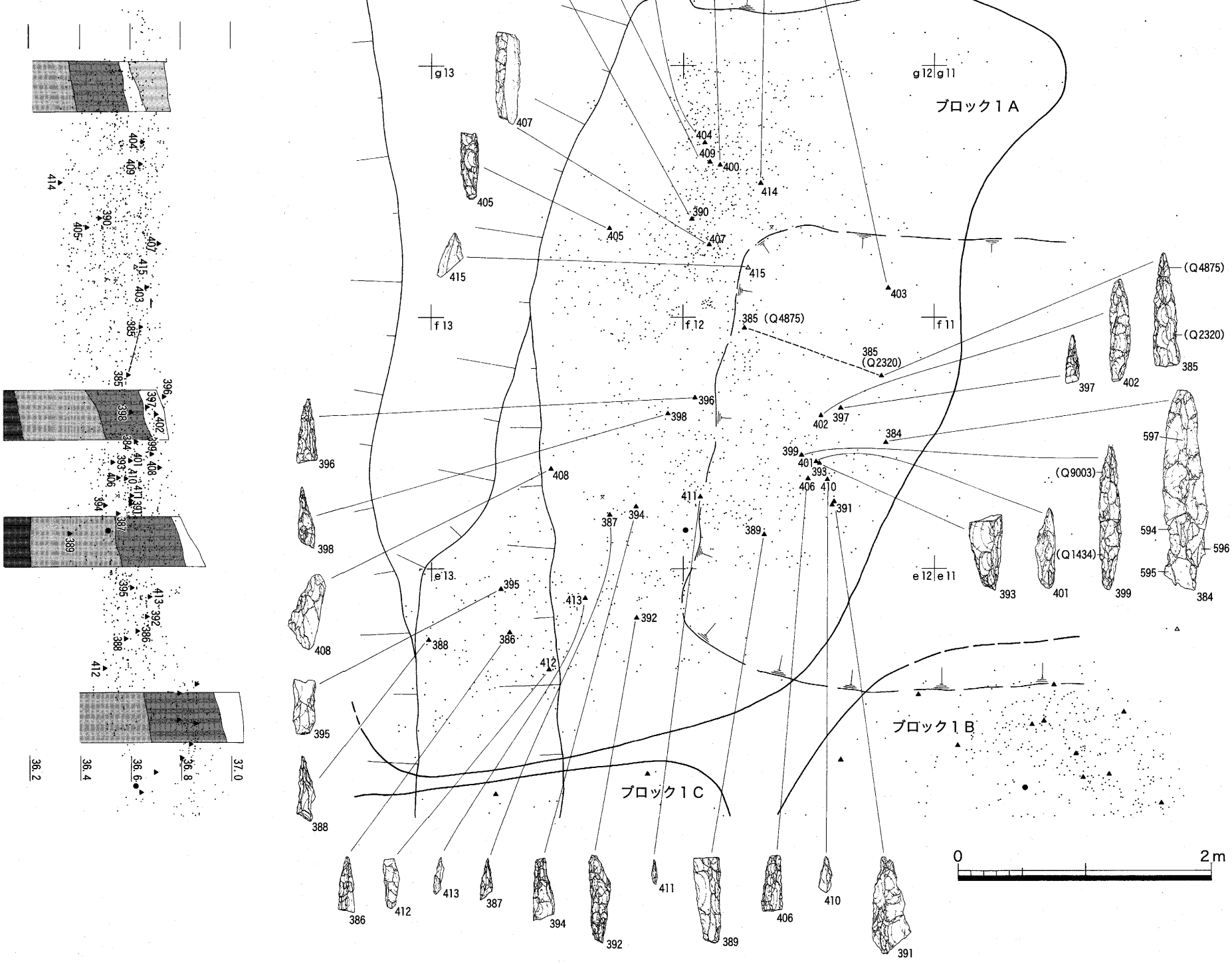
＜主要石器＞

角錐状石器（第111図～第115図）

31点の角錐状石器がある。完形品もしくは９割以上の残存率と考えられるものとして５個体ある。完形品の長さは60.0～80.0㎜の中形が４点，100.0㎜を越える大形が１点。折損品であっても，遺存部の長さと幅の関係から，長さが100.0㎜を越える大形品とみて間違いないものが，ほかに５点ある。うち１点は現存長で150.0㎜を越える折損品（384）で，超大形と言える。一方で，長さ60.0～80.0㎜に満たないと考えられるものは，調整剥片を除くと抽出することができない。

器面に施される整形加工は，調整剥片６点を除く24点のうち，三面加工が10点，二面加工が14点である。出土数としては二面加工がやや卓越するが，他のブロックと比べると，三面加工をより多く含む傾向がある。稜上加工は三面加工のうち７点，二面加工のうち11点にみられ，比率的には大差ない。

素材については，整形加工が顕著なために判断する材料が少ないが，390は裏面が他の剥片と接合し，石理に沿って剥がされた大形剥片を素材に用いて，周縁を加工して仕上げる過程がわかる（第155図）。



第111図　３ａ区エリア１・２器種別石器分布図１　ブロック１Ａ　Tr・Kn　(S=1／40　垂直分布S=1／20)

その他二面加工の裏面にも，リングの回りが緩やかで平坦なポジティブな面がみられることが多く，同様な製作過程を経たものが多いと言える。一方で，長さ150.0㎜ を越える384は390と同様な剥片を素材に用いては製作が困難な大きさを備える。また，392の裏面はネガティブな剥離面２面で構成されており，石核が素材に用いられた可能性も指摘できる。

分布はブロック北側，南側ともにまんべんなく分布する。石材はAn-Dとした滑りのある白色風化系，An-Aとした濃灰色系のサヌカイトがやや目立ち，サヌカイト以外の石材は用いられない。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	断面形	石材	整形加工	個体・接合	グリッド	備考
384	112	111	29	Q2892＋Q3645＋Q2883＋Q2322	158.2×36.0×31.0	97.8	半折	△	An-D	3-W	個5・接47	f12＋f13	折損後再加工　白峰
385	112	111	29	Q2320＋4875	90.0×21.0×16.0	25.8	基部欠	△	An-C	3-W	接97	f12	裏面先端加工
386	112	111	29	Q3425	44.0×13.0×10.0	4.5	基部欠	△	An-D	3-W		e13	
387	112	111	29	Q3751	33.5×9.5　×13.0	2.9	基部欠	△	An-D	3-S	個3	f13	
388	112	111		Q3441	52.0×15.0×19.5	6.6	半欠	△	An-A	3-S		e14	調整段階の折損剥離
389	112	111	29	Q4476	68.5×21.5×15.0	20.3	半折	△	An-D	3-W	個4	f12	
390	113	111	29	Q4848	72.5×23.2×16.0	24.8	半折	□	An-C	3-S	接46	g12	裏面先端部加工　蓮光寺
391	113	111	29	Q3704A＋3704B	77.0×31.0×21.0	33.7	半折	△	An-C	3-W	接98	f12	整形剥片潜在割　国分寺
392	113	111	29	Q3387	70.5×17.0×13.0	12.2	先端欠	△	An-A	2-W		e13	
393	113	111	30	Q3635	60.7×26.5×22.5	30.0	半欠	△	An-C	2-W		f12	
394	113	111		Q3753	49.5×17.0×13.0	10.0	先基欠	△	An-D	3-W		f13	
395	113	111		Q4753	44.0×18.0×13.0	10.0	先端欠	□	An-D	3-W		e13	
396	113	111	30	Q1476	52.0×16.5×9.0	7.4	半欠	△	An-A	2-(W)		f12	稜上調整は粗整形時
397	113	111		Q1436	39.0×11.2×10.5	3.4	基部欠	△	An-C	2-W		f12	
398	113	111	30	Q2881	49.0×13.0×10.5	4.5	基部欠	△	An-A	2-W		f13	
399	114	111	30	Q1434＋9003	113..5×18.0×15.0	27.0	完形	△	An-C	2-W	接99	f12	
400	114	111	30	Q4339C	77.5×16.5×11.0	11.6	一部欠	□	An-C	2-S		g12	国分寺
401	114	111	30	Q2336	64.2×16.7×14.5	13.1	完形	□	An-C	2-S		f12	
402	114	111	30	Q1437	81.5×16.5×12.0	16.2	完形	△	An-C	2-W		f12	
403	114	111		Q1545	45.8×19.5×11.3	8.8	基部欠	△	An-C	2-W		g12	左側面は素材面の可能性あり
404	114	111		Q2236	31.5×10.0×11.5	2.1	小片	□	An-C	2-W		g12	調整剥片
405	114	111	30	Q2835	53.0×15.0×12.0	9.6	半欠	□	An-D	2-W		g13	右側面整形が粗い
406	114	111		Q3638	44.5×17.0×14.0	10.8	半欠	△	An-C	2-W		f12	
407	114	111	30	Q4706	73.0×20.0×18.5	28.2	基部欠	△	An-A	2-W		g12	基部加工あり
408	115	111		Q1802	60.5×30.0×19.0	12.9	小片	□	An-A	3-S		f13	調整剥片
409	115	111	30	Q1523	52.8×11.5×13.3	3.7	半欠	△	An-A	2-W		g12	調整剥片
410	115	111		Q3637A	29.0×11.0×6.0	1.6	小片	□	An-C	2-S		f12	調整剥片
411	115	111		Q4577	20.2×4.5　×6.5	0.3	小片	△	An-A	2-W		f12	調整剥片
412	115	111		Q4589	40.3×13.3×12.5	3.6	小片	□	An-A	3-S		e13	調整剥片
413	115	111		Q3401	29.7×8.5　×11.0	1.2	小片	△	An-A	2-S		e13	
414	115	111		Q4460	23.7×6.8　×9.2	1.1	小片	-	An-A	-		g12	調整剥片（Knか？）

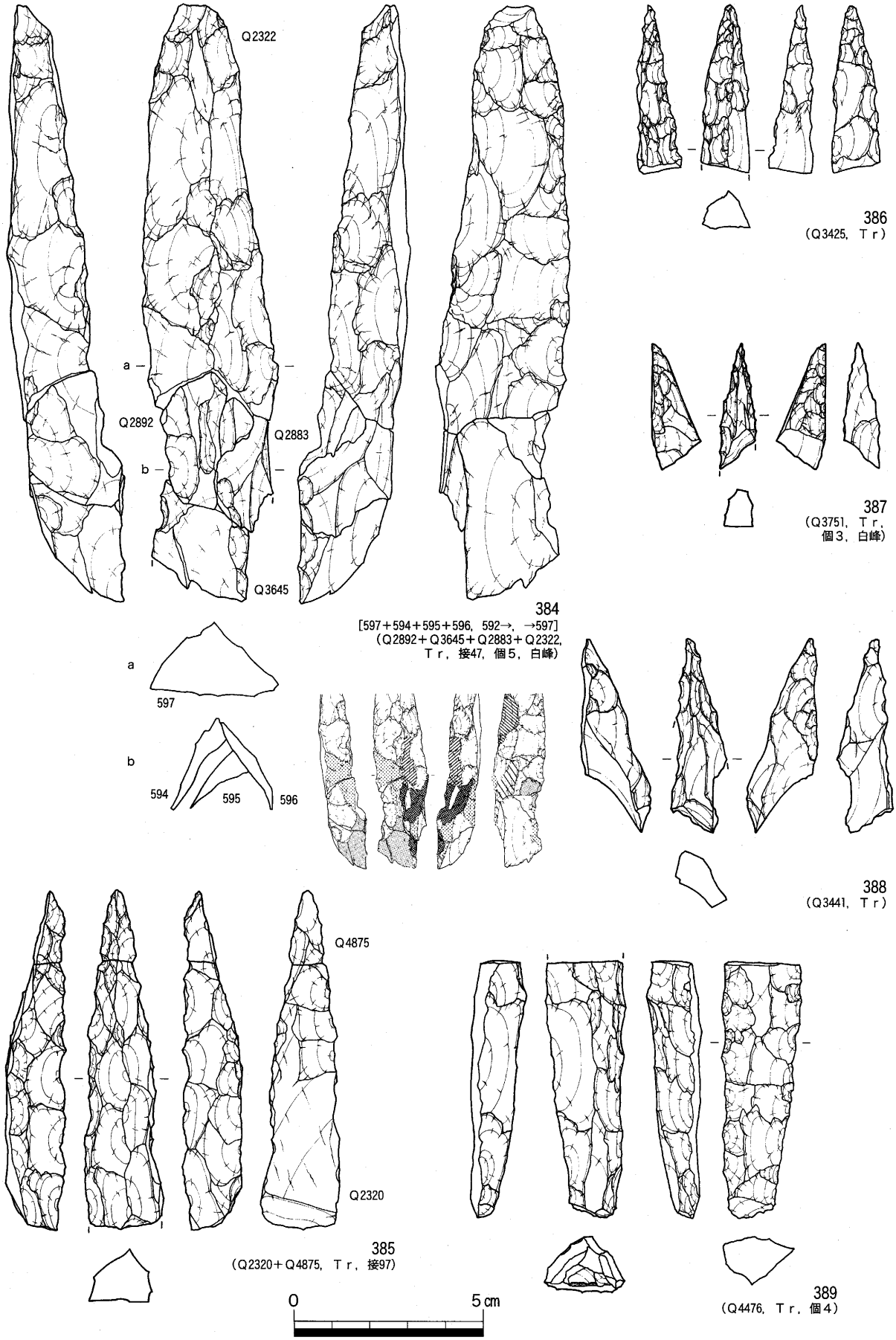
第27表　３ａ区エリア１ブロック１Ａ　角錐状石器　属性表

ナイフ形石器（第112図～第115図）

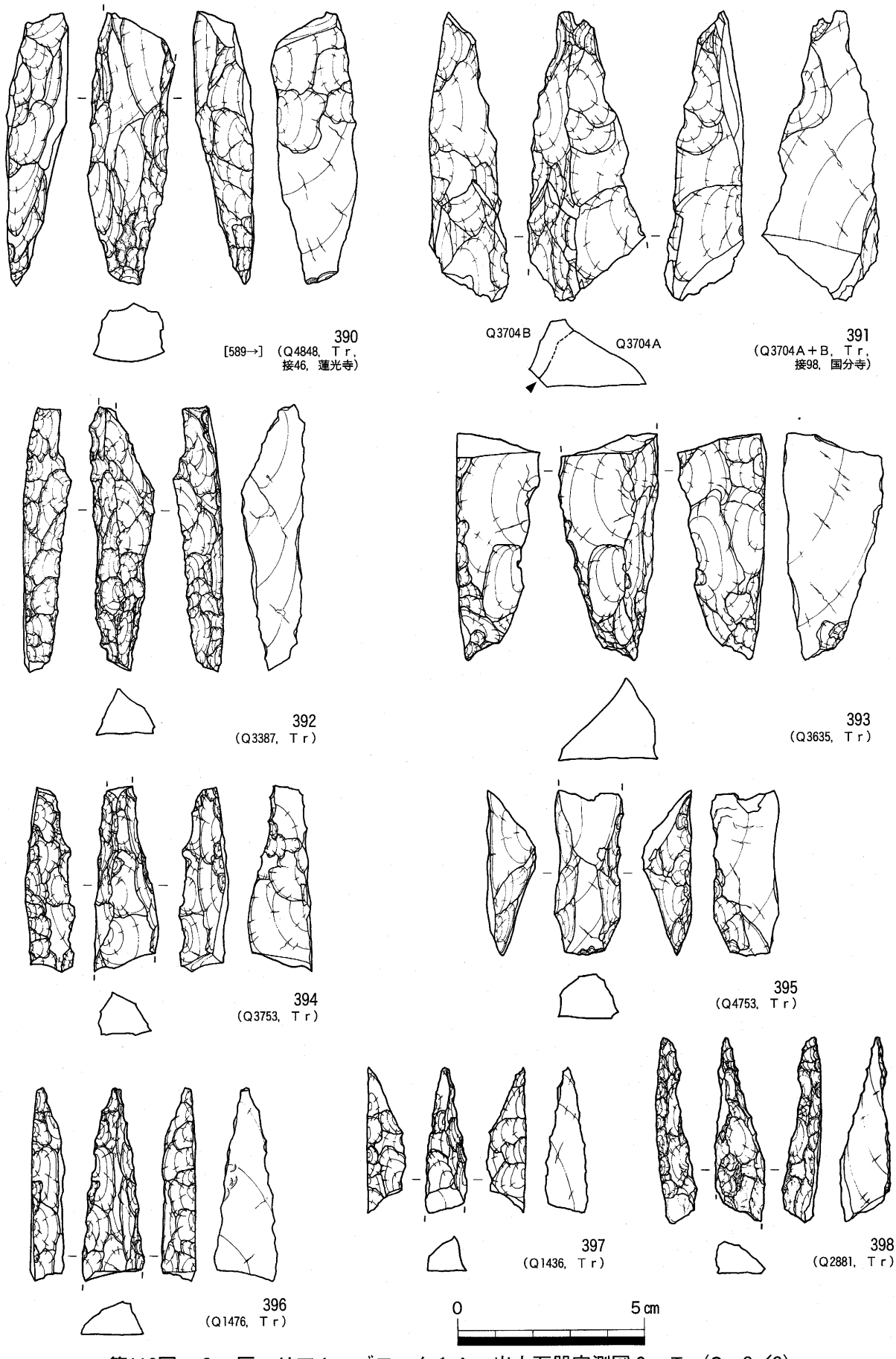
一側縁加工のナイフ形石器が１点のみ出土している。素材はポジティブな石核底面を背面に取り込む横長剥片である。先行する剥離面は１面のみで，素材の打撃方向とはやや横にずれる。なお，角錐状石器として報告しているが，第114図の403・407はナイフ形石器と考えることもできる。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	断面形	石材	整形加工	個体・接合	グリッド	備考
415	115	111		Q2301	35.8×20.8×7.2	3.1	半欠	□	An-A	1-S		g12	

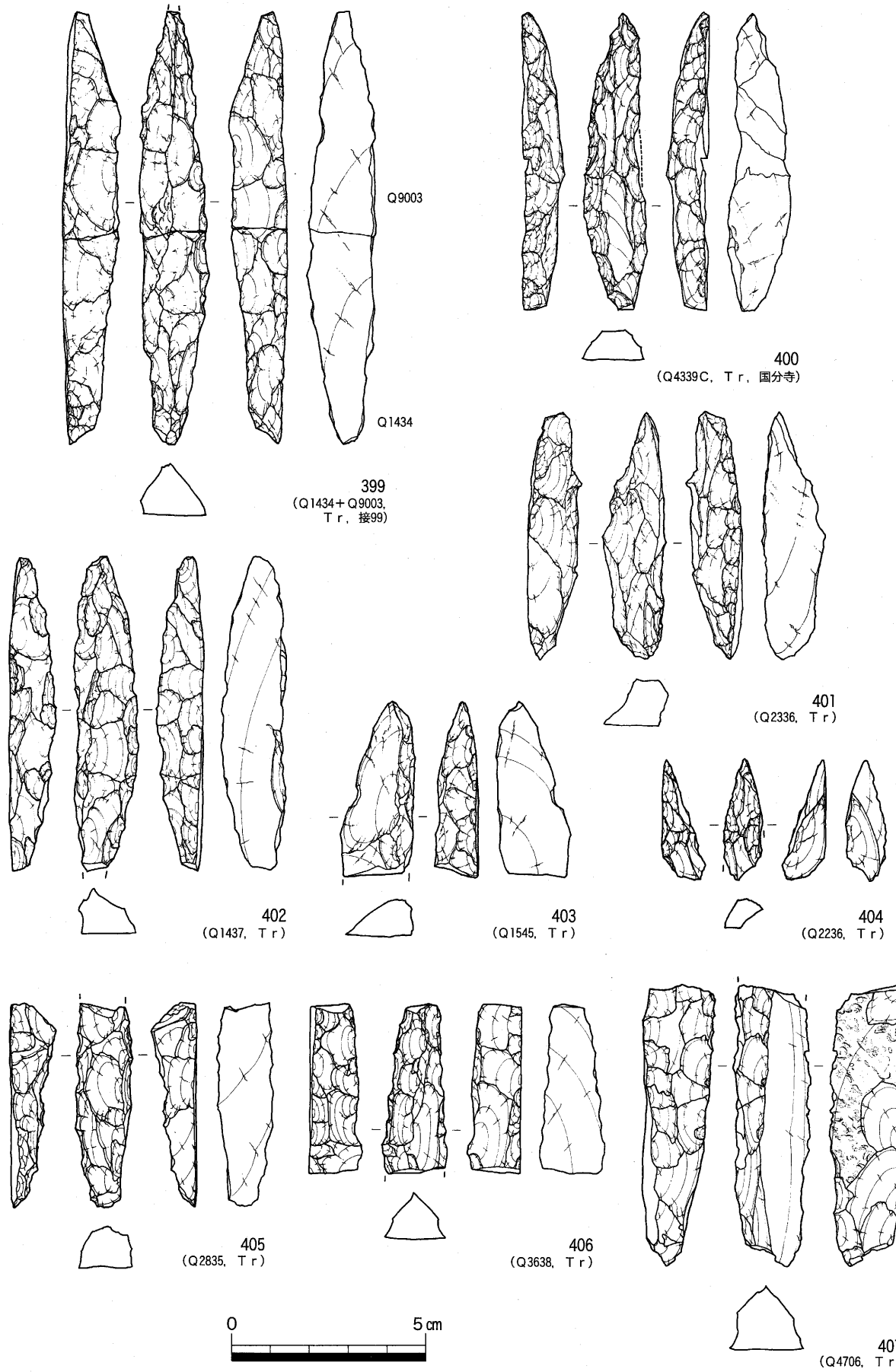
第28表　３ａ区エリア１ブロック１Ａ　ナイフ形石器　属性表



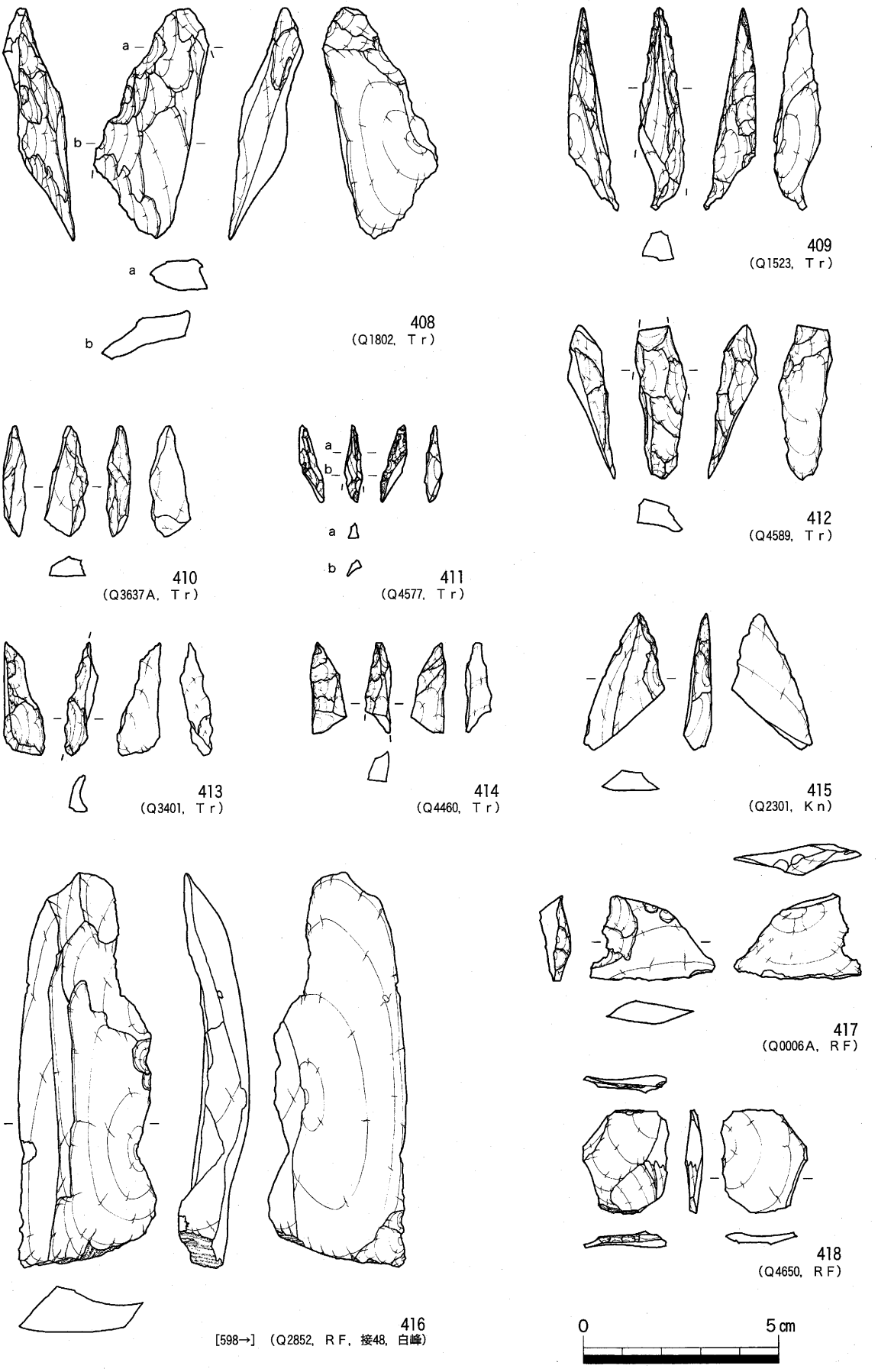
第112図　3a区エリア1　ブロック1A　出土石器実測図1　Tr　(S=2/3)



第113図　3a区エリア1　ブロック1A　出土石器実測図2　Tr（S=2／3）



第114図　3a区エリア1　ブロック1A　出土石器実測図3　Tr　(S=2／3)



第115図　3a区エリア1　ブロック1A　出土石器実測図4　Tr・Kn・RF　(S=2/3)

加工痕有剥片・使用痕有剥片（第115図～第117図）

加工痕有剥片が6点，使用痕有剥片が3点ある。416・419・421は，長さないし幅が70.0㎜を越える大形の剥片を素材に用いて，末端あるいは側縁部に二次加工を施す。419は素材の打面に接する側縁部を裏面側から連続的に加工した後，打面を転じて打瘤部を除去し，さらに末端部にも連続的な加工を施すなど全体として加工量が大きい。一方，416・421は剥片の一部を加工しただけで，加工量は少ない。

417・418・420は長さ50.0㎜未満の剥片に加工が施される。417は側縁の一部にノッチ状の加工がみられる。418は側縁に角度の急な加工を連続的に施し，一見掻器様である。420は剥片末端に主として背面側から連続的な加工がみられ，角錐状石器の先端部付近の調整剥片の可能性も残る。

422・423は背面に自然面を取り込む不定形剥片の一部に，連続して微細剥離痕が観察できる。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	石材	打面	側縁	末端	個体・接合	グリッド	備考
416	115	116	42	Q2852	35.8×102.8×18.5	44.1	完形	An-D	×	×	○	接48	g13	白峰
417	115	116		Q0006A	22.2×32.7×8.0	3.2	一部欠	An-D	×	○	×		g13	
418	115	116		Q4650	22.0×27.0×4.5	2.1	一部欠	An-D	×	○	×		f12	
419	117	116	30	Q4849	86.5×52.5×19.0	65.0	完形	An-A	○	○	○		g12	
420	117	116		Q4761	41.5×18.5×7.5	4.4	完形	An-A	○	○	○		e13	
421	117	116		Q4109	51.5×82.7×18.5	55.9	完形	An-D	×	×	○		f12	
422	117	116		Q2387	41.0×44.2×12.5	17.0	完形	An-D	×	△	×		f12	微細剥離痕
423	117	116		Q1459	62.5×85.0×19.0	63.9	完形	An-A	×	△	×		f12	微細剥離痕

第29表　3a区エリア1ブロック1A　加工痕有剥片・使用痕有剥片　属性表

石核（第116図，第118図，第119図）

3点出土している。425は長さ40.0㎜未満の小形の交互並列剥離の石核で，作業面の幅は30.0㎜以下に留まり，当ブロック出土の法量と比較してかなり小さい。一方で，424・426は長さが80.0～120.0㎜と大形で，特に424は長さ100.0㎜以上の横長剥片を剥取した剥離痕をとどめる。426は長さの割に厚みがある塊状の石核で，急角度の剥離面が多い。いずれも打面・作業面が固定されず，適宜それらを入れ替えながら剥片剥離を進めたものと考えられる。分布は大形の石核がブロック北側に，小形の石核1点が南側に分布する。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	石材	打面調整	面転移	個体・接合	グリッド	備考
424	118	116	41	Q4323	87.0×110.0×22.0	199.8	完形	An-A	○	○	接45	g12	白峰
425	118	116		Q1431	32.5×27.0×12.5	7.9	半折	An-C	×	○		f12	
426	119	116	41	Q2277	82.0×78.5×55.0	329.5	完形	An-D	×	○	接44	g12	国分寺

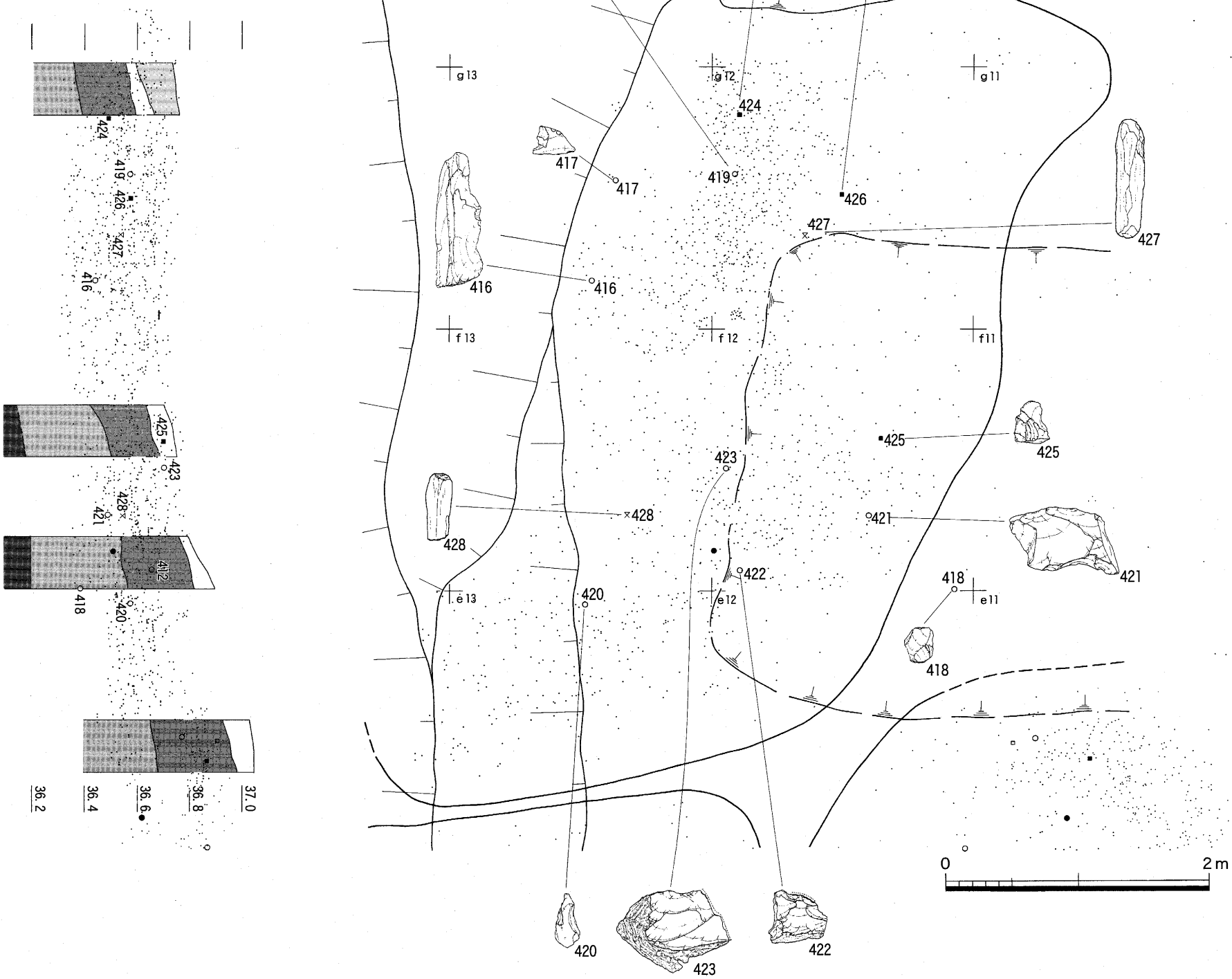
第30表　3a区エリア1ブロック1A　石核　属性表

叩石（第119図）

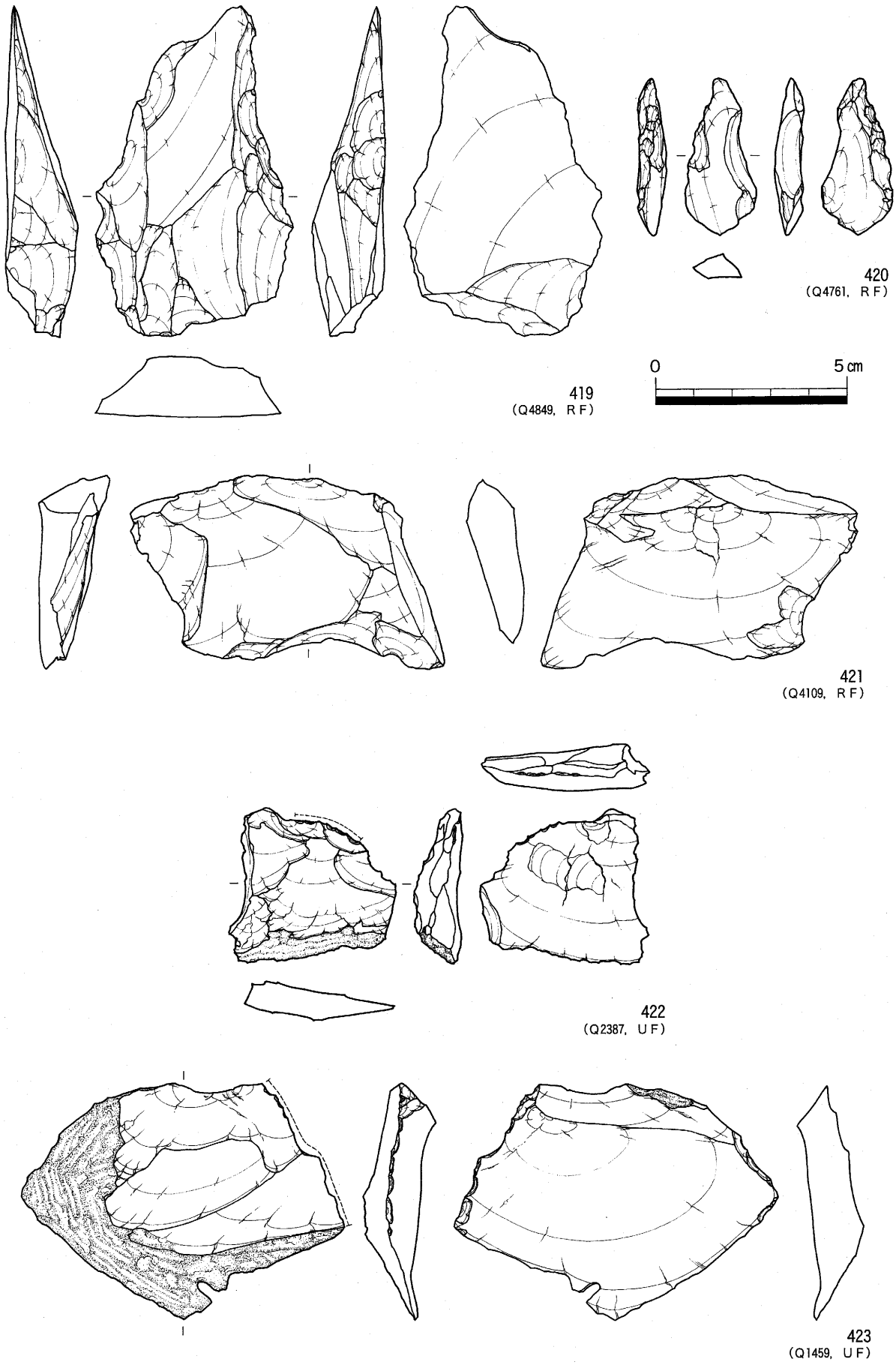
2点出土している。いずれも結晶片岩製で，427は緑泥質で風化が著しく，428は結晶質で灰色を呈する。427には敲打痕が明瞭ではないが，428は頭部に敲打痕が残る。427はブロックの北側，428ブロック南部に分布する。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	石材	頭部	側縁	尾部	接合関係	グリッド	備考
427	119	116		Q3619	90.0×22.0×15.4	38.1	縦割	結晶片岩	?	?	?		g12	風化顕著
428	119	116		Q2911	50.0×20.5×18.5	26.0	半折	結晶片岩	○	×	-		f13	

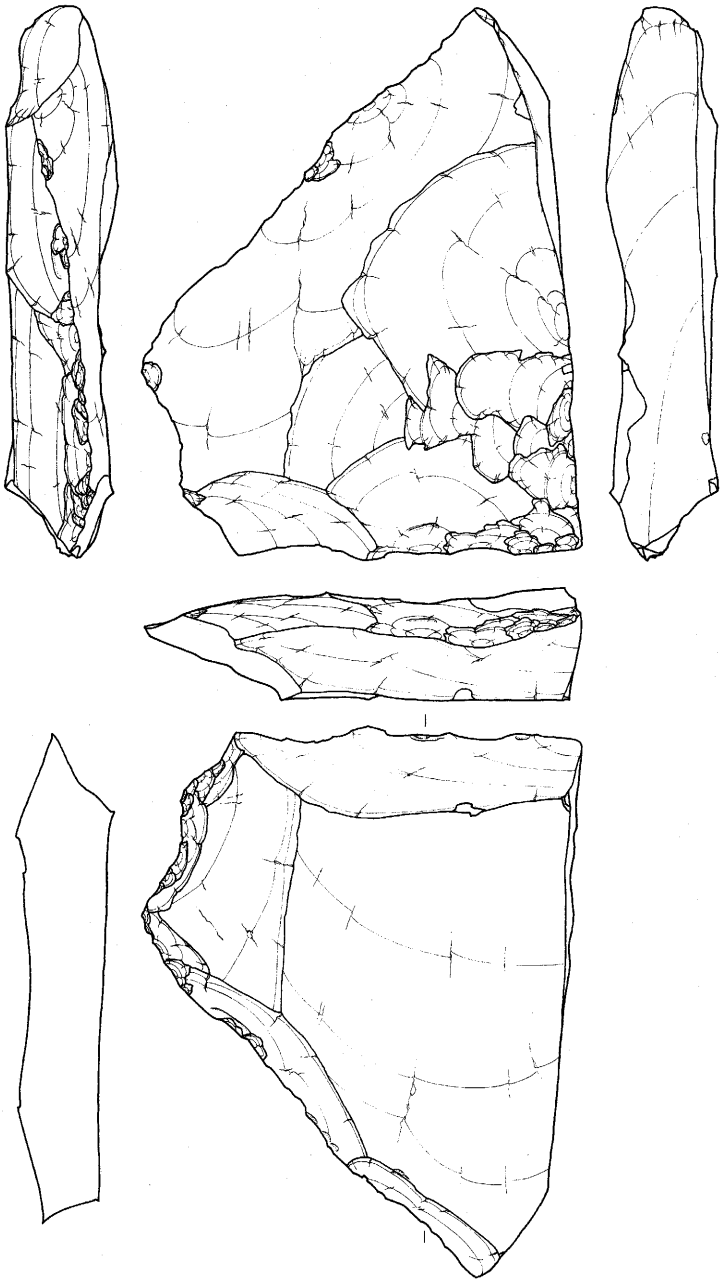
第31表　3a区エリア1ブロック1A　叩石　属性表



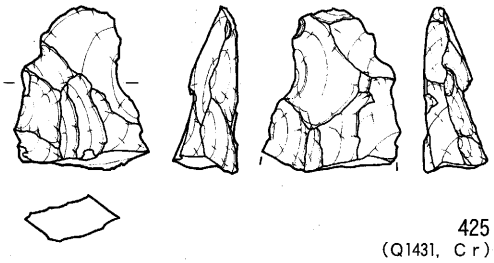
第116図　3 a 区エリア１・２器種別石器分布図２　ブロック１Ａ　RF・UF・Cr・HS　（S＝1／40　垂直分布S＝1／20）



第117図　3a区エリア1　ブロック1A　出土石器実測図5　RF　(S=2/3)



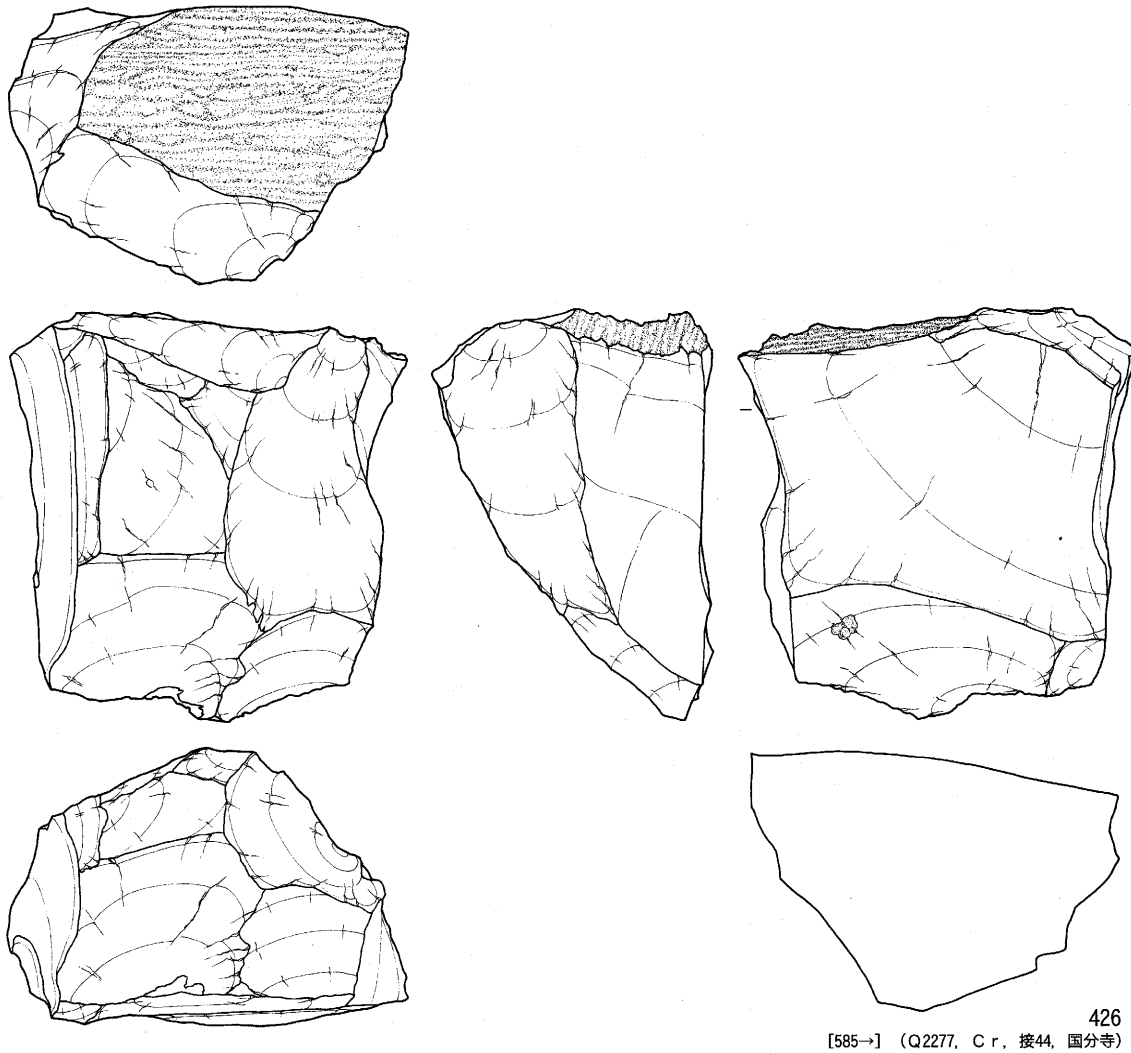
424
[587→] (Q4323, Cr, 接45, 白峰)

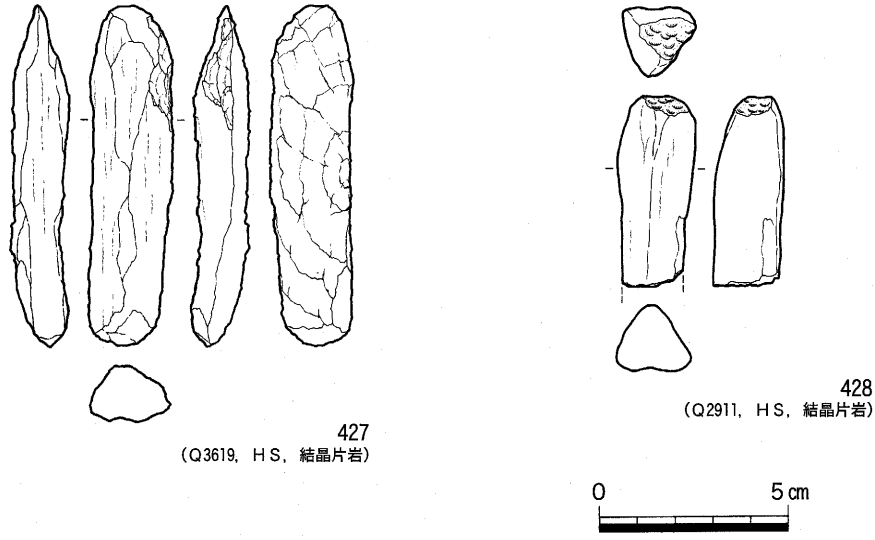


425
(Q1431, Cr)

0 5cm

第118図　3a区エリア1　ブロック1A　出土石器実測図6　Cr　(S=2／3)





第119図　3 a区エリア1　ブロック1 A　出土石器実測図7　Cr・HS　(S=2／3, 1／2)

（7）３a区エリア１ブロック１ＢＬ

〈石器分布〉

エリア１ブロック１Ｂはすでに述べたように，層位的に上位のものと下位のものに区分することができる。ここでは，下位の石器群をブロック１ＢＬとして報告し，上位のブロック１ＢＨと区分する。

調査区西側中央付近に位置し，平面的には北側を古墳時代の土坑に削平されるが，その削平は当該ブロックには及んでいないと考えられる。南北10m，東西８mの不整形状である。垂直方向の分布幅は36.55m～36.9mまでの約35cmで，３a層を中心に，下位部はＡＴガラスを多く含有する３b層に相当食い込む。部分的に方形に石器分布がまとまる傾向にあるが，これは２mグリッドごとに出土レベルを参考にして層位区分を行ったために，一部ではグリッドを違えると実体としての層位区分と矛盾が生じ，結果いずれかの層位に偏って分類されたものである。つまり，出土レベルがやや高いものは元来上位層に帰属させるべきものとも言える。このように上下の層位区分はその境界部分にあっては必ずしも厳密なものではない。

出土した石器の総数は483点，主要石器は角錐状石器が大半を占め，ナイフ形石器は２点のみである。石材はAn-Dとした緻密な白色系サヌカイトとAn-Cとした粉状に風化するやや粗質の白色風化系サヌカイトが多く，サヌカイト以外の石材はみられない。礫は２点が単独で分布する。

器種	点数	比率(全)	比率(定形)	重量(g)	重量比(全)	備考
Tr	16(3)	3.5%	68.0%	163.4	18.7%	（）はⅡ種接合片で外数とした
Kn	2	0.4	8.0	30.0	3.4	
Sc	0					
RF	4	0.8	16.0	107.9	12.4	
UF	1	0.2	4.0	8.5	1.0	
Cr	1	0.2	4.0	62.3	7.1	
Fl	164	34.1		398.2	45.7	
Ch	290	60.3		101.3	11.6	
RM	0					
GS	0					
HS	1(1)	0.4				
Sa	0					
Po	0					
合計	479(4)	99.9%	100.0%	871.6	99.9%	

属性項目	数値
面積 (m^2)	40
石器数 (点)	483(1466)
分布密度 (点／m^2)	12.1(36.7)
平均重量 (g)	1.82(3.6)
定形石器保有率(%)	5.6(5.7)
定形石器重量比(%)	54.3(51.3)
接合個体数 (点)	7(84)
接合率 (%)	1.4(5.7)
接合重量 (g)	88.2 (1716.0)
接合重量比 (%)	10.1(32.5)
備考	
( )内の数値は上位層(1BH)を含むブロック１B全体の数値。接合個体数は礫接合を含まない。	

標高	点数 (1B合計)
36.25	1 (1)
36.3～36.45	0 (0)
36.5	2 (2)
36.55	12 (12)
36.6	24 (24)
36.65	41 (41)
36.7	83 (83)
36.75	152 (175)
36.8	123 (247)
36.85	60 (252)
36.9	0 (173)
36.95	0 (151)
37	0 (181)
37.05	0 (140)
37.1	0 (24)

第32表　３a区エリア１　ブロック１ＢＬ　石器分布内容総括表

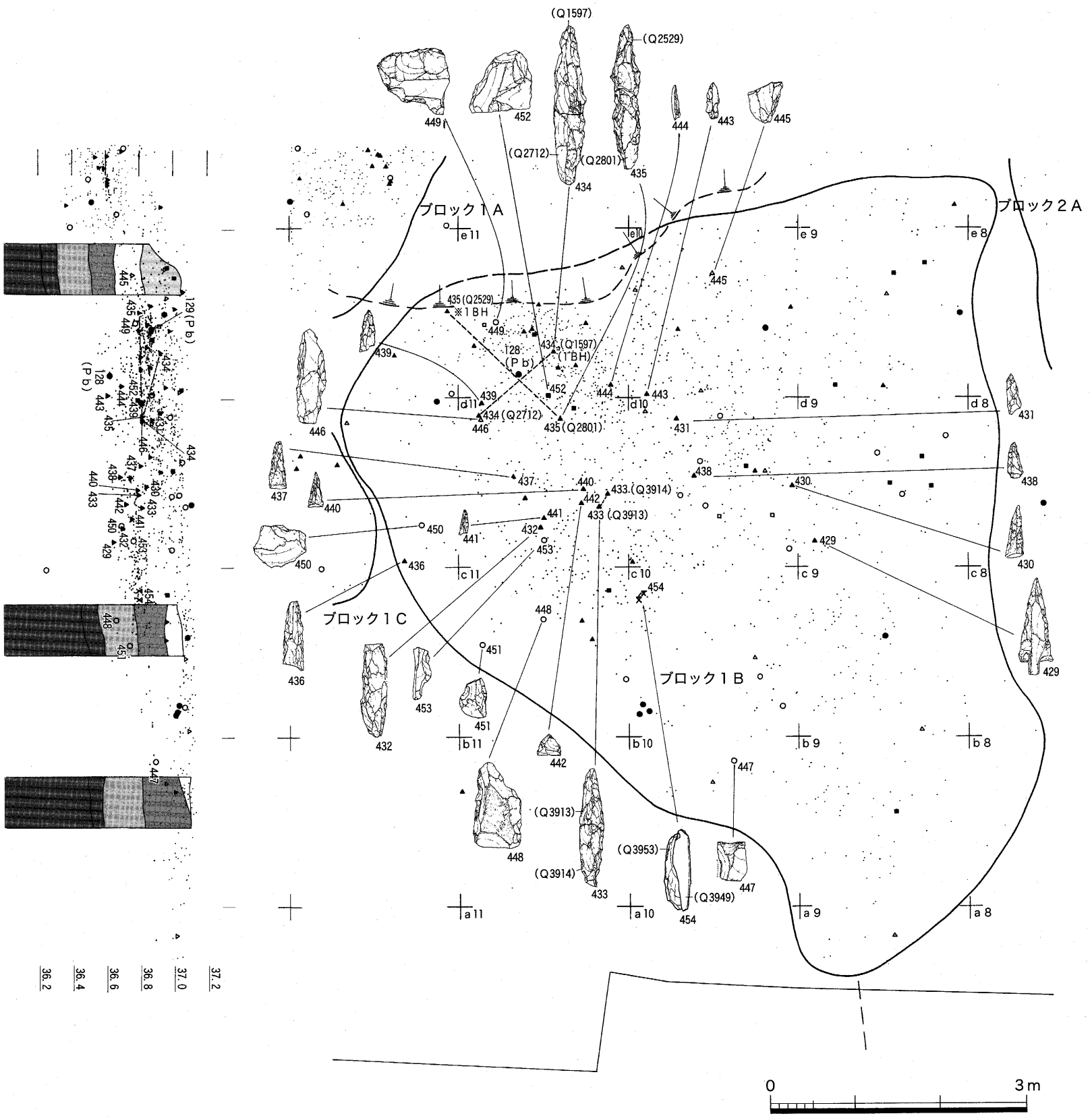
〈主要石器〉

角錐状石器（第121図・第122図429～444）

16点の角錐状石器がある。そのうち434・435は１ＢＨとのⅡ種接合である。完形品もしくは９割以上の残存率と考えられるものとして３個体。いずれも100.0mmを越える大形品である。折損品であっても，遺存部の長さと幅の関係から，長さが100.0mmを越える大形品とみて間違いないものが，ほかに２点ある。長さ60.0～80.0mmに満たない可能性があるものとして，441の１点がある。

器面に施される整形加工は，小片１点を除く15点のうち，三面加工が６点，二面加工が９点である。出土数としては二面加工がやや卓越するが，ブロック１Ａと同様に他のブロックと比べると，三面加工をより多く含む傾向がある。稜上加工は三面加工のうち５点，二面加工のうち７点にみられ，ブロック１Ａと同様に比率的には大差ない。

素材については整形加工が顕著なために判断する材料が少ないが，429・433・434は自然面かあるいは風化が顕著な古い剥離面を裏面にとどめており，その他の多くが剥片の主要剥離面を裏面に設定する点とは異なる。石材はAn-CとAn-Dが目立つ。



第120図　３ａ区エリア１・２器種別石器分布図３　ブロック１ＢＬ　(S＝1／60　垂直分布S＝1／30)

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量(g)	遺存状態	断面形	石材	整形加工	個体･接合	グリッド	備考
429	121	120	31	Q4214	75.5×27.0×23.5	23.4	半折	△	An-D	3-S		d9	
430	121	120		Q4212	41.0×14.5×10.0	4.3	半折	△	An-D	3-W		d10	
431	121	120		Q3513	32.0×12.0×17.5	2.1	小片	△	An-A	3-W		d10	調整剥片
432	121	120	31	Q3883	73.5×21.0×17.0	28.3	先端欠	△	An-C	3-W		d11	
433	121	120	31	Q3913＋Q3914	92.5×19.0×15.0	23.5	先端欠	△	An-D	3-W	接100	d11	裏面は古い剥離面
434	121	120 124	31	Q1597＋Q2712	125.5×26.0×22.0	59.7	完形	△	An-C	3-W	接101	e11＋d11	Q1597は上層出土 先端未調整
435	122	120 124	31	Q2529＋Q2801	114.0×23.0×20.0	41.8	完形	□	An-A	2-W	接102	d11＋e12	Q2529は上層出土で 折損後の再加工あり
436	122	120		Q3023	54.0×16.0×12.0	10.9	半折	△	An-A	2-W		d12	
437	122	120		Q3878	38.0×14.0×12.0	5.1	半欠	△	An-D	2-W		d11	
438	122	120		Q4231	28.0×12.0×11.0	3.0	小片	△	An-C	2-W		d10	
439	122	120		Q2715	33.0×12.0×12.0	3.2	半折	△	An-C	2-W		d11	
440	122	120		Q3909	29.0×12.0×8.0	2.0	先端のみ	△	An-A	2-W		d11	
441	122	120		Q3898	20.5×7.3×6.5	0.7	先端のみ	△	An-C	2-W		d11	
442	122	120		Q3910	17.0×18.7×7.5	1.9	先端のみ	□	An-C	2-S		d11	
443	122	120		Q4221	29.0×10.5×10.0	2.2	基部のみ	△	An-A	2-S	個4	e10	
444	122	120		Q4813	27.4×7.3×8.2	1.0	小片	-	An-D	-		e11	433に石質が似る

第33表　３ａ区エリア１ブロック１ＢＬ　角錐状石器　属性表

ナイフ形石器（第122図　445・446）

２点出土している。445は正面右側縁に細かな整形加工があり，基部には刃潰し状の敲打と推定される階段状剥離が表裏面にみられる。左側縁は主要剥離面側との前後関係が不明なネガティブな１枚の剥離面で構成される。これを刃縁と認定して一側縁加工ナイフ形石器とした。左側縁の剥離面が主要剥離面を切っている場合は，二側縁加工ナイフ形石器もしくは角錐状石器になりうる。

446は先端部に若干の素材面を残すことから二側縁加工ナイフ形石器とした。先端，基部との整形途上に折損し，折損後も加工を続けている。角錐状石器と石材も共通しており，右側縁の加工がもう少し進行すると角錐状石器となる。角錐状石器の整形途上品の可能性もあろう。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	断面形	石材	整形加工	個体・接合	ブロック	備考
445	122	120	32	Q3223	32.5×27.5×10.5	7.8	半折	□	An-C	1-S		e10	基部加工あり
446	122	120	31	Q2711	73.5×23.5×13.5	22.4	完形	□	An-D	2-S		d11	

第34表　３ａ区エリア１ブロック１ＢＬ　ナイフ形石器　属性表

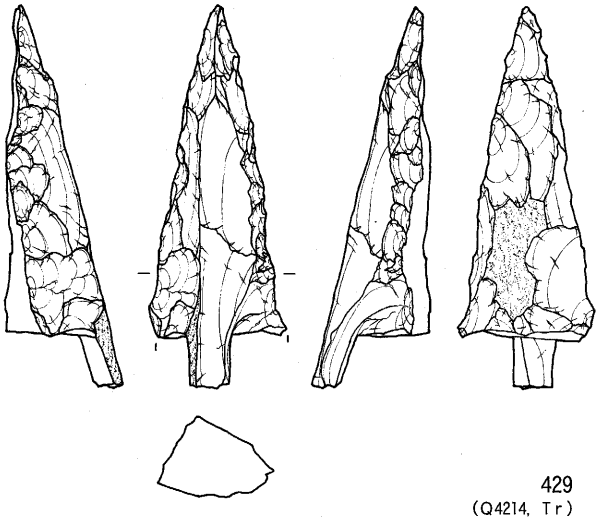
加工痕有剥片・使用痕有剥片（第123図　447～451・453）

加工痕有剥片が４点，使用痕有剥片が１点ある。448・449は大形で厚みのある剥片の周縁に連続的に加工量の多い二次加工を施すもの。いずれも加工途上に半折する。角錐状石器整形途上の状態である可能性もある。

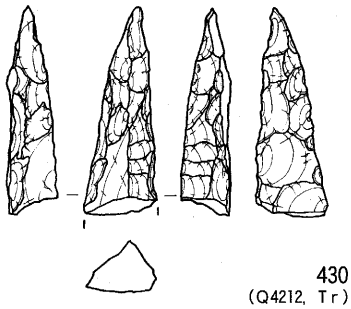
一方，447・450・451は小形剥片の側縁ないし末端に若干の加工を施すものである。451は剥片末端の加工が急角度でなされており，スクレイパーと認定できるかもしれない。なお453は頭部調整が施された縦長剥片である。当遺跡にあって珍しい。

番号	実	分布	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	石材	打面	側縁	末端	個体・接合	グリッド	備考
447	123	120		Q3781	30.5×22.7×9.0	4.8	完形	An-A	×	△	○		b10	
448	123	120	32	Q3792	68.0×38.0×22.0	60.5	半折	An-A	○	○	○		c11	自然面残置
449	123	120		Q2536	52.5×56.0×21.0	39.6	完形	An-A	○	○	○		e11	
450	123	120		Q3860	34.0×41.0×8.0	8.5	完形	An-A	×	△	△		d12	微細剥離痕
451	123	120		Q3841	31.8×20.8×5.3	3.0	一部欠	An-D	○	×	○△		c11	微細剥離痕

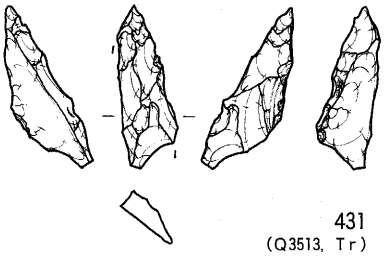
第35表　３ａ区エリア１ブロック１ＢＬ　加工痕有剥片・使用痕有剥片　属性表



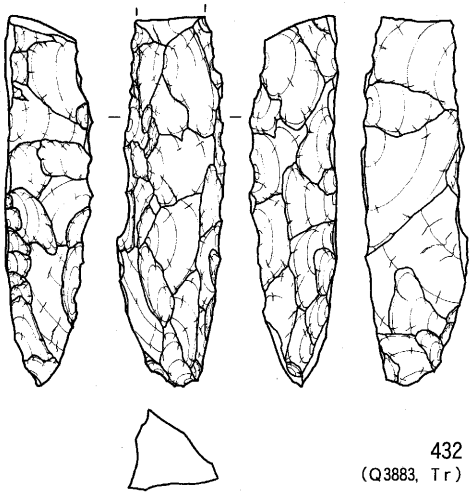
429
(Q4214, Tr)



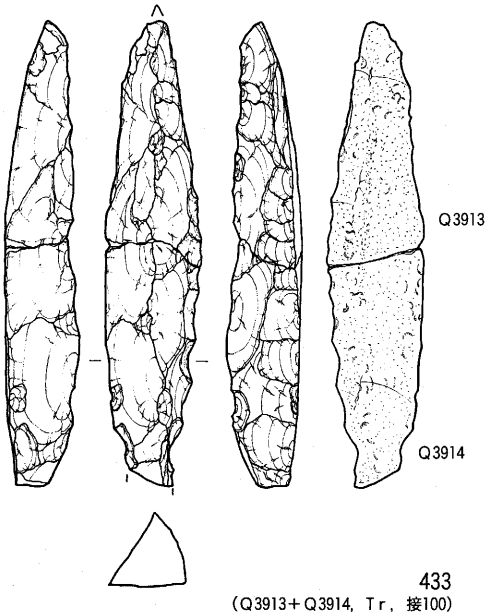
430
(Q4212, Tr)



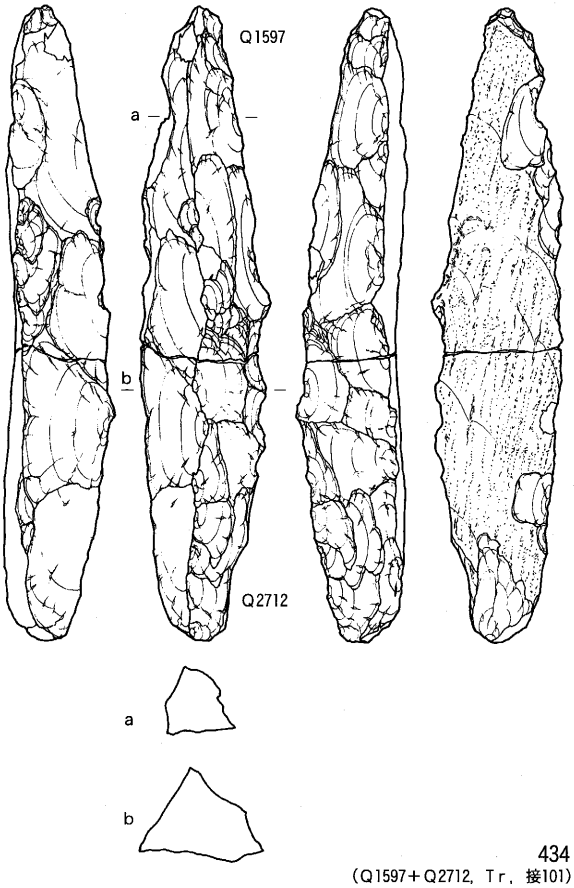
431
(Q3513, Tr)



432
(Q3883, Tr)



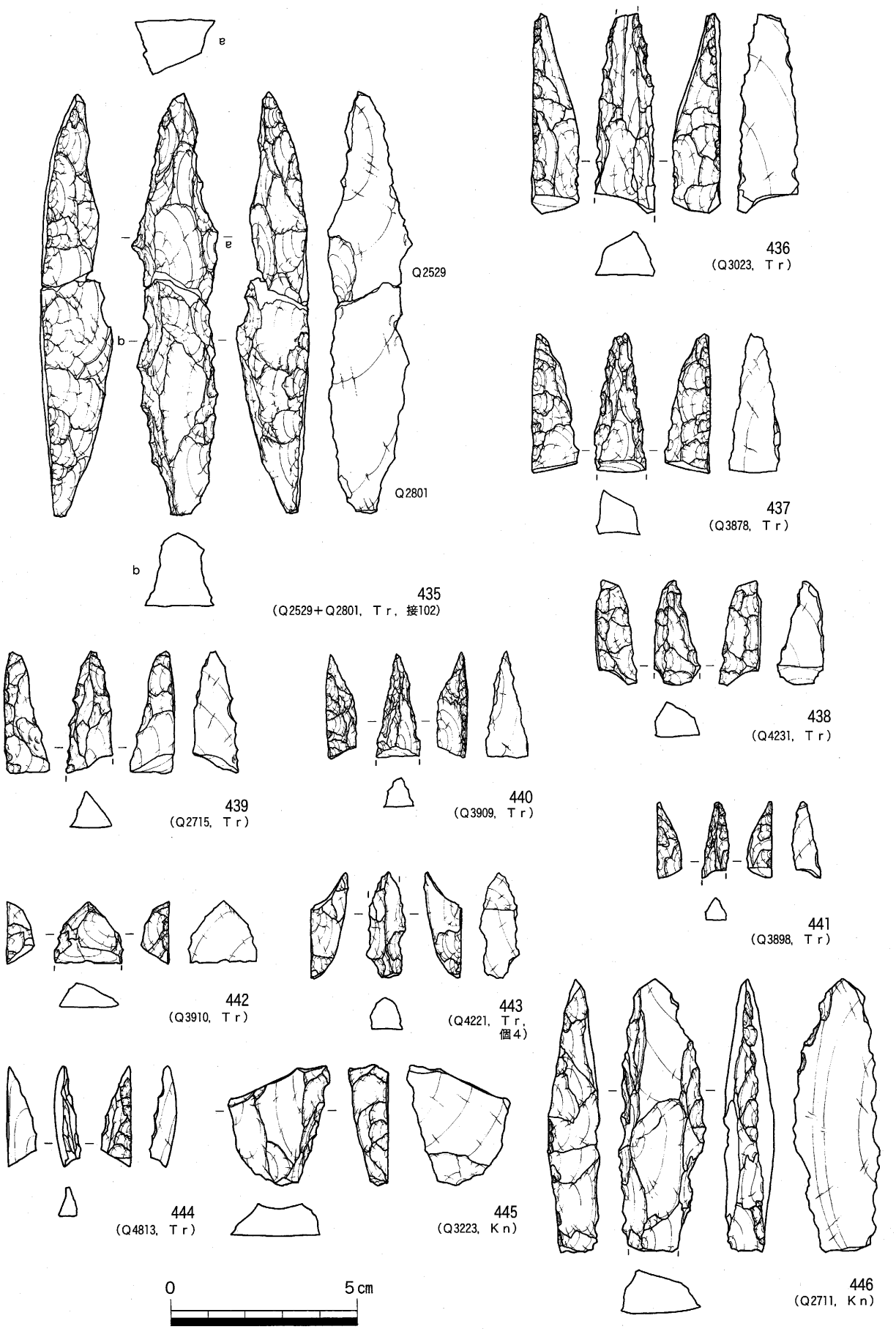
433
(Q3913+Q3914, Tr, 接100)



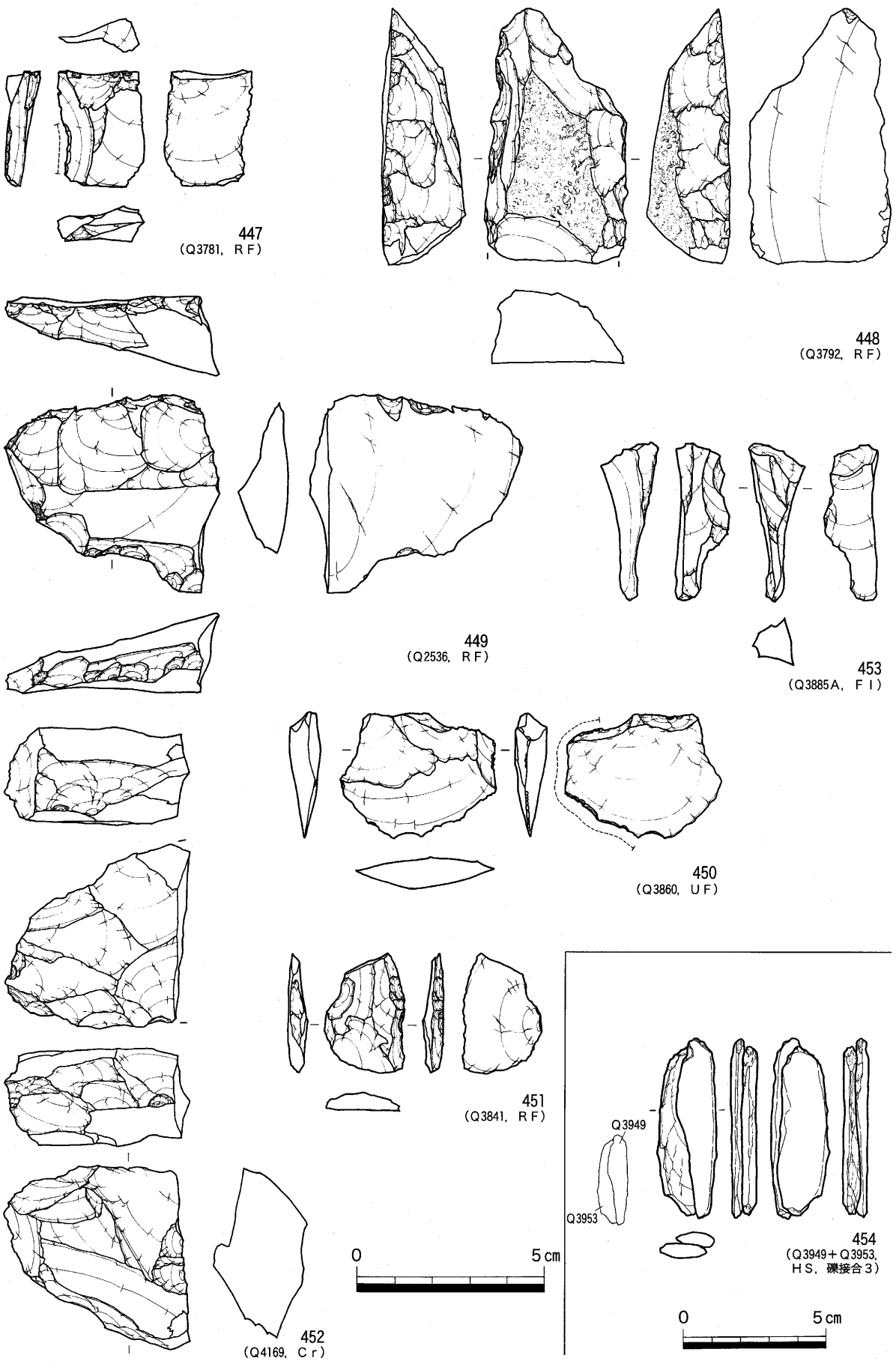
434
(Q1597+Q2712, Tr, 接101)

0 5cm

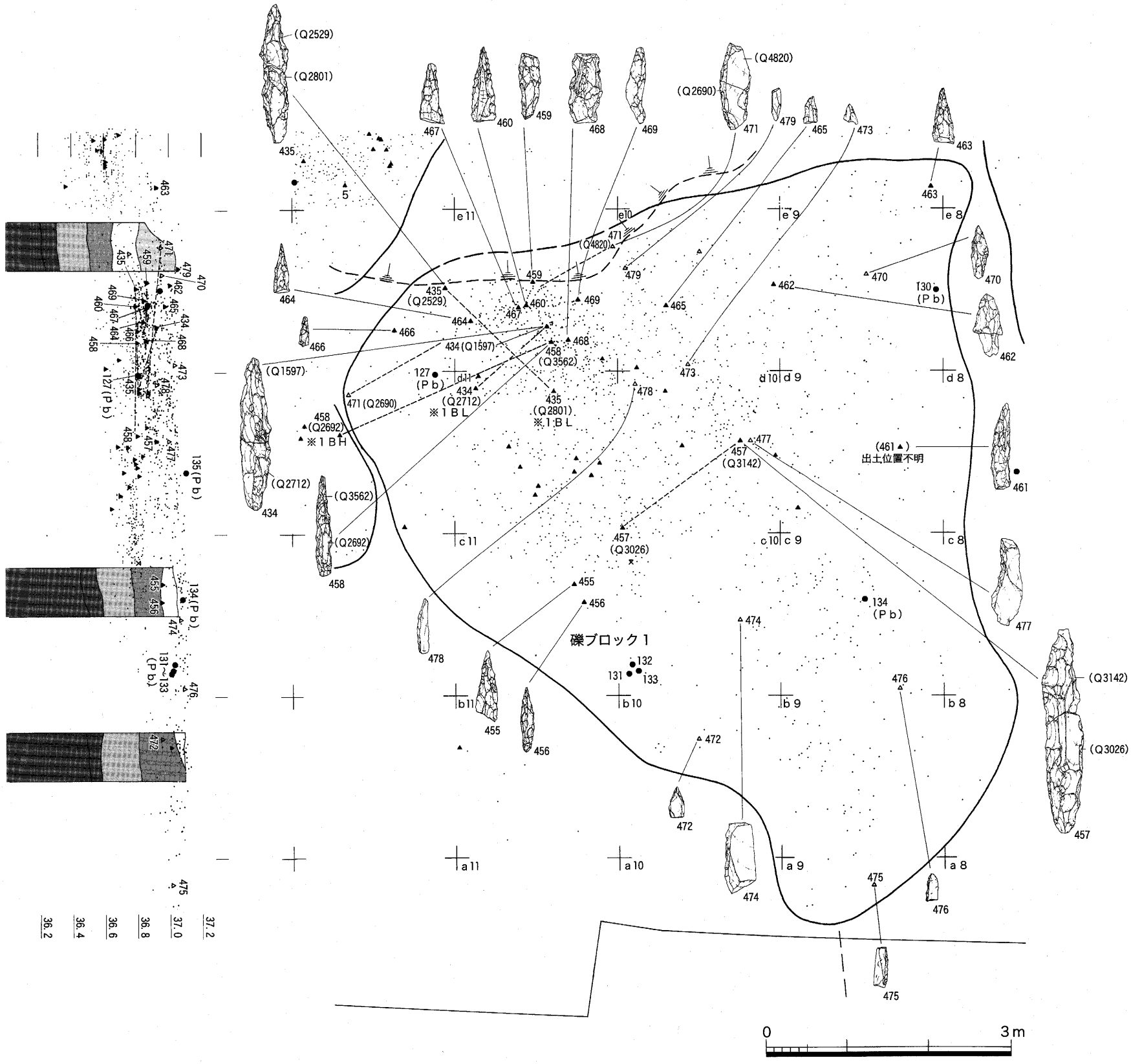
第121図　３ａ区エリア１　ブロック１ＢＬ　出土石器実測図１　Tr　(S=2／3)



第122図　3a区エリア1　ブロック1BL　出土石器実測図2　Tr・Kn　(S=2／3)



第123図　3 a 区エリア1　ブロック1 B L　出土石器実測図3　RF・UF・Cr・HS（S=2／3, 1／2）



第124図　３ａ区エリア１・２器種別石器分布図４　ブロック１ＢＨ　Tr・Kn　(S＝1／60　垂直分布S＝1／30)

石核（第123図　452）

1点出土している。452は厚さ25.0㎜で，打面転移が著しい交互剥離石核の半折品である。石材はAn-Dで，やや石理が目立つ。ブロック北側で出土したものである。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量(g)	遺存状態	石材	打面調整	面転移	個体･接合	グリッド	備考
452	123	120	32	Q4169A	49.0×48.8×21.0	62.3	半折	An-D	×	○		d11	

第36表　３ａ区エリア１ブロック１ＢＬ　石核　属性表

叩石（第123図　454）

1点出土している。結晶片岩製で，近接して出土した2片の接合資料である。石質は緑泥質で風化が著しい。敲打痕は明瞭ではないが，上下端に平滑化した斜縁部をとどめる。剥離打撃に際して，打面部との間で生じた摩擦によるものと見なされる。縦方向に分裂する。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量(g)	遺存状態	石材	頭部	側縁	尾部	接合	グリッド	備考
454	123	120		Q3949＋Q3953	63.0×20.5×9.0	14.0	縦割	結晶片岩	?	?	?	礫接合（P3）	c10	風化顕著。上下端に斜縁部を有する。

第37表　３ａ区エリア１ブロック１ＢＬ　叩石　属性表

（8）３ａ区エリア１ブロック１ＢＨ

調査区南西のブロックである。南北10m，東西８ｍでややいびつな三角形状の平面分布を示す。石器組成は角錐状石器が最も多く16点を数えるが，ナイフ形石器，スクレイパー，石核の組成も安定しており，下層における組成比率と大きく異なる。

ブロック内は北西部に特に石器が集中する箇所があり，中央部の東西に若干のまとまり，そして南東部に散漫なまとまりがある。なお，グリッドｄ９には，出土位置記録が取れていない石器50点がある。内訳はＴｒ１点，ＲＦ３点，Ｃｒ５点，Ｆｌ22点，Ｃｈ19点（以上Ⅱ種接合を重複カウント）である。また，レベルデータが記録されていないものが合計30点ある。石器垂直分布では，36.75m～37.1mの40㎝厚さの範囲に石器が分布し，36.85mと37.0mの２箇所に集中がみられる。36.85m付近のまとまりは，下層石器の数量が36.75から上位にかけて，急速に少なくなるレベルである。グリッド毎に点検した先の方法で，上下層が十分に区分できていない可能性が残る。特に下位層と接する部分には角錐状石器が多い。

層位的にはⅡ層内でほとんどの石器が収まるようである。なかでも南に広がる散漫な分布域は，北西集中部の上位に位置するものから，連続的に出土レベルをたどることができる。層位的には北西集中の下位の一群がⅢａ層に一部食い込むが，ほかは概ねⅡ層中に存在する。一部でまとまる礫（礫ブロック１）も同じ層位にある。

器種	点数	比率(全)	比率(定形)	重量(g)	重量比(全)	備考
Tr	17(1)	1.8%	32.7%	292.8	6.6%	（）はⅡ種接合片で外数とした
Kn	10(1)	1.1%	19.2%	62.8	1.4%	
Sc	3	0.3%	5.8%	131.0	3.0%	
RF	7(1)	0.8%	13.5%	105.0	2.4%	
UF	4	0.4%	7.7%	59.0	1.3%	
Cr	11(3)	1.4%	21.2%	1683.1	38.2%	
Fl	385(4)	39.5%		1900.1	43.1%	
Ch	538	54.6%		174.6	4.0%	
RM	0					
GS	0					
HS	0					
Sa	0					
Po	0					
合計	975(985)	99.9%	100.1%	4409.7	100.0%	

属性項目	数値
面積　(㎡)	40
石器数　(点)	985(1466)
分布密度(点／㎡)	24.6(36.7)
平均重量　(g)	4.48(3.6)
定形石器保有率（%）	5.3(5.7)
定形石器重量比（%）	52.9(51.3)
接合個体数　(点)	77(84)
接合率　(%)	7.9(5.7)
接合重量　(g)	1627.8 (1716.0)
接合重量比　(%)	36.9(32.5)
備考	
( )内の数値は上位層(1BH)を含むブロック１Ｂ全体の数値。 接合個体数は礫接合を含まない。	

標高	点数（1B合計）
36.25	0　(1)
36.3～36.45	0　(0)
36.5	0　(2)
36.55	0　(12)
36.6	0　(24)
36.65	0　(41)
36.7	0　(83)
36.75	23　(175)
36.8	124　(247)
36.85	192　(252)
36.9	154　(173)
36.95	151　(151)
37	181　(181)
37.05	140　(140)
37.1	24　(24)
37.15	0　(0)

第38表　３ａ区エリア１　小ブロック１ＢＨ　石器分布内容総括表

〈主要石器〉

角錐状石器（第125図・第126図　455～469）

合計17点の角錐状石器がある（調整剥片を除くと14点）。そのうち，ブロック１ＢＬ出土品とⅡ種接合関係にある２点（434・435）は，すでにブロック１ＢＬで報告した。完形品もしくは９割以上の残存率と考えられるものとして３個体。長さ50.0㎜強の456，80.0㎜強の458，165.0㎜の457と，各サイズが揃う。そのほか468は折損品だが，幅と長さの関係から，長さ100.0㎜を越える大形品と推定される。

整形加工は14点のうち，三面加工（四面加工を含む）が５点，二面加工が９点である。二面加工がやや卓越するが，ブロック１Ａと同様に他のブロックと比較して三面加工をより多く含む傾向がある。稜上加工は三面加工のうち４点，二面加工のうち６点にみられ，ブロック１Ａと同様に比率的には大差ない。

素材については整形加工が顕著なために判断する材料が少ないが，455～459は裏面に複数のネガティブな剥離面が認められるのに対して，460～468は素材剥片の主要剥離面を裏面に設定する。462は折損後の再加工に伴う整形剥片が折損面で接合したものである。

分布は下層のブロック１ＢＬと重複するブロック北西部，およびブロック中央西側に特に集中する傾向がある。

石材はAn-Aを主体として，An-C，An-Dを含む。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量(g)	遺存状態	断面形	石材	整形加工	個体・接合	ブロック	備考
455	125	124	33	Q1556	58.0×18.0×13.5	7.2	半折	◇	An-C	3(4)-W		c11	
456	125	124		Q1558	52.5×10.5×8.5	4.0	完形	△	An-A	3-W		c11	
457	125	124		Q3026＋Q3142	166.5×34.0×22.0	108.6	先端欠	△	An-A	3-W	接103	d10	粗整形段階
458	125	124		Q2692＋Q3562	82.5×13.3×13.5	12.6	完形	△	An-D	3-W	接104	d12＋e11	Q2692は1CH出土
459	125	124		Q2545	54.5×18.0×12.5	12.2	半折	□	An-C	3-S		e11	基部に自然面残置
460	125	124	33	Q3542	61.5×20.5×14.0	14.6	半折	□	An-D	2-S		e11	
461	126	124	33	Q0732	70.0×16.5×13.7	15.9	基部欠	△	An-A	2-W		d9	
462	126	124	33	Q1398＋Q3109	51.0×24.0×16.5	12.9	先端のみ	△	An-A	2-S	接105	e10	Q3109は折損後の再加工剥片　白峰
463	126	124	33	Q1301	46.0×17.5×11.8	7.6	半折	△	An-A	2-W		f9	基部は断面□
464	126	124	33	Q2670	40.8×13.0×8.0	3.2	半折	△	An-C	2-W		e11	
465	126	124		Q1365	22.5×12.0×8.8	2.2	先端のみ	△	An-A	2-S		e10	
466	126	124		Q2684	24.5×8.0×8.0	1.2	半折	△	An-A	2-W		e12	
467	126	124	33	Q2649	50.0×20.0×15.0	10.3	半折	△	An-C	2-W		e11	
468	126	124	33	Q2606	57.5×27.5×22.0	35.9	半折	△	An-A	2-W		e11	左側縁は下部折損後に整形
469	126	124		Q2562	63.0×16.5×13.0	8.3	先端のみ	△	An-A	2-W		e11	調整剥片

第39表　３ａ区エリア１ブロック１ＢＨ　角錐状石器　属性表

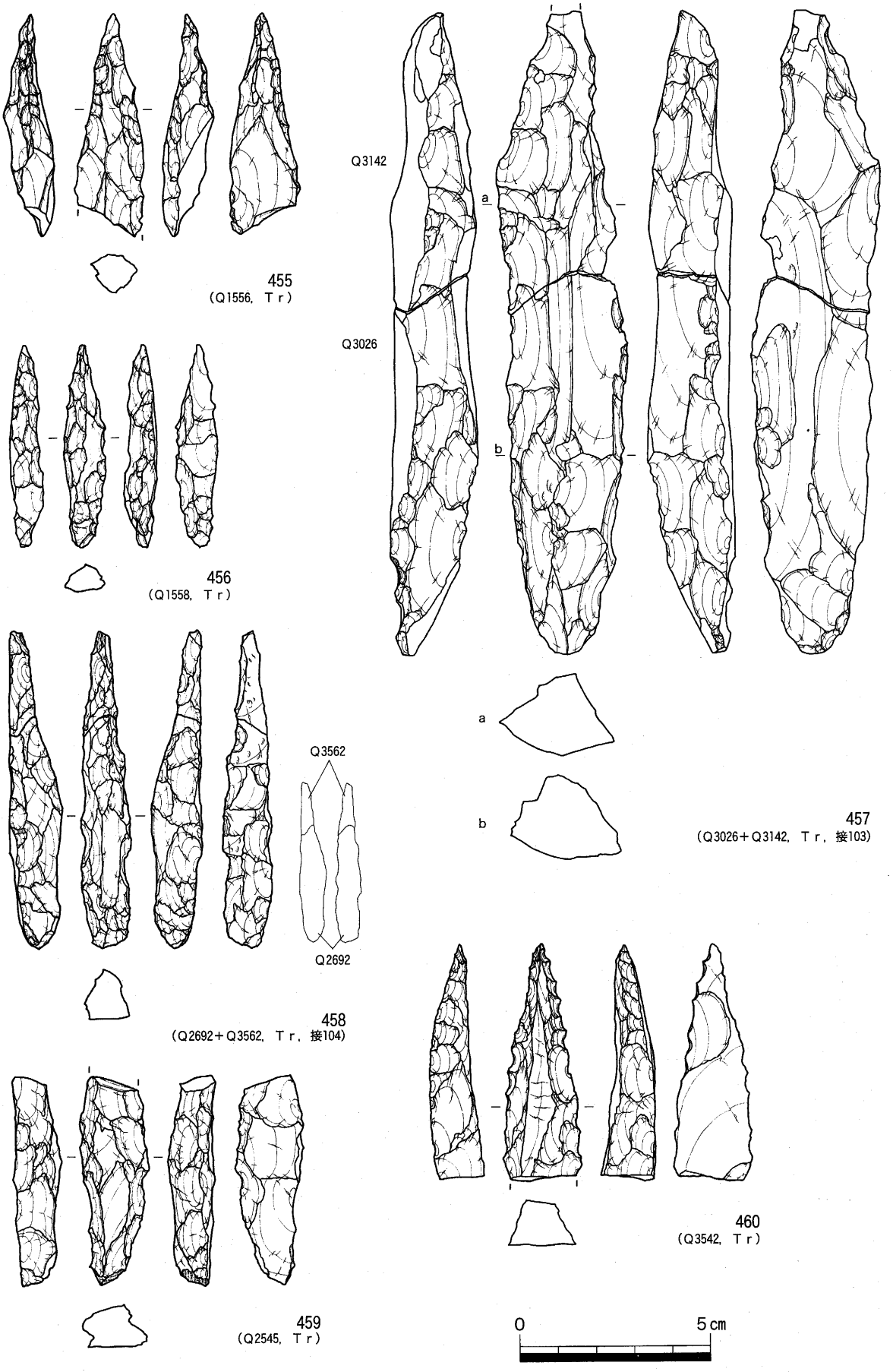
ナイフ形石器（第126図・第127図　470～479）

10点のナイフ形石器がある。うち７点が一側縁加工，3点が二側縁加工である。480・481は第127図に掲載しているが，器体の表裏面が残ってないので，剥片とした。整形加工に伴う剥片と考えられる。

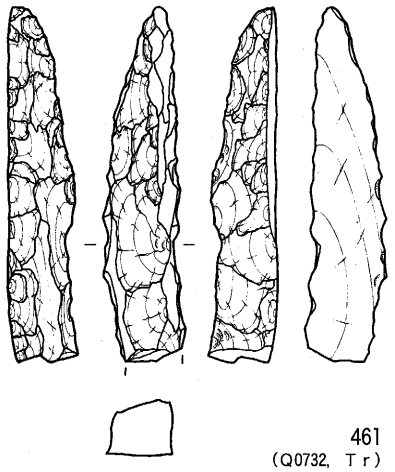
二側縁加工の（470～472）うち，470・472は先端部に対側縁加工が認められるものである。471は表裏の素材面に相反する方向の剥離痕が認められ，対側縁の整形加工は器体の中程で表裏交互に施される。

一側縁加工の（473～479）は，474（接72）・475が表面に石核底面および先行剥離面を留める連続剥取の横長剥片を素材とする。一方，477（接78）・478などは不定形剥片や折損片を素材に用いるものである。

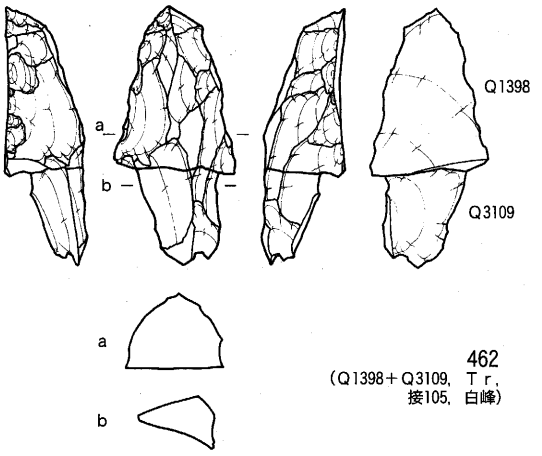
いずれも裏面側から整形加工を施し，対向調整はない。石材はAn-Aとした普通サヌカイトが主体。



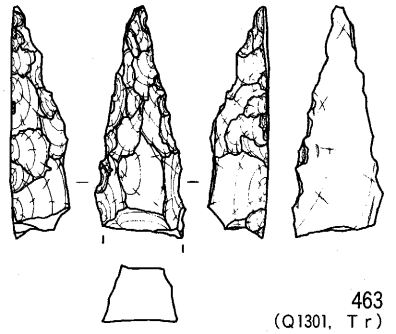
第125図　3a区エリア1　ブロック1BH　出土石器実測図1　Tr　(S=2/3)



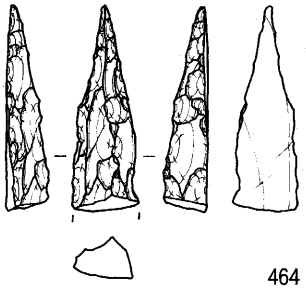
461
(Q0732, Tr)



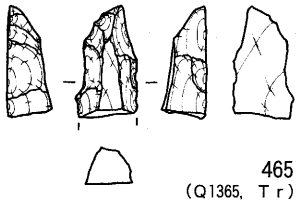
462
(Q1398＋Q3109, Tr,
接105, 白峰)



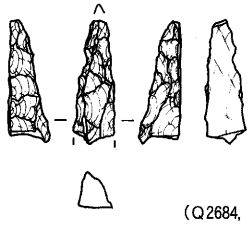
463
(Q1301, Tr)



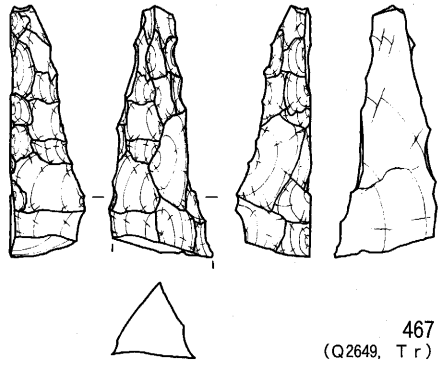
464
(Q2670, Tr)



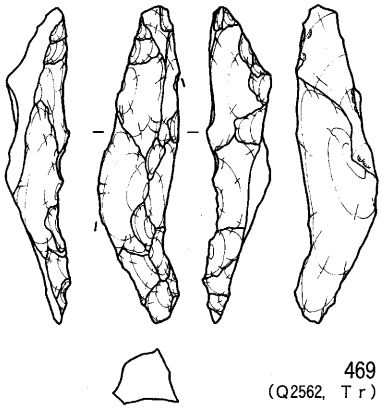
465
(Q1365, Tr)



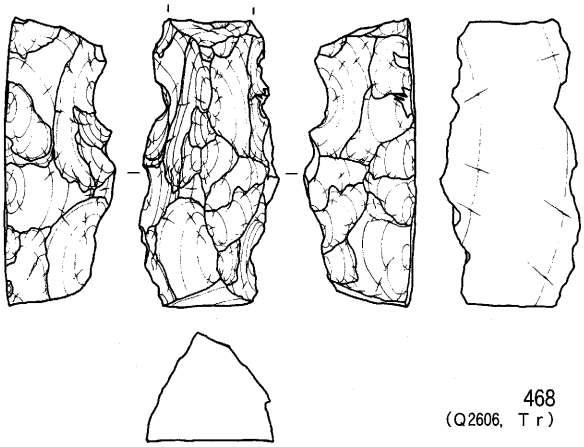
466
(Q2684, Tr)



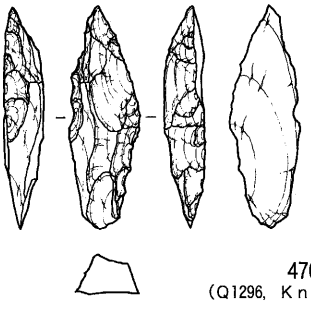
467
(Q2649, Tr)



469
(Q2562, Tr)

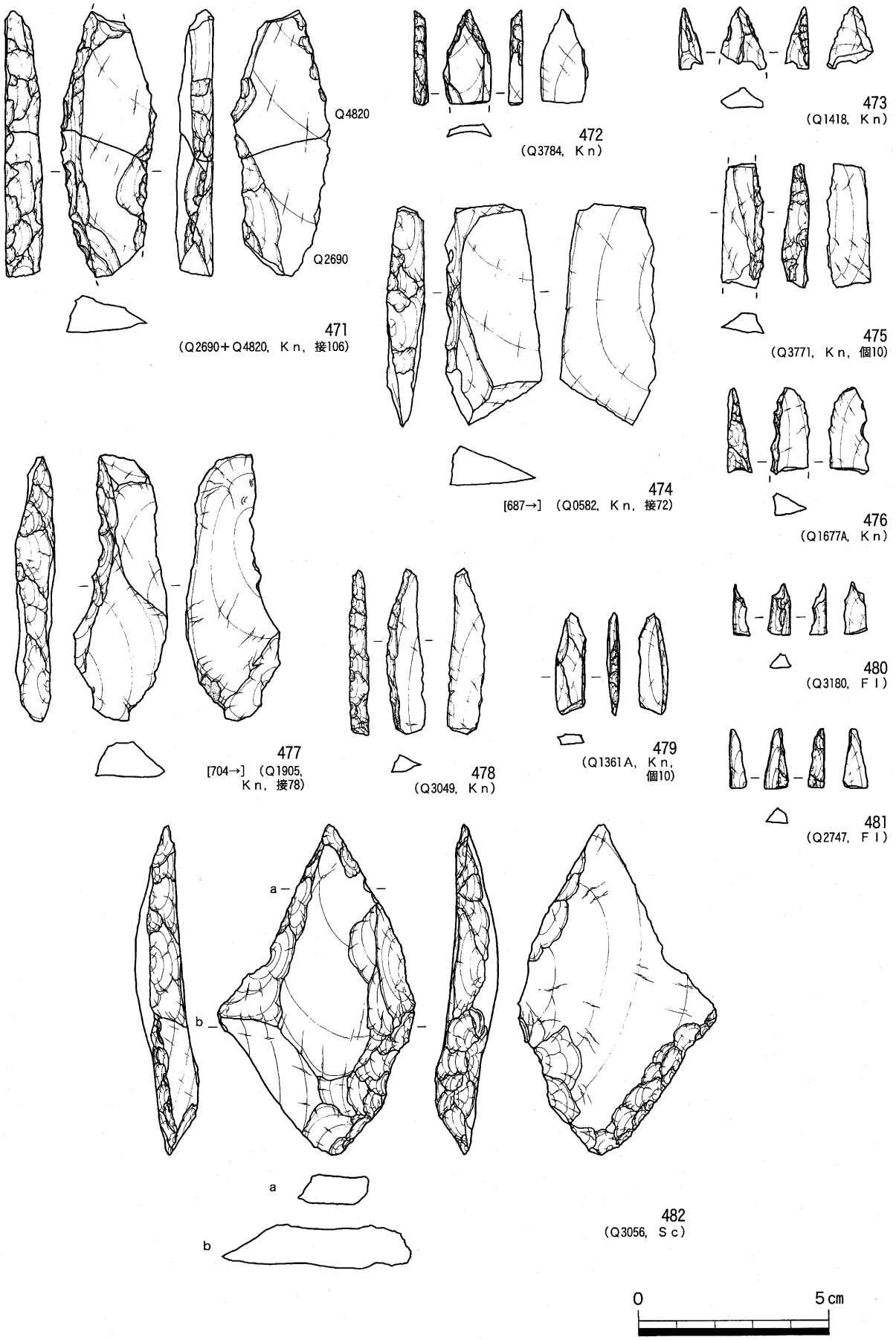


468
(Q2606, Tr)



470
(Q1296, Kn)

第126図　3a区エリア1　ブロック1BH　出土石器実測図2　Tr・Kn　(S=2／3)



第127図　3a区エリア1　ブロック1BH　出土石器実測図3　Kn・Fl・Sc　(S=2／3)

ブロック１ＢＨにおけるナイフ形石器の分布は，角錐状石器の分布と対照的に，ブロック南側のやや散漫な分布域，あるいは角錐状石器が特に集中する範囲の外縁で多く出土している。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（mm）	重量（g）	遺存状態	断面形	石材	整形加工	個体･接合	グリッド	備考
470	126	124	33	Q1296	44.0×14.0×8.0	4.5	完形	△	An-A	2-S		e9	
471	127	124	33	Q2690＋Q4820	71.0×25.5×10.0	19.6	先端欠	□	An-A	2-S	接106	d12＋e11	右側縁に素材の折損面を残す
472	127	124	34	Q3784	25.0×13.0×4.0	1.1	基部欠	□	An-A	2-S		b10	右側縁に石核底面を残す
473	127	124		Q1418	16.5×12.0×6.5	0.7	先端のみ	(□)	An-C	1-S		e10	
474	127	124	33	Q0582	58.5×25.5×10.5	14.8	先端欠	△	An-A	1-S	接72	c10	
475	127	124	34	Q3771	33.0×11.5×7.0	2.7	基部欠	□	An-A	1-S	個10	a9	
476	127	124		Q1677A	22.7×10.5×6.5	1.1	半折	△	An-A	1-S		c9	
477	127	124	33	Q1905	71.0×25.0×10.5	15.9	完形	△	An-A	1-S	接78	d10	
478	127	124	33	Q3049	44.0×10.0×5.5	2.0	完形	△	An-A	1-S		d10	
479	127	124		Q1361A	27.0×7.9×3.5	0.7	基部欠	□	An-A	1-S	個10	e10	
480	127	124		Q3180	13.7×5.7×4.5	0.3	小片	－	An-A	－		d9	調整剥片
481	127	124		Q2747	15.9×6.4×4.3	0.4	小片	－	An-C	－		d11	調整剥片

第40表　３ａ区エリア１ブロック１ＢＨ　ナイフ形石器　属性表

スクレイパー（第127図・第129図　482～484）

３点出土している。形態は一定しない。482は幅広の剥片の表裏面を加工し，一端を尖らせる形態で，剥片の末端に背面側から連続的で均質な加工が施されていることからスクレイパーに認定した。ただし，先端を尖らせていることなどから，角錐状石器の整形途上段階か，あるいはそれを転用したものの可能性が考えられる。483は分厚い横長剥片の末端を背面側から急角度に加工するものである。調整角度は70度で，掻器と認定できる。484は打面が平坦で平面扇状の横長剥片の末端部に背面側から連続的な浅い刃部加工を施すもの。刃縁は使用のためか，若干磨滅した痕跡を認める。

分布は，482･483がブロック中央付近においてＲＦ･ＵＦとともに出土し，484はブロック北西部の角錐状石器が多く分布する範囲で出土している。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（mm）	重量(g)	遺存状態	石材	打面	側縁	末端	個体･接合	グリッド	備考
482	127	128	34	Q3056	88.0×53.0×17.0	47.6	完形	An-A	○	○	◎		d10	先端が尖る
483	129	128	34	Q0005	48.0×65.0×25.0	71.6	完形	An-A	×	○	◎		d10	
484	129	128		Q1572	53.0×30.0×10.0	11.8	完形	An-C	×	×	◎		e11	

（凡例：◎刃部加工　○整形加工　×未加工）

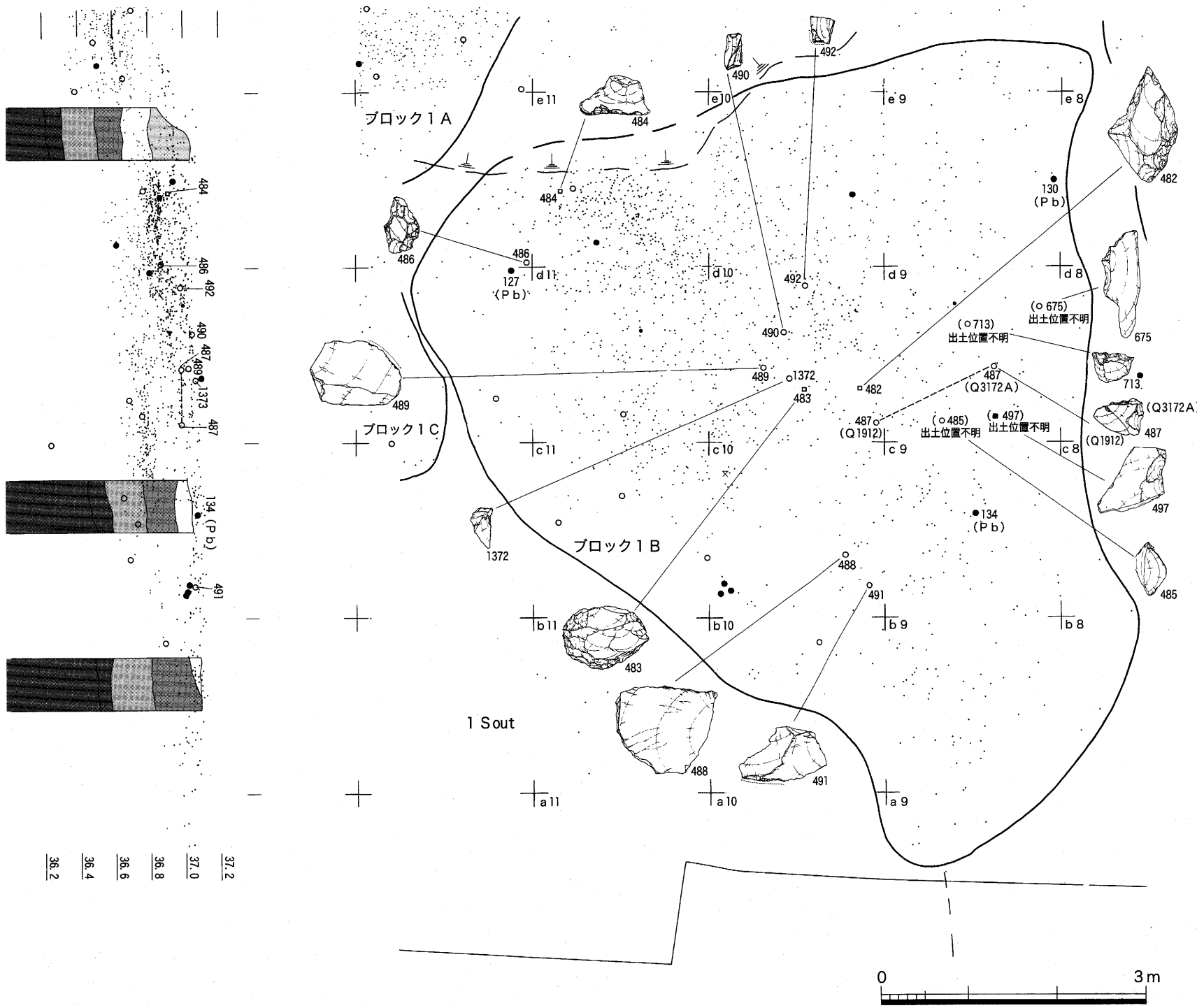
第41表　３ａ区エリア１ブロック１ＢＨ　スクレイパー　属性表

加工痕有剥片・使用痕有剥片（第129図・第130図　485～492）

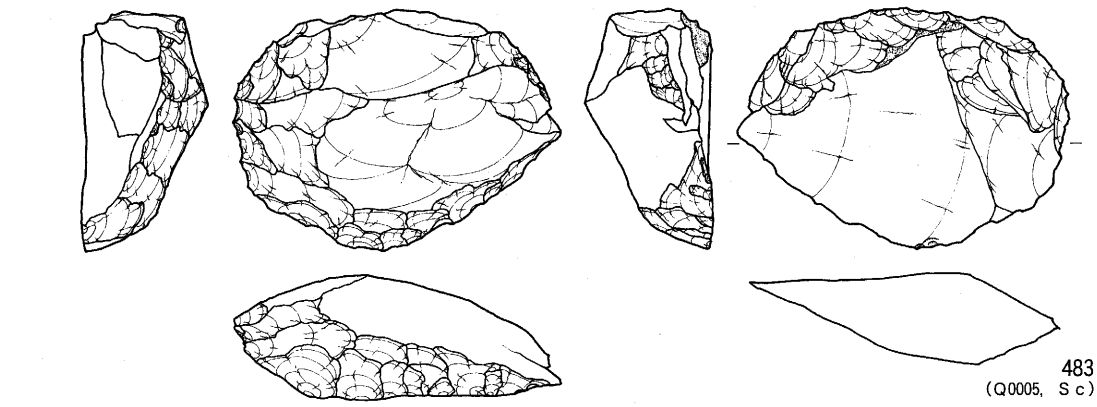
加工痕有剥片が８点ある。不定形剥片を素材とするものが多く，そのほぼ全周に加工を施すもの（486･487）と剥片の一部に加工を施すものの二者がある。うち485は先端の尖りを作出した可能性が考えられる。石錐として供された可能性もある。

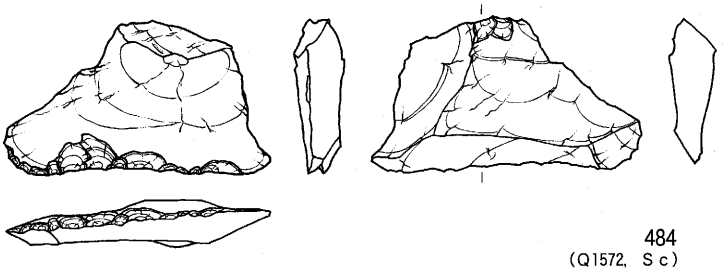
番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（mm）	重量(g)	遺存状態	石材	打面	側縁	末端	個体･接合	グリッド	備考
485	129	128		Q0752	40.5×24.5×7.5	5.1	完形	An-A	-	○	○		d9	先端が尖る
486	129	128		Q2705	42.8×26.5×9.0	8.1	一部欠	An-C	○	○	○		e12	一部に抉り
487	129	128		Q1912＋Q3172A	28.2×37.8×5.0	3.9	完形	An-A	○	○	○	接107	d9＋d10	
488	129	128		Q0018	67.0×77.0×18.0	64.8	完形	An-A	×	○	△	個10	c10	微細剥離痕
489	129	128		Q1833	68.7×49.8×9.5	34.5	完形	An-A	-	△	○△		d10	微細剥離痕
490	129	128		Q1841	13.5×28.0×7.0	2.3	完形	An-C	○	×	×		d10	
491	130	128		Q0581	42.0×67.0×12.0	19.9	完形	An-A	×	×	○	個10･接81	c10	白峰
492	130	128		Q1903	20.0×20.7×5.5	2.5	完形	An-C	-	○	○		d10	

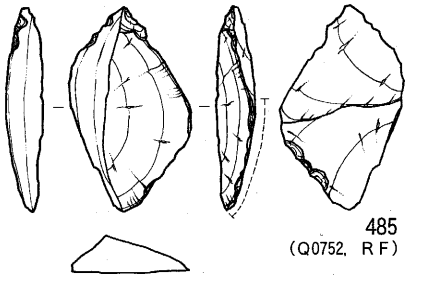
第42表　３ａ区エリア１ブロック１ＢＨ　加工痕有剥片・使用痕有剥片　属性表

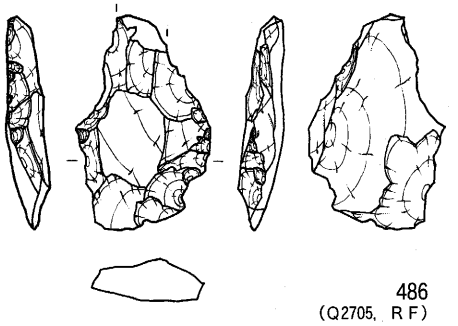


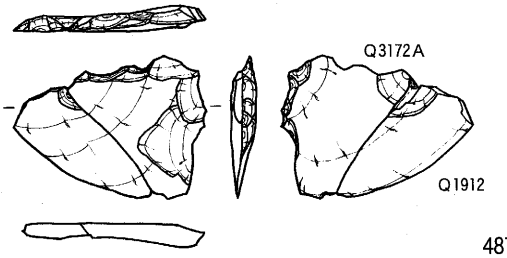
第128図　３ａ区エリア１・２器種別石器分布図５　ブロック１ＢＨ　Sc・RF・UF・Fl　(S＝1／60　垂直分布S＝1／30)

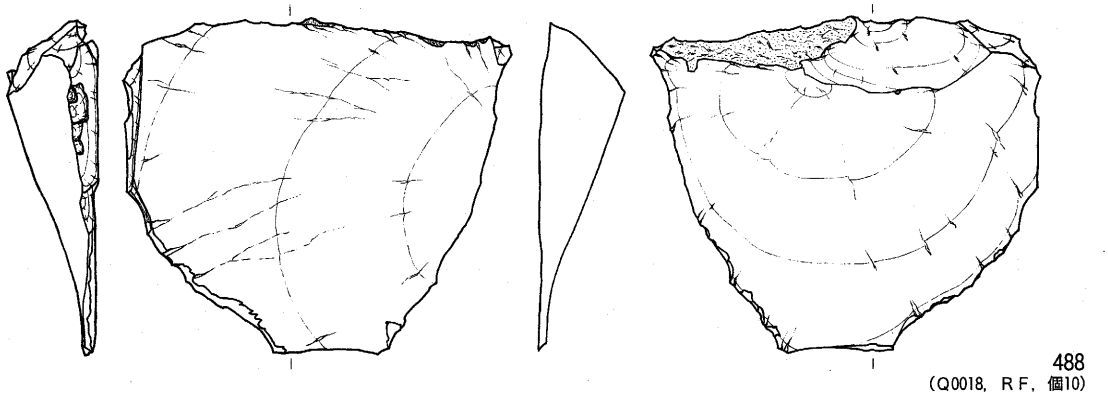


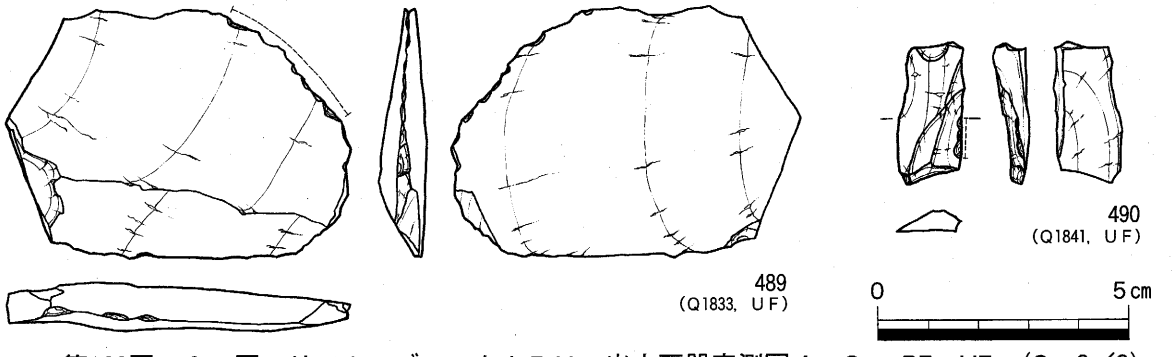




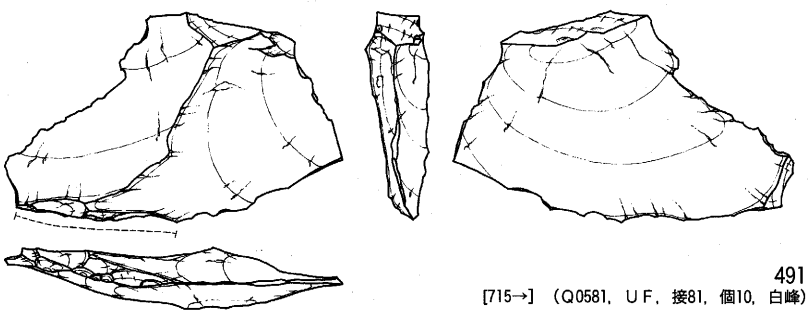




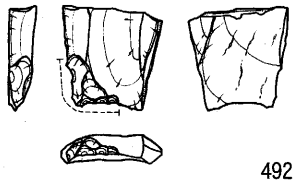




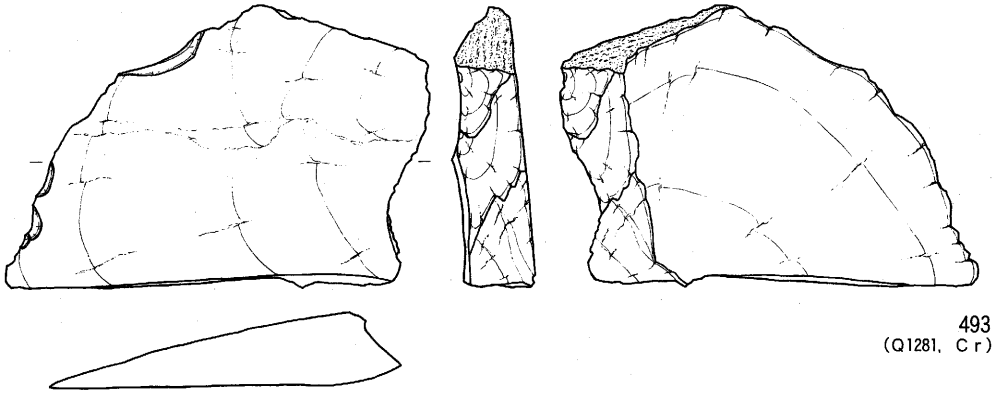
第129図　３ａ区エリア１　ブロック１ＢＨ　出土石器実測図４　Sc・RF・UF　(S＝2／3)



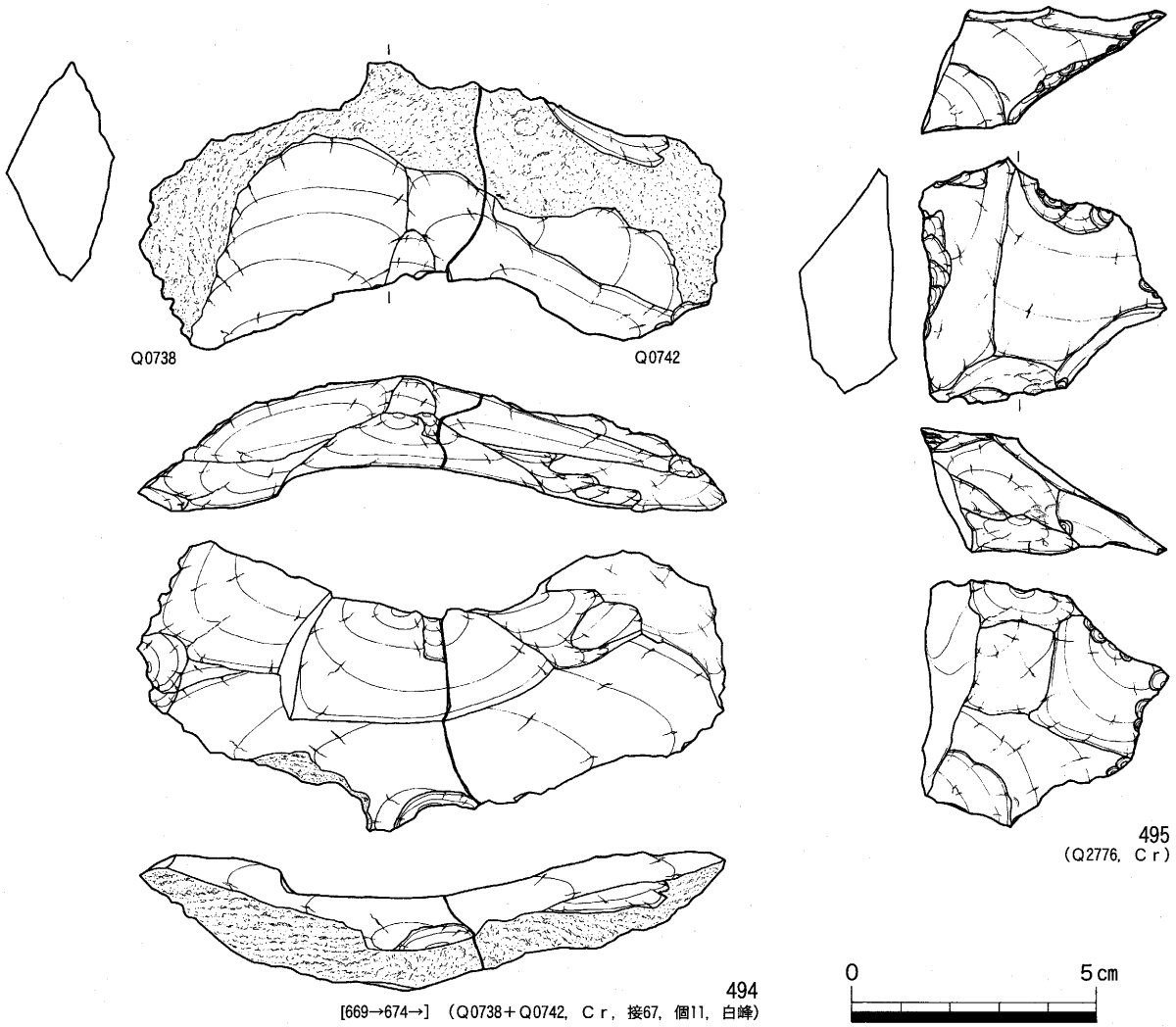
491
[715→] (Q0581, UF, 接81, 個10, 白峰)



492
(Q1903, UF)



493
(Q1281, Cr)

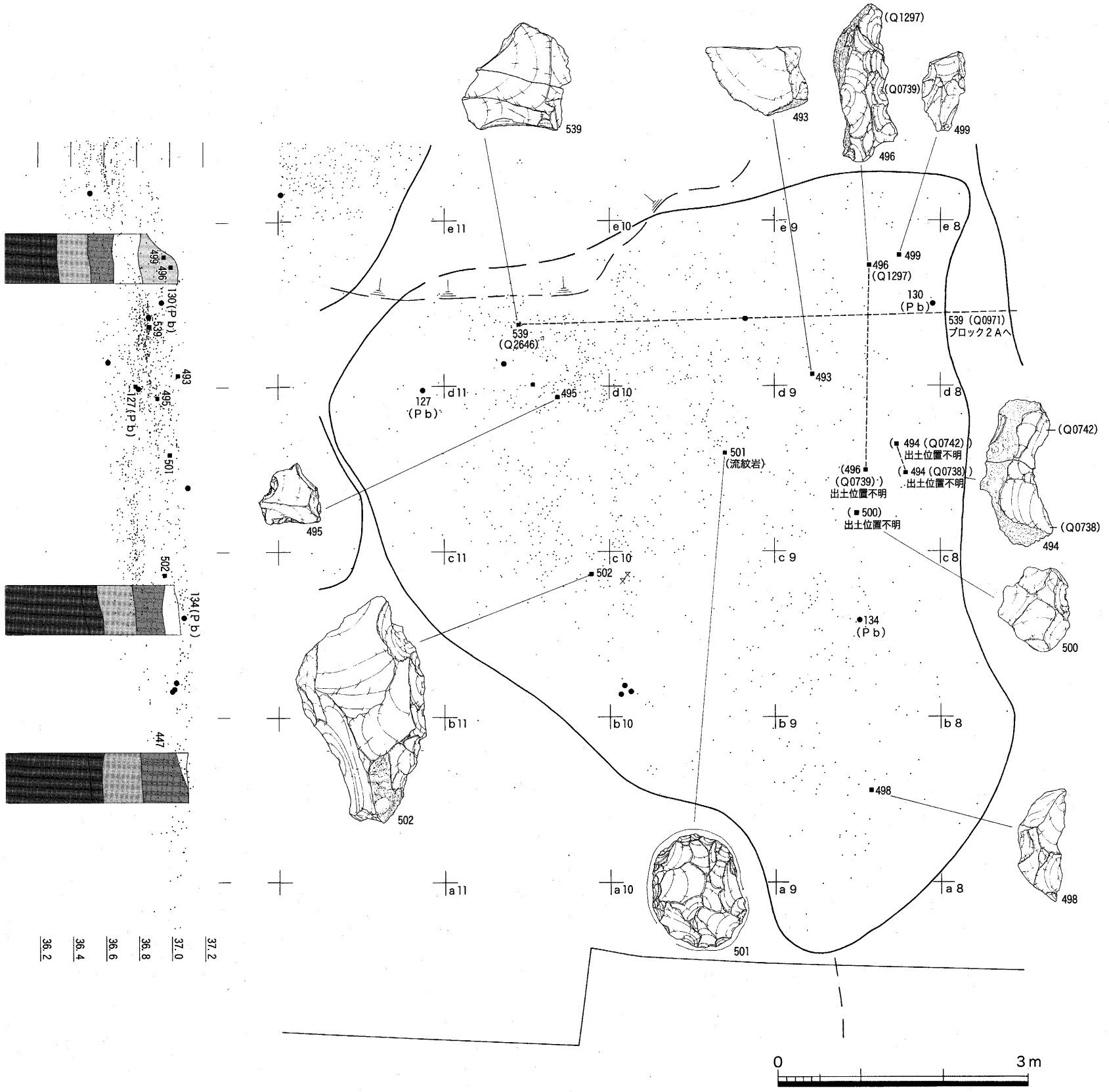


494
[669→674→] (Q0738+Q0742, Cr, 接67, 個11, 白峰)

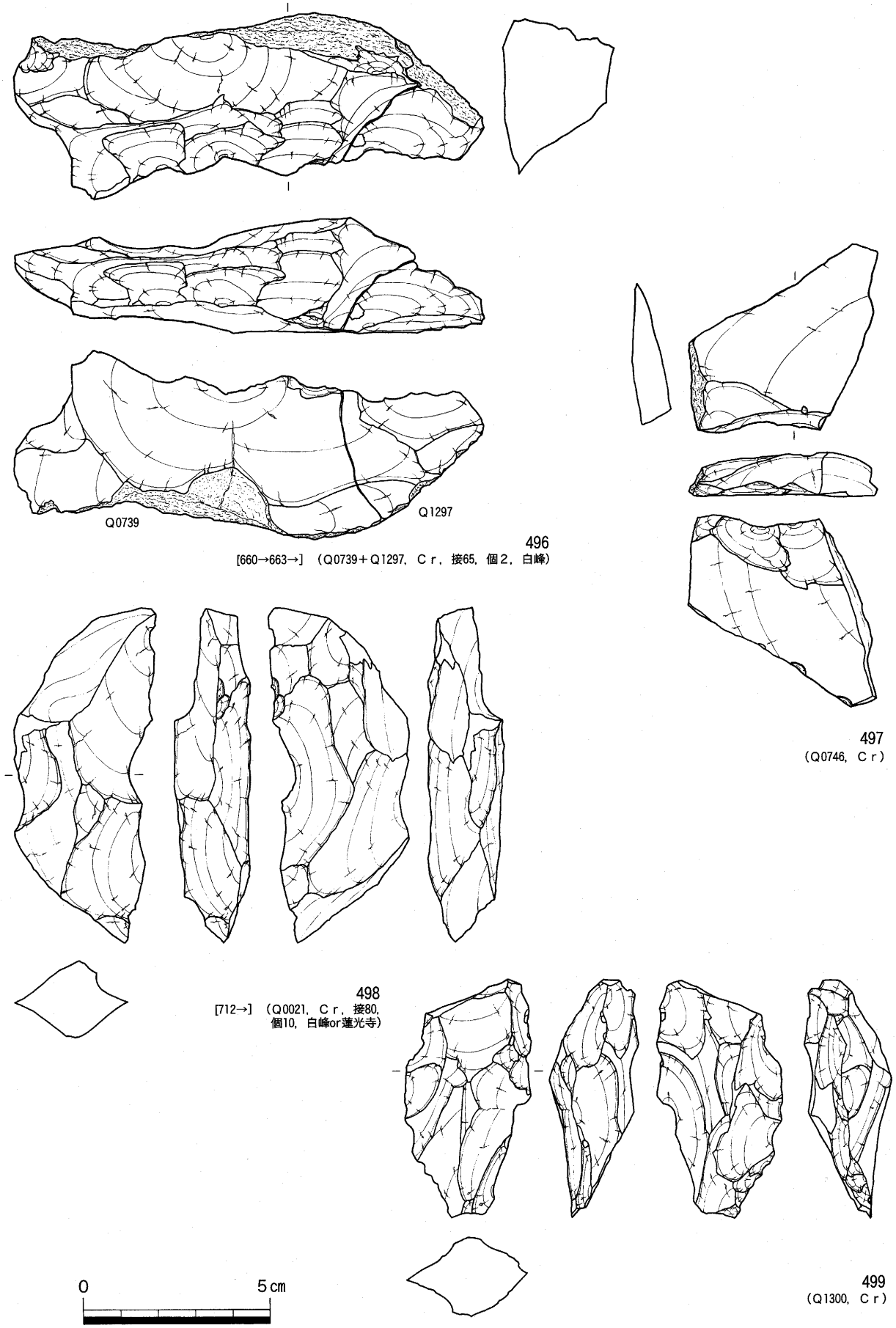
495
(Q2776, Cr)

0 5cm

第130図　3a区エリア1　ブロック1BH　出土石器実測図5　UF・Cr　(S=2/3)



第131図　3 a区エリア１・２器種別石器分布図６　ブロック１ＢＨ　Cr　(S=1／60　垂直分布S=1／30)



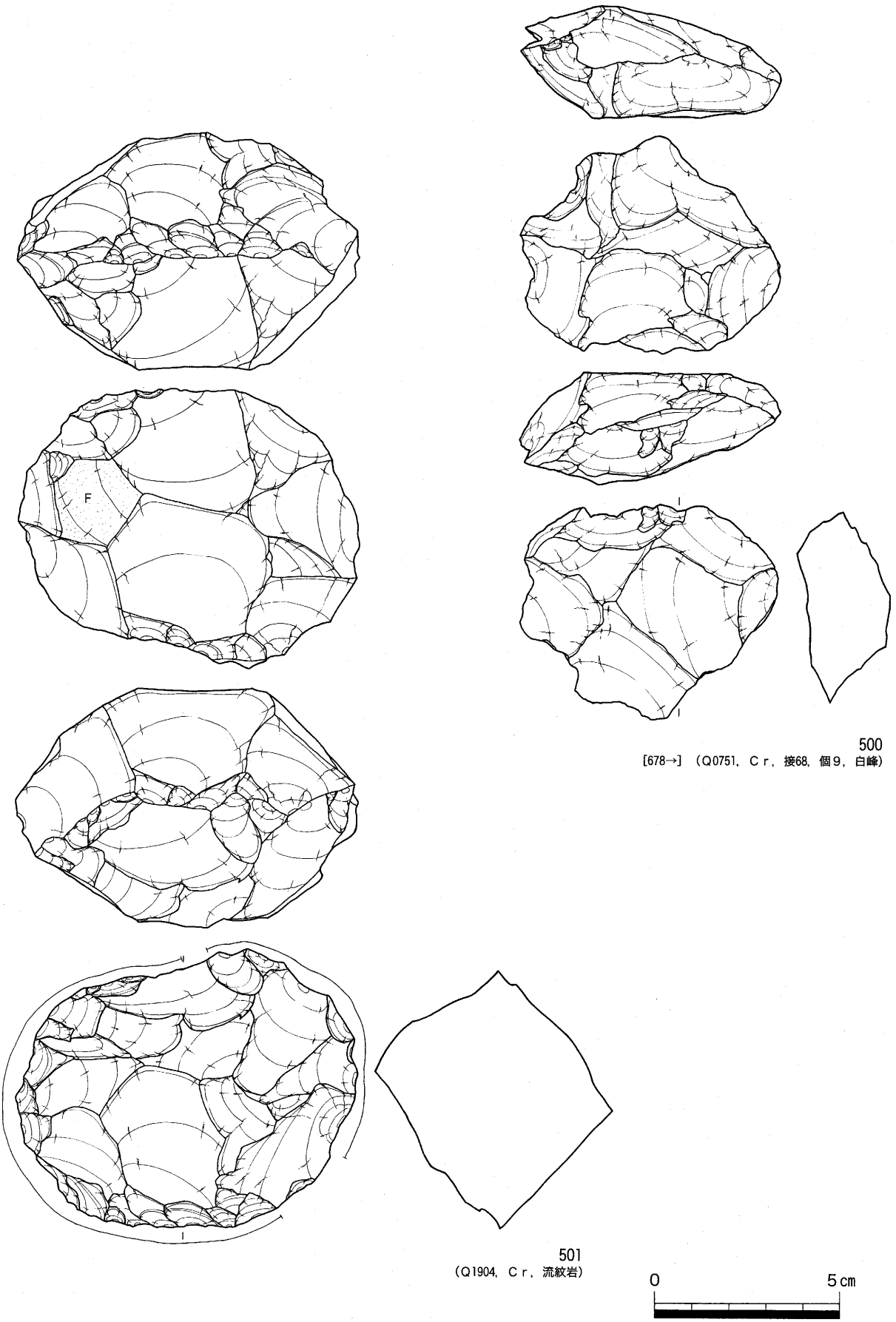
496
[660→663→] (Q0739＋Q1297, Ｃｒ, 接65, 個2, 白峰)

497
(Q0746, Ｃｒ)

498
[712→] (Q0021, Ｃｒ, 接80,
個10, 白峰or蓮光寺)

499
(Q1300, Ｃｒ)

第132図　３ａ区エリア１　ブロック１ＢＨ　出土石器実測図６　Cr　(S＝2／3)



第133図　3a区エリア1　ブロック1BH　出土石器実測図7　Cr　(S=2/3)

第134図　３ａ区エリア１　ブロック１ＢＨ　出土石器実測図８　Cr　(S=2／3)

石核（第130図～第134図　493～502）

10点出土している。このうち501は，淡灰色の流紋岩を石材とする。

４つの形態に区分できる。一つは厚さ25.0～35.0㎜ の板状剥片の一方に作業面を設定し，打面調整を施しながら石核幅の横長剥片を剥離するもの（分類Ａ，494・496），厚さ10.0～15.0㎜ の板状剥片の一方に作業面を設定し，交互あるいは片面で横長剥片を剥離するもの（分類Ｂ，493･497），厚さ20.0㎜ 以上の塊石の両面交互に作業面が転移し残核が細長い形状を呈するもの（分類Ｋ，495・498・499），剥片剥離が求心状に進行して残核が円形か球形を呈するもの（分類Ｆ，500･501），さらに厚さ35.0㎜ ほどの素材剥片で剥片剥離があまり進行しない502などもある。

一方向から剥片剥離が進行するＡ類･Ｂ類は側縁ないし末尾に自然面を留めるが，打面転移が著しいＫ類，Ｆ類には自然面が認められない。Ａ類･Ｂ類は目的剥片剥離前の打面調整が比較的粗雑で，左右を1，2回打撃する程度で山形打面を作り出す。したがって打面調整とはいえ目的剥片と比べて遜色ない大きさをもつ剥離痕もある。Ｋ類の作業面の交互転移はその延長として考えることもできる。502の大形の石核もその当初より打面調整が粗雑である。Ｋ類に展開する石核と考えられる。

501は流紋岩を素材としており，厚さの点で他と異なる。一部に素材面を残すが，ほぼ全体を30.0～50.0㎜ 幅の剥離面が覆い，さらに稜線部分に細かな敲打痕が認められる。残核が敲石として転用された可能性もある。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量(g)	遺存状態	石材	打面	面転移	個体･接合	グリッド	備考
493	130	131		Q1281	56.0×83.0×16.0	63.4	完形	An-C	×	×		e9	
494	130	131	42	Q0738＋Q0742	119.0×58.0×27.5	108.2	（半折）	An-A	○	×	個11･接67	d9	
495	130	131		Q2776	50.0×50.0×25.5	42.5	半折	An-C	×	○		d11	
496	132	131	42	Q0739＋Q1297	127.0×50.5×31.0	146.9	（半折）	An-C	○	×	個２･接65	d9＋e9	
497	132	131		Q0746	51.0×51.5×12.0	23.7	半折	An-A	○	×		d9	
498	132	131		Q0021	90.5×38.0×20.5	55.4	完形	An-A	×	○	個10･接80	b9	
499	132	131	35	Q1300	64.8×34.2×23.8	34.5	完形	An-A	×	○		e9	
500	133	131	43	Q0751	70.0×58.0×30.0	102.1	半折	An-A	×	○	個９･接68	d9	
501	133	131	35	Q1904	92.0×75.0×64.0	431.7	完形	流紋岩	×	○		d10	周縁に敲打痕
502	134	131	35	Q1557	182.5×104.5×35.0	455.2	完形	An-D	×	○		c11	

第43表　３ａ区エリア１ブロック１ＢＨ　石核　属性表

（９）３ａ区エリア１ブロック１Ｃ

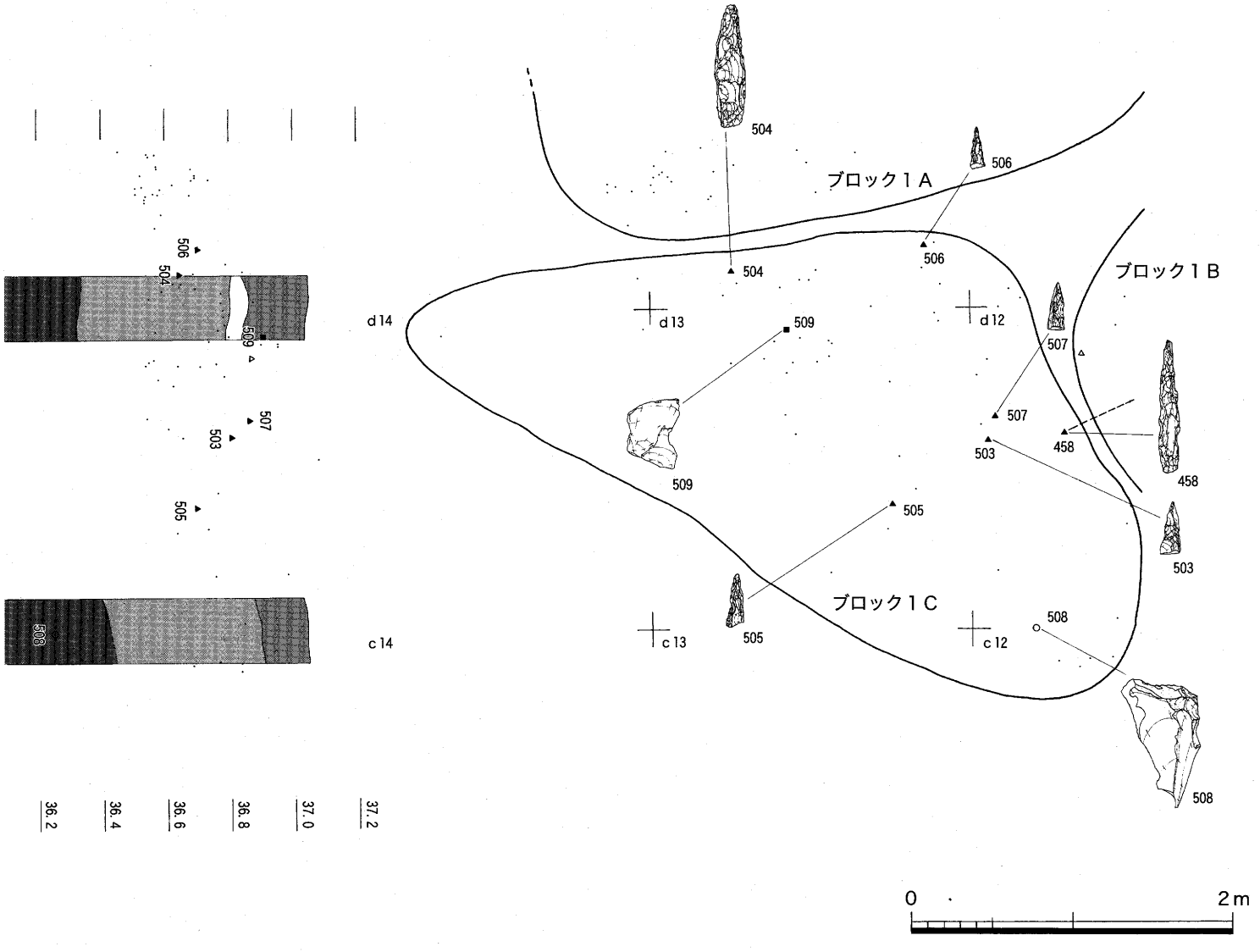
エリア１ブロック１Ｃは，ブロック１Ａと１Ｂの間に位置するやや散漫な石器分布域である。１Ｂ同様に層位的に上位のものと下位のものに区分することができる。ここでは，下位をブロック１ＣＬ，上位をブロック１ＣＨとして区分して報告する。

器種	点数	比率（全）	比率（定形）	重量（g）	重量比（全）	備考
Tr	6	11.1%	75.0%	43.5	34.1%	
Kn						
Sc						
RF	1	1.9%	12.5%	30.9	24.2%	
UF						
Cr	1	1.9%	12.5%	14.2	11.1%	
Fl	17	31.5%		29.9	23.4%	
Ch	29	53.7%		9.2	7.2%	
RM						
GS						
HS						
Sa						
Po						
合計	54	100.1%	100.0%	127.7	100.0%	

属性項目	数値
面積（㎡）	6.0
石器数（点）	54
分布密度（点／㎡）	9.0
平均重量点（g）	2.4
定形石器保有率(%)	14.8
定形石器重量比(%)	69.4
接合個体数（個）	1
接合率（%）	1.9
接合重量（g）	11.4
接合重量比（%）	8.9

標高	1CL	1CH	合計
36.25	1	0	1
36.3	0	0	0
36.35	0	0	0
36.4	0	0	0
36.45	0	0	0
36.5	2	0	2
36.55	7	0	7
36.6	7	0	7
36.65	6	0	6
36.7	5	0	5
36.75	7	4	11
36.8	0	6	6
36.85	0	0	0
36.9	0	3	3
36.95	0	7	7
37.0	0	3	3
37.05	0	3	3

第44表　３ａ区エリア１　ブロック１Ｃ石器分布内容総括表



第135図　３ａ区エリア１・２器種別石器分布図７　ブロック１Ｃ　(S＝1／40　垂直分布S＝1／20)

＜エリア１ブロック１ＣＬ出土石器＞

出土石器総数35点，主要石器は角錐状石器と加工痕有剥片がある。石材はAn-Dとした緻密な白色系サヌカイト，An-Aのうち灰色の緻密なサヌカイトが目立ち，後者は個体３・４として個体識別している。接合資料分布図（第166図）に個体３・４の分布を示した。

角錐状石器（第136図　503～506）

４点の角錐状石器がある。完形品はないが，504は現存長で74.0㎜，幅20.0㎜ をはかり，長さ100.0㎜を超える大形品と考えられる。503は整形加工途上に剥離した調整剥片だが，先端から15.0㎜ までは各面が遺存する。整形加工は３点が二面加工，1点が三面加工で，すべてに稜上加工が認められる。506は暗灰色を呈する緻密で特徴的なサヌカイト（An-A）を石材とし，個体３として抽出した剥片類と同一母岩に属する可能性が高い。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量(g)	遺存状態	断面形	石材	整形加工	個体･接合	グリッド	備考
503	136	135		Q4597	33.0×12.5×14.5	2.2	先端のみ	△	An-A	3-W		d12	
504	136	135	36	Q4309	76.5×19.5×15.0	24.0	基部欠	□	An-D	2-W		e13	
505	136	135		Q4321	33.0×11.0×9.0	2.8	半折	△	An-A	2-W	個３	d13	
506	136	135		Q3455	26.0×9.0×5.0	0.9	先端のみ	△	An-A	2-W		e13	

第45表　３ａ区エリア１ブロック１ＣＬ　角錐状石器　属性表

加工痕有剥片（第136図　508）

508はＡＴ降灰層最下部（Ⅲｂ層）から出土した加工痕有剥片である。個体４に所属する。大形剥片の打面部に数回の打撃を加えて整形する。

出土標高は36.2ｍと，他の石器と比べて特に低い位置から出土している。出土状況の写真（巻頭図版２）からみて，Ⅳ－Ｒ層の黒色粘土層（泥炭質土層）の直上と考えられる。ＡＴ火山ガラスが60％ほどのピークに達する層位である。ただ，単独で出土していることと，ブロック１ＣＬの中心分布で出土する石器と個体の共有も想定できること，また出土位置はⅢｂ層が最も砂分に富む部分であること，などから自然現象で沈み込んだ個体が層境で停止したものと見るのが妥当であろうか。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量(g)	遺存状態	石材	打面	側縁	末端	個体･接合	グリッド	備考
508	136	135	36	Q4924	49.0×80.0×13.0	30.9	完形	An-A	○			個４	c12	白峰

第46表　３ａ区エリア１ブロック１ＣＨ　加工痕有剥片　属性表

＜エリア１ブロック１ＣＨ出土石器＞

出土石器総数26点。主要石器はナイフ形石器と石核がある。石材はAn-Dとした緻密な白色系サヌカイト，An-Bとした灰色の緻密なサヌカイトなどが主体である。

ナイフ形石器（第136図　507）

507は一側縁加工のナイフ形石器。裏面に自然面，左側面に急角度の剥離面をとどめ，表裏両面からの整形加工で打面部を除去する。断面を均整な三角形に仕上た対向調整の形態を備える。ただし，裏面の自然面を整形加工に変わるものと考えれば，角錐状石器とすることもできる。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量(g)	遺存状態	断面形	石材	整形加工	個体･接合	グリッド	備考
507	136	135		Q2691	33.0×10.9×9.0	2.2	先端のみ	△	An-D	1-W		d12	裏面に自然面 左側縁は折損面

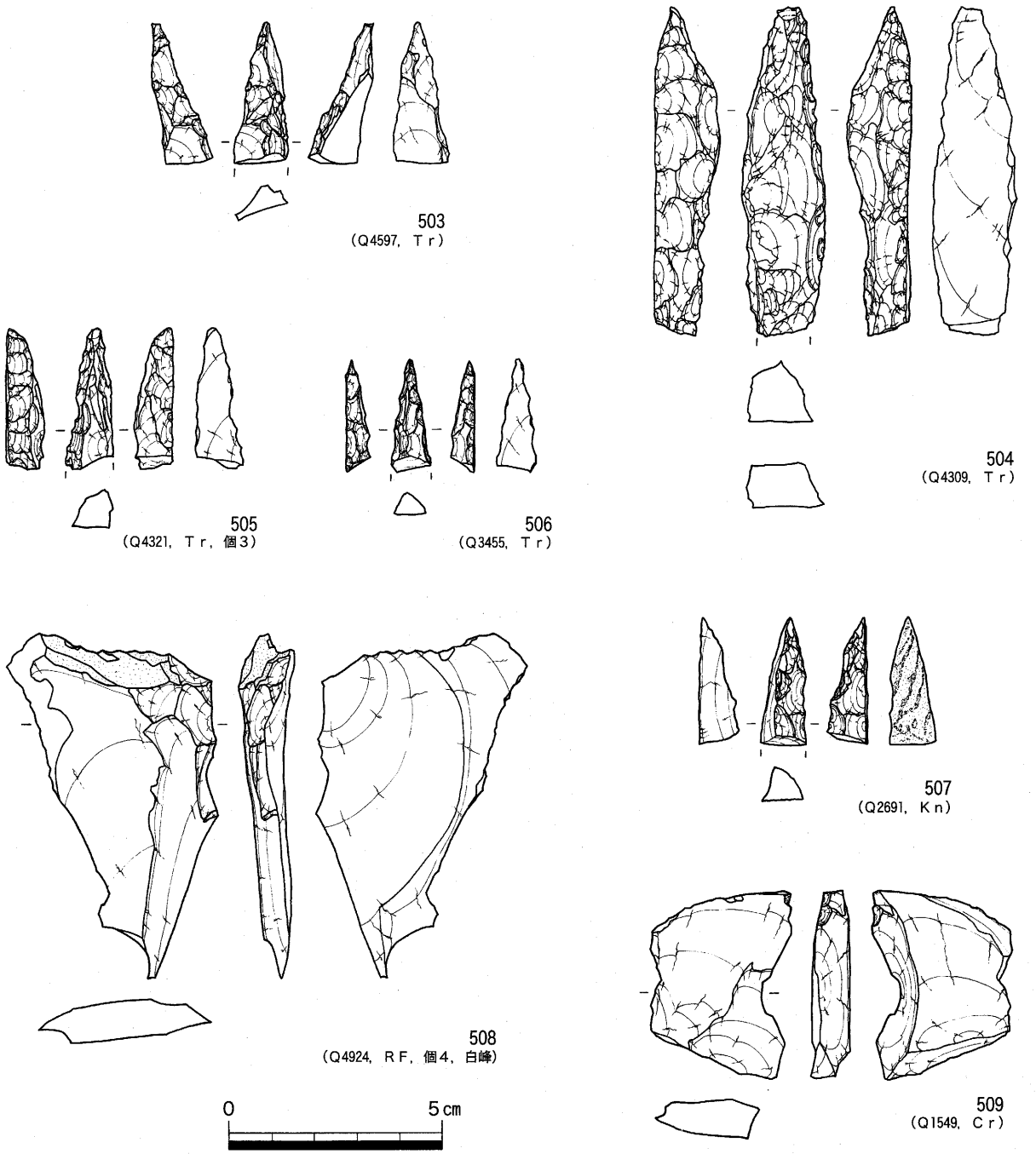
第47表　３ａ区エリア１ブロック１ＣＨ　ナイフ形石器　属性表

石核

509は平坦打面をもつ横長剥片石核。石核素材も平坦な折損面小口部を連続打撃して得られた不定形剥片である。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（mm）	重量(g)	遺存状態	石材	打面調整	面転移	個体･接合	グリッド	備考
509	136	135		Q1549	44.0×32.0×9.0	14.2	完形	An-C	×	×		d13	

第48表　３ａ区エリア１ブロック１ＣＨ　石核　属性表



第136図　３ａ区エリア１　ブロック１ＣＬ・１ＣＨ　出土石器実測図　（S＝2／3）

(10) 3 a区エリア２A

＜石器分布＞

ブロック１Bの東に位置するブロックである。東西７m，南北４mで中央やや南寄りで密な分布がみられ，礫ブロック２と重複する。垂直分布は微地形を反映して北に緩やかに傾斜する。垂直分布幅は36.65m～37.10mの45cmで，その上位に定形器種，礫ブロックがまとまる傾向がある。

出土石器総数620点。角錐状石器が主体だが，ナイフ形石器，スクレイパーなども含み，器種組成が比較的豊富である。器種別に分布を点検すると，北側に角錐状石器の完形品，南側に角錐状石器調整剥片や大形の石核などが分布する。ブロック１BH・ブロック２B・ブロック２Cと接合関係がある。

器種	点数	比率(全)	比率(定形)	重量(g)	重量比(全)	備考
Tr	13 (2)	2.4%	46.9%	367.6	17.2%	( )はⅡ種接合片で外数
Kn	3	0.5%	9.4%	24.0	1.1%	
Sc	2	0.3%	6.3%	20.0	0.9%	
RF	8	1.3%	25.0%	129.0	6.0%	
UF	0					
Cr	4	0.6%	12.5%	366.2	17.1%	
Fl	215 (1)	34.9%		1114.7	52.1%	
Ch	371	59.8%		116.3	5.4%	
RM						
GS						
HS	1	0.2%				
Sa						
Po						
合計	617(620)	100.0%	100.1%	2137.7	99.8%	

属性項目	数値
面積 (m²)	28
石器数 (点)	620
分布密度 (点／m²)	22.1
平均重量 (g)	3.4
定形石器保有率 (%)	5.2
定形石器重量比 (%)	42.4
接合個体数 (個)	36
接合率 (%)	5.8
接合重量 (g)	1108.9
接合重量比 (%)	51.9

標高	点数
36.6	0
36.65	5
36.7	6
36.75	6
36.8	25
36.85	40
36.9	115
36.95	135
37.0	134
37.05	144
37.1	5
37.15	0
37.2	0

第49表　3 a区エリア１　小ブロック２A石器分布内容総括表

＜主要石器＞

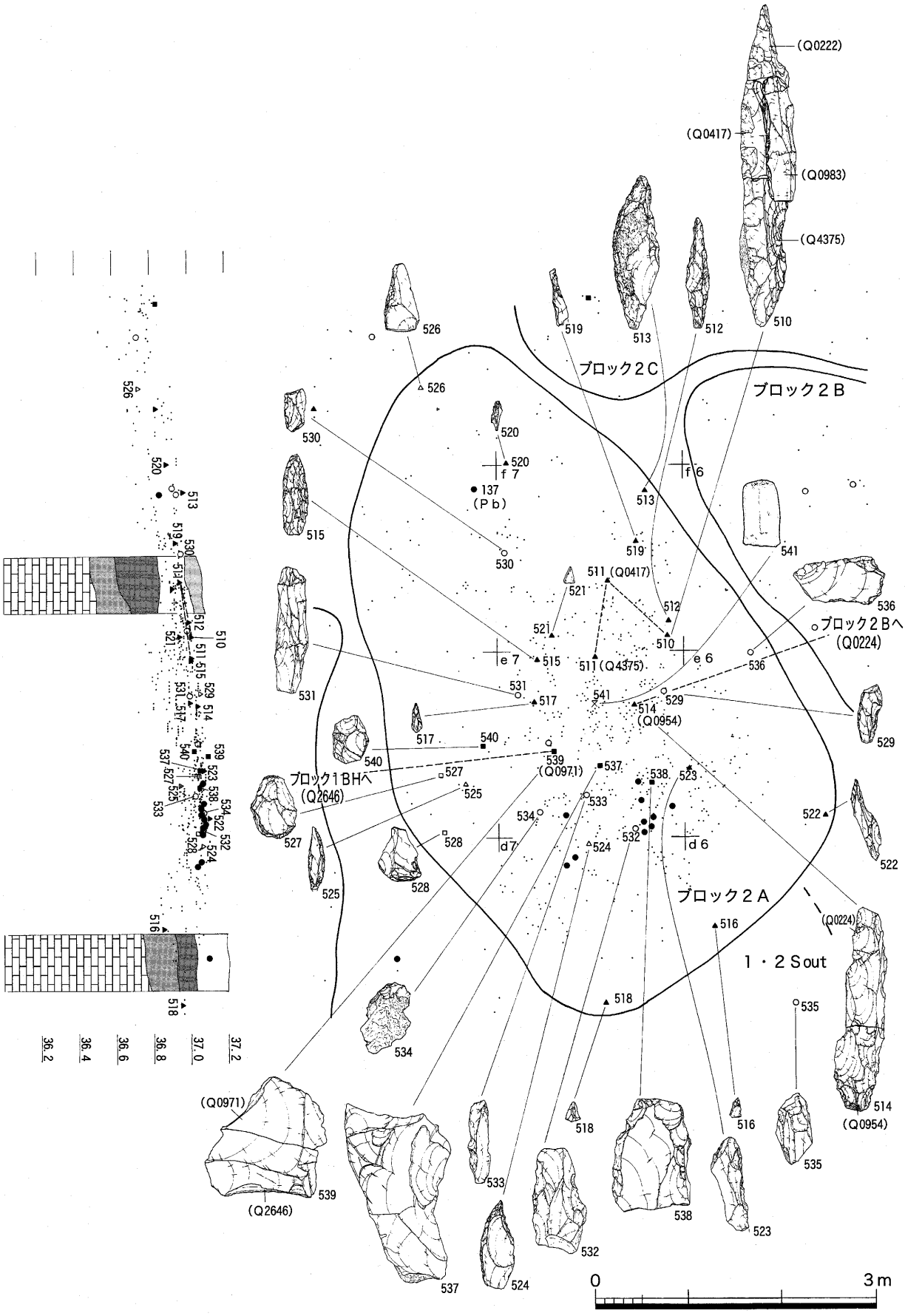
角錐状石器（第138図～第140図　510～523）

整形初期の大形品が複数みられる。折損後に再加工された角錐状石器を重複計上し，また調整剥片のうち表面と裏面が遺存するものも合わせて計上して，合計13点を数える。うち完形品は４点である。

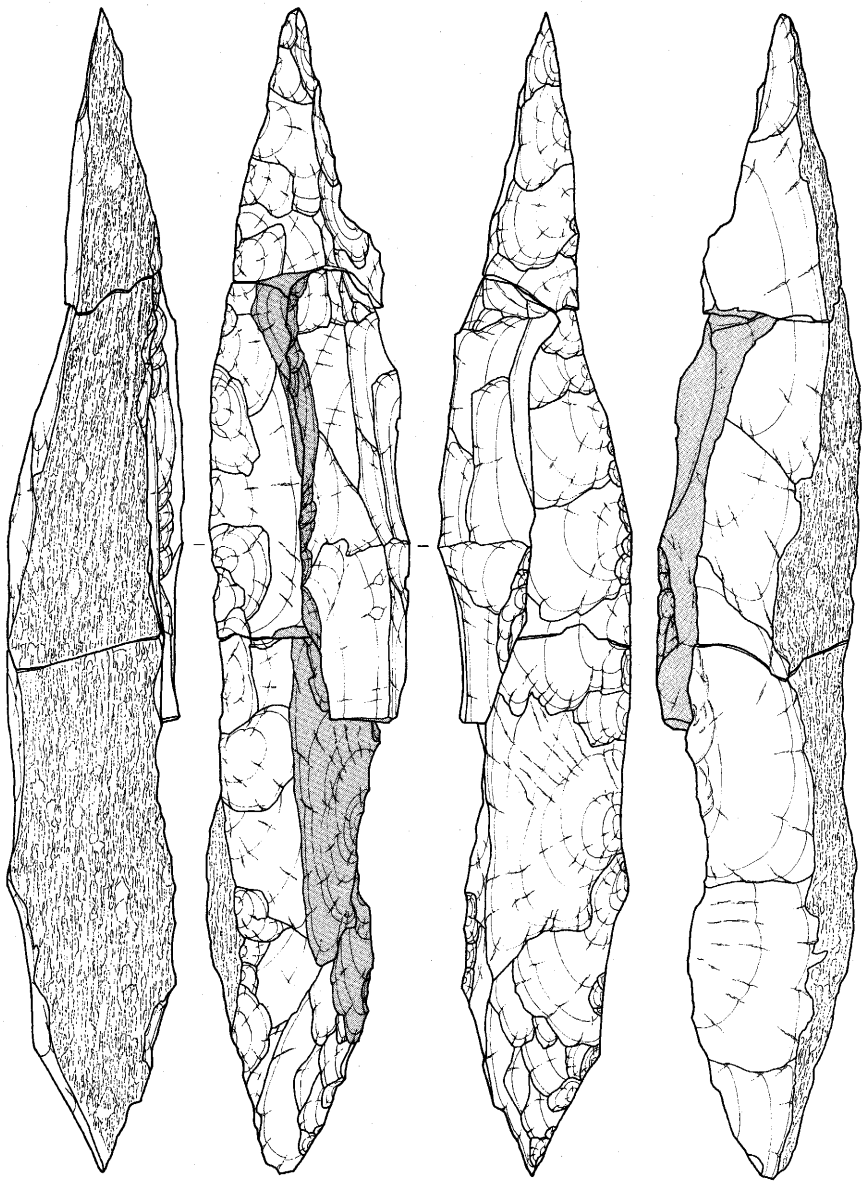
510･511は角錐状石器製作の過程を示す資料である。510の先端部が欠損した後に再加工を施したものが511。511はさらに半折するが，接合状態で長さ176.0㎜をはかり，大形の角錐状石器製作を目的としたことが推定できる。510では長さ230.0㎜を超えるサイズを持ちながら，先端部が入念な整形加工により尖る。左側面は流理が顕著な自然面。右側面には幅50.0～80.0㎜の粗い整形加工が施される。接合87に属し，ブロック２Cと接合関係がある。

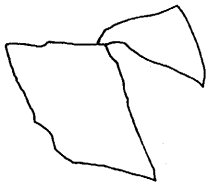
番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	断面形	石材	整形加工	個体･接合	グリッド	備考
510	138	137	36	Q0983＋Q0222＋Q0417＋Q4375	230.5×40.0×38.5	244.1	(折損再加工)	□	An-A	(3-S)	接87	f7＋e7	折損後の再加工剥片と接合(738→)　国分寺
511	139	137	36	Q0417＋Q4375	176.2×34.0×33.0	189.4	(完形)	□	An-A	(3-S)	接87	f7＋e7	折損後の再加工(738･510→)　国分寺
512	139	137	37	Q0221A	79.0×16.5×13.0	14.7	完形	△	An-A	2-W		f7	
513	139	137	37	Q0098	109.5×33.5×20.0	54.8	完形	△	An-A	3-S		f7	基部のみ裏面加工
514	140	137	37	Q0224＋Q0954	145.5×36.5×28.0	117.5	完形	□	An-A	3-W	個1･接85	f5＋e7	基部に自然面　石核転用　白峰
515	140	137	37	Q4364	58.7×19.0×14.0	16.0	基部欠	△	An-A	2-W		e7	
516	140	137		Q1976	14.0×8.0×6.5	0.6	先端のみ	□	An-C	2-W		d6	
517	140	137		Q0981B	20.5×7.5×6.0	0.6	先端のみ	△	An-A	2-S		e7	
518	140	137		Q2422	14.5×11.0×13.0	1.4	先端のみ	△	An-A	2-S		d7	
519	140	137		Q0407	41.0×16.5×12.5	3.2	小片	△	An-A	3-W		f7	調整剥片
520	140	137		Q1270	22.0×8.0×11.0	0.7	先端のみ	△	An-A	3-W		g7	調整剥片
521	140	137		Q0445	12.0×8.0×3.0	0.2	小片	−	An-A	−		f7	調整剥片
522	140	137		Q0042	58.2×21.2×18.7	4.7	先端のみ	△	An-A	2-S		e6	調整剥片
523	140	137	37	Q0192	68.0×26.0×17.5	13.5	先端のみ	(□)	An-A	2-S		e6	調整剥片

第50表　3 a区エリア２ブロック２A　角錐状石器　属性表

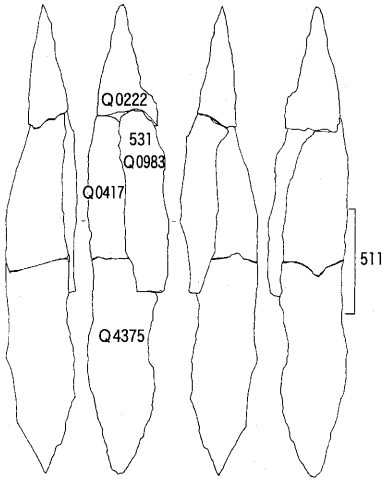


第137図　３ａ区エリア１・２器種別石器分布図８　ブロック２Ａ　(S＝1／60　垂直分布S＝1／30)



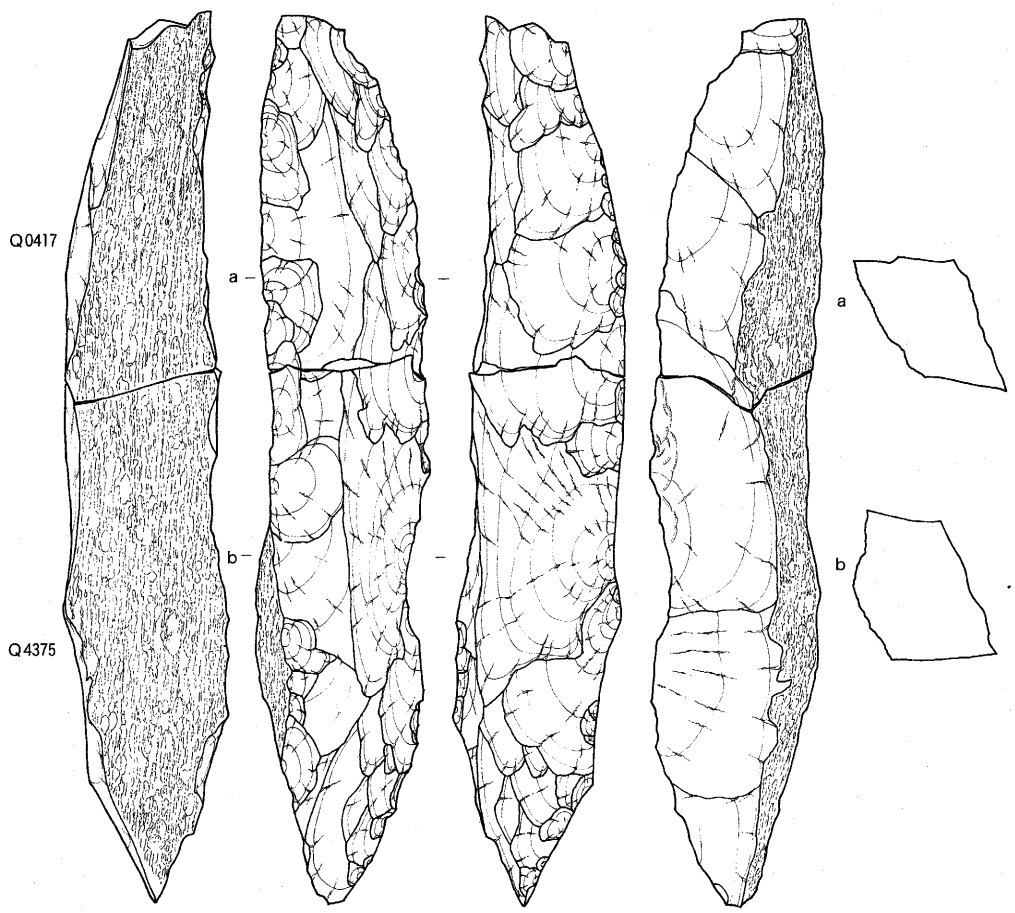


510
[732→, →511] (Q0222＋Q0417＋Q0983＋Q4375, Tr, 接87, 国分寺)

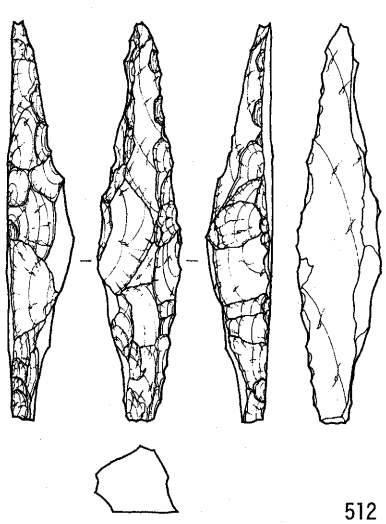


0 5cm

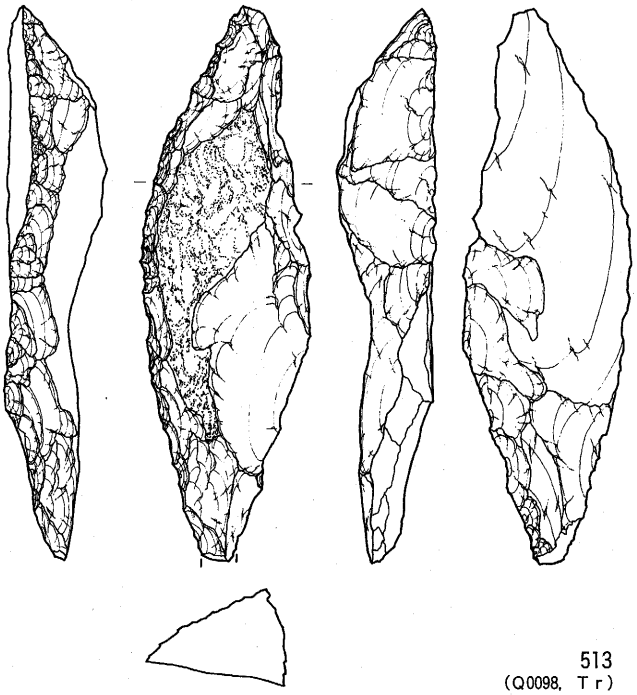
第138図　3 a区エリア2　ブロック2A　出土石器実測図1　Tr　(S＝2／3)



511
[732→510→] (Q0417+Q4375, Tr, 接87, 国分寺)



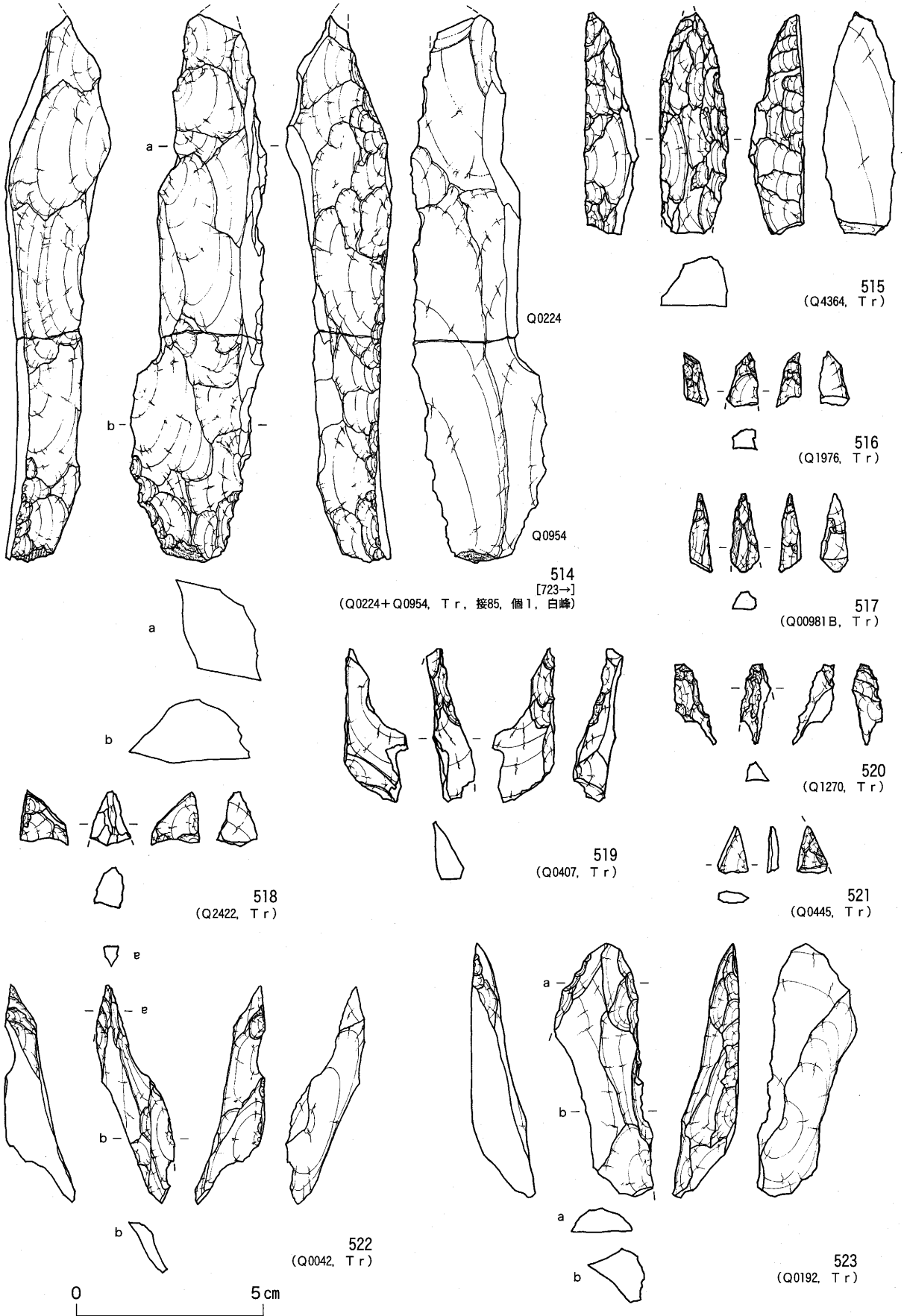
512
(Q0221A, Tr)



513
(Q0098, Tr)

0 5cm

第139図　3a区エリア2　ブロック2A　出土石器実測図2　Tr　(S=2/3)



第140図　3a区エリア2　ブロック2A　出土石器実測図3　Tr　(S=2／3)

512は気泡が多い特異な石材の二面加工角錐状石器である。裏面は平坦な素材の主要剥離面をとどめ，裏面側からの打撃により整形した後，先端部と基部の一部に稜上からの加工が施される。

513は背面に自然面を留める大形の剥片を素材とする。主要剥離面側から全周を整形した後，裏面基部側に平坦な角度の調整加工が施される。稜上からの打撃は認められない。

514は裏面に複数のネガティブな剥離面を留める角錐状石器初期整形段階の大形品である。素材は石核かあるいは塊状の大形剥片と推定され，現状で四面体の断面形を呈する。基部には自然面が僅かに残る。表面は30.0～50.0㎜ 幅の粗い整形加工が表裏両側から施された後，右側縁および両側縁基部を中心に細かな整形加工が施され，その途上で半折する。個体１に所属する。

515は基部欠損の二面加工角錐状石器。稜上加工は顕著でない。516～518は角錐状石器の先端部片。519・520は三面加工角錐状石器の調整剥片。522・523は二面加工の調整剥片である。

ナイフ形石器（第141図　524～526）

二側縁加工のナイフ形石器が３点出土している。素材はいずれも不定形な剥片である。524は交互剥離よって得られた素材石核の打面部を剥ぎ取った横長剥片を素材とする。基部には当該素材剥片とは180度異なる方向のネガ面を留めており，素材石核における剥片剥離は打面転移を生じていることがわかる。整形加工は主要剥離面側から行い，先端を両側から整形して尖らせる。基部は石核素材のエッジを背面側から軽く整形する。素材剥片の打面部に加工した痕跡はない。

525は背面に石核の折損面と180度異なる先行剥離面を取り込んだ不定形横長剥片を素材とする。右側縁を全周整形加工し打瘤を除去し，左側縁は基部と体部中程に軽く整形加工を施す。

526は石理に沿って剥離した不定形剥片を素材とし，左縁を加工した後右縁加工の途上に半折したナイフ形石器である。背腹で剥離方向が異なることから，打面転移による剥片剥離の進行が考えられる。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	断面形	石材	整形加工	個体･接合	グリッド	備考
524	141	137	37	Q0519	65.0×24.5×10.0	10.7	完形	□	An-A	2-S		d7	
525	141	137	37	Q2464	45.0×11.5×6.5	2.8	基部欠	□	An-A	2-S	個10	e8	左縁調整は基部と体部
526	141	137	37	Q0706	49.0×25.0×10.7	10.6	基部欠	□	An-C	2-W		g8	

第51表　３ａ区エリア２ブロック２Ａ　ナイフ形石器　属性表

スクレイパー（第141図　527・528）

２点出土している。527は横長剥片の側縁を刃部とし，基部および側縁加工を施して左右均等の形態に仕上げる。刃部の調整角は70度。素材の用い方は異なるが，典型的なエンドスクレイパーの形態を備える。一方の528も刃部形態は共通するが，加工途上で素材の潜在割れにより折損したものと考える。ブロック内の西端に分布し，個体10の小分布域（分析編参照）に２点ともまとまる。なお，528は個体10に所属する。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量(g)	遺存状態	石材	打面	側縁	末端	個体･接合	グリッド	備考
527	141	137	38	Q0679	45.0×33.0×9.0	12.8	完形	An-A	×	◎	○		e8	素材打面残置
528	141	137		Q0676	38.5×30.5×8.5	6.9	折損	An-A	?	◎	?	個10	e8	潜在割折損

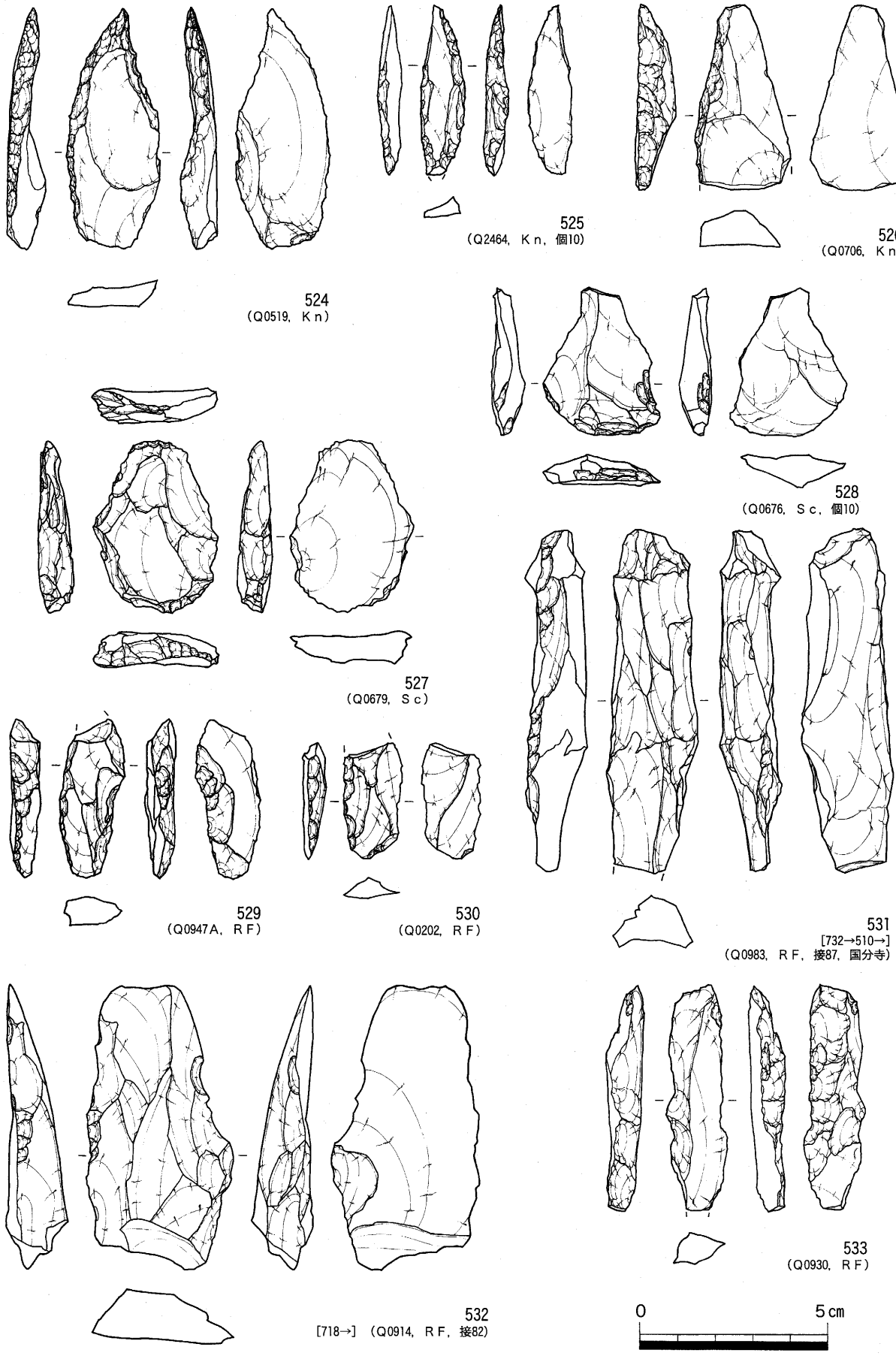
（凡例：◎刃部加工　○整形加工　×未加工）

第52表　３ａ区エリア２ブロック２Ａ　スクレイパー　属性表

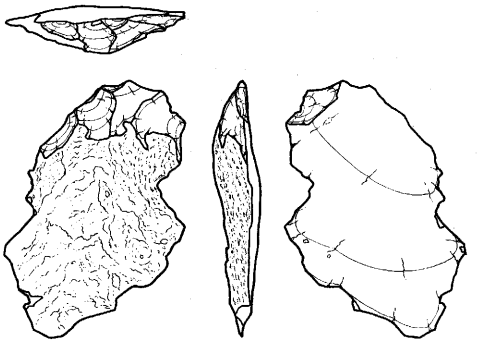
加工痕有剥片（第141図　529～536）

加工痕有剥片が８点ある。529～533は不定形な横長剥片を縦に用いて両側縁を部分的に加工するものである。534・535は素材の打面部に若干の加工を施すもの。536は横長剥片の末端に微細剥離痕を留め，側縁の一部に加工を施す。

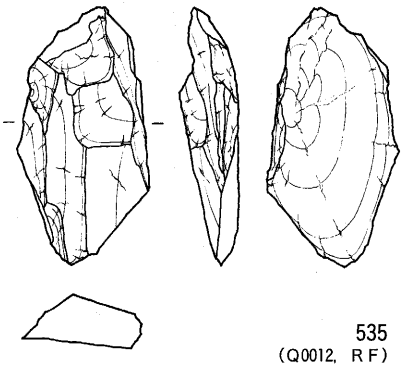
531・532は接合資料に所属する。531は角錐状石器再加工に伴う整形剥片，532は板状の交互剥離石核



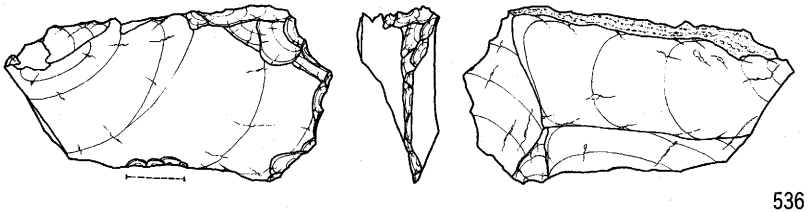
第141図　3a区エリア2　ブロック2A　出土石器実測図4　Kn・Sc・RF　(S=2/3)



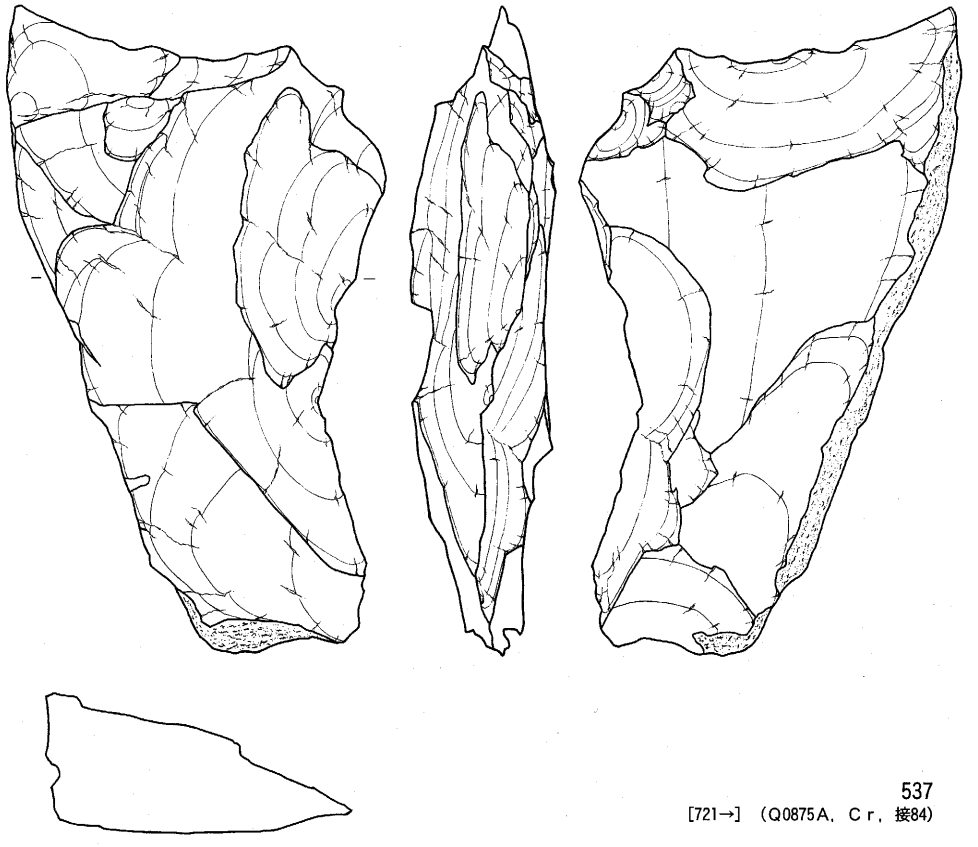
534
(Q0993, RF)



535
(Q0012, RF)



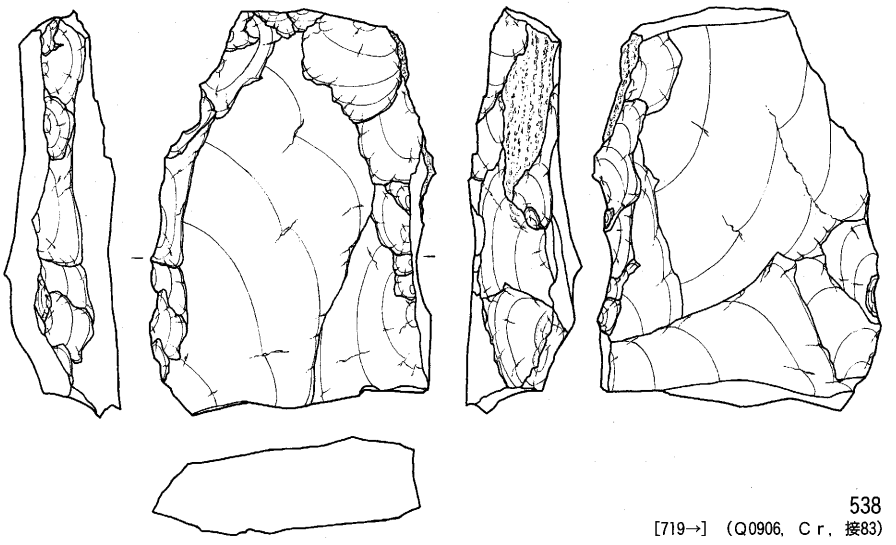
536
(Q0110B, RF)



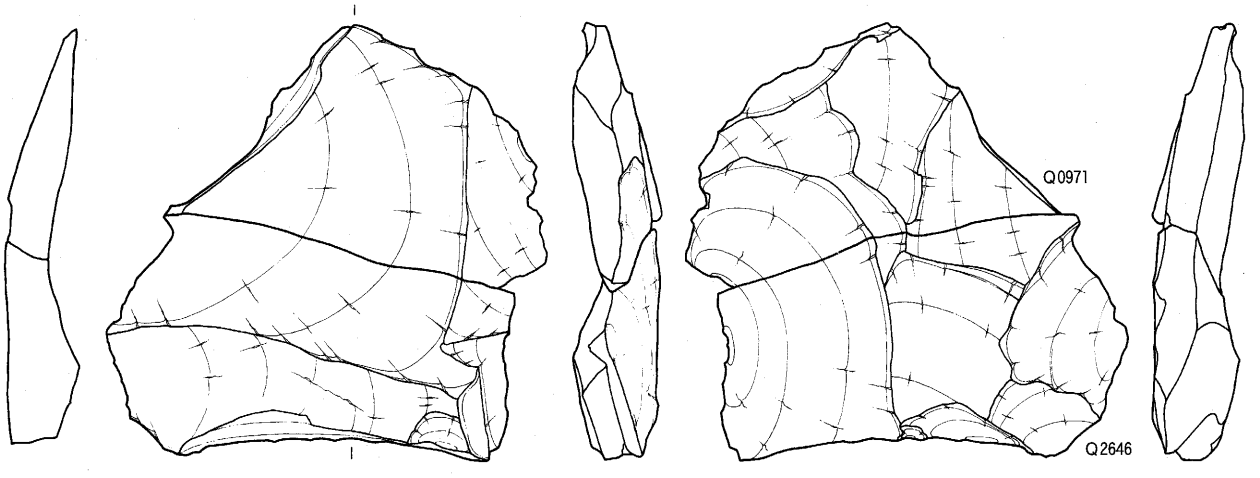
537
[721→] (Q0875A, Cr, 接84)

0 5cm

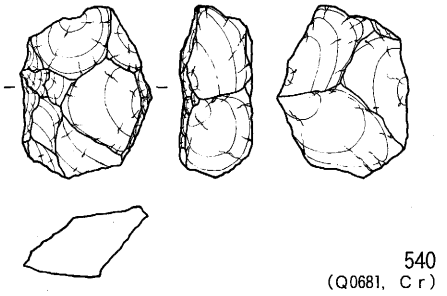
第142図　3 a区エリア2　ブロック2 A　出土石器実測図5　RF・Cr　(S=2／3)



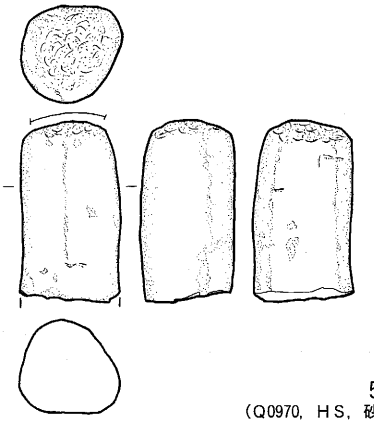
538
[719→] (Q0906, Cr, 接83)



539
[718→] (Q0971＋Q2646, Cr, 接82)



540
(Q0681, Cr)



541
(Q0970, HS, 砂岩)

0 5cm

第143図　3 a区エリア2　ブロック2A　出土石器実測図6　Cr・HS　(S=2／3, 1／2)

から剥離された不定形剥片を素材とする。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（mm）	重量（g）	遺存状態	石材	打面	側縁	末端	個体・接合	グリッド	備考
529	141	137		Q0947A	41.5×17.5×8.0	5.7	先端欠	An-A	○	○	○		e7	二側縁加工ナイフ形石器か？
530	141	137		Q0202	30.0×15.5×6.0	2.5	一部欠	An-A	○	○	×		f7	
531	141	137		Q0983	23.0×90.1×16.5	30.9	完形	An-A	×	○	○	接87	e7	国分寺
532	141	137		Q0914	75.0×39.0×16.0	38.8	完形	An-A	○	×	○	接82	e7	
533	141	137	38	Q0930	59.0×16.5×10.0	7.8	完形	An-A	○	○	○		e7	
534	142	137	45	Q0993	51.0×35.5×9.5	11.1	完形	An-A	○	×	×		e7	背面自然面
535	142	137		Q0012	26.5×51.0×11.7	11.1	一部欠	An-A	○	×	○		d6	
536	142	137		Q0110B	35.0×64.5×16.0	21.1	完形	An-A	×	○	△		e6	微細剥離痕

第53表　３ａ区エリア２ブロック２Ａ　加工痕有剥片　属性表

石核（第142図・第143図　537～540）

ブロック南側にまとまって４点が出土している。

537は厚さ23.0㎜ の板状素材の表裏および上端に複数の作業面が設定される。ネガ面の末端はそれぞれ複数の剥離面にまたがるか，あるいは不規則な剥離で終わる。打面調整を行った形跡はないが，作業面の幅は60.0～100.0㎜ と比較的大きい。不定形で大形の横長剥片を得ている。

538は板状素材の表裏両面剥片剥離を進行した残核である。周縁には剥片剥離に相前後して細かな加工が施される。また，接合する剥片720の末端にも細かな加工がある。

539はブロック１ＢＨと接合関係をもつ石核である。打面を不定方向に転移し，不定形で大形の剥片を剥取する。接合する剥片532は左右両側縁を二次加工により大きく整形されるものである。

540は長さ35.0㎜ と極端に消耗した石核である。下半を折損と見て，作業面の大きさを見積もっても最大で40.0㎜。これに対応するサイズのトゥールはブロック内には見あたらない。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（mm）	重量（g）	遺存状態	石材	打面調整	面転移	個体・接合	グリッド	備考
537	142	137	38	Q0875A	128.5×75.0×28.0	214.4	完形	An-C	×	○	接84	e7	
538	143	137		Q0906	81.6×57.0×23.0	107.4	半折	An-A	×	○	接83	e7	
539	143	131･137		Q0971＋Q2646	86.0×86.2×18.0	96.6	完形	An-A	×	○	接82	e7＋e11	Q2646は１BH
540	143	137	38	Q0681	34.0×26.0×14.5	9.5	完形	An-A	×	○		e8	

第54表　３ａ区エリア２ブロック２Ａ　石核　属性表

叩石

１点出土している。砂岩製で棒状を呈す。直径26.0㎜ で断面は円形に近い。頭部に明瞭な敲打痕を認めるが，側縁は風化のために不明瞭。ブロック中心部で出土している。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（mm）	重量（g）	遺存状態	石材	打面	側縁	末端	個体・接合	グリッド	備考
541	143	137	38	Q0970	47.5×26.5×25.0	49.6	半折	砂岩	○	?	-		e7	側縁風化顕著

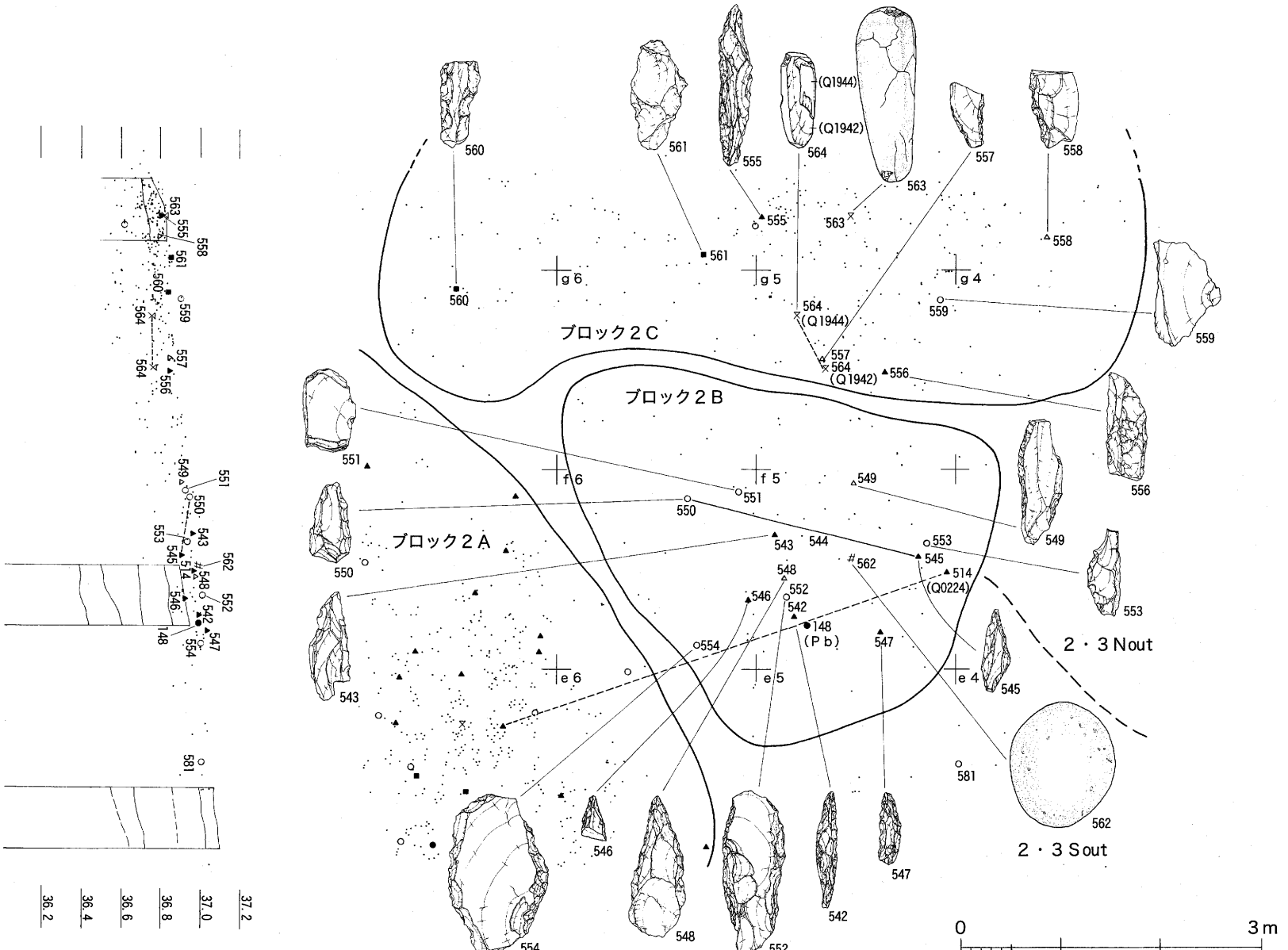
第55表　３ａ区エリア２ブロック２Ａ　叩石　属性表

（11）３ａ区エリア２Ｂ

＜石器分布＞

ブロック２Ａの北東に隣接する小ブロックである。東西４ｍ，南北５ｍ，面積で10㎡ の規模。分布密度は他と比べて散漫である。石器分布の中央付近に礫が２点出土する。垂直分布は北に緩やかに傾斜し，垂直分布は36.65～37.00ｍで幅35㎝ をはかる。

出土石器総数85点。主要石器は角錐状石器・ナイフ形石器・ＲＦで構成され，石核を組成しない点が特徴。定形石器保有率が高く，石核を組成しないにも関わらず，全重量の約73％を定形石器が占める。



第144図　３ａ区エリア１・２器種別石器分布図９　ブロック２Ｂ・２Ｃ　（S＝1／60　垂直分布S＝1／30）

器種	点数	比率（全）	比率（定形）	重量(g)	重量比(全)	備考
Tr	6	7.1%	42.9%	147.0	23.6%	
Kn	2	2.4%	14.3%	67.0	10.8%	
Sc						
RF	6	7.1%	42.9%	239.2	38.4%	
UF						
Cr						
Fl	31	36.5%		158.7	25.5%	
Ch	39	45.9%		10.7	1.7%	
RM						
GS	1	1.2%				
HS						
Sa						
Po						
合計	85	100.2%	100.1%	622.6	100.0%	

属性項目		数値
面積	(m^2)	10
石器数	(点)	85
分布密度	(点／m^2)	8.5
平均重量	(g)	7.3
定形石器保有率	(%)	16.5
定形石器重量比	(%)	72.8
接合個体数	(個)	10
接合率	(%)	11.8
接合重量	(g)	333.9
接合重量比	(%)	53.6

標高	点数
36.6	0
36.65	4
36.7	5
36.75	4
36.8	4
36.85	13
36.9	32
36.95	21
37.0	4
37.05	0
37.1	0
37.15	0
37.2	0

第56表　３ａ区エリア２ブロック２Ｂ石器分布内容総括表

＜主要石器＞

角錐状石器（第145図　542～547）

６点の角錐状石器がある。うち１点は，整形加工途上に剥離し，それぞれ再加工を施された２片がブロック内で接合するものである。

542は長さ77.5㎜ で断面形が甲高なほぼ完形の二面加工品。主として平坦裏面から整形加工が施されるが，器体中央の最大厚部分で稜上からの整形がみられる。543は大形の角錐状石器先端部片である。現存長で73.0㎜ をはかる。長さ150.0㎜ 程度の全形が想定できる。整形加工途上の折損。

544は545の角錐状石器と550のＲＦの接合体である。接合状態でみると，裏面が複数のネガ面で構成される棒状の素材を周縁に裏面側から加工を施し，断面台形の器形を整えていることがわかる。545と550はその整形加工途上に剥離した剥片を素材として周縁に加工を施すもの。545の図左上半は素材段階の剥離面を留めており，ナイフ形石器とすることもできる。550は後述。

546はやや扁平な剥片を素材とし，周縁に軽度の裏面加工を施すもの。547は稜上からの加工が顕著な角錐状石器である。

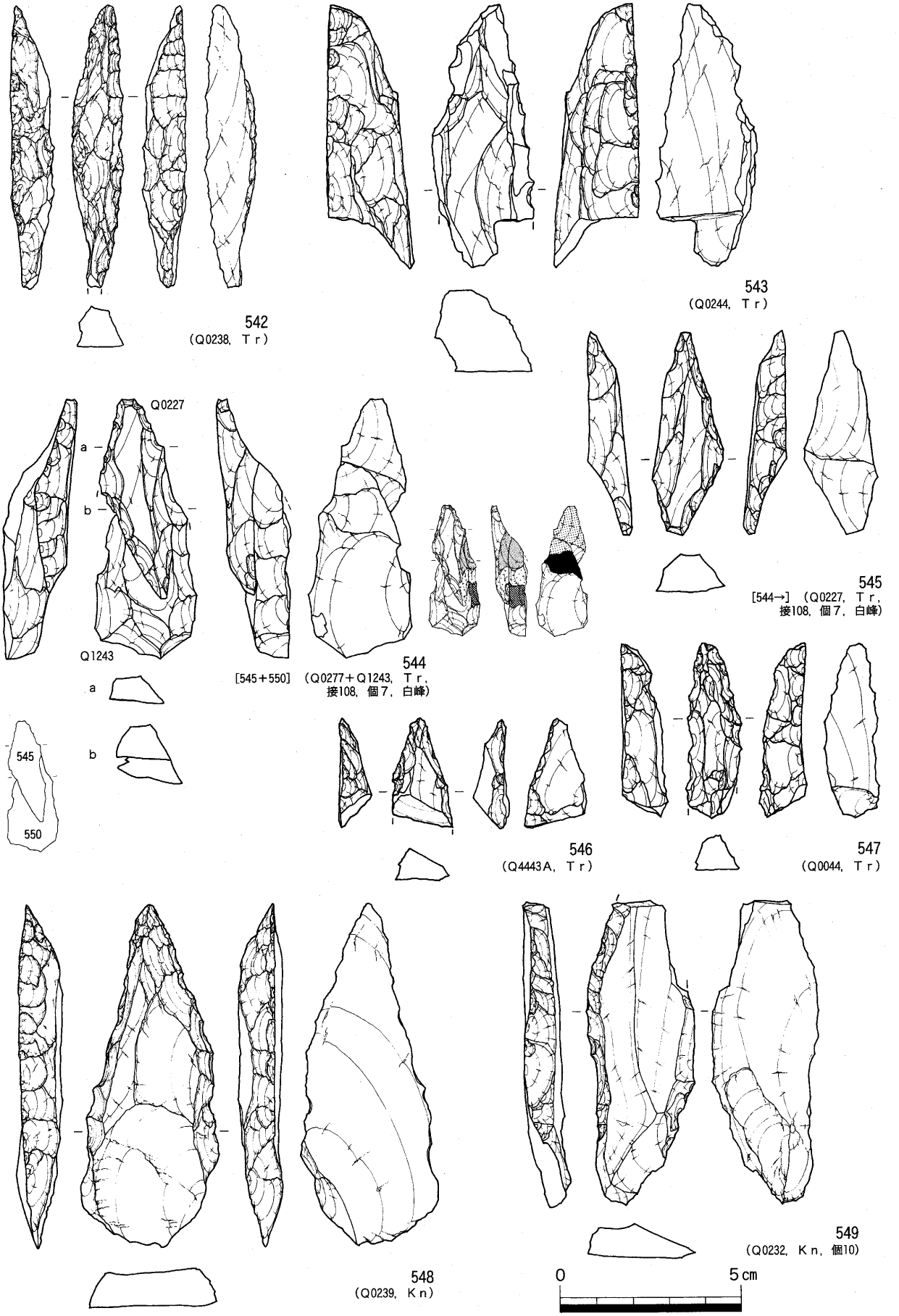
番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	断面形	石材	整形加工	個体・接合	グリッド	備考
542	145	144	39	Q0238	77.0×14.0×12.0	12.6	完形	△	An-C	2-W		f5	
543	145	144	39	Q0244	72.5×27.5×23.5	40.9	半折	□	An-A	2-S		f5	
544	145	144	39	Q0227＋Q1243	71.0×28.0×20.0	24.7	(半折)	□	An-A	2-S	個7･接108	f5＋f6	折損後再加工（→545･550）白峰
545	145	144	39	Q0227	55.6×19.2×12.0	8.8	完形	□	An-A	2-S	個7･接108	f5	折損後の再加工 白峰
546	145	144		Q4443A	30.0×16.0×9.2	3.3	半折	△	An-C	3-S		f6	
547	145	144		Q0044	48.0×15.0×13.0	7.9	基部欠	△	An-A	2-W		f5	

第57表　３ａ区エリア２ブロック２Ｂ　角錐状石器　属性表

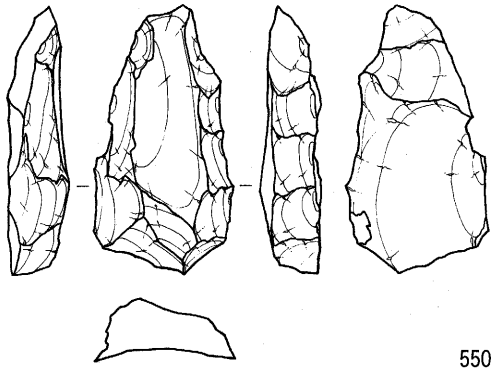
ナイフ形石器（第145図　548・549）

二側縁加工のナイフ形石器が２点出土している。素材はいずれも不定形な剥片である。

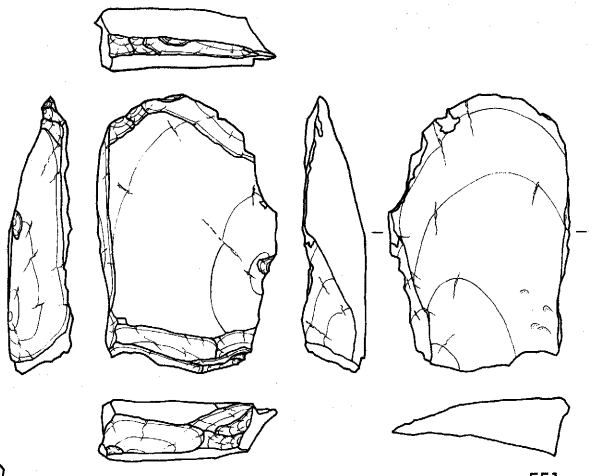
548は主剥離面の剥離方向が左右不均等な剥片を素材とする。打瘤を背面側から大きく打撃して除去し，主剥離面側から両側縁を加工して一方を尖らせるものである。形態的には角錐状石器に類似するが，基部に素材のエッジが残っており，技術的な型式区分としてはナイフ形石器に属する。もちろん角錐状石器の整形途上という可能性も大いにあり得る。549も同様にやや捻れた剥片の打瘤を除去し，左側縁側に整形加工を丁寧に施し，対側縁の基部側に若干の整形加工を施すもの。対側縁側は先端部が欠損し，先端に両側縁加工が入るか否か不明。いずれのナイフ形石器も長さ90.0～100.0㎜ ほどで，共伴する角錐状石器542のサイズと比較して10.0～15.0㎜ ほど大きい法量を備える。



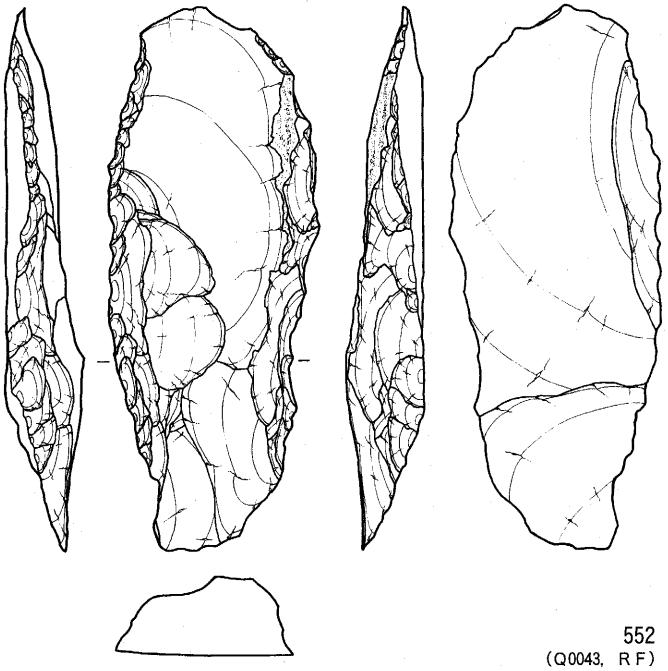
第145図　3a区エリア2　ブロック2B　出土石器実測図1　Tr・Kn　(S=2/3)



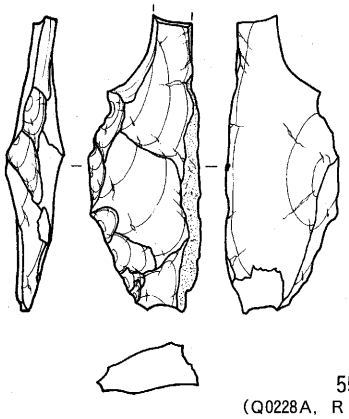
550
[544→] （Q1243, ＲＦ, 接108, 個７, 白峰）



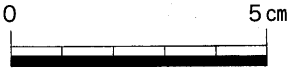
551
[740→] （Q1242, ＲＦ, 接89, 個６, 白峰）

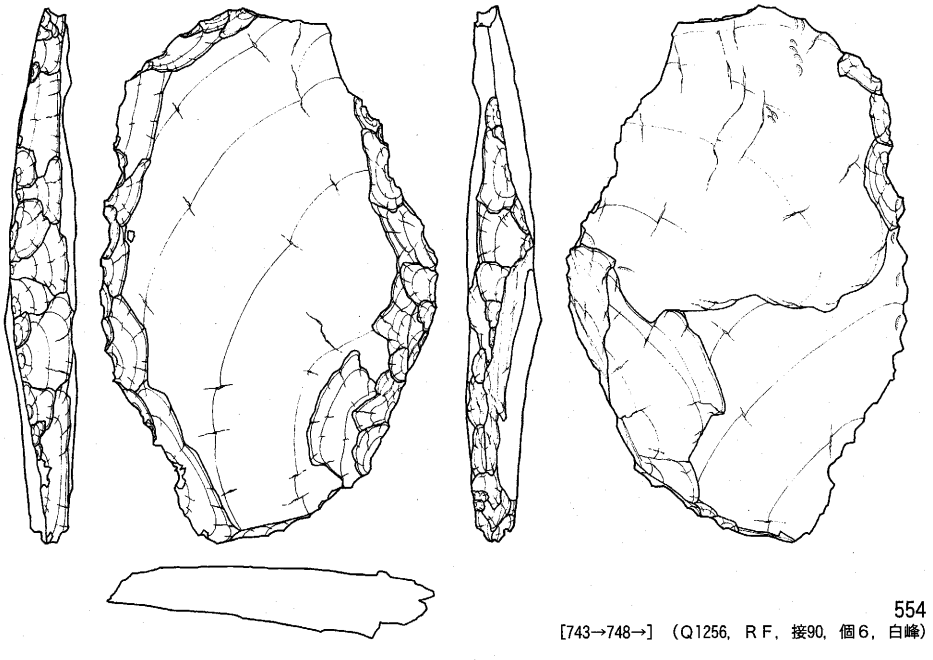


552
（Q0043, ＲＦ）



553
（Q0228Ａ, ＲＦ）





554
[743→748→] （Q1256, ＲＦ, 接90, 個６, 白峰）

第146図　３ａ区エリア２　ブロック２Ｂ　出土石器実測図２　RF　（S＝2／3）

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	断面形	石材	整形加工	個体・接合	グリッド	備考
548	145	144	39	Q0239	93.8×37.8×12.0	41.8	完形	□	An-A	2-S		f5	
549	145	144	39	Q0232	83.0×29.0×12.5	25.2	先端折	□	An-A	2-S	個10	f5	右縁調整は部分的

第58表　3a区エリア2ブロック2B　ナイフ形石器　属性表

加工痕有剥片（第146図　550～554）

加工痕有剥片が5点ある。550・552・554は横長剥片の両側縁に加工を施すもの。551・553は不定形剥片の一部に加工を施すもの。550は544の角錐状石器の整形途上の欠損片を転用し，552は背面に不定方向の剥離痕を残す大形剥片を素材とする。また，554は接90所属。大形石核から交互に剥離された大形剥片の末端部片を素材とする。552・554は側縁部の加工が連続的で，スクレイパーかもしれない。なお，両者は長さが100.0㎜強と似通った大きさである。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	石材	打面	側縁	末端	個体・接合	グリッド	備考
550	146	144		Q1243	53.4×27.8×12.0	15.9	完形	An-A	×	○	×	個7・接108	f6	角錐状石器折損片転用　(544→)
551	146	144		Q1242	54.5×35.0×12.5	22.7	完形	An-A	○	○	○	個6・接89	f6	スクレイパーか？
552	146	144	39	Q0043	107.5×42.0×15.5	60.6	完形	An-A	○	×	○		f5	
553	146	144		Q0228A	59.0×22.0×11.6	11.8	完形	An-A	○	×	×		f5	
554	146	144		Q1256	106.5×67.0×14.0	109.4	完形	An-A	○	○	○	個6・接90	f6	(749・754→)

第59表　3a区エリア2ブロック2B　加工痕有剥片　属性表

磨石（第148図　562）

1点出土している。砂岩製でほぼ全面に磨痕を認める。敲打痕は確認できない。一部黒色化するが，亀裂は観察できない。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	石材	頭部	側縁	尾部	接合関係	グリッド	備考
562	148	144	40	Q0240	83.2×69.5×51.0	381.2	完形	砂岩	△	△	△		f5	

第60表　3a区エリア2ブロック2B　磨石　属性表

(12) 3a区エリア2C

＜石器分布＞

ブロック2Bの北に隣接するブロックである。東西7m，南北2m，面積で14㎡の規模で，北側は削平される。分布密度17点／㎡で他と比べてやや散漫だが，ブロック内の東西で密度が異なる。細分が必要かもしれない。垂直分布は標高36.5mから36.9mの40㎝範囲に分布（36.3m付近に2点の例外あり。2g以下の小片で，グリッドh61出土。）し，36.75m付近に全体の40%ほどが集中する。

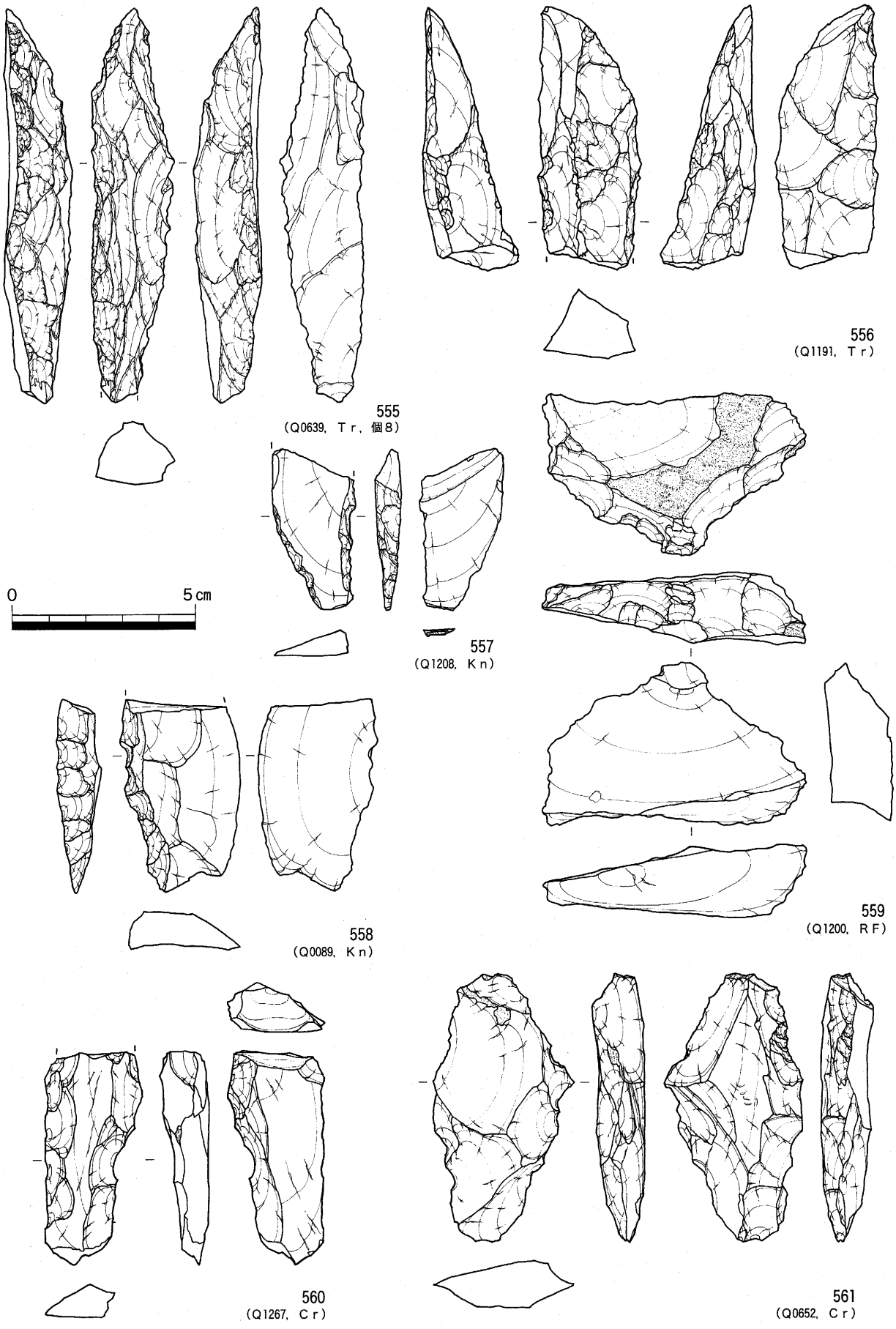
出土石器総数257点。主要石器は各器種が少量づつ揃う。叩石が2点出土し，その一つは接合資料。

器種	点数	比率(全)	比率(定形)	重量(g)	重量比（全）	備考
Tr	2	0.8%	28.6%	77.5	10.5%	
Kn	2	0.8%	28.6%	23.0	3.1%	
Sc						
RF	1	0.4%	14.3%	49.7	6.7%	
UF						
Cr	2	0.8%	28.6%	47.8	6.5%	
Fl	115	44.7%		503.9	68.1%	
Ch	132	51.4%		38.2	5.2%	
RM						
GS						
HS	2(1)	1.2%				
Sa						
Po						
合計	256(257)	100.1%	100.1%	740.4	100.1%	

属性項目	数値
面積（㎡）	15
石器数（点）	257
分布密度（点／㎡）	17.1
平均重量（g）	2.9
定形石器保有率（%）	2.7
定形石器重量比（%）	26.8
接合個体数（個）	9
接合率（%）	3.5
接合重量（g）	48.1
接合重量比（%）	6.5

標高	点数
36.4	0
36.45	0
36.5	3
36.55	12
36.6	12
36.65	22
36.7	47
36.75	99
36.8	45
36.85	13
36.9	1
36.95	0
37.0	0
37.05	0

第61表　3a区エリア2　ブロック2C石器分布内容総括表



第147図　3a区エリア2　ブロック2C　出土石器実測図　Tr・Kn・RF・Cr　(S=2/3)

＜主要石器＞

角錐状石器（第147図　555・556）

ほぼ完形の大形品１点，同じく大形品の先端部折損品１点の角錐状石器がある。555は基部が僅かに折損するが，長さ100.0㎜ 以上の大形細長の形状を良好に留める。裏面に不定方向から施されたネガティブで大きな剥離面が５面ある。石核を転用したものと考えられる。整形加工は主に裏面から施され，先端部付近にのみ稜上調整がみられる。気泡の多い石材で，個体８に所属する。

556は三面加工の角錐状石器半折片である。現存長で70.0㎜ を超える大形品である。素材面は殆どみられず各方向から顕著な整形加工が施される。先端部付近は整形が不十分だが，側縁および稜上には細部加工がある。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	断面形	石材	整形加工	個体・接合	グリッド	備考
555	147	144	40	Q0639	107.0×22.5×18.5	41.9	完形	△	An-C	2-W	個８	h５	
556	147	144	40	Q1191	72.0×28.0×26.0	35.6	半折	△	An-A	3-W		g５	

第62表　３ａ区エリア２ブロック２Ｃ　角錐状石器　属性表

ナイフ形石器（第147図　557・558）

二側縁加工のナイフ形石器１点，一側縁加工１点がある。557は素材の打面側を連続して整形し，対側縁下部を浅く整形する二側縁加工品。器体の長さに対して幅が広い形態である。基部は細部加工が施される。

558は背面に３面のネガティブな剥離面をもつ横長剥片を素材とする。打面側を正面鋸歯状に間隔を持ちながら整形加工を施す一側縁加工品である。557と同様にやや幅広の形態である。ブロック内で東端で出土しておりエリア３に近い位置にあるが，ブロック３Ｃとの間には４～５ｍの空白域がある。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	断面形	石材	整形加工	個体・接合	グリッド	備考
557	147	144		Q1208	48.5×22.5×7.0	5.2	半折	□	An-A	2-S		g５	
558	147	144	40	Q0089	52.0×32.5×12.0	18.1	半折	□	An-A	1-S		h４	

第63表　３ａ区エリア２ブロック２Ｃ　ナイフ形石器　属性表

加工痕有剥片（第147図　559）

加工痕有剥片が１点ある。559は背面に自然面を留める大形剥片の主要剥離面中央を打撃して折断した後，側縁に連続的な加工を施したものである。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	石材	打面	側縁	末端	個体・接合	グリッド	備考
559	147	144		Q1200	44.0×71.0×20.0	49.7	完形	An-C	×	○	○		g５	大形剥片を折断

第64表　３ａ区エリア２ブロック２Ｃ　加工痕有剥片　属性表

石核（第147図　560・561）

２点出土している。560は剥片の主剥離面を石核底面として粗い打面調整を施しながら打面側の作業面から剥片を剥取する。最終作業面の幅は40.0㎜ 以下と消耗が著しい。作業面と反対の素材剥片末端には素材の主剥離面側から４～５回の連続的な加工が施される。転用を意図した可能性があろう。

561は表裏上下に打面が頻繁に転移する石核である。560はブロック西端で出土。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	石材	打面調整	面転移	個体・接合	グリッド	備考
560	147	144	40	Q1267	57.5×26.0×13.0	17.2	半折	An-A	×	○		g７	
561	147	144	40	Q0652	72.0×38.0×14.0	30.6	完形	An-A	×	○		h６	

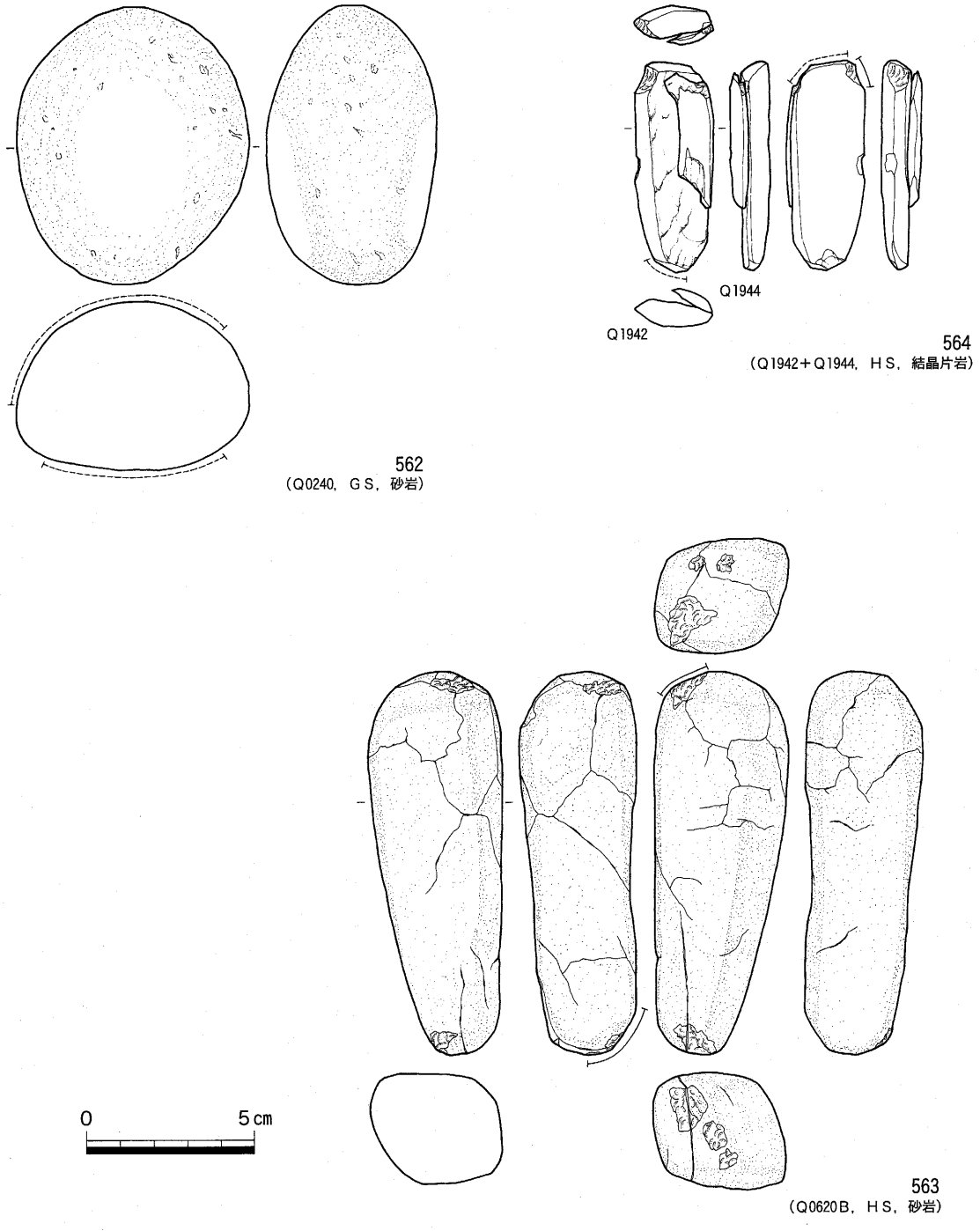
第65表　３ａ区エリア２ブロック２Ｃ　石核　属性表

叩石（第148図　563・564）

2点出土している。563は棒状の砂岩製で頭部・側縁・基部に敲打痕を認める。基部付近の断面形は円形で直径約35.0㎜。被熱のため器体全面に亀裂が入る。564は結晶片岩製の棒状叩石である。敲打により縦割を生じ，半折する。頭部に面をもち，敲打の際に生じた磨滅の痕跡と考えられる。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	石材	打面	側縁	末端	個体・接合	グリッド	備考
563	148	144		Q0620B	115.8×40.0×35.0	215.0	完形	砂岩	○	○	-		h5	被熱による亀裂
564	148	144	40	Q1942＋Q1944	63.0×23.5×11.5	22.1	半折	結晶片岩	?	○	-	礫接合(P2)	g5	敲打により縦割

第66表　3a区エリア2ブロック2C　叩石　属性表

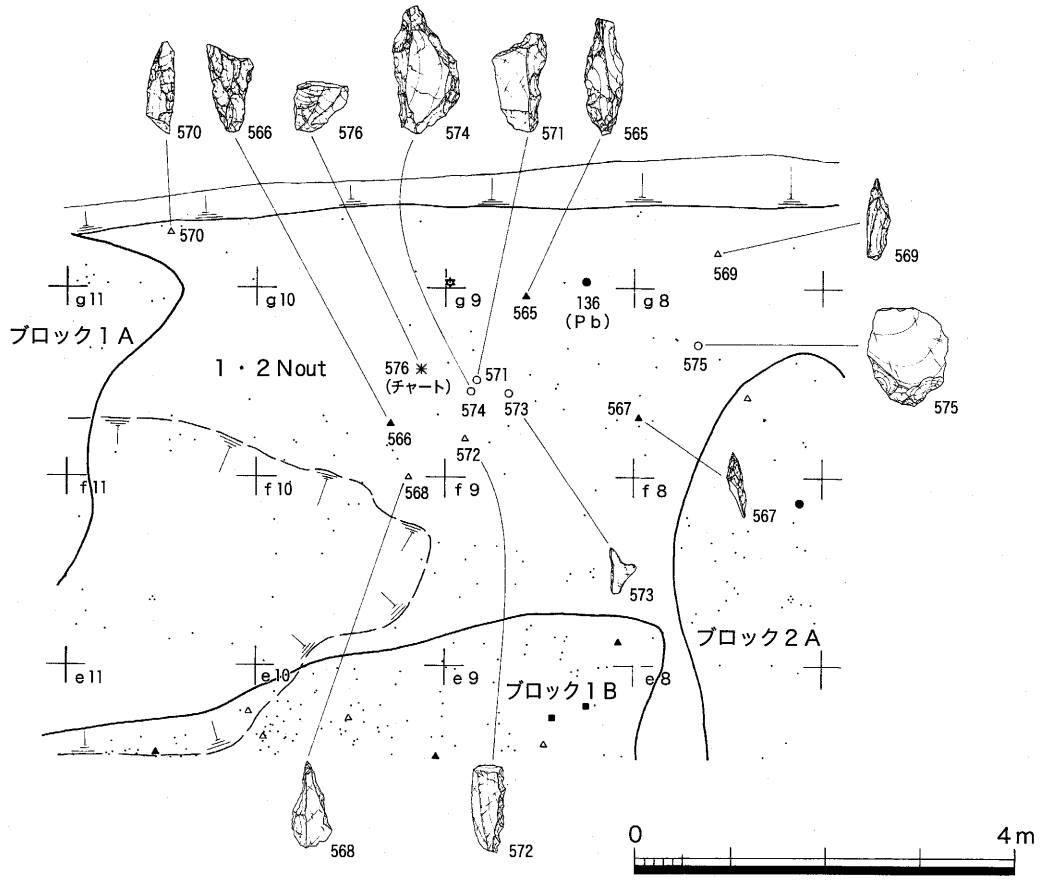


562
（Q0240，GS，砂岩）

564
（Q1942＋Q1944，HS，結晶片岩）

563
（Q0620B，HS，砂岩）

第148図　3a区エリア2　ブロック2B・2C　出土石器実測図　GS・HS　(S=1／2)



第149図　３ａ区エリア１・２器種別石器分布図10　1・2Nout　(S=1／80)

(13) ３ａ区外縁部出土石器

エリア１・２の小ブロック外縁部に散在する石器を報告する。また，ブロック１Ａと１Ｂの間に存在した古墳時代の埴輪焼成土坑に流入した一群も含めて報告する。

器種	1・2Nout	1Sout	1・2Sout	2・3Nout	2・3Sout	3Eout	古墳時代土坑
	点数（重量g）	点数（重量g）	点数（重量g）	点数（重量g）	点数（重量g）	点数（重量g）	点数（重量g）
Tr	3（30.8）	1（27.6）					
Kn	4（23.0）						
Sc			1（18.0）				
RF	4（98.3）				2（59.3）		
UF							
Cr			2（43.6）	2（285.8）	3（445.0）		
Fl	48（314.1）	9（56.9）	7（22.8）	8（22.4）	14（75.1）	1（2.8）	
Ch	56（22.2）		5（0.9）	1（0.2）	9（1.9）	1（0.3）	
RM							
GS							
HS							
Sa	1（0.8）			1（1.2）			
Po							
合計	116（488.8）	10（84.5）	15（85.5）	12（309.6）	28（581.3）	2（3.1）	

第67表　３ａ区外縁部出土　石器分布内容総括表

＜１・２Nout出土石器＞

ブロック１Ａからブロック２Ｃまで半環状に分布する各ブロックに囲まれたやや散漫な分布域である。約35㎡の範囲に出土石器総数116点が分布する。散漫とはいえ，分布密度は１㎡につき3.3点。ほかの外縁部の分布密度と比較して，約10倍の密度でみられる。特に東側のブロック２Ａに近い位置で多く出土しており，ブロック区分することも不可能ではない。器種組成も角錐状石器，ナイフ形石器，ＲＦが揃う。花崗岩礫が１点（136）出土している。石材は１ＢＨとエリア２の各小ブロックと共通し，An-Ａを主体として多彩。

角錐状石器（第150図　565～567）

３点の角錐状石器がある。556は長さ60.0㎜ 以上の三面加工品。素材面は殆どみられず各方向から顕著な整形加工が施される。断面形は不整な菱形に近い。566は裏面に古い１面の剥離面を留め，表面を上下から整形加工する二面加工角錐状石器である。基部には端部からの敲打状の加工がみられる。エリア１の角錐状石器と同様に特徴的な加工である。567は先端部を取り込んだ整形加工時の剥片である。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量(g)	遺存状態	断面形	石材	整形加工	個体･接合	グリッド	備考
565	150	149		Q4482	61.0×21.0×15.0	15.0	先端欠	△	An-A	3-W		g9	
566	150	149		Q1345	47.5×24.2×16.5	14.1	基部のみ	△	An-A	2-W		g10	
567	150	149		Q0704	34.0×10.0×8.5	1.7	先端のみ	△	An-A	2-W		g8	

第68表　３ａ区エリア１・２　１・2Nout　角錐状石器　属性表

ナイフ形石器（第150図　568～572）

二側縁加工のナイフ形石器が３点（568～570），一側縁加工が２点（571・572）出土している。568は裏面が不規則に剥離する２面の剥離面で構成される。角錐状石器先端部折損片に二次加工を施したものの可能性がある。基部に素材の縁辺を留め，先端は鋭く尖る。569はねじれた剥片の打瘤を除去し，先端部を尖らせる形態の二側縁加工ナイフ形石器。整形加工は表裏両面から施される。571は不定形剥片の側縁部に整形加工を施し，先端に素材の縁辺を留めるものである。

571･572は一側縁加工ナイフ形石器。572は一枚の先行剥離面の打撃方向と，素材剥片の剥離方向が一致し，かつ背面に石核底面を取り込んだ翼状剥片を素材とする国府型ナイフ形石器である。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量(g)	遺存状態	断面形	石材	整形加工	個体･接合	グリッド	備考
568	150	149		Q1332	45.5×21.5×12.5	8.7	完形	□	An-A	2-S		f10	角錐状石器折損片か？
569	150	149		Q1221	43.0×12.5×7.0	2.9	完形	□	An-A	2-S		h8	
570	150	149		Q1492	49.0×14.7×8.0	5.3	基部欠	□	An-A	2-S	個10	h11	
571	150	149		Q1326	53.2×29.4×12.2	17.4	半折	△	An-A	1-S		g9	
572	150	149		Q1329	46.0×18.0×7.0	5.7	先端欠	□	An-A	1-S		g9	

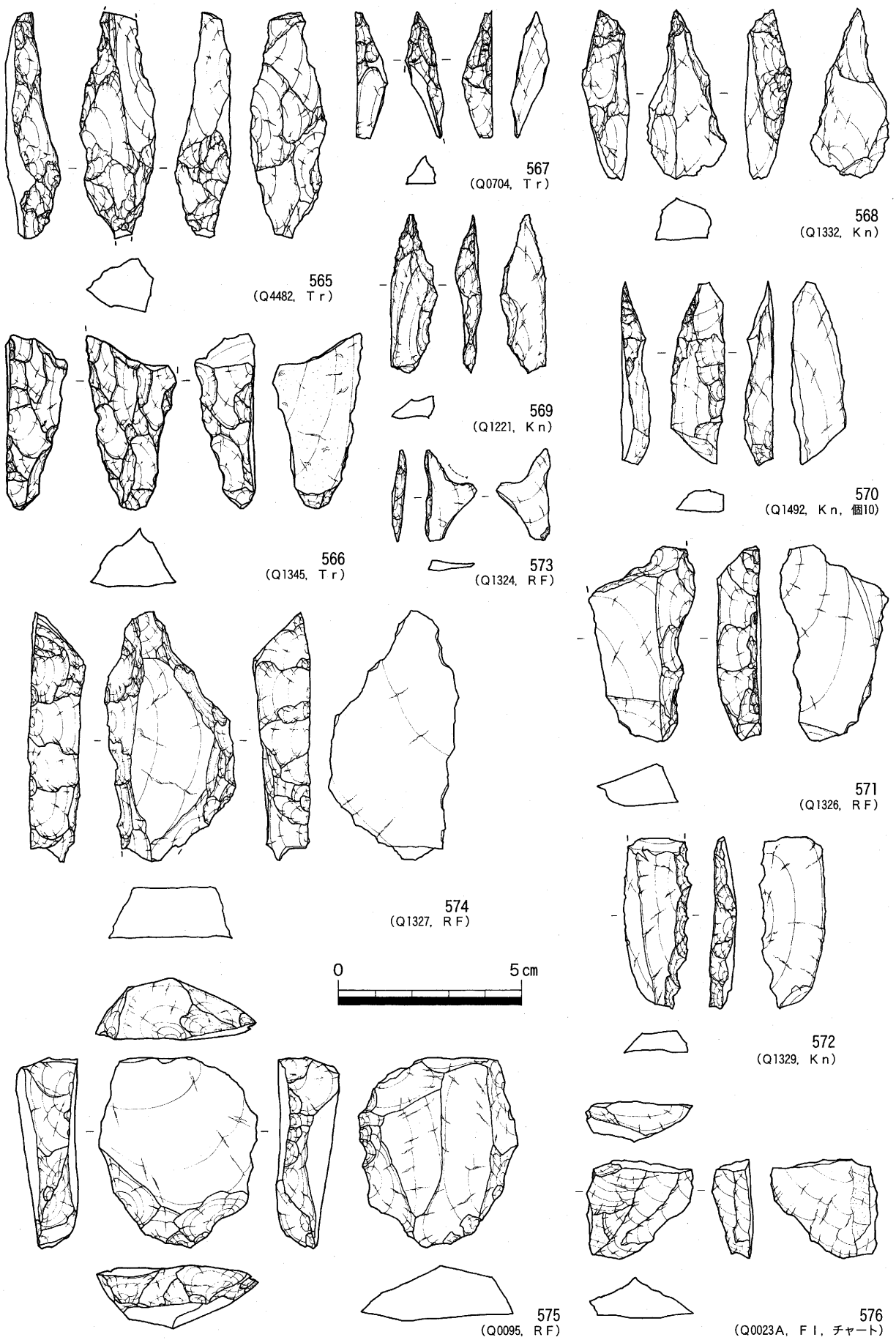
第69表　３ａ区エリア１・２　１・2Nout　ナイフ形石器　属性表

加工痕有剥片・剥片

加工痕有剥片が３点ある。573は不定形の剥片の側縁を連続的に加工し，対側縁に直径12.0㎜ ほどのノッチを施す。574は厚みの一定した大形剥片の周縁を急角度で加工したもので，角錐状石器の粗整形段階の可能性がある。575も同様に厚みのある剥片の一辺を急角度で加工したもので，下端部の緩やかな湾曲は527のスクレイパーに類似する。576は打点部で半折したチャート石材の剥片である。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量(g)	遺存状態	石材	打面	側縁	末端	個体･接合	グリッド	備考
573	150	149		Q1324	25.0×14.2×4.0	0.7	完形	An-A	×	○	○		g9	
574	150	149		Q1327	68.0×35.0×15.5	41.7	完形	An-A	○	○	○		g9	角錐状石器粗割？
575	150	149		Q0095	52.0×43.0×17.0	38.5	完形	An-A	○	○	○		g8	スクレイパーか？
576	150	149		Q0023A	26.8×29.0×11.0	7.9	折損	チャート	-	-	-		g10	薄青色

第70表　３ａ区エリア１・２　１・2Nout　加工痕有剥片・剥片　属性表



第150図　3 a区エリア1・2　ブロック外縁部　出土石器実測図1　1・2Nout　(S=2/3)

＜１Sout出土石器＞

角錐状石器（第152図　577）

ブロック１Ｂから約1.5m離れて出土した完形の角錐状石器である。全長97.0㎜，幅23.5㎜で，断面形がやや扁平な台形。大形横長剥片の主剥離面を裏面に設定する。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量(g)	遺存状態	断面形	石材	整形加工	個体･接合	グリッド	備考
577	152	151		Q1821A	96.5×23.2×12.5	27.6	完形	□	An-A	2-S		b11	

第71表　３ａ区エリア１・２　１Sout　角錐状石器　属性表

＜１・２Sout出土石器＞

スクレイパー（第152図　578）

ｄ８グリッドで出土したスクレイパーである。詳細な出土位置の記録がなく，ブロック２Ａもしくはブロック１ＢＨに所属する可能性もある。ブロック２Ａの西南では同様の形態をもつスクレイパーが２点出土している。背面に自然面を留める剥片の側縁を刃部として，急角度の整形加工を施す。刃部の湾曲はブロック２Ａの527に類似する。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量(g)	遺存状態	石材	打面	側縁	末端	個体･接合	グリッド	備考
578	152			Q1172	47.5×34.0×11.5	18.2	完形	An-A	○	◎	○		d8	自然面残置

第72表　３ａ区エリア１・２　１・２Sout　スクレイパー　属性表

石核（第152図　579・580）

２点出土している。579は白色に風化する石材で，石材消耗が著しい。580は出土位置の記録がないが，ｄ８グリッドで出土した交互剥離で打面転移が認められる石核である。断面形は菱形を呈す。ブロック２Ａもしくはブロック１ＢＨに所属する可能性もある。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量(g)	遺存状態	石材	打面調整	面転移	個体･接合	グリッド	備考
579	152	151		Q3493	35.0×19.5×9.0	7.6	完形	An-C	×	○		c8	風化顕著
580	152			Q1169	69.0×36.0×19.5	36.0	完形	An-A	×	○		d8	

第73表　３ａ区エリア１・２　１・２Sout　石核　属性表

＜２・３Sout出土石器＞

加工痕有剥片（第152図　581）

加工痕有剥片が１点ある。幅広で主要剥離面の内彎が著しい剥片を素材とする。打面部と対側縁を急角度で加工しており，角錐状石器あるいはナイフ形石器の整形途上とも考えられる。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量(g)	遺存状態	石材	打面	側縁	末端	個体･接合	グリッド	備考
581	152	151		Q4401	23.0×86.0×17.5	25.6	完形	An-A	○	×	○	個10	e4	

第74表　３ａ区エリア１・２　２・３Sout　加工痕有剥片・剥片　属性表

＜古墳時代埴輪焼成土坑出土石器＞

角錐状石器２点（第152図　582・583），ナイフ形石器１点（第152図　584）が出土している。

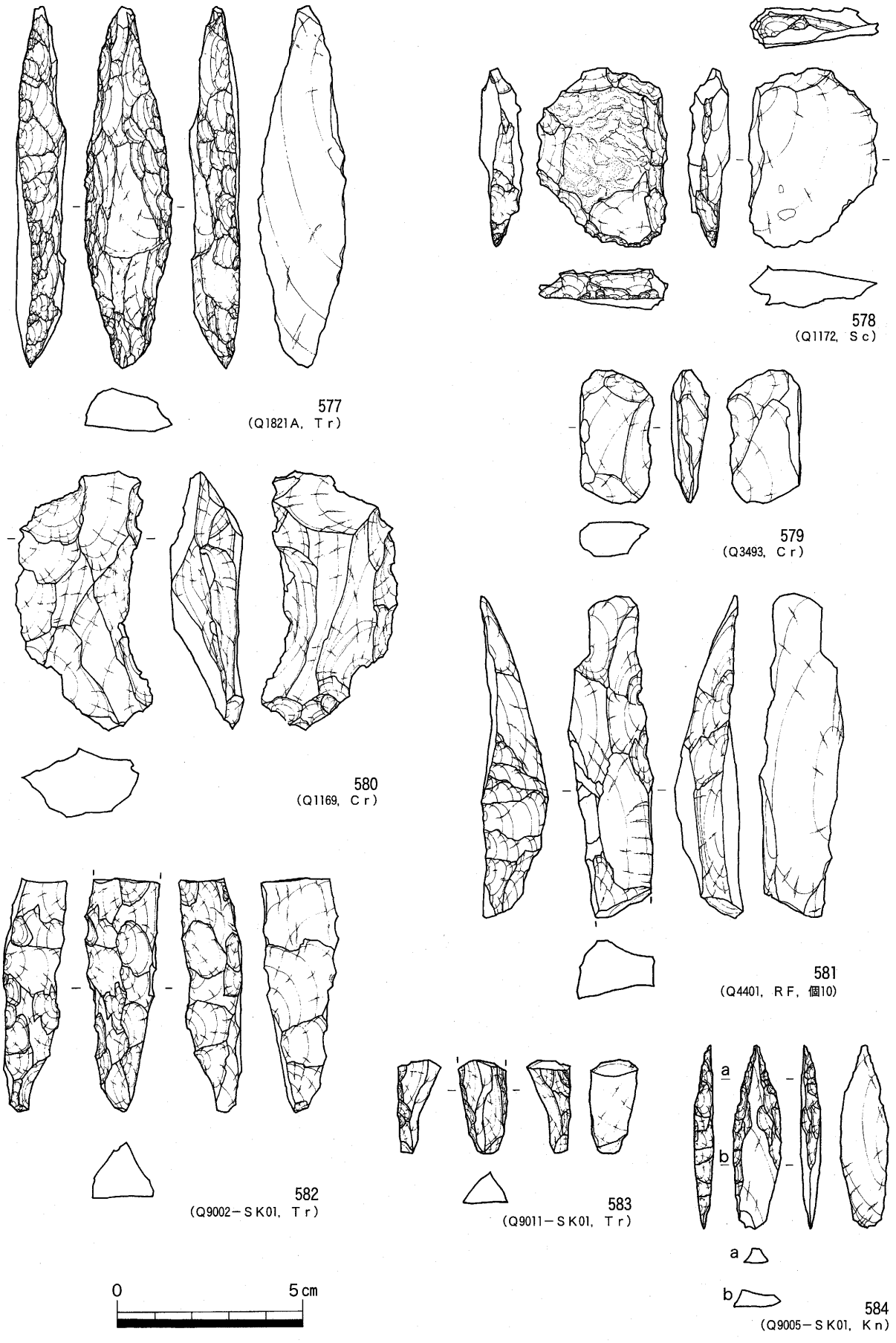
番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量(g)	遺存状態	断面形	石材	整形加工	個体･接合	グリッド	備考
582	152			Q9002	62.5×20.3×17.0	18.4	半折	△	An-C	3-W			
583	152			Q9011	25.0×13.0×11.5	2.8	基部のみ	△	An-C	2-S			

第75表　３ａ区古墳時代埴輪焼成土坑　角錐状石器　属性表

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量(g)	遺存状態	断面形	石材	整形加工	個体･接合	グリッド	備考
584	152			Q9005	49.0×13.0×5.5	3.4	完形	△	An-A	2-S			

第76表　３ａ区古墳時代埴輪焼成土坑　ナイフ形石器　属性表

第151図　３ａ区エリア１・２器種別石器分布図11　外縁部　(S=1／120)



第152図　3a区エリア1・2　ブロック外縁部　出土石器実測図2　(S=2／3)

(14) 3a区エリア1・2　接合資料および個体識別資料

ここでは，すでに報告したエリア3接合資料を除く，エリア1・2の接合資料を報告する。なお，エリア3と，ここで報告するエリア1・2接合資料との間には，接合関係は認められない。3a区エリア1・2では合計74件の接合資料がある。構成剥片点数は196点。全出土石器数である4,058点（外縁部含む）を母数とした接合率は4.8%，重量で算出すると，全体の約33.9%を接合個体が占める。エリア3と比較して接合重量比は少ない。内訳を示すと第77表のとおりである。接合種別は剥離面における接合（Ⅰ種接合）を含むものが53件，折面における接合（Ⅱ種接合）が21件である。

各ブロックにおける接合率をみると，ブロック2Bが11.8%と最も高い。一方，ブロック1Cは1.9%と低く，ほかは3～6%に収まる。ブロック間の接合状況はエリア3と比較すると低調である。以下，各資料毎に剥片剥離の流れを概説する。

番号	挿図番号	図版番号	剥離概要（遺物掲載番号）（器種）	石材	石核分類	種別	出土位置	構成数
44	第154図	41	Q2289（586）→Q2277（Cr）（426）	An-D	F	Ⅰ	1A	2
45	第155図	41	Q2857（588）→Q4323（Cr）（424）	An-D	B	Ⅰ	1A	2
46	第155図 第157図	29・41	Q4848（Tr）（390）→Q0008A（590）→Q0586+4048（591）	An-D	F	Ⅰ	1A・1BH	4
47	第159図	29	Q1781（593）→Q2322（Tr）（597）+［Q2883（596）→Q2892（594）→Q3645（595）］	An-D	B（個5）	Ⅰ・Ⅱ	1A	5
48	第161図	42	Q1547（600）→Q2852（RF）（416）→Q1768（599）	An-D		Ⅰ	1A	3
49	第161図		Q4254（602）→Q4585（603）	An-A		Ⅰ	1A	2
50	第161図		Q1440（605）→Q1468（606）	An-C		Ⅰ	1A	2
51	第162図		Q1227（609）→Q2851（608）	An-D		Ⅰ	1A	2
52	第162図		Q0008D（612）→Q4698（611）	An-D		Ⅰ	1A	2
53	第162図		Q1795（614）→Q2921（615）	An-D		Ⅰ	1A	2
54	第164図		Q2929（617）→Q4068（618）	An-D		Ⅰ	1A	2
55	第164図		Q2827（620）→Q4133（621）	An-D		Ⅰ	1A	2
56	第164図		Q3730（624）→Q2826（623）	An-A		Ⅰ	1A	2
57	第164図		Q0010（626）→Q1863（627）	An-A		Ⅰ	1A・1BH	2
58	第164図		Q4274（630）→Q4275（629）	An-D		Ⅰ	1A	2
59	第165図	42	Q4957（632）→Q4550（634）→Q2879（633）	An-A		Ⅰ	1A	3
60	第165図		Q2914（637）→Q2873A（636）	An-D		Ⅰ	1A	2
61	第165図		Q4847（639）→Q4718（640）	An-D		Ⅰ	1A	2
62	第165図		Q4566（643）→Q4088（642）	An-D		Ⅰ	1A	2
63	第167図		Q4270（645）→Q4273（647）→Q4743（646）	An-A	（個体3）	Ⅰ	1A	3
64	第169図		Q2793A（658）→Q3078（659）	An-A		Ⅰ	1BH・1BL	2
65	第169図 第170図	42	Q1284（661）→［Q1878（662）］［Q3154（664）=Q0719（665）］→Q0739+Q1297（Cr）（496）	An-C	（個体2）	Ⅰ	1BH	6
66	第170図		Q3156（667）（→）Q1400（668）	An-C	（個体2）	Ⅰ	1BH	2
67	第172図 第173図	42	Q1278（670）→Q0722（671）→Q1849（672）→Q1906（673）→Q0753（RF）（675）→Q4894（677）→Q0745（676）→Q0742+Q0738（Cr）（494）	An-A	（個体11）	Ⅰ	1BH	9
68	第175図	43	Q1826（679）→Q0751（Cr）（500）	An-A	（個体9）	Ⅰ	1BH	2
69	第175図		Q1394（682）→Q1380（681）	An-A	（個体9）	Ⅰ	1BH	2
70	第175図		Q0723A+Q0747（683）	An-A	（個体9）	Ⅱ	1BH	2
71	第177図	43	Q1899（685）→Q3062A（Cr）（686）	An-C	（個体8）	Ⅰ	1BH	2
72	第179図	43	Q0582（Kn）（474）→Q1687（688）	An-A		Ⅰ	1BH	2
73	第179図		Q1285（691）→Q0728（690）	An-A		Ⅰ	1BH	2
74	第179図		Q2775（693）→Q2544（694）	An-D		Ⅰ	1BH	2
75	第179図		Q2627（697）→Q1599（696）	An-C		Ⅰ	1BH	2
76	第180図		Q0735（699）→Q1282（700）	An-C		Ⅰ	1BH	2
77	第180図		Q1279（703）→Q0727（702）	An-C		Ⅰ	1BH	2
78	第180図	33・43	Q1847（707）→Q4451（706）→Q1905（Kn）（477）→Q1850（705）	An-A		Ⅰ	1BH・2A	4
79	第182図 第183図	44	Q0583（709）→Q1724+Q1857+Q3050（710）→Q0003+0004A（711）	An-A	（個10）	Ⅰ	1BH	6
80	第184図		Q0741（RF）（713）→Q1884（714）→Q0021（Cr）（498）	An-A	（個10）	Ⅰ	1BH	3
81	第184図		Q0581（UF）（491）→Q1720（716）	An-A	（個10）	Ⅰ	1BH	2
82	第186図		Q0914（RF）（532）→Q0971+Q2646（Cr）（539）	An-A		Ⅰ	1BH・2A	3

第77表　3a区エリア1・2　接合資料総括表1

番号	挿図番号	図版番号	剥離概要（遺物掲載番号）（器種）	石材	石核分類	種別	出土位置	構成数
83	第186図		Q0513（720）→Q0906（Cr）（538）	An-A		I	2A	2
84	第188図	38	Q0875B（722）＋Q0875A（537）	An-C		I	2A	2
85	第188図	37	Q0113A（724）→［Q0946A→Q0861］→Q0224＋Q0954（Tr）（514）	An-A	（個体1）	I	2A・2B	5
86	第189図		Q1214（730）＋Q0857A（729）→Q0962（731）→Q1251（728）	An-A	（個体1）	I	2A・2B	4
87	第191図	36	Q2037（735）→Q1220（733）→Q0101（734）→Q2034A（736）→Q0222（Tr）（510）→Q0983（RF）（531）→Q0417＋Q4375（Tr）（511）	An-A		I	2A・2C	8
88	第194図		Q0969A（738）→Q0419（739）	An-A	（個体7）	I	2A	2
89	第194図		Q1242（RF）（551）→Q0956A（741）	An-A	（個体6）	I	2A・2B	2
90	第196図～第198図	45	Q0166＋Q0233（744）→Q0905＋Q2033＋Q1256（RF）（554・748）→0950A（749）→Q0158＋Q0870（745）→Q0938A（747）→Q0995（746）	An-A	（個体6）	I	2A・2B・2・3Sout	10
91	第200図		Q0665（751）→Q1246（752）	An-A		I	2B・2C	2
92	第200図		Q1252A（754）→Q1955（755）	An-A	（個体1）	I	2A・2B	2
93	第200図		Q0642（758）→Q2408（757）	An-A		I	2C	2
94	第201図		Q0943（760）→Q0984B（761）	An-A	（個体1）	I	2A	2
95	第201図		Q2411B（764）→Q2411A（763）	An-D		I	2C	2
96	第201図		Q1194（766）→Q0416（767）	An-A	（個体1）	I	2A・2C	2
97	第112図	29	Q2320＋Q4875（Tr）（385）	An-C		II	1A	2
98	第113図	29	Q3704A＋Q3704B（Tr）（391）	An-D		II	1A	2
99	第114図	30	Q1434＋Q9003（Tr）（399）	An-D		II	1A	2
100	第121図	31	Q3913＋Q3914（Tr）（433）	An-D		II	1BL	2
101	第121図	31	Q1597＋Q2712（Tr）（434）	An-D		II	1BL・1BH	2
102	第122図	31	Q2529＋Q2801（Tr）（435）	An-A		II	1BL・1BH	2
103	第125図		Q3026＋Q3142（Tr）（457）	An-A		II	1BH	2
104	第125図		Q2692＋Q3562（Tr）（458）	An-D		II	1BH・1CH	2
105	第126図		Q1398（Tr）＋Q3109（462）	An-A		II	1BH・不明	2
106	第127図	33	Q2690＋Q4820（Kn）（471）	An-A		II	1BH	2
107	第129図		Q1912＋Q3172A（RF）（487）	An-A		II	1BH	2
108	第145図	39	Q0227（Tr）（545）→Q1243（RF）（550）［接合状態は544］	An-A	（個体7）	I	2B	2
109	未報告		Q1785＋Q3744	An-D		II	1A	2
110	未報告		Q3516＋Q3517	An-D		II	1BL	2
111	未報告		Q0558＋Q2717	An-D		II	1BH	2
112	未報告		Q2604＋Q2605	An-C		II	1BH	2
113	未報告		Q0545＋Q2613	An-C		II	1BH	2
114	未報告		Q1831＋Q1854	An-A		II	1BH	2
115	未報告		Q1836＋Q1860	An-A		II	1BH	2
116	未報告		Q1822＋Q3491	An-D		II	1Sout	2
117	未報告		Q2490＋Q2491	An-A		II	2A	2

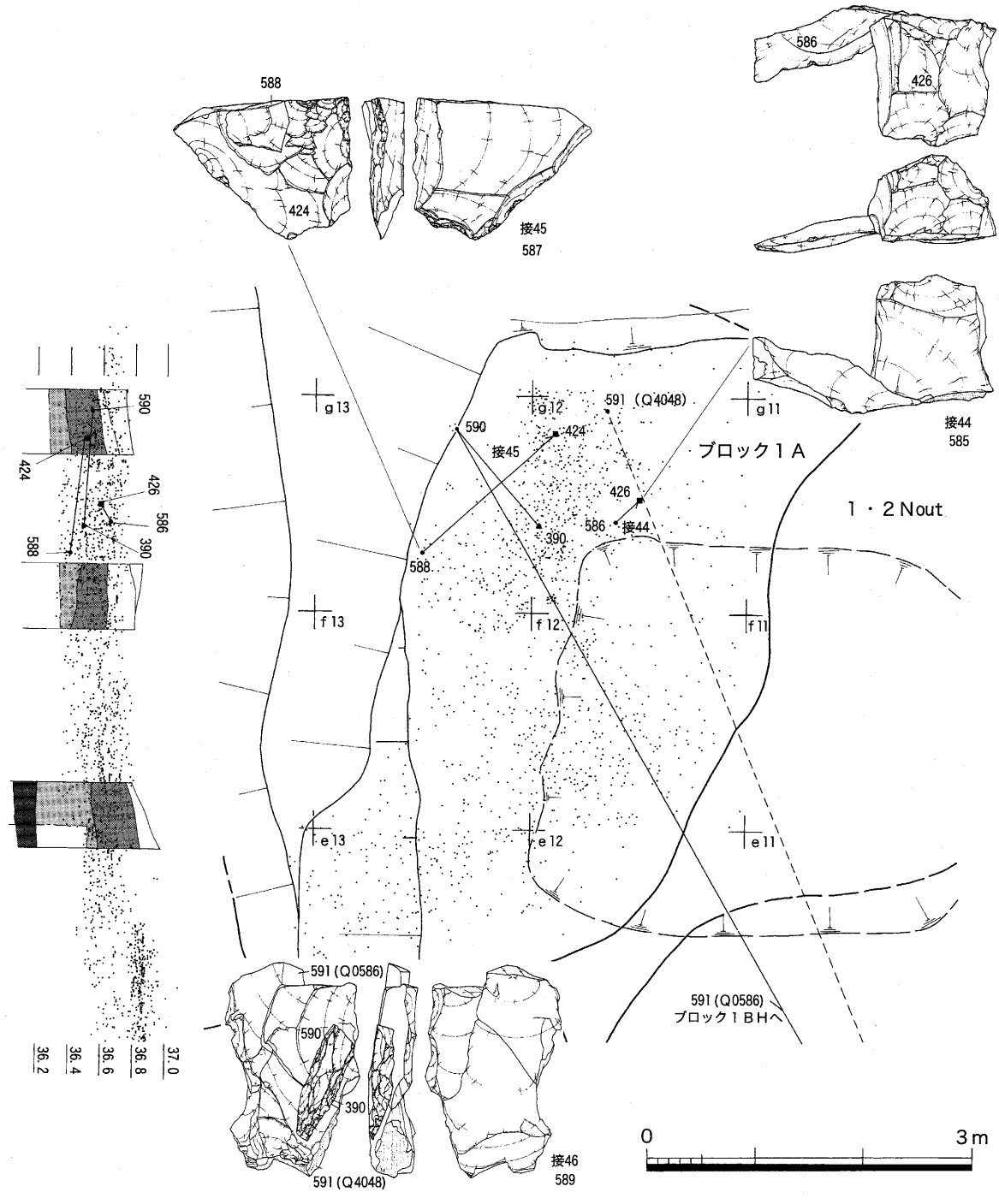
第78表　3a区エリア1・2　接合資料総括表2

接合資料44（第154図）

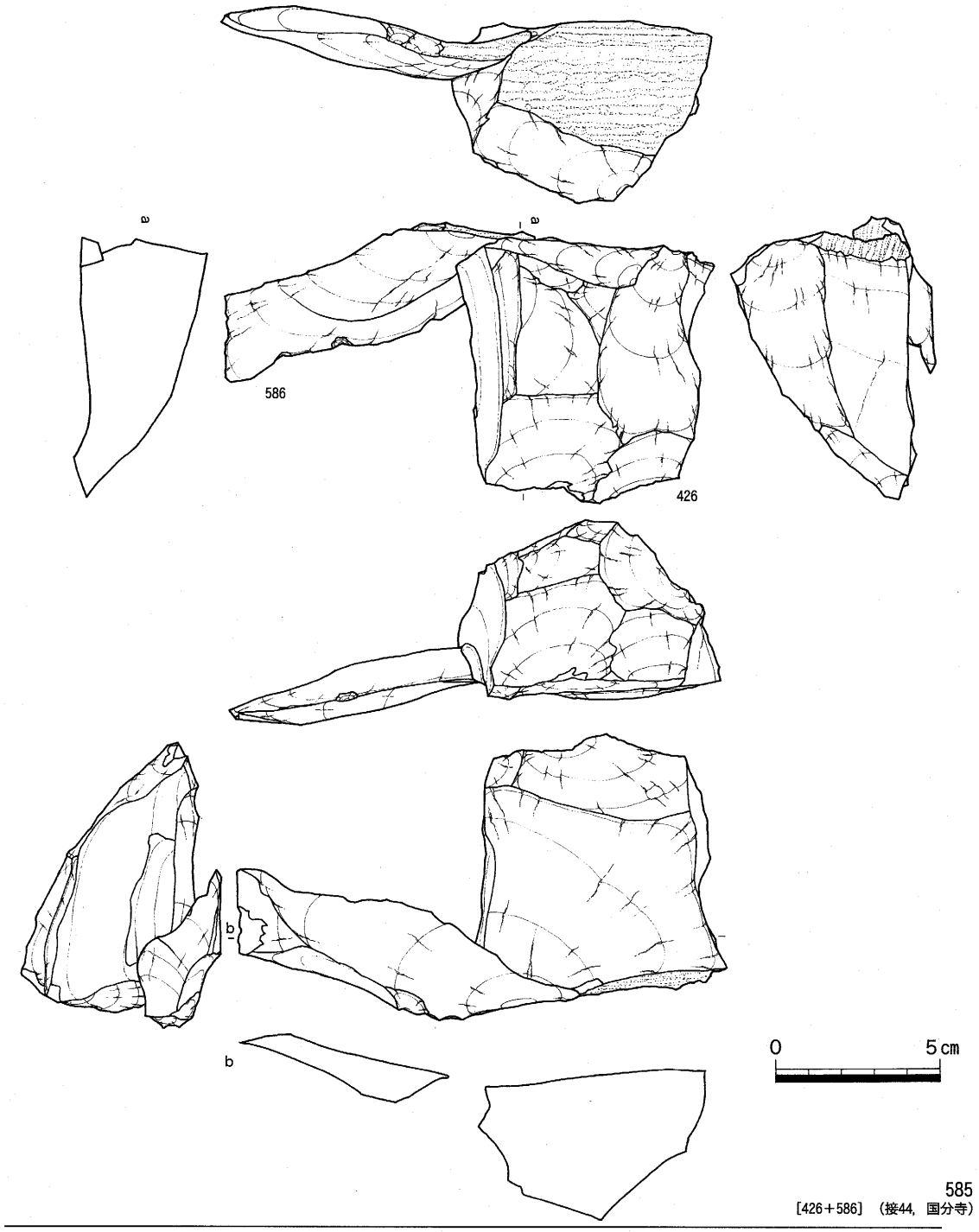
接合状態で長さ87.0㎜，幅150.0㎜，厚さ62.0㎜，総重量368.4g，石核と横長剥片の2片で構成される。素材は厚さ60.0㎜以上の塊状石片で，自然面を打撃し，石核の分割を行う過程が復元できる。剥片586は自然面を打面として連続的に流理に平行する剥片を得ようとしたものである。ただし，剥離途上でヒンジフラクチャーを生じて剥離が停止する。

石核下端部にはこれらの剥離面に先行する下端方向からの剥離面が複数みられる。これらは交互剥離の様相を呈しており，当接合資料の自然面からの打撃は，残核分割の痕跡をとどめているものかもしれない。

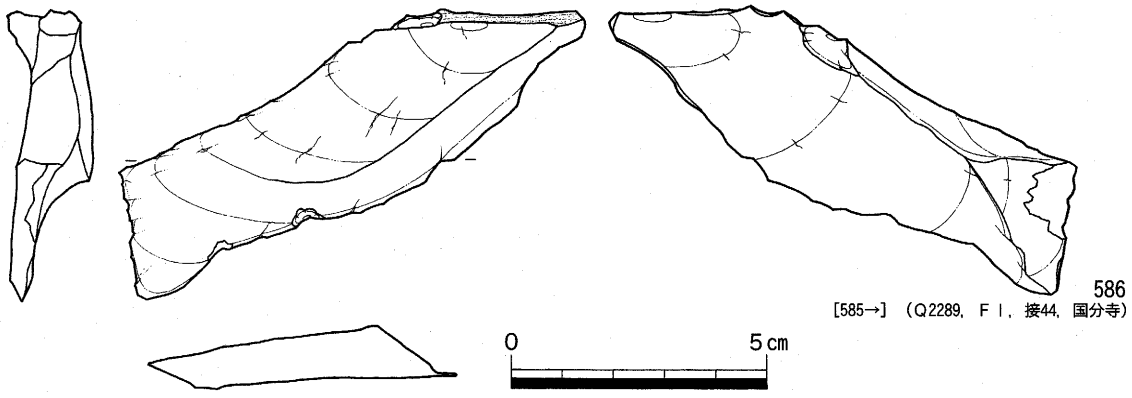
石材は白色系に風化する緻密なAn-Dで，ブロック1Aの北側に分布する。接合距離は0.5m。



第153図　３ａ区エリア１・２　接合資料分布図１　接44～46　(S＝1／60　垂直分布S＝1／40)

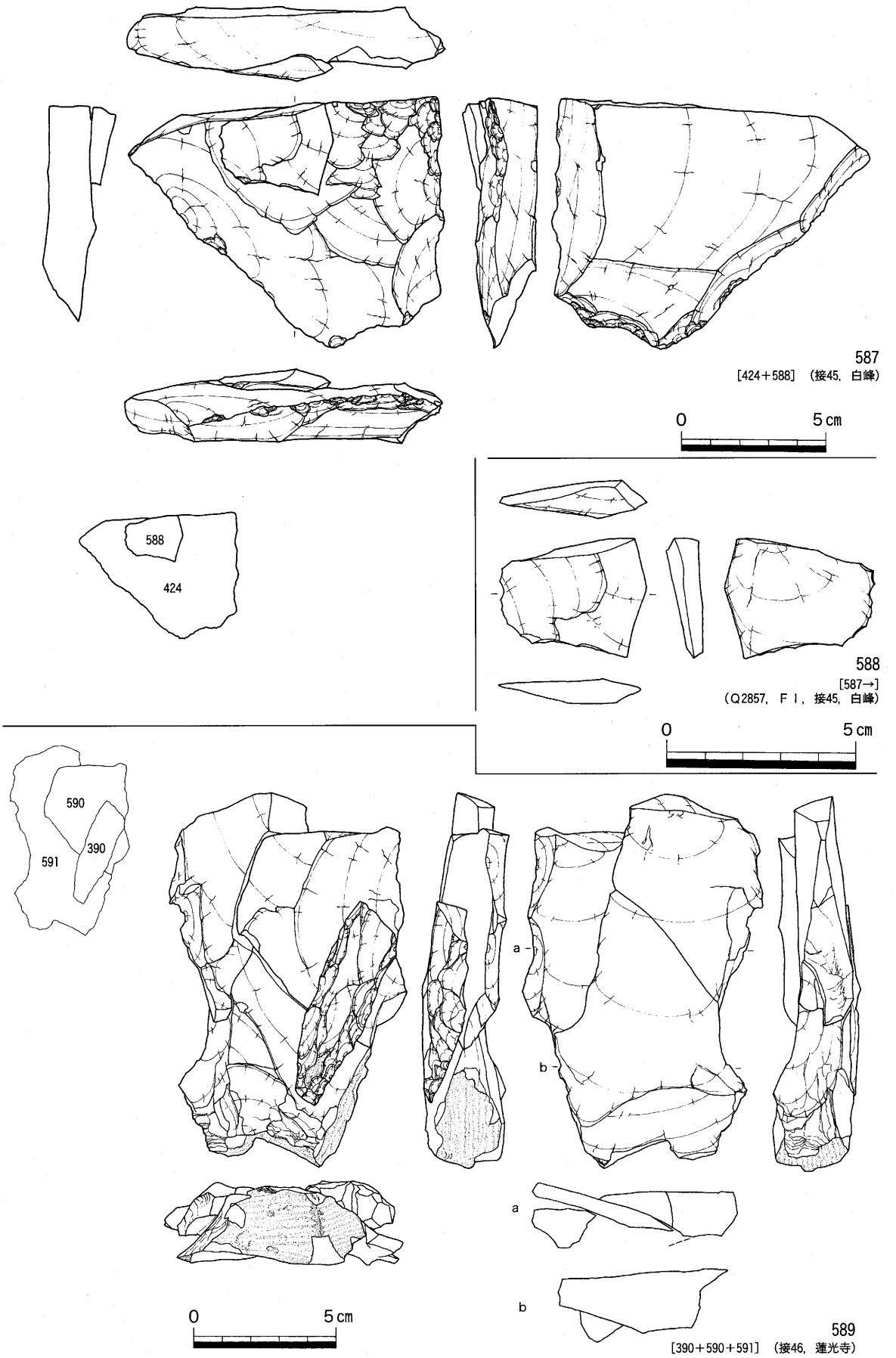


585
[426+586] (接44, 国分寺)



586
[585→] (Q2289, F I, 接44, 国分寺)

第154図　3 a 区エリア 1 ・ 2 接合資料実測図 1　接44　(S=2／3, 1／2)



第155図　３ａ区エリア１・２接合資料実測図２　接45・46　（S＝2／3，1／2）

接合資料45（第155図）

長さ110.0㎜，幅87.0㎜，厚さ26.0㎜の板状を呈する石核と剥片の接合資料である。２枚で構成され，総重量208.7ｇをはかる。石核424は図の右側縁および左側縁に横長剥片剥離痕をとどめる。右側縁打撃時に半折した後，打面を折損面に転移し，素材の平坦面を作業面として，打点を細かく左右にずらしながら剥片剥離を進める。剥片588は打面を折損面に転移した初期に剥離された不定形剥片である。

剥片剥離の停止後，周縁に微細な調整剥離を施しており，スクレイパーに転用した可能性も指摘できる。石材はＡn-Ｄで，接合資料44や46あるいは47を含む個体５に非常に近く，同一個体の可能性もある。分布はブロック１Ａの西側で，接合距離は1.65m。

接合資料46（第155図～第157図）

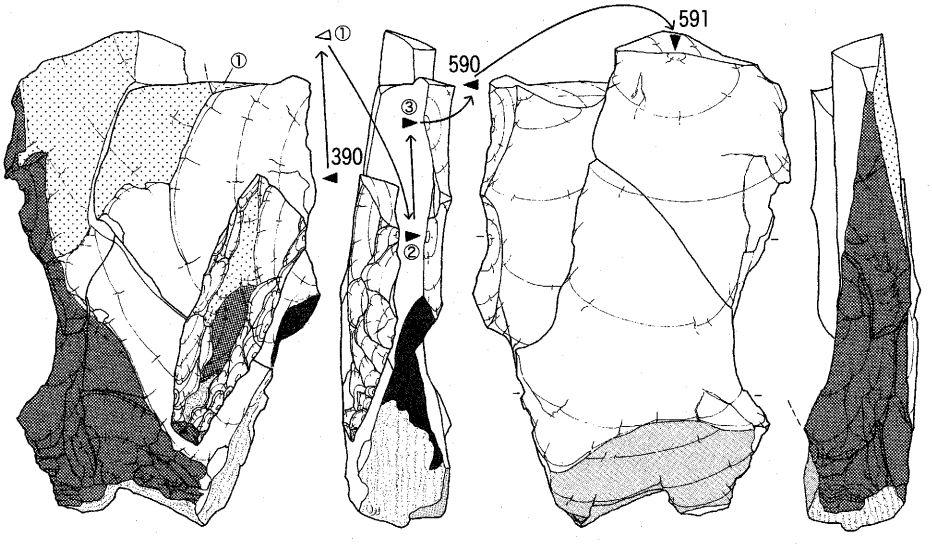
長さ131.0㎜，幅80.0㎜，厚さ29.0㎜，総重量253.3ｇの接合資料である。角錐状石器１点を含み，合計４片で構成し，残核は遺存しない。図の下端部に流理が顕著でやや水磨した自然面を留め，表裏面下半の剥離面は器面の風化が著しい。塊状の転石を使用したものと考えられる。

剥片剥離は当初は表裏交互に進むが，590打撃時に石核が半折し，その後折損面に打面を転移する。

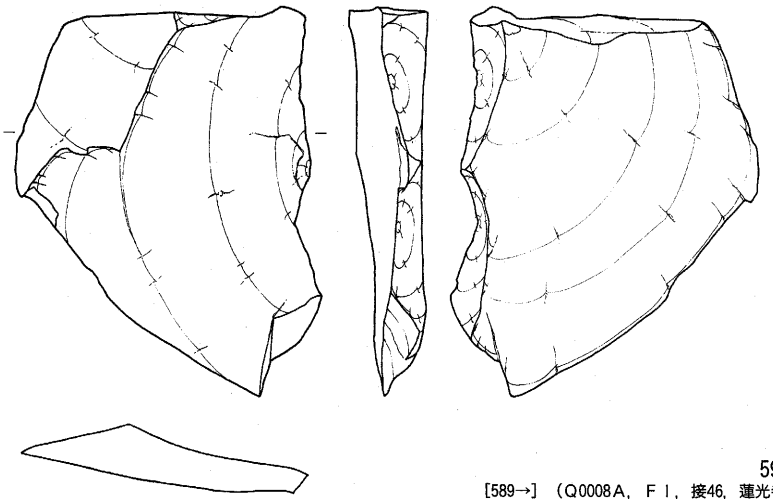
a面　→ 390 → ①
b面　　② → ③
590 → 折損面に打面転移 → 591

角錐状石器390は交互剥離の初期段階で剥離した不定形剥片の中央付近の厚みを利用して整形されたものである。

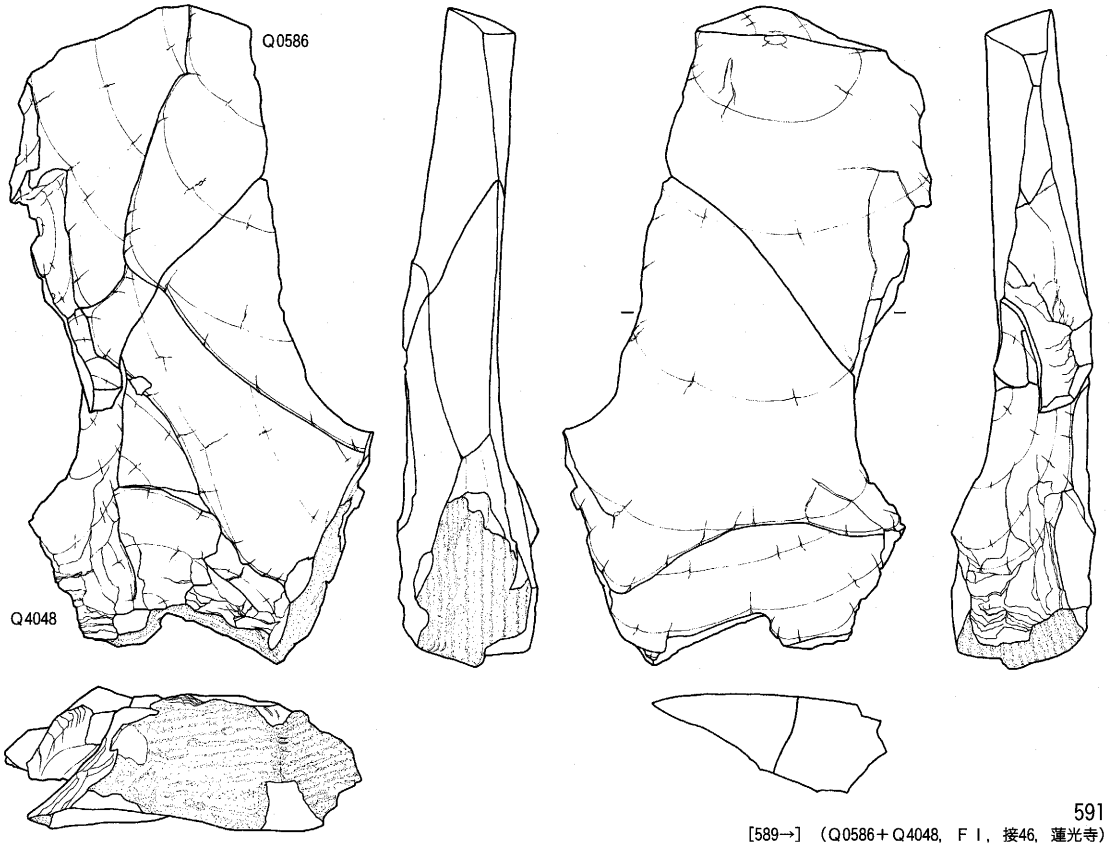
石材は下端部の自然面の様相が接合資料44に良く似ており，同一個体の可能性が極めて高いが，接合はしない。Ａn-Ｄとして分類できる。分布はブロック１Ａにあるが，剥片591の半折片が約11m離れてブロック１ＢＨにある。



第156図　３ａ区接合資料46打点移動模式図



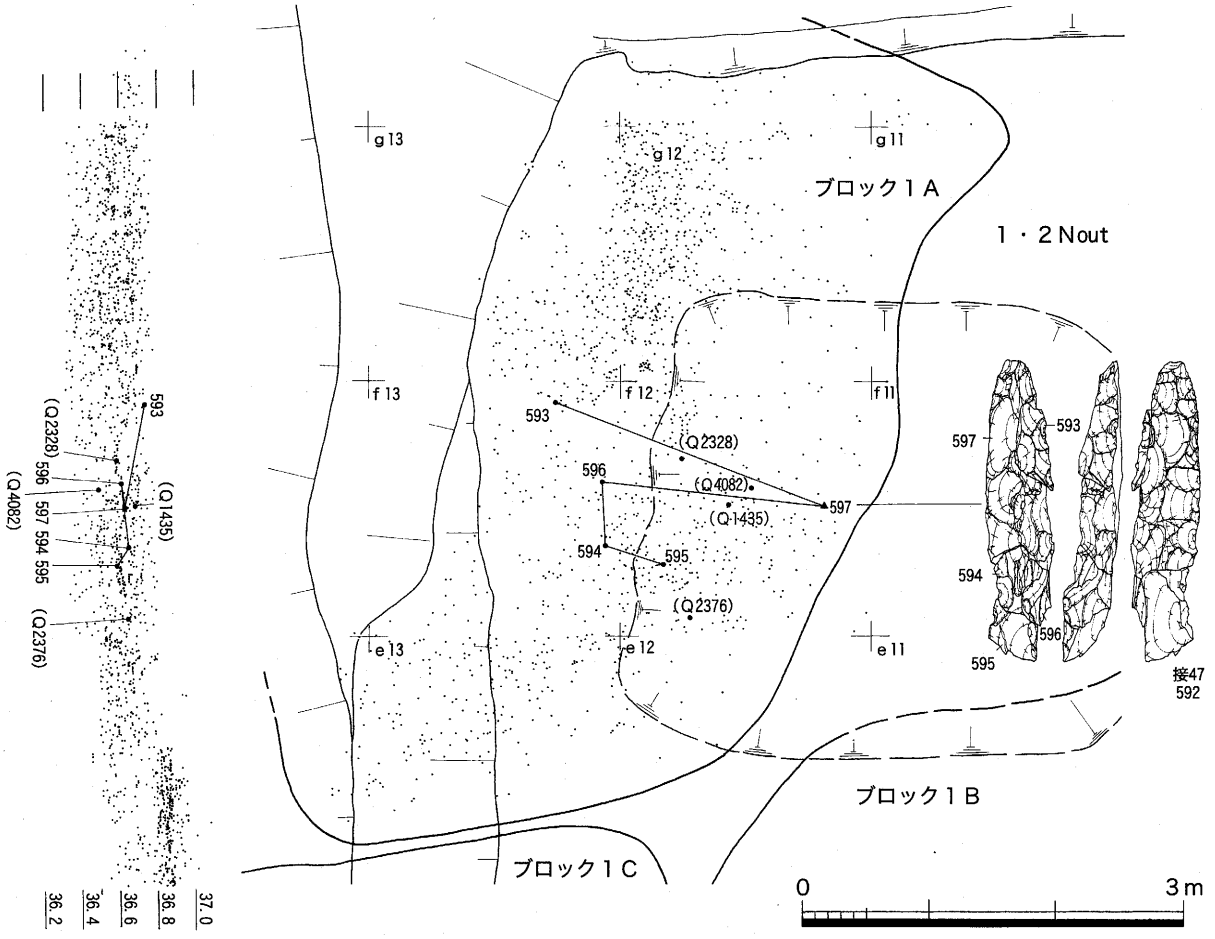
590
[589→] （Q0008A，ＦⅠ，接46，蓮光寺）



591
[589→] （Q0586＋Q4048，ＦⅠ，接46，蓮光寺）

0　5cm

第157図　３ａ区エリア１・２接合資料実測図３　接46　（S＝2／3）



第158図　３ａ区エリア１・２　接合資料分布図２　接47・個体５　（S＝1／60　垂直分布S＝1／40）

接合資料47・個体５（第158図・第159図）

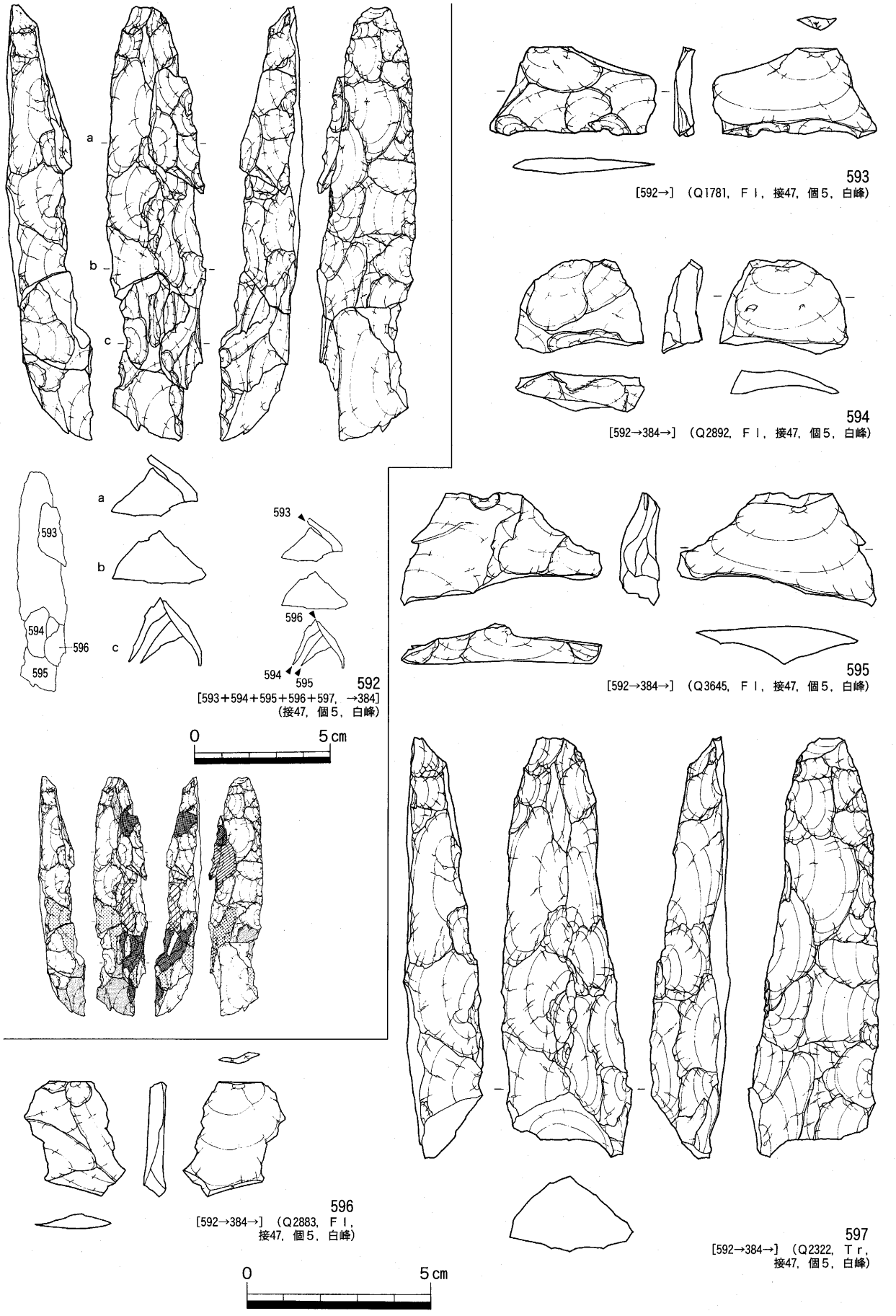
三面加工の角錐状石器の整形加工に伴う剥片１点と，折損後の再加工に伴う剥片３点が，角錐状石器に接合する資料である。合計５点で構成される。また，直接接合しないが色調や風化度また，流理層の一致などから同一個体（個体５）として識別できる剥片がほかに４点ある。

すべてを接合した状態で長さ158.0㎜，幅36.0㎜，厚さ32.0㎜，総重量103.6ｇをはかる。剥片593は角錐状石器の稜上から打撃される整形加工に伴う剥片で，その背部にはすでに上下両面からの加工の痕跡，さらに底面部には角錐状石器裏面加工の痕跡が認められる。

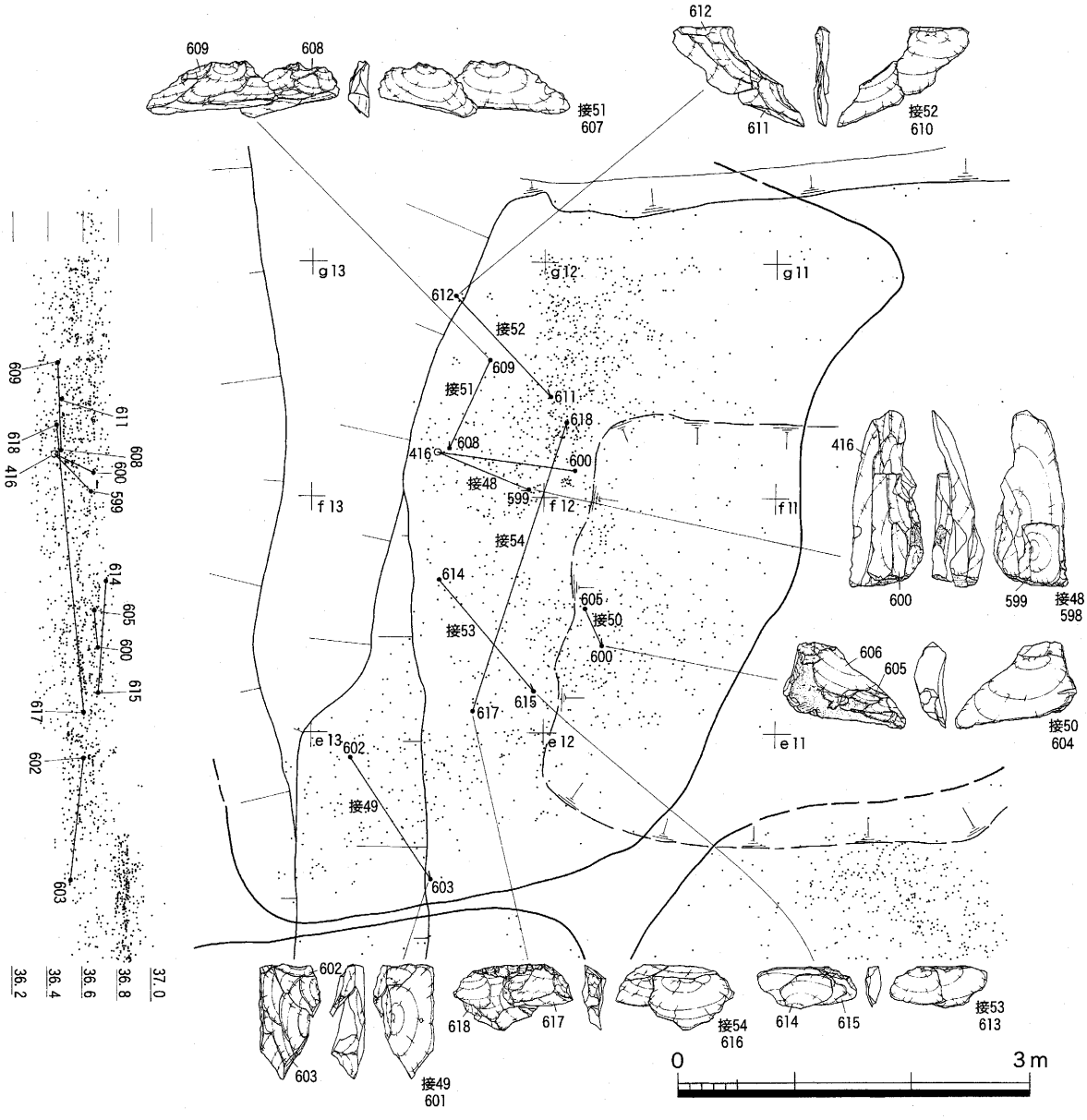
折損後の再加工に伴う剥片594～596は596を稜上からの打撃で剥取した後，裏面から打点をややずらしながら594→595の順で剥ぎ取る。相前後して，同サイズの剥片を打点を左右にずらしながら剥ぎ取った痕跡が多数みられる。

一方で折損後の角錐状石器半折片597には再加工された痕跡は認められない。597側が基部の可能性も考えられる。

分布はブロック１Ａの中央付近に東西2.5mほどの範囲に分布し，個体５とした個体識別資料もほぼその範囲にまとまる。



第159図　3 a区エリア1・2接合資料実測図4　接47　(S=2/3, 1/2)



第160図　３ａ区エリア１・２　接合資料分布図３　接48～54　（S＝1／60　垂直分布S＝1／40）

接合資料48（第160図・第161図）

長さ100.0㎜，幅42.0㎜，厚さ29.0㎜，総重量74.5ｇの加工痕有剥片１点，剥片２点の接合資料である。いずれの剥片も打面を共有し，側縁に流理顕著な自然面を留めることから，厚さ約20.0㎜の板状剥片を素材として，平坦な剥離面に打面を設定し，打面調整を行うことなく打点を左右にずらしながら剥片剥離を行ったものと考えられる。

石材は接合資料44～47・個体５と良く似たＡn- Ｄである。同一個体の可能性もある。分布はブロック１Ａ内の北側に収まる。

接合資料49（第160図・第161図）

長さ66.0㎜，幅35.0㎜，厚さ20.0㎜，総重量33.7ｇで，打面を共有する剥片２点の接合資料である。打面は遺存する剥片の剥片剥離の方向と180度異なる方向のネガティブな剥離面を留めることから，打面

転移が顕著な棒状の石核を想定することができる。

石材は普通サヌカイトのAn-Aで，分布はブロック1Aの南側に分布する。

接合資料50（第160図・第161図）

長さ69.0㎜，幅49.0㎜，厚さ18.0㎜，重量40.9ｇの接合資料である。大形の剥片606の背面に，それに先行して剥離した剥片605が接合する。605は大形剥片606の背面の大きな剥離面に伴う同時割れの小剥片で，接合面とその上部の剥離面との間には，明確な切り合いが認められない。

背面には自然面が大きく残り，打面は平坦面を呈す。自然面は磨滅し，敲打痕が顕著である。転落石を分割して平坦面を作出し，その表皮部分を剥ぎ取る初期段階の接合資料と言える。

石材はややくすんだ灰色を呈すAn-Cで，ブロック1Aの中央付近に分布する。

接合資料51（第160図・第162図）

長さ110.0㎜，幅32.0㎜，厚さ12.0㎜，重量26.8ｇの接合資料である。打面を共有する2剥片で構成される。打面幅は剥片幅に対していずれも狭小で，背面には打面を共有するとみられれる多数の剥離面がある。底面も平坦な1枚の剥離面で構成される。以上から，板状の石核の平坦面を打面として，打点を左右に頻繁にずらせながらやや捻れた形状の剥片を剥取したものと考えられる。

なお，石材は白色に風化しつつ，緻密なAn-Dである。質感は接合資料48に極めて近く，打面と底面との間隔も約20.0㎜と，ほぼ一致する。同一個体の可能性が高いものと言える。分布も同じくブロック1Aの北半にまとまる。

接合資料52（第160図・第162図）

長さ75.0㎜，幅57.0㎜，厚さ90.0㎜，重量13.5ｇの剥片2片の接合資料である。剥片611は上半部が折損し，下半部背面が剥片612の主要剥離面に接合する。612の打面は平坦で，611の打面も共有していた可能性が高い。石材は接合資料48や51に良く似て，An-Dである。同一個体の可能性がある。分布は同じくブロック1A北半にある。

接合資料53（第160図・第162図）

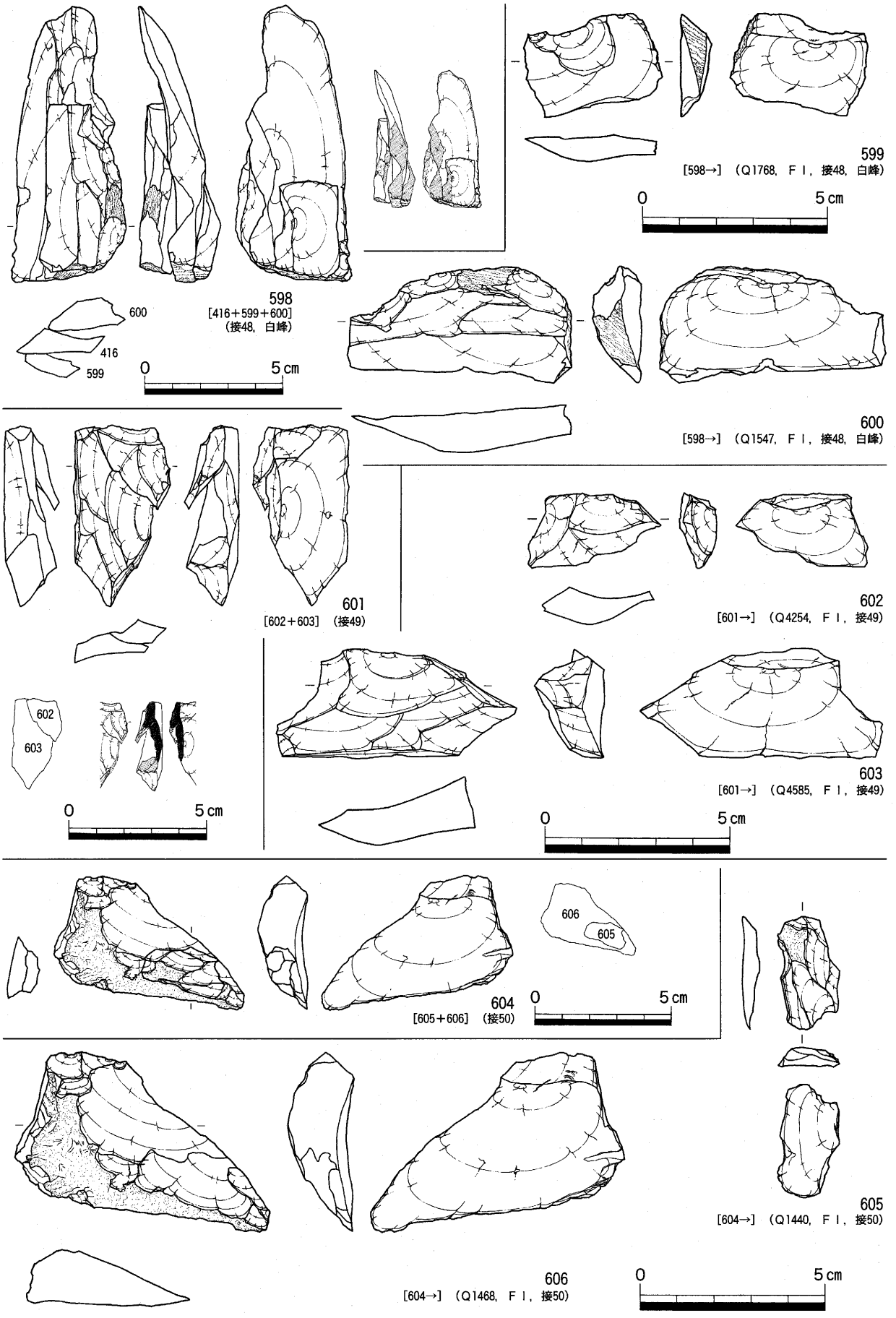
長さ56.0㎜，幅24.0㎜，厚さ9.0㎜ の剥片2点で構成される接合資料である。重量は11.8ｇをはかる。2剥片は平坦打面を共有し，614剥取後，連続して615を得る。背面は180度逆方向の剥離面が認められ，石核の上下両端から剥片剥離が行われたことを示す。

石材は白色に風化するAn-Dで，角錐状石器接合資料の接47に近い。分布はブロック1Aの中央付近にある。

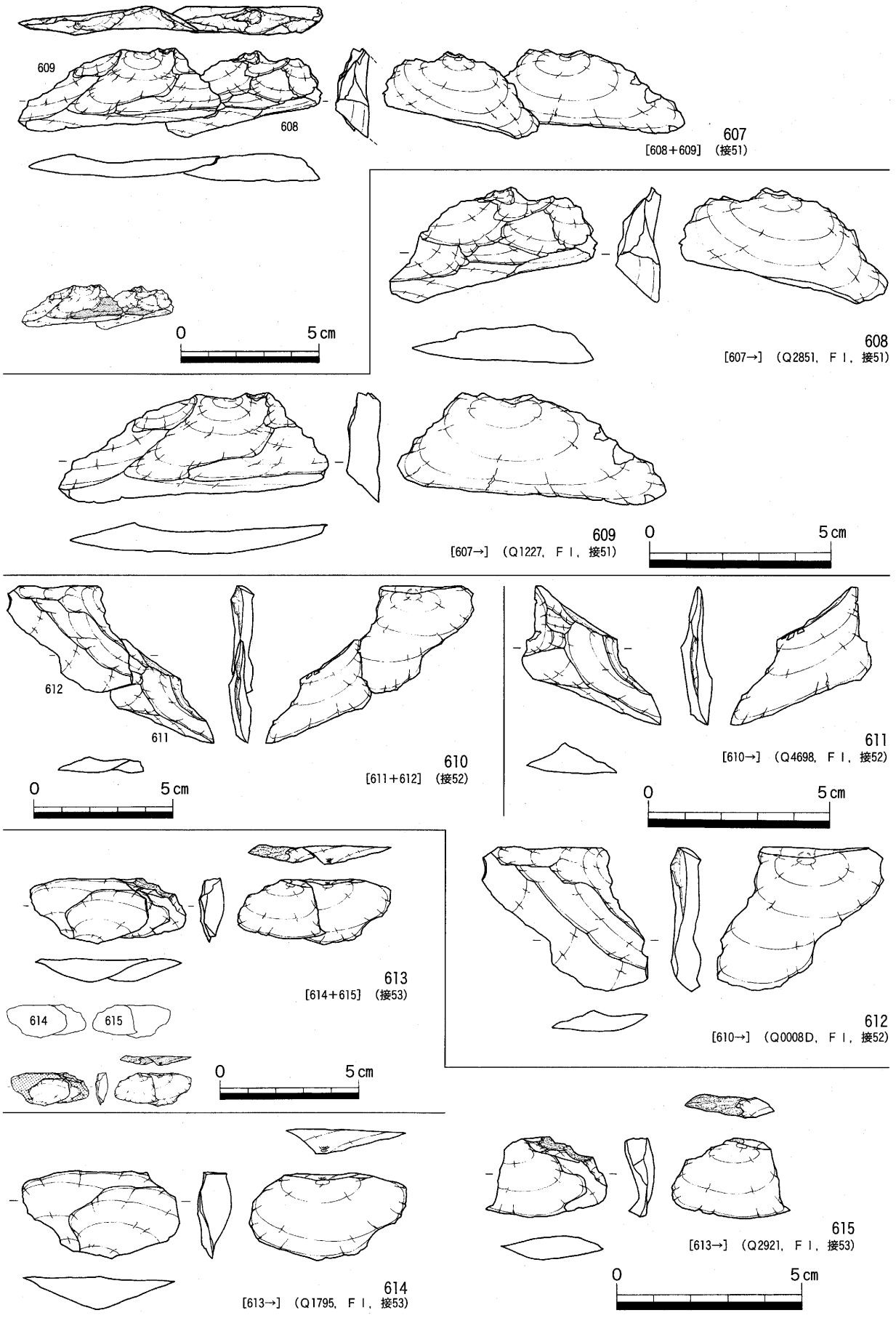
接合資料54（第160図・第164図）

長さ68.0㎜，幅37.0㎜，厚さ17.0㎜，重量23.6ｇの剥片2点からなる接合資料である。平坦な打面上を打点を左右にずらして剥片剥離を行うもの。剥片617剥離後，打点を大きくずらせて1回打撃し，その後618を剥取する。617剥取前には細部調整が施される。

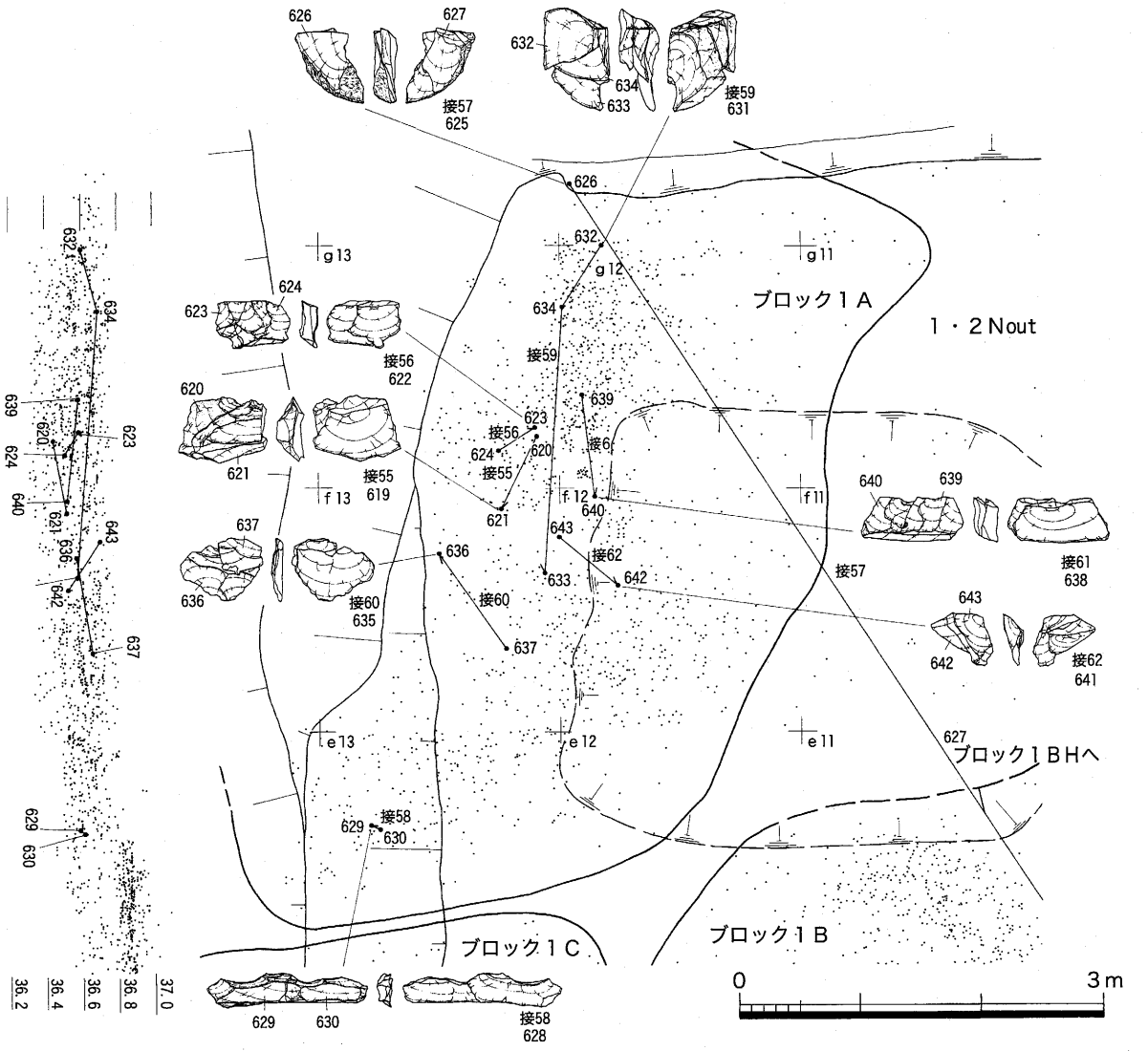
石材はAn-Dで，分布はブロック1Aの北半と中央にある。接合距離は2.6m。



第161図　3 a 区エリア 1 ・ 2 接合資料実測図 5　接48～50　(S＝2／3, 1／2)



第162図　3 a 区エリア 1 ・ 2 接合資料実測図 6　接51～53　(S＝2／3, 1／2)



第163図　３ａ区エリア１・２　接合資料分布図４　接55～62　（S＝1／60　垂直分布S＝1／40）

接合資料55（第163図・第164図）

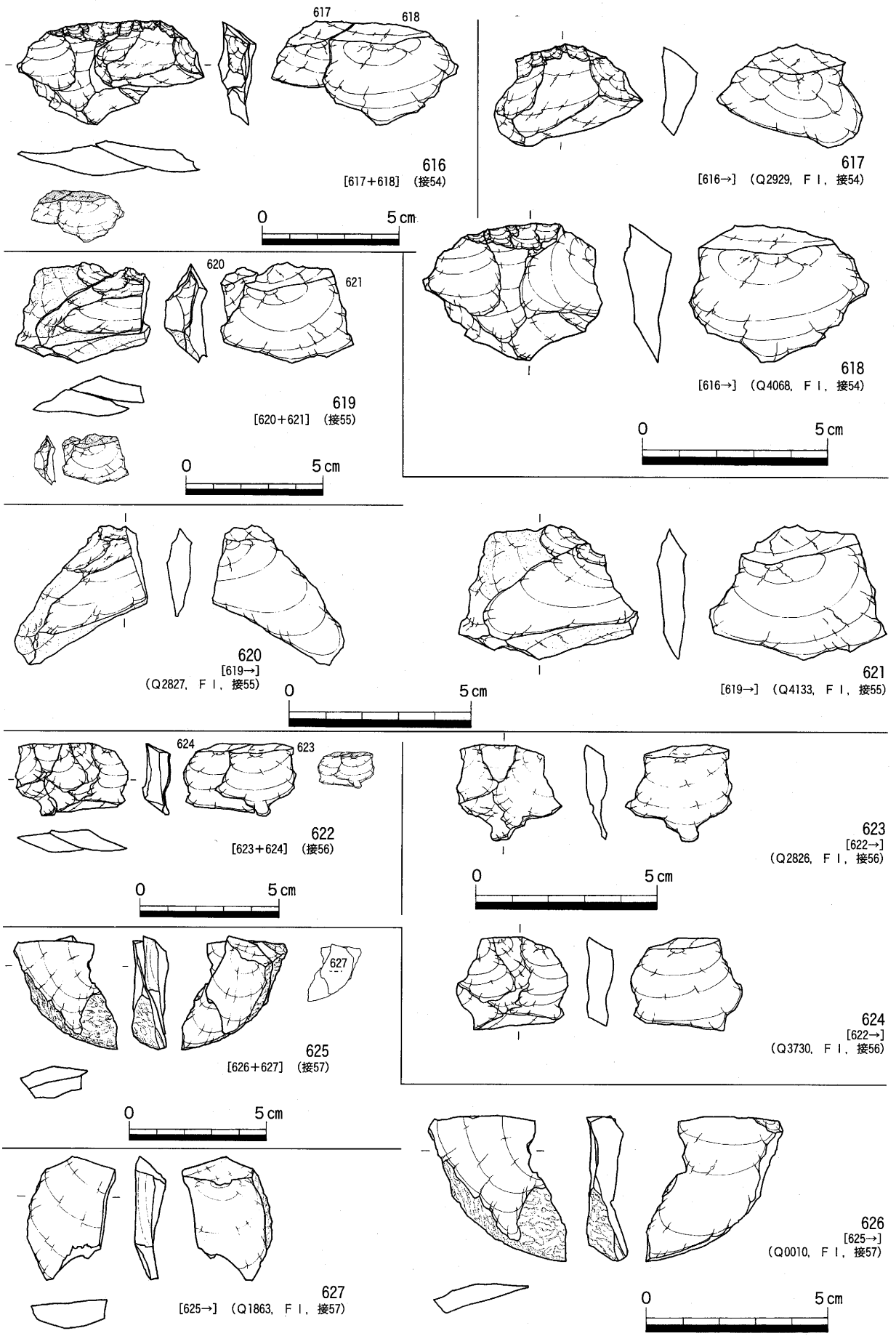
長さ47.0㎜，幅37.0㎜，厚さ15.0㎜，重量21.7ｇの，剥片２点で構成される接合資料である。平坦な打面を連続して打撃し，打点部分で垂直割れを生じた620を剥取し，打点をややずらして１枚の剥片を剥取した後に621を剥離する。

石材はAn-Dで，ブロック１A北半にある。

接合資料56（第163図・第164図）

剥片２片の接合資料である。重量は9.3ｇで，平坦打面を連続して打撃し，剥片剥離を進める。624を剥離した後，続けて623を剥取する。

石材は白筋がやや目立つAn-Dで，打面が流理に平行する。分布はブロック１A北半にある。



第164図　3 a 区エリア１・２接合資料実測図７　接54～58　(S＝2／3, 1／2)

接合資料57（第163図・第164図）

長さ41.0㎜，幅38.0㎜，厚さ13.0㎜，重量15.4ｇの接合資料である。剥片２片で構成され，背面および側縁に自然面を留める。打面は微妙に食い違っており，交互に剥片剥離が進んだものと考えられる。

石材は普通サヌカイトのＡn-Ａで，ブロック１Ａにあって異質である。626はブロック１Ａの北端で出土し，625はブロック１ＢＨで出土している。石材的にはブロック１ＢＨの個体10に類似しており，ブロック１ＢＨに剥片剥離の主体を想定し，626が部分的に遊離した可能性もある。

接合資料58（第163図・第164図）

長さ90.0㎜，幅18.0㎜，厚さ9.0㎜の剥片２片からなる接合資料である。重量は9.7ｇ。それぞれの左右右端で接合し，打面の共有は確かでないが，奥行の短い石核から打点を大きく左右にずらして剥離した剥片である。

石材はＡn-Ｄで，分布はブロック１Ａの南端にまとまる。

接合資料59（第163図・第165図）

長さ56.0㎜，幅37.0㎜，厚さ22.0㎜の剥片３片からなる接合資料である。重量は25.7ｇ。平坦な打面をほぼ直線的に打点を後退させ，不定形な剥片を剥取する。底面は風化が進んだ古い剥離面で，敲打痕がみられる。石材はＡn-Ａである。

632→634→633の順で剥離しており，634までブロック１Ａ北，633がブロック１Ａ中央に分布する。

接合資料60（第163図・第165図）

長さ34.3㎜，幅45.5㎜，厚さ6.3㎜の剥片２片からなる接合資料である。重量は7.0ｇ。ネガティブバルブをとどめた剥離面を打面に設定し，連続的に打撃して２片の剥片を剥取する。剥片636の背面には主剥離面と逆の剥離方向をもつ面が２面ある。打面転移をしながら表裏交互に剥片剥離を進める方法で，剥片剥離作業終盤の石核幅が細くなった段階に行われたものと考えられる。

剥離順序は637背面上部の面→637の打面→637→635の順で，635の打面は打撃時の衝撃で折損する。分布はいずれもブロック１Ａ中央にある。石材はＡn-Ｄ。

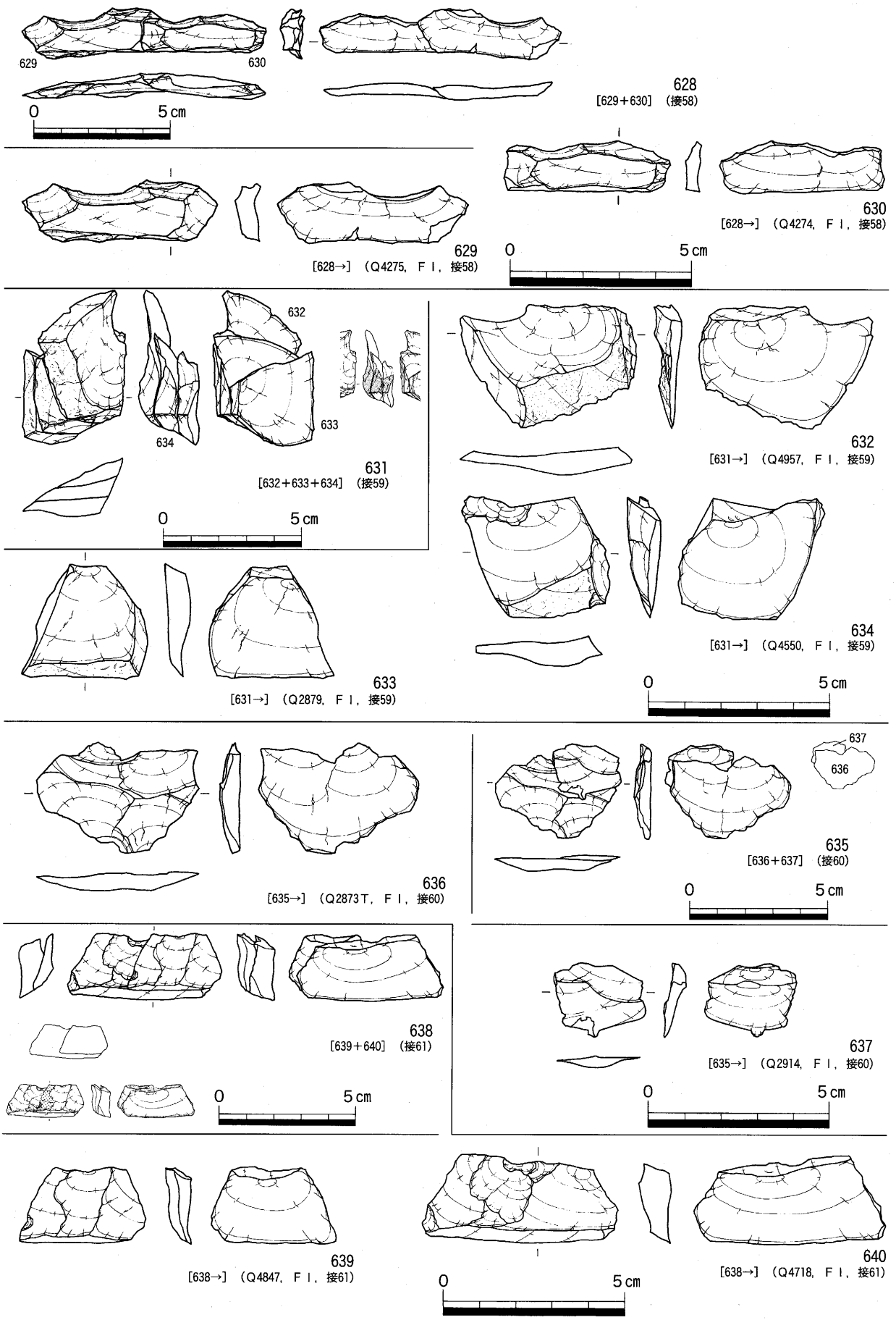
接合資料61（第163図・第165図）

長さ24.0㎜，幅56.0㎜，厚さ14.5㎜の剥片２片からなる接合資料である。重量は16.1ｇ。厚さ23.0㎜の板状石核の平坦面を打面に設定し，横方向に打点をずらせながら剥片を剥取する。剥離順序は図示したとおりである。剥片形状は打面がやや広めで，両側縁はほぼ均等，底面が直線的に取り込まれる。

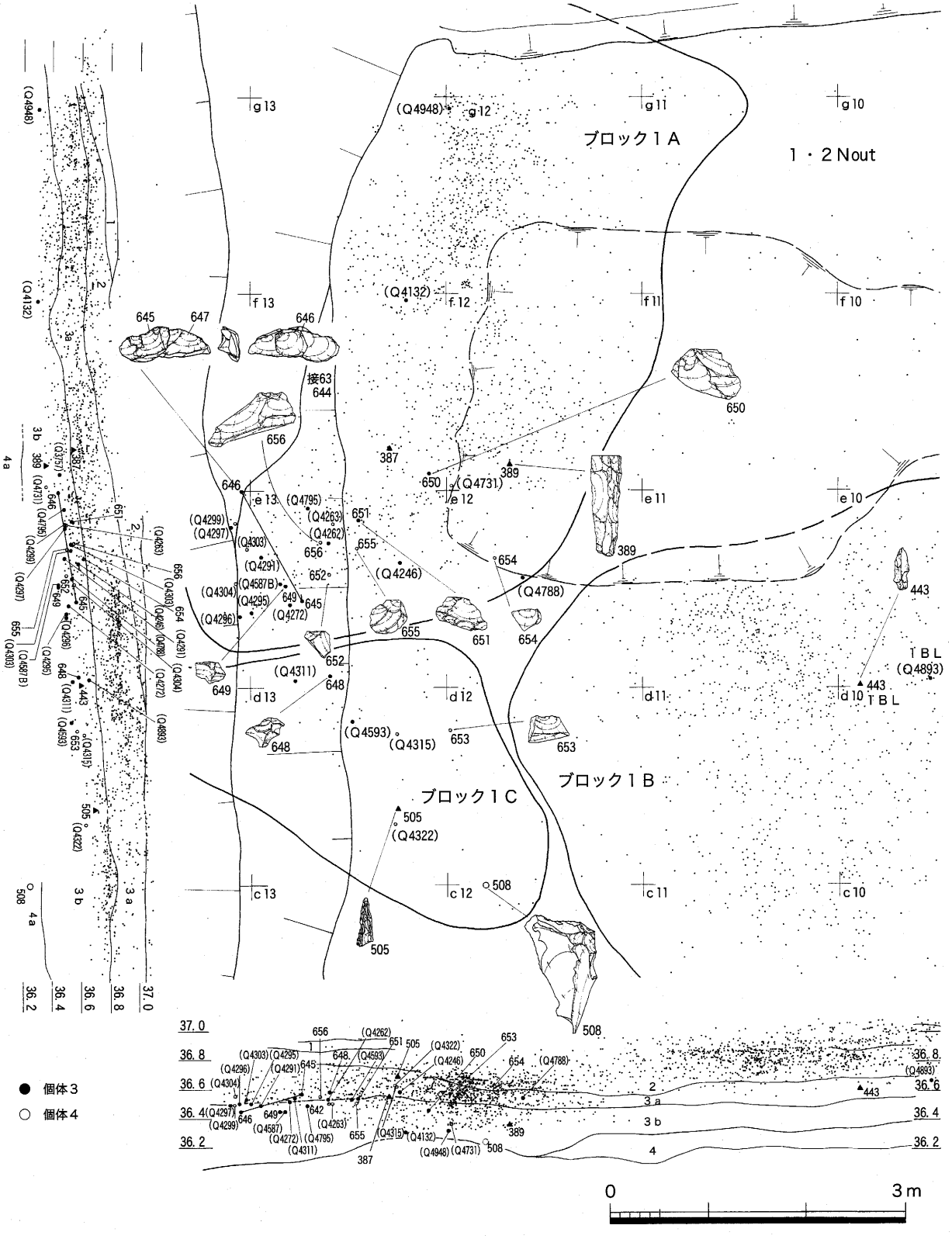
石材はＡn-Ｄで，分布はブロック１Ａ北とブロック１Ａ南にある。

接合資料62（第163図・第165図）

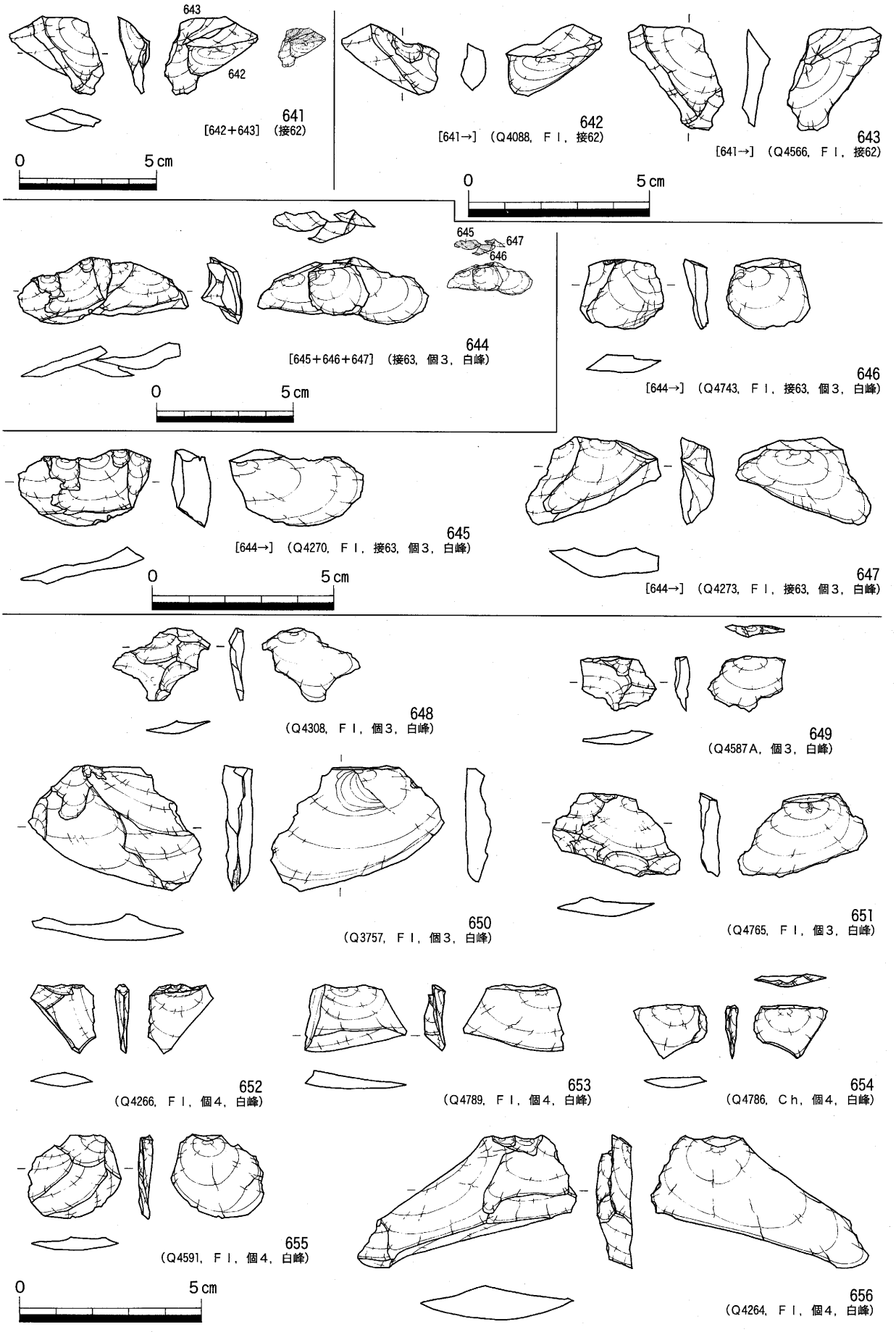
長さ28.2㎜，幅34.0㎜，厚さ12.0㎜の剥片２片からなる接合資料である。重量は6.0ｇ。調整のない平坦な打面上に，打点をややずらしながら２回連続的に打撃し剥出された不定形な剥片である。石材はＡn-Ｄで，分布はブロック１Ａ中央。



第165図　3 a 区エリア 1 ・ 2 接合資料実測図 8　接58～61　（S＝2／3，1／2）



第166図　３ａ区エリア１・２　接合資料分布図５　接63・個体3・4　（S＝1／60　垂直分布S＝1／40）



第167図　3 a区エリア1・2接合資料実測図9　接62・63・個体3・個体4　（S＝2／3，1／2）

接合資料63（第163図・第165図）・個体３・４

接合資料63は濃灰色で器面の風化が顕著でない個体３の接合資料である。長さ24.0㎜，幅62.0㎜，厚さ15.2㎜，接合状態で重量は11.5ｇをはかる。２枚のネガティブな剥離面で構成される打面上を，細かくジグザグに打点を移動させながら646～647の小形の不定形剥片を剥出する。648～651は同一個体に属すものと推定される非接合の剥片類である。650は幅50.0㎜ ほどの大きさを持つ剥片で，背面の剥離方向は主剥離面の剥離方向と一致するが，それ以外の３片は背面の下方に主剥離面と逆の剥離方向の面をもち，そのサイズも小さい。これらは稜上調整をもつ角錐状石器の整形加工に伴う剥片である可能性が考えられる。

個体４は器面の風化が顕著でなく濃灰色を呈する個体である。器面の質感は個体３と酷似するが，石理の縞目が若干みられる点で区分した。ただ，埋没状況によって風化の進行度合いも異なる可能性があり，本来個体３と同一個体であった可能性もある。接合例はないが，定形石器として389（Ｔｒ），443（Ｔｒ），508（ＲＦ）が含まれる。

652～656は個体４に所属する剥片で，652～654は幅広の打面をもつ。そのうち特に小形の剥片である652と654は，打面が複数で構成される。655･656は打面が器幅に対して極端に小さい剥片である。打点を小刻みにずらしながら，打面上やや深い位置に打点を設定して打撃し，剥出した剥片であろう。以上の個体４所属の剥片類も，棒状ないし塊状の素材から角錐状石器を仕上げる加工に伴う剥片とみて矛盾はない。

個体３・個体４の分布はブロック１Ａ南・ブロック１Ｃに特に強くまとまる傾向にある。また両個体に所属する角錐状石器，ＲＦがそれを取り巻くように隣接するブロックに点在する。

接合資料64（第163図・第165図）

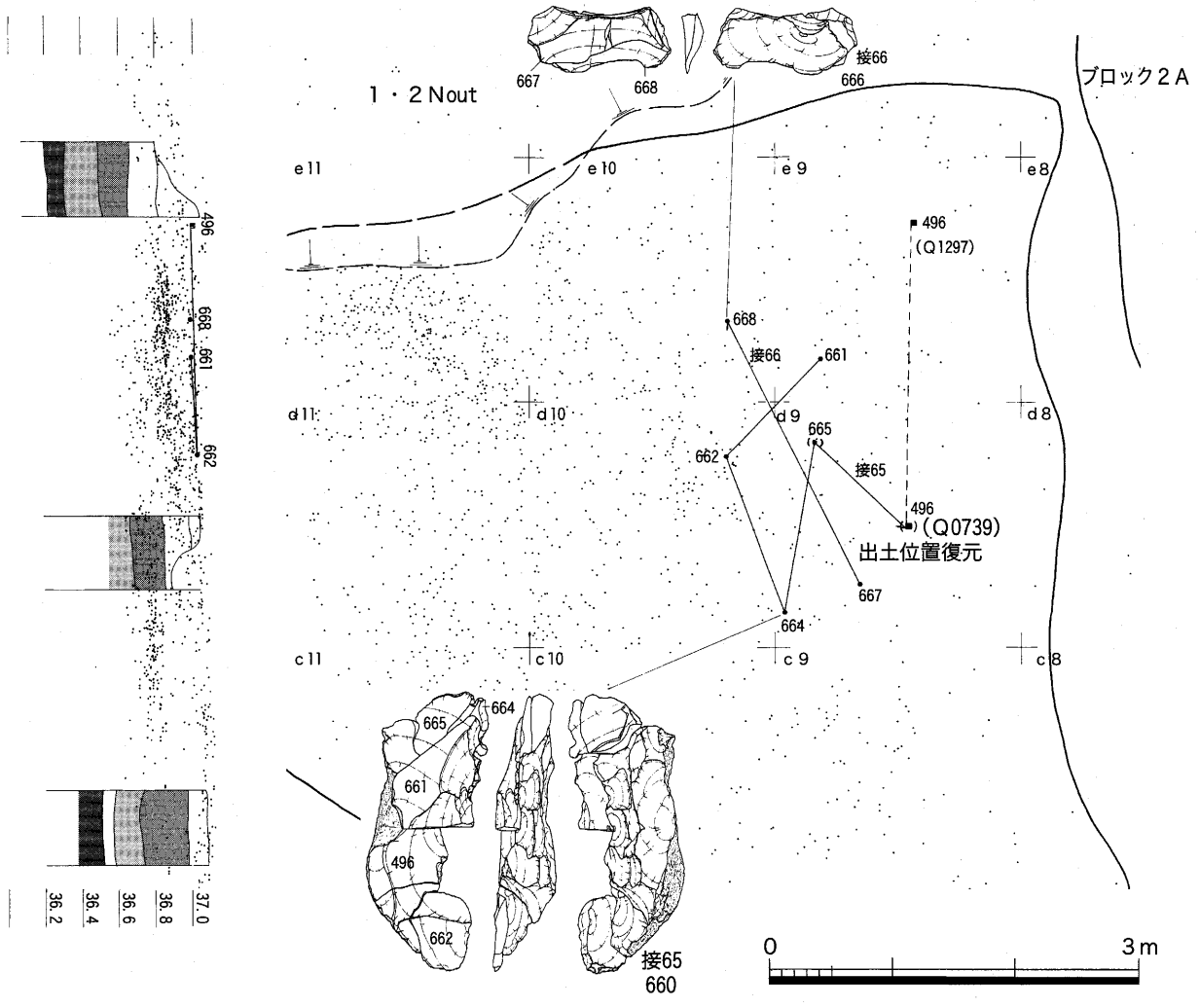
長さ27.4㎜，幅78.6㎜，厚さ13.0㎜，重量17.1ｇの接合資料である。ブロック１ＢＬとブロック１ＢＨに区分した剥片２片が接合した事例である。接合距離は約１ｍで，接74や接75と近い範囲にまとまる。素材は片面に自然面，一方の面に平坦で大きな剥離面をもつ厚さ15.0～20.0㎜ ほどの板状の石核と考えられる。石材はＡn-Ａに分類している。

平坦な剥離面を打面に設定し，小刻みに打点を横方向にずらしながら剥片剥離を行ったあと，奥行5.0～7.0㎜ ほど打点を後退させ，それまでの小刻みな剥離面を大きく取り込んで幅広の剥片を剥離するものである。剥離順序は658→①→659となる。

接合資料65・接合資料66・個体２（第168図・第169図・第170図）

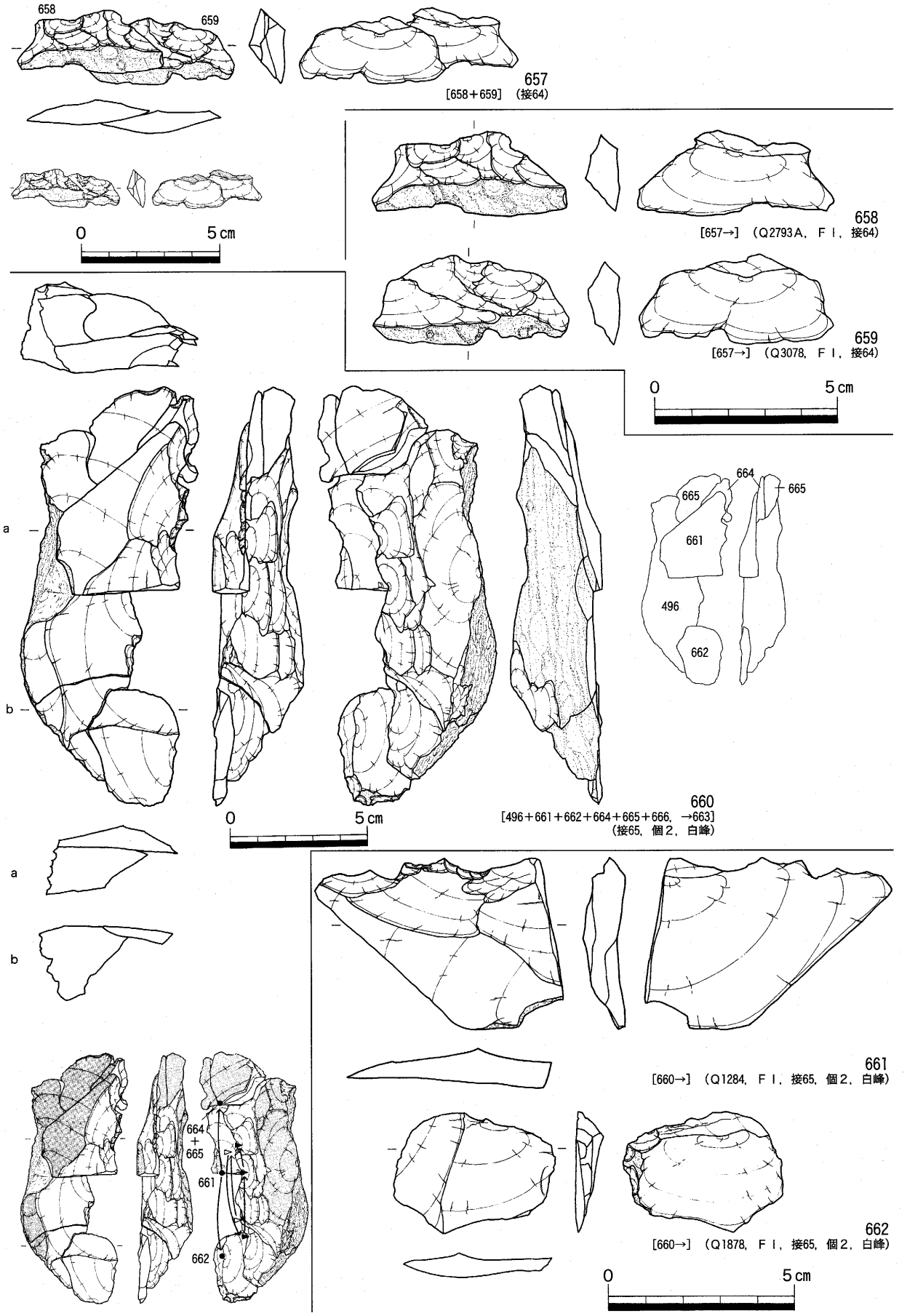
個体２は２件の接合資料で構成される。接合資料65は長さ152.2㎜，幅64.6㎜，厚さ33.0㎜，総重量193.0ｇの接合資料である。石核１点に剥片３点が接合する。同じく接合資料66は長さ77.2㎜，幅36.0㎜，厚さ13.0㎜，総重量は27.4ｇで，剥片２点が接合する。分布はブロック１ＢＨの北東にまとまる。接66は剥片剥離前半，接65は後半に位置づけられる。

素材の表裏の剥離面は，接65のａ面がポジティブ剥離面，ｂ面がネガティブ面である。いずれも中央部に打点をとどめており，自然面を連続的に打撃して素材となる剥片を剥取したことがわかる。接65に先行する接66の背面側には，接65ａ面の素材主剥離面と同一の剥離面がみられ，末端線を残す。したがって，石核の幅は100.0㎜ ほどと推定される。

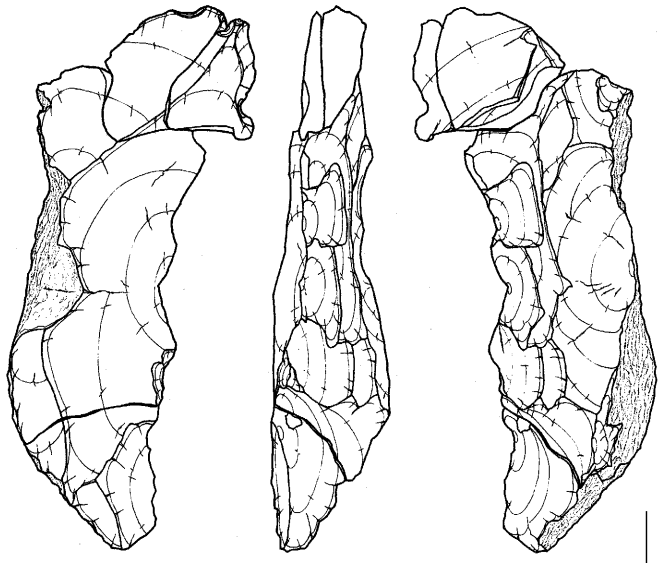


第168図　3 a 区エリア１・２　接合資料分布図６　接65・66・個体2　（S＝1／60　垂直分布S＝1／40）

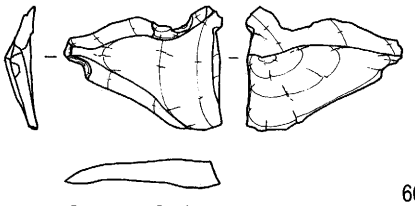
剥片剥離は自然面側の小口を尾部とし，素材の末端側から打面を表裏で入れ替えながら行われる。接66はほぼ同一部分を打撃して剥離した２片の剥片である。接65は石核中央部を打撃して661を剥離した後，打点を左右にずらして662と664を剥離する。664の打撃時に石核上端が折損し，665が生成される。その後，打面が入れ替わり，幅20.0～30.0㎜ の剥片を小刻みに打点をずらしながら剥離する。得られた剥片を抽出することができなかったが，目的剥片とするにはサイズが小さいことから，打面調整の可能性を考えなければならない。一連の小刻みな打撃の途上で，石核下端が折損し，剥片剥離作業が停止する。



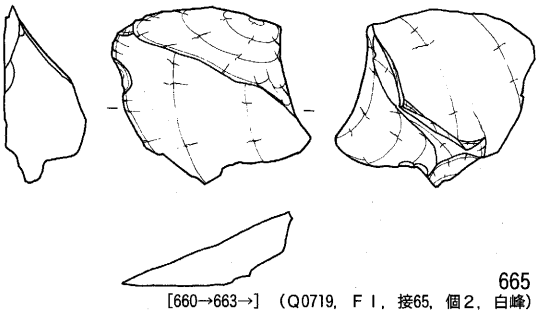
第169図　3 a区エリア1・2接合資料実測図10　接64・65　(S＝2／3, 1／2)



663
[664＋665＋666，660→]（接65，個2，白峰）

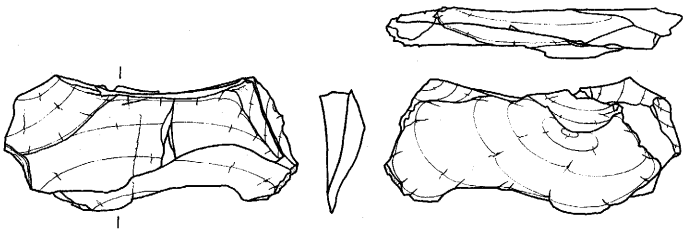


664
[660→663→]（Q3154，ＦⅠ，接65，個2，白峰）



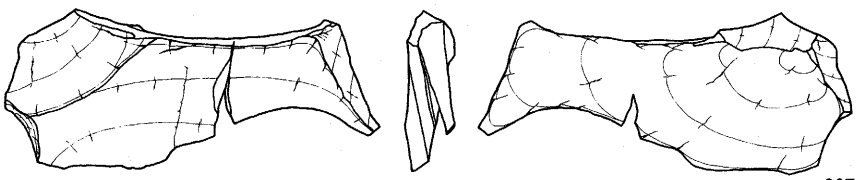
665
[660→663→]（Q0719，ＦⅠ，接65，個2，白峰）

0　5cm

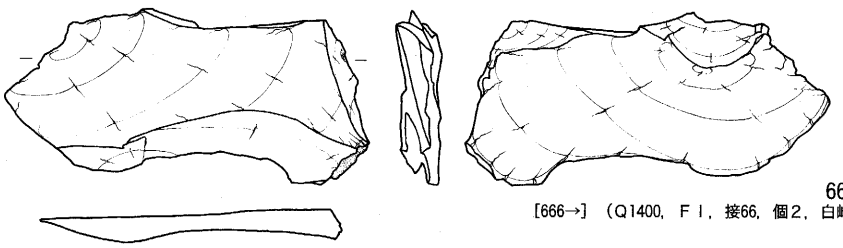


666
[667＋668]（接66，個2，白峰）

0　5cm



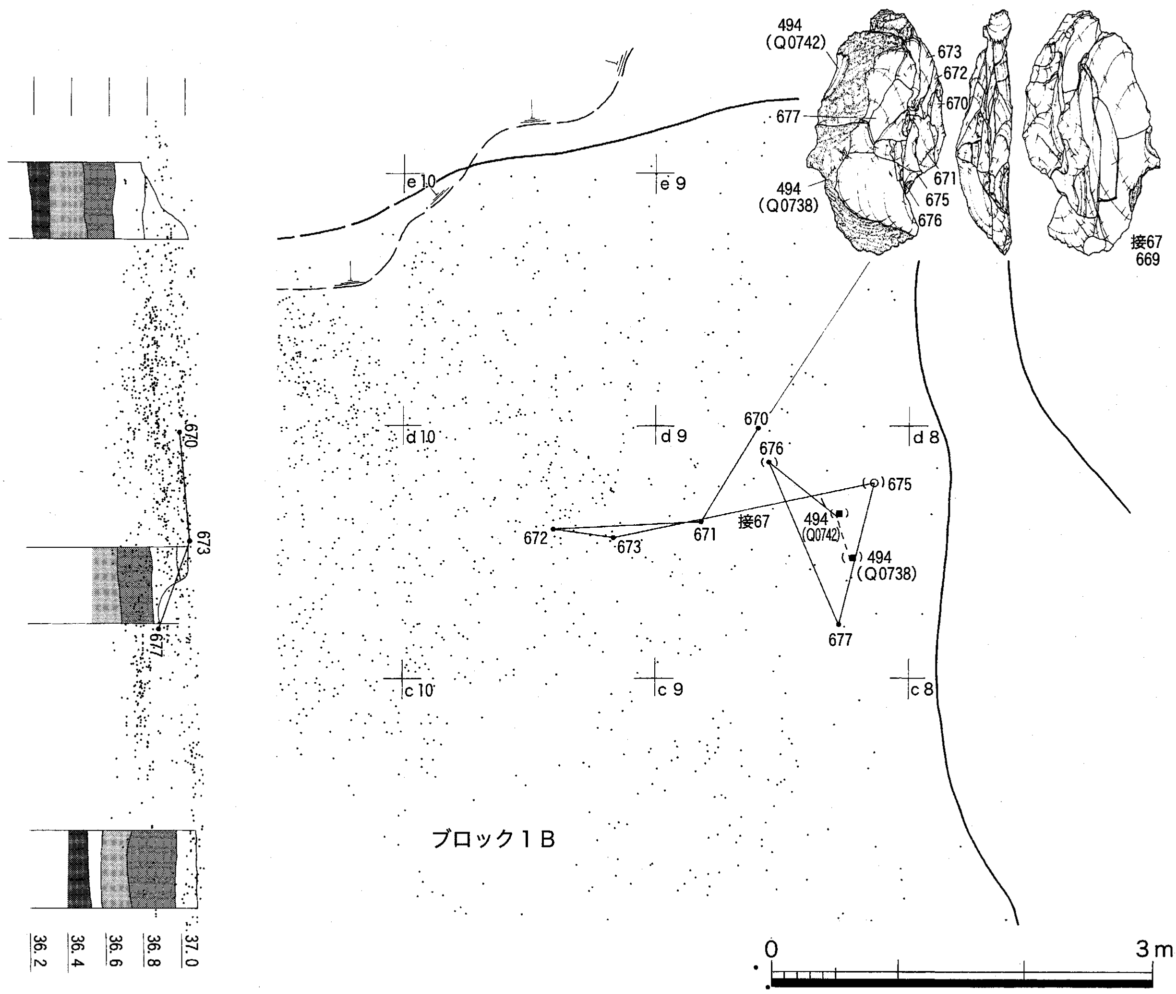
667
[666→]（Q3156，ＦⅠ，接66，個2，白峰）



668
[666→]（Q1400，ＦⅠ，接66，個2，白峰）

0　5cm

第170図　３ａ区エリア１・２接合資料実測図11　接65・66　（Ｓ＝2／3，1／2）



第171図　３ａ区エリア１・２　接合資料分布図７　接67　(S＝1／60　垂直分布S＝1／40)

接合資料67・個体11（第171図・第172図・第173図）

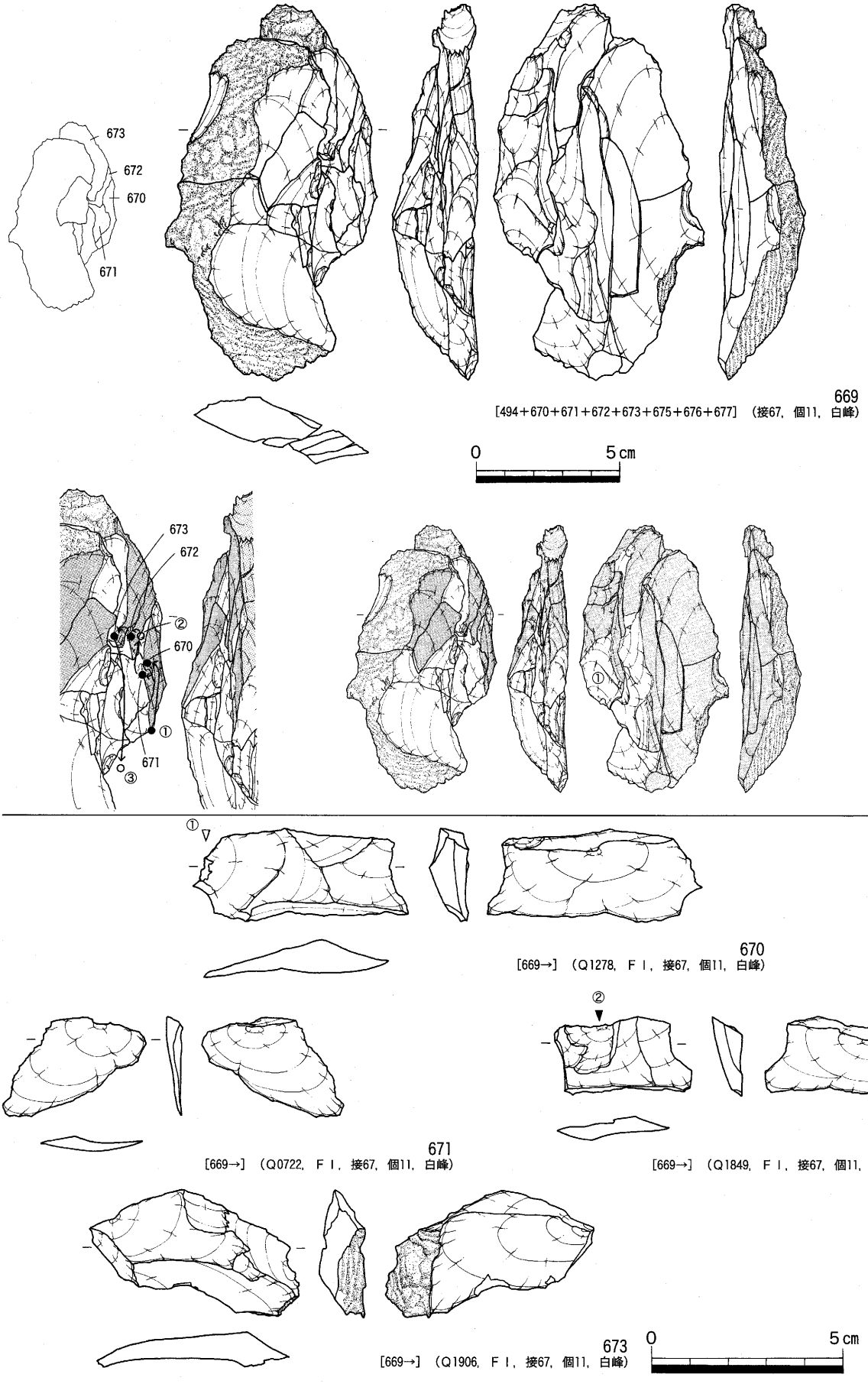
個体11は接合資料67によって素材石核のほぼ全形がうかがうことができる個体資料である。Ⅱ種接合する１点の石核とＲＦ１点，そのほか６点の剥片が接合する。長さ130.0㎜，幅72.8㎜，厚さ29.4㎜，総重量293.0ｇ。分布は個体２と同じくブロック１ＢＨの北東にまとまる。また，素材剥片の形状および剥片剥離の進行も個体２に類似し，自然面を連続して打撃して得られた剥片の打面側自然面を尾部に，その末端側を作業面に固定して剥片剥離が始まる。以下，剥片剥離の流れを図示した。

剥離面　打面

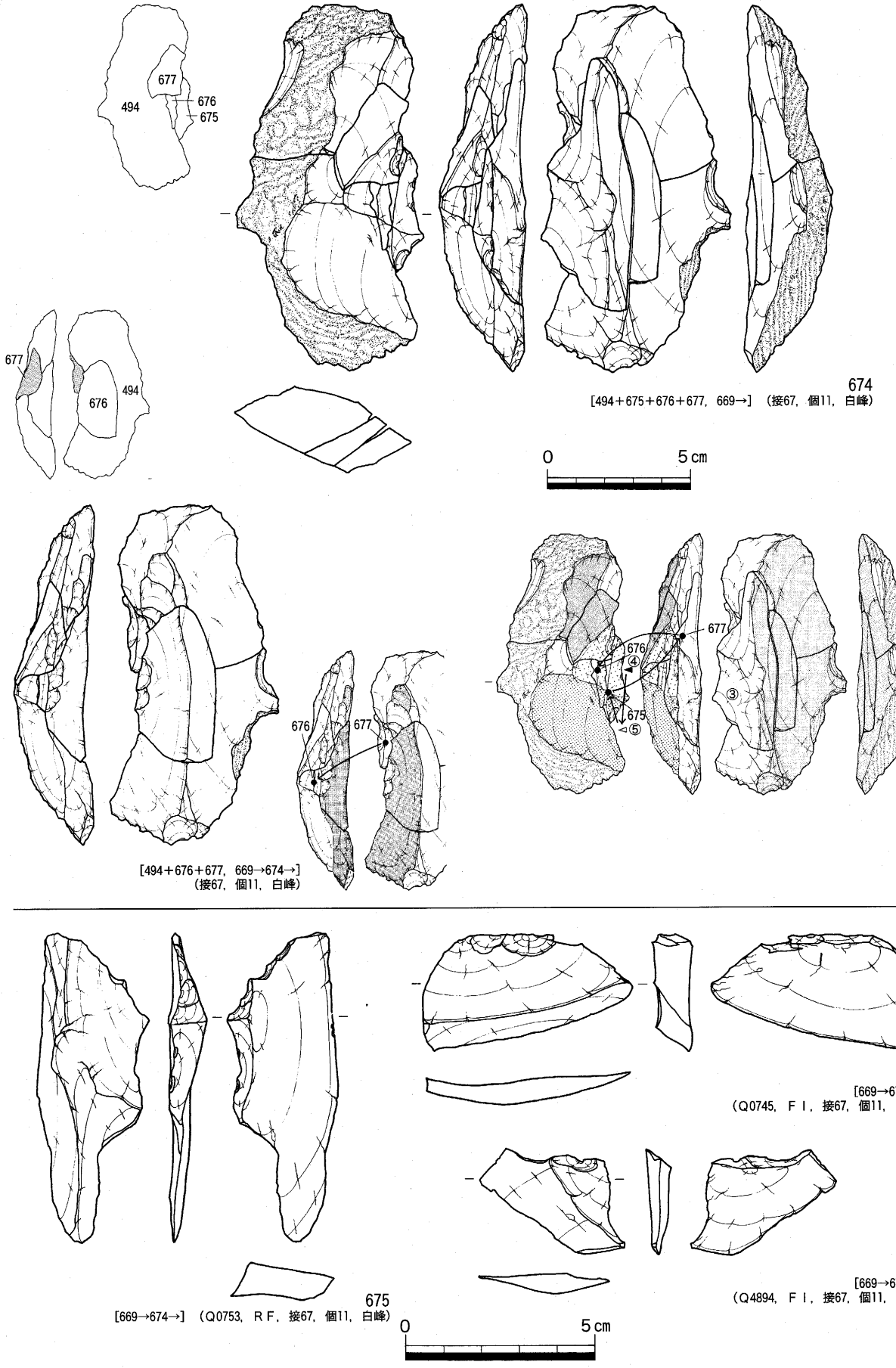
ａ面（打面）　ｂ面　　④→⑤　　677　　石核（494）半折

↑　↓　↑　↓　→　★　＋　★

ｂ面（作業面）　ａ面　　①→670→671→②→672→673→③　675（RF）　676　　（Q0738）　（Q0742）



第172図　3ａ区エリア１・２接合資料実測図12　接67　（Ｓ＝2／3，1／2）



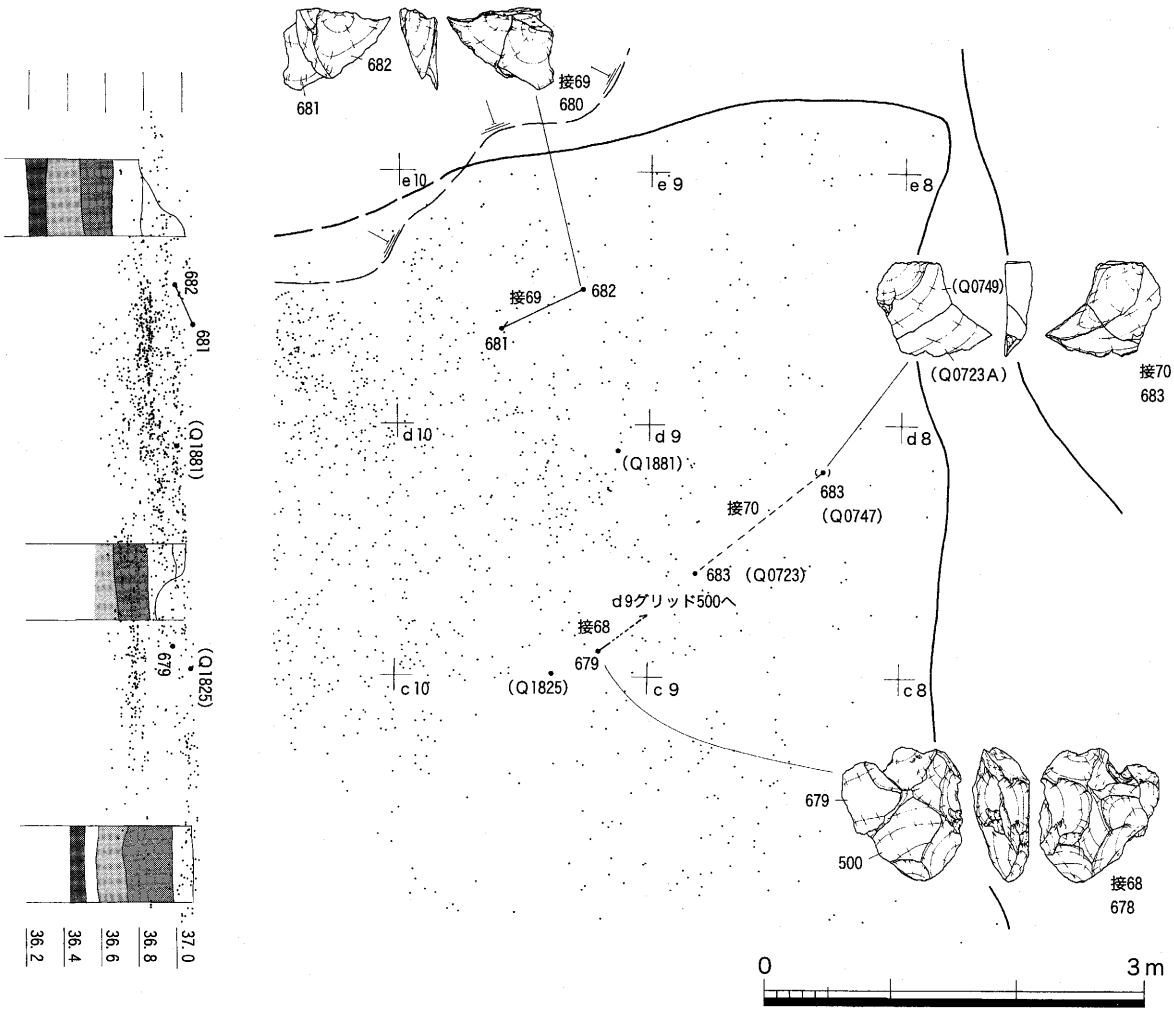
第173図　3 a 区エリア 1 ・ 2 接合資料実測図13　接67　（S＝2／3, 1／2）

①から673までは素材末端線付近を打点を横にずらしながら小刻みに剥片剥離を進める。安定した作業面幅を作出するための石核調整と考えられる。④・⑤は石核中央の厚みのある部分において施される打面調整である。左右に幅広く剥離を行い，単純な山形打面を作出する。整形後に剥離された675には側縁部に加工が施される。目的剥片とみて良い。さらに打面調整が１回施された後，目的剥片676を剥ぎ取るが，図下方側の側縁への力が抜けきらず，石核と垂直方向の折れを生じて剥離が停止している。同時に676の打点から石核自体も半折して作業が終了する。

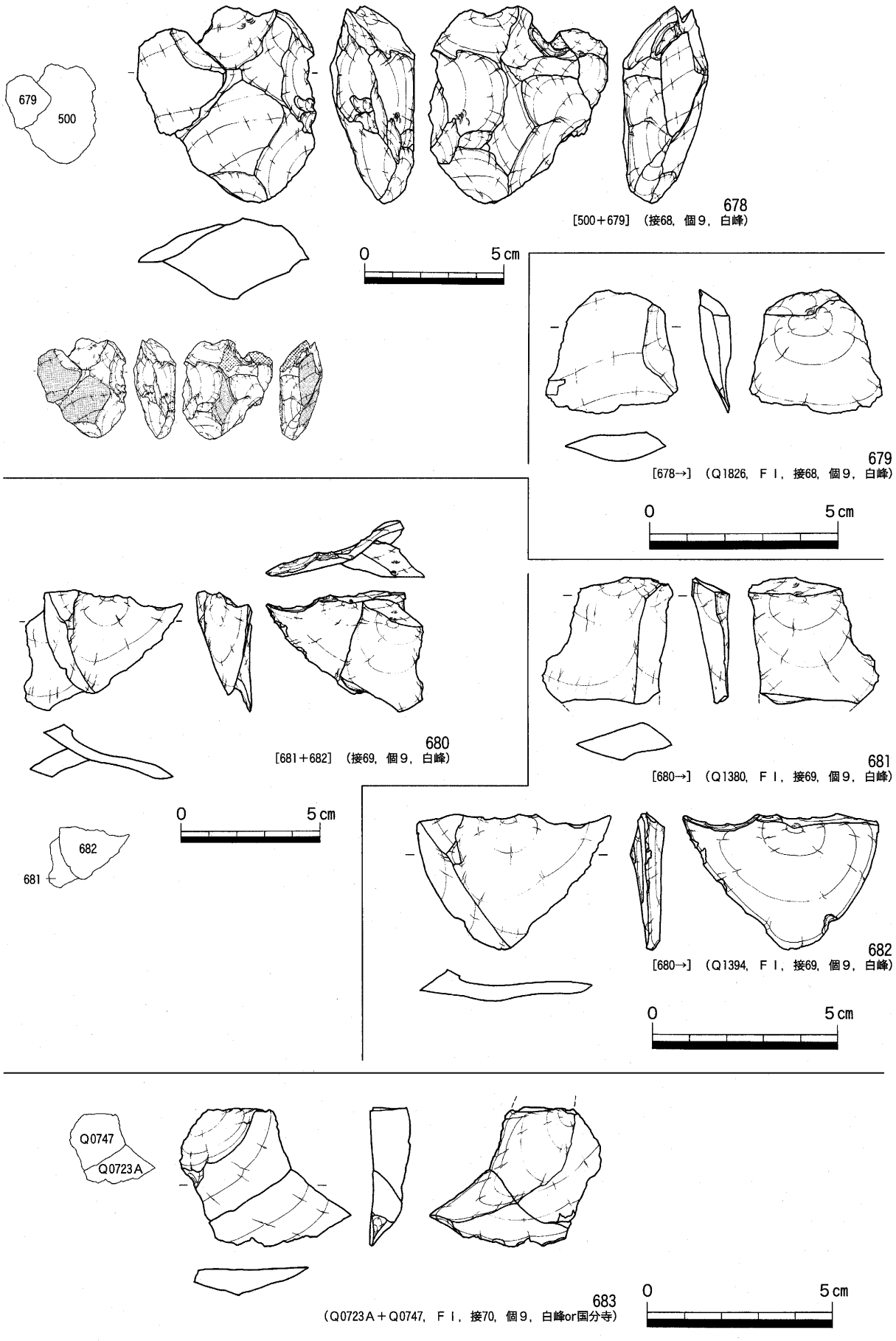
以上の個体２・11にみられる剥片剥離作業は，作業面を固定し，打面調整を施して石核幅一杯の目的剥片を得る工程が復元できる。瀬戸内技法の第２工程を示すものと言える。

接合資料68・69・70・個体９（第174図・第175図）

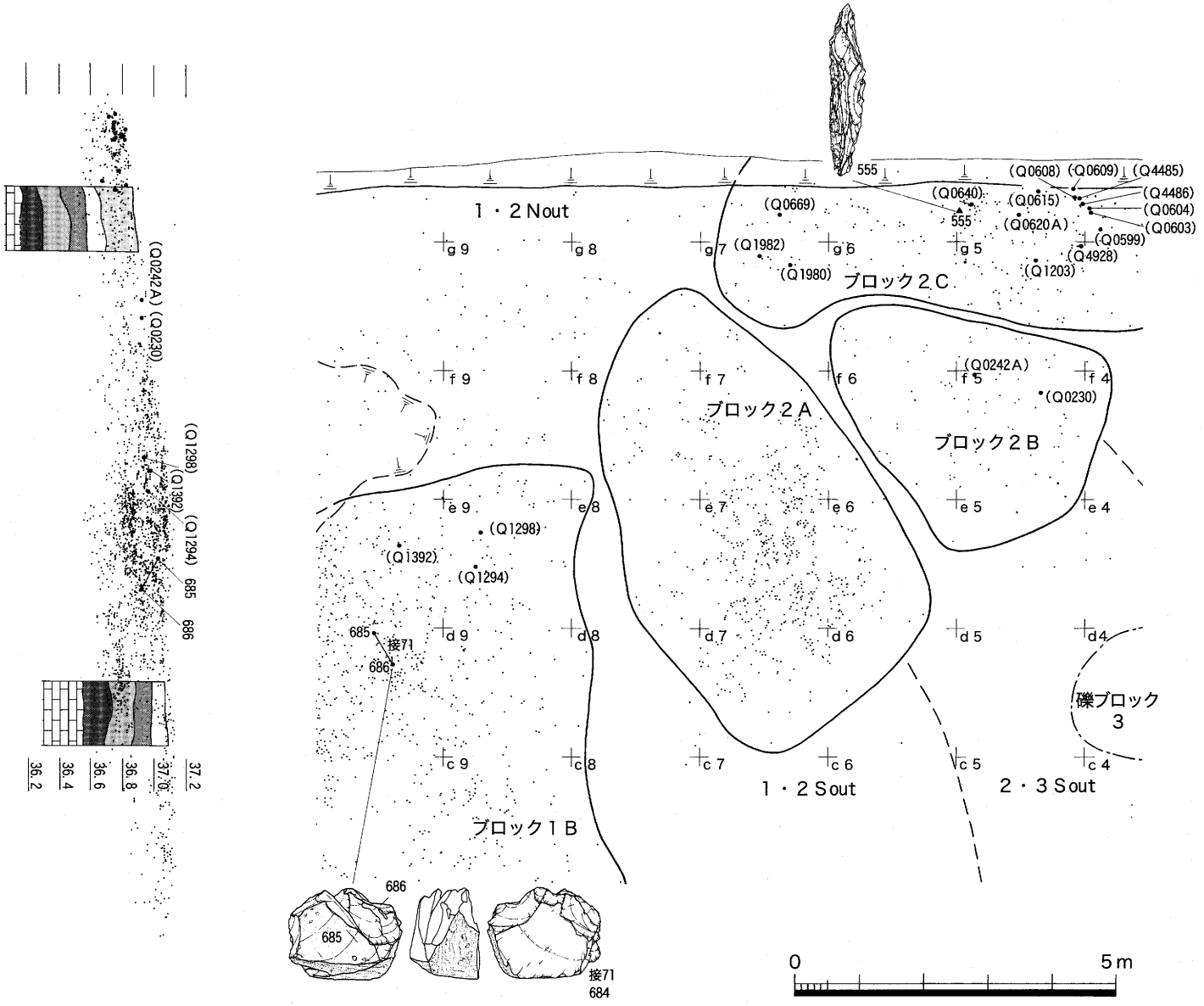
個体９は濃灰色の色調を呈し，器面に不規則な小気泡がみられる石材。接68～70の３件の接合資料と２点の単独剥片がある。接68は求心状に剥片剥離が進行し，正面円形の形態をもつ石核500と剥片の２点による接合資料である。接合状態で長さ70.2㎜，幅63.5㎜，厚さ30.0㎜，総重量109.3ｇ。



第174図　３ａ区エリア１・２　接合資料分布図８　接68～70　(S＝1／60　垂直分布S＝1／40)



第175図　３ａ区エリア１・２接合資料実測図14　接68～70　（Ｓ＝2／3，1／2）



第176図　3a区エリア1・2　接合資料分布図9　接71・個体8　(S=1/100　垂直分布S=1/40)

剥片679は長幅比１：１の寸詰まりの剥片で，背面は平坦な剥離面である。石核500の片面と共有し，対するｃ面にもそれとほぼ並行する平坦面がある。したがって素材は厚さ32.0㎜の板状石核と考えられる。

接69は平坦な打面上に打点をジグザグにずらしながら同様の剥片を剥離するものである。剥片のⅡ種接合である接70（683）も正面形が「し」の字状を呈するが，長幅比は約１：１である。

分布はブロック１ＢＨの北東にまとまる。

接合資料71・個体８（第176図・第177図）

個体８は灰白色の色調を呈し，器面に細かく均質に小気泡が入る特徴的な石材である。石理が観察できないことから，同一個体である根拠に乏しいが，石材とその風化状況が特徴的なことから個体として抽出した。合計24点の石器があり，うち角錐状石器を含む17点がブロック２Ｃ北側に集中する。接合資料はブロック１ＢＨで他の３片の剥片とともに検出した接71の１件のみである。

個体２は６点の剥片を石材分析した結果，いずれも「法印谷」群と判定されている。

接合資料71は厚さ40.0㎜以上の石核を分割して生成された大形剥片685と石核686との接合例である。接合状態で長さ57.2㎜，幅70.5㎜，厚さ43.0㎜，総重量201.7ｇ。685の打点部付近は打撃時の衝撃によりハジケが顕著。686は685剥離後，表裏交互に幅35.0㎜ほどの剥片を剥取する。石核の尾部には自然面が大きく残る。

接合資料72（第178図・第179図）

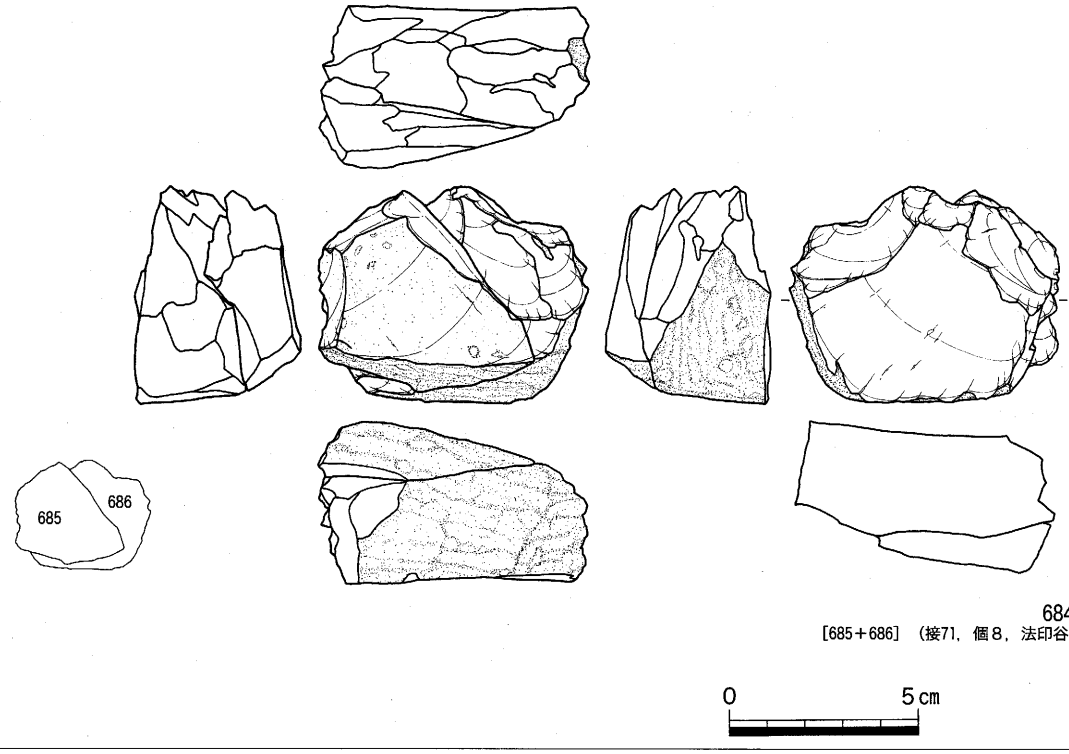
ナイフ形石器と横長剥片の２片の接合である。接合状態で計測して，長さ61.8㎜，幅38.5㎜，厚さ15.0㎜，重量25.1ｇ。剥片剥離の方向と90度異なる平坦な剥離面を底面とし，左右１回のラフな打面調整を施し打面を山形に整形した後，剥片剥離を行う。図下端は当該剥片の剥離に先行して底面の剥離方向と逆の方向から横長剥片を剥離した痕跡である。また，688の底面には主剥離面と逆方向のネガ面画が残る。この面はナイフ形石器474が形成するネガ面を切る。したがって，石核における剥片剥離は求心的に剥片剥離が進行したものと考えられる。

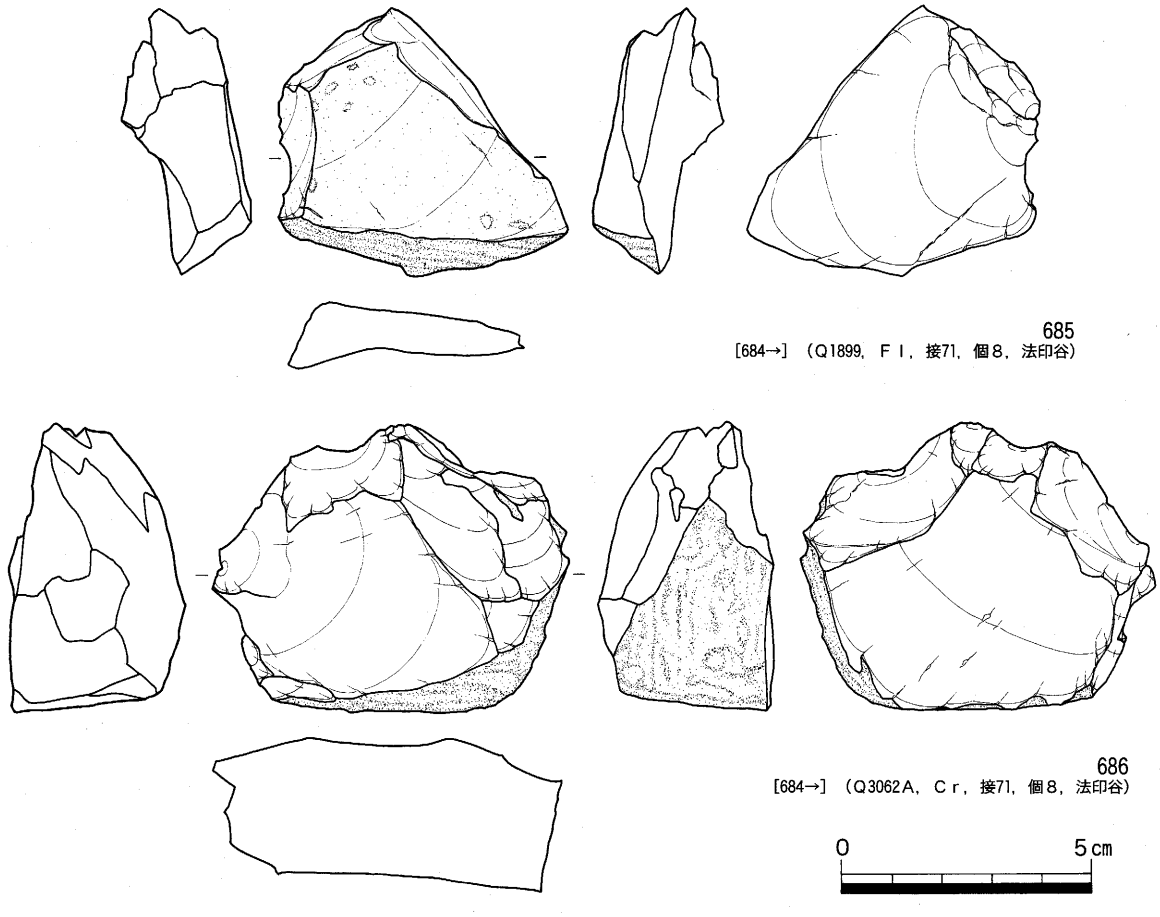
石材は個体10に酷似するが，若干石理の白縞がみられることから個体10から排除した。ただし，分布は個体10の主要分布域の一つであるブロック１ＢＨ南にある。

接合資料73（第178図・第179図）

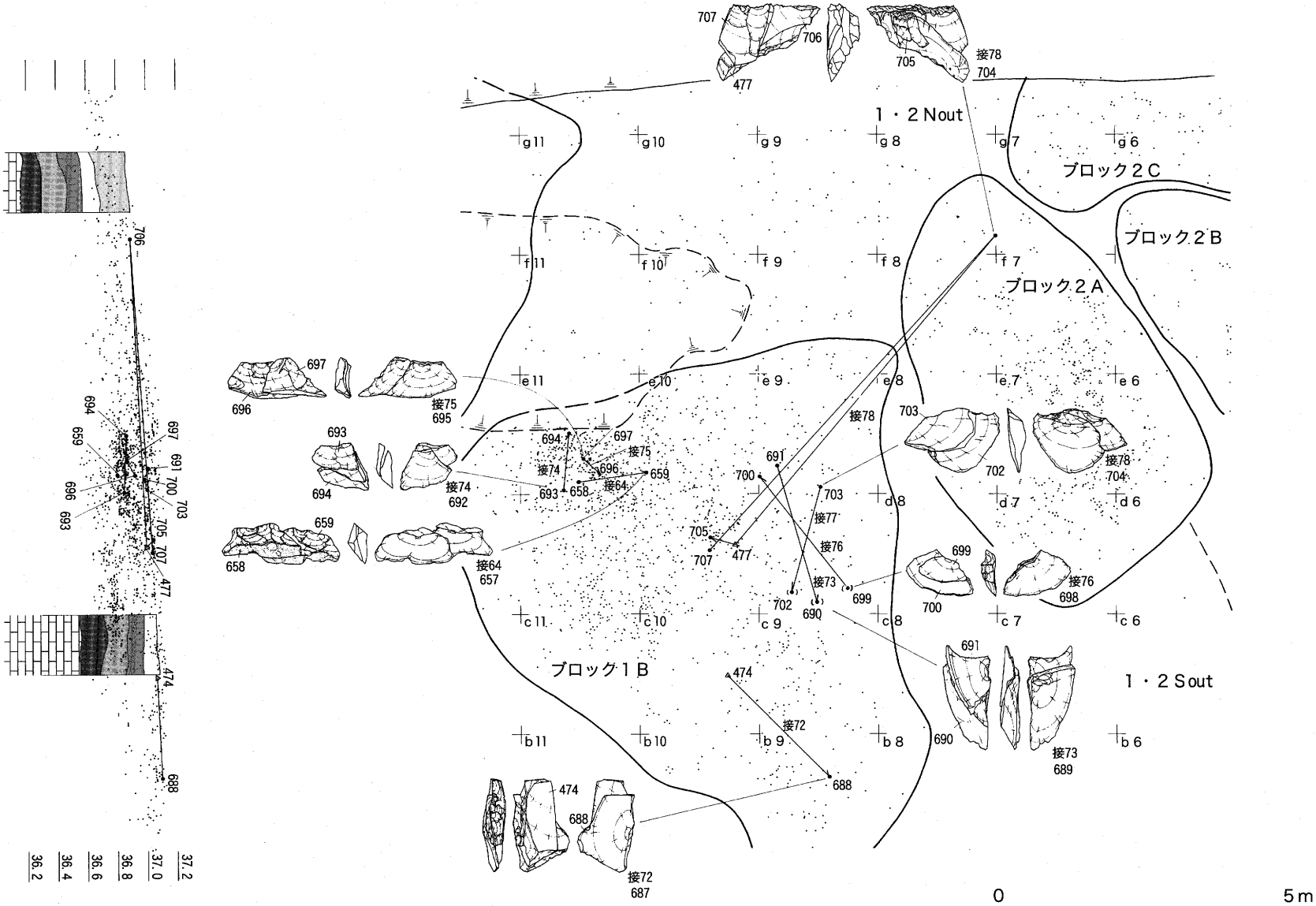
連続して剥離された横長剥片２片の接合である。長さ57.0㎜，幅32.0㎜，厚さ13.0㎜，重量20.6ｇをはかる。剥離順序は691→690で，690の打面にみられる大きめのネガ面は打面調整かあるいは交互剥離による先行作業面である。691は打面・底面ともに取り込む剥片だが，全体的に薄い。

石材はＡn-Ａで，個体10に近いが，石理の細い白縞が僅かにみられるため除外した。分布はブロック１ＢＨの中央付近。

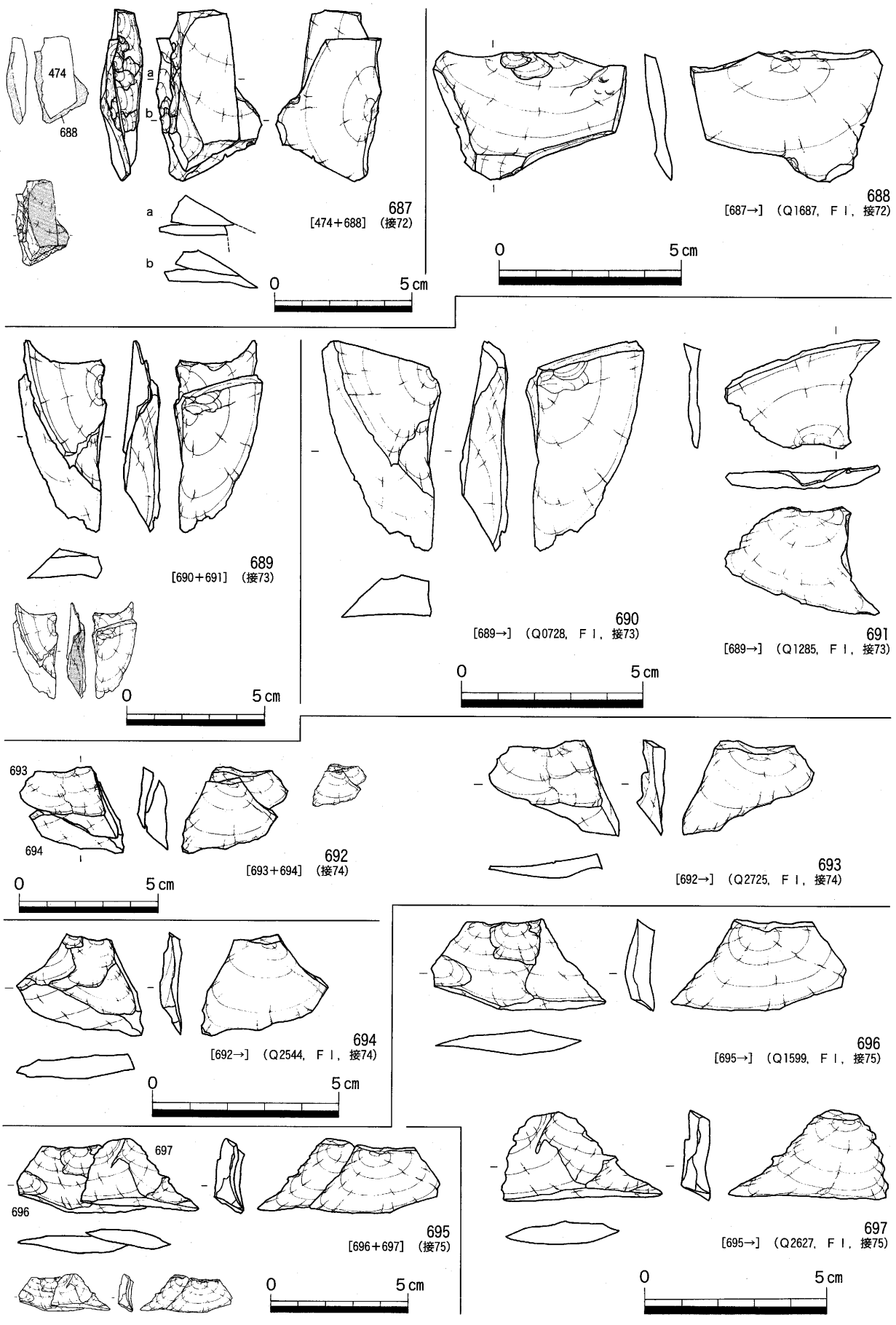




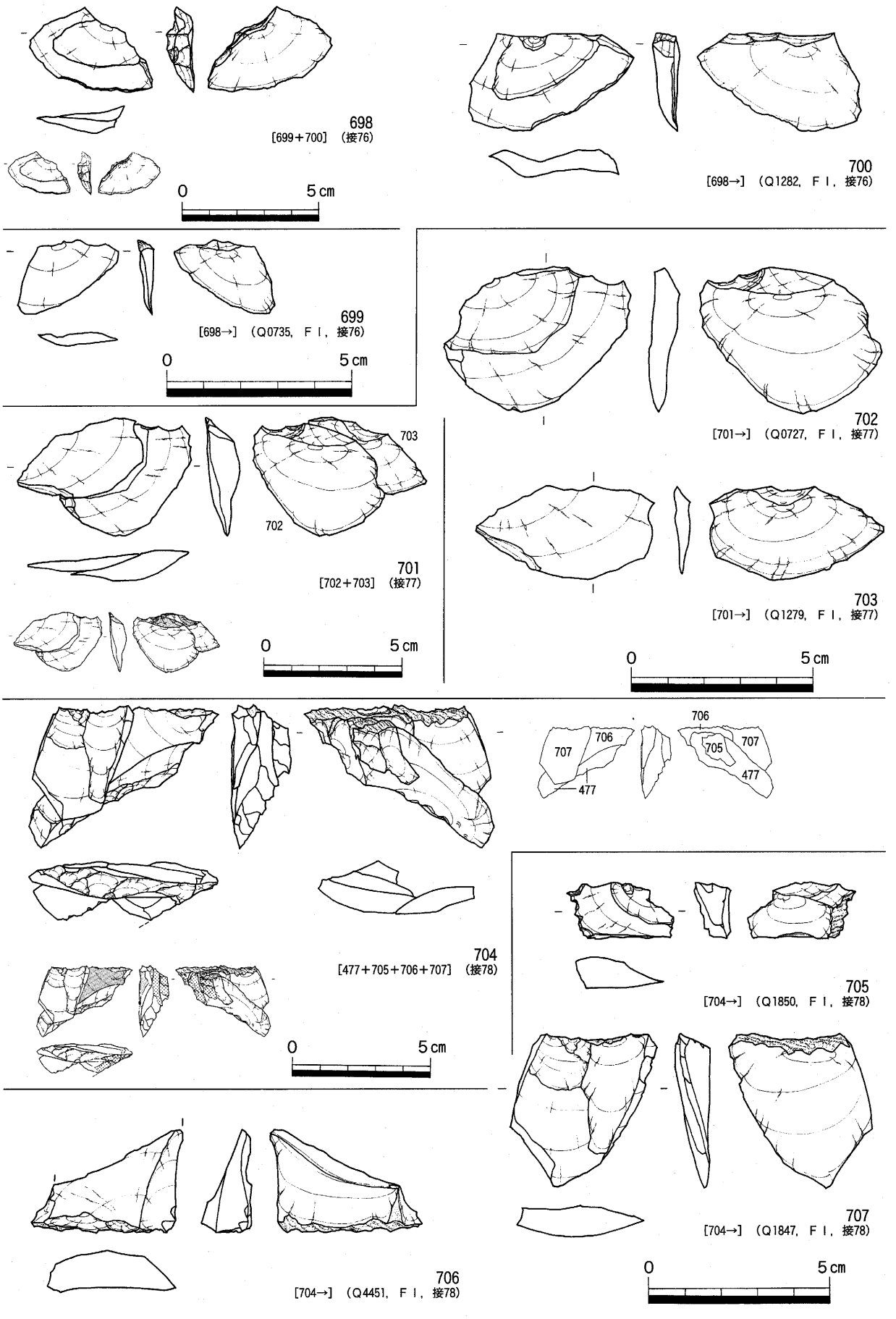
第177図　３ａ区エリア１・２接合資料実測図15　接71　（Ｓ＝2／3，1／2）



第178図　３ａ区エリア１・２　接合資料分布図10　接64・72～78　（S＝1／100　垂直分布S＝1／40）



第179図　3 a 区エリア 1 ・ 2 接合資料実測図16　接72～75　（S＝2／3，1／2）



第180図　3 a 区エリア 1 ・ 2 接合資料実測図17　接76～78　（S＝2／3，1／2）

接合資料74・75（第178図・第179図）

平坦な打面上の近接する位置を連続的に打撃して剥出された不定形剥片２点が剥片尾部で接合する資料２件である。接74は接合状態で長さ38.0㎜，幅31.0㎜，厚さ11.0㎜，重量8.9ｇをはかる。剥離順序は693→○→694。石材は器面が白く風化するＡn-Ｄで，分布はブロック１ＢＨの北西，角錐状石器が特に多く出土する付近にある。

接75もおなじ位置にまとまる接合資料。接合状態で長さ65.7㎜，幅27.0㎜，厚さ10.7㎜，重量12.0ｇ。である。剥離順序は697→○→696。石材は器面の風化が進行するＡn-Ｃである。

このほか，前述の接64が近接した位置で出土している。

接合資料76～78（第178図・第180図）

ブロック１ＢＨの北西にまとまる３件の接合資料である。接76接77は石材Ａn-Ｃで，風化が進む石材，接78はＡn-Ａで，少量の白縞をもつ濃灰色の石材である。接78の石材は白縞を除くと個体10に酷似する。

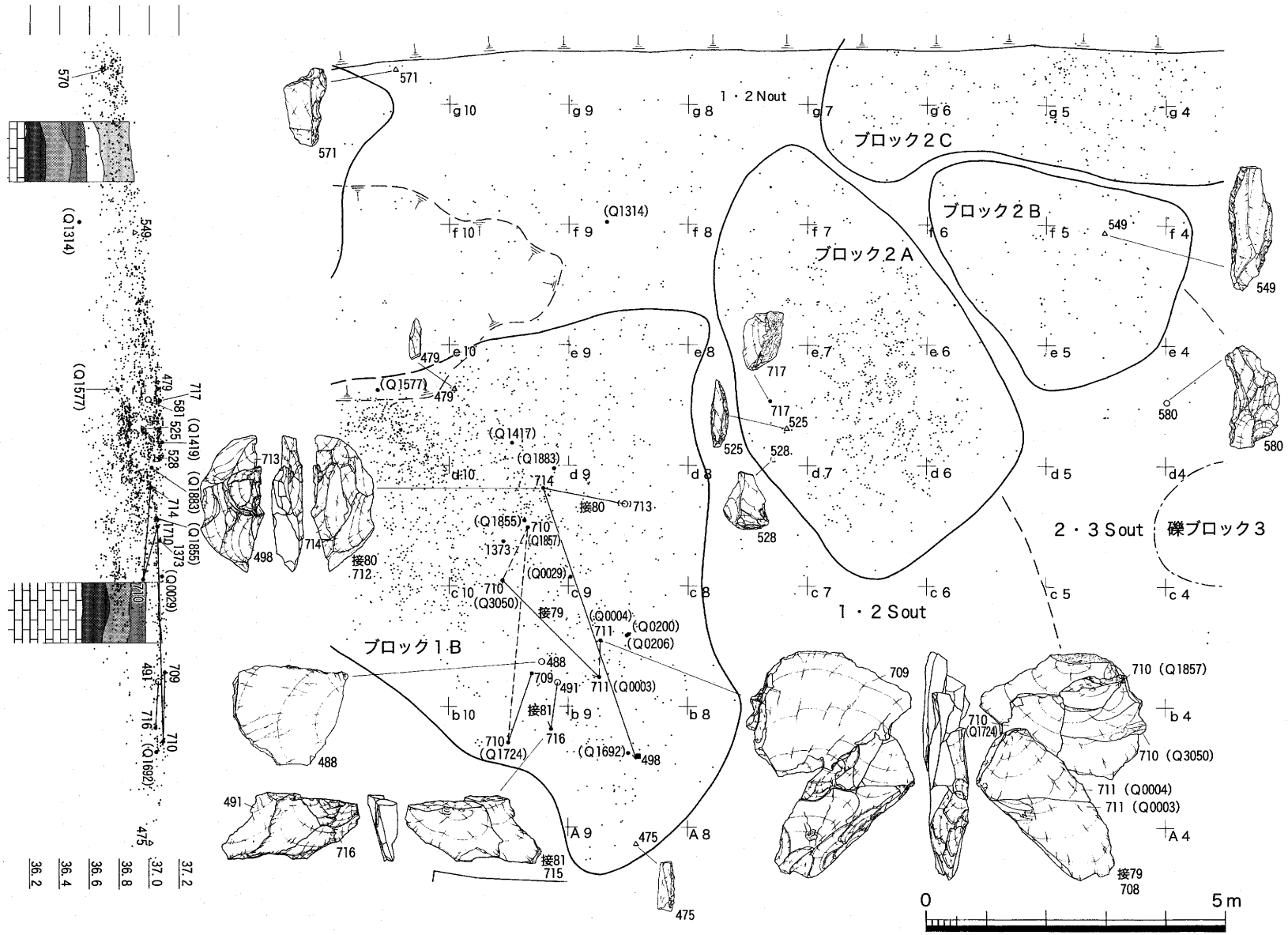
接76・接77は打面を細かく打撃して山形に整形した後，連続して剥取されたそれぞれ２剥片の接合資料である。いずれの剥片も背面がネガティブな１面の剥離面で，底面までの取り込みができていない。接合状態で接76は長さ44.5㎜，幅31.0㎜，厚さ10.0㎜，重量8.4ｇ，接77は長さ63.5㎜，幅43.0㎜，厚さ12.2㎜，重量19.4ｇである。

接78は側縁に自然面をとどめる盤状剥片の底面部の整形を行った後，打面調整を施してナイフ形石器の素材となる剥片を２片剥ぎ取ったものである。剥片剥離初期段階の資料と言え，長さ68.5㎜，幅52.0㎜，厚さ21.5㎜，重量40.6ｇ。遺存部最終剥片の705はナイフ形石器477の素材剥片剥離後に剥離された横長剥片に施された整形加工剥片である。剥離順序をまとめると以下のとおりとなる。

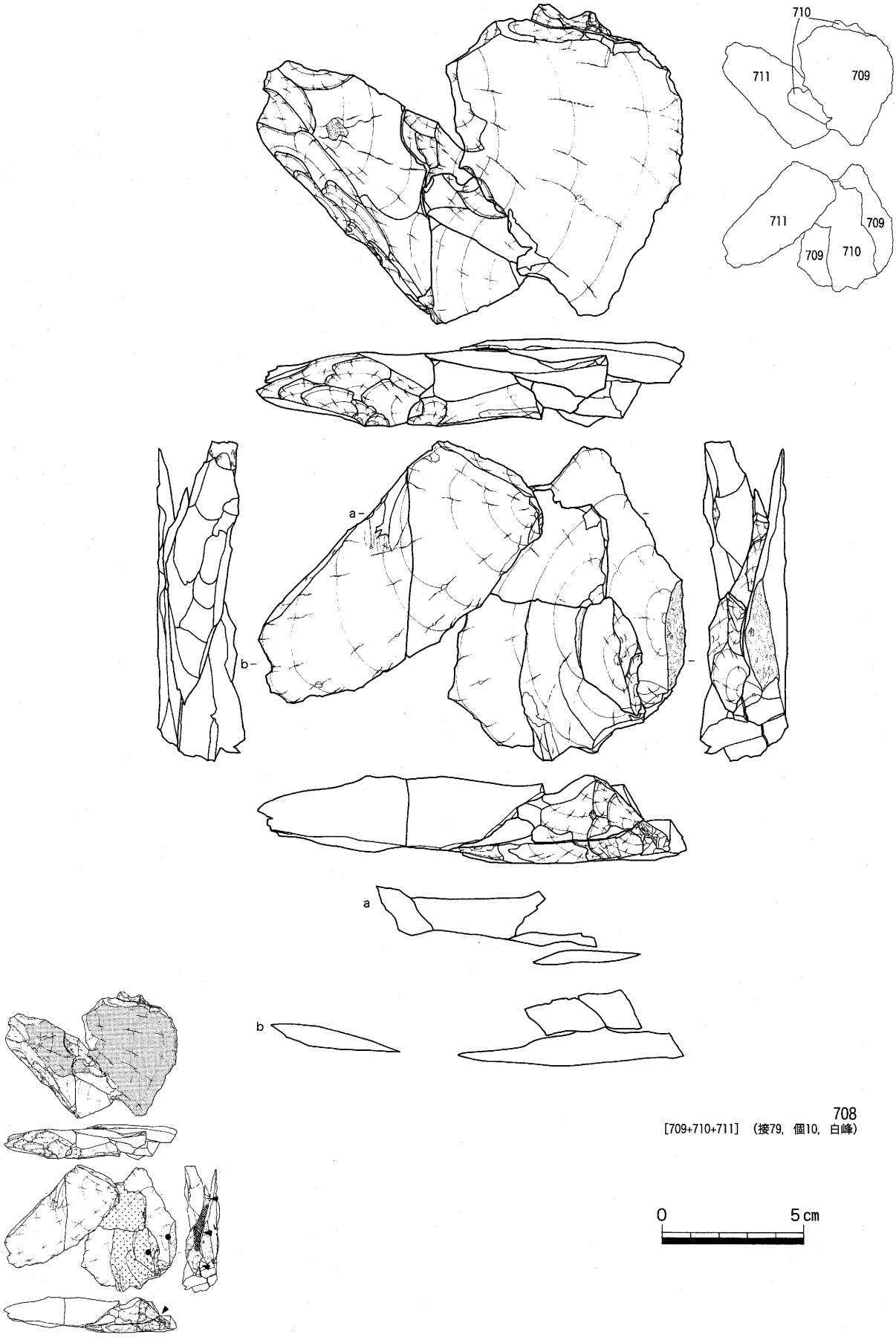
項目	剥離面	打面	剥片剥離の流れ
底面整形	ａ面（底面）	自然面	707背面 → 707 → 706 ↓
打面調整	ｃ面（打面）	ａ面	① → ○ ↓
目的剥片	ｂ面（作業面）	ｃ面	477 → 705が所属する横長剥片 →
整形加工			477の整形加工面 ↓ 705 ↓

接合資料79～81・個体10（第181図～第184図）

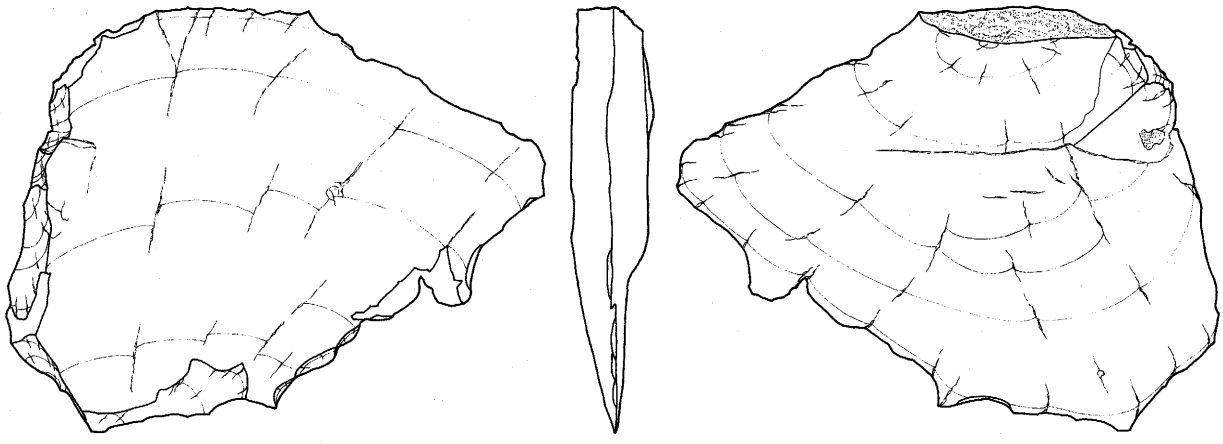
個体10は濃灰色を呈し，均質な風化を呈して器面に石理に沿った白縞がみられない一群である。３ａ区エリア３の各ブロックや，３ｃ区ブロック３などには一般的な石材であり，それらと区分することは困難だが，石材に多様性があるエリア１・２にあってはむしろ特徴的な石材として抽出することができる。ただ，同一の個体として認識できる材料は上記の理由からみても欠落することは明かである。したがって，ここでは石材で他と区分できる一群として「個体10」を意味づけしたい。一方で分布はブロック１ＢＨの北東と南の２カ所に互いに接合関係を持ちながら顕著にまとまる。さらに周辺のブロックで出土する石器には定形石器が多い。したがって，同一個体の石器が数多く含まれているとみても矛盾はない状況にある。



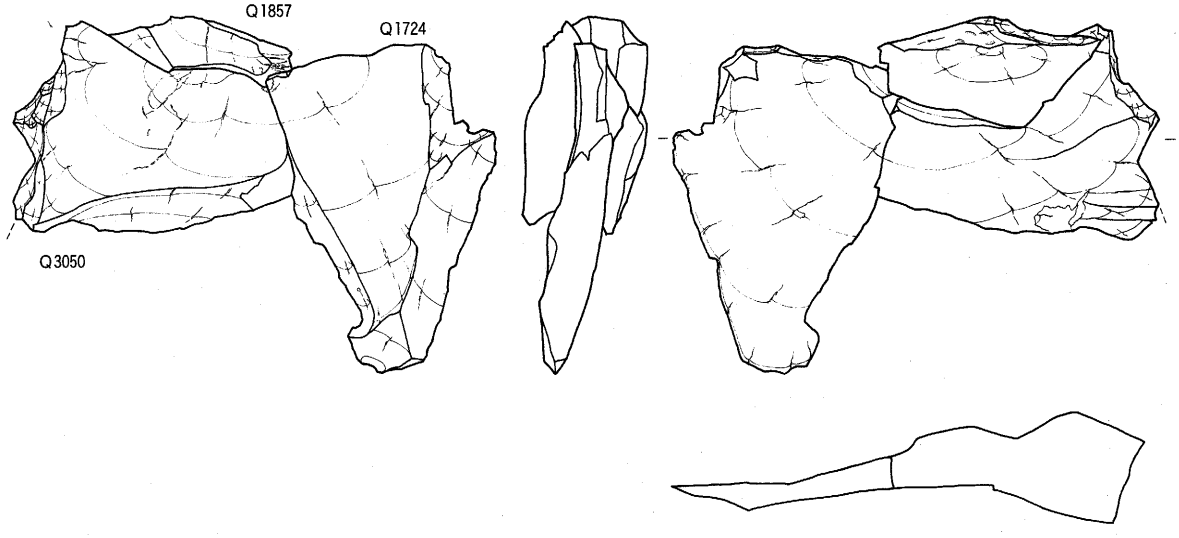
第181図　３ａ区エリア１・２　接合資料分布図11　接79～81・個体10　（S＝1／100　垂直分布S＝1／40）



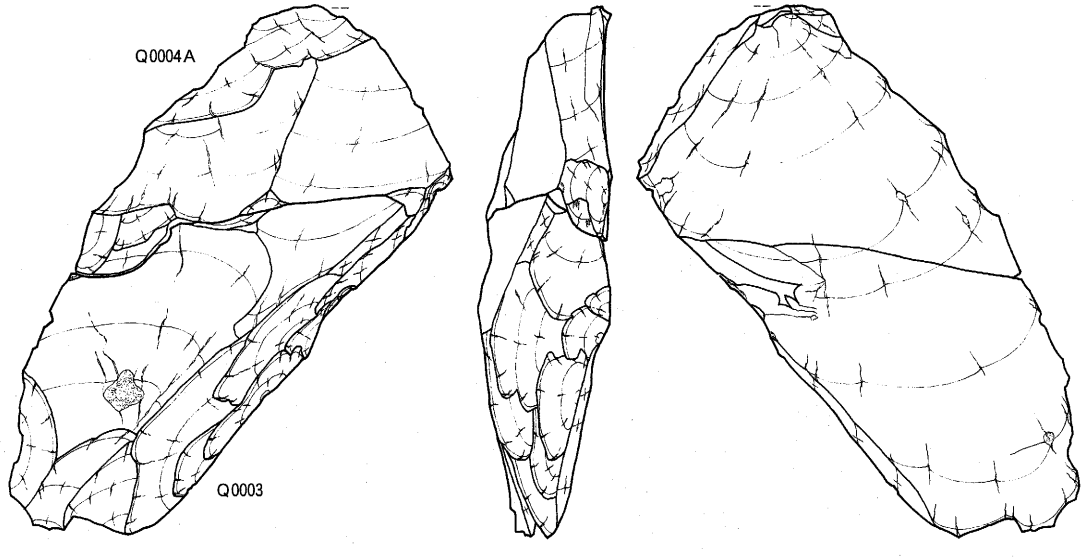
第182図　3 a区エリア１・２接合資料実測図18　接79　(S=1／2)



709
[708→] （Q0583, ＦⅠ, 接79, 個10, 白峰）



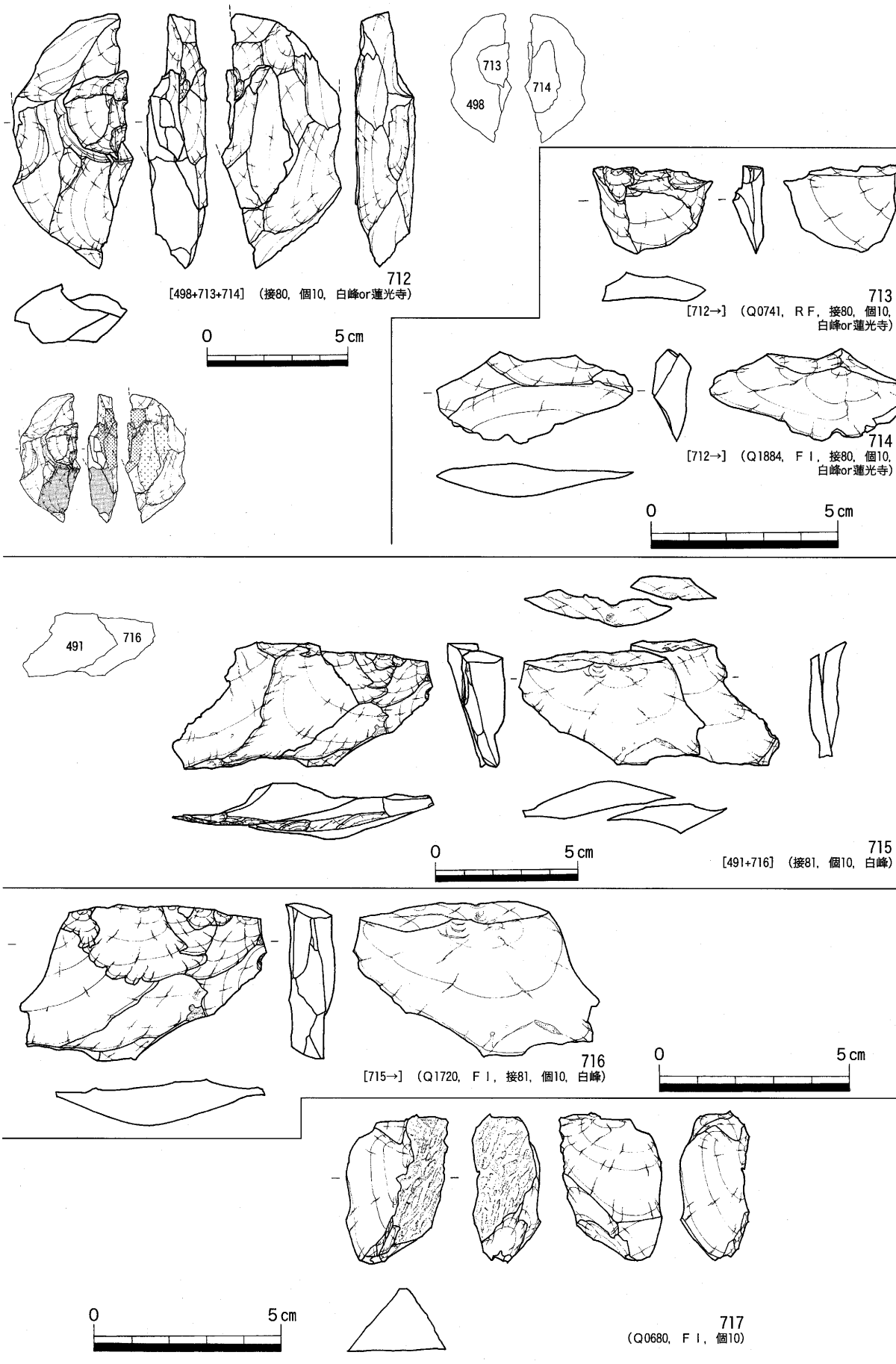
710
[708→] （Q1724+Q1857+Q3050, ＦⅠ, 接79, 個10, 白峰）



711
[708→] （Q0003+Q0004A, ＦⅠ, 接79, 個10, 白峰）

0 5cm

第183図　３ａ区エリア１・２接合資料実測図19　接79　（S＝2／3）



第184図　3 a区エリア1・2接合資料実測図20　接80・81　(S=2/3, 1/2)

石器数は抽出した個体別資料中でもっとも多く，合計35片の石器がある。うち定形石器はナイフ形石器６点，スクレイパー１点，ＲＦ５点，ＵＦ１点，石核１点である。総重量は662.3ｇで，うち定形石器は226.0ｇ（34.1％），また接合資料は409.3ｇ（61.8％）を占める。

接合資料79は中でも特に大形の剥片からなる接合資料である。厚みのある板状素材の平坦剥離面がａ面，石理顕著な自然面がｅ面にみられ，ｅ面側から表裏交互に打撃を加えて大形剥片を剥離する工程が復元できる。接合状態で長さ152.0㎜，幅113.0㎜，厚さ31.0㎜，重量291.9ｇである。重量は個体10全体の44.1％を占める。自然面を打面とする709は背面に石核素材面を全面にとどめた扇状の剥片である。709剥離後に打面を入れ替え，4回ほど剥片を剥離する。さらに打面を入れ替え，710を剥離する。710は剥片３片のⅡ種接合だが，末端側１／４は未検出である。その後，再び打面と作業面を入れ替えながら，711を剥離している。交互剥離による石核素材剥離の工程と言える。分布はブロック１ＢＨの中央と南にまたがって分布するが，ややジグザグに移動する様子が窺える。

接合資料80は石核に剥片２点が接合するものである。接合状態で長さ90.5㎜，幅42.0㎜，厚さ21.0㎜，重量68.5ｇ（全体の10.3％）である。石核498の上下両端には折損面があり，剥片剥離途上で折損を繰り返したものと考えられ，確認した接合段階は剥片剥離終盤の作業と言える。713は背面には打面を共有する細かな剥離が施された後，遺存部よりやや上側を打撃して幅50.0㎜以上の大きなネガ面を生成する。この面と下側のネガ面とのなる稜線上に，打面を入れ替えて714の打撃が加わる。遺存部で見る限り，713とその上下の一連の剥離面が打面調整，714が目的剥片とみることができる。ただ，剥片剥離中盤では打面転移が顕著なことが推定でき，作業面と打面の関係が固定的かどうかは明確でない。分布は接79と同じく，ブロック１ＢＨの中央と南にまたがり，残核のみが南に離れて出土する。最大接合距離は4.8m。

接合資料81は平坦な打面を共有する２剥片の接合資料である。うち491は剥片末端に摩滅を伴う微細剥離痕がみられ，使用痕有剥片とみている。接合状態で長さ91.6㎜，幅44.2㎜，厚さ20.2㎜，重量48.9ｇ（全体の7.4％）である。分布はブロック１ＢＨの南にある。接合距離は0.8m。

非接合の剥片として717を報告しておく。片面に自然面をとどめる剥片である。主剥離面はｃ面と認定したが，ｃ面はやや凹んだ面である。石核とも考えられる。石核とした場合においても，ｃ面下端部にみられる素材面の角度からみて，良好な剥片は得られていない可能性が高い。剥片剥離時に生じた小片に対して試みられた，末節的な作業と考えられる。分布はブロック２Ａの南西隅にあり，同じ個体10のナイフ形石器525とスクレイパー528が近接して出土している。

接合資料82（第185図・第186図）

幅60.0～100.0㎜サイズの大形の剥片を，求心的に剥片剥離を進めて剥取する石核と，周縁部を大きく加工された剥片の接合資料である。石核はその後の剥片剥離で半折したものがⅡ種接合する。接合状態で長さ87.0㎜，幅87.2㎜，厚さ2.4㎜，重量135.4ｇ。接合状態718の表裏面には石核の素材面と考えられる面はみられない。したがって素材段階でかなりの厚みがあったとみて良い。剥片剥離は表裏交互に打面と作業面が入れ替わりながら，主として図の左右の方向から剥片剥離が進行する。上下方向に打面が転移した痕跡は遺存部ではみられない。加工痕有剥片532はａ面における最終段階に剥離されたものである。剥離方向から若干下方にずれた方向に器体の主軸を設定し，左右の側縁を大きく加工して整形する。接46の角錐状石器の剥片における主軸設定の手法に類似する。532剥離後は，ｃ面における作業において石核が折損して作業が停止する。

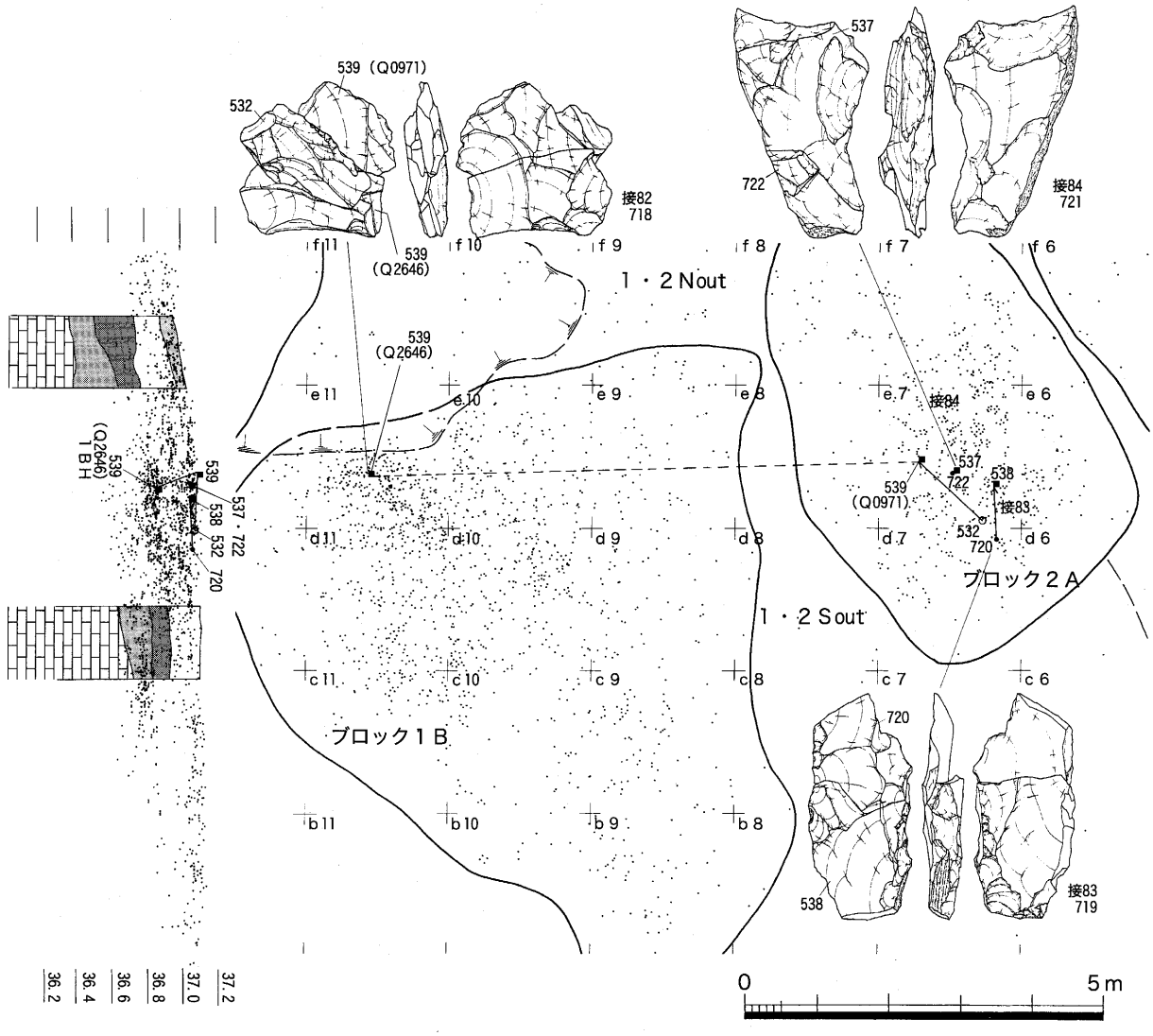
分布は主としてブロック２Ａ中心部にあるが，石核半折品（Q2646）のみブロック１ＢＨの北東集中部に離れる。最大接合距離は8.5mある。

接合資料83（第185図・第186図）

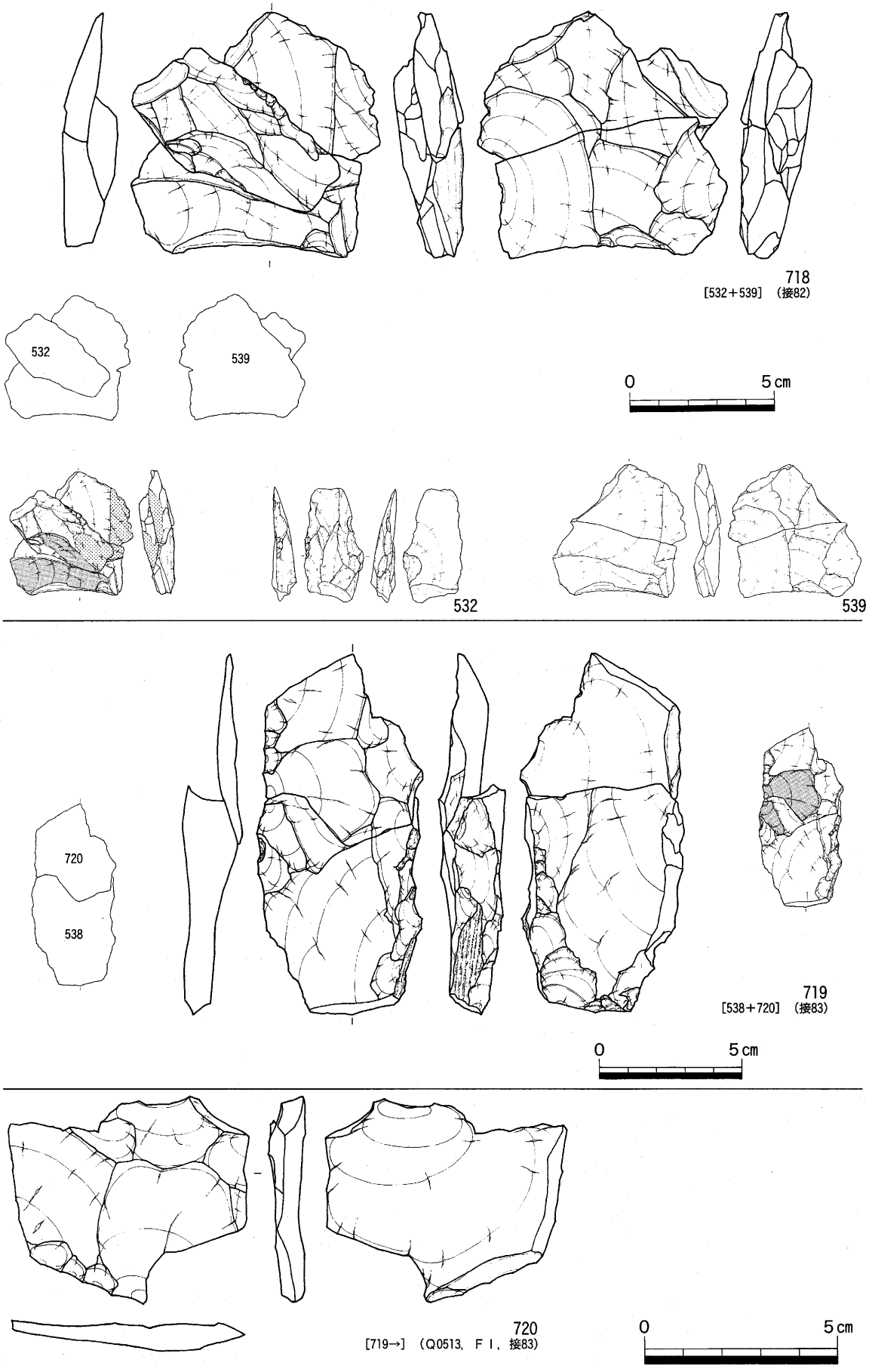
719は側縁に自然面をとどめる石核538と，側縁部に打面を設定して強い打撃で剥離した幅広の大形剥片720の接合資料である。長さ126.0㎜，幅57.0㎜，厚さ24.0㎜，重量131.4ｇ。石材はAn-Aである。表裏に残るネガ面はいずれも石核の側縁部側から打撃される。分布はブロック２Ａ中心部にある。

接合資料84（第185図・第188図）

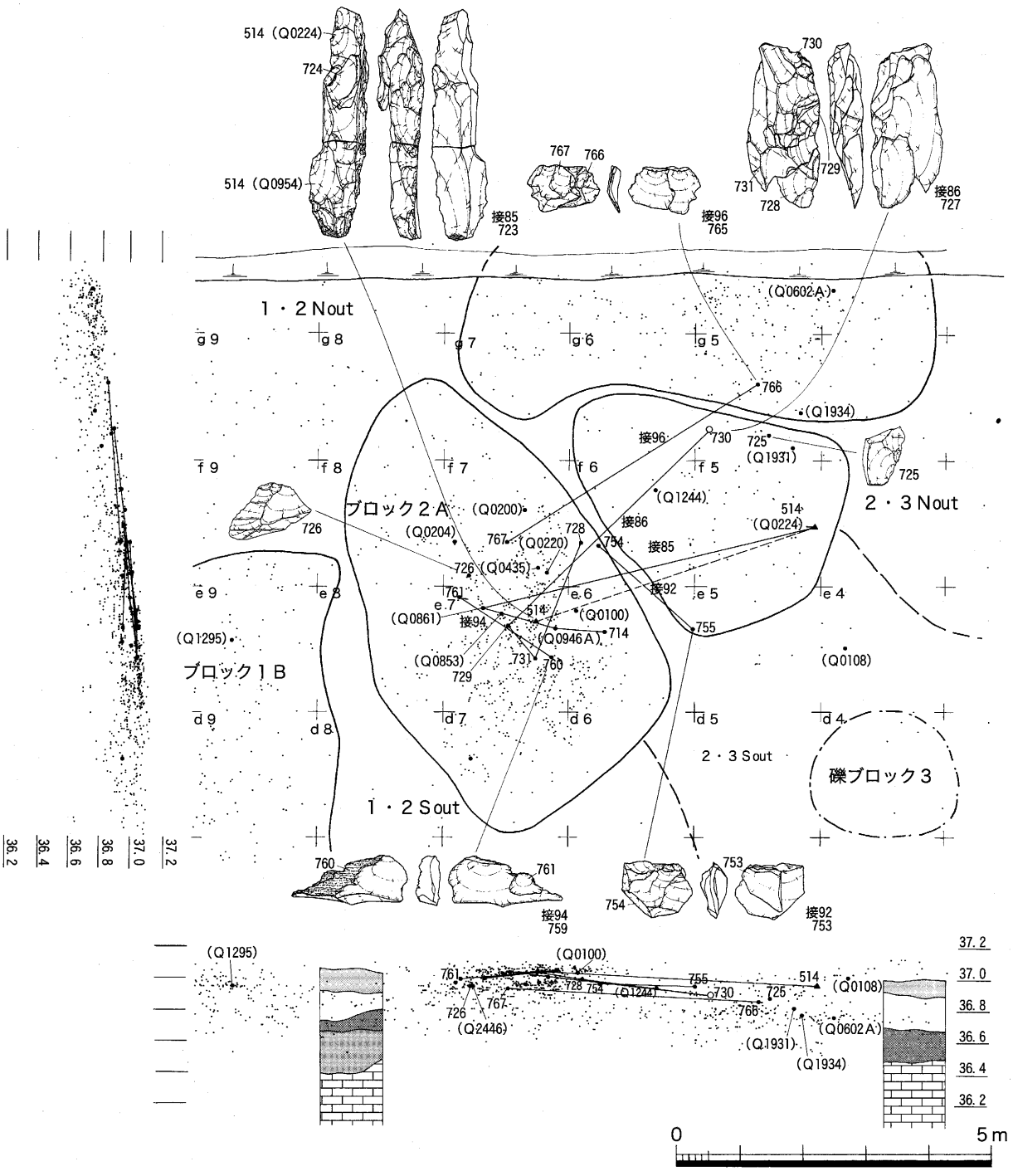
石核537とその尾部に接合する小剥片である。調査時に同一番号で取り上げており，きわめて近い位置で出土したものと考えられる。接合面は石核に施された表裏交互の剥離面に切られていることから，元来は潜在割れで石核に貼り付いていた小片が後に分離したものと推定される。石材は白色に風化するAn-Cで，分布はブロック２Ａの中心部にある。石核537にみられる剥片剥離は打面調整をほとんど施さず，表裏交互に打面と作業面を入れ替えながら剥片剥離を進めるものである。



第185図　３ａ区エリア１・２　接合資料分布図12　接82～84　（S＝1／100　垂直分布S＝1／40）



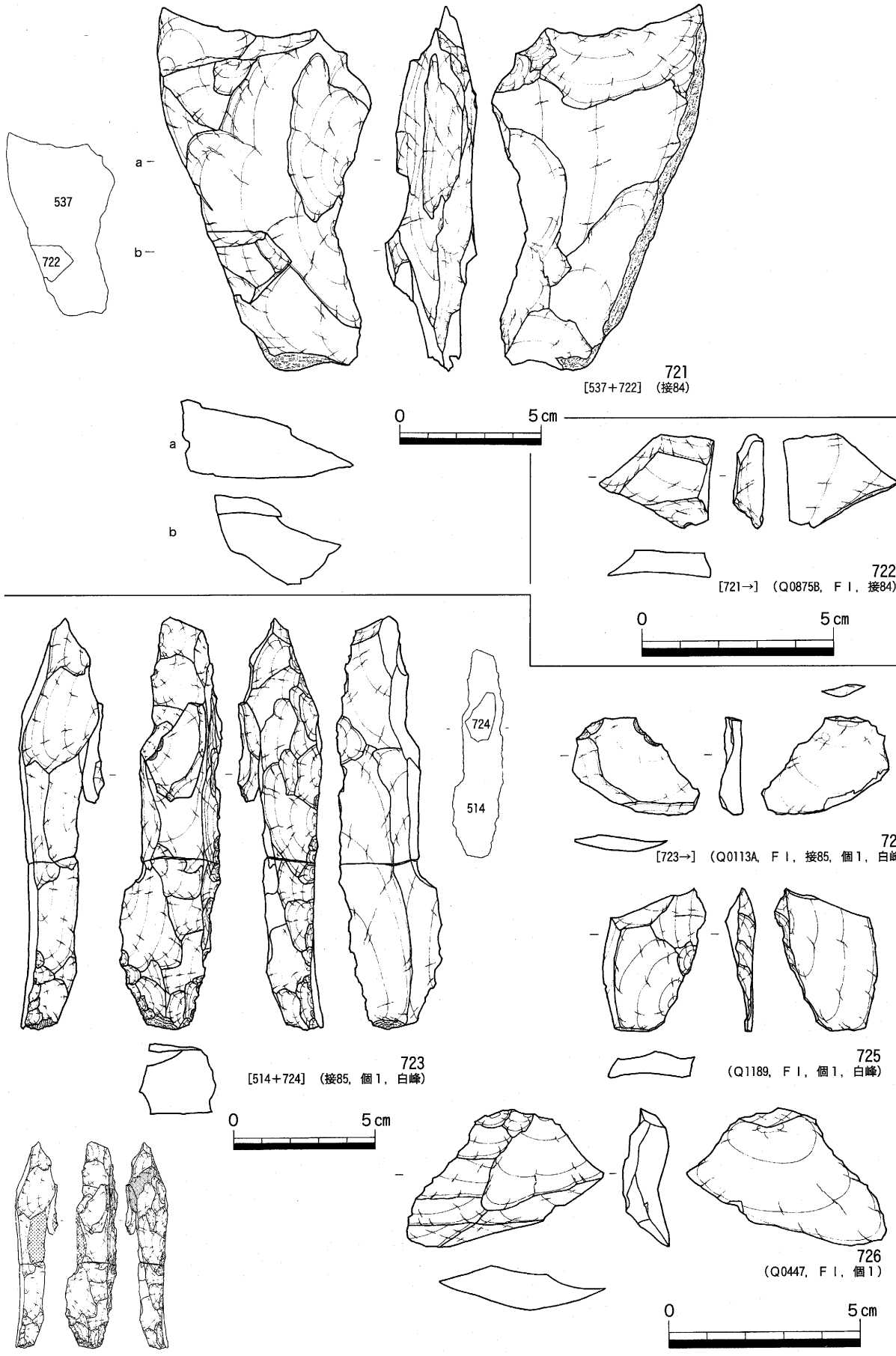
第186図　3 a 区エリア 1 ・ 2 接合資料実測図21　接82・83　(S=2／3, 1／2)



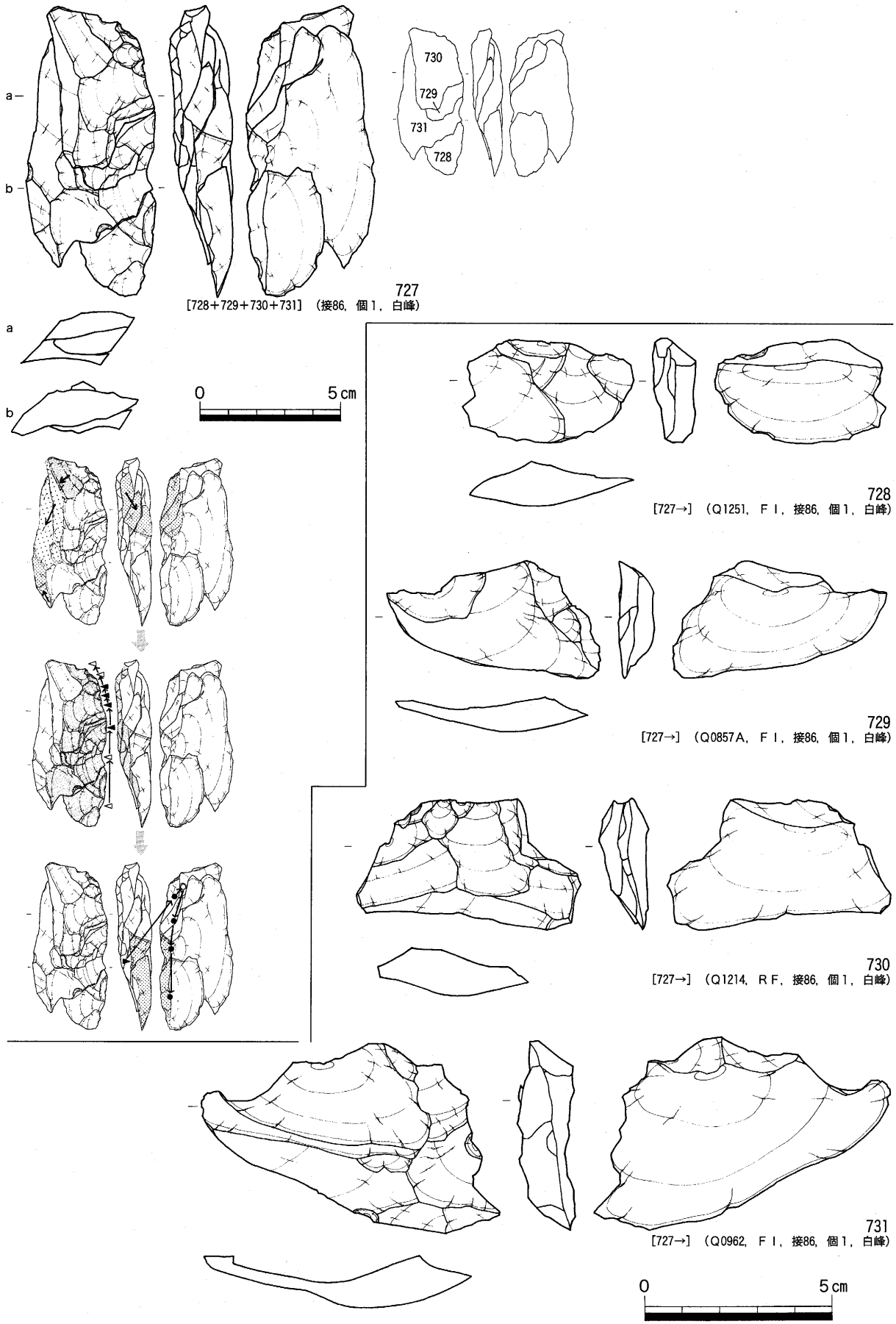
第187図　３ａ区エリア１・２　接合資料分布図13　接85･86･92･94･96･個1　(S=1／100　垂直分布S=1／40)

接合資料85・86・92・94・96・個体１（第187図・～第189図）

個体１は濃灰色を基調として，不規則に石理の細い白縞が入る石材である。白縞の間隔や太さの配列によって，比較的厳密な個体識別が可能性である。総点数30点，重量は337.3ｇ。うち接合資料は15点・261.9ｇ（全体の77.6%），定形石器は角錐状石器１点（Ⅱ種接合），ＲＦ１点で合計重量136.4ｇ（40.5%）である。



第188図　3 a 区エリア 1 ・ 2 接合資料実測図22　接84・85・個体 1　(S=2／3, 1／2)



第189図　3a区エリア1・2接合資料実測図23　接86　(S=2/3, 1/2)

厚さ40.0㎜ほどの板状大形素材が想定されるが，剥片剥離初期段階の剥片類はみられない。打面と底面のなす角度や白縞の観察から，727の接合資料86が遺存部中ではもっとも古く位置づけられる。接86は打面を共有する剥片４片の接合である。長さ104.0㎜，幅46.0㎜，厚さ22.5㎜，重量81.8ｇ。１面の剥離面を打面に設定し，打点を左右にずらしながら不定形剥片を生成し，一旦打面を入れ替えて打面側に剥離面を形成した後，引き続き打点を横にずらしながら剥片剥離を行う作業である。

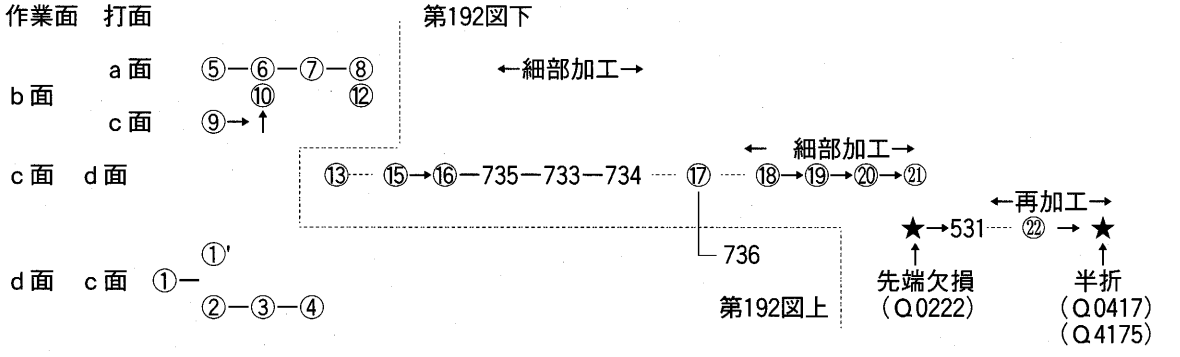
次に接合資料94が行われている。側縁に自然面をとどめる剥片２片の接合資料である。さらに726に図化したQ0447の剥片など，石核の厚みを示す打面と底面が平行しない剥片類が剥ぎ取られる。次に接合資料92，接合資料96などの細部調整が施された後，角錐状石器514に接合する剥片を経て，残核でありかつ角錐状石器の整形途上段階である514の折損に至る。

以上の個体１の剥片剥離は，大形石核の周縁部を比較的初期段階から加工し，角錐状石器の素材となりうる大きさと形状を整える過程を示す資料と言える。

分布はその多くがブロック２Ａ中心部に強くまとまり，角錐状石器の半折品や接86で生成されたＲＦなどが，ブロック２Ｂに点在する。そのほかブロック１Ｂ，ブロック２Ｃにも少量ながら確認できる。

接合資料87（第190図～第192図）

長さ242.0㎜，幅58.0㎜，厚さ37.0㎜，重量305.3ｇの接合資料である。先端は鋭く尖り，左右両面（ａ面・ｂ面）には自然面が残る。特にａ面は全面が石理顕著な自然面に覆われる。器体の断面形は概ね方形で，ｂ面，ｄ面が石理に平行する。剥片剥離を第192図と下の略図で示した。



まず，接合状態で最も古い面はｂ面・ｄ面の剥離面である。ｄ面の①～④，ｂ面の⑤～⑫がこれに該当する。このうちｄ面では打点を横方向にずらしながら剥片を剥離する。一方，ｂ面では打点の動きがやや不規則である。ｂ面には石理の影響を受けた階段状剥離が顕著であることも関係するかもしれない。両面における剥片剥離の結果，器体の表裏に平坦な面が形成される。

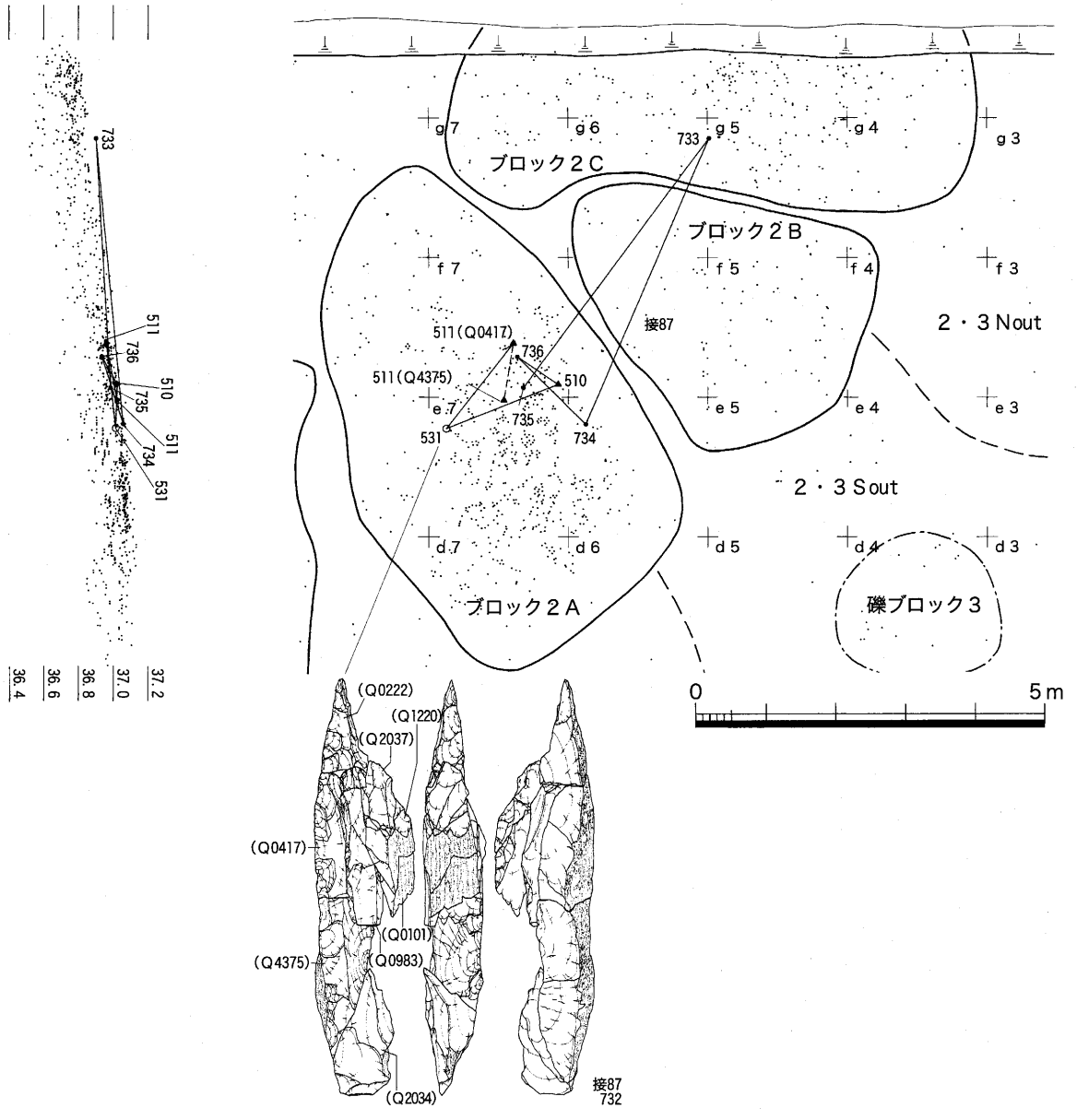
次に打点をｄ面に設定し，ｃ面を作業面として剥片剥離が進行する。ｃ面で最も古い面は⑬である。器体に対して剥離面末端部分の剥離角が浅いことから，先端部付近の素材は現状より大きかったものとみられるが，接合資料を正面からみた場合の⑬の剥離方向は，器体の長軸と約30度ほどの角度がある。したがって，このときすでに器体の先端がやや細く整形されはじめていたことを示している。⑮～734は打点を横方向にずらしながら連続的にｂ面の自然面を剥ぎ取っている。同様の流れで器体下部の⑰→736まで剥離が進行したものと考えられる。

一方，器体上部では⑬から734までの剥片を剥離した後，⑱から㉑まで図示した順で先端の細部加工が施される。同様にｂ面では，⑤～⑫の剥離面を切る細部加工が施される。ｂ面の先端付近でも下部から

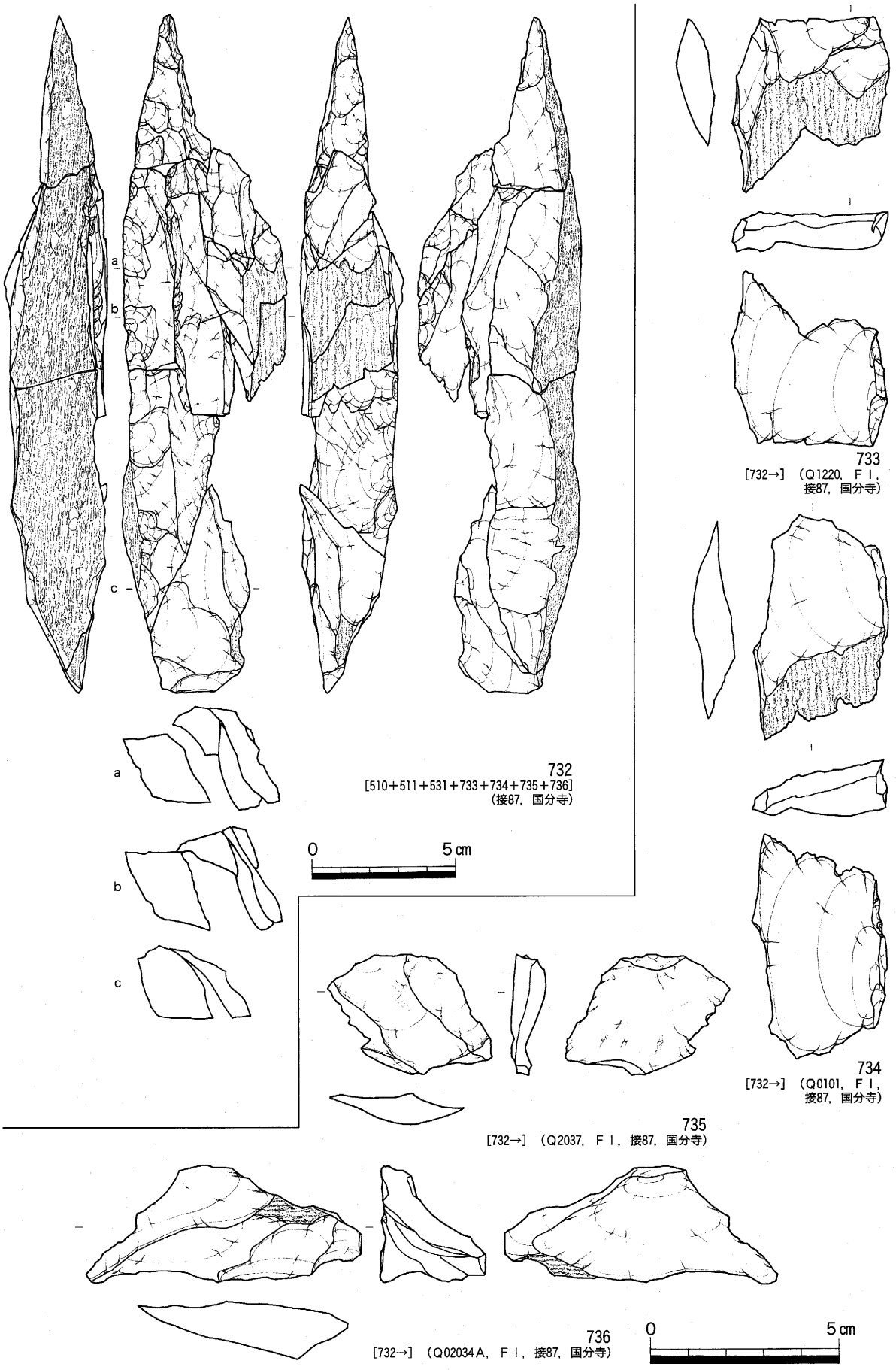
上部にかけての剥離の流れがみられ，いずれの面もｃ面の細部加工面を切る。

先端部（Q0222）の折損は，ｃ面細部加工途上に生じている。折損後，531や○による大きな剥片剥離で残存部の形状変更をはかり，ｃ面上半部を中心に細部の再加工を行うが，その途上で残存部が半折して当個体の剥片剥離が終了する。

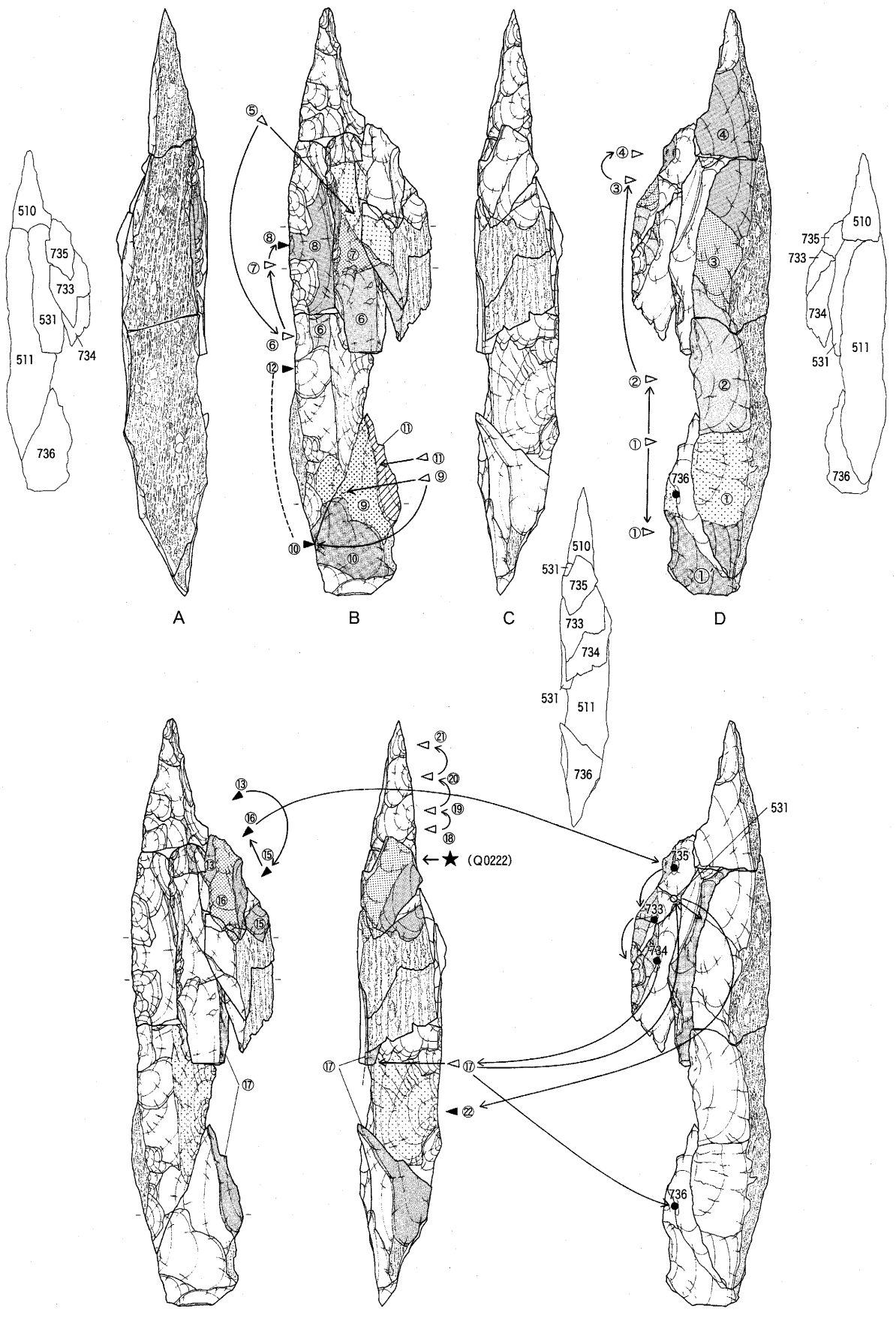
構成する剥片の多くはブロック２Ａに分布するが，733のみが4.5m北東に離れたブロック２Ｃ東で出土する。



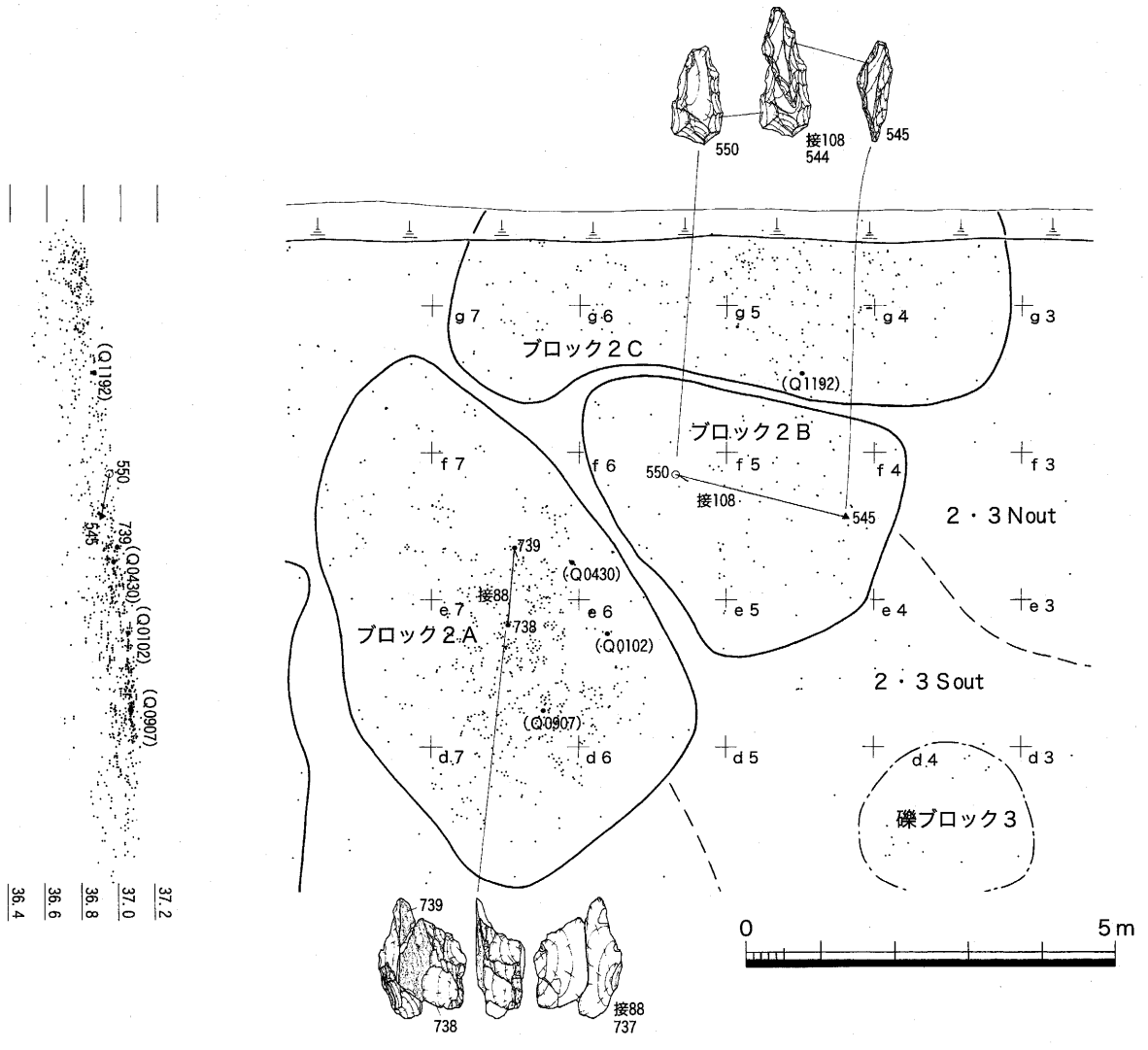
第190図　３ａ区エリア１・２　接合資料分布図14　接87　（S＝1／100　垂直分布S＝1／40）



第191図　3a区エリア1・2接合資料実測図24　接87　(S=2/3, 1/2)



第192図　3 a 区　接合資料87　打点移動模式図



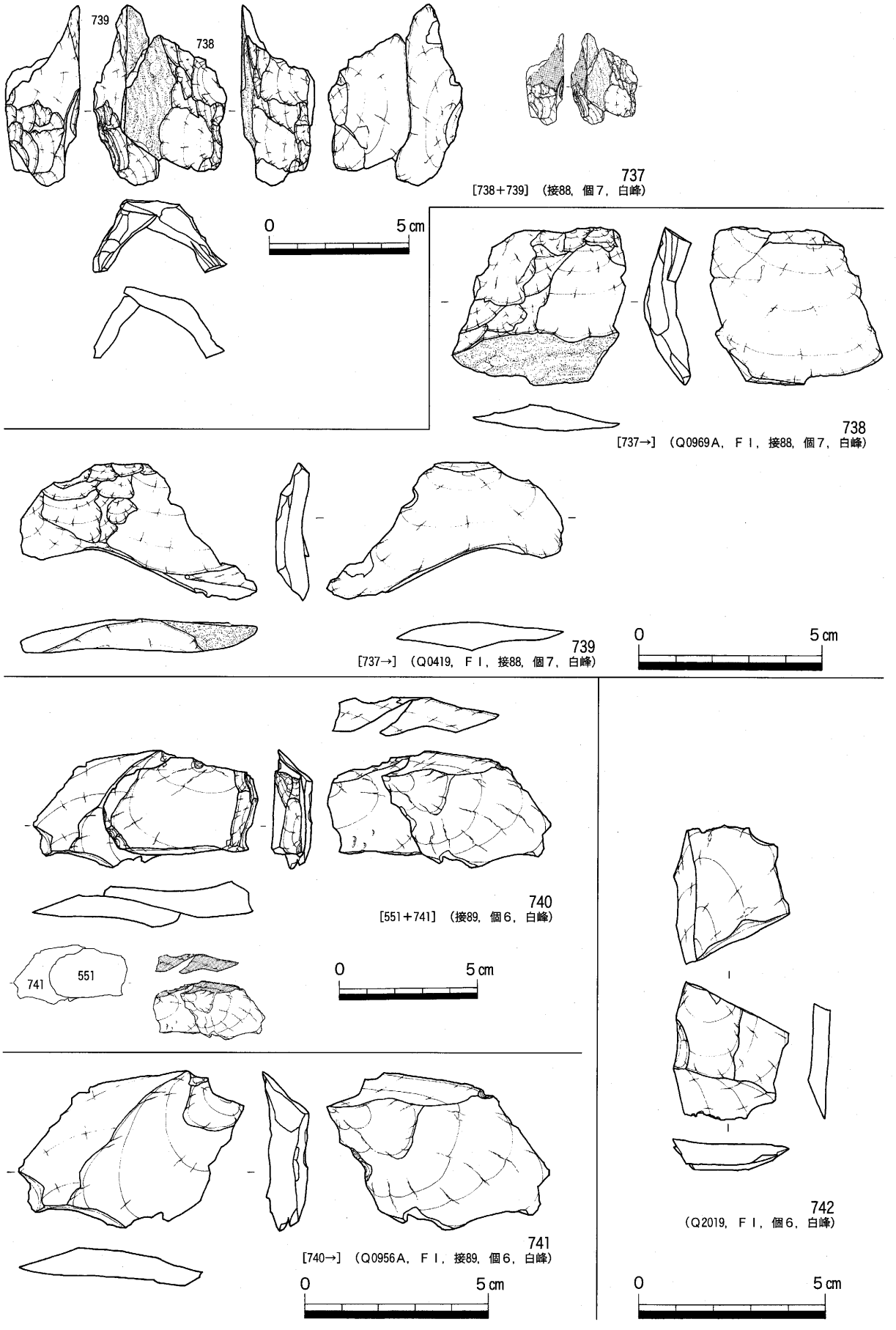
第193図　３ａ区エリア１・２　接合資料分布図15　接88・108・個7　（S＝1／100　垂直分布S＝1／40）

接合資料88・108・個体７（第193図・第194図）

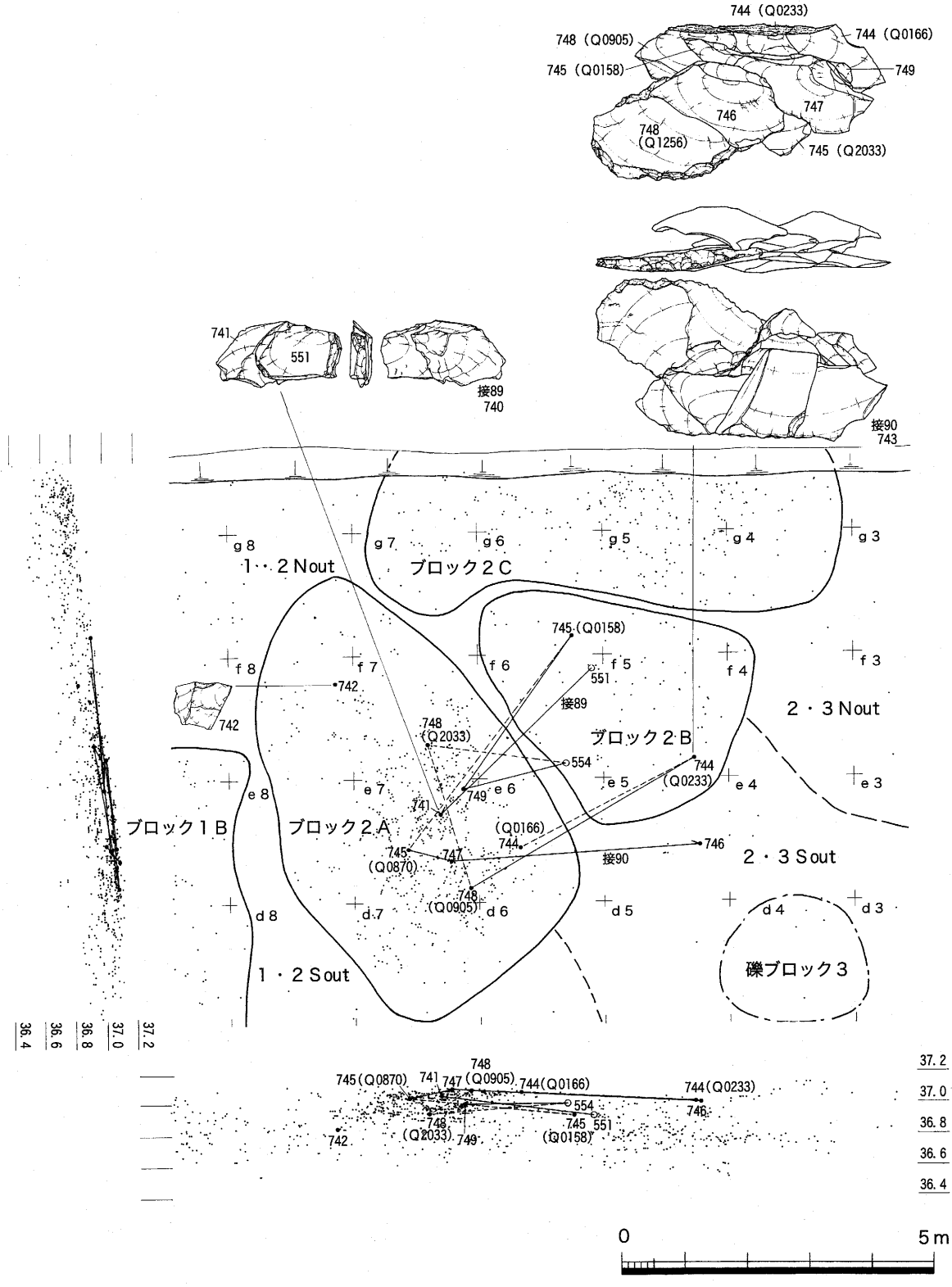
個体７は接88･108に単独の剥片４点を加えて合計８片の石器で構成される。石材の特徴は個体６と類似し，淡黄灰色に風化した器面にやや太目の白縞が不規則に入るもので，白縞の間隔等で個体６と区分可能である。器面が若干荒れ気味である点は共通する。総重量は114.2ｇ，うち定形石器は角錐状石器１点，加工痕有剥片１点の合計２点で重量24.7ｇ（個体全体の21.6％）となる。

接88は背面に自然面をもつ棒状の石核素材の左右の長辺両側から対峙して剥離された２剥片が，その末端部分で接合した例である。いずれも打面部は平坦面で，剥片幅に対する打面の幅が狭く，打点を左右にずらしながらそれぞれの長辺で剥片剥離を行ったことがわかる。接合状態で長さ65.0㎜，幅47.8㎜，厚さ26.2㎜，重量28.3ｇをはかる。接合状態断面でみると，残核形状が断面三角形を呈していることが明瞭である。角錐状石器整形加工の中盤に位置づけられる資料であろう。

接108（接合状態図544）は角錐状石器整形加工途上に分割した２片にそれぞれ再加工を施したものが，素材面で接合した例である。個体７における剥片剥離作業の最終盤に位置づけられる。



第194図　3 a 区エリア 1 ・ 2 接合資料実測図25　接88・89・個体 6　(S=2／3, 1／2)



第195図　３ａ区エリア１・２　接合資料分布図16　接89・90・個体６　（S＝1／100　垂直分布S＝1／40）

そのほか個体７に所属する剥片として，背面に自然面を留める10～35ｇの剥片２片と，重量10ｇ以下の剥片２点がある。前者が接88に併行する整形段階の剥片，後者が整形加工終盤の段階の剥片と考えられる。

個体７の分布は主要分布域がブロック２Ａにあり，角錐状石器整形途上折損による再加工である接108が２片ともブロック２Ｂに離れる。

接合資料89・90・個体６（第194図～第198図）

個体６は接89･90，さらに単独の剥片742で構成される。石材の特徴は，淡黄灰色に風化した器面にやや太目の白縞が不規則に入るもので，器面が若干荒れ気味である。総点数13点の個体で，総重量435.4ｇ，定形石器にはＲＦが２点あり，重量は132.0ｇ（30.3％）。

接90は長さ187.0㎜，幅103.0㎜，厚さ44.0㎜，重量382.1ｇの大形の接合資料である。剥片剥離初期段階の作業を反映する。まず，自然面を打面として打点を横にずらして剥片744→748を剥離し，その後，打面を入れ替えて未確認の２枚の剥片を剥離，さらに打面が入れ替わり，749→745→747の順で剥離する。再び打面が入れ替わり，未確認の剥片１枚を剥離し，また打面を戻して746を剥離するという，大形剥片の交互剥離の流れである。このうち，748は剥片剥離時に３片に分割し，末端側の大形片（554）が周縁に加工を施されるＲＦとなる。

接89は平坦な打面を共有する剥片２片の接合である。うち１点（551）が側縁に加工を施されるＲＦ。接合状態で長さ80.2㎜，幅42.5㎜，厚さ14.5㎜，重量45.1ｇ。剥離順序は551→○→741の順。

剥片742は非接合の単独剥片である。平坦打面を未調整のまま打撃し，縦に折れる。

以上の個体６の分布は主要分布域がブロック２Ａにあり，ブロック２ＢにＲＦ２点と大形剥片745・744の半折片が離れて分布する。

接合資料91（第199図・第200図）

背面に自然面を留めた剥片２片の接合である。接合状態で長さ67.5㎜，幅54.0㎜，厚さ17.5㎜，重量30.3ｇ。750の主剥離面側下部には石核の素材面が遺存する。主剥離面との角度は約40度。また側縁に背面側から７回の細部加工が施され，主剥離面に切られる。打面はいずれも狭小で２面の剥離面を共有する。

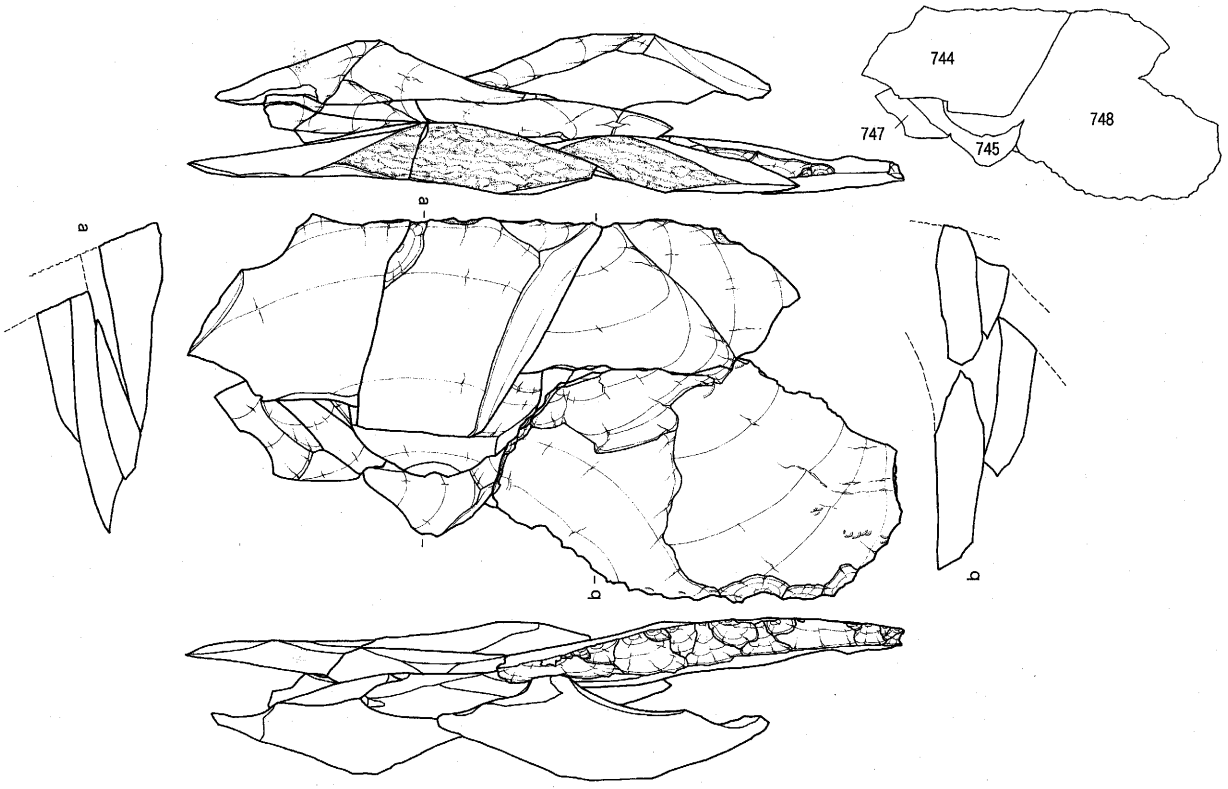
剥離順序は　石核底面の形成→側縁細部加工→打面部形成→751→○→○→752となる。残核は先端が細くなる形状と考えられる。

分布は750がブロック２Ｃ，751がブロック２Ｂにある。接合距離は3.1ｍ。石材はＡn-Ａである。

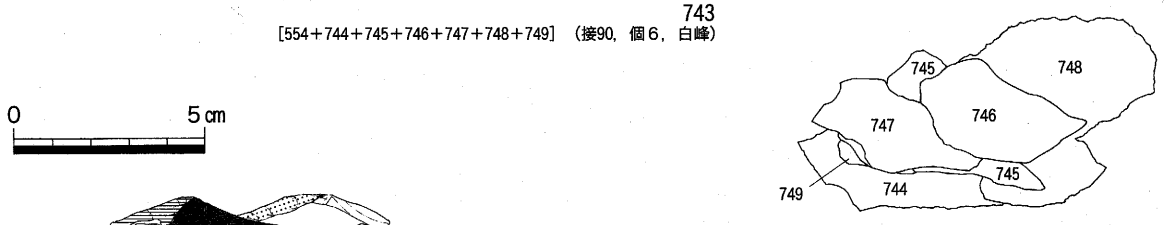
接合資料92・94・96　254頁参照

接合資料93（第199図・第200図）

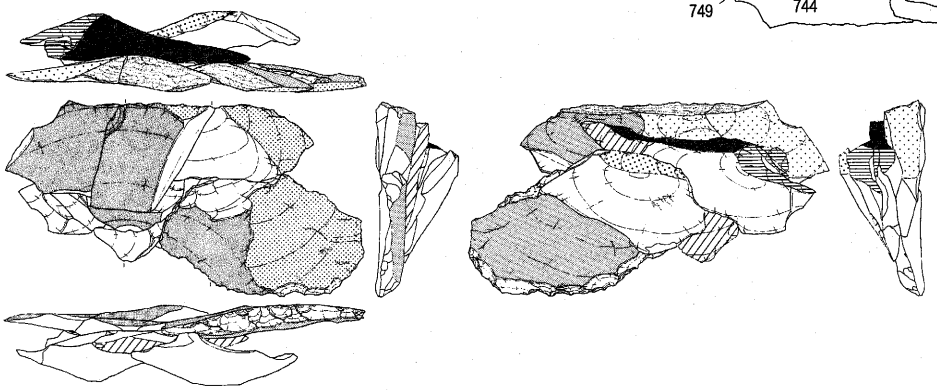
側縁に自然面をとどめ，連続的に剥離された剥片２片の接合である。石核底面の剥離方向は剥片剥離方向と90度異なる。いずれも剥片も打点部で折損しており，打面形状は不明。接合状態で長さ48.0㎜，幅26.0㎜，厚さ10.0㎜，重量18.4ｇ。石材はＡn-Ａ。分布はブロック２Ｃの中央部にあり，両剥片は近接して出土している。



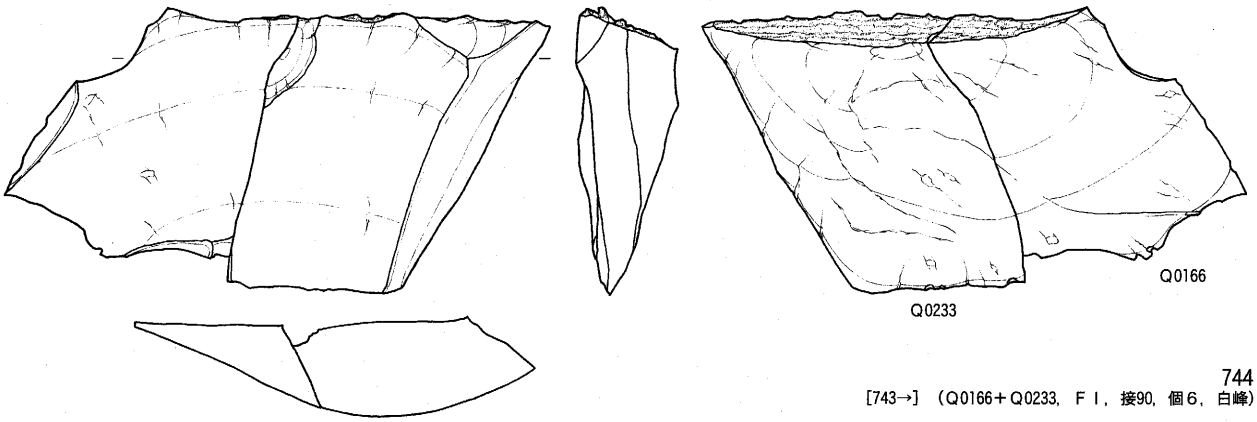
743
[554＋744＋745＋746＋747＋748＋749]（接90，個6，白峰）



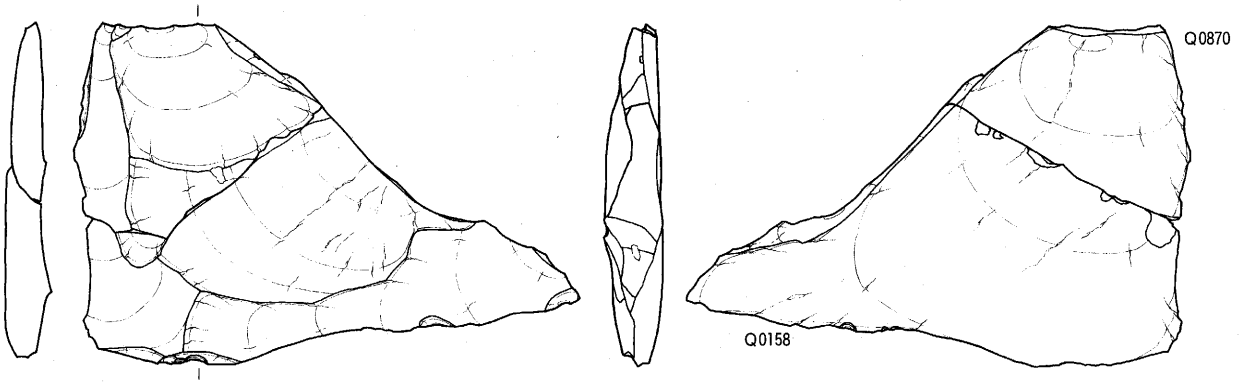
0　5cm



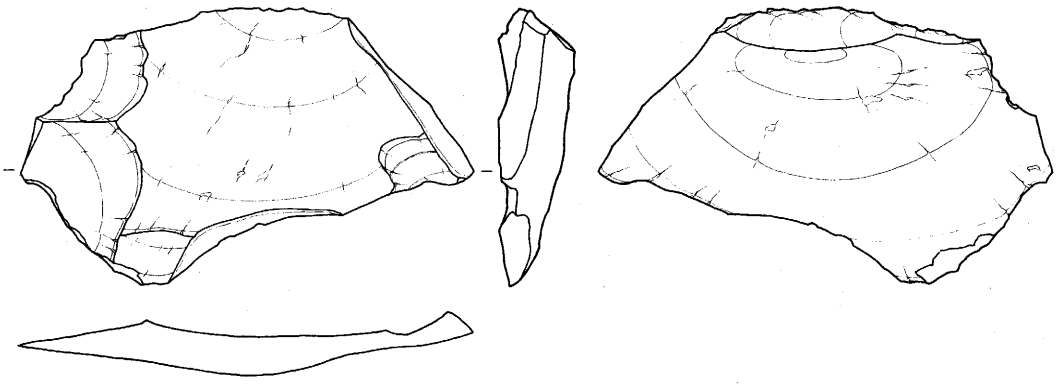
第196図　3 a区エリア1・2接合資料実測図26　接90　(S=1／2)



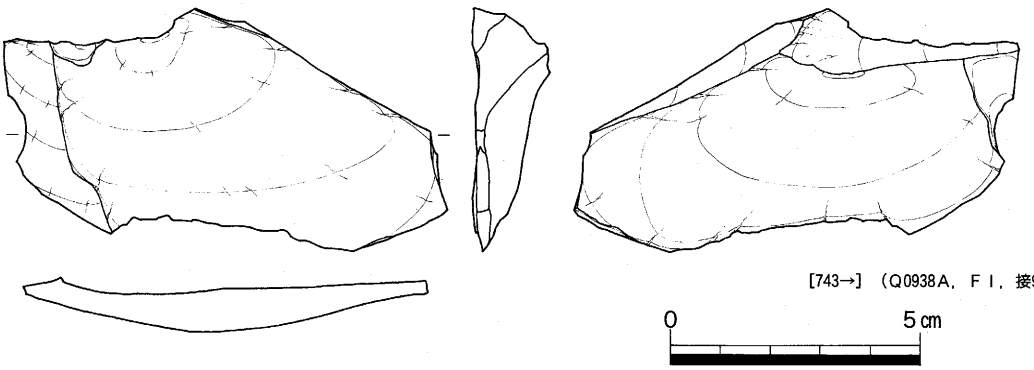
744
[743→] （Q0166＋Q0233，ＦⅠ，接90，個6，白峰）



745
[743→] （Q0870＋Q0158，ＦⅠ，接90，個6，白峰）

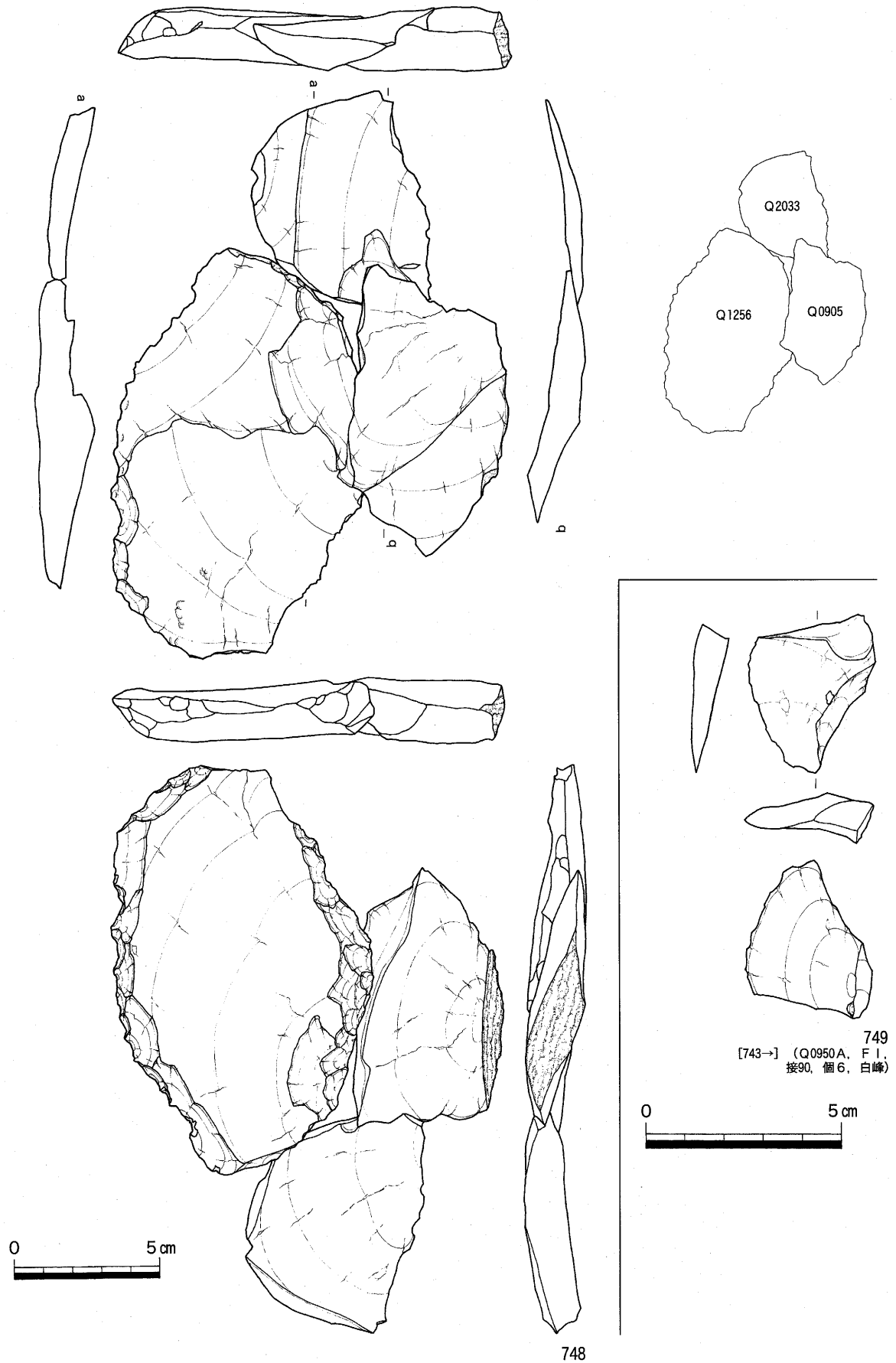


746
[743→] （Q0995，ＦⅠ，接90，個6，白峰）



747
[743→] （Q0938A，ＦⅠ，接90，個6，白峰）

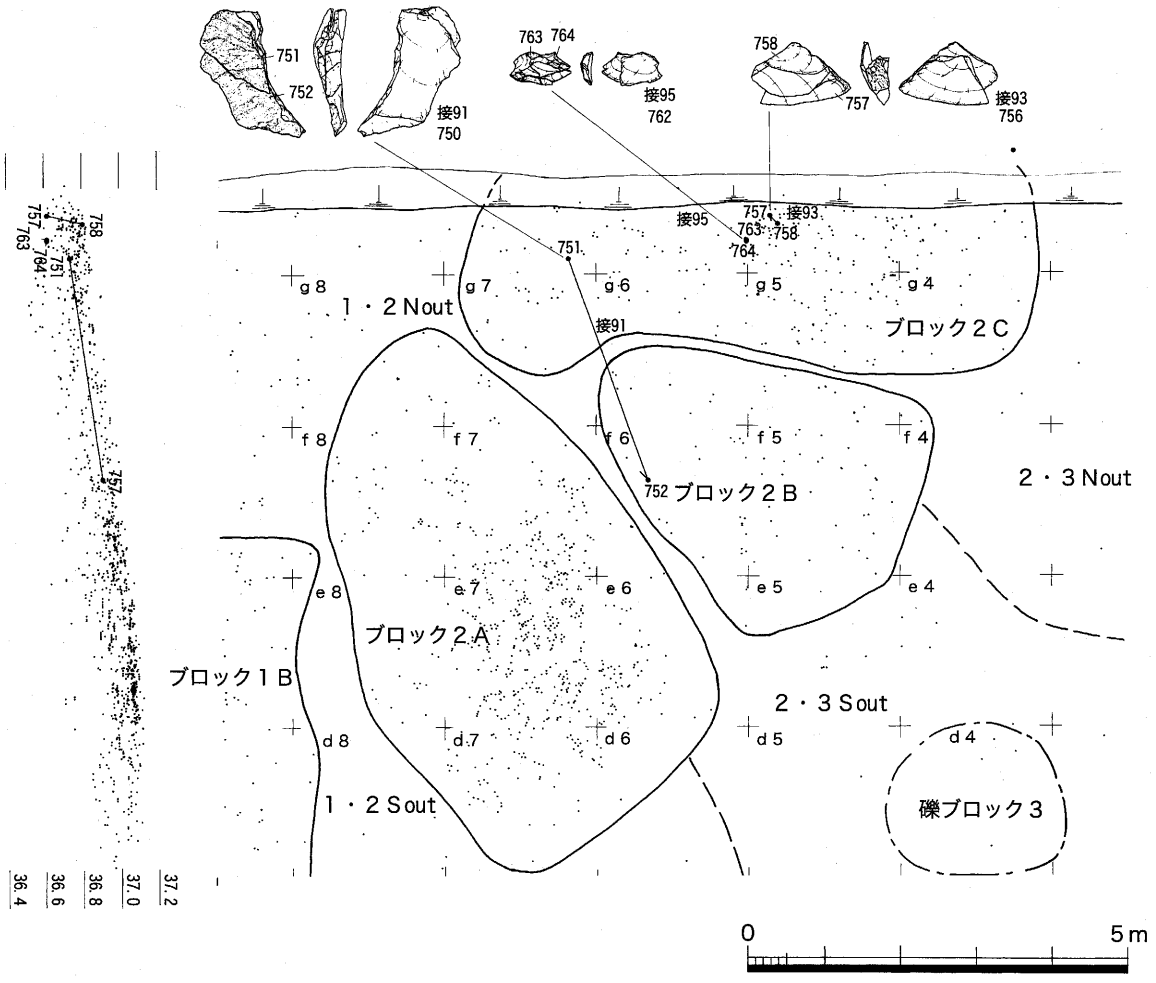
第197図　３ａ区エリア１・２接合資料実測図27　接90　（S＝2／3）



748
[743→, →554] (Q0905＋Q1256＋Q2033, ＦⅠ, 接90, 個6, 白峰)

749
[743→] (Q0950A, ＦⅠ, 接90, 個6, 白峰)

第198図　3ａ区エリア１・２接合資料実測図28　接90　(S＝2／3, 1／2)



第199図　3a区エリア1・2　接合資料分布図17　接91・93・95　(S=1/100　垂直分布S=1/40)

接合資料95（第199図・第201図）

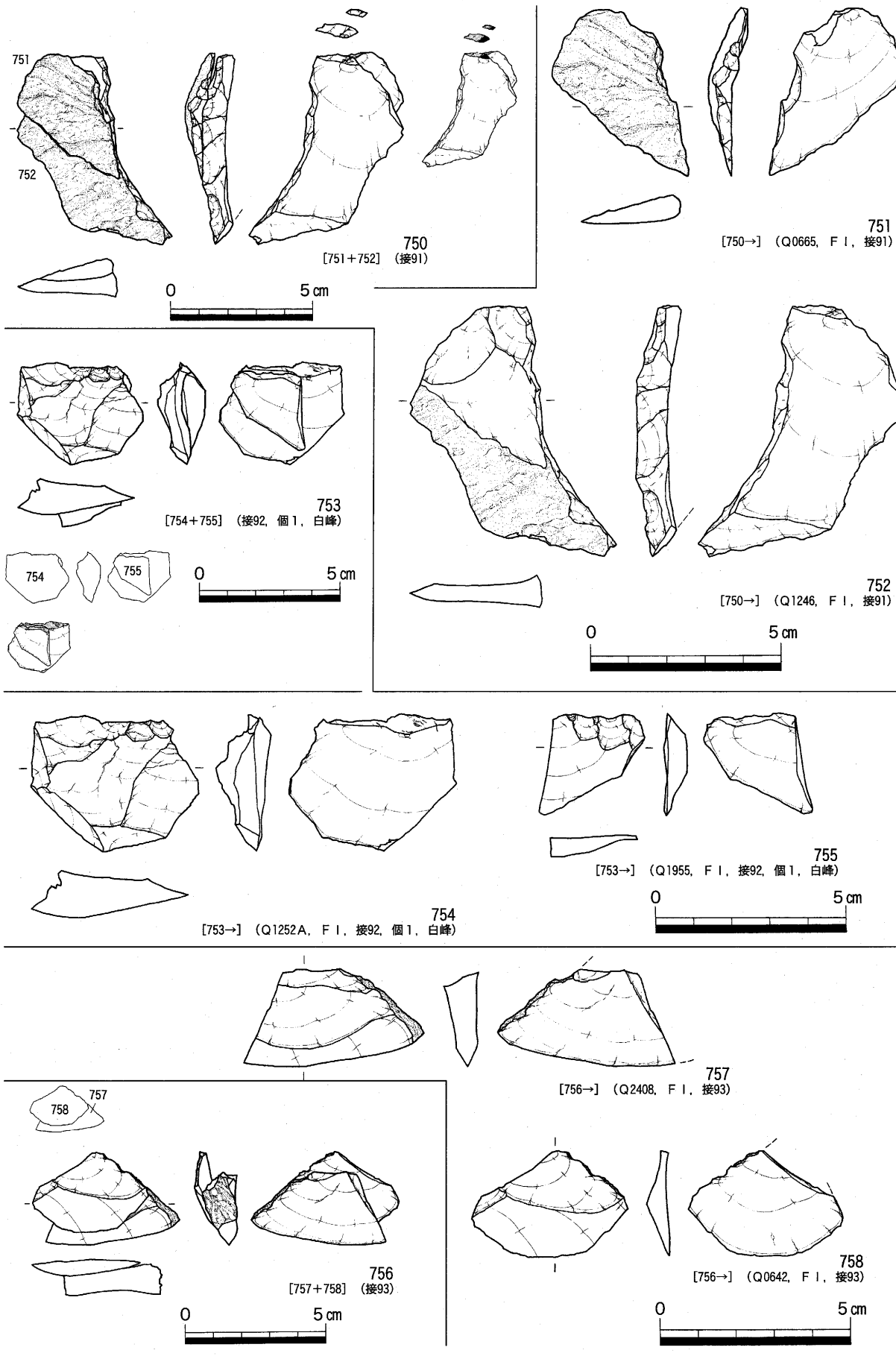
小剥片同志の接合である。打面は両者とも弾け，剥片末端に主剥離面と逆の剥離面が観察できる。接合状態で長さ32.0㎜，幅17.5㎜，厚さ6.0㎜，重量2.9ｇ。石材はAn-D。分布はブロック２Ｃの中央部にあり，両剥片は近接して出土する。

その他の接合資料

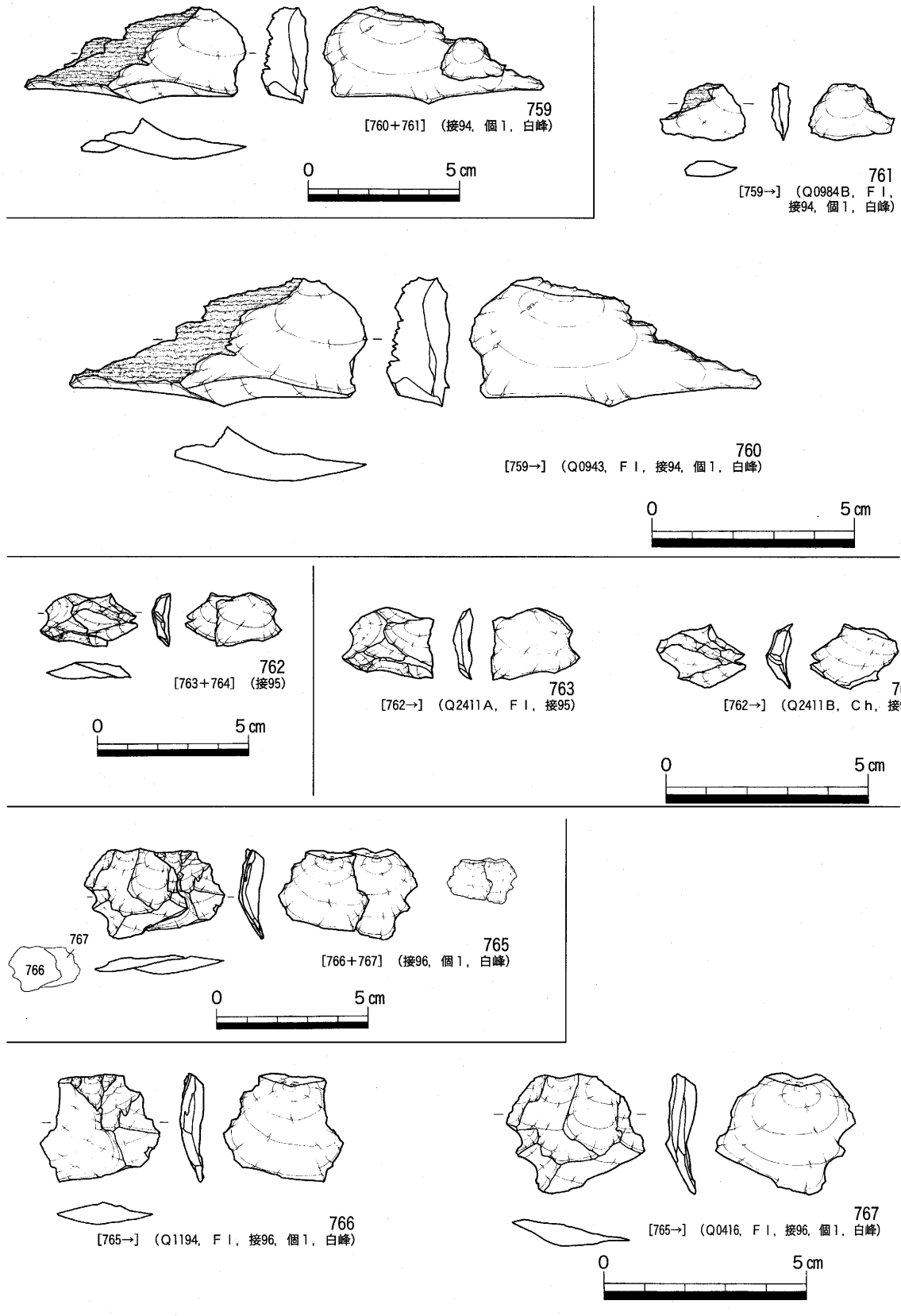
図化していない接合資料が９件ある。いずれも剥片のⅡ種接合である。出土ブロックごとに簡単に記述する。

ブロック１Ａでは接109がある。ブロック１Ａ北側と，ブロック１Ａ中央で接合する剥片のⅡ種接合である。平坦打面直接打撃し，背面に先行剥離面を全面に取り込んだ剥片である。

ブロック１ＢＬ同志の接合資料として接110がある。点状打面で，剥片末端が大きく内彎して剥離する。背面にみられる打点は同一打面を左右に移動している。



第200図　3 a 区エリア 1 ・ 2 接合資料実測図29　接91～93　(S＝2／3, 1／2)

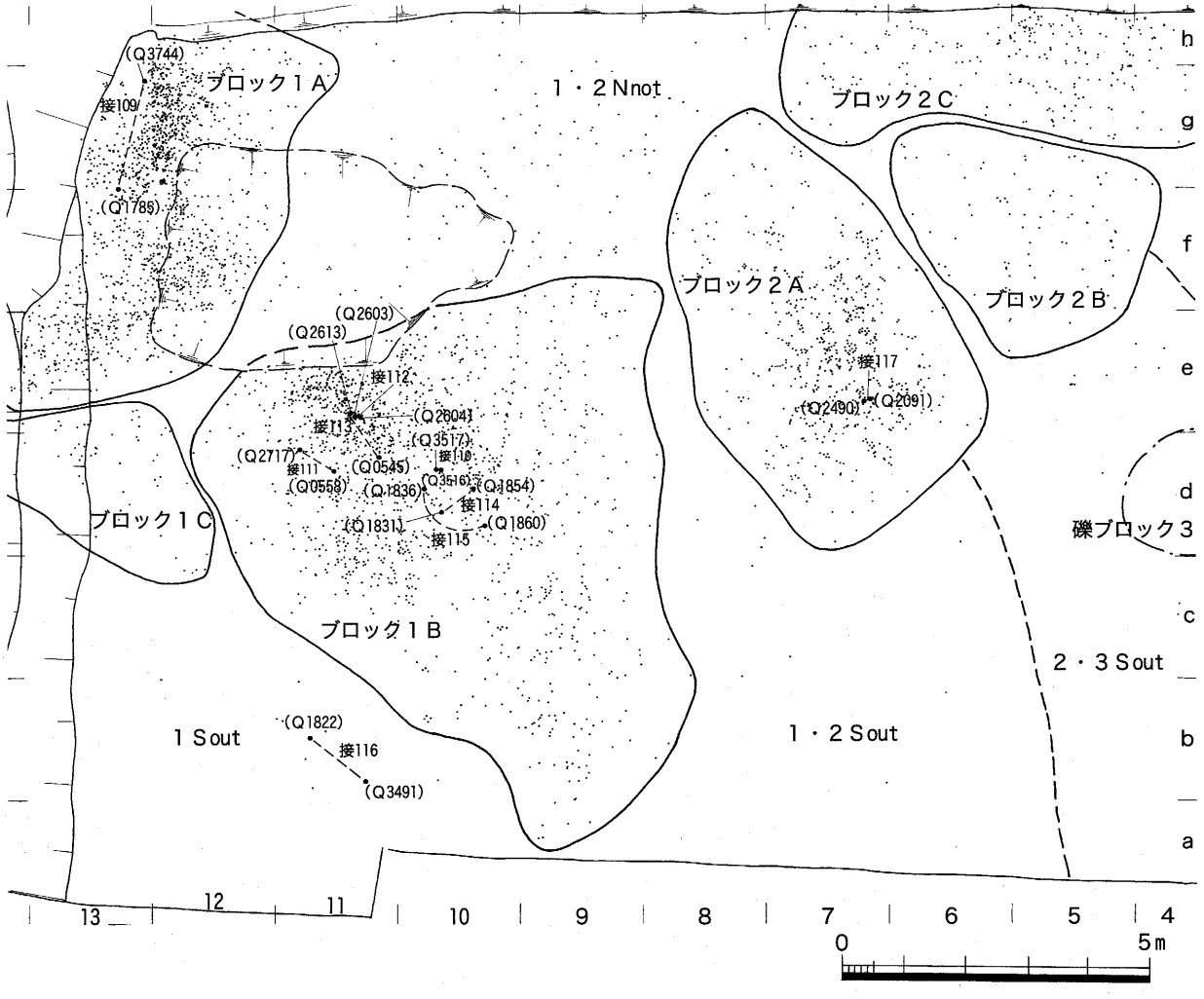


第201図　3 a 区エリア 1 ・ 2 接合資料実測図30　接94～96　(S＝2／3, 1／2)

ブロック１ＢＨ同志の接合資料が５件ある。接111～接115で，うち接111は三面加工角錐状石器の整形加工に伴う剥片と考えられるもの。接114は周縁に顕著な敲打痕を留めた板状素材を石理に沿って剥離した剥片のⅡ種部分接合である。剥片全体の20%ほど遺存するものと考えられる。そのほかは，平坦打面の小剥片である。

ブロック１・２Ｓoutでは背面に不定方向の剥離面をもつ大形剥片のⅡ種接合（接116）がある。

ブロック２Ａ中央部では背面に自然面をとどめ，平坦打面を打撃して正面扇状となる剥片のⅡ種接合（接117）がある。



第202図　３ａ区エリア１・２未報告接合資料分布図　接109～117　（S＝1／120）

第6節　3c区の調査

（1）概　要

3c区は谷C東岸の調査範囲中央付近に位置する調査区である。南北20m，東西21mのほぼ正方形の調査区形状を呈する。北側の3a区と南側の3b区，さらに西側の谷Cとの間には，未調査地が比較的幅広く存在する。3a区同様に，多くの石器が出土しており，石器総数は4,842点に達する。角錐状石器を主体とする石器群であるが，ナイフ形石器も相当量出土する。

3c区の調査は，第1章で述べたように，調査工程の都合上，北側と南側に区分して行った。北側は1mおきに1m方格のトレンチを設定し，調査範囲の東側にのみ遺物分布がみられることを確認した上で，1mおきのグリッド取り上げを行っている。したがって，出土石器の垂直分布のデータは欠落している。

一方で，3c区南側の調査は，調査範囲の東西全域を対象に石器出土位置を記録しながら，包含層の掘り下げを行った。3c区南側の遺物分布の傾向は，3c区北側と同様に東側に特に集中する状況が認められる。さらに遺物分布が希薄な調査区西側では，断面観察の結果，包含層（3a層）形成前の流路が北流することが判明した。さらに，石器集中部分の下層でも流路がある。これらの流路は複数の小流路が幾筋も切り合っている。流路の形成順を平面的に把握することはできなかったが，その最も下部に位置する流路堆積層中にAT火山ガラスの60%ピークがある。これらの流路の堆積層の最上部がⅢa層である。石器はⅢa層上面からその上のⅡ層に最も多く含まれる。Ⅲa層で出土する石器にはⅡ層中から生じた乾痕のクラック内に含まれ，縦位で出土するものがあった。したがって石器ブロックが形成された層準はⅡ層の可能性が高い。

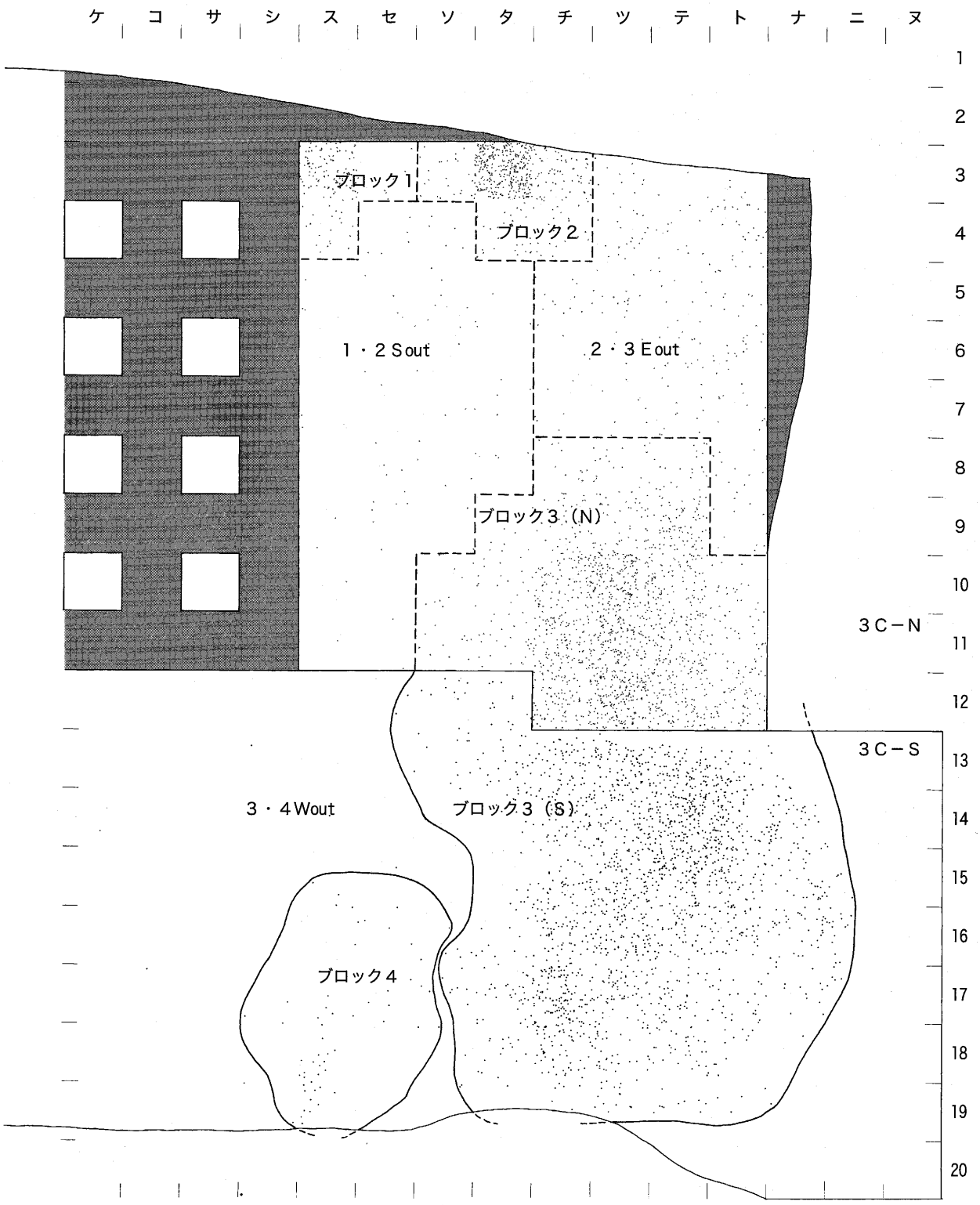
ただ，調査の際にはⅢa層までしか詳細な調査を行えていない。Ⅲa層の調査が終了した段階で，重機による下層掘削に展開した。したがって，下層の流路における石器の有無は確認できていない。垂直分布では，Ⅲa層の下部の石器分布の途切れ方がやや不自然である。また，断面観察中に一部流路上部で石器小片を確認している。ただ，この石器も縦位で乾痕中に出土したものであり，普遍化することはできないが，少なからず，流路に流入する石器が残っていた可能性もある。

石器分布は3a区と異なり，長径10mほどの範囲に特に集中する傾向があり，その周辺に2～3箇所の小規模な分布がみられる。出土数が多いために集中部の境を設定する方法に苦慮したが，ブロック区分の方法については3a区と同様である。ここでは，北から，ブロック1，2，3，4を抽出し，外縁部と区分した。

接合資料は合計58件が抽出できた。接合率は2.9%である。3a区と比べると格段に少ない。個体識別作業も試みたが，石材が3a区と比べると斉一的で，明確に区分することができなかった。したがって，その成果はここでは盛り込んでいない。

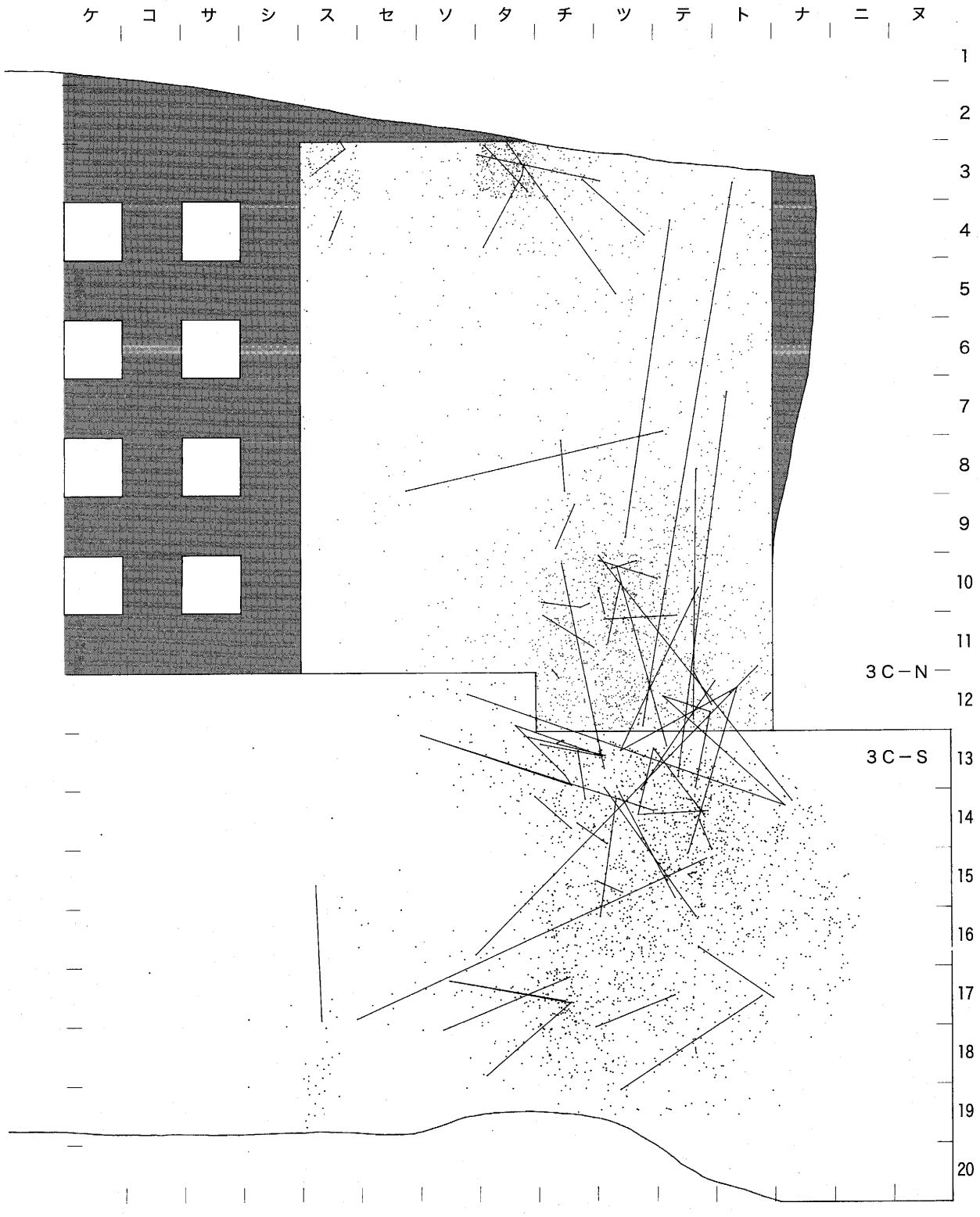
礫は3a区と異なり，全くみられなかった。他の調査区とは対照的である。

一方で，表面に細かな亀裂が認められるものを受熱石器としたが，その分布が一定範囲にまとまる傾向がある。



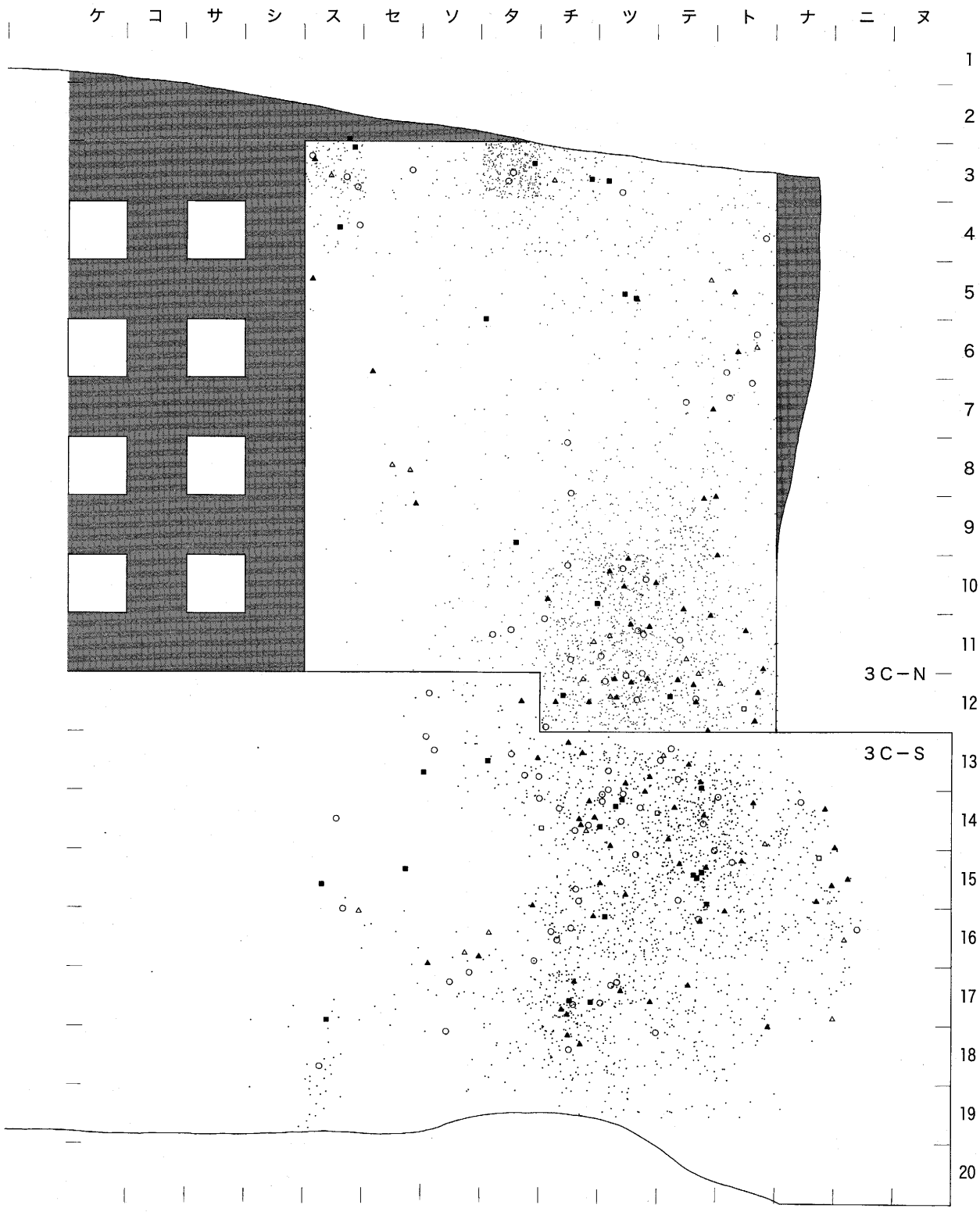
※３Ｃ－Ｎ（３Ｃ区北側）の石器出土位置は１ｍグリッド内で機械的に割り振った目安の点である

第203図　３ｃ区　石器全点分布図およびブロック区分図　（S＝1／100）



※３Ｃ－Ｎ（３Ｃ区北側）の石器出土位置は１ｍグリッド内で
機械的に割り振った目安の点である

第204図　３ｃ区　接合資料分布図　（S＝1／100）



※３Ｃ－Ｎ（３Ｃ区北側）の石器出土位置は１ｍグリッド内で
機械的に割り振った目安の点である

第205図　３ｃ区　器種別石器分布図　（S＝1／100）

（2）３ｃ区ブロック１

＜石器分布＞

調査区北西端の調査区である。調査範囲内において長辺２ｍ，短辺２ｍを上限とする狭い範囲で，139点の石器が出土した。ただ，当ブロックの北側と西側は未調査でその方向に石器分布が広がっていた可能性が高いと見なければならない。グリッド毎の分布密度と主要石器の出土位置を図示している。接合関係はブロック内でⅠ種接合２点，Ⅱ種接合１点がある。なお，流理が灰色と白色の縞状になるサヌカイト石材が目立つ。

器種組成は，角錐状石器１点，ナイフ形石器１点，加工痕有剥片５点，石核２点である。

器種	点数	比率（全）	比率（定形）	重量（g）	重量比（全）	備考
Tr	1	0.7%	10%	11.7	2.3%	（ ）はⅡ種接合片で外数とした
Kn	1	0.7%	10%	0.1	0.1%	
Sc						
RF	5	3.6%	50%	142.7	27.5%	
UF						
Cr	2(1)	2.1%	30%	93.0	20.8%	
Fl	47	33.8%		232.6	44.8%	
Ch	82	59.0%		24.0	4.6%	
RM						
GS						
HS						
Sa						
Po						
合計	138(139)	99.9%	100.0%	519.1	100.0%	

属性項目	数値
面積（㎡）	3
石器数（点）	139
分布密度（点／㎡）	46.3
平均重量（g）	3.7
定形石器保有率（%）	7.2
定形石器重量比（%）	50.6
接合固体数（点）	5
接合率（%）	3.6
接合重量（g）	76.5
接合重量比（%）	0.1

第79表　３ｃ区ブロック１　石器分布内容総括表

＜主要石器＞

角錐状石器（第207図　768）

768は二面加工の角錐状石器。剥片の主要剥離面を裏面に設定し，周縁および稜上から整形加工を施す。先端があまり尖らないことから，基部の可能性もある。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量(g)	遺存状態	断面形	石材	整形加工	接合	グリッド	備考
768	207	206	46	W4038	62.5×14.5×13.0	11.7	半折	△	An-C	2-W		ス3	

第80表　３ｃ区ブロック１　角錐状石器　属性表

ナイフ形石器（第207図　769）

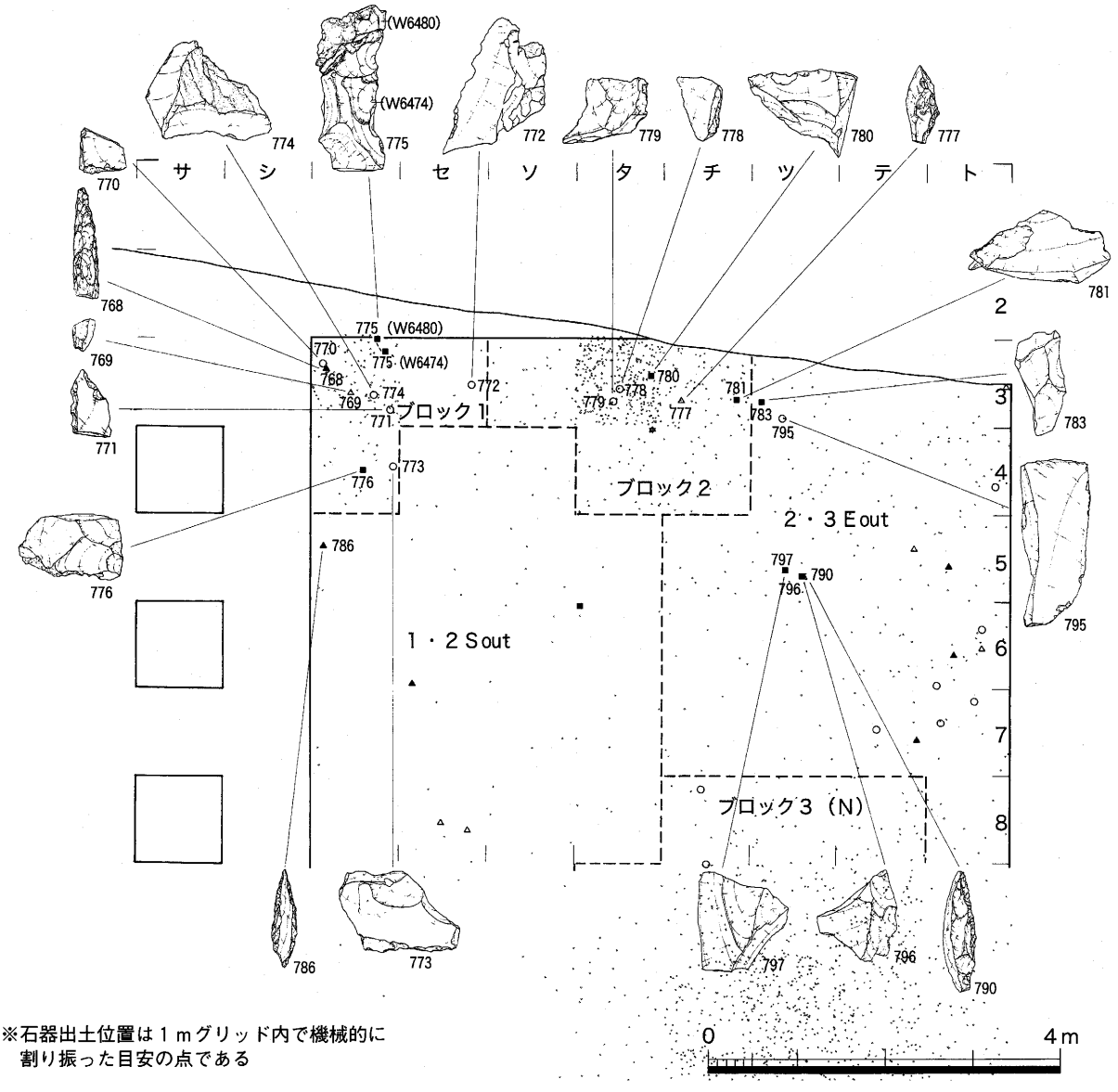
769は一側縁加工のナイフ形石器の半折品。現存長で20㎜ に満たない小形品である。石核底面を均質に取り込む横長剥片を素材とする。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量(g)	遺存状態	断面形	石材	整形加工	接合	グリッド	備考
769	207	206		W6544	18.5×13.0×4.0	0.9	半折	□	An-A	1-S		ス3	

第81表　３ｃ区ブロック１　ナイフ形石器　属性表

加工痕有剥片（第207図　770～774）

加工痕有剥片が５点ある。770は側縁に自然面をもち，打面部が不明瞭な同時割れの不定形剥片を素材として，剥片末端部に５回の連続的な剥離を施すもの。771は剥離角度の浅い横長剥片の打面部に主要剥離面側から４回の剥離を施し，剥片末端側にも２回の浅い剥離を施す。772・773はいずれも不定形な大形剥片の打面部を大きく打撃して除去し，剥片末端に小規模な剥離を施す。774は同様の大形剥片の末端に部分的な剥離を施す。



※石器出土位置は1mグリッド内で機械的に割り振った目安の点である

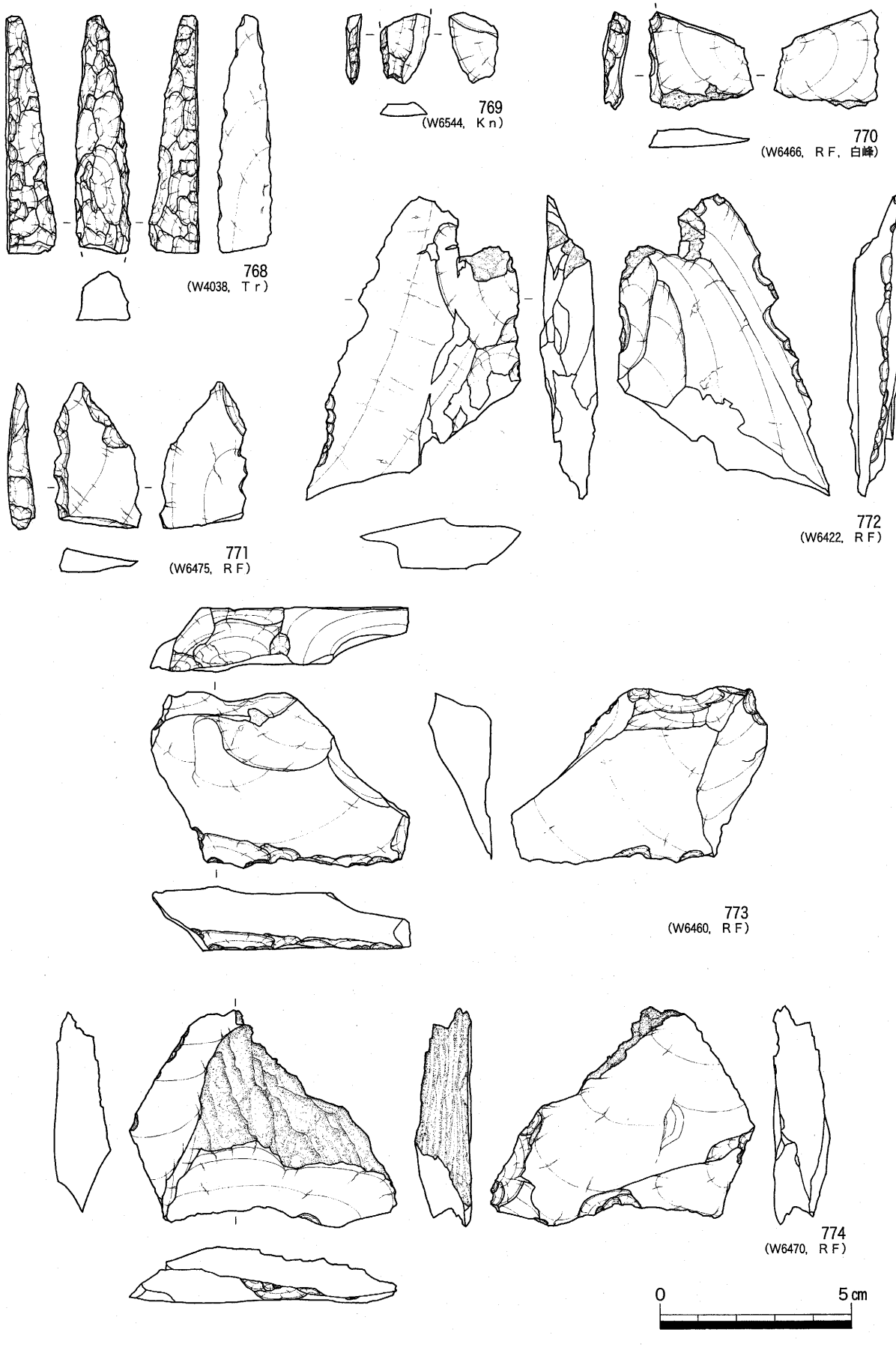
第206図　3c区ブロック1・2　器種別石器分布図～参考図～　(S=1/80)

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（mm）	重量（g）	遺存状態	石材	打面	側縁	末端	接合	グリッド	備考
770	207	206		W6466	27.5×26.0×7.0	4.0	完形	An-A	×	×	○		ス3	スクレイパーか？白峰
771	207	206	46	W6475	23.0×38.5×7.0	5.1	一部欠	An-A	○	○	○		ス3	角錐未製品か？
772	207	206		W6422	56.2×80.0×15.5	44.5	欠損	An-A	○	×	○		セ3	末端ヒンジフラクチャー
773	207	206		W6460	46.6×67.8×17.0	43.9	完形	An-A	○	×	○		ス4	
774	207	206		W6470	57.6×70.0×15.0	45.2	完形	An-A	×	×	○		ス3	

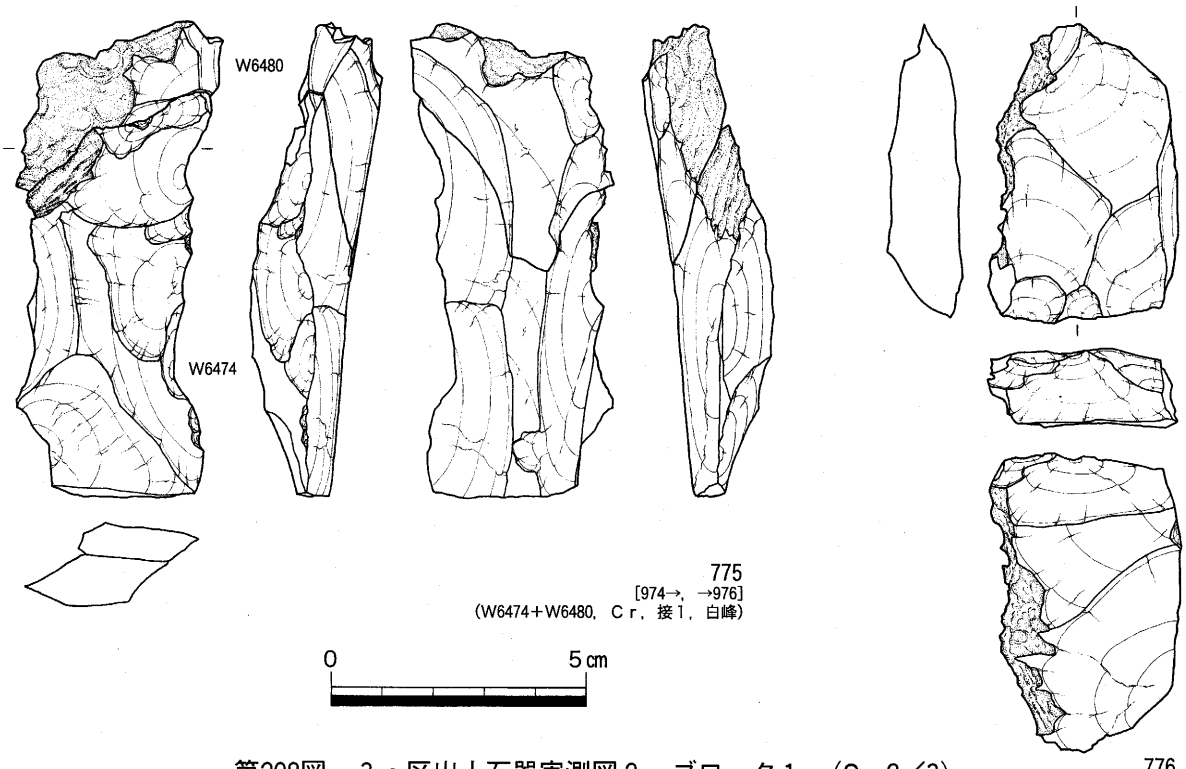
第82表　3c区ブロック1　加工痕有剥片・剥片　属性表

石核（第208図　775・776）

2点出土している。775は976とⅡ種接合する石片の2片からなる。側縁に自然面を留める厚さ約20.0㎜の剥片を素材として，石理に沿った作業面を設定して，粗い打面調整を施しながら打点を左右に大きく移動して並列的に40.0～50.0㎜幅の横長剥片を剥離する石核である。分割後，976の側縁部に幅20.0㎜ほどの軽度の加工が残る。776は打面から側縁にかけて自然面を留める剥片を素材として，その側縁部に作業面を設定し，打面調整を施して幅35.0㎜の横長剥片を剥ぎ取る石核である。



第207図　３ｃ区出土石器実測図１　ブロック１　（S＝2／3）



第208図　3c区出土石器実測図2　ブロック1　(S=2/3)

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（mm）	重量（g）	遺存状態	石材	打面調整	面転移	接合	グリッド	備　考
775	208	206		W6474＋W6480	94.0×41.0×26.5	69.2	完形	An-A	○	○	接1	ス3	分割後の剥離面有 白峰
776	208	206	46	W6459	38.0×59.0×15.5	38.8	完形	An-A	○	×		ス4	

第83表　3c区ブロック1　石核　属性表

（3）3c区ブロック2

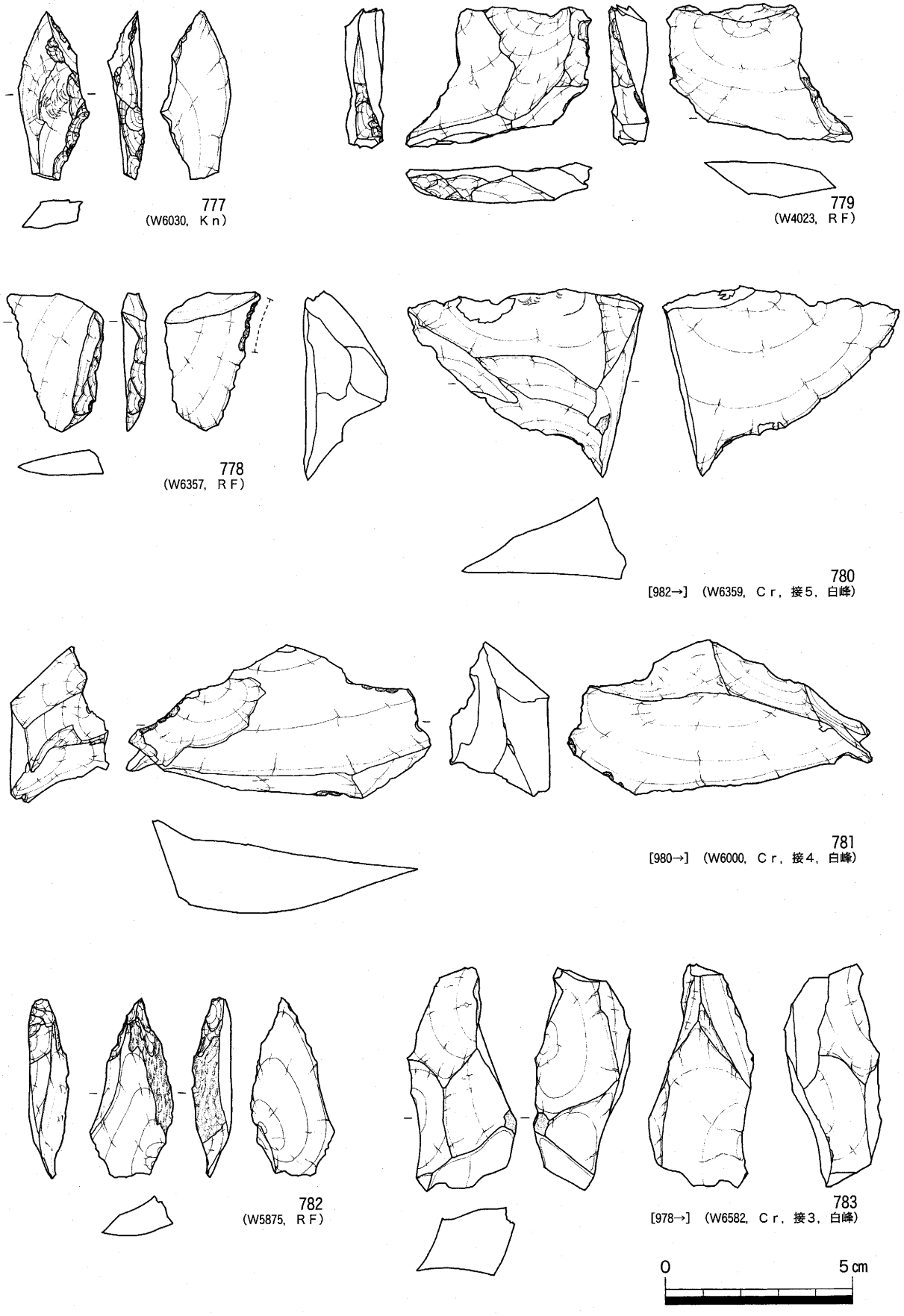
＜石器分布＞

調査区北端のブロックである。1mグリッド5区画で479点の石器が出土した。ただ，当ブロックの北側は未調査でその方向に石器分布が広がっていた可能性が高いと見なければならない。接合関係はブロック内でI種接合3件，ブロック2・3Eoutとの接合が1件ある。主要器種組成は，ナイフ形石器1点，加工痕有剥片2点，石核2点である。高い分布密度は，砕片が83.7%と高率であることに起因する。

器種	点数	比率（全）	比率（定形）	重量（g）	重量比（全）	備考
Tr						石鏃は定形石器比率に含まない
Kn	1	0.2%	20%	5.9	1.1%	
Sc						
RF	2	0.4%	40%	19.9	3.8%	
UF						
Cr	2	0.4%	40%	89.1	17.2%	
Fl	72	15.0%		326.2	62.9%	
Ch	401	83.7%		77.4	14.9%	
RM						
GS						
HS						
Sa	1	0.2%			0.1%	
Po						
合計	479	99.9%	100.0%	519.1	99.9%	

属性項目		数値
面積	(m^2)	5
石器数	(点)	479
分布密度	(点／m^2)	95.8
平均重量	(g)	1.1
定形石器保有率	(%)	1.0
定形石器重量比	(%)	22.1
接合固体数	(点)	8
接合率	(%)	1.7
接合重量	(g)	195.9
接合重量比	(%)	0.4

第84表　3c区ブロック2　石器分布内容総括表



第209図　3c区出土石器実測図3　ブロック2　3c区外縁部　1・2Sout　(S=2／3)

＜主要石器＞

ナイフ形石器（第209図　777）

777はファーストフレイクを素材とする一側縁加工のナイフ形石器。整形加工は下半部が主要剥離面側から施され，中央部は背面側から加工を施した後にその加工面を打面として横位から微細な加工を施す。先端側は素材の縁辺を留め，微細剥離痕が観察できる。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	断面形	石材	整形加工	接合	グリッド	備考
777	209	206	46	W6030	45.0×19.0×9.5	5.9	完形	□	An-A	1-W		チ3	ファーストフレイク素材

第85表　３ｃ区ブロック２　ナイフ形石器　属性表

加工痕有剥片（第209図　778・779）

加工痕有剥片が２点ある。778は剥離角の浅い不定形剥片を素材としてその打面部を連続的な加工で除去し，末端側に微細剥離痕がみられるものである。ナイフ形石器に近い形態をもつ。779は平坦な打面を連続して剥離した不定形剥片を素材として，打面側を除く全周に比較的急角度の加工を施すものである。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	石材	打面	側縁	末端	接合	グリッド	備考
778	209	206		W6357	25.5×36.5×6.5	5.3	半折	An-A	○	×	△		タ3	ナイフ形石器か？
779	209	206		W4023	37.0×49.3×10.3	14.6	完形	An-A	×	○	○		タ3	

第86表　３ｃ区ブロック２　加工痕有剥片・剥片　属性表

石核（第209図　780～781）

２点出土している。780は全面がネガティブな剥離面で覆われる石核である。図の下方では幅40.0㎜ほどの剥片を剥離した面がみられるが，最終作業面となる図の右展開面の大きなネガティブな剥離面には，ファーストフレイクを素材とする横長剥片の底面部が接合する（接５　第246図982）。したがって石核素材を剥離した残核であることがわかる。781は幅80.0㎜，厚さ25.0㎜のやや大きめの横長剥片を素材として，その打面部を作業面に設定し，背面側から並列的に剥片剥離を行うものである。作業面の幅は30.0～40.0㎜大である。接合資料４（980）に帰属する。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	石材	打面調整	面転移	接合	グリッド	備　考
780	209	206		W6359	63.0×50.8×22.0	36.8	ほぼ完形	An-A	×	○	接５	タ3	石核素材残置 白峰
781	209	206		W6000	80.0×41.2×26.2	52.3	完形	An-A	×	○	接４	チ3	白峰

第87表　３ｃ区ブロック２　石核　属性表

（４）３ｃ区ブロック１・２out

＜石器分布＞

調査区北端で隣接するブロック１・２と調査区中央の大型ブロックであるブロック３の中間に位置する散漫な石器分布域である。対象面積45㎡ 内に，306点の石器が分布する。機械的に割り振った石器分布参考図と主要石器の出土位置を参考までに図示している。ブロック２とブロック３を結んだラインから東側がやや石器分布が密で，西側は散漫である。定形石器は特に偏ることなく，散漫に分布する。接合関係は対象範囲内でⅠ種接合６件，Ⅱ種接合１件，ブロック２との接合が１点，ブロック３との接合が１点ある。器種組成は，角錐状石器６点，ナイフ形石器５点，加工痕有剥片４点，使用痕有剥片３点，石核４点である。

器種	点数	比率（全）	比率（定形）	重量（g）	重量比（全）	備考
Tr	6	2.0%	27.3%	25.4	3.1%	（ ）はⅡ種接合片で外数とした
Kn	5	1.6%	22.7%	28.6	3.5%	
Sc						
RF	4	1.3%	18.2%	18.6	2.3%	
UF	3	1.0%	13.6%	67.1	8.3%	
Cr	4	1.3%	18.2%	141.8	27.3%	
Fl	91（2）	30.4%		402.6	49.7%	
Ch	191	62.4%		45.9	5.7%	
RM						
GS						
HS						
Sa						
Po						
合計	304（306）	100.0%	100.0%	809.0	99.9%	

第88表　３ｃ区ブロック１・２out　石器分布内容総括表

＜主要石器＞

角錐状石器（第211図　783～788）

784は長さ46.0㎜ のやや小振りの二面加工品。剥片の主要剥離面を裏面に設定し，周縁および稜上から整形加工を行う。基部，先端ともに尖る。785は素材面を留めない三面加工品。整形加工は粗い。786は左側に偏って剥離した厚さ7.0㎜ の剥片を素材とする。主要剥離面を裏面に設定し，主剥離面側から整形加工し先端を尖らせる。裏面基部側に浅い加工が２面ある。787は二面加工角錐状石器を稜上から整形する際に生じた剥片で現存長55.0㎜。788も同様に整形時に生じた剥片で，素材は厚くかつ裏面の湾曲が著しい個体と推定できる。789は断面台形で小形の角錐状石器。主要剥離面側および左側縁部から整形加工が行われる。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	断面形	石材	整形加工	接合	グリッド	備考
784	211	210	46	W4021	45.5×12.5×10.0	4.3	完形	△	An-A	2-W		ト５	
785	211	210		W4001	34.5×12.0×14.3	4.0	半折	△	An-A	3-W		ト６	
786	211	210	46	W4037	56.0×14.5×7.0	4.9	完形	□	An-A	2-S		ス５	
787	211	210		W4003	54.5×15.0×12.0	2.9	先端のみ	△	An-A	2-W		テ７	調整剥片
788	211	210		W4024	45.0×20.2×9.5	6.3	先端のみ	△	An-A	2-W		セ９	調整剥片
789	211	210		W6410	25.0×15.0×8.0	3.0	半折	□	An-A	2-W		セ６	

第89表　３ｃ区ブロック１・２out　角錐状石器　属性表

ナイフ形石器（790～794）

５点出土している。790は石核底面を均等に取り込む横長剥片を素材とし，打瘤を背面側から打撃して除去した後，主要剥離面側から細かな整形加工を施す一側縁加工品である。791は背面に石核打面および打撃痕を留めたファーストフレイクを素材とし，先端および基部を折損する。792は石核底面に複数の剥離面を有する横長剥片を素材とする一側縁加工品。粗い整形加工で素材剥片の打瘤を除去する。整形加工初期段階の折損品であろう。793･794は長さ30.0㎜ サイズの小形品。793は求心状に剥片剥離が行われる石核から剥離された不定形剥片を素材として，打面部付近に表裏交互に浅い角度の整形加工を施す。794は不定形剥片の半折品を素材として，折面を基部に設定し基部付近のみ両側縁に細かな整形加工を施すものである。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	断面形	石材	整形加工	接合	グリッド	備考
790	211	210	46	W4022	69.0×19.0×11.0	9.4	完形	□	An-A	1-S		ツ５	白峰
791	211	210		W6404	37.5×20.0×14.5	9.1	先基折	□	An-A	1-S		セ８	ファーストフレイク素材
792	211	210		W6402	23.0×26.0×9.4	6.1	先基折	□	An-A	1-S		セ８	
793	211	210		W4085	30.0×16.0×5.0	1.8	完形	△	An-A	1-W		ト６	
794	211	210		W5814	29.0×13.5×6.5	2.2	完形	□	An-A	2-S		テ５	

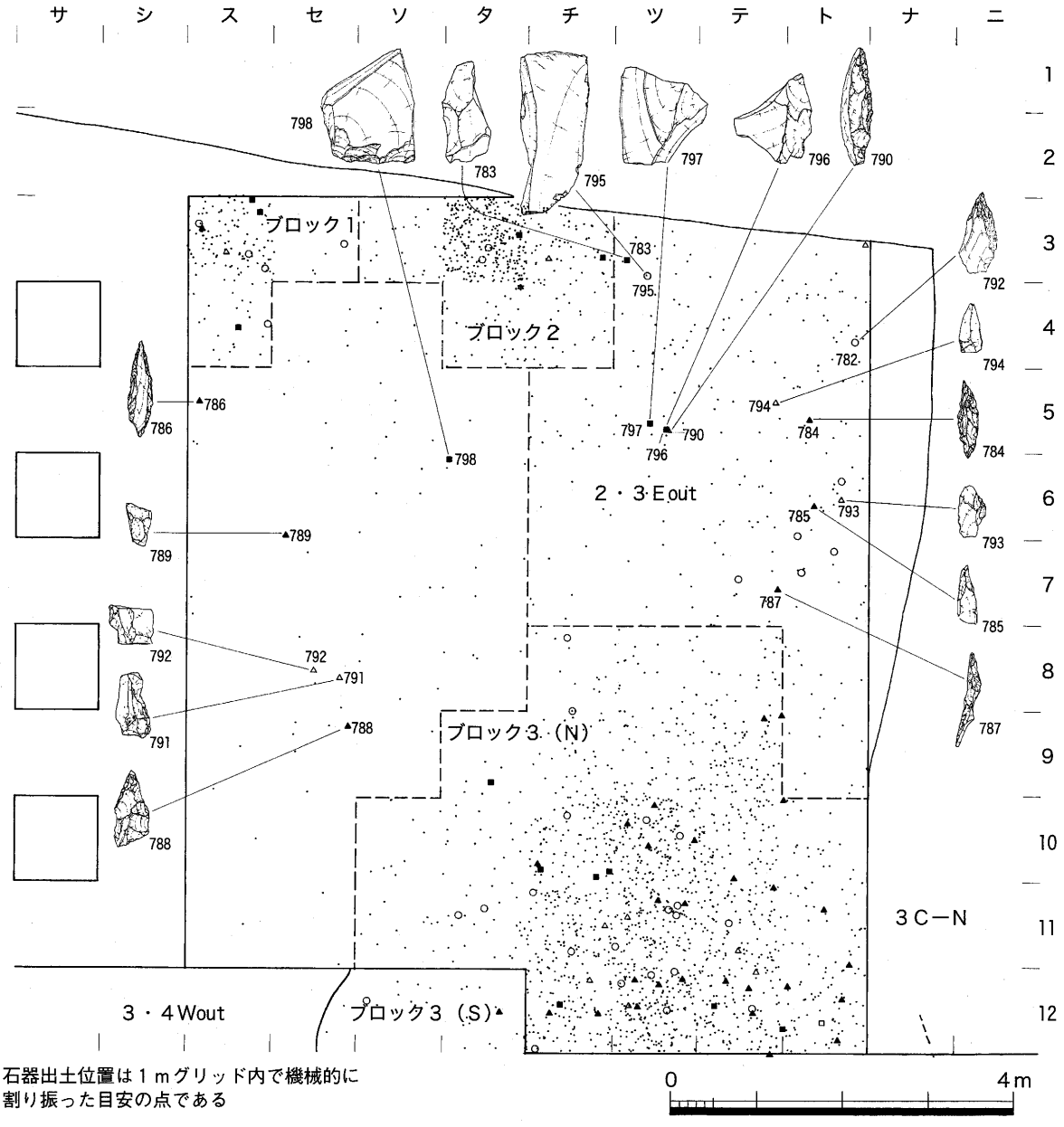
第90表　３ｃ区ブロック１・２out　ナイフ形石器　属性表

加工痕有剥片（第211図　782・795，第212図　796）

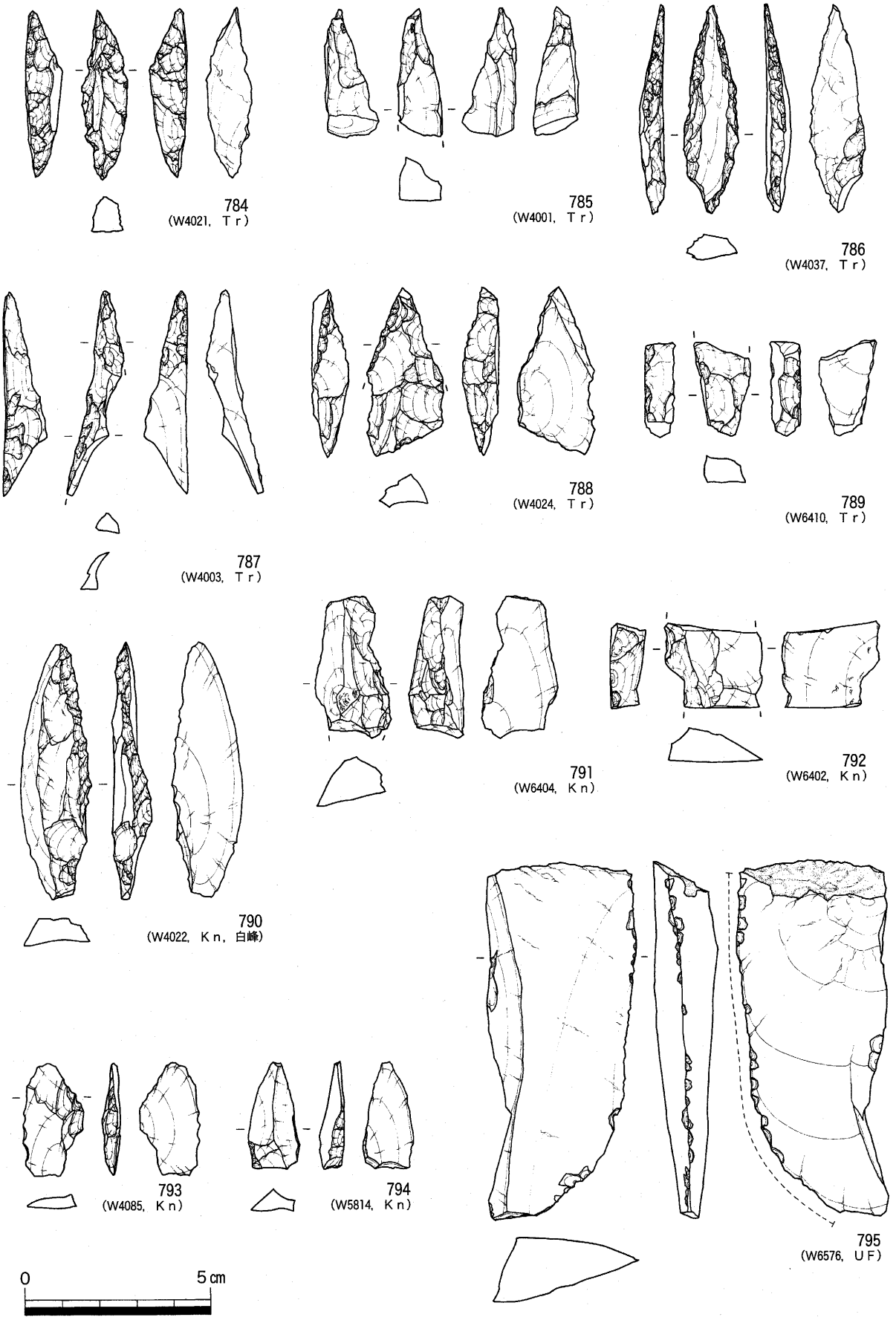
加工痕有剥片が２点，使用痕有剥片が１点ある。782は側縁に自然面を留めた不定形剥片の一端に，先端部を作出する加工を施すもの。小形角錐状石器の初期整形段階の可能性も考えられる。796は大形剥片の打面部を，主要剥離面側から大きく２回打撃して整形を加えるものである。石核の可能性もある。795は自然面を打面とする縦長状の大形剥片である。側縁部に微細剥離痕が巡る。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	石材	打面	側縁	末端	接合	グリッド	備考
782	209	210		W5875	22.2×47.5×10.7	7.5	完形	An-A	×	○	○		ト４	角錐未製品か？
795	211	210		W6576	95.0×40.0×17.0	58.5	完形	An-A	×	△	×		ツ３	
796	212	210		W5835	51.6×45.0×27.0	43.5	折損	An-A	○	×	×		ツ５	石核か？

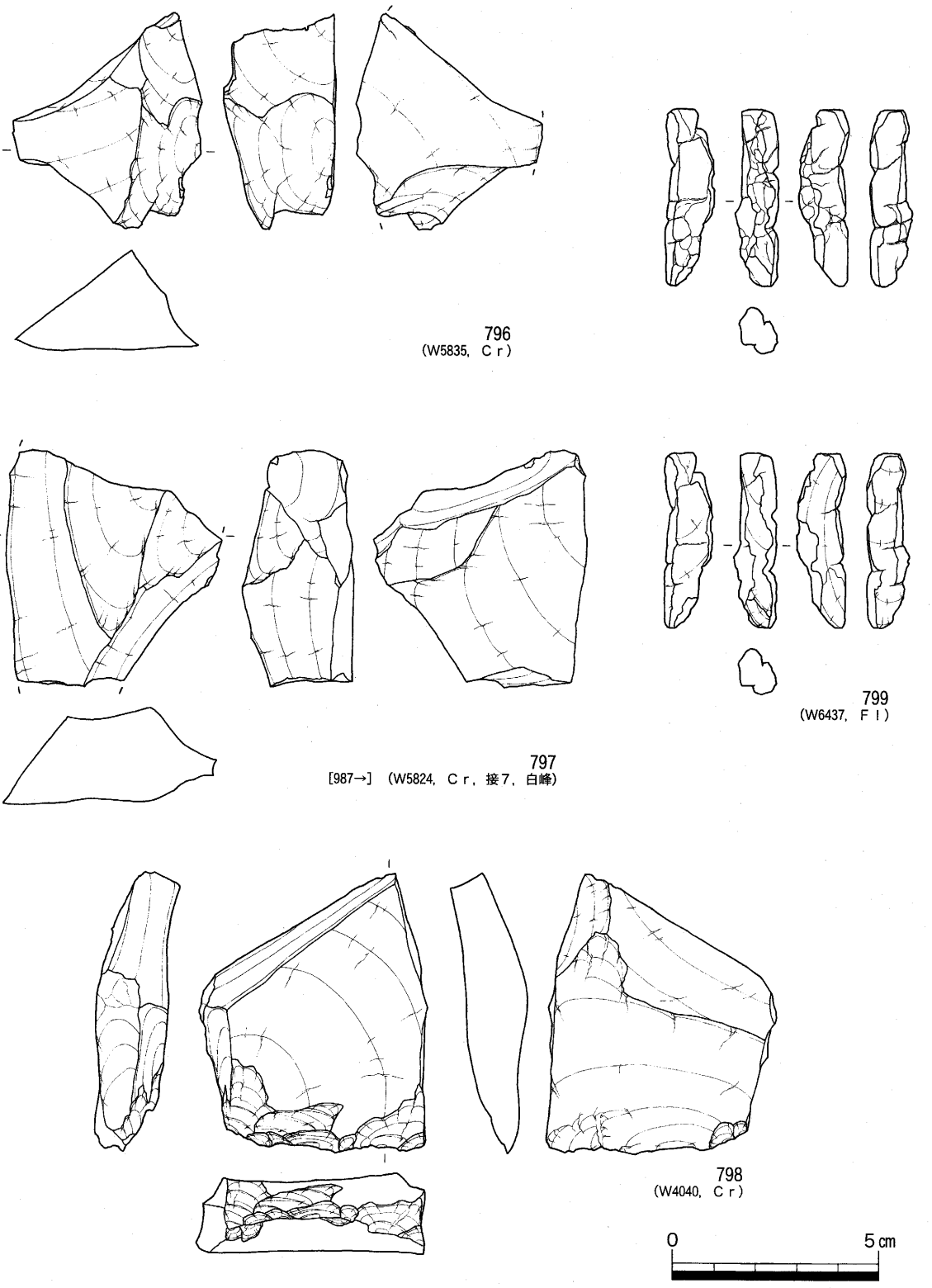
第91表　３ｃ区ブロック１・２out　加工痕有剥片・使用痕有剥片　属性表



第210図　３ｃ区北側外縁部　器種別石器分布図～参考図～　（S＝1／80）



第211図　3ｃ区出土石器実測図４　3ｃ区外縁部　1・2Sout　2・3Eout　(S=2／3)



第212図　3c区出土石器実測図5　3c区外縁部　1・2Sout　2・3Eout　(S=2/3)

石核（第209図　783，第212図　797・798）

797は厚さ30.0㎜ を超える大形剥片を素材として，不定方向から打撃を加えた石核である。接合資料7に所属し，不定形剥片988が接合する（第246図）。最終作業面は図上面の小口面である。剥離角が直角に近くネガティブな打瘤も見らない。折損面に類似する面形状である。798は厚さ20.0㎜ 以上をはかる板状の石核である。小口部の一端を作業面に設定し，細かな打面調整を施して長さ40.0㎜，幅50.0㎜ ほどの剥片を得る。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	石材	打面調整	面転移	接合	グリッド	備　考
783	209	210		W6582	59.2×28.0×25.0	33.3	半折	An-A			接3	ツ3	白峰
797	212	210		W5824	57.0×51.0×27.0	65.0	半折	An-A	×	○	接7	ツ5	白峰
798	212	210		W4040	54.2×67.2×19.5	79.0	完形	An-A	○	×		タ6	

第92表　３ｃ区ブロック１　石核　属性表

受熱剥片（第212図　799，写真図版50）

799はほぼ全面を受熱による亀裂に覆われた方柱状の剥片である。受熱による折損が著しく，剥片の元の形状は明らかでない。

（５）３ｃ区ブロック３

＜石器分布＞

調査区中央東よりに位置する大形で密集型の石器分布域である。北側調査区と南側調査区にまたがり，対象面積69㎡ 内に3,811点の石器が分布する。分布密度は55.2点と高い。ただし，微細な砕片が多く，平均重量は1.9ｇに留まる。

器種別分布図を北と南で分けて提示した。北側の石器分布は１ｍグリッドごとに機械的に割り振った石器分布参考図である。南側の石器分布は原位置を示す。南側では定形器種の分布にいくつかのまとまりが認められる。

接合関係は対象範囲内でⅠ種接合20件，Ⅱ種接合23件，ブロック４との接合が２件，２・３Ｅoutとの接合が２件ある。

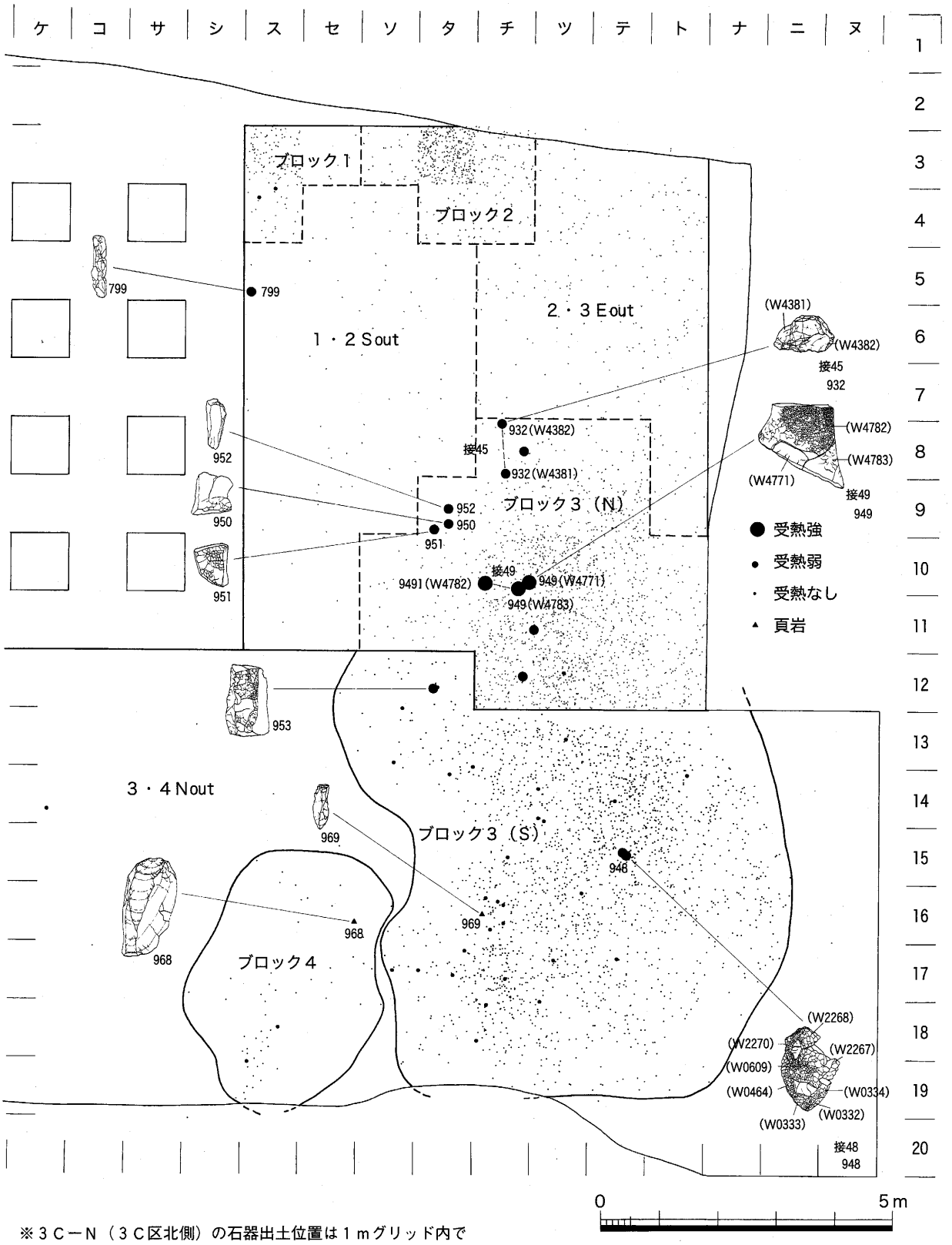
そのほか，石器の表面に細かな亀裂が生じた受熱石器がまとまって分布する地点がある。

器種組成は，角錐状石器64点，ナイフ形石器14点，スクレイパー４点，加工痕有剥片48点，使用痕有剥片６点，石核13点である。

器種	点数	比率（全）	比率（定形）	重量（g）	重量比（全）	備考
Tr	64(4)	1.8%	43.0%	553.5	7.6%	（ ）はⅡ種接合片で外数とした
Kn	14	0.4%	9.4%	90.0	1.2%	
Sc	4	0.1%	2.7%	57.0	0.8%	
RF	48(7)	1.5%	32.2%	945.1	13.0%	
UF	6	0.2%	4.0%	45.8	0.6%	
Cr	13(10)	0.6%	8.7%	784.0	10.7%	
Fl	1169(11)	31.0%		4166.0	56.7%	
Ch	2461	64.06%		660.5	9.0%	
RM						
GS						
HS						
Sa						
Po						
合計	3779(32)	100.2%	100.0%	7301.4	100%	

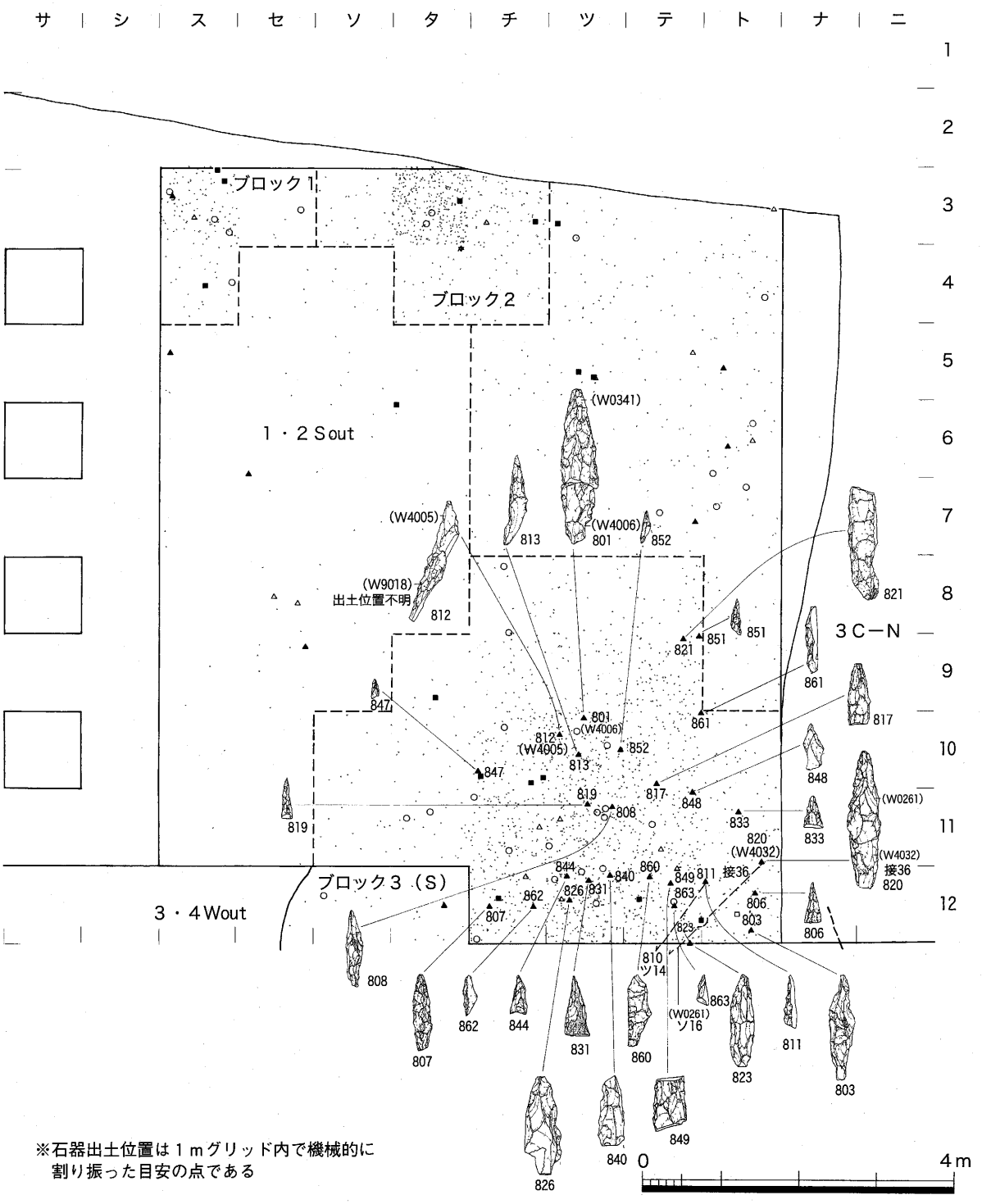
属性項目		数値
面積	(㎡)	69
石器数	(点)	3811
分布密度	(点／㎡)	55.2
平均重量	(g)	1.9
定形石器保有率	(%)	4.5
定形石器重量比	(%)	33.9
接合固体数	(点)	108
接合率	(%)	2.8
接合重量	(g)	1925.5
接合重量比	(%)	0.3

第93表　３ｃ区ブロック３　石器分布内容総括表



※３Ｃ－Ｎ（３Ｃ区北側）の石器出土位置は１ｍグリッド内で
機械的に割り振った目安の点である

第213図　３ｃ区ブロック３　受熱石器・頁岩製石器分布図　（S＝1／100）

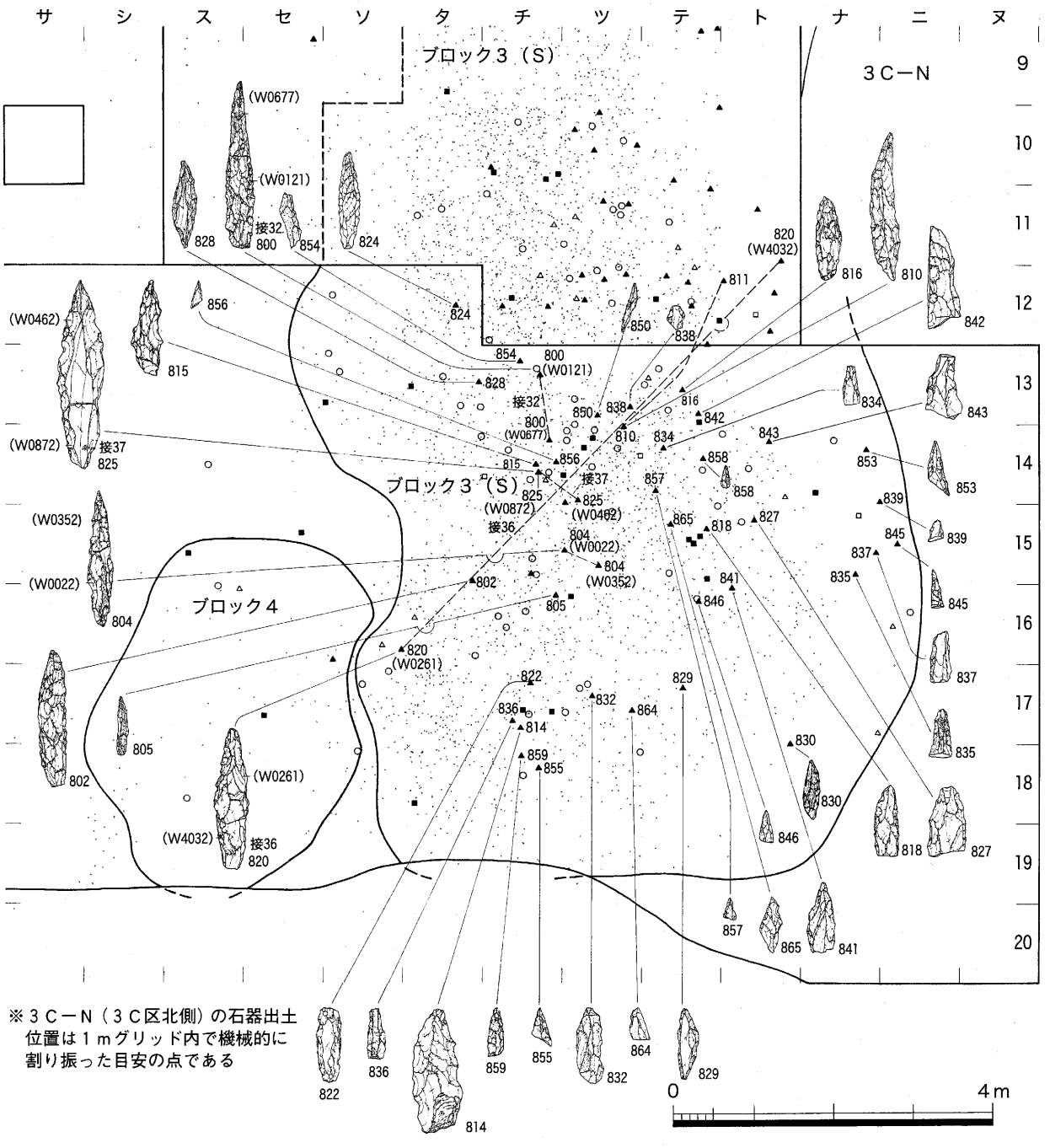


第214図　3c区ブロック3　器種別石器分布図　1　～参考図～　北側Tr　(S=1／80)

〈主要石器〉

角錐状石器（第216図　800～第221図　865）

52点の角錐状石器がある。これに調整剥片を加えて，合計66点の石器を提示している。完形品もしくは9割以上の残存率と考えられるものとして19個体ある。完形品の長さは50.0㎜以下の小形品が5点，55.0～90.0㎜の中形が11点，100.0㎜を越える大形が3点ある。このほか，整形加工初期段階の大形品が3点ある。



第215図　３ｃ区ブロック３　器種別石器分布図　２　南側Ｔｒ　（S＝1／80）

器面に施される整形加工は，調整剥片14点を除く52点のうち，三面加工が７点，二面加工が45点である。出土数としては二面加工が圧倒的に卓越する。また，三面加工品の多くは加工部位が基部あるいは先端部に部分的にみられるのみであり，三面加工が多い３ａ区エリア１・２の角錐状石器と対照的である。稜上加工は三面加工のうち３点，二面加工のうち27点にみられる。三面加工品の稜上加工品がやや他と比べて少ない傾向がある。

素材については，整形加工が顕著なために判断する材料が少ないが，石理に沿って剥がされた大形剥片を素材に用いて，主要剥離面を裏面に設定し，周縁を加工して仕上げるものが多い。そのほか，裏面に複数のネガ面をもつものは，石核を素材とした可能性がある。また，表面・基部に自然面を留めるも

のが比較的目立ち，裏面に自然面を留めるものはみられない。形態的には身幅に対して甲高のものが多く，また側面形で最大厚部分が器体中程からやや下の位置にあるものが多い点などが特徴である。

800～824は稜上加工が施される角錐状石器のうち，遺存状態が良好な一群である。

800は基部に自然面を留め，裏面には素材剥片の主要剥離面を留める。剥離面の切り合いを観察すると，まず稜上から幅10.0～20.0㎜単位の粗い整形加工を施し，その後周縁に幅5.0～7.0㎜ほどの細かい単位で整形加工を施す。最後に先端部付近の細かい稜上加工を施して全体の整形を仕上げたものと考えられる。形態的には身幅に対して甲高な点が特徴である。

801は厚みのある大形剥片の主要剥離面を裏面に設定し，周縁及び稜上に整形加工を施す。断面三角形で甲高である。802は裏面に複数のネガティブな剥離面を留める。周縁及び稜上に整形加工を施すもので，基部がわずかに折損する。803は捻れのある素材剥片の主要剥離面を裏面に設定し，周縁及び稜上にやや粗い整形加工を施す。素材剥片の打瘤部分が捻れた形状を呈すために，正面形の先端部が緩やかなＳ字をなす。804は背部下半に自然面を留める。上半部の稜上加工は，周縁の裏面からの整形加工面に先行する面が多い。807・808は50.0㎜弱の小形品で，前者は二面加工，後者は三面加工である。いずれにも稜上加工が認められる。808の裏面加工は先端部にのみ施される。

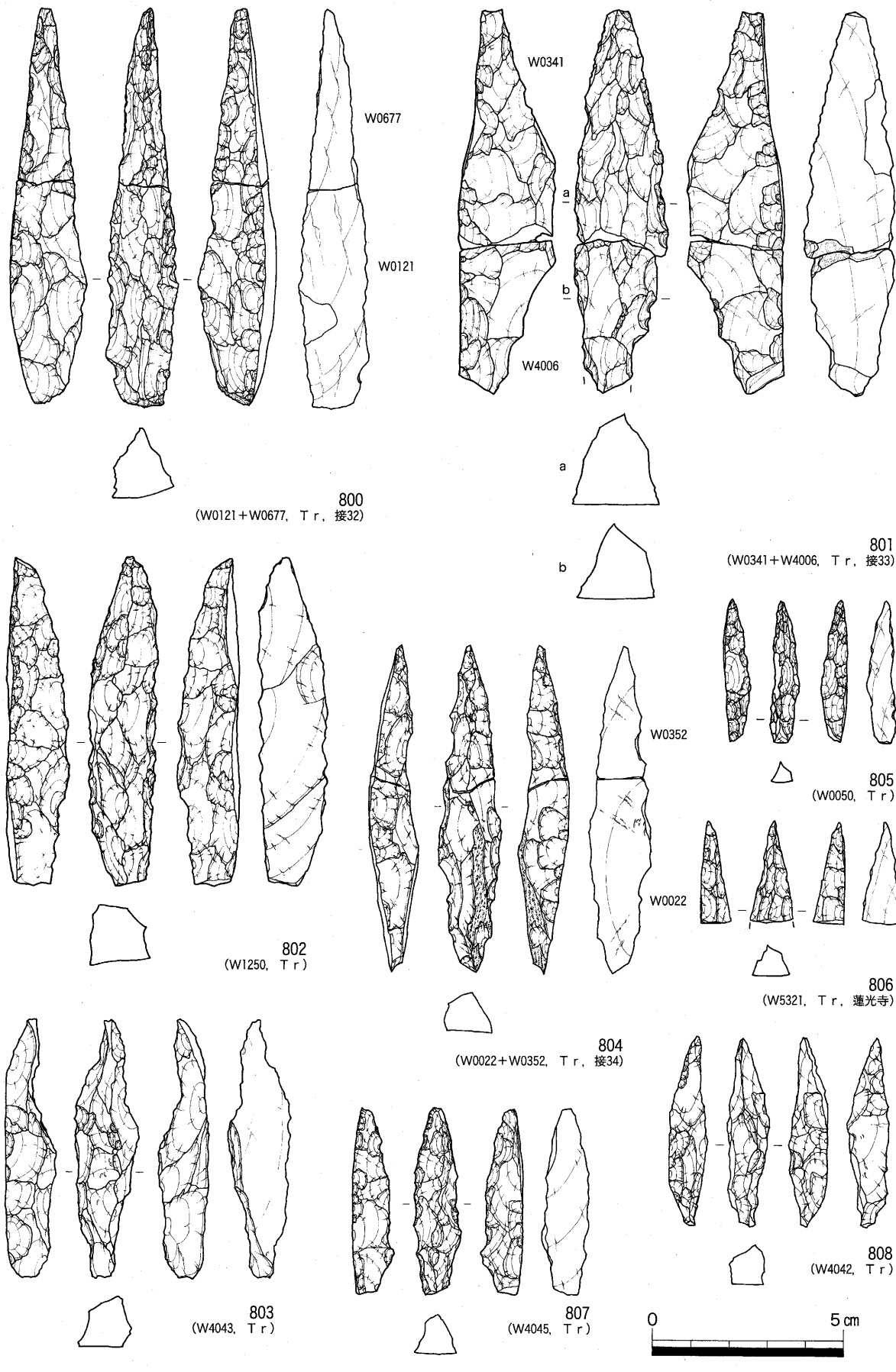
番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	断面形	石材	整形加工	接合	グリッド	備考
800	216	215	46	W0121＋W0677	103.0×19.0×20.0	25.8	完形	△	An-A	2-W	接32	チ14・チ13	概報12
801	216	214 215	46	W0341＋W4006	100.0×24.0×25.0	47.5	完形	△	An-A	2-W	接33	ツ10	
802	216	215		W1250	85.5×18.0×16.0	25.5	基部折	△	An-A	2-W		タ15	複数面裏面
803	216	214		W4043	67.5×16.5×13.0	11.3	完形	△	An-A	2-W		ト12	
804	216	215		W0022＋W0352	85.0×16.5×13.0	13.0	完形	△	An-A	2-W	接34	ツ15	表面に自然面
805	216	215	46	W0050	37.0×8.0×7.0	1.7	完形	△	An-A	2-W		チ16	概報１
806	216	214		W5321	26.5×11.0×8.0	1.6	先端のみ	△	An-A	2-W		ト12	蓮光寺
807	216	214	46	W4045	48.2×12.2×11.0	5.6	基部折	△	An-C	2-W		チ12	
808	216	214	46	W4042	49.0×11.0×10.0	4.6	完形	△	An-A	3-W		ツ11	裏面加工は先端のみ

第94表　３ｃ区ブロック３　角錐状石器　属性表　１

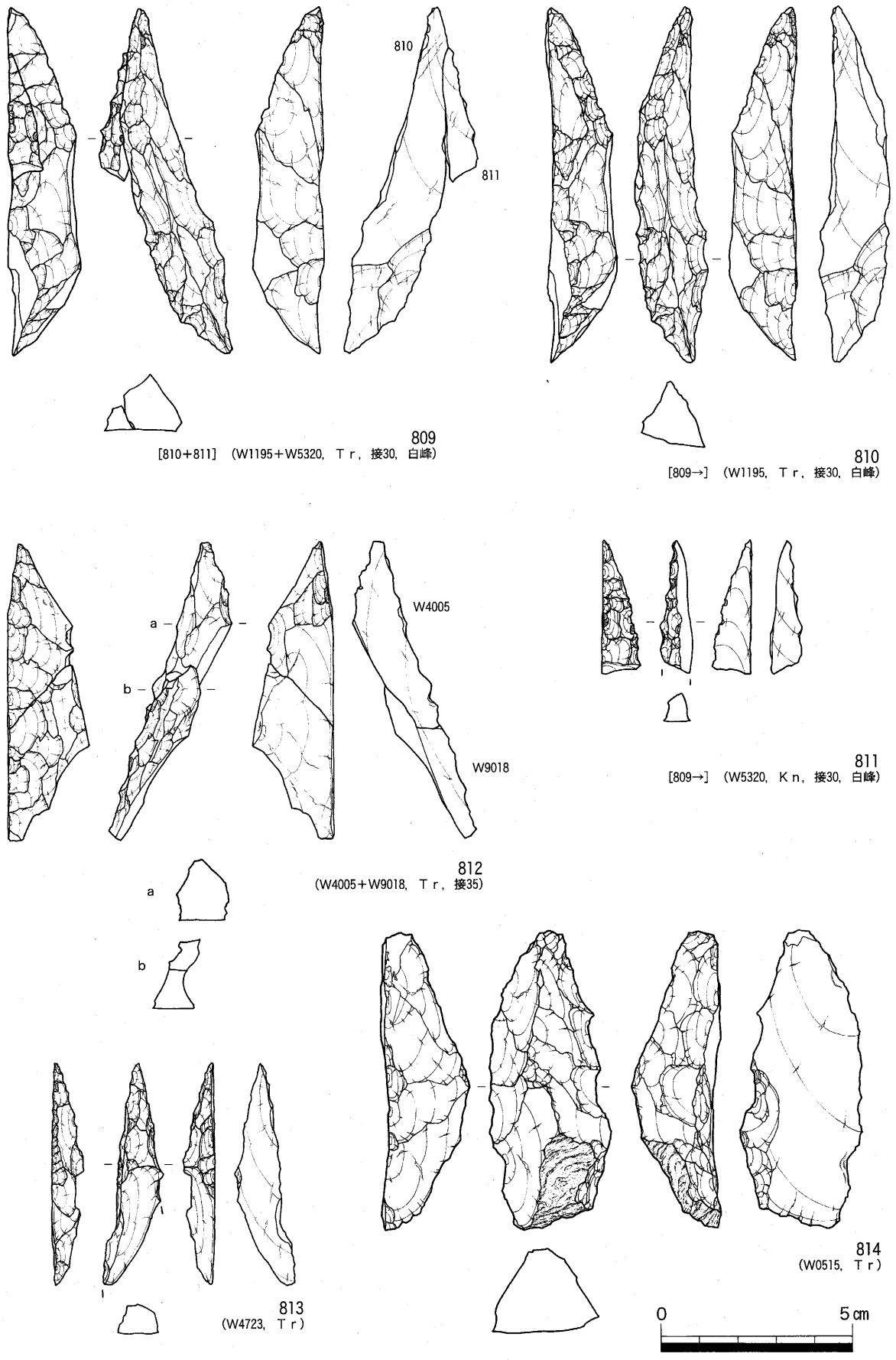
809は角錐状石器（810）とその調整剥片（811）が接合することにより，整形加工初期段階の先端部付近の形状が判明する接合体である。先端角は30度をはかり，基部に向かっての開きが大きい。裏面先端部側の大きな剥離面は緩やかな凹面を呈しており，ネガティブな剥離面と推定される。また裏面の図下半部にみられる２枚の剥離面もネガ面である。したがって，石核かあるいは平坦な石核面を分厚く剥離した大形剥片を素材としているものと考えられる。整形加工は正面右側縁にみられるように，裏面から幅10～20㎜の粗い加工を施した後，先端部を稜上から打撃して整形する。調整剥片（811）は先端部付近の稜上打撃によって生じた大きめの剥片で，これにより正面左側縁の角度が乱れ，器体主軸の変更が行われたと言える。左側縁の再加工を経た角錐状石器（810）は，先端部が器体主軸変更前の形状を留めるため，先端部のみ正面右に湾曲する。右側縁は809の段階から新たな整形加工はみられない。

812は，先述の809とほぼ同サイズで同様の先端角をもつ整形加工初期段階の剥片接合資料である。ポジティブな大きな剥離面を裏面に設定し，裏面側から側面の整形加工を行って先端部を整え，さらに先端部付近を稜上から加工して細身化をはかる。稜上からの打撃時に同時割れし，2片に分割する。うち１片に先端部が取り込まれる。813は稜上からの打撃によって先端部を大きく取り込んで剥離した整形加工に伴う角錐状石器調整剥片である。先端角が小さく，細身化が進行した段階のもの。

814は角錐状石器の整形加工初期段階の製品である。背面の一部に自然面を留める不定形な横長剥片を素材に用いて，主要剥離面側および稜上から粗い整形加工をほぼ全周に施す。



第216図　３ｃ区出土石器実測図６　ブロック３　Tr　(S＝2／3)



第217図　3c区出土石器実測図7　ブロック3　Tr　(S=2/3)

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（mm）	重量（g）	遺存状態	断面形	石材	整形加工	接合	グリッド	備考
809	217	215	47	W1195＋W5320	90.5×34.5×18.5	26.4	先端のみ	△	An-A	2-W	接30	ツ14	810と811の接合状態 複数面裏面　白峰
810	217	215	47	W1195	92.5×19.0×18.0	24.5	完形	△	An-A	2-W	接30	ツ14	809折損後の再加工白峰
811	217	214	47	W5320	34.5×8.2×10.0	1.9	半折	-	An-A	2-W	接30	ト12	809の調整剥片，剥離後側縁に整形加工あり 白峰
812	217	214	47	W4005＋W9018	77.2×32.0×21.0	16.5	-	△	An-A	2-W	接35	ツ10	先端部を有する調整剥片
813	217	214		W4723	57.0×16.0×8.0	3.6	-	△	An-A	2-W		ツ10	先端部を有する調整剥片
814	217	215	47	W0515	77.0×31.5×23.0	45.5	完形	△	An-A	3-W		チ17	裏面加工は基部側のみ

第95表　3c区ブロック3　角錐状石器　属性表　2

815・816は長さ50.0～60.0㎜ で断面三角形を呈する角錐状石器完形品である。身幅に対して甲高な断面形態をもつ。815は最大幅，最大高部位が器体下部にあり先端に向かって細くなる。また，816は最大後部位が器体上半にあり，先端部がやや分厚めの形状である。稜上加工はいずれも器体中央から下部にかけて施される。817･818もほぼ同サイズと考えられる折損品である。818の稜上加工は器体中程にみられる。819は小形細身の角錐状石器折損品。稜上加工が全体に施され，身幅に対して甲高である。

820・821・824は断面四角形の角錐状石器。前二者は長さ90.0㎜ サイズ，後者は長さ60.0㎜ サイズである。いずれも裏面は１枚の平坦な剥離面で，裏面の加工はみられない。最終加工となる周縁の整形加工に先行して，側縁を打面とする横位の稜上（表面）加工を施し，断面の上辺部を整形する。820の基部左側縁と，821の右側縁はさらに上辺を打面として整形加工を施しており，特に821の右側縁はナイフ形石器の対向調整と同様な形態を有する。

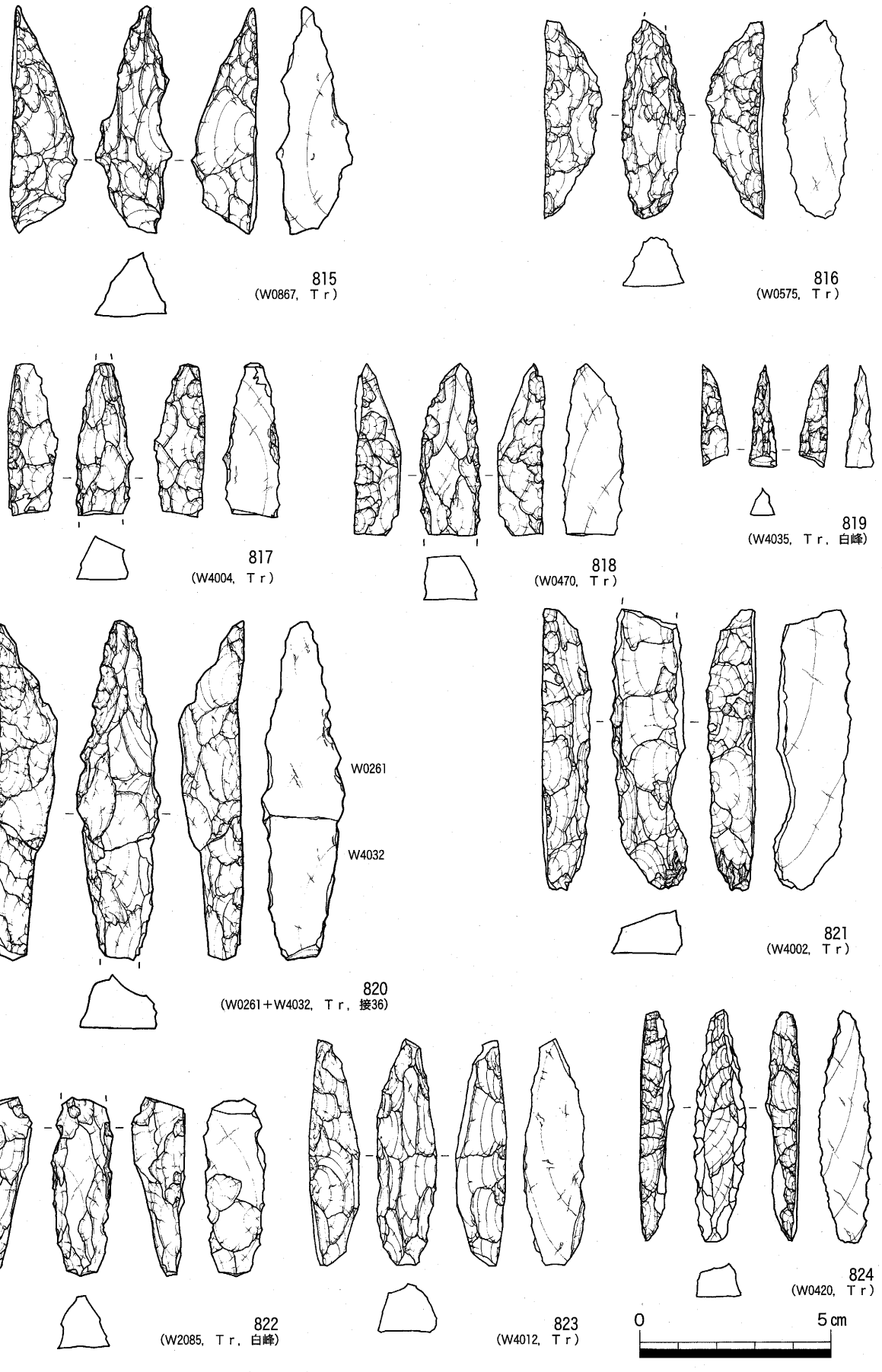
822･823は長さ60.0㎜ サイズの角錐状石器である。822は若干の裏面加工が施される三面加工品であるが，施される部位は基部側の狭い範囲のみである。また稜上加工も加工量は僅かである。823は先端部にのみ稜上加工を施す二面加工品。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（mm）	重量（g）	遺存状態	断面形	石材	整形加工	接合	グリッド	備考
815	218	215	47	W0867	59.0×19.5×17.0	14.2	完形	△	An-A	2-W		チ14	稜上加工は基部側のみ
816	218	215	47	W0575	52.0×16.5×15.5	10.5	完形	△	An-A	2-W		テ13	
817	218	214		W4004	40.0×14.5×13.0	7.6	先基折	△	An-A	2-W		テ10	
818	218	215		W0470	44.5×15.5×12.0	9.3	半折	△･□	An-A	2-W		テ15	稜上加工は図下部のみ
819	218	214		W4035	26.5×7.3×7.2	0.9	半折	△	An-A	2-W		ツ11	細身　白峰
820	218	215	47	W0261＋W4032	88.0×21.5×16.5	28.4	完形	□	An-A	2-W		ソ16･ト11	稜上加工は基部側のみ
821	218	214		W4002	73.5×20.0×12.5	20.8	先端折	□	An-A	2-W		テ9	横位の稜上加工 基部に自然面残置
822	218	215		W2085	47.0×15.5×14.0	10.9	半折	△･□	An-A	3-W		チ17	稜上加工・裏面加工とも部分的　白峰
823	218	214		W4012	58.5×15.2×12.5	12.6	先端折	△	An-A	2-W		テ12	稜上加工は先端のみ
824	218	215	47	W0420	60.5×13.0×9.0	7.3	完形	□	An-A	2-W		タ12	横位の稜上加工

第96表　3c区ブロック3　角錐状石器　属性表　3

825～841は稜上加工が施されない角錐状石器のうち，遺存状態が良好な一群である。

825は長さ約120.0㎜ サイズの大形の三面加工品である。大形の横長剥片の主要剥離面を裏面に，石核底面と目される平坦剥離面を表面に設定し，器体全周縁を裏面側から加工して整形する。したがって断面形状は四角形となる。素材となった剥片の打点は，主要剥離面のリング形状から器体上半側に想定される。そのため最大厚部位は器体上半にあり，また加工量の大きな粗い整形加工も器体上部に顕著である。一方，素材剥片の末端となる正面左側縁には加工量の少ない細かな整形加工が施され，基部には裏面加工もみられる。これは素材剥片の末端形状の部分整形を目的としたものと考えられ，裏面加工は基部以外には及ばない。



第218図　3c区出土石器実測図8　ブロック3　Tr　(S=2/3)

826は現存長で65.0㎜をはかる大形の調整剥片である。先端の大部分が背面に取り込まれ，整形途上の角錐状石器の形状が推定できる。裏面は平坦な1枚の剥離面で，背面にみられる整形加工は裏面側から施される。断面形状は身幅に対して甲高な形態。

827は角錐状石器先端部片である。現存長で45.0㎜をはかり大形品と推定できる。裏面は平坦な1枚の剥離面で，打面側と想定される正面左側縁の整形加工がやや粗い。

828～830は長さ35.0～55.0㎜サイズの小形の角錐状石器完形品である。828は素材剥片の打瘤部除去と目される裏面加工を施した後，周縁を細かく整形加工する。正面器体中程の剥離面は素材剥片の剥離方向とは180度異なる剥離方向をもつ素材時の先行剥離面と考えられる。829･830は小形の横長剥片の全周縁部を主要剥離面側から加工して整形する断面四角形の角錐状石器である。正面器体中程に素材剥片の背面あるいは自然面を留めており，整形加工の加工量が少ないことを示す。

831～839は稜上加工を施さない角錐状石器の折損品で，器体表面に素材剥片の背面形状を大きく留めるものである。いずれも周辺部の整形加工の加工量が少ない点が特徴である。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	断面形	石材	整形加工	接合	グリッド	備考
825	219	215	47	W0462＋W0872	117.5×30.0×20.0	56.2	完形	□	An-A	3-S	接37	チ14･ツ14	裏面加工は基部のみ 国分寺
826	219	214		W4017	62.3×24.0×24.0	23.3	－	□	An-A	2-S		ツ12	先端部を有する調整剥片
827	219	215		W0577	44.5×24.0×16.5	18.1	先端のみ	□	An-A	2-S		ト15	基部か？
828	219	215		W0306	54.5×15.5×10.5	7.6	完形	△	An-A	3-S		タ13	裏面加工は基部のみ
829	219	215		W2098	44.5×13.5×8.0	4.3	完形	□	An-C	2-S		テ17	風化顕著 金山東
830	219	215		W0706	36.5×11.0×7.5	2.8	完形	□	An-C	2-S		ト18	表面に自然面残置
831	219	214		W4019	38.0×16.0×10.0	4.9	半折	□	An-A	2-S		ツ12	表面に自然面残置
832	219	215		W2090	47.3×17.5×20.0	13.9	半折	△	An-A	2-S		ツ17	表面に自然面残置 白峰
833	219	214		W4036	20.5×13.0×5.0	1.0	先端のみ	□	An-A	2-S		ト11	白峰
834	219	215		W0088	24.0×10.5×6.0	1.7	半折	□	An-A	2-S		テ14	白峰

第97表　3c区ブロック3　角錐状石器　属性表　4

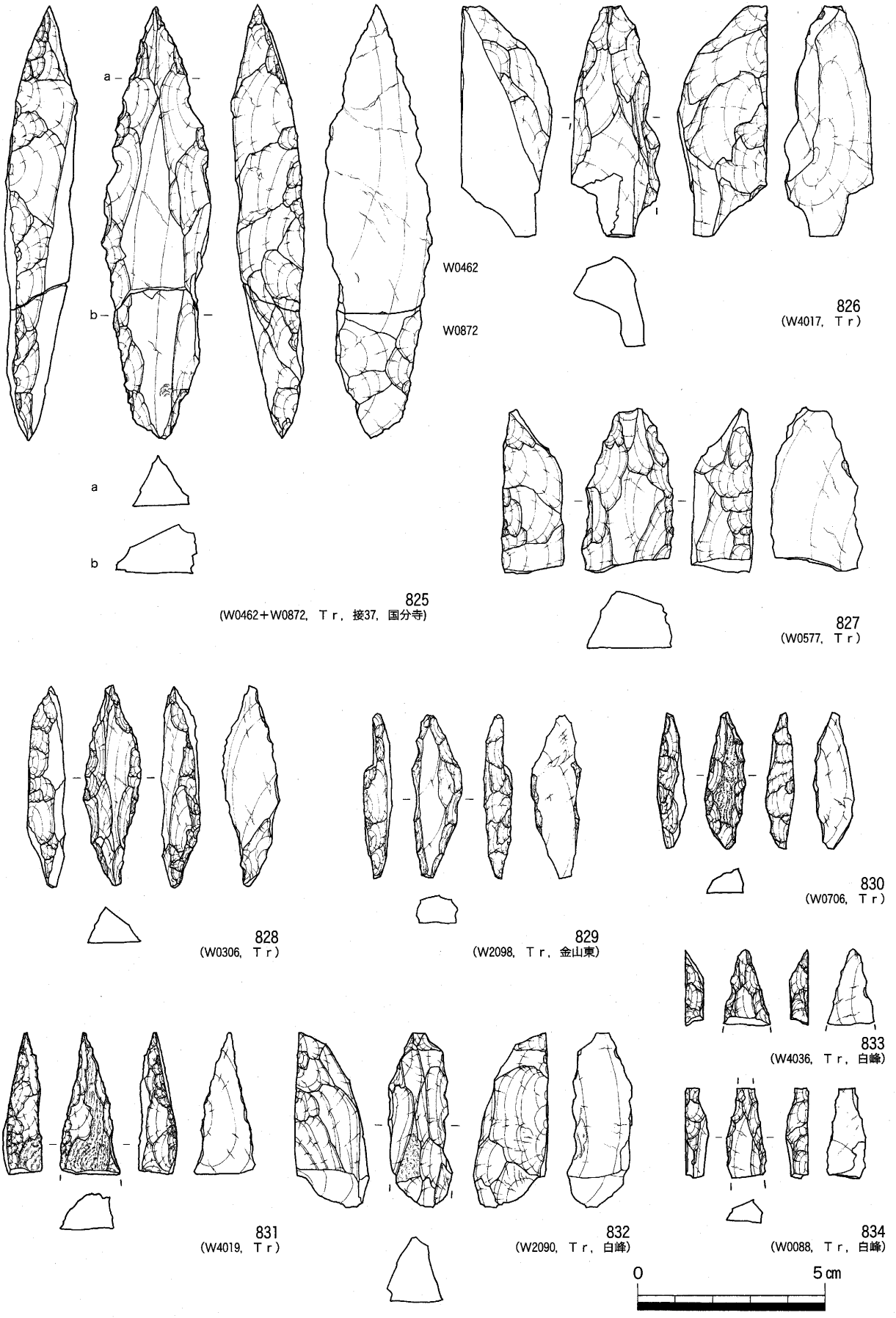
840～843は全体形状が不明ながらも細かな整形加工に先行する剥離面が不整方向からの打撃によって形成され，断面形が四角形状となる一群として示した。明確な接合資料がみられる訳ではないが，打面転移を頻繁に生じさせる交互剥離石核を素材とする可能性が考えられる。

844～865では調整剥片を含む角錐状石器小片を一括して示した。裏面に加工が施される三面加工品はほとんどみられず，遺存状態が良好な角錐状石器と傾向は一致する。そのほか，稜上加工に伴う大形の調整剥片が目立っており，器体断面が甲高となる特徴と関係する可能性が考えられる。

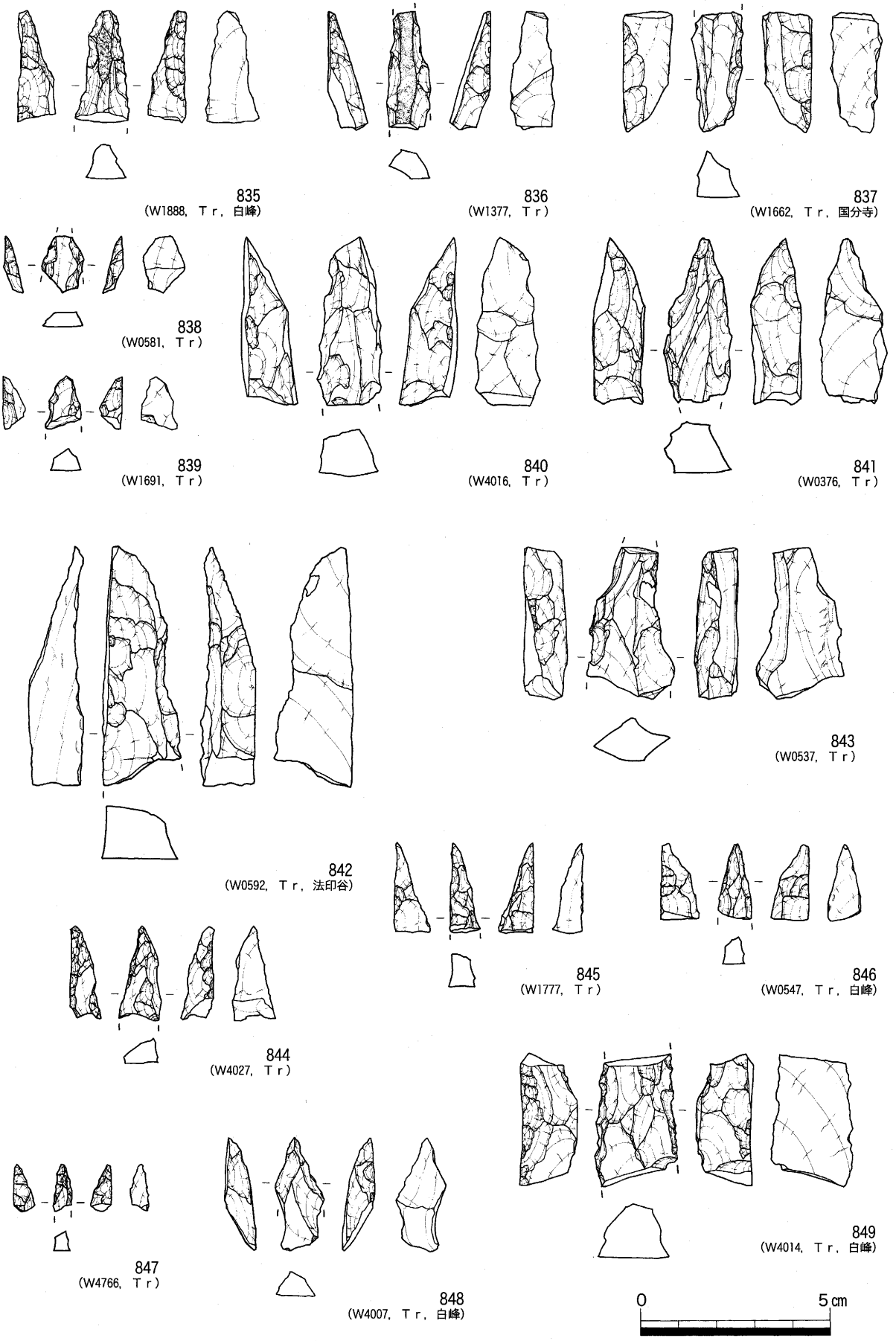
なお，859は断面が菱形で両側縁から浅い角度の整形加工を施す小形品で，調整剥片を再加工したものと考えられる。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	断面形	石材	整形加工	接合	グリッド	備考
835	220	215		W1888	30.0×14.5×10.0	3.2	半折	△	An-A	2-S		ナ15	表面に自然面残置 白峰
836	220	215		W1377	31.5×11.5×10.5	2.8	先基折	□	An-A	2-S		チ17	表面に自然面残置 国分寺
837	220	215		W1662	32.0×14.0×13.0	6.1	半折	△	An-A	2-S		ナ15	
838	220	215		W0581	15.0×11.0×5.5	0.6	先端のみ	□	An-A	2-S		ツ13	
839	220	215		W1691	14.0×9.7×6.0	0.6	先端のみ	□	An-A	2-S		ニ14	
840	220	214		W4016	45.2×17.1×15.0	11.2	半折	□	An-A	3-S		ツ12	
841	220	215		W0376	44.0×18.0×13.5	10.6	半折	□	An-A	3-S		ト16	裏面加工は粗い
842	220	215		W0592	64.0×21.0×14.5	19.7	半折	□	An-C	2-S		テ13	菱形断面 法印谷
843	220	215		W0537	40.5×23.2×11.8	10.3	先基折	□	An-A	2-S		ト14	菱形断面
844	220	214		W4027	25.0×11.5×8.5	1.4	先端のみ	△	An-A	2-W		ツ12	横位の稜上加工
845	220	215		W1777	24.0×8.0×9.5	1.3	半折	□	An-A	2-W		ニ15	横位の稜上加工
846	220	215		W0547	20.2×9.0×10.0	1.7	先端のみ	△	An-A	2-W		テ16	白峰
847	220	214		W4766	12.5×5.0×5.5	0.3	先端のみ	□	An-A	2-W		チ10	
848	220	214		W4007	30.2×13.2×8.5	2.1	先端のみ	△	An-A	2-S		テ11	白峰

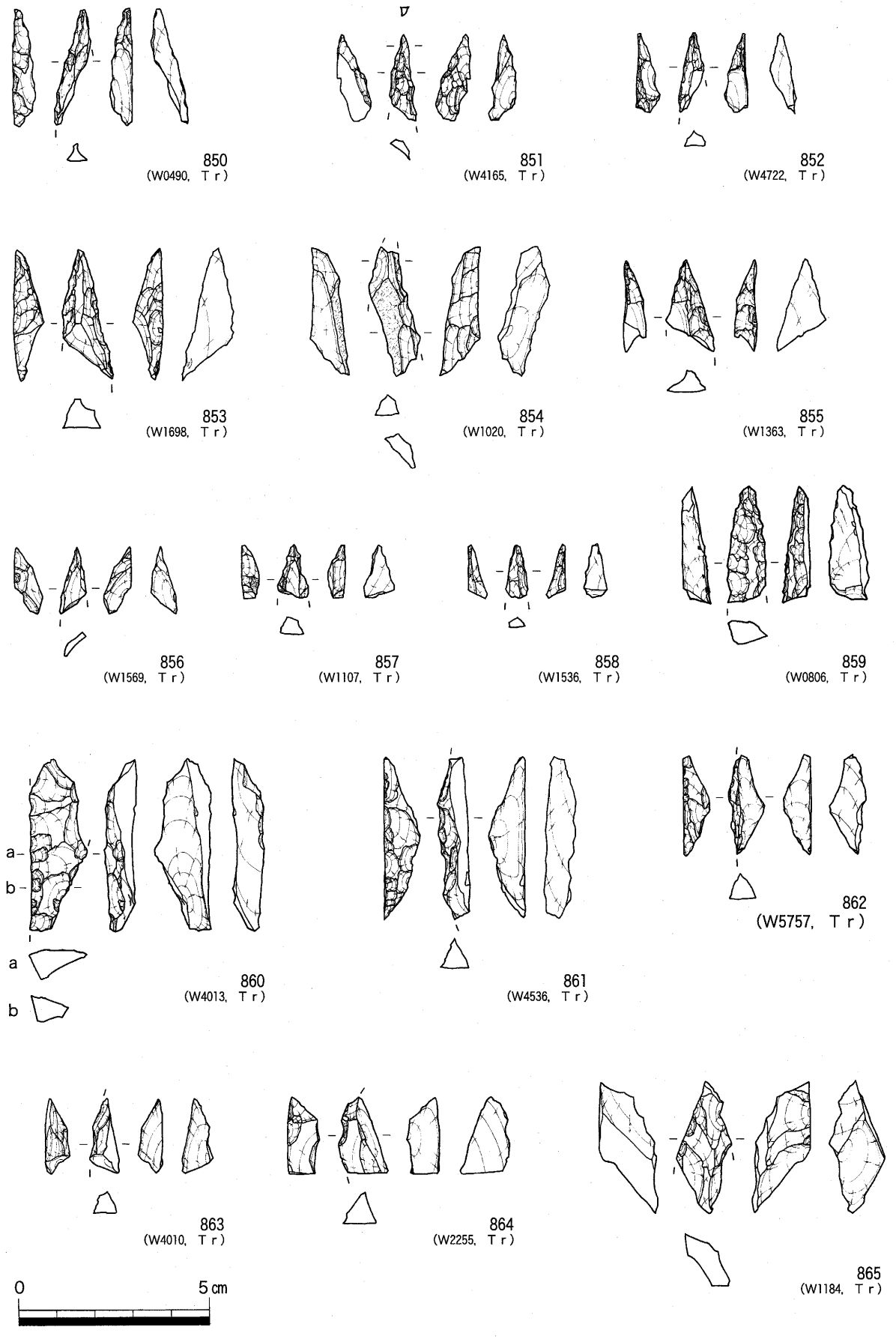
第98表　3c区ブロック3　角錐状石器　属性表　5



第219図　３ｃ区出土石器実測図９　ブロック３　Tr　(S＝2／3)



第220図　3ｃ区出土石器実測図10　ブロック3　Tr　(S=2／3)



第221図　３ｃ区出土石器実測図11　ブロック３　Tr　(S＝2／3)

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	断面形	石材	整形加工	接合	グリッド	備考
849	220	214		W4014	35.0×21.7×15.0	12.9	先基折	△	An-A	2-W		テ12	白峰
850	221	215		W0490	31.0×9.5×6.0	0.7	－	△	An-A	2-W		ツ13	調整剥片
851	221	214		W4165	22.7×7.0×9.0	0.5	－	△	An-A	2-W		テ9	調整剥片
852	221	214		W4722	21.0×7.0×6.0	0.5	-	△	An-A	2-W		ツ10	調整剥片
853	221	215		W1698	34.5×13.5×8.0	1.9	先端のみ	△	An-A	2-W		ナ14	
854	221	215		W1020	34.0×13.5×10.5	2.2	－	□	An-A	2-S		チ13	調整剥片・自然面残置
855	221	215		W1363	24.3×13.0×6.0	0.9	半折	△	An-A	2-W		チ18	
856	221	215		W1569	17.8×7.0×7.2	0.3	－	△	An-A	2-W		チ14	調整剥片
857	221	215		W1107	14.0×8.0×4.5	0.4	先端のみ	□	An-A	2-S		テ14	自然面残置
858	221	215		W1536	14.2×6.0×5.0	0.3	先端のみ	□	An-A	2-S		テ14	
859	221	215		W0806	30.5×10.0×7.5	1.8	半折	□	An-A	2-S		チ18	菱形断面
860	221	214		W4013	45.5×15.0×8.5	4.5	－	□	An-A	2-S		テ12	菱形断面・調整剥片
861	221	214		W4536	43.0×8.2×9.5	2.1	－	△	An-A	2-S		テ10	調整剥片
862	221	214		W5757	26.5×9.5×7.0	0.9	－	△	An-A	2-S		チ12	調整剥片
863	221	214		W4010	19.7×8.0×6.5	0.7	－	△	An-A	2-S		テ12	調整剥片
864	221	215		W2255	20.3×13.0×8.4	1.7	－	△	An-A	2-W		ツ17	調整剥片
865	221	215		W1184	34.5×14.5×15.5	3.8	－	□	An-C	2-S		テ15	菱形断面・調整剥片

第99表　３ｃ区ブロック３　角錐状石器　属性表　６

ナイフ形石器（第222図　866～第224図　878）

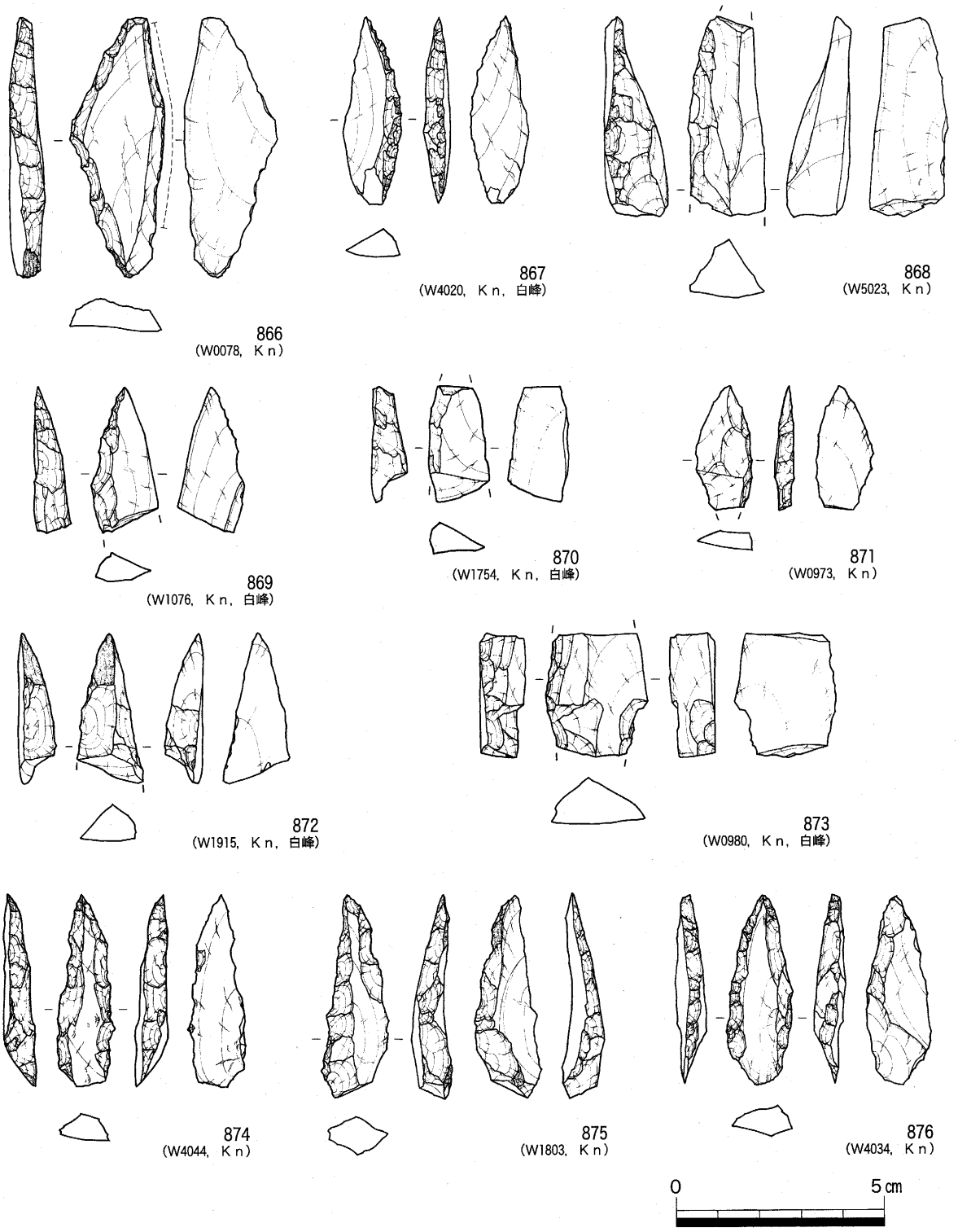
13点のナイフ形石器が出土している。うち７点が完形品である。サイズの内訳は，長さ60.0～70.0㎜サイズが２点，40.0～50.0㎜サイズが４点，30.0㎜サイズが１点である。整形加工形態では一側縁加工品６点（866～871），二側縁加工品７点（872～878）である。二側縁加工品の対側縁加工は先端部側に施されるもの（874～876）と，基部側に施されるもの（878）がある。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	断面形	石材	整形加工	接合	グリッド	備考
866	222	225	48	W0078	64.0×23.0×9.0	10.9	完形	□	An-A	1-S		テ13	概報　21
867	222	223	48	W4020	45.8×14.0×6.5	3.6	完形	△	An-A	1-S		ツ12	概報　19　白峰
868	222	223		W5023	48.5×18.8×15.2	12.0	先基折	△	An-A	1-W		ツ11	
869	222	225		W1076	35.0×16.0×9.0	3.4	基部折	△	An-A	1-S		チ14	打瘤折損面残置　白峰
870	222	225		W1754	28.0×15.0×8.5	2.9	先基折	△	An-A	1-S		ト14	白峰
871	222	225	48	W0973	30.0×13.5×4.5	1.8	完形	□	An-A	1-S		ソ16	小形ナイフ
872	222	225		W1915	36.5×16.0×9.5	3.3	基部折	△	An-A	2-S		ナ17	刃縁に自然面残置　白峰
873	222	225		W0980	30.0×24.5×11.0	9.6	先基折	△	An-A	2-S		タ16	白峰
874	222	223	48	W4044	47.0×14.3×8.2	4.3	完形	□	An-A	2-S		チ12	
875	222	225	48	W1803	49.5×16.5×10.0	5.7	完形	□	An-A	2-W		ニ16	表面が素材のポジ面 裏面に自然面残置
876	222	223	48	W4034	46.0×16.0×7.5	4.5	完形	□	An-A	2-S		チ11	表面が素材のポジ面 素材の打面残置 裏面加工あり
877	224	223	48	W4009	47.0×19.0×11.0	8.1	完形	□	An-A	2-S		テ11	表面が素材のポジ面 裏面加工あり
878	224	223		W4011	69.0×23.3×15.0	18.0	完形	△	An-A	2-S	接38	テ12	整形加工に伴う剥片（880）が接合　白峰

第100表　３ｃ区ブロック３　ナイフ形石器　属性表

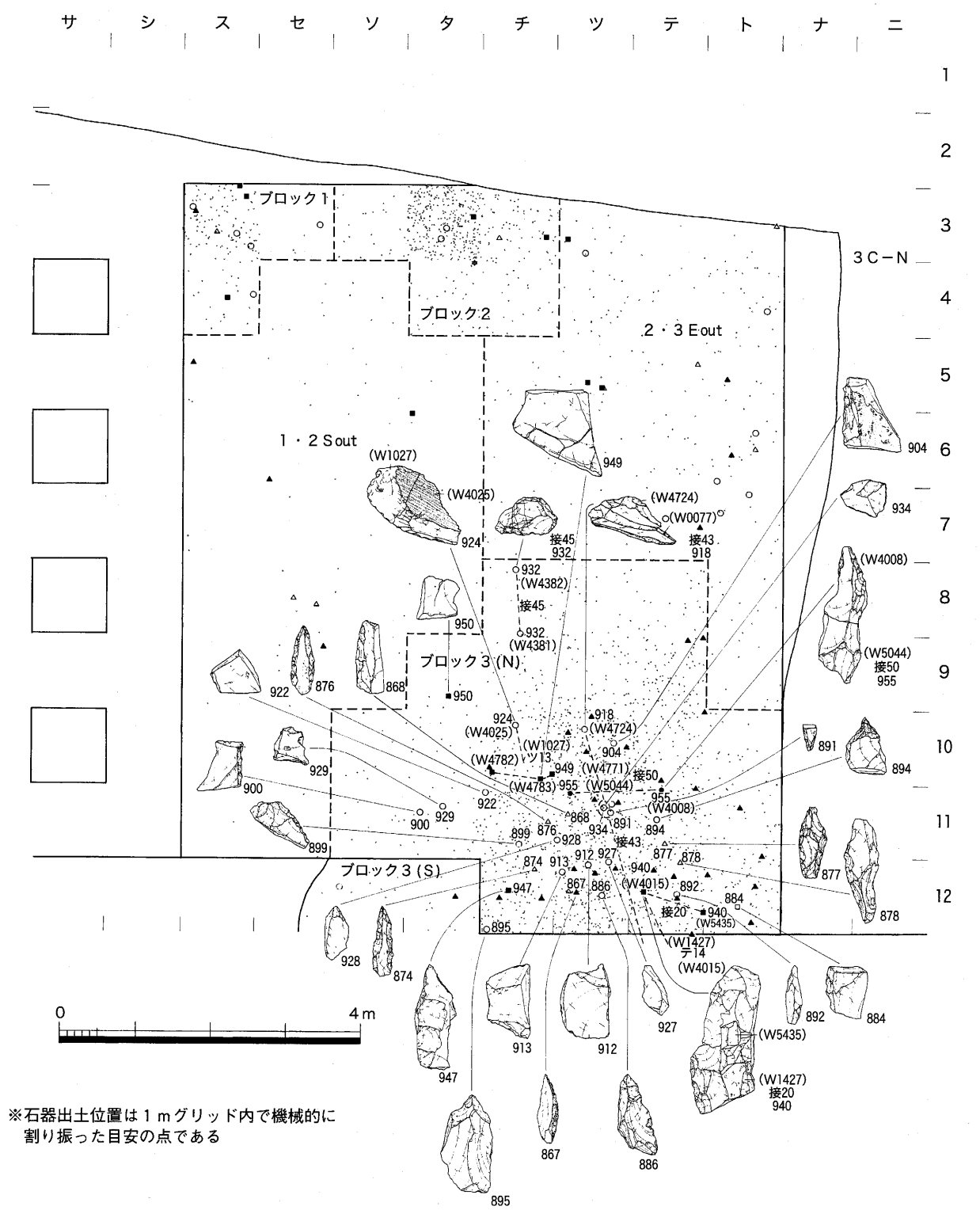
866・867は素材の主剥離面側から一方向のみの整形加工を施す一側縁加工ナイフ形石器である。素材の背面に主要剥離面と反対方向の剥離面が，866に３面，867に１面ある。868は刃縁角が急角度で断面三角形に近いナイフ形石器。表面にみられる素材背面と目される剥離面の剥離方向は一定しない。869・870は一側縁加工ナイフ形石器の折損品。871は打面転移の顕著な剥片剥離による不定形剥片を素材として，基部側一側縁のみに加工量の少ない整形加工を施す。

872～878は二側縁加工のナイフ形石器である。872は刃部に自然面を留め，両側縁を整形加工する形態。873は対側縁基部側の整形加工が大きく施される。874～877は基部に剥片の末端を留めながら両側縁に整形加工を施して先端を尖らせる形態の二側縁加工品である。いずれも長さ45.0㎜ほどの完形品で，長幅比も大差なく斉一的な形態を呈す。整形加工は874が表面のみ，875・876は裏面にも施される。877は素材剥片の打瘤部を背面側からの打撃により除去し，整形加工を主剥離面側から施すものである。

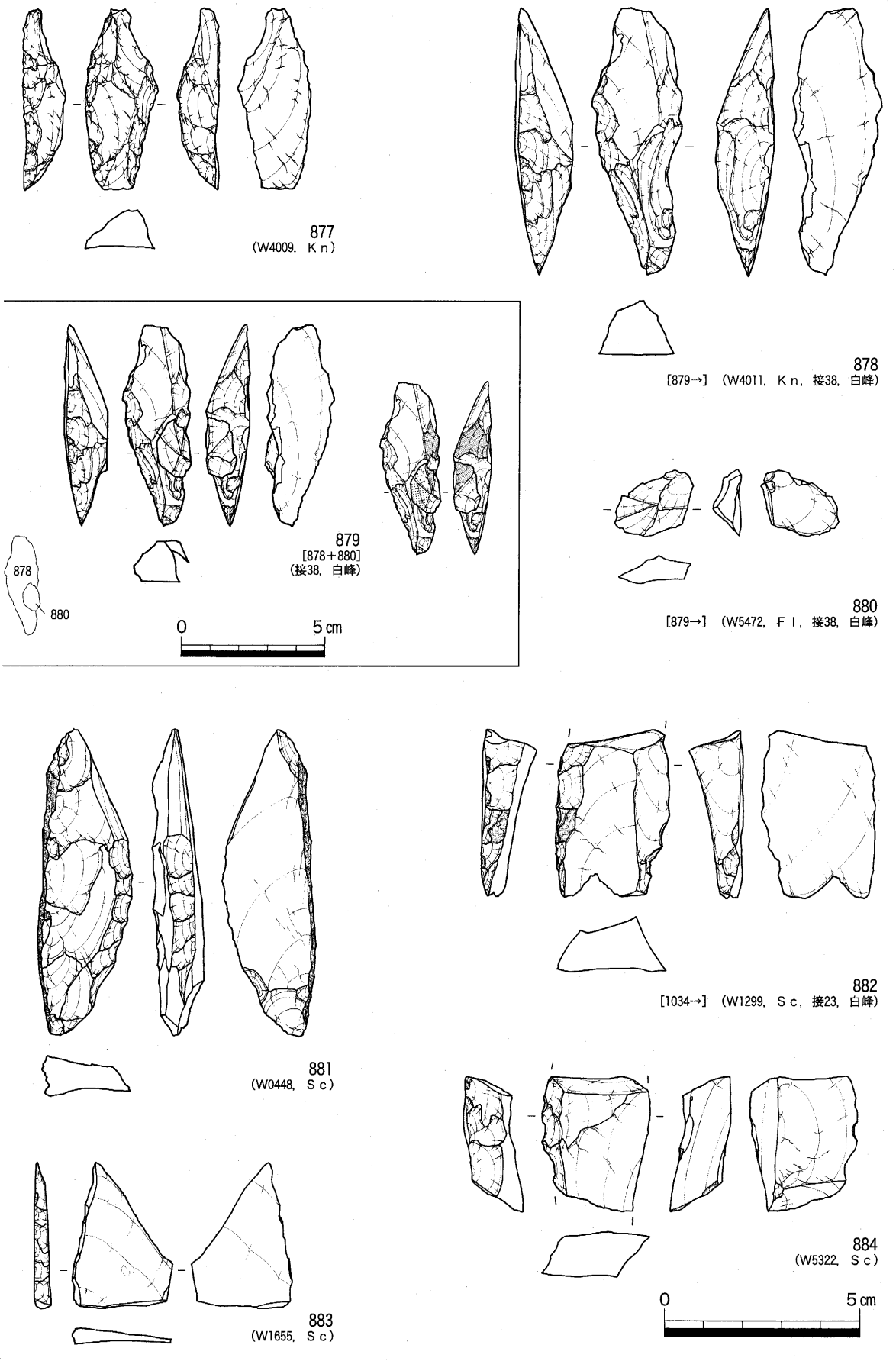


第222図　３ｃ区出土石器実測図12　ブロック３　Kn　(S=2／3)

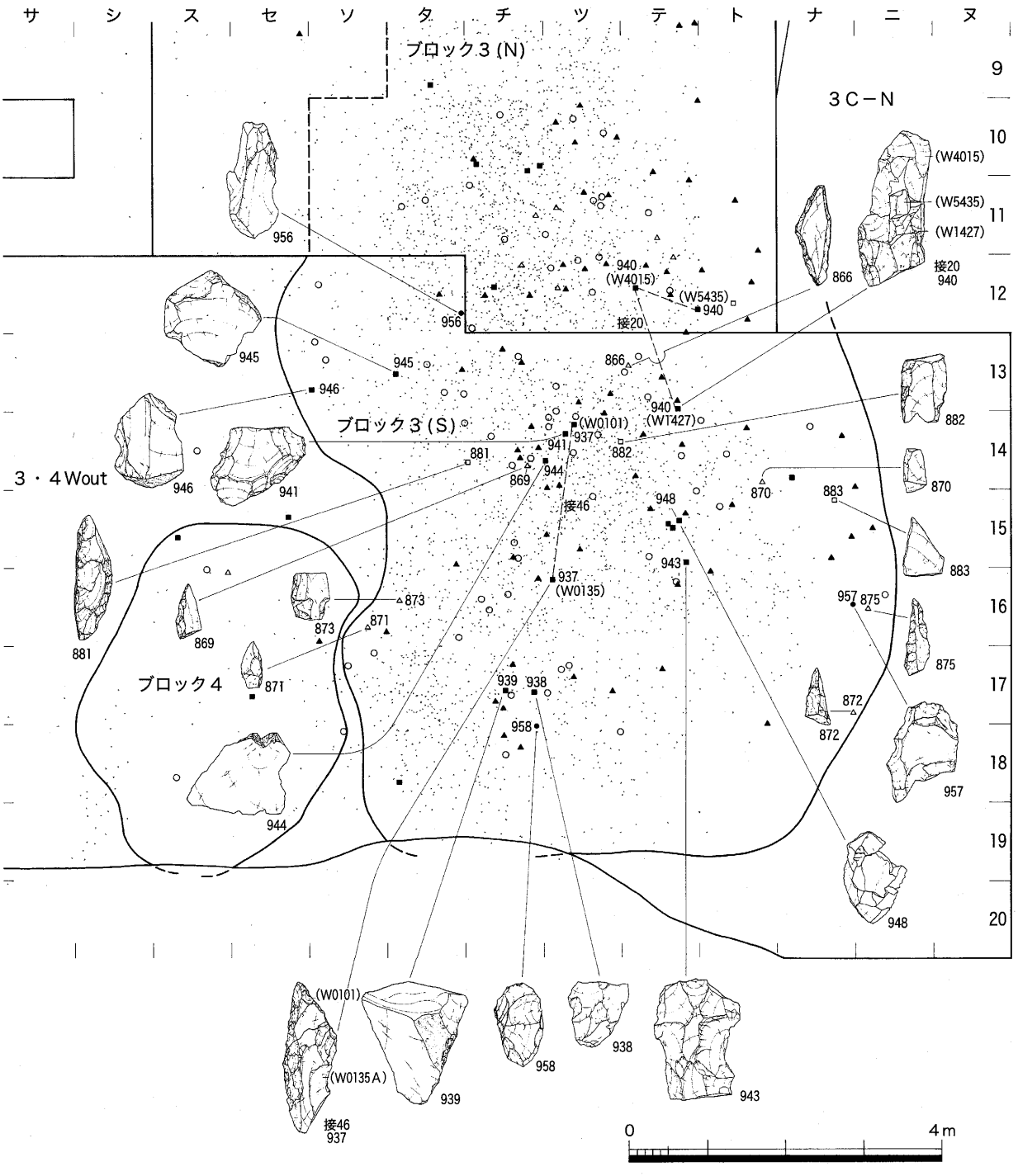
878は長さ70.0㎜ の二側縁加工ナイフ形石器。基部側は両側縁に整形加工が施され，先端側は素材の主剥離面と方向の異なる剥離面が残る。先端角は鈍く，ペン先状の正面形を呈す。整形加工に伴う剥片（880）１点が基部側右側縁に接合する。880は打点部で縦に折損し，現存幅20.0㎜，長さ17.0㎜ をはかる。器体上半の整形加工面を背面に取り込み，器体右下半の大部分を整形するものである。880剥離後，878の右下半には再度同じ位置を打撃した剥離痕がみられる。



第223図　３ｃ区ブロック３　器種別石器分布図３　～参考図～　北側Kn・Sc・RF・UF・Cr（S＝1／80）

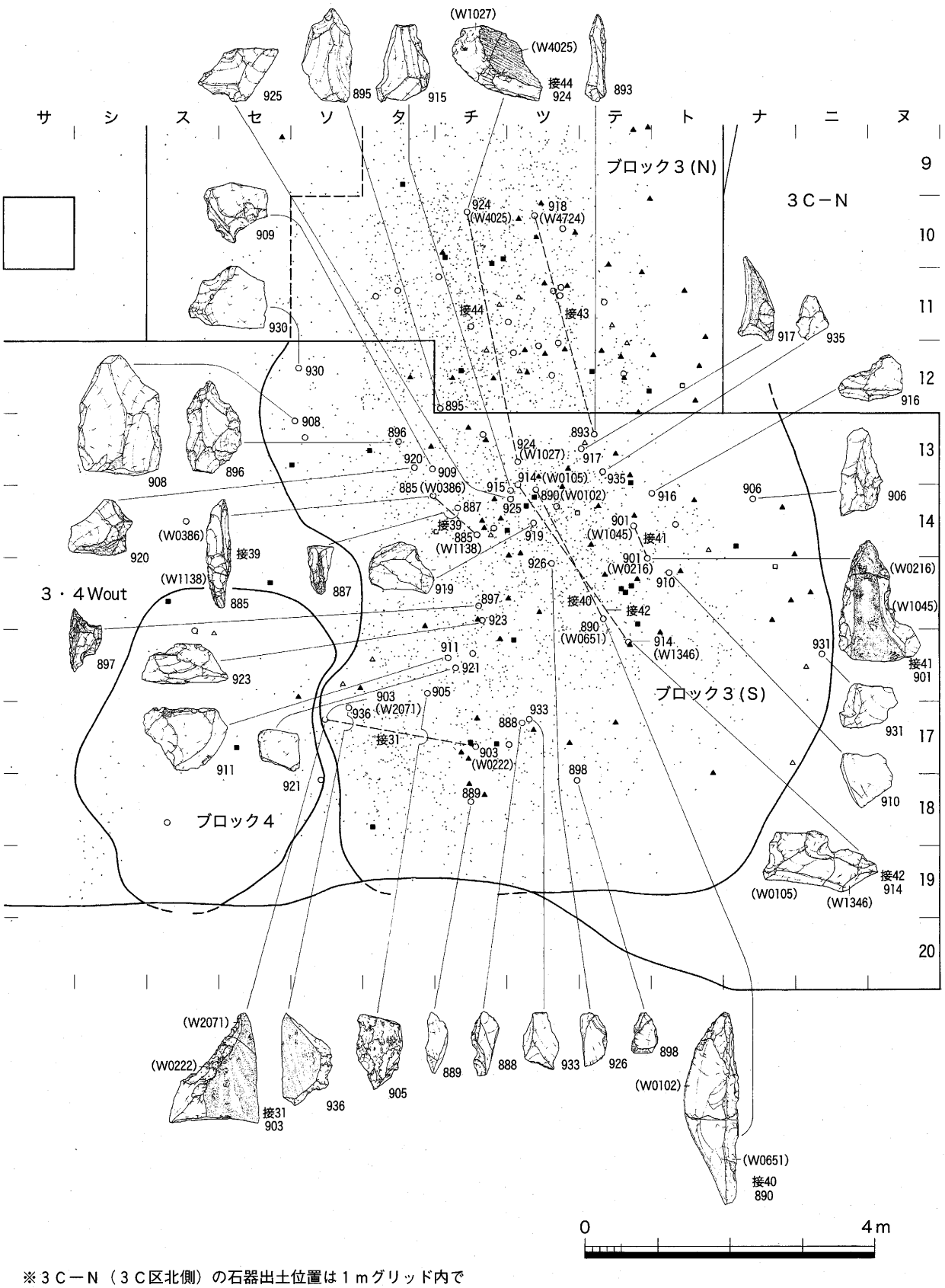


第224図　3c区出土石器実測図13　ブロック3　Kn・Sc　(S=2／3, 1／2)



※３C－N（３C区北側）の石器出土位置は１mグリッド内で
機械的に割り振った目安の点である

第225図　３c区ブロック３　器種別石器分布図　4　南側Kn・Sc・Cr　(S=1／80)



※３Ｃ－Ｎ（３Ｃ区北側）の石器出土位置は１ｍグリッド内で
機械的に割り振った目安の点である

第226図　３ｃ区ブロック３　器種別石器分布図　５　南側RF・UF　(S＝1／80)

スクレイパー（第224図　881～884）

器体に連続的な加工を施し，刃部を作出するものをスクレイパーとして４点認定した。いずれも器体の側縁部分に刃部加工を施すもので，サイドスクレイパーとして分類しうるものである。

881は左側縁を自然面に，表裏面をネガティブな剥離面に覆われた板状の石核を素材とする。表面の４枚のネガティブな剥離面は，自然面を打面として横方向に打点をずらしながら，寸詰まりの剥片を剥取する石核947に共通する剥片剥離が行われたことを示す。刃部加工は正面右側縁下半部に約55度の角度で裏面側から連続的に５回施される。下端部はナイフ形石器の裏面加工と同様な平坦剥離が２面みられる。形態的な類似性と，左側縁の剥片剥離を整形加工とみれば，ナイフ形石器と認定することも可能である。

882は不定形な横長剥片の打瘤部を主剥離面側から大きく打撃して除去し，さらに剥片尾部に残置する自然面を連続的な６回の刃部加工により整形するものである。素材の側縁となる図下端部右側縁にも若干の加工が施される。

883は不定形剥片の一側縁に６回の刃部加工を施し，直線的な刃部を作出する。884は石核の平坦な折損面を打面として剥離された不定形剥片の尾部に連続的な刃部加工を施す。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	石材	打面	側縁	末端	接合	グリッド	備考
881	224	225	48	W0448	80.0×24.5×13.5	23.7	完形	An-A	×	○	◎		チ14	下端部裏面加工 自然面残置
882	224	225		W1299	43.5×29.2×14.0	15.4	半折	An-A	○	○	◎	接23	ツ14	自然面残置　白峰
883	224	225		W1655	26.2×37.8×4.5	3.3	完形	An-A	◎	×	×		ナ15	
884	224	223		W5322	27.5×35.0×15.5	14.1	半折	An-A	×	×	◎		ト12	

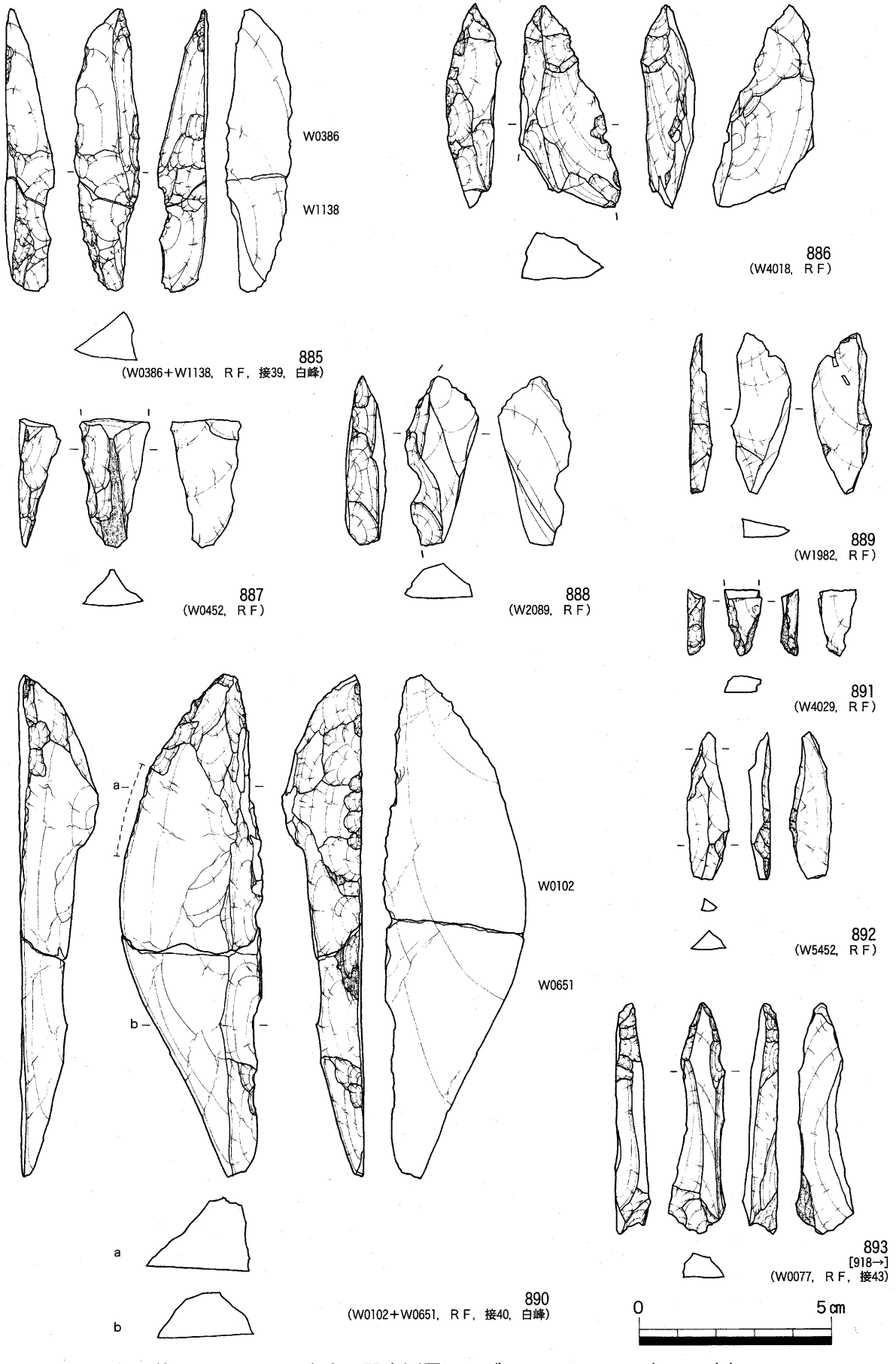
（凡例：◎刃部加工　○整形加工　×未加工）

第101表　３ｃ区ブロック３　スクレイパー　属性表

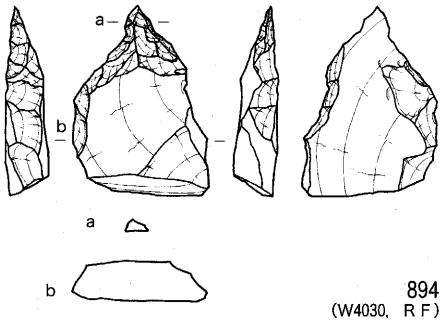
加工痕有剥片・使用痕有剥片（第227図　885～第233図　936）

当調査区では，ナイフ形石器や角錐状石器といった定形石器に該当しない形態で，一部に加工痕を有する剥片類が多くみられる。なかには定形石器の未製品あるいは初期整形段階と目されるものもあるが，ここでは一括して報告する。

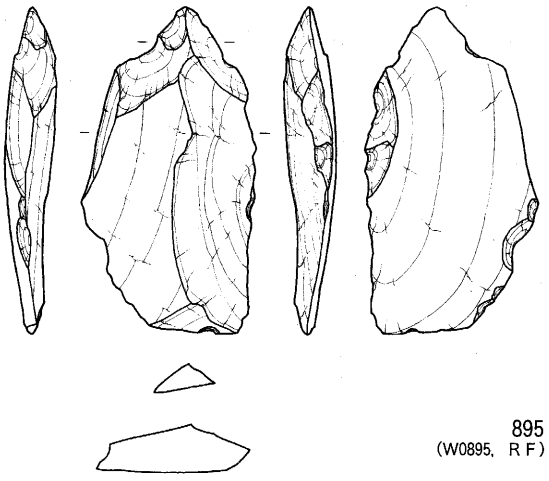
885～893は細長の形態で尖頭部をもちナイフ形石器に類似するが，整形加工が部分的かつ不規則なものである。885は横長剥片末端付近の断面三角形状の折損片を素材として，周縁に整形加工を施す。下端部付近は主要剥離面あるいは稜上から加工を行い細かな整形を行うが，上半部は素材の折損面，あるいは初期段階の粗い加工を留める。886は大形角錐状石器の調整剥片に先端部作出加工を施すものである。基部は素材の打面や側縁部を留め，整形加工が徹底しないことから，角錐状石器には認定していない。先端部は裏面側の加工が行われる。887は自然面を留める横長剥片を縦位に用い，自然面を剥ぎ取る加工を施すものである。ナイフ形石器に近い。888は側縁に整形加工面を留める剥片。整形加工時の折損片の可能性もある。889は剥片末端部片の一部に急角度で２～３回の加工を施すものである。890は石理に沿って剥離した板状素材の平坦面を底面に取り込んで剥離した大形の横長剥片を素材とする。打面側ほぼ全面に整形加工がおよび，側面上端側に尖頭状の整形加工を施すが，下半部は素材の刃縁を留める。図下端を先端とすればナイフ形石器と認定することも可能である。打面側整形加工の途上に半折する。891は末端に自然面を留める剥片の打面部を連続的な整形加工で除去するナイフ形石器に近いものである。ただし遺存部のみでは刃縁を形成するか否か明かでない。892・893は不規則に剥離された横長剥片を縦に用い，先端部，基部に細部加工を施すもの。石錐の可能性もある。



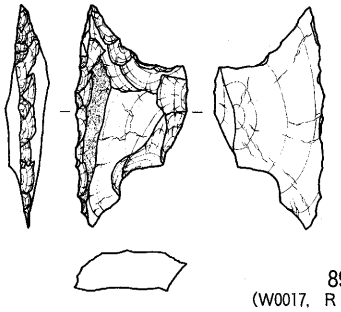
第227図　３ｃ区出土石器実測図14　ブロック３　RF　(S=2／3)



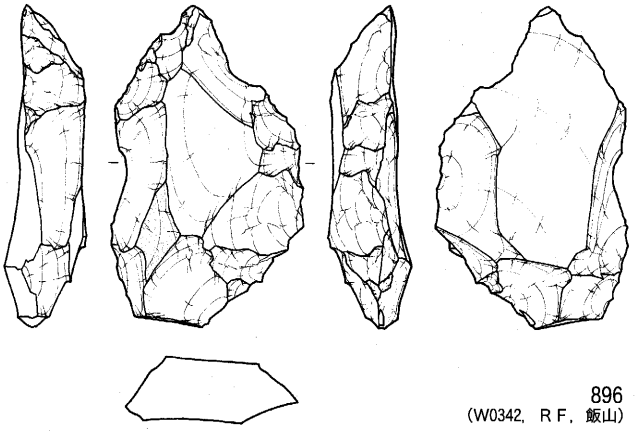
894
(W4030, RF)



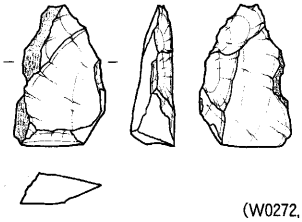
895
(W0895, RF)



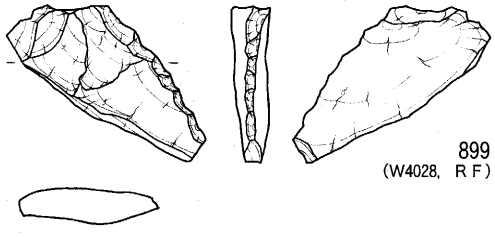
897
(W0017, RF)



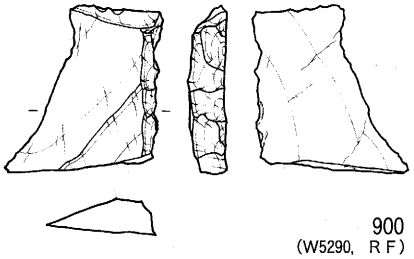
896
(W0342, RF, 飯山)



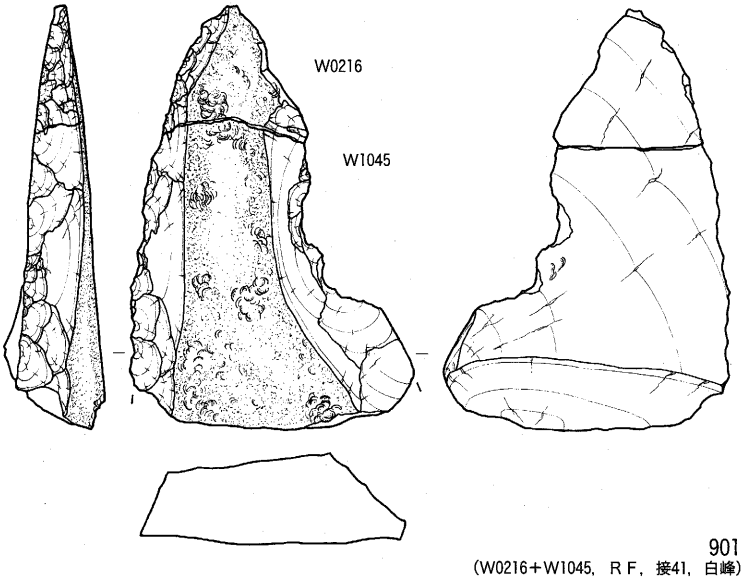
898
(W0272, RF)



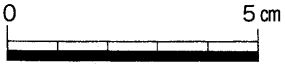
899
(W4028, RF)



900
(W5290, RF)



901
(W0216+W1045, RF, 接41, 白峰)



第228図　3ｃ区出土石器実測図15　ブロック3　RF　(S=2/3)

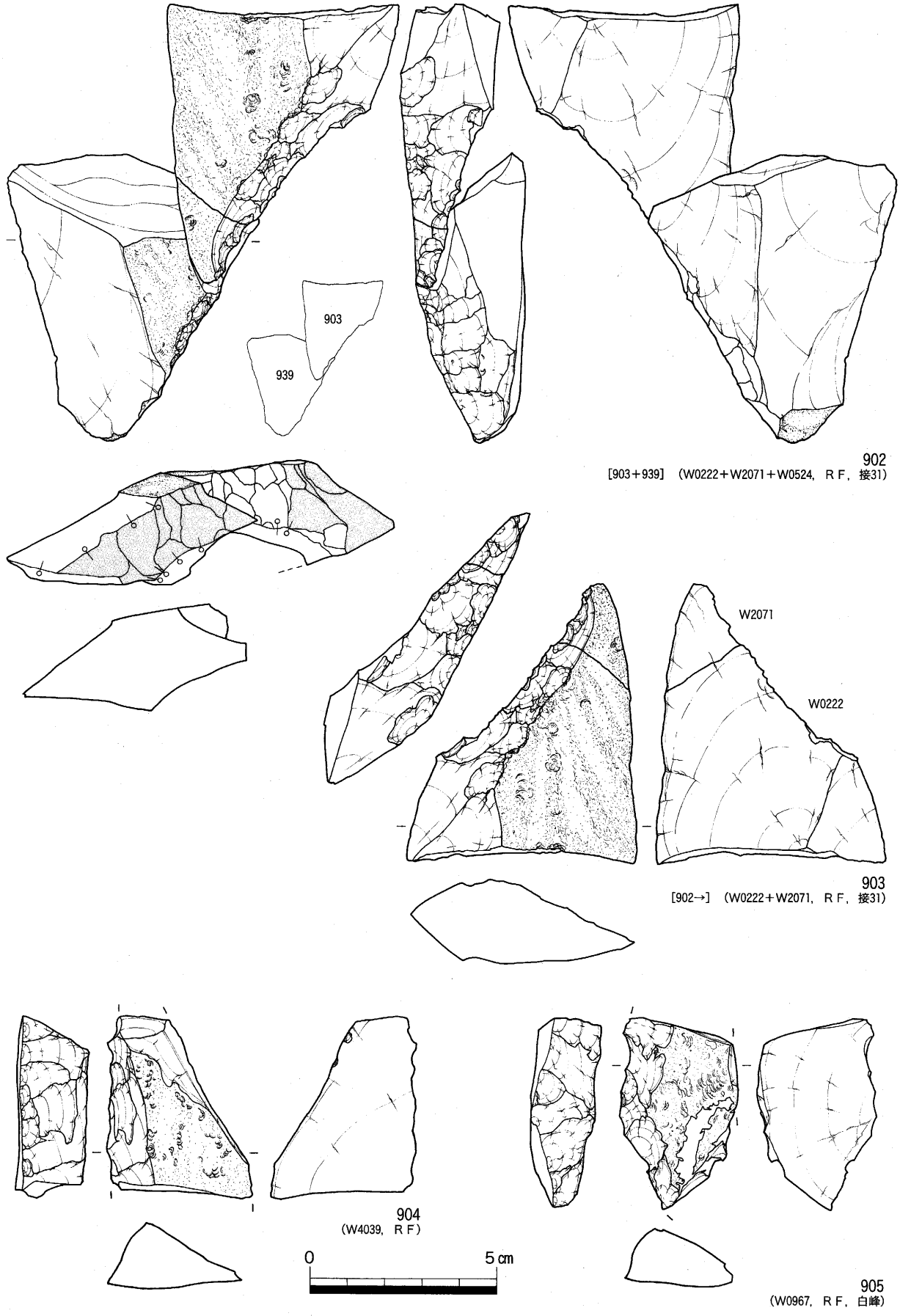
894～897は剥片の一端に尖頭部を作出するものである。894・895は素材剥片を主剥離面側から左右数回の剥離で細い尖頭部を作出し，さらに裏面の打瘤除去，周縁整形へと加工が及ぶ。背面に自然面を留める897は，尖頭部作出，末端自然面除去を行い，さらに剥片側縁部分に整形加工を施すが，素材の打面および打瘤は図右側に飛び出すように残置する。冠（飯山）産石材の896は剥片を斜めに用いて末端側の一部を尖頭部作出し，裏面剥離を伴う周縁加工をほぼ全周させる。以上の５点の加工痕有剥片は，尖頭部の作出がいずれの個体にもみられ，さらに周縁加工が全体に及ぶ状況が認められることから，角錐状石器に至る整形加工の初期段階である可能性が強い。

898～903は剥片の側縁あるいは尾部に連続的な加工を施すが，素材となった剥片の形状を大きく改変しないもの。898は末端に自然面を留める不定形剥片の打面部分にやや浅い角度の加工を施す。899は打点が一方に偏った剥片の側縁部に連続的な加工を施す。900は不定形剥片の打面側に急角度の整形加工がある。901は背面に自然面を留める大形剥片の尾部に連続的な整形加工を施し，打面を残しながら側縁部にさらに整形加工を加え，打瘤部を突出させるものである。902は加工痕有剥片903と石核939の接合体。片面に自然面を留めた長さ約200.0㎜，厚さ50.0㎜程度の石塊の一辺に，自然面を打面とする急角度の加工を横方向に連続的に施す。打面調整の可能性も考えられる。903は接合体902から交互剥離によって剥離された扇状の剥片を素材として，902の整形面を主要剥離面側，つまり逆方向から切り込む連続的な整形加工が施される。

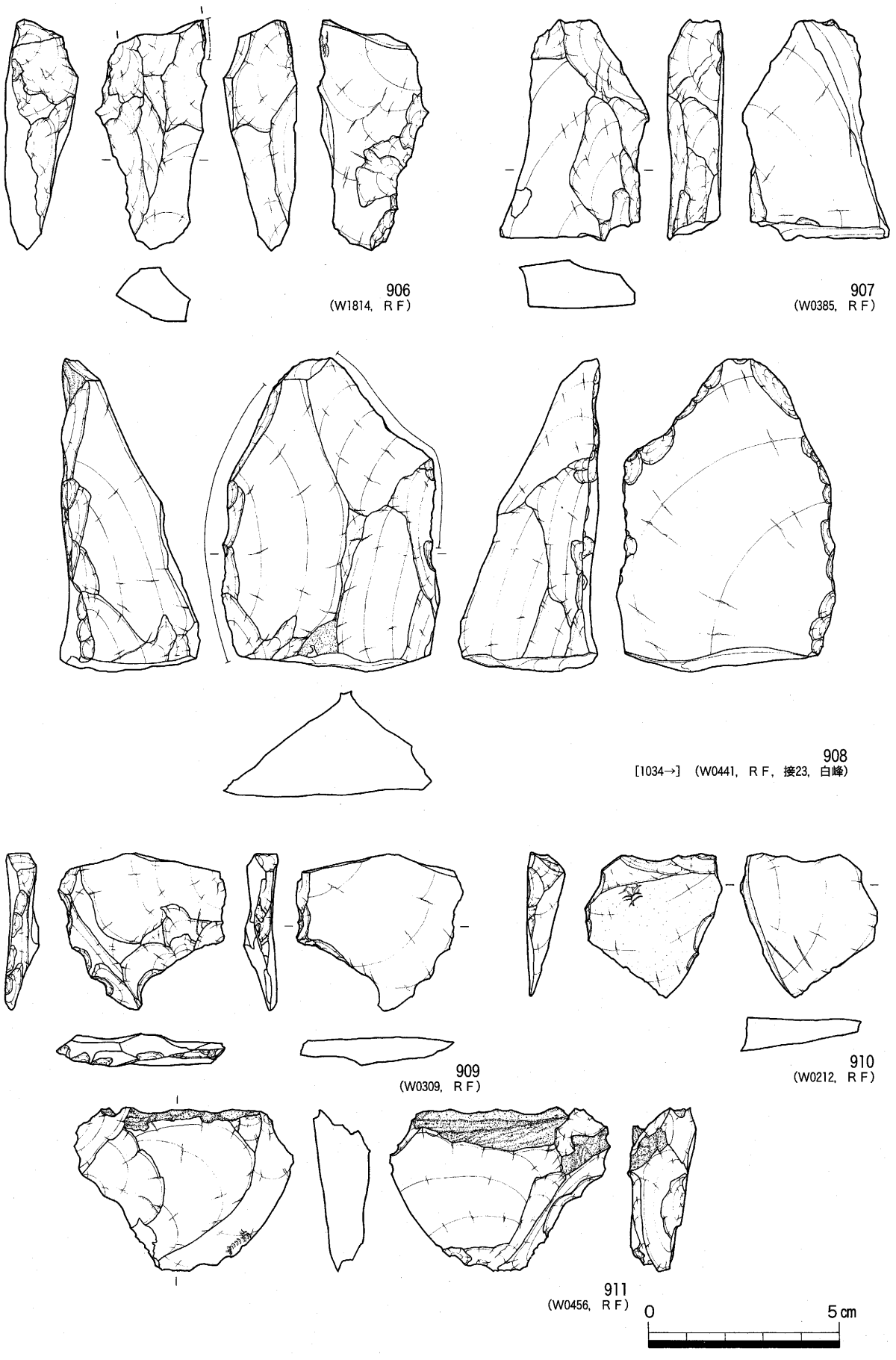
904～908は分厚い剥片に加工量の多い整形加工を施すもの。904・905は自然面を背面に留める横長剥片に打瘤を除去する大きな整形加工を施す。906は厚めの不定形剥片打面部表裏に整形加工を施す。図右側縁に潰れを伴う打撃痕がある。907は厚さ13.0㎜ の板状剥片の打面部側に加工量の多い整形加工を施す。石核の可能性もある。908は断面三角形状となる石核の周縁部に潰れを伴う打撃がある。剥離痕の幅は10.0㎜ を最大として平均5.0㎜ をはかり，折損部を除いてほぼ全周する。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	石材	打面	側縁	末端	接合	グリッド	備考
885	227	226		W0386＋W1138	74.5×17.0×13.0	12.7	完形	An-A	○	○	○	接39	チ14・タ14	先端微細剥離痕 白峰
886	227	223		W4018	53.0×26.5×14.0	14.4	一部欠	An-A	○	○	○		ツ12	先端裏面調整
887	227	226		W0452	34.0×18.5×10.8	4.1	半折	An-A	×	×	○		チ14	
888	227	226		W2089	44.5×19.0×10.5	6.6	折損	An-A	×	○	×		ツ17	
889	227	226		W1982	42.5×15.5×6.2	3.2	完形	An-A	(○)	×	×		チ18	
890	227	226	48	W0102＋W0651	133.0×38.0×21.5	75.5	完形	An-A	○	○	○	接40	テ15・ツ14	Knか？ 白峰
891	227	223		W4029	17.5×10.0×4.5	0.8	半折	An-A	○	×	×		ツ11	Knか？
892	227	223		W5452	38.5×11.0×5.5	2.0	完形	An-A	○	×	×		テ12	石錐か？
893	227	226	48	W0077	61.0×15.0×9.0	7.1	完形	An-A	×	○	×	接43	テ13	石錐か？
894	228	223		W4030	37.5×26.5×8.5	9.3	完形	An-A	○	○	○		テ11	石錐か？
895	228	226		W0895	65.0×34.5×10.3	20.0	完形	An-A	○	○	○		チ12	
896	228	226		W0342	64.0×38.0×16.0	35.2	完形	An-K	○	○	○		タ13	飯山（冠）
897	228	226	48	W0017	44.0×22.0×9.0	6.2	完形	An-A	×	○	○		チ15	石錐か？
898	228	226		W0272	28.0×18.0×8.5	4.6	完形	An-A	○	×	×		ツ18	
899	228	223		W4028	31.0×39.5×7.5	6.3	完形	An-A	×	○	×		チ11	
900	228	223		W5290	31.0×33.5×7.5	6.5	折損	An-A	○	×	×		タ11	
901	228	226		W0216＋W1045	84.0×56.5×19.5	68.5	半折	An-A	×	○	○	接41	テ14・テ15	白峰
902	229	223	49	W0222＋W2071＋W0524	118.8×103.8×33.8	172.4	半折	An-A	×	○	×	接31	ソ17	
903	229	223	49	W0222＋W2071	62.0×76.0×23.0	72.4	半折	An-A	×	○	×	接31	ソ17・チ17	
904	229	226		W4039	49.5×39.3×19.5	34.2	折損	An-A	○	×	×		ツ10	
905	229	223		W0967	52.0×32.0×19.0	28.7	折損	An-A	○	×	×		タ16	白峰
906	230	226		W1814	61.5×29.0×19.0	26.4	半折	An-A	○	○	○		ナ14	石核か？
907	230	226		W0385	59.0×39.0×14.5	35.3	半折	An-A	○	×	×			石核か？
908	230	226	51	W0441	83.5×58.0×37.0	140.2	完形	An-A	○△	○△	△	接23	ソ13	石核分割片を素材とする 白峰

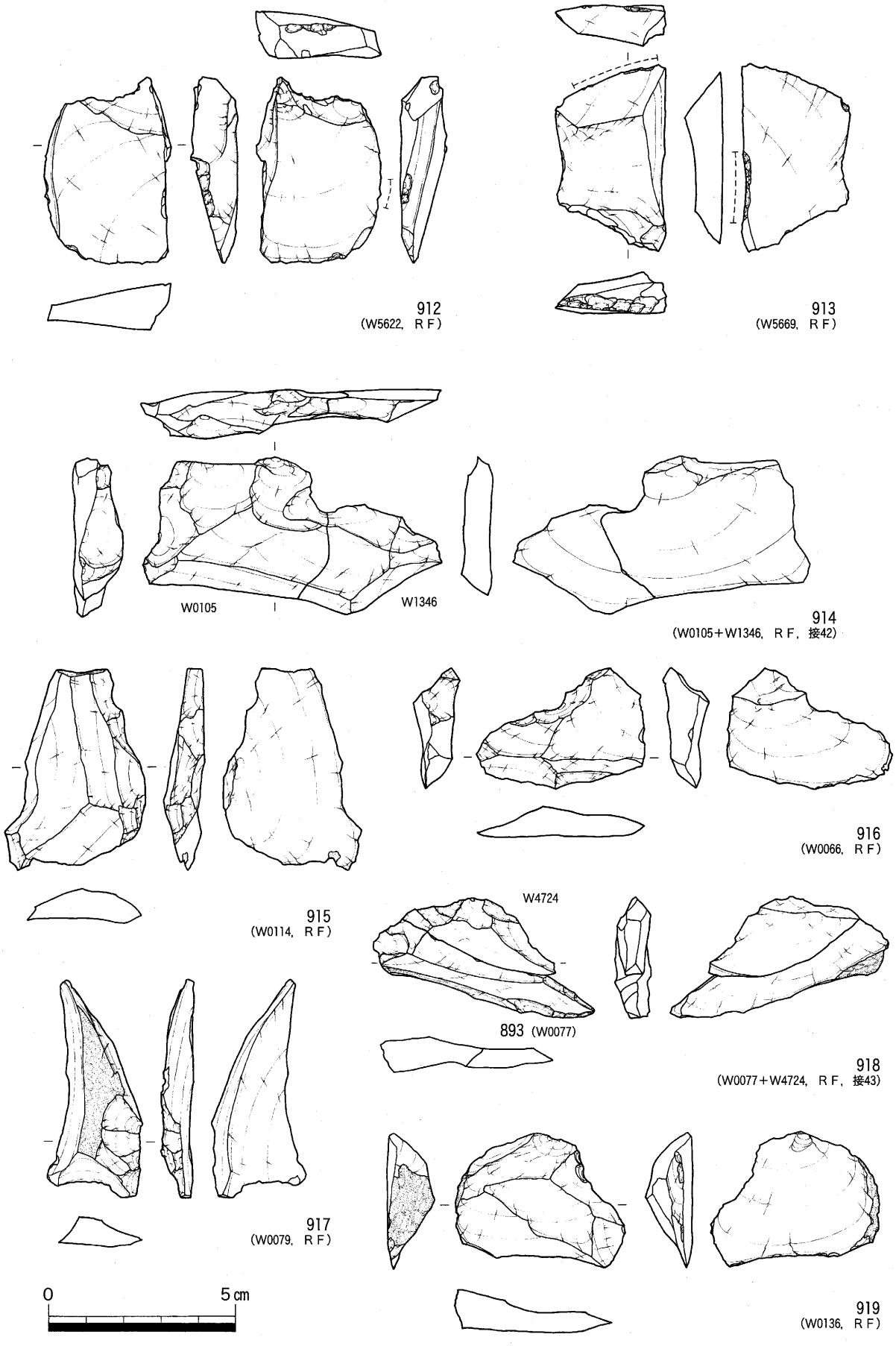
第102表　３ｃ区ブロック３　加工痕有剥片・使用痕有剥片　属性表



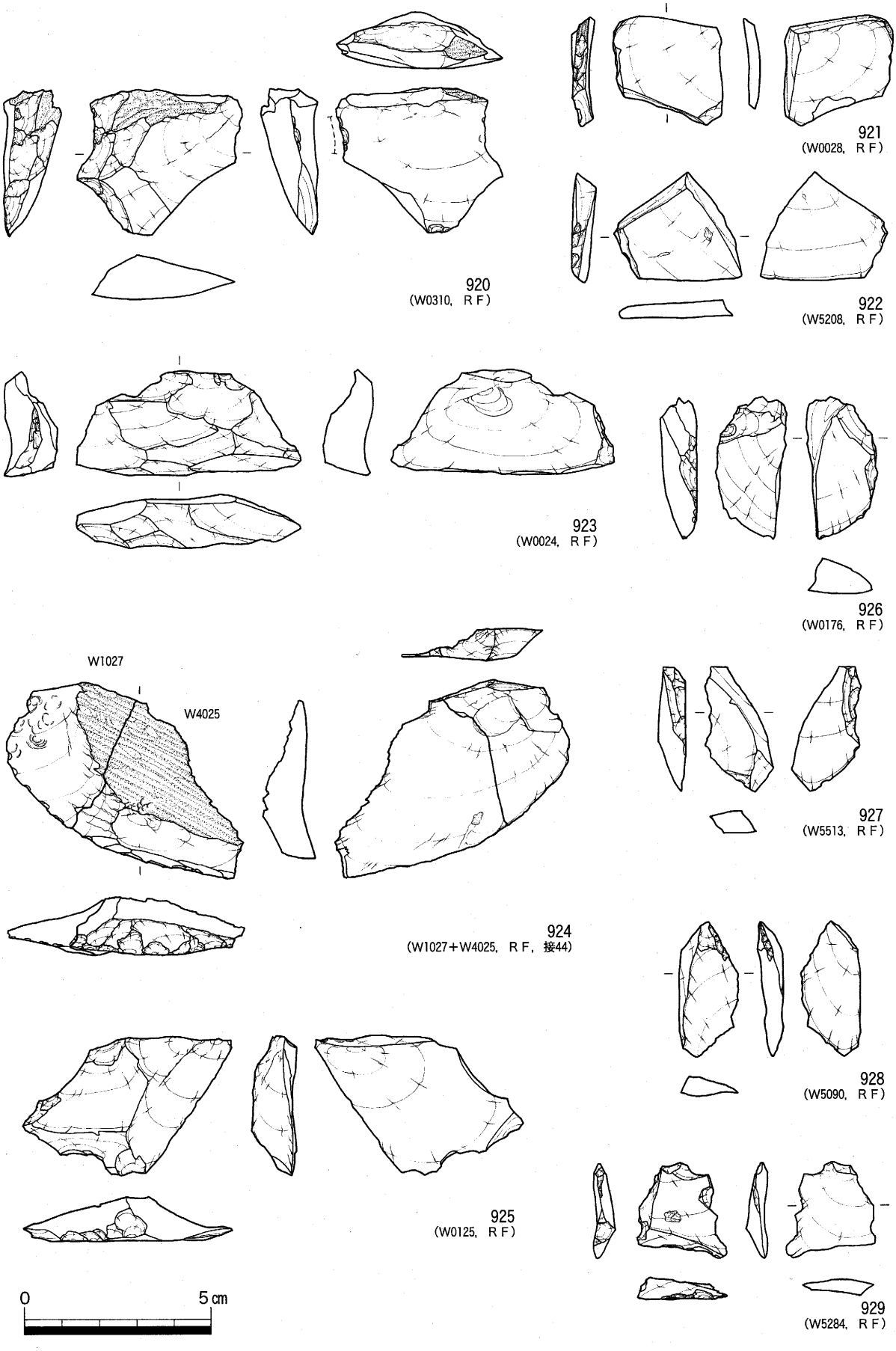
第229図　3c区出土石器実測図16　ブロック3　RF　(S=2/3)



第230図　3ｃ区出土石器実測図17　ブロック3　RF　(S=2／3)



第231図　3c区出土石器実測図18　ブロック3　RF　(S=2/3)



第232図　３ｃ区出土石器実測図19　ブロック３　RF　(S=2／3)

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	石材	打面	側縁	末端	接合	グリッド	備考
909	230	226		W0309	42.0×44.0×9.0	13.3	完形	An-A	○	○	○		タ13	
910	230	226		W0212	36.0×38.5×10.0	10.0	完形	An-A	×	○	×		ト15	器面に弱い亀裂
911	230	226		W0456	44.0×58.5×18.0	38.1	完形	An-A	×	○	×		チ16	自然面残置
912	231	223		W5622	49.5×33.5×12.5	18.7	完形	An-A	○	○△	×		ツ12	微細剥離痕
913	231	223		W5669	49.4×29.0×11.0	14.3	完形	An-A	×	○△	△		ツ12	微細剥離痕
914	231	226		W0105＋W1346	42.0×79.2×13.0	28.8	完形	An-A	×	○	×	接42	ツ14・テ16	
915	231	226		W0114	37.0×53.5×10.5	16.8	完形	An-A	○	×	×		ツ14	
916	231	226		W0066	32.0×44.0×12.0	10.9	完形	An-A	×	○	×		ト14	
917	231	226		W0079	25.0×58.0×8.5	9.3	完形	An-A	×	×	○		テ13	自然面残置
918	231	223 226		W0077＋W4724	32.2×58.5×10.0	12.2	完形	An-A	×	○	?	接43	ツ10	末端加工と折損の先後不明
919	231	226		W0136	36.0×45.0×12.5	13.6	完形	An-A	○	○	×		ツ14	自然面残置
920	232	226		W0310	38.8×43.8×15.2	20.3	完形	An-A	×	○△	×		タ13	微細剥離痕
921	232	226		W0028	29.0×29.2×6.0	4.6	半折	An-A	×	○	×		チ16	
922	232	223		W5208	29.0×33.8×6.5	5.4	折損	An-A		○			チ11	
923	232	226		W0024	27.8×59.0×14.2	19.4	完形	An-A	×	○	×		チ15	
924	232	223 226		W1027＋W4025	52.0×62.8×15.2	30.4	完形	An-A	×	×	○	接44	チ10・ツ13	Scか？
925	232	226		W0125	36.8×55.2×11.8	15.2	完形	An-A	×	×	○		ツ14	
926	232	226		W0176	37.5×18.8×9.8	5.5	折損	An-A	×	○	×		ツ15	
927	232	223		W5513	33.0×18.0×7.0	2.9	折損	An-A	×	○	×		ツ12	
928	232	223		W5090	35.8×15.5×6.5	2.5	折損	An-A	×	○	×		ツ11	
929	232	223		W5284	25.1×23.5×5.8	2.3	完形	An-A	×	○	○		タ11	
930	233	226		W0902	43.0×54.5×19.2	36.3	完形	An-A	×	×	○		ソ12	加工量少ない
931	233	226		W1896	30.5×40.3×8.0	8.2	完形	An-A	×	○	×		ニ16	加工量少ない
932	233	223		W4381＋W4382	25.4×41.6×6.0	7.3	完形	An-A	○?	○?	○	接45	チ 8	亀裂顕著
933	233	226		W2186	39.5×25.0×9.0	6.3	折損	An-A	×	△	△		ツ17	
934	233	223		W5106	25.0×31.0×4.5	2.9	完形	An-A	×	△	△		ツ11	
935	233	226		W1312	31.0×23.0×6.0	3.3	折損	An-A	○	×	×		テ13	
936	233	226		W0396	35.5×63.5×13.0	20.1	完形	An-A	○	○	×	接29	ソ17	石核か？　白峰
未報告				W0348	25.1×26.2×7.0	3.4		An-A					ソ13	
未報告				W0139	26.4×45.5×7.4	6.4		An-A					ツ14	
未報告				W2088	11.5×18.3×5.7	0.9		An-A					ツ17	
未報告				W0039	44.3×42.1×13.5	23.5		An-A					チ16	

第103表　３ｃ区ブロック３　加工痕有剥片・使用痕有剥片　属性表

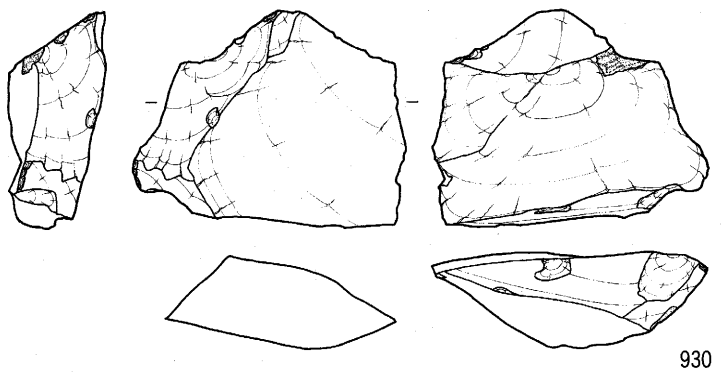
909～932・936は板状かあるいは薄い剥片の一部に不規則な加工が認められるものである。打面部，側縁部，尾部，折損部などの加工部位によって，分類可能であるが，形態は一定しない。932は被熱によるとみられる亀裂が観察できる。

933～935は剥片の一部に微細な剥離痕が認められる。剥離痕はエッジが直線的な部分に顕著で，表裏いずれか一方にのみ剥離がみられる。剥離痕の延長はいずれも長さ約20.0㎜ほどである。

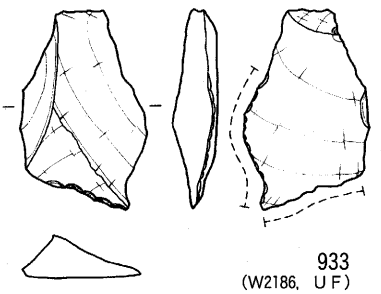
石核（第234図　937～第238図　950）

14点の石核が出土した。他の定形器種に比べて組成比が低く0.6％である。形態的な内訳は，表裏交互に剥片剥離を進行させる横長剥片石核（937～943）が７点，中形剥片の側縁部に作業面を設定して打面調整を行わないまま平坦面を打撃して剥片剥離を行う石核（944～947）が４点，打面転移が著しいサイコロ状の石核（948～950）が３点である。なおサイコロ状の石核は被熱による亀裂を留めるものが多く，剥離面が被熱によって形成された可能性もある。以下，個体毎に説明を加える。

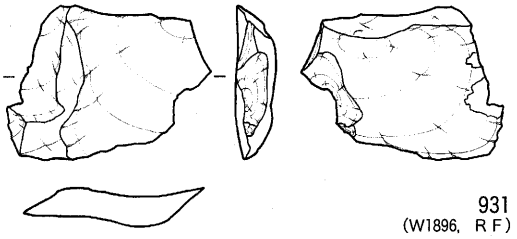
937は板状剥片を素材として交互剥離により幅30.0～60.0㎜大の剥片を剥取する。図左側縁の細部加工は急角度で正面鋸歯状に施される。スクレイパーに転用されたか，角錐状石器などへの転用過程か，いずれかの可能性がある。剥片剥離の途上で半折する。



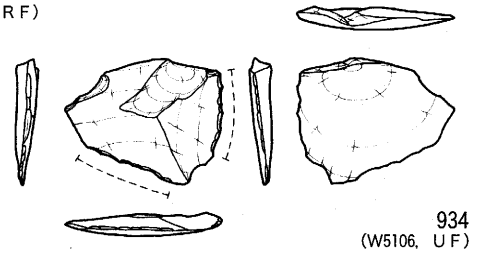
930
(W0902, RF)



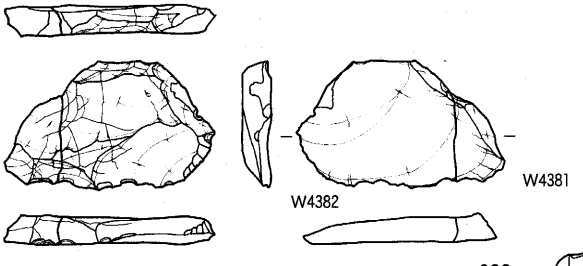
933
(W2186, UF)



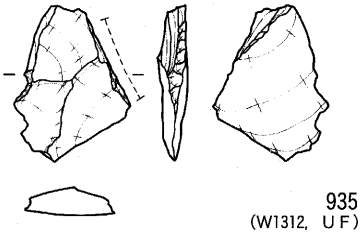
931
(W1896, RF)



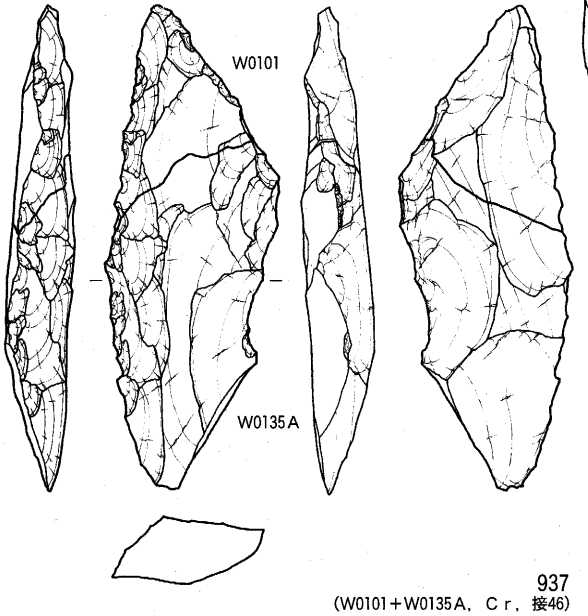
934
(W5106, UF)



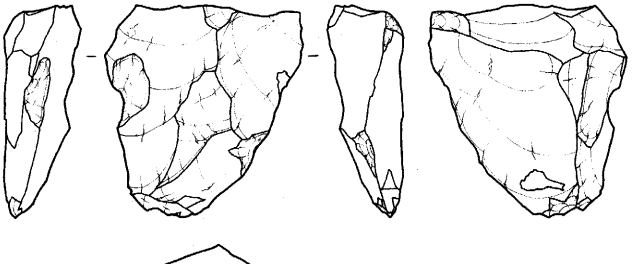
932
(W4381+W4382, RF, 接45)



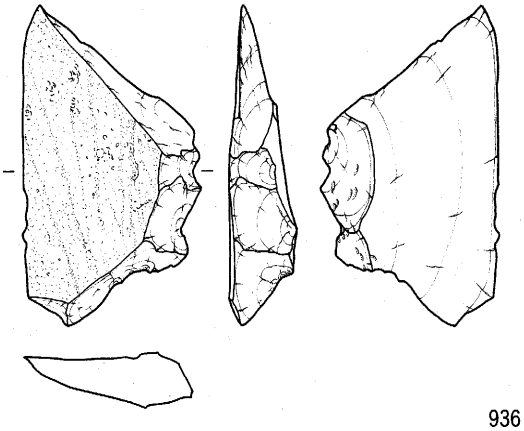
935
(W1312, UF)



937
(W0101+W0135A, Cr, 接46)

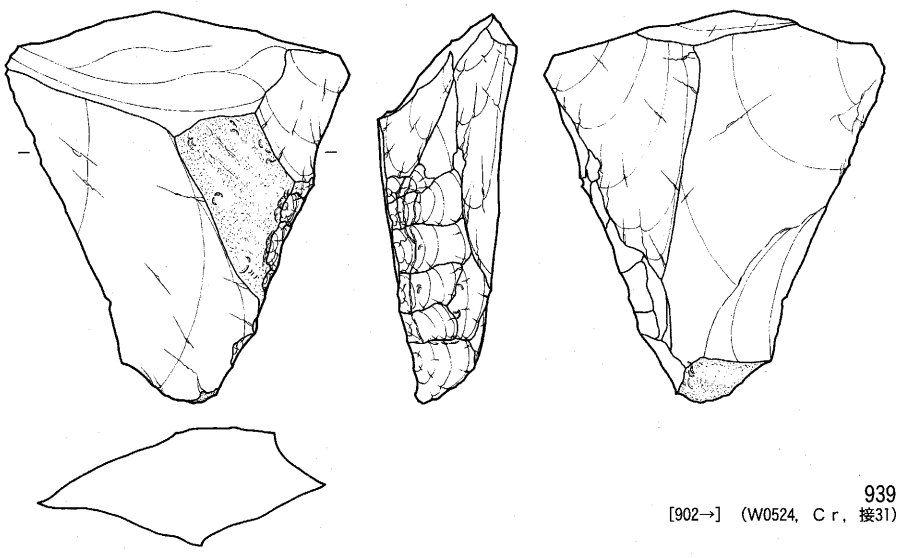


938
(W2144, Cr)

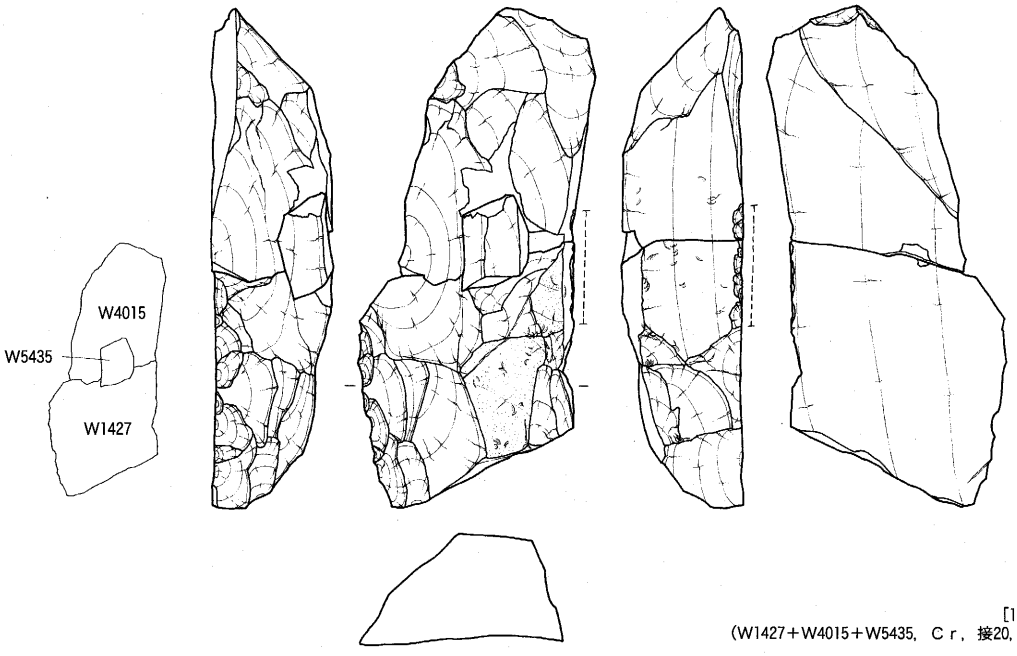


936
[1054→] (W0396, RF, 接29, 白峰)

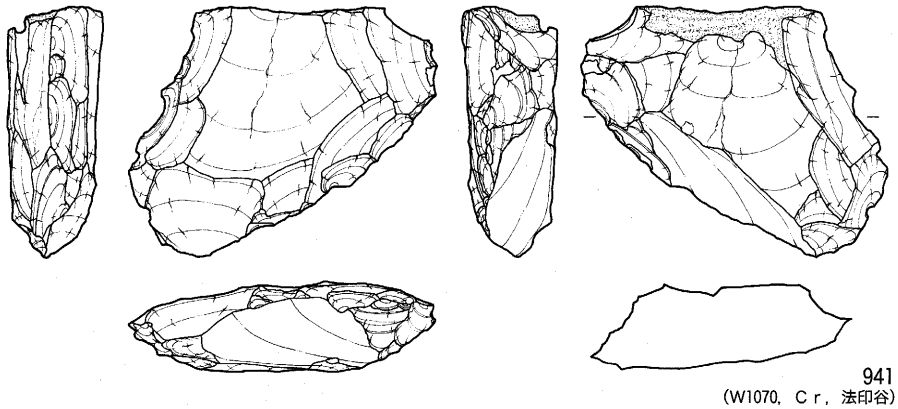
第233図　3c区出土石器実測図20　ブロック3　RF・Cr　(S=2/3)



939
[902→] (W0524, Cr, 接31)



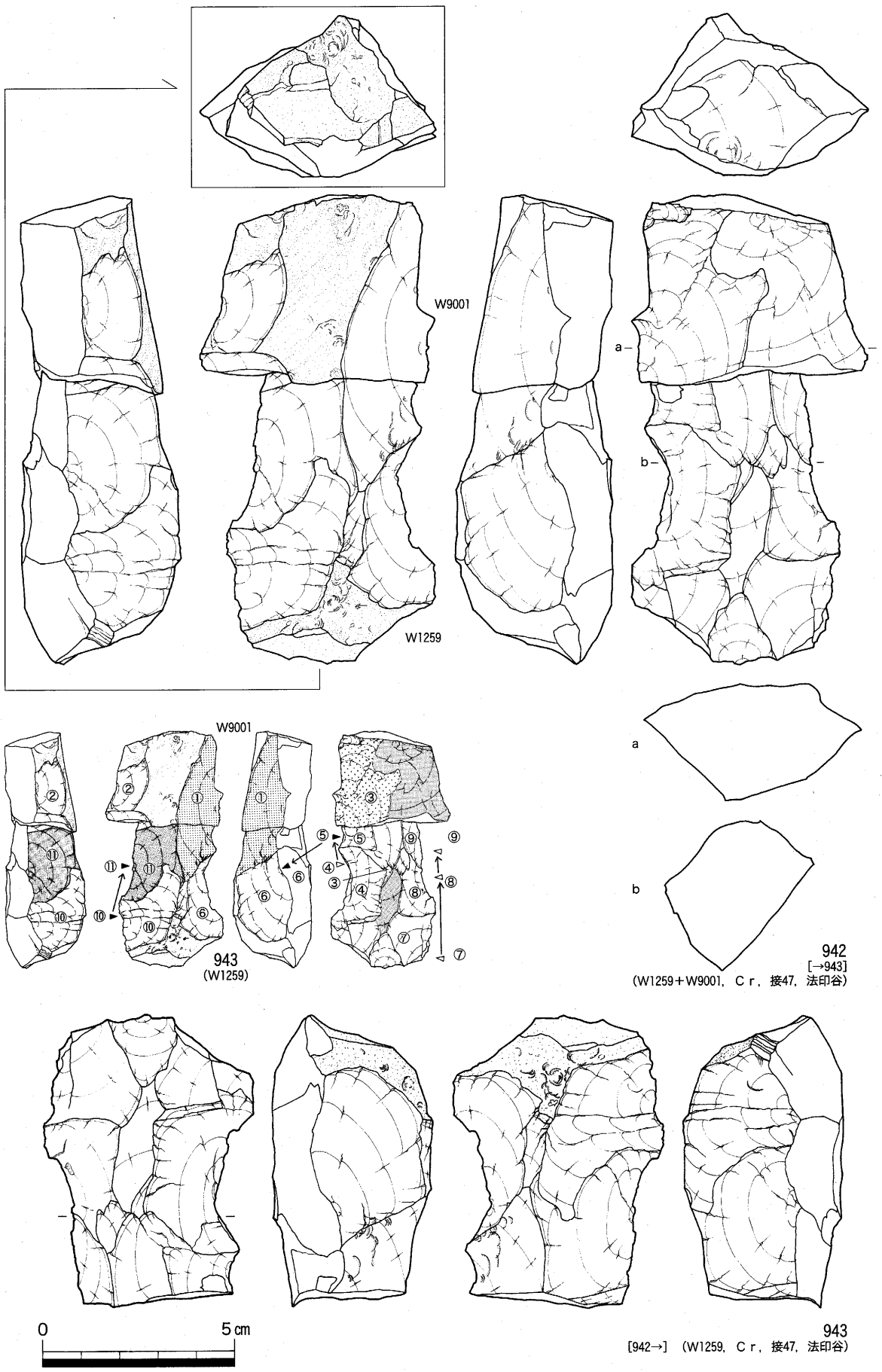
940
[1026→]
(W1427+W4015+W5435, Cr, 接20, 白峰)



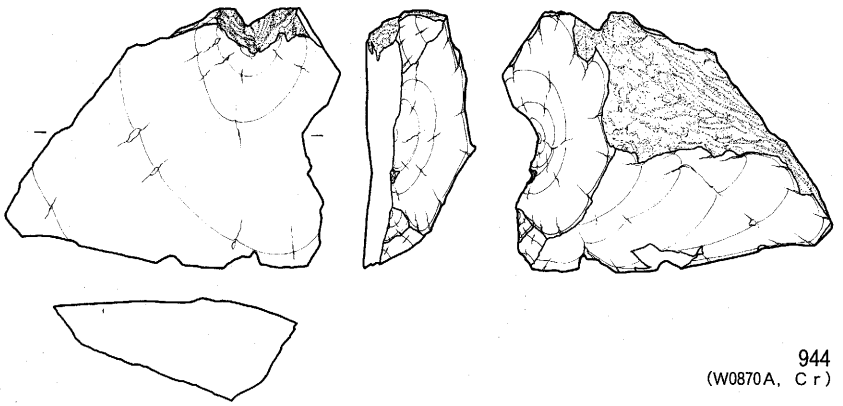
941
(W1070, Cr, 法印谷)

0 5cm

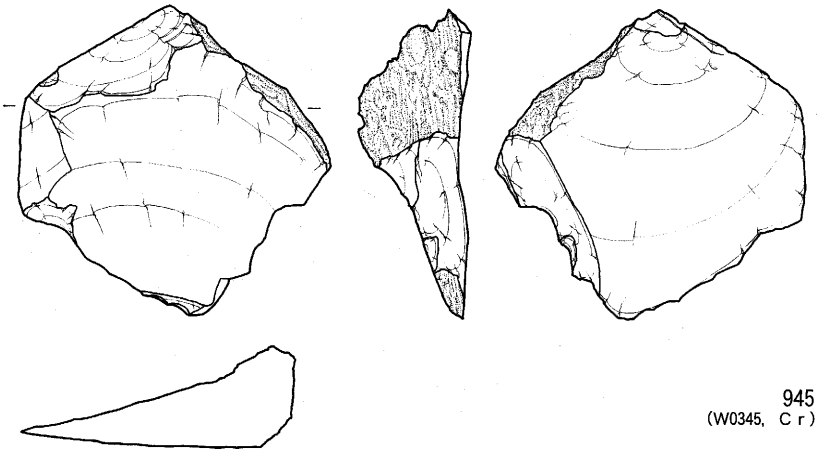
第234図　3c区出土石器実測図21　ブロック3　Cr　(S=2/3)



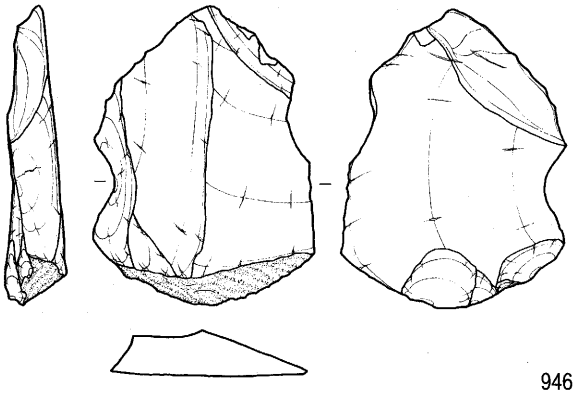
第235図　3c区出土石器実測図22　ブロック3　Cr　(S=2/3)



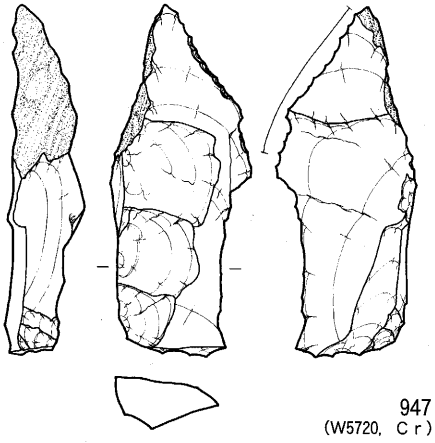
944
(W0870A, Cr)



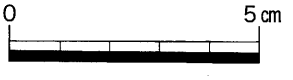
945
(W0345, Cr)



946
(W0904, Cr)



947
(W5720, Cr)



第236図　3ｃ区出土石器実測図23　ブロック3　Cr　(S=2／3)

938は長さ約60.0㎜の不定形剥片の側縁に作業面を設定し長さ30.0㎜ほどの剥片を剥取する。939は接合資料31（902）に属する交互剥離の大形石核である。扇状の剥片903のネガ面と反対側に最終作業面がみられる。940は厚さ22.0㎜の棒状の石核で，図左側縁に打点を左右にずらしながら寸詰まりの剥片を剥取した剥離面がみられる。また，節理に沿った平坦な裏面には長さ50.0㎜以上のネガ面を留める。表面には潜在割れの小片W5435が接合する。なお，左下端部には急角度な加工が施され，さらに右側縁には使用痕と目される微細剥離痕が延長24.0㎜にわたって観察できる。941は厚さ約20.0㎜の礫打面剥片の周縁を求心状に剥片剥離するものである。作業面の幅は30.0～45.0㎜ほどである。942は棒状石核の接合体。縦長状に剥離した方柱状剥片の各面を作業面に使用し，打面を転移しながら70.0～90.0㎜幅の剥片を剥取する。半折後の943も，作業面幅を40.0㎜ほどに減じながら剥片剥離を進める。944～946は剥片の側縁部に30.0～40.0㎜大の作業面をもつ小形の石核である。947は節理に沿って剥離された板状剥片の小口部にみられる平坦な剥離面を打面として打点を横方向にずらしながら15.0～20.0㎜の寸詰まりの剥片を剥取する石核である。５区に多くの類例がある。

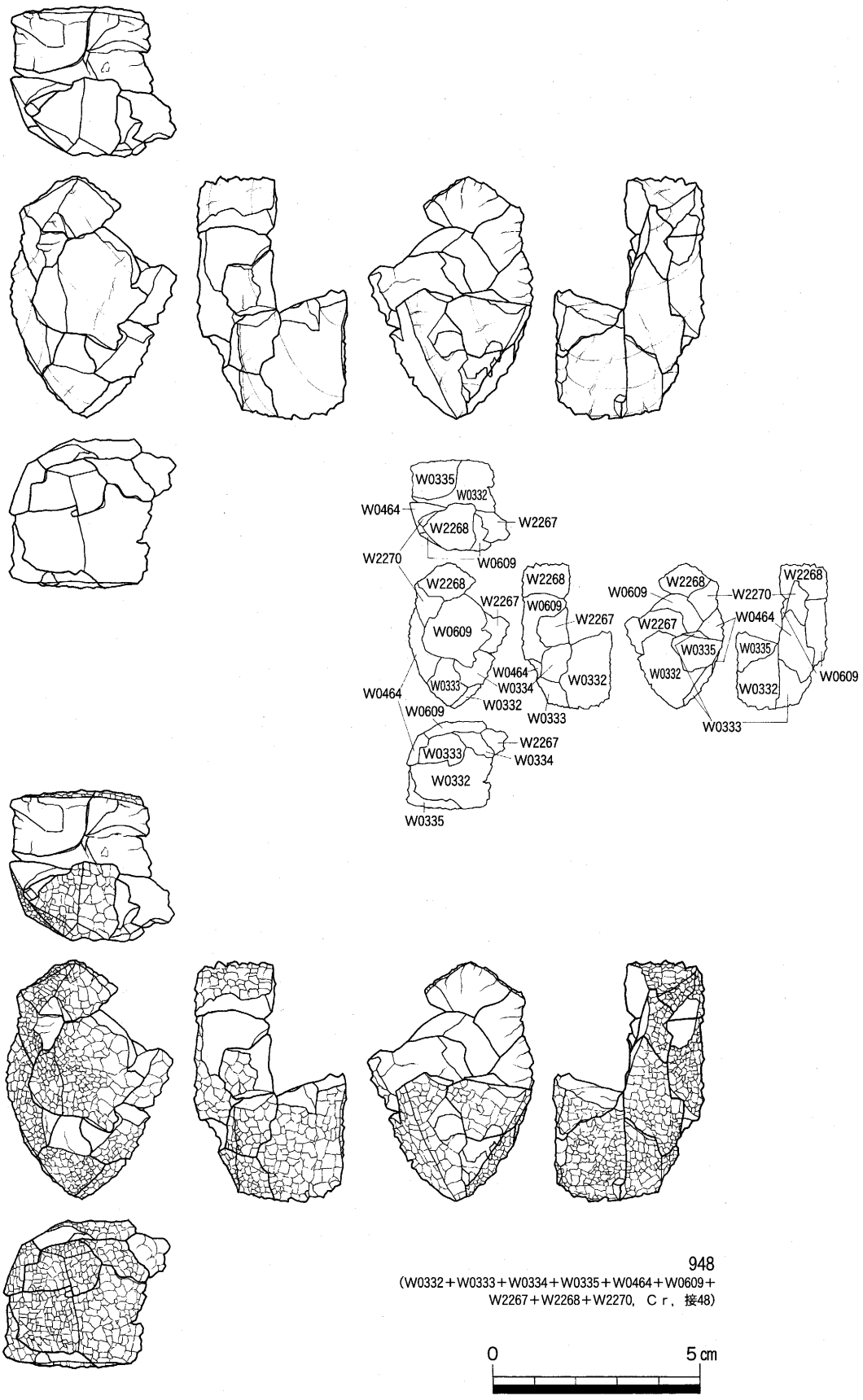
948～950は被熱のある石核である。被熱面の亀裂や変形が著しく，剥離面の観察が難しいものもあるので，詳細な説明ができない。ただし，被熱状況はそれぞれ異なっており，948は全面に亀裂が及んで細かく砕けるのに対して，949は亀裂が限られた箇所に顕著にみられる。また，950は亀裂部分の表面がどのような作用か不明だが丸みを帯びている。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量(g)	遺存状態	石材	打面調整	面転移	接合	グリッド	備　考
937	233	225	49	W0101＋W0135A	96.5×34.5×14.0	39.1	完形	An-A	○	○	接46	ツ14・ツ16	Scに転用か？
938	233	225		W2144	41.9×39.2×15.0	18.6	半折	An-C	×	○		チ17	
939	234	225		W0524	78.0×68.0×28.0	100.0	半折	An-A	×	○	接31	チ17	
940	234	223 225	51	W1427＋W4015＋W5435	99.8×47.0×24.0	111.9	完形	An-A	×	○	接20	テ12・テ14	微細剥離痕　白峰
941	234	225		W1070	49.7×60.5×19.0	54.0	完形	An-C	×	○		ツ14	法印谷
942	235	225		W1259＋W9001	122.8×62.0×42.0	282.7	折損	An-A	×	○	接47		法印谷
943	235	225		W1259	77.0×55.0×42.0	159.0	完形	An-A	×	○	接47	テ15	法印谷
944	236	225		W0870A	51.5×65.5×22.0	54.3	完形	An-C	×	×		チ14	RFか？
945	236	225		W0345	61.8×61.5×22.0	44.6	完形	An-C	×	×		タ13	RFか？
946	236	225		W0904	59.5×44.0×12.0	25.9	完形	An-A	×	×		ソ13	RFか？
947	236	223		W5720	70.0×28.0×15.0	19.7	完形	An-A	×	×		チ12	微細剥離痕
948	237	225	50	W0332＋W0333＋W0334＋W0335＋W0464＋W0609＋W2267＋W2268＋W2270	59.0×40.0×36.5	57.1	折損	An-A	×	○ 分割	接48	テ15	亀裂顕著
949	238	223	50	W4771＋W4782＋W4783	57.2×59.3×29.0	86.0	完形	An-A	×	×	接49	チ10	亀裂顕著
950	238	223	50	W4403	29.0×28.4×18.0	15.5	折損	An-A	×	×		タ９	亀裂顕著

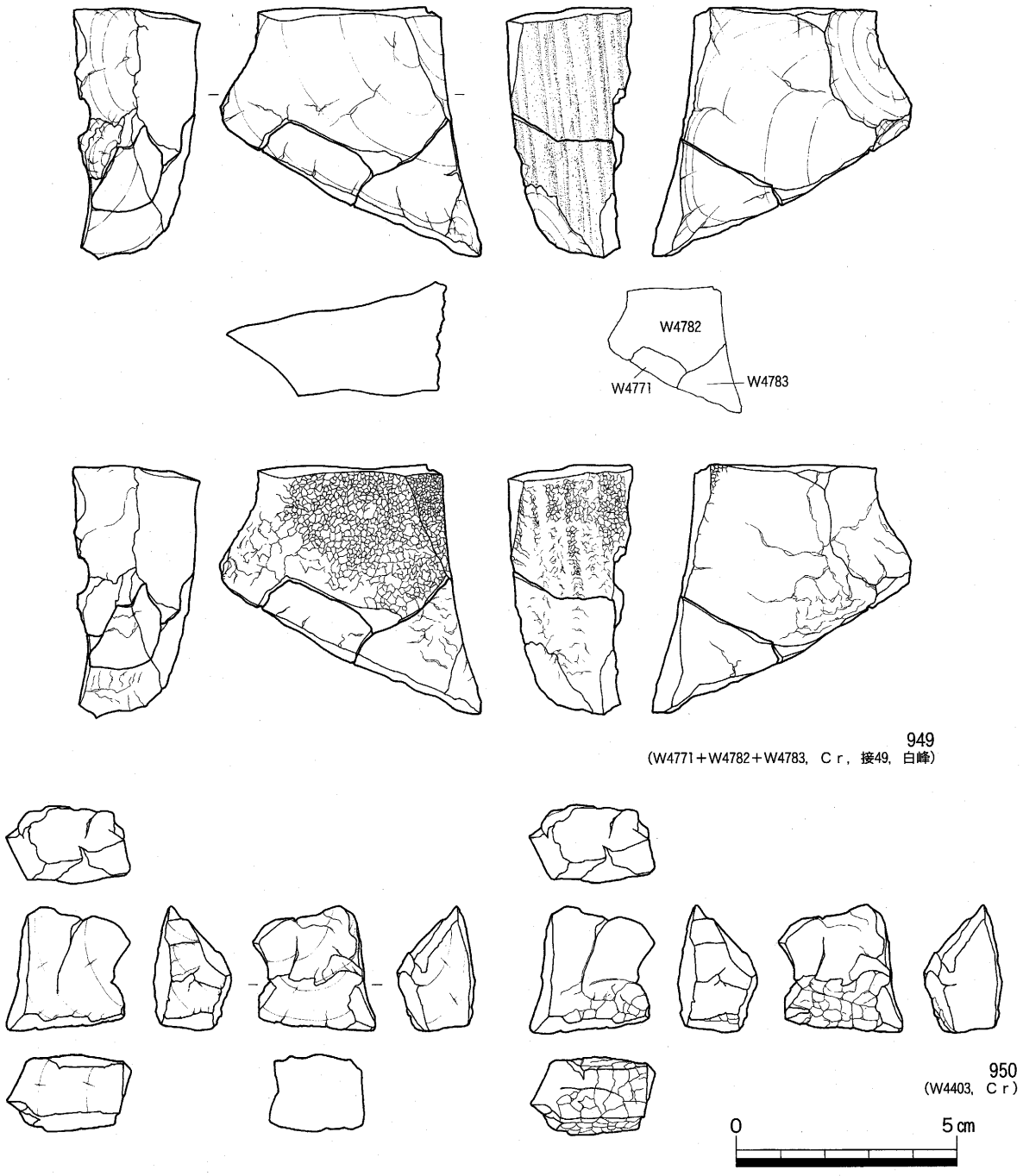
第104表　３ｃ区ブロック１　石核　属性表

その他の剥片（第239図　954～第240図　960）

954は打面を山形に整形し，稜線付近を打撃して連続的に剥取された典型的な翼状剥片である。このような剥片は当調査区には少ない。955～958は角錐状石器あるいはナイフ形石器の整形加工時に生じた剥片である。背面の打面側と尾部側に整形加工の剥離痕がみられる。そのうち957は周縁の整形加工が間隔を置いて粗く鋸歯状に施されており，整形加工初期段階における欠損時の剥片と思われる。959・960はⅡ種接合する剥片で，959は平坦面上の打点を直線的に後退させる剥片剥離，960は風化顕著な剥離面を背面に留め，あらかじめ節理に沿った潜在割れが生じていた部分を打撃して同時割れした剥片の接合である。



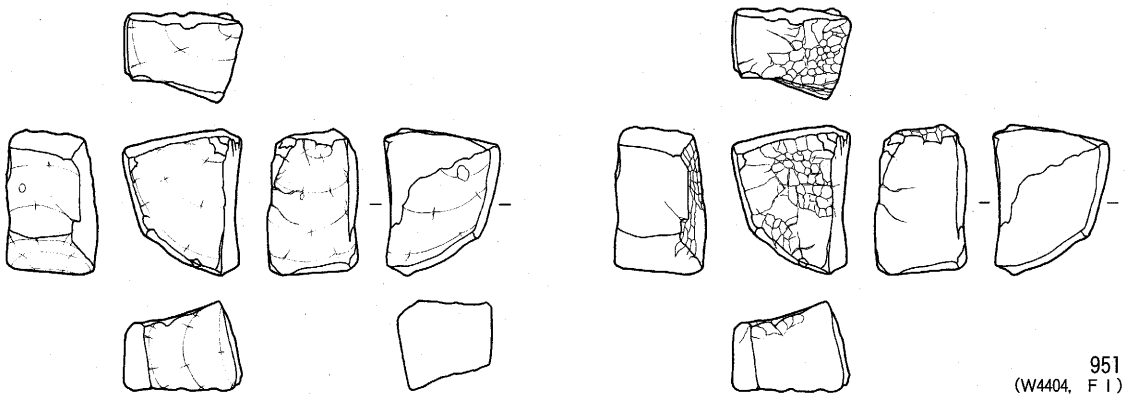
第237図　3ｃ区出土石器実測図24　ブロック3　Cr（受熱）（S＝2／3）

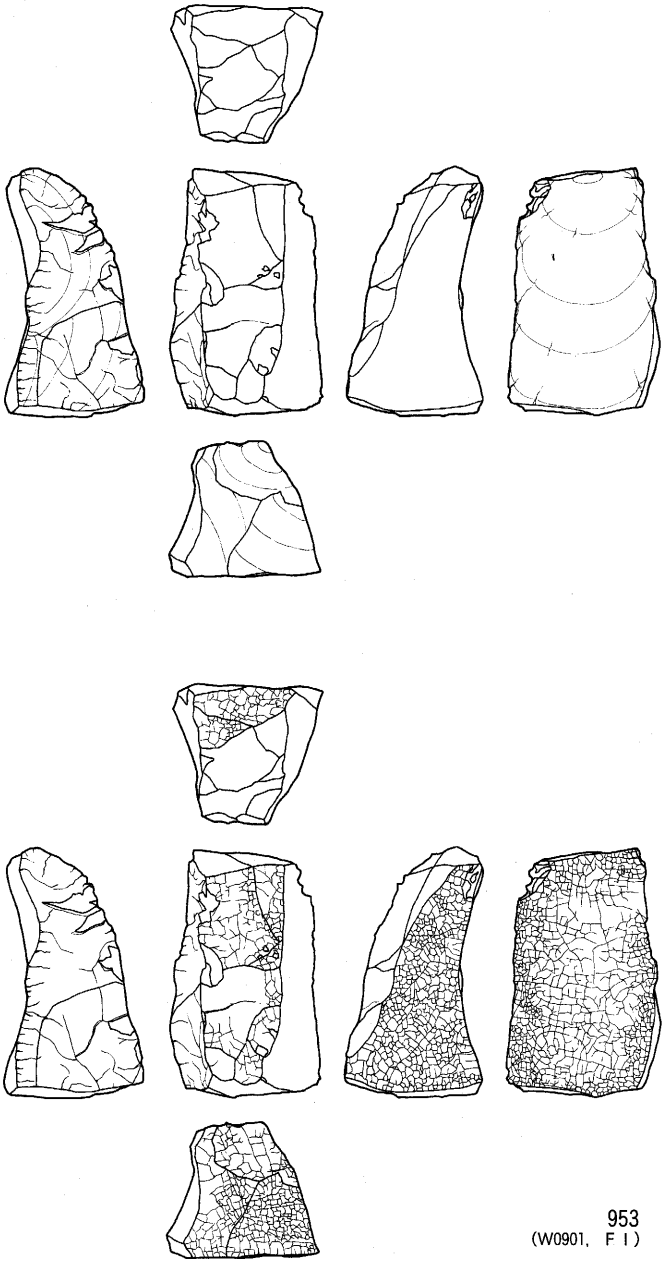


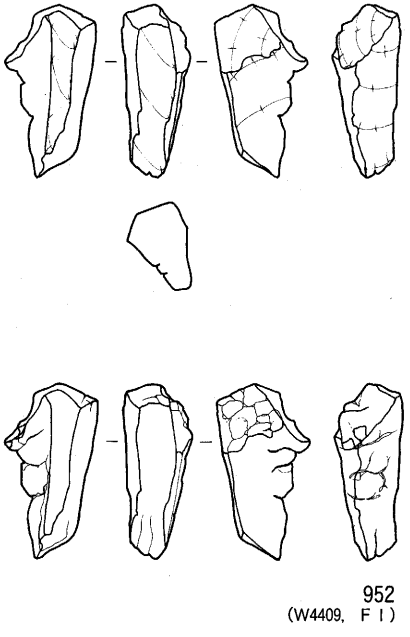
第238図　3c区出土石器実測図25　ブロック3　Cr（受熱）（S＝2／3）

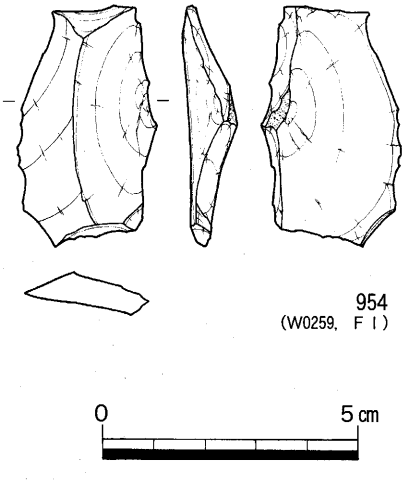
受熱剥片（第239図　951～953，写真図版50）

石核の一部で見られた受熱状況は，剥片3点にもみられる。951は板状素材の小口部を打撃して得られたサイコロ状の剥片で，打面及び側縁に亀裂がある。952は亀裂部の変形が著しい剥片で，元形状は不明である。953は高さ27.0㎜，厚さ30.0㎜の板状剥片小口部を打撃して得られた縦長剥片。主要剥離面側に特に顕著に亀裂がみられることから，剥片剥離後に被熱したものと考えられる。

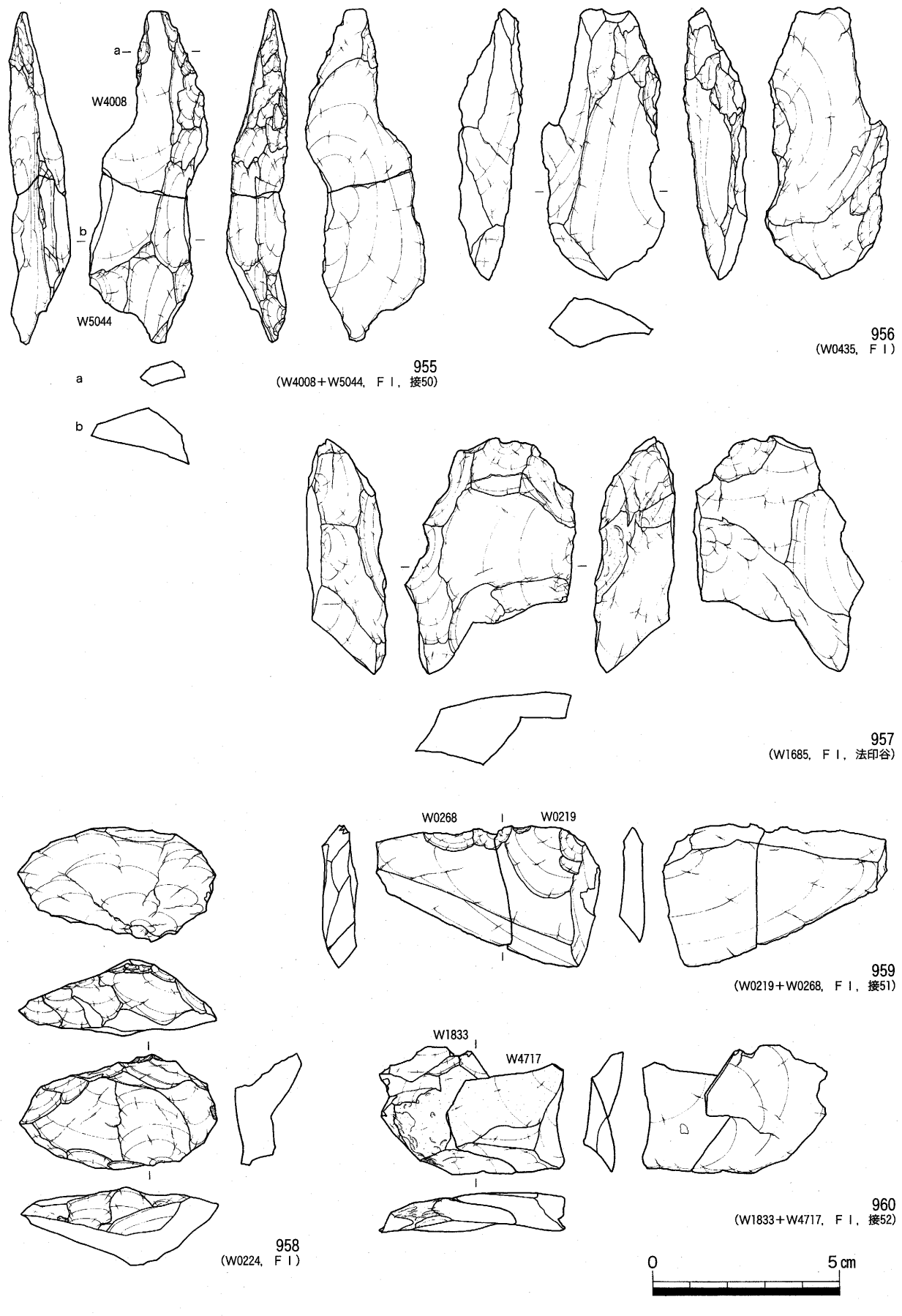








第239図　3ｃ区出土石器実測図26　ブロック３　FI（受熱）（S＝2／3）



第240図　３ｃ区出土石器実測図27　ブロック３　FI　(S＝2／3)

（6）３ｃ区ブロック４

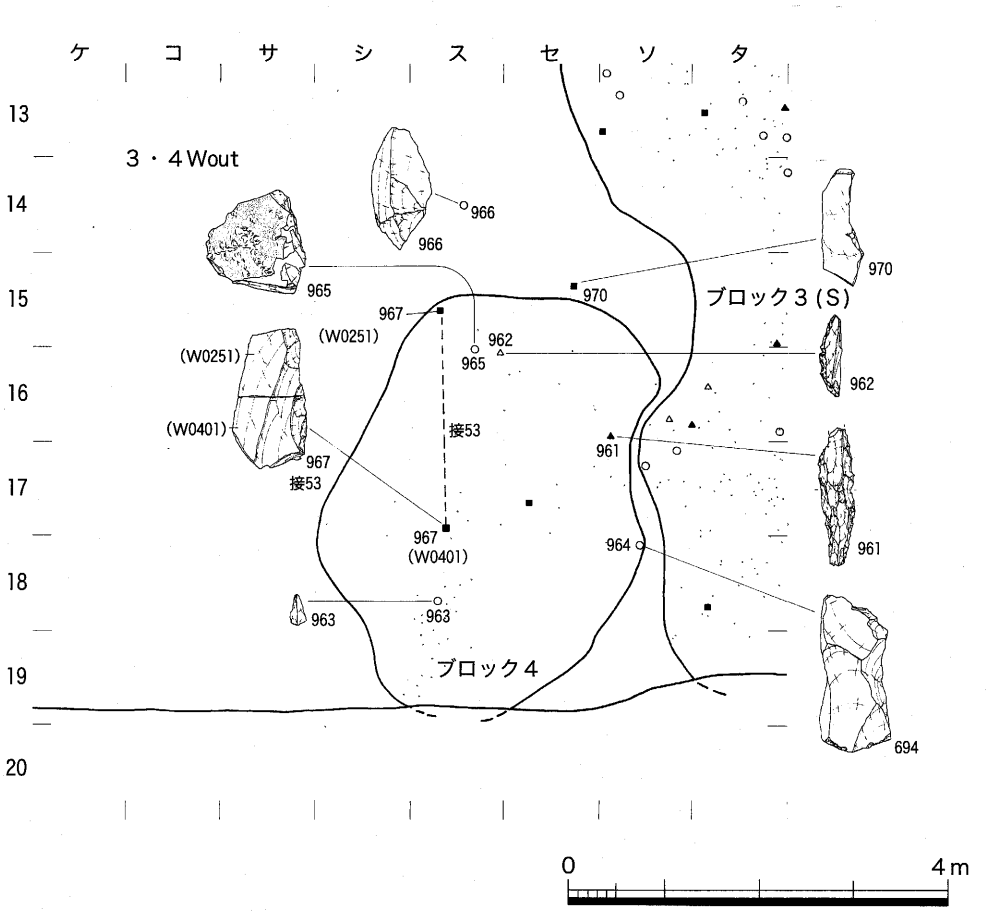
＜石器分布＞

ブロック３の西に隣接するブロックである。対象面積12㎡ 内に64点の石器が分布する。分布密度は5.3点と３ｃ区にあって散漫で，平均重量が5.7ｇと比較的大きい。接合関係は対象範囲内で３件，点数は４点で接合率は母数が少ないために6.3％と高い。いずれもⅡ種接合である。器種組成は，少量ながら角錐状石器，ナイフ形石器，加工痕有剥片，石核が揃う。そのほか，頁岩製の縦長剥片やサヌカイト製の縦長剥片石核がある。

器種	点数	比率（全）	比率（定形）	重量（g）	重量比（全）	備考
Tr	1	1.6%	14.1%	18.8	5.2%	（ ）はⅡ種接合片で外数とした
Kn	1	1.6%	14.1%	3.6	1.0%	
Sc						
RF	3	4.7%	42.9%	88.1	24.3%	
UF						
Cr	2（1）	4.7%	28.6%	50.0	13.8%	
Fl	33（1）	53.2%		191.8	52.9%	
Ch	22	34.4%		10.1	2.8%	
RM						
GS						
HS						
Sa						
Po						
合計	62（2）	100.2%	99.7%	362.4	100.0%	

属性項目	数値
面積（㎡）	12
石器数（点）	64
分布密度（点／㎡）	5.3
平均重量（g）	5.7
定形石器保有率（％）	12.5
定形石器重量比（％）	44.3
接合固体数（点）	4
接合率（％）	6.3
接合重量（g）	100.3
接合重量比（％）	0.3

第105表　３ｃ区ブロック４　石器分布内容総括表



第241図　３ｃ区ブロック４　器種別石器分布図　（S＝1／80）

＜主要石器＞

角錐状石器（第242図　961）

1点出土している。先端部を折損するが，現存長で73.0㎜の大きさを備えた二面加工品である。基部に自然面を残置し，裏面は大きく平坦な剥離面。初期の整形段階で稜上から加工し，その後裏面から周縁を加工した後，再度最頂部付近の稜上から細部の加工を施す。身幅に対して甲高である。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	断面形	石材	整形加工	接合	グリッド	備考
961	242	241		W2133	71.5×19.5×13.5	18.8	先端欠	△	An-A	2-W		ソ16	基部に自然面残置

第106表　3ｃ区ブロック4　角錐状石器　属性表

ナイフ形石器（第242図　962）

1点出土している。折損する剥片の打面部を主剥離面側から整形加工を施し，折損縁を刃部とする形態である。折損縁には僅かな基部加工がある。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	断面形	石材	整形加工	接合	グリッド	備考
962	242	241		W0253	43.0×12.0×8.5	3.6	一部欠	□	An-C	1-S		ス16	刃部は素材折損面

第107表　3ｃブロック4　ナイフ形石器　属性表

加工痕有剥片（第242図　963・964・965）

いずれも石核の折損片の一部に細部加工を施すものである。964は接26に所属する。965は背面に自然面を有する剥片素材の石核の打面部に細かな加工を施す。打面調整の可能性もあるが，石核の奥行が狭い。963はナイフ形石器か角錐状石器の調整剥片に軽度の加工を施したもの。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	石材	打面	側縁	末端	接合	グリッド	備考
963	242	241		W0406	16.0×9.0×5.0	0.5	小片	An-C	×	×	×		ス18	
964	242	241		W0398	82.5×37.5×18.0	55.0	完形	An-A	×△	○	○	接26	ソ18	微細剥離痕
965	242	241		W0252	54.5×52.5×13.0	29.8	半折	An-A	○	×	×		ス16	Crか？　国分寺

第108表　3ｃ区ブロック4　加工痕有剥片　属性表

石核（第242図　967）

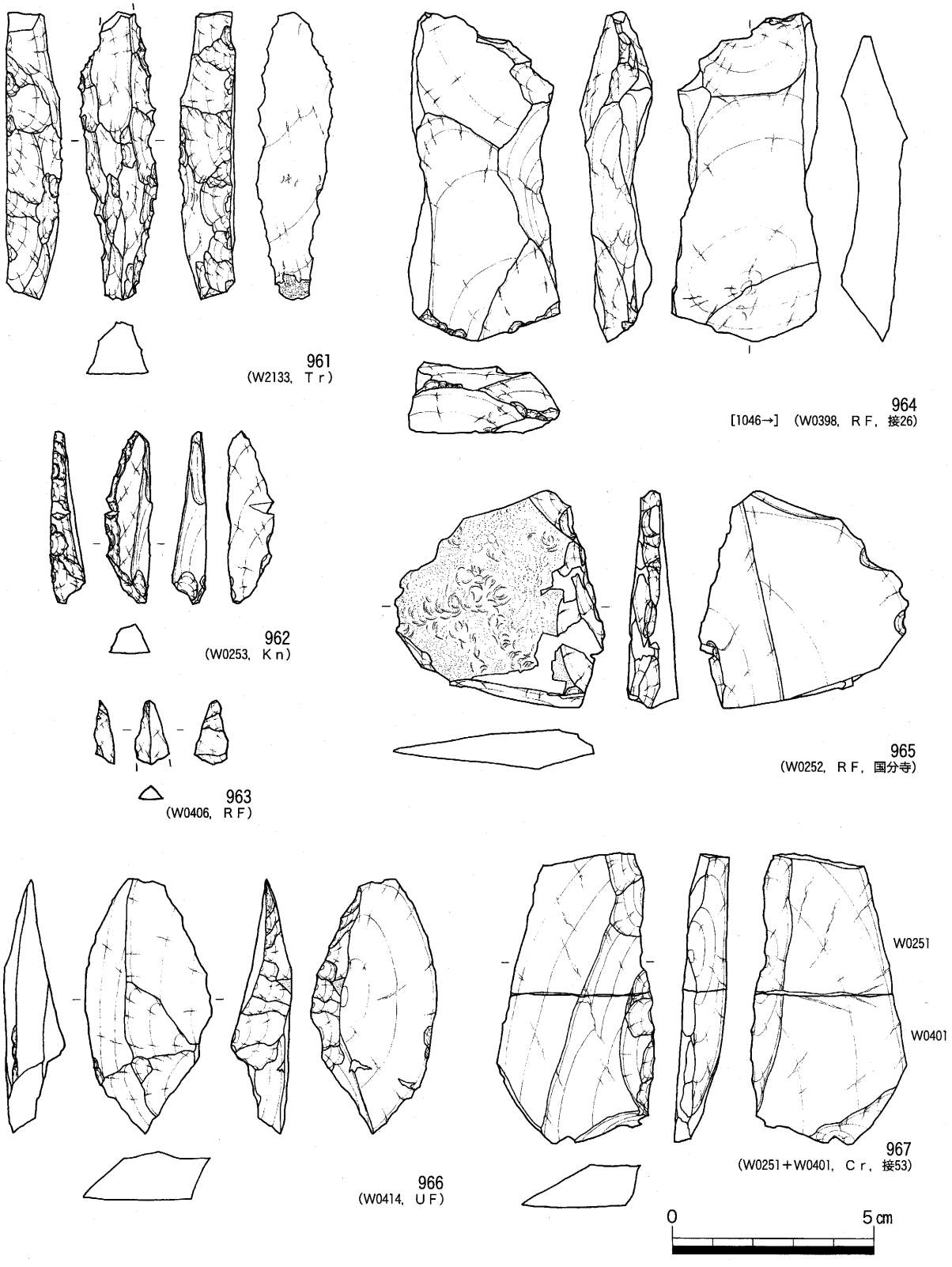
ブロック内でⅡ種接合する石核が1点ある。967は剥片の主剥離面を石核底面として，打面調整を施しながら石核幅一杯の横長剥片を剥出する翼状剥片石核である。最終作業面幅は65.0㎜をはかる。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	石材	打面調整	面転移	接合	グリッド	備考
967	242	241	49	W0251＋W0401	74.0×39.5×11.0	36.2	完形	An-A	◎	×	接53	ス15・ス17	

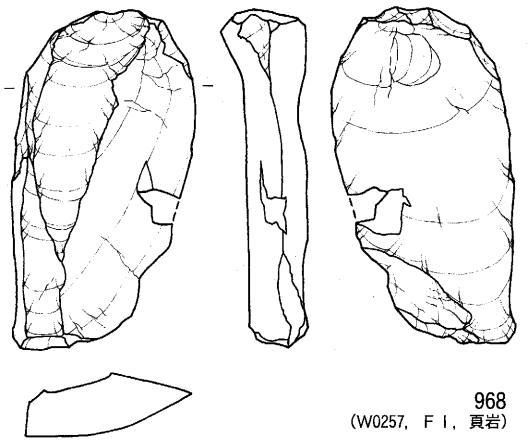
第109表　3ｃ区ブロック4　石核　属性表

剥片（第243図　968・969，写真図版49）

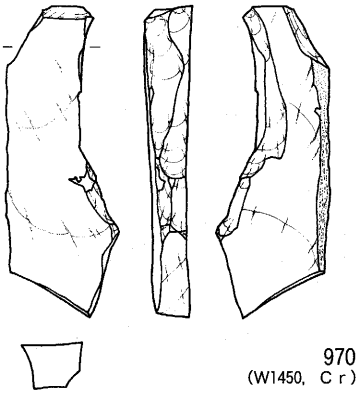
968は黄色を帯びた頁岩製の剥片である。横長に剥離した素材の側縁に打面を設定し，4回ほどの打面調整を施して，連続して最低3回の縦長剥片を剥ぎ取り，打面部中央を大きく打撃して得られた長さ68.0㎜の縦長剥片である。同一石材の剥片が近隣外縁部で出土（969）している。分布図を第213図に示した。



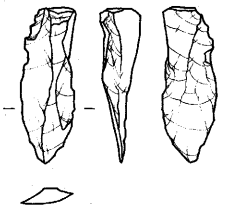
第242図　3ｃ区出土石器実測図28　ブロック４　Tr・Kn・RF・UF・Cr　(S=2／3)



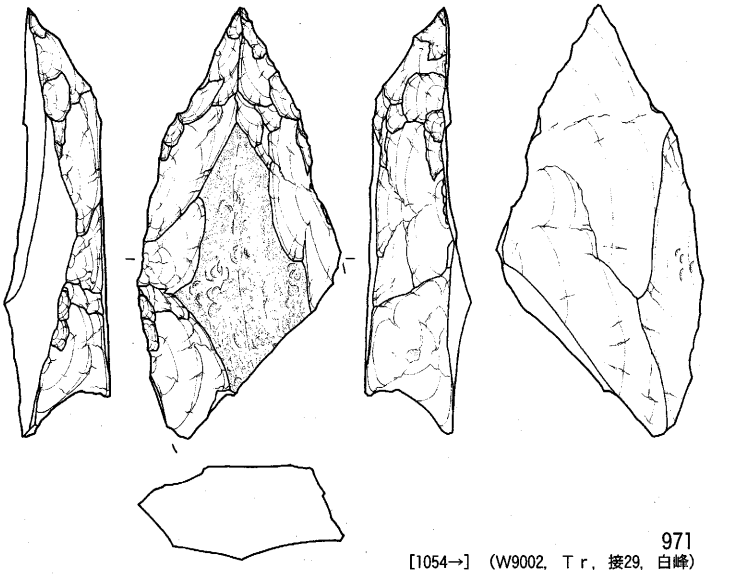
968
(W0257, Ｆｌ, 頁岩)



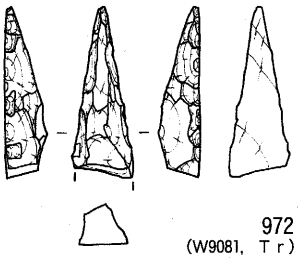
970
(W1450, Ｃｒ)



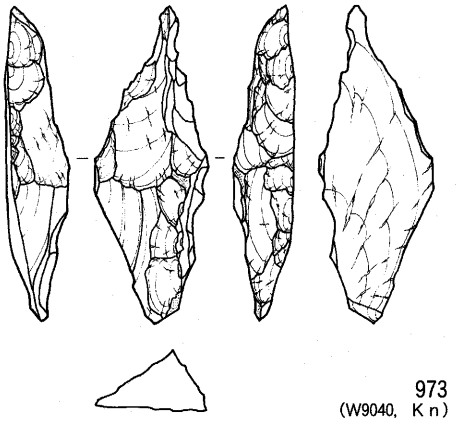
969
(W0027, Ｆｌ, 頁岩)



971
[1054→] (W9002, Ｔｒ, 接29, 白峰)



972
(W9081, Ｔｒ)



973
(W9040, Ｋｎ)

0 5cm

第243図　３ｃ区出土石器実測図29　ブロック４・外縁部　Tr・Kn・Cr・Fl　(S＝2／3)

（7） 3ｃ区外縁部および出土位置不明分

ブロック3と4の周辺に広がる散漫な石器分布である。

角錐状石器（第243図　971・972）

971は石核を転用した角錐状石器である。周縁に顕著な整形加工を施し，先端部を作り出す。図の左側縁には石核作業面をとどめ，打面部に施された整形加工は打面調整の可能性がある。先端部の整形加工はそれらの面を切って施される。なお，接29に所属し，ＲＦが打面調整面末端にかろうじて接合する。

972は二面加工角錐状石器の先端部片である。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	断面形	石材	整形加工	接合	グリッド	備考
971	243		51	W9002	86.0×40.5×21.0	62.7	完形	□	An-A	2-S	接29		Crか？　白峰
972	243			W9081	34.0×12.0×8.3	26	半折	□	An-A	2-W			

第110表　3ｃ区出土位置不明　角錐状石器　属性表

ナイフ形石器（第243図　973）

先端部を尖らせる二側縁加工ナイフ形石器である。先端部の整形加工は器体の極端な細身化を図っており，基部側の幅広い剥片末端部と対照的である。角錐状石器への加工途上の可能性が高い。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	断面形	石材	整形加工	接合	グリッド	備考
973	243			W9040	63.0×23.0×12.5	11.6	完形	△	An-A	2-S			

第111表　3ｃ区出土位置不明　ナイフ形石器　属性表

加工痕有剥片・使用痕有剥片（第242図　966）

966は丁寧な打面調整を施して剥離した横長剥片の末端に微細剥離痕がみられるもの。先行剥離面は複数ある。そのほか，加工痕有剥片が3点出土している。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	石材	打面	側縁	末端	接合	グリッド	備考
966	242	241		W0414	31.5×63.5×15.0	21.7	完形	An-A	×	×	△		ス14	
未報告				W4077	16.7×31.8×10.2	3.1		An-A					ト7	
未報告				W4080	15.8×25.9×8.7	3.0		An-A					ト7	
未報告				W4228	24.6×32.4×5.0	3.1		An-A					テ7	

第112表　3ｃ区外縁部　加工痕有剥片・使用痕有剥片　属性表

石核（第243図　970）

石理に沿って剥離した板状の剥片の小口部に作業面を設定し，平坦な打面を若干左右にずらしながら先行剥離面稜線を取り込みながら縦長剥片を剥離する石核である。当遺跡にあって唯一の備讃瀬戸形の縦長剥片石核と言える。

番号	実	分	写	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量（g）	遺存状態	石材	打面調整	面転移	接合	グリッド	備考
970	243	241	49	W1450	62.0×22.0×9.5	13.8	完形	An-A	×	×		セ15	縦長剥片石核

第113表　3ｃ区外縁部　石核　属性表

（8）接合資料

３ｃ区では合計58件の接合資料を確認した。剥片同志のⅡ種接合のうち５件は図化できていないが，そのほか53件の接合資料を図化，提示している。

接合種別の内訳は，Ⅰ種接合を含むものが30件，Ⅱ種接合のみのものが28件である。後者のうち，20件は定形器種の接合である。特に角錐状石器のⅡ種接合が多いことが注目される。接合率は個体数で総点数4,856点中133点（2.7%），重量で総重量9,915.1ｇ中2,692.3ｇ（27.2%）。重量でみた場合の接合率は個体数の接合率に比べて約10倍となる。より大形の剥片類あるいは製品の接合が多いことを示す。

３ｃ区の石材は多くがＡｎ-Ａとして肉眼で区分した普通サヌカイトを使用する。３ａ区エリア３でも似た状況で，石理や縞目などがほとんどみられない。３ａ区エリア１・２で行ったような個体識別作業は，何度か試みたが，接合作業においてさほど効率的な区分にはならなかった。つまり，識別の材料が色調に左右されることが多く，色調の違いが，埋没環境による風化状況の違いを反映しており，必ずしも個体を反映する属性ではないためである。したがって，当調査区では接合資料のみを対象として，以下の説明を述べる。

なお，グリッド取り上げを行った３ｃ区北半の石器の出土位置については，機械的に割り振った目安の位置を60%グレーでドットし，そのうち接合対象となるもののみを黒で表現した。したがって，60%グレーで周辺を囲まれている石器は，その１ｍグリッド内における任意の位置を示したものであるので，注意を要する。

番号	挿図番号	図版番号	剥離概要（器種）（遺物掲載番号）	石材	種別	出土位置	構成数
1	245	50	W6482（975）→W6474+6480（Cr）（775）	An-A	Ⅰ・Ⅱ	1	3
2	245		W6440→W6445（977）	An-A	Ⅰ	1	2
3	245	50	W6335（979）→W6582（Cr）（783）	An-A	Ⅰ	2・3Eout	2
4	246		W5909（981）→W6000（Cr）（781）	An-A	Ⅰ	2・3Eout	2
5	246	51	W5941（983）→［W6331（984）］→W6359（Cr）（780）	An-A	Ⅰ	2	3
6	246		W6223（986）→W6368（985）	An-A	Ⅰ	2	2
7	246		W6353（988）→W5824（Cr）（797）	An-A	Ⅰ	2,2·3Eout	2
8	247		W4221（991）→W6403（990）	An-A	Ⅰ	1・2Sout,2·3Eout	2
9	247		W5886（993）→W4249（994）	An-A	Ⅰ	2・3Eout	2
10	247		W4074+W9038（996）→W0075（997）	An-A	Ⅰ・Ⅱ	2・3Eout,3	3
11	248		W5445（1000）→W4196（999）	An-A	Ⅰ	3	2
12	248		W4341（1002）→W4339（1003）	An-A	Ⅰ	3	2
13	248		W4483（1005）→W4708（1006）	An-A	Ⅰ	3	2
14	248		W4578（1008）→W4700（1009）	An-A	Ⅰ	3	2
15	249		W4997+W5042（1012）→W4572（1011）	An-A	Ⅰ・Ⅱ	3	3
16	249		W5021（1014）→W4630（1015）	An-A	Ⅰ	3	2
17	249		W0314+W5360（1017）→W0482（1019）→W4512（1018）	An-A	Ⅰ・Ⅱ	3	4
18	251		W5226（1022）→W5206（1021）	An-A	Ⅰ	3	2
19	251		W5763（1024）→W5721（1025）	An-A	Ⅰ	3	2
20	251	51	W0424+W1838（1027）→W4015+W5435+W1427（Cr）（940）（646）	An-A	Ⅰ・Ⅱ	3	4
21	252		W5371（1030）→W5370（1029）	An-A	Ⅰ	3	2
22	252		W0489（1033）→W0307（1032）	An-A	Ⅰ	3	2
23	254	51	W1299（RF）（882）→W0441（RF）（908）→W0882（1037）→W0457+W1025（1035）→W0891（1036）	An-A	Ⅰ・Ⅱ	3	6
24	255		W1048（1039）→W0141（1040）→W0587（1041）→W0610（1042）	An-A	Ⅱ	3	4
25	257		W1910（1044）→W0363（1045）	An-A	Ⅰ	3	2
26	257		W1924（1047）+W0398（RF）（964）	An-A	Ⅱ	3・4	2
27	258		W0243（1049）→W2005（1050）	An-A	Ⅰ	3	2

第114表　３ｃ区　接合資料総括表１

接合資料番号	挿図番号	図版番号	剥離概要（遺物掲載番号）（器種）	石材	種別	出土位置	構成数
28	259		W0787（1052）→W0298（1053）	An-A	I	3	2
29	259	51	W0396（Cr）（936）→W9002（Tr）（971）	An-A	I	3	2
30	217	47	W1195（Tr）（810）→W5320（Kn）（811）	An-A	I	3	2
31	229	49	W0222＋W2071（RF）（903）→W0939（Cr）（939）	An-A	I	3	3
32	216	46	W0121＋W0677（Tr）（800）	An-A	II	3	2
33	216	46	W0341＋W4006（Tr）（801）	An-A	II	3	2
34	216		W0022＋W0352（Tr）（804）	An-A	II	3	2
35	217	47	W4005＋W9018（Tr）（812）	An-A	II	3	2
36	218	47	W0261＋W4032（Tr）（820）	An-A	II	3	2
37	219	47	W0462＋W0872（Tr）（825）	An-A	II	3	2
38	224	48	W5472（880）→W4011（Kn）（878）	An-A	I	3	2
39	227		W0386＋W1138（RF）（885）	An-A	II	3	2
40	227	48	W0102＋W0651（RF）（890）	An-A	II	3	2
41	228		W0216＋W1045（RF）（901）	An-A	II	3	2
42	231		W0105＋W1346（RF）（914）	An-A	II	3	2
43	231		［W0077（RF）（893）＋W4724］（RF）（918）	An-A	II	3	2
44	232		W1027＋W4025（RF）（924）	An-A	II	3	2
45	233		W4381＋W4382（RF）（932）	An-A	II	3	2
46	233	49	W0101＋W0135A（Cr）（937）	An-A	II	3	2
47	235		［W1259（Cr）（943）＋W9001］（Cr）（942）	An-A	II	3	2
48	237	50	W0332＋W0333＋W0334＋W0335＋W0464＋W0609＋W2267＋W2268＋W2276（Cr）（948）	An-A	II	3	9
49	238	50	W4771＋W4782＋W4783（Cr）（949）	An-A	II	3	3
50	240		W4008＋W5044（955）	An-A	II	3	2
51	240		W0219＋W0268（959）	An-A	II	3・4	2
52	240		W1833＋W4717（960）	An-C	II	3	2
53	242	49	W0251＋W0401（Cr）（967）	An-A	II	4	2
54	未報告		W6465＋W6473	An-A	II	1	2
55	未報告		W1973＋W2095	An-A	II	3	2
56	未報告		W0765＋W0767	An-A	II	3	2
57	未報告		W1853＋W1854	An-A	II	3	2
58	未報告		W5623＋W6590	An-A	II	3,2・3 Eout	2

第115表　３ｃ区　接合資料総括表２

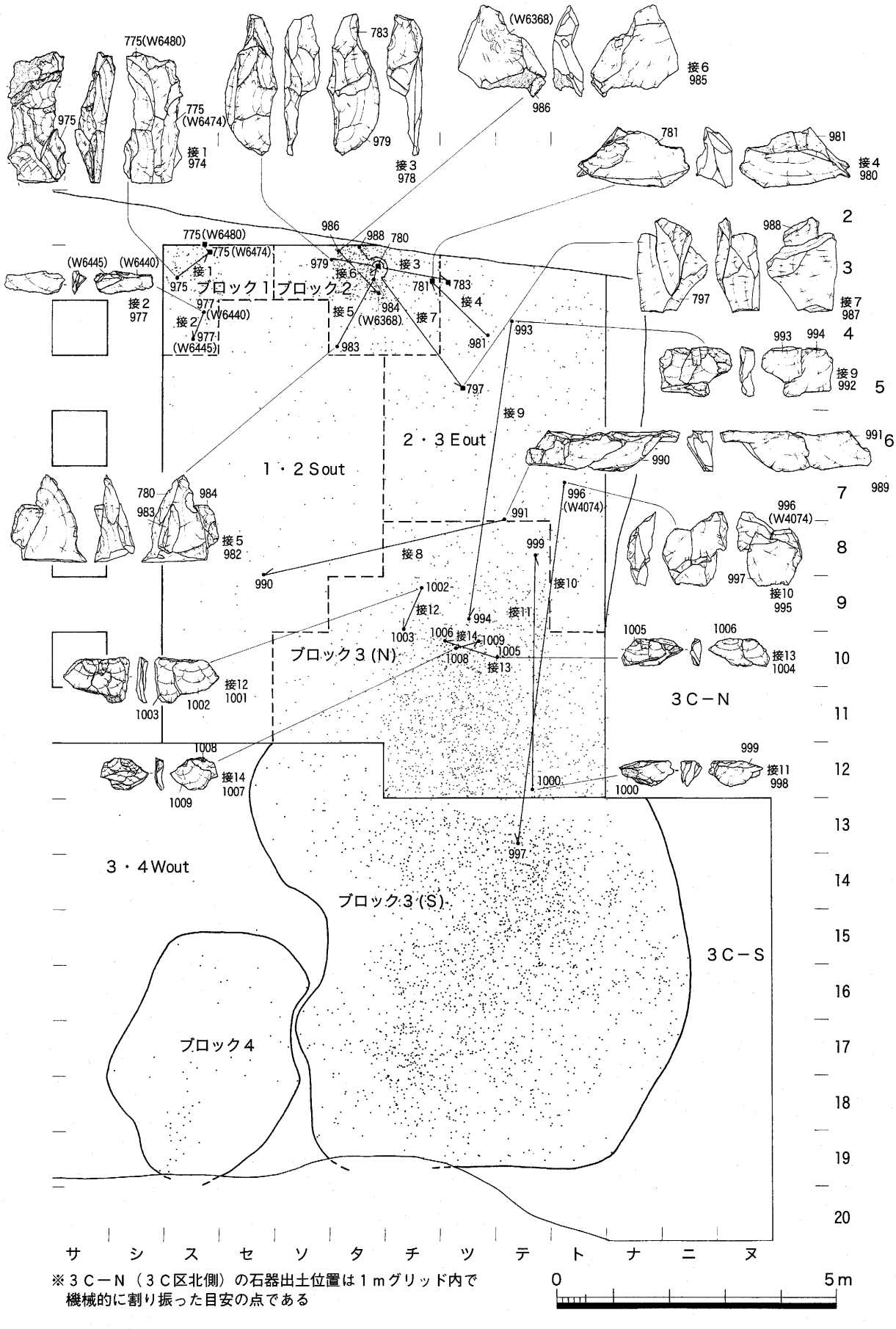
接合資料１（第245図　974～976）

接合状態で長さ94.5㎜，幅42.5㎜，厚さ30.0㎜，重量72.9ｇ。側縁部に自然面をとどめる幅約95㎜の石核の一方を石理に沿わせて作業面に設定し，打面調整を施しながら石核の左右両側で並列的に目的剥片の剥離を行うものである。接合する975は石理に反して剥離した打面調整剥片で，末端がヒンジフラクチャーを生じて折損する。石核775にみられるネガ面には明瞭な稜線はみられない。作業面の転移は基本的に行っていない。尾部の剥離面は折損に近い剥離面である。975の剥離後，図上部の打面調整に取りかかっており，その途上で石核が折損する。976は折損後に折損面を打面として軽度の加工が施される。分布はブロック１中心部のス３グリッドに収まる。

接合資料２（第245図　977）

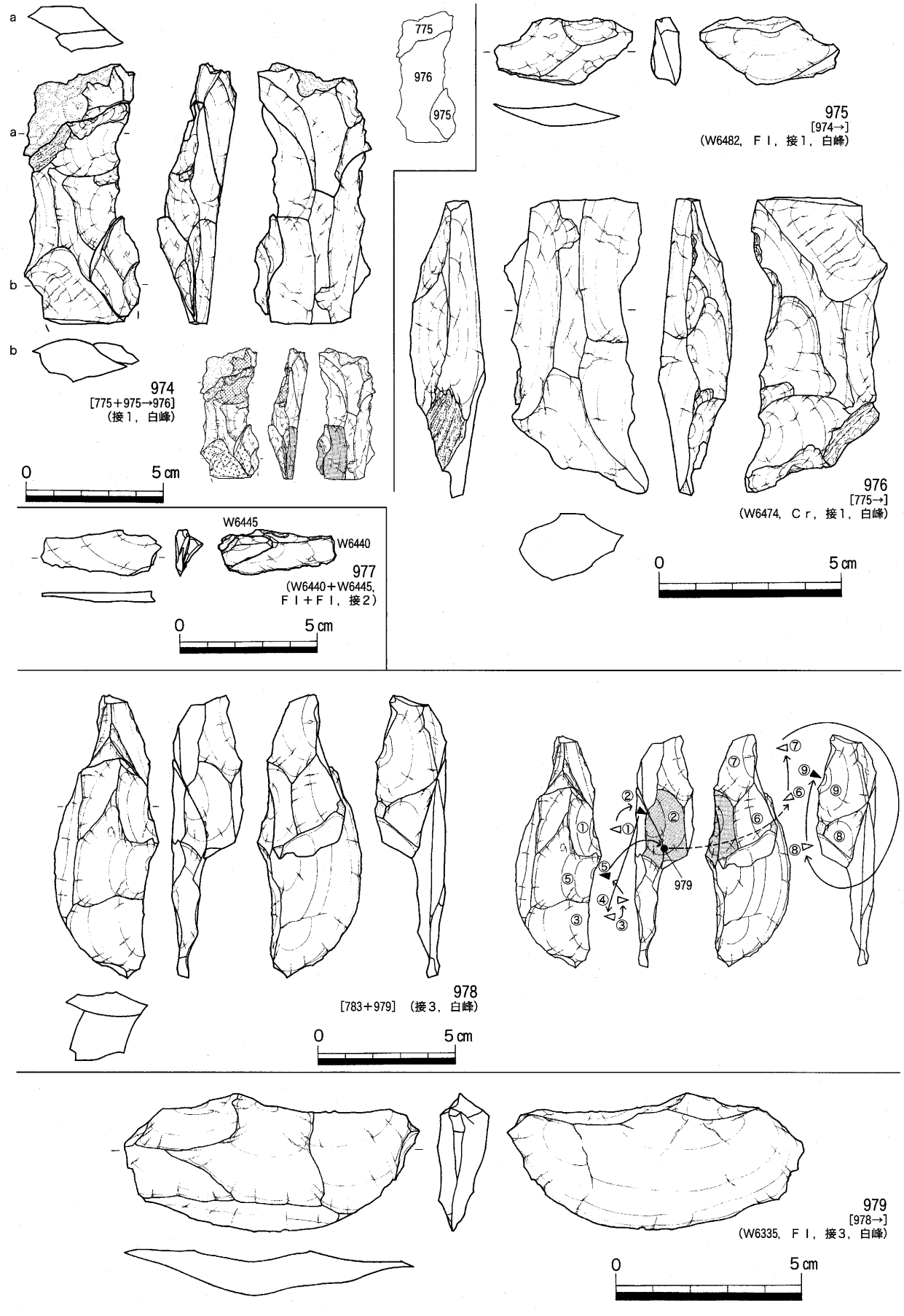
接合状態で長さ16.5㎜，幅43.5㎜，厚さ9.5㎜，重量3.6ｇ。平坦打面を連続して打撃して剥離した小剥片同士の接合である。背面は単一面。

分布はブロック１のス４グリッドに収まる。



※３Ｃ－Ｎ（３Ｃ区北側）の石器出土位置は１ｍグリッド内で機械的に割り振った目安の点である

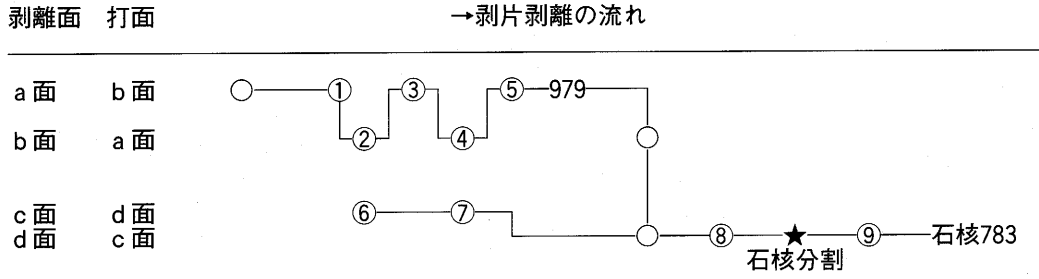
第244図　３ｃ区接合資料分布図１　接1～14　(S=1／100)



第245図　3c区接合資料実測図1　接1～3　(S=2／3，1／2)

接合資料３（第245図　978～979）

多面体の石核783に，最終剥離以前に剥離された剥片979が接合する。接合状態で長さ102.5㎜，幅37.5㎜，厚さ25.5㎜，重量61.2ｇ。剥片979は打面がネガティブな２面の剥離面で構成され，稜線付近を打撃して得られた幅80.0㎜の良好な形状の横長剥片である。背面には複数のネガティブな剥離面と素材面と推定される底面が認められる。接合状態で剥片剥離の流れを復元すると，以下のとおりである。



このうち，剥離面⑥･⑦は図上端の石核折損面に切られる。折損面は剥離面○①より新しく，979剥離以前に形成された面である。したがって，剥片979剥離以前にａ･ｂ面とｃ面で併行して剥片剥離が進行していたことがわかる。ａ・ｂ面は○から⑤まで，打面と作業面を１回ずつ交互に入れ替え，打点を横方向にずらしながら幅30.0～40.0㎜ほどの剥片を並列的に剥離する。しかし，979は⑤と大きく打点をずらすことなく打撃して，幅広の剥片を剥取している。979剥離後はｂ面とｄ面で剥片剥離が続けられ，⑧の打撃で石材中の夾雑物を契機にして石核が半折する。半折後の残核で⑨を剥離した後，作業が停止する。分布はブロック２のタ３グリッドに剥片979，ブロック外縁部でブロック２に隣接するツ３グリッドに残核が分布する。

接合資料４（第246図　980・981）

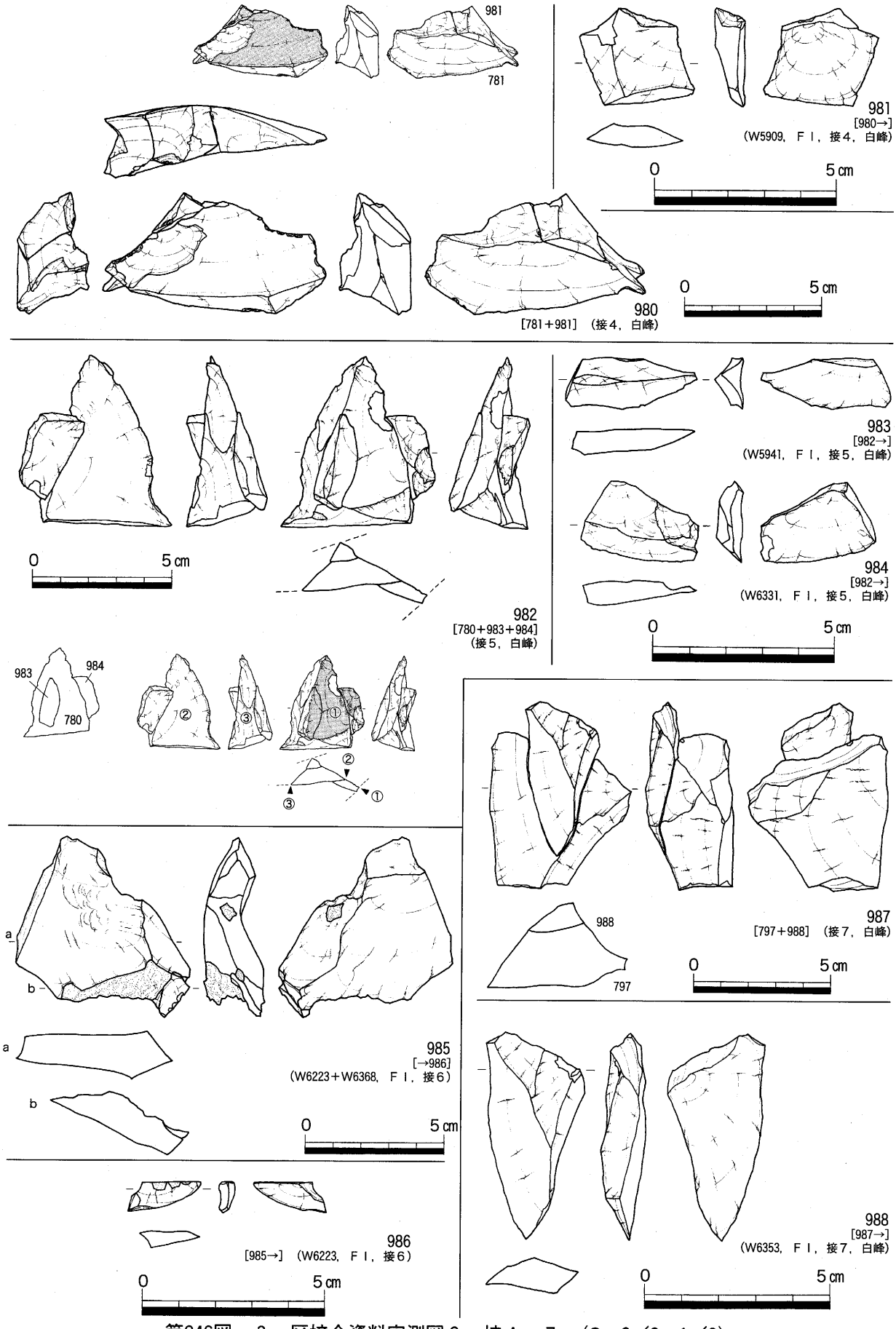
交互剥離により得られた厚さ25.0㎜以上の大形剥片を素材として，素材の側縁から剥片剥離が開始される例である。剥片剥離初期段階で折損した石核781と石核整形と推定される剥片981が接合する。接合状態で長さ44.0㎜，幅80.0㎜，厚さ26.0㎜，重量57.7ｇ。接合状態図の下方向に元来の素材剥片の末端が広がっていたものと考えられる。図の左側縁を作業面に設定し，剥片剥離が開始される。

981剥離前に横長剥片を１枚剥離している。その後，981で作業面の厚みを整え，数回の打面調整を施して目的打撃の準備を行った痕跡が981剥離後の打面に確認できる。目的打撃は10.0㎜ほど打点を後退して行う。しかしその位置で石核が半折し，作業が停止する。分布はブロック２のチ３グリッドに残核，ブロック外縁部でブロック２に隣接するツ４グリッドに剥片981がある。

接合資料５（第246図　982～984）

石核素材（盤状剥片）剥離段階の残核（盤状剥片石核）に，石核素材から剥ぎ取られたファーストフレイクの底面打瘤部が接合し，さらに別の石核素材尾部片が接合する例である。接合状態で長さ62.2㎜，幅55.2㎜，厚さ29.0㎜，重量44.0ｇ。

石核780には３面のネガ面が認められ，その切り合い関係から，交互剥離状に①→②→③の順で剥離されたことがわかる。ファーストフレイク984は②で得られた素材の打面を背面にとどめ，剥片983は③で剥ぎ取られた石核素材の末端部で石核780と接合する。分布はブロック２の中心となるタ３グリッドに石核と剥片１点が，南のタ４グリッドで剥片１点がみられる。



第246図　3ｃ区接合資料実測図2　接4～7　(S=2／3，1／2)

接合資料6（第246図　985・986）

接合状態で長さ65.5㎜，幅63.0㎜，厚さ22.5㎜，重量58.9ｇ。大形剥片に微細な剥片１点が接合する。985は背面に自然面をとどめ，打面と作業面を入れ替えながら交互に剥離した痕跡をとどめる剥片である。986は985の末端付近を軽度に打撃し弾けた剥片である。分布はいずれもブロック２の中心となるタ３グリッドにある。

接合資料7（第246図　987～988）

分厚い剥片を素材とする石核と剥片の接合である。接合状態で長さ68.0㎜，幅51.0㎜，厚さ32.0㎜，重量77.8ｇ。素材の打面側から剥片剥離が開始し，終盤で石核整形か打面転移か判然としないが，不定方向の打撃によって石核が半折して作業が停止する。剥片988は底面を大きく取り込み，やや縦長の正面形を呈す剥片である。

分布は剥片988がブロック2，石核が外縁部にある。

接合資料8（第247図　989～991）

打面部が点状を呈す剥片２点の接合である。接合状態で長さ29.5㎜，幅109.5㎜，厚さ19.0㎜，重量39.5ｇをはかる。いずれも背面に稜線を取り込み，断面形が三角形を呈する。ただし不規則な剥離面が多く，複雑な剥片剥離作業を反映する。少なくとも，当該剥片剥離以前には稜線上を表裏交互に打撃する作業が行われていたものと考えられる。また，剥片990の右端には主剥離面に切られる折損面が認められる。石核の稜上打撃によって，当該剥片剥離前に石核に折損が生じていたことを示す。

剥片剥離は991→990の順で行われる。991は石核を縦に用いて，90度に近い剥離角で斜軸の剥片を剥離したものである。背面に，同じ位置を打撃した際の先行小剥離面があり，そのために打面形状は薄く，また局所的に凹む。990も同様に点状の打面をもつ。剥離方向は991と比べるとやや横に長い。

分布はブロック３に接する東西の外縁部にあり，4グリッドを隔てて接合する。

接合資料9（第247図　992～994）

平坦な打面を共有し，打点を横方向にずらしながら剥ぎ取った剥片２点の接合である。接合状態で長さ35.5㎜，幅51.5㎜，厚さ11.0㎜，重量13.6ｇをはかる。背面にも同様に打点を横にずらす大小の剥離面がある。また，底面は凹凸の著しい粗い剥離面２面からなる。

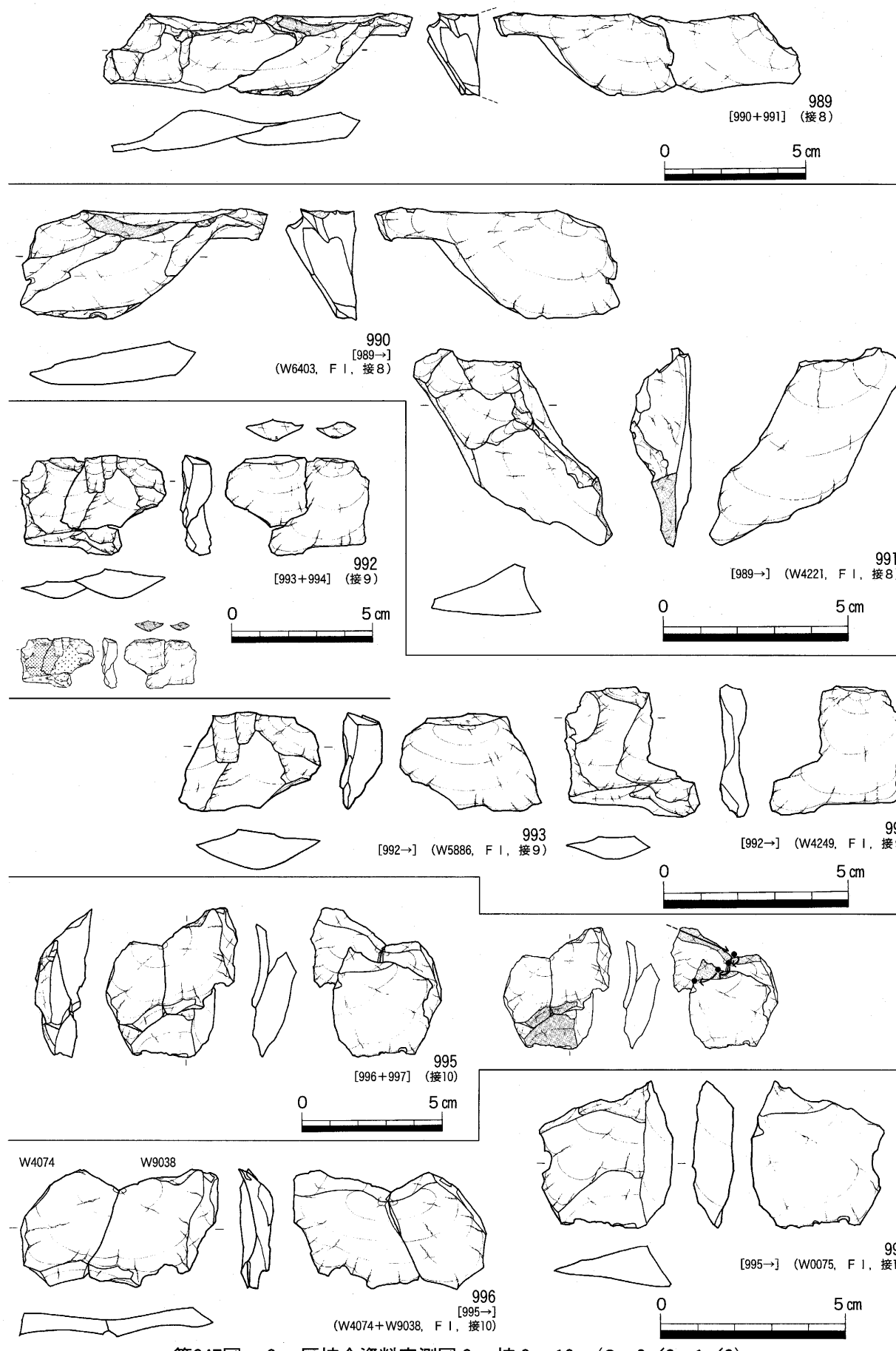
分布は993がブロック２に近い外縁部，994がブロック３にある。４グリッドを隔てて接合する。

接合資料10（第247図　995～997）

平坦な打面を共有し，同じ位置で直線的に打点を後退しながら剥ぎ取った剥片２点の接合である。うち１点は打点部で垂直に折れた２片のⅡ種接合で，合計３片で構成される。接合状態で長さ53.0㎜，幅47.0㎜，厚さ20.0㎜，重量21.2ｇをはかる。

図の左側縁は自然面に近い古い剥離面である。したがって石核は図の右側に広がる。背面尾部には主剥離面と逆の方向の剥離面があり，石核における顕著な打面転移を示す。

分布は996がブロック３ｎに近接する外縁部，997がブロック３ｓにある。



第247図　3 c 区接合資料実測図 3　接 8 ～10　(S=2／3, 1／2)

接合資料11～16・18（第248図　998～第249図　1015，第251図　1020～1022）

ブロック３ｎの北側にまとまる接合資料の一群である。接合状態の法量を下表にまとめた。

接合番号	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚（㎜）	重量（g）
接11	18.5	39.0	15.0	6.5
接12	33.0	46.4	8.0	7.9
接13	19.7	44.0	8.0	5.4
接14	23.0	34.0	6.0	11.3
接15	34.0	56.0	8.5	12.9
接16	26.0	43.8	9.0	7.7
接18	30.5	76.0	10.0	15.3

第116表　３ｃ区接合資料11～16・18法量表

いずれも剥片２点の接合で，打面を共有して連続して剥離した剥片である。このうち，接11・13は打面の前面に前傾する角度の剥離面があり，石核の形状が必ずしも規格的でなかった可能性が考えられる。また，接11～15は底面をもたない点で共通する。接16・18は打面とほぼ並行する角度の底面をもつが，いずれも主剥離面と異なる剥離方向をもつ複数のネガティブ面である。

分布は接11が３グリッドを隔てて接合するが，そのほかは同一グリッドかあるいは隣のグリッドの範囲で収まる。

接合資料17（第249図　1016～1019）

背面に自然面をもつ剥片３点の接合である。うち１点はⅡ種接合のため，合計４片で構成される。接合状態で長さ64.0㎜，幅66.0㎜，厚さ17.0㎜，重量48.8ｇ。

1017は背面全面が自然面で覆われ，上端の剥離面との稜線付近を打撃して狭小な打面から縦長の剥片を剥ぎ取るものである。底面部も自然面で覆われ，石核の厚さは45㎜となる。打面を共有して1019を打撃した後，打面を90度転移し1017のネガ面を打撃して1018の打面に残るネガ面を生成する。再び打面を返して，1018を剥ぎ取るものである。

分布はブロック３ｎと３ｓにまたがり，南から北へ剥離順序が移動する。

接合資料19（第251図　1023～1025）

気泡の多い粗いサヌカイト石材を用いた剥片２片の接合資料である。接合状態で長さ32.0㎜，幅43.0㎜，厚さ20.0㎜，重量15.2ｇをはかる。1025は古い剥離面が形成した平坦面を打面にし，打点を直線的に後退して打撃して得られた不定形剥片である。底面に複数の剥離面が認められ，1024は1025の剥離に先行して90度異なる方向から打撃して得られた小剥片である。

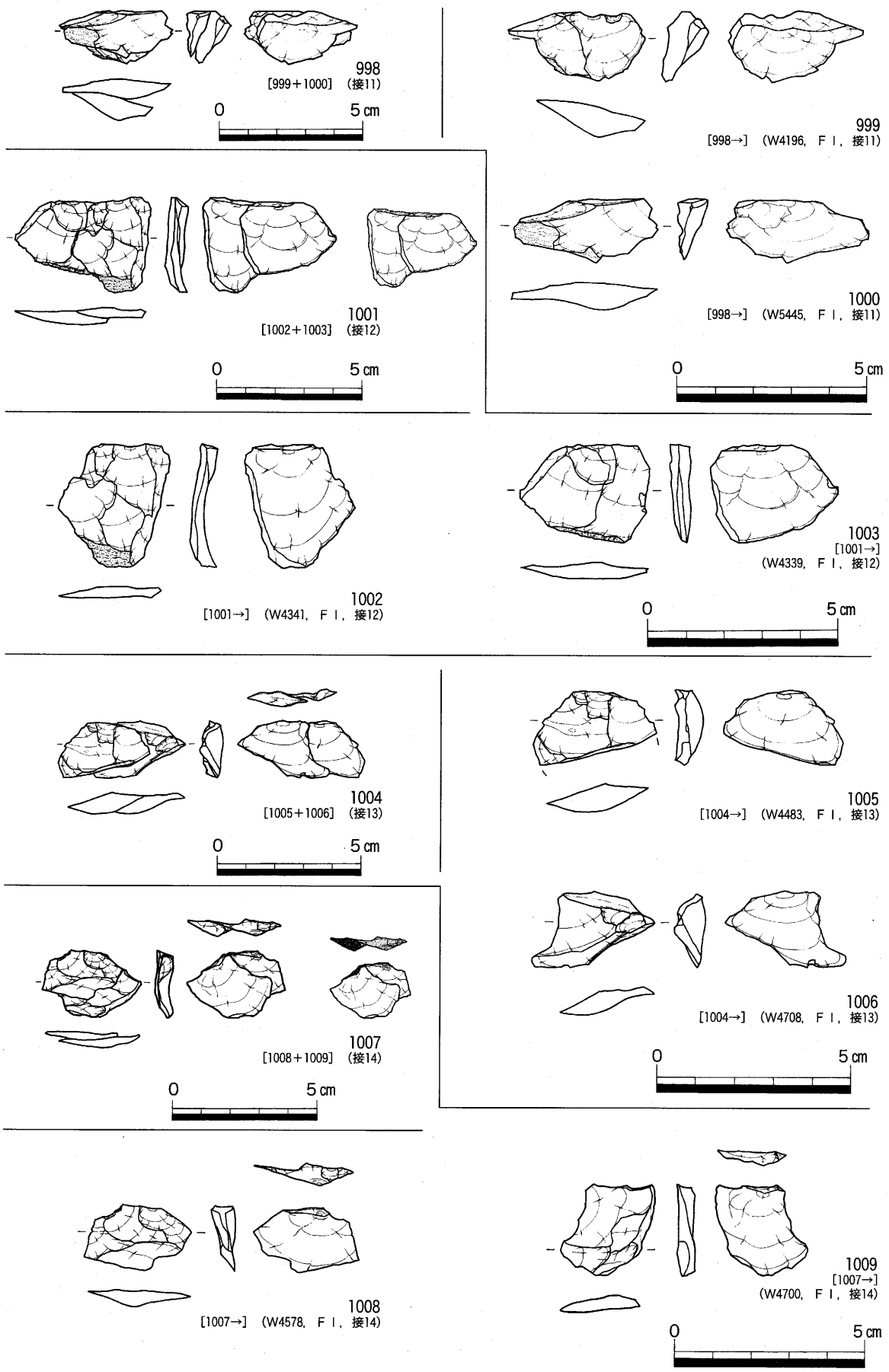
分布はブロック３ｎのチ12グリッドに収まる。

接合資料20（第251図　1026・1027）

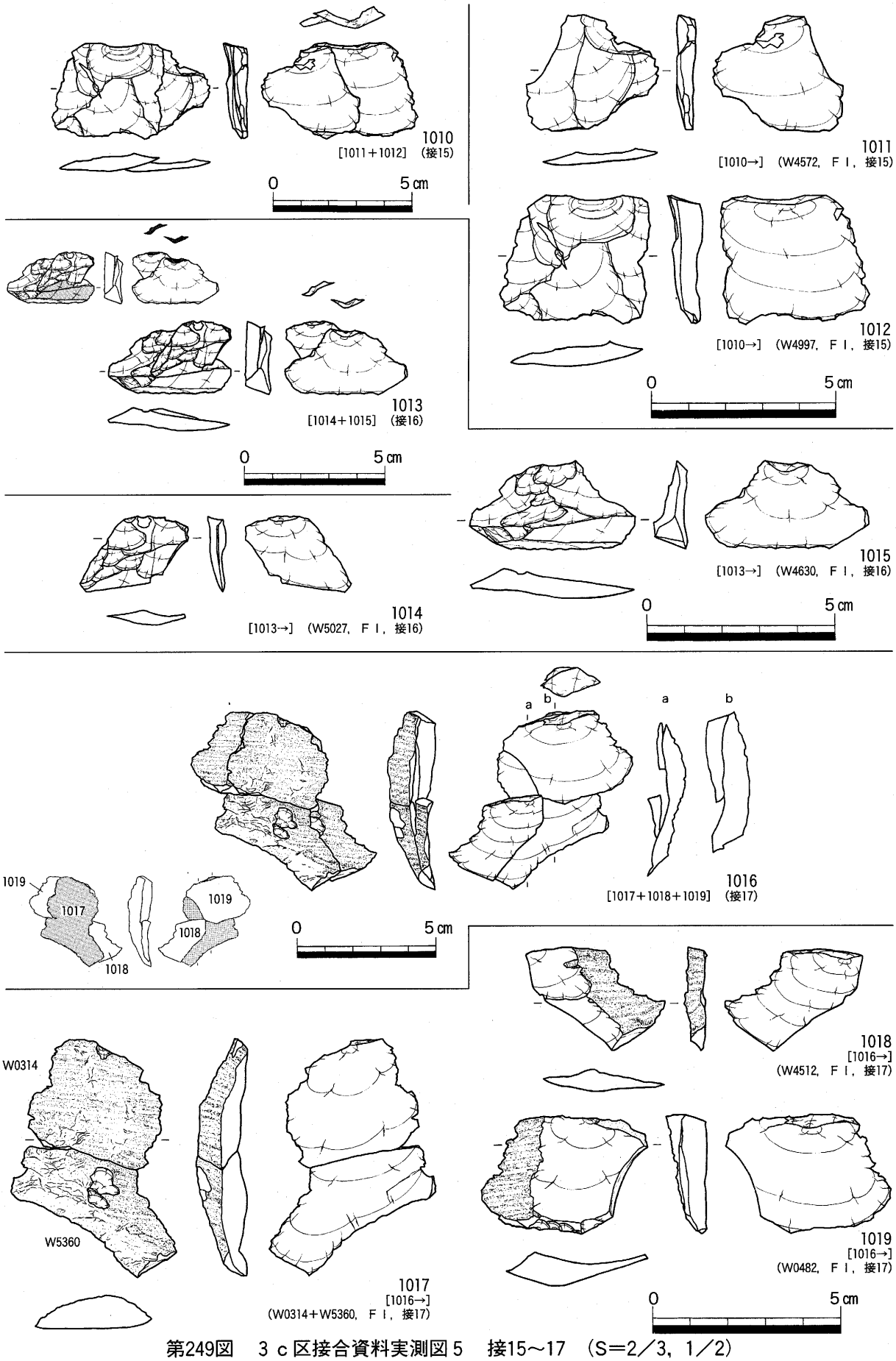
石核１点と剥片１点の接合である。いずれもⅡ種接合で，合計４片で構成される。接合状態で長さ101.0㎜，幅67.4㎜，厚さ25.0㎜，重量133.9ｇをはかる。

図右側縁は古い段階の剥離面，図下縁は素材段階の折損面である。図左縁を中心に剥片剥離が進行する。打面は素材の平坦な剥離面に設定される。1027は打点を横方向にずらしながら打面調整を行わずに剥離した正面方形の剥片である。1027剥離後も同様に打点を移動させながら剥離を進め，結果石核の幅を漸次減少させる。石核は器体中ほどの強い打撃により半折するが，折損以前に周縁に細かな加工を施すことからみて，角錐状石器整形段階の可能性が高い。なお，図右側縁には微細剥離痕が観察できる。

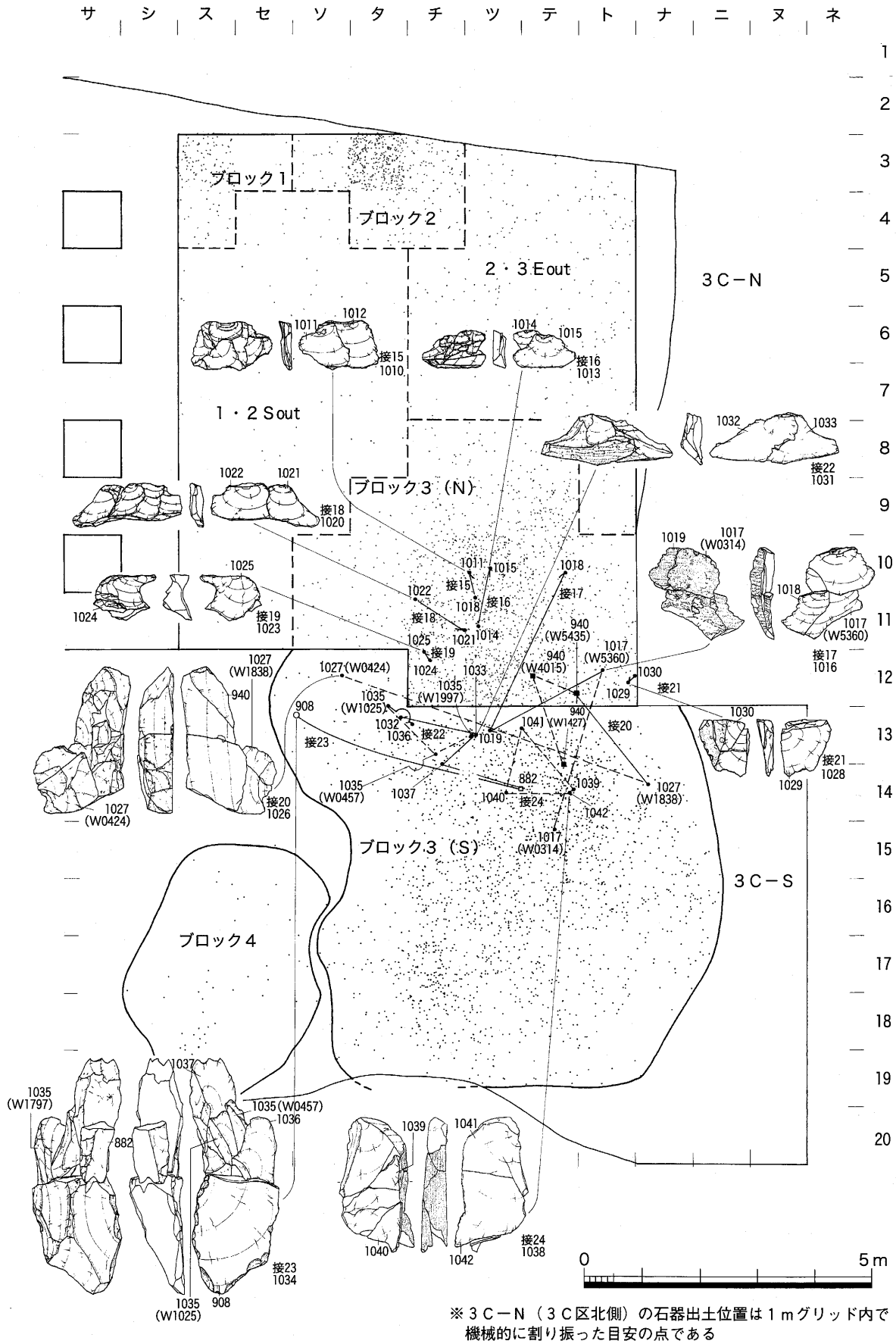
分布は剥片がブロック３ｓ，石核がブロック３ｎにある。



第248図　3 c 区接合資料実測図 4　接11～14　(S＝2／3, 1／2)

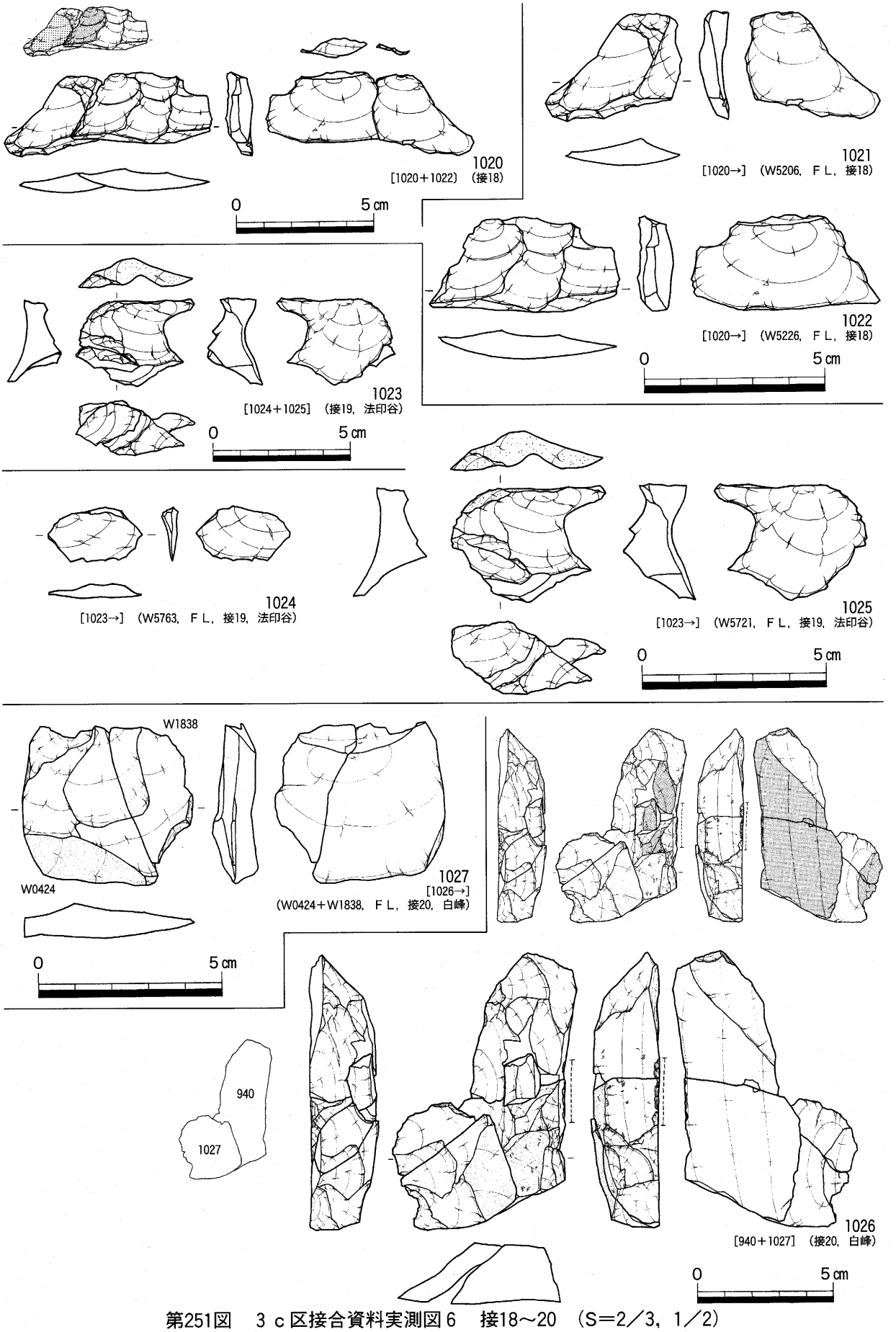


第249図　3 c区接合資料実測図5　接15～17　(S=2／3, 1／2)

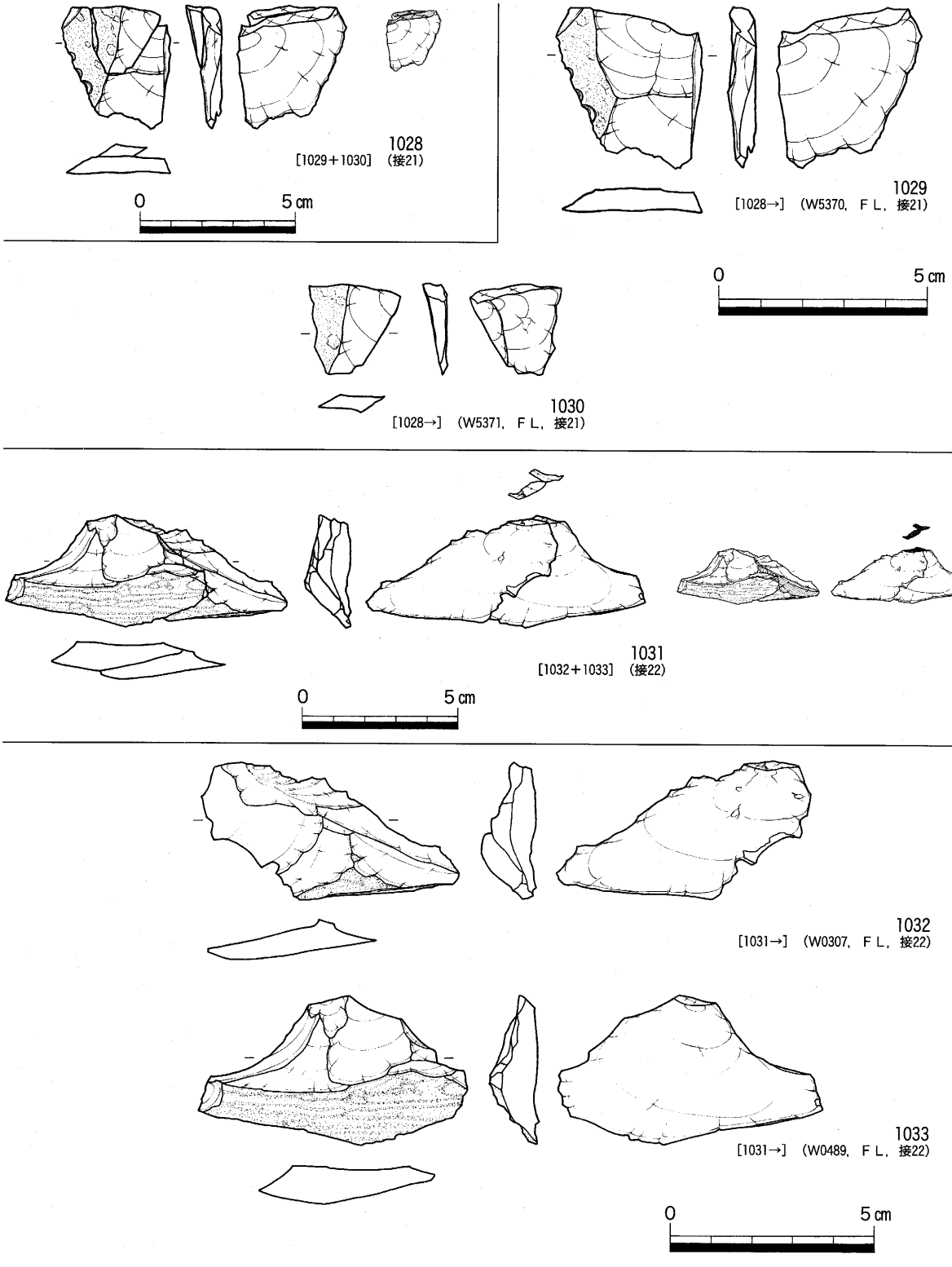


※3C−N（3C区北側）の石器出土位置は1mグリッド内で機械的に割り振った目安の点である

第250図　3c区接合資料分布図2　接15〜24　(S=1／100)



第251図　3 c 区接合資料実測図 6　接18～20　(S＝2／3, 1／2)



第252図　3ｃ区接合資料実測図７　接21～22　(S＝2／3，1／2)

接合資料21（第252図　1028～1030）

平坦打面上を直線的に打点を後退させて３回打撃した痕跡を残す剥片２点の接合である。主剥離面は概ね石理に沿う。接合状態で長さ39.5㎜，幅35.2㎜，厚さ11.5㎜，重量9.7ｇをはかる。背面には自然面と先行する剥離面が占め，底面をもたない。分布はブロック３ｎの南東隅，ト12グリッドに収まる。

接合資料22（第252図　1031～1033）

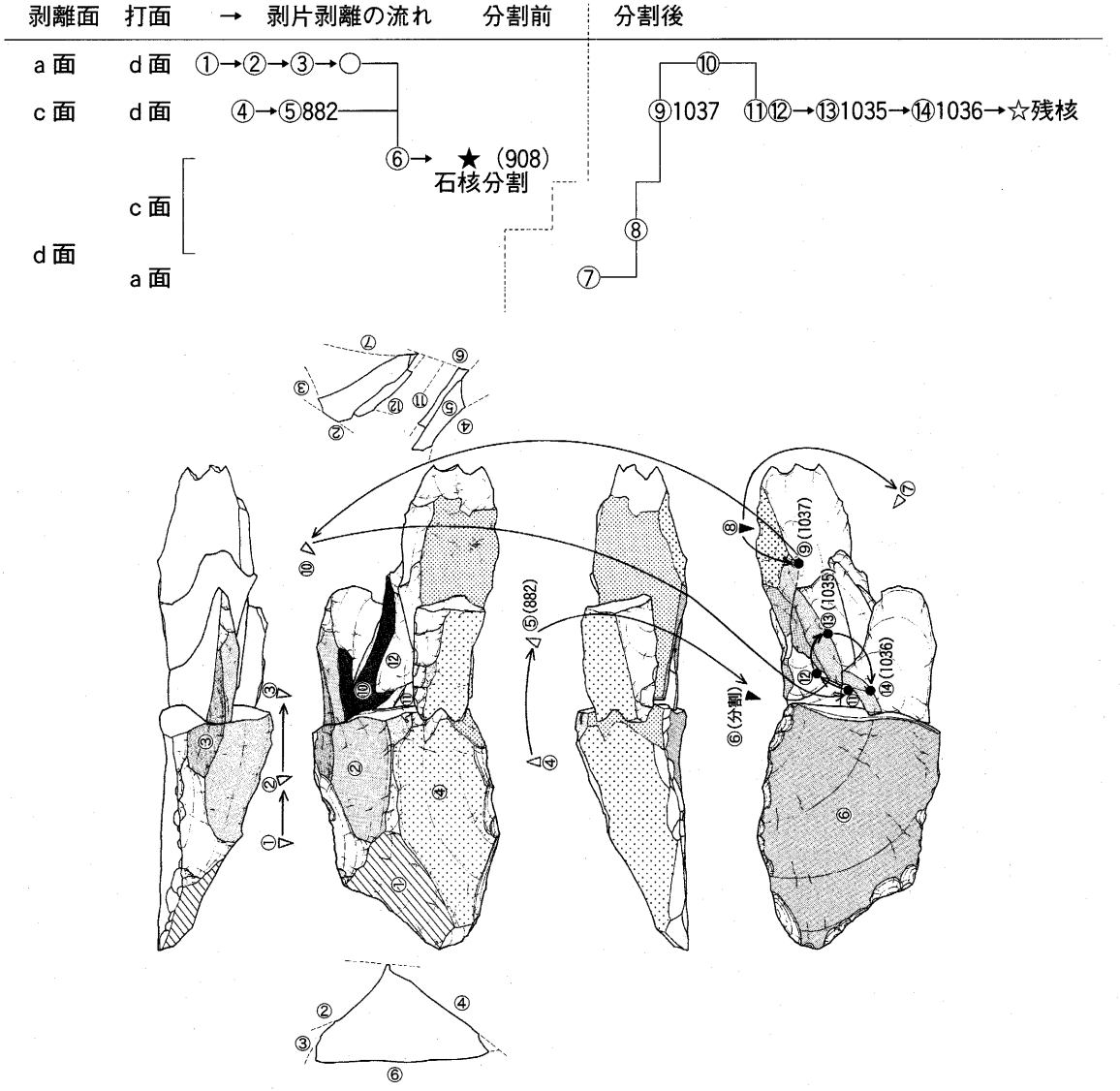
石理に沿った平坦な打面上を，打点を左右にずらしながら打撃して剥離した２剥片の接合である。接合状態で長さ36.0㎜，幅91.0㎜，厚さ15.0㎜，重量30.8ｇをはかる。背面尾部に自然面をとどめ，それを切って打面を共有しながら左右に展開する複数の剥離面がみられる。打面はいずれの剥片も狭小。

分布はブロック３ｓ北側にあり，接合距離は1.4ｍ。

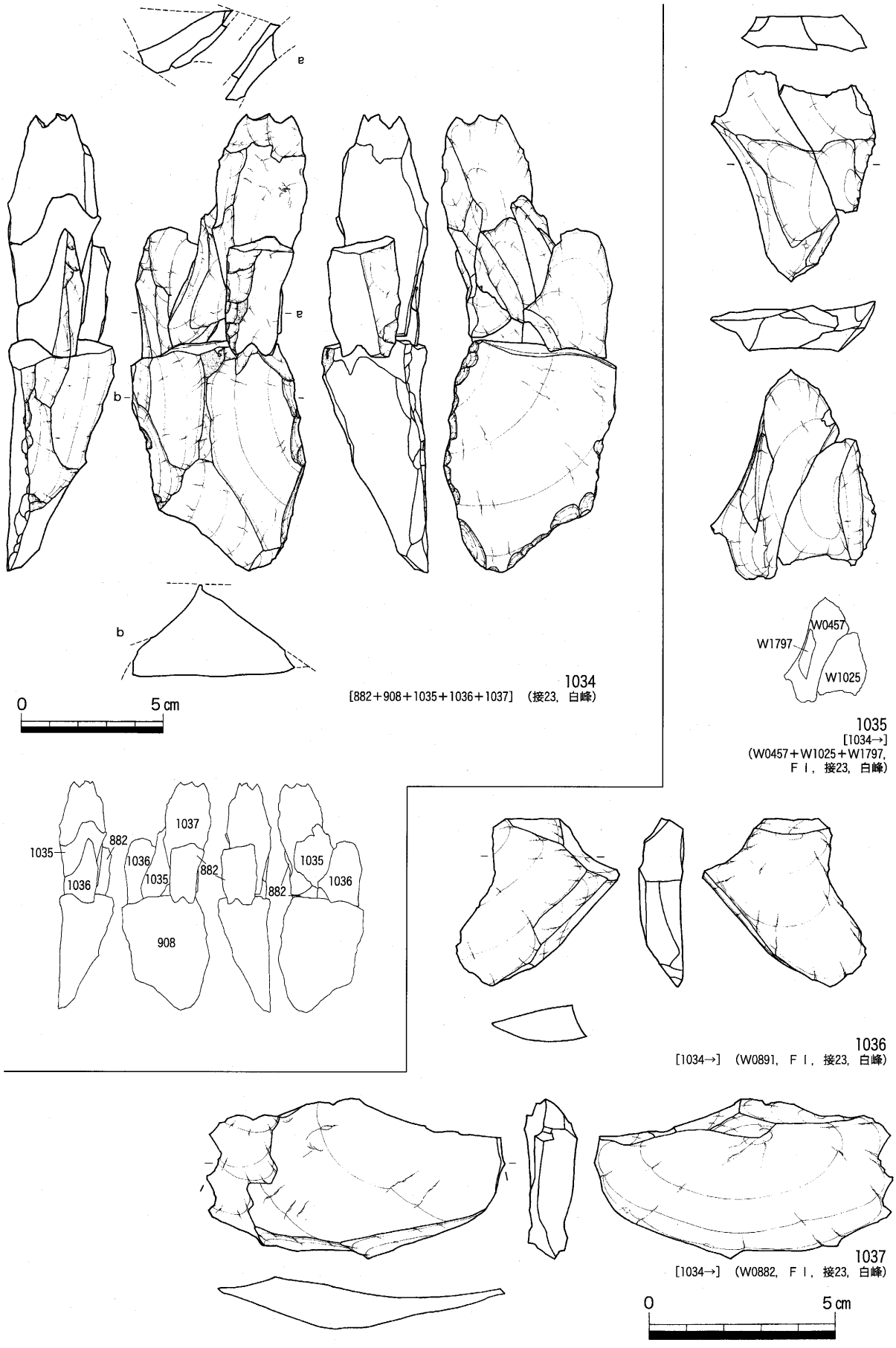
接合資料23（第253・254図　1034～1037）

３ｃ区で最も大形の接合資料である。ＲＦに転用された石核に，ＲＦ１点，剥片３点が接合する。剥片のうち１点は３片のⅡ種接合からなる。したがって，合計７片の石片で構成する。接合状態で長さ161.5㎜，幅62.5㎜，厚さ38.0㎜，重量228.3ｇとなる。

ＲＦ転用の石核908は僅かに礫素材面をとどめるものの全体としては断面三角形を呈し，三面を大きな剥離面で覆われる。図上半部は折損し，折損後周縁に加工を施してＲＦに転用する。同様にＲＦに加工された882は石核折損前に剥離されるが，ほかの剥片は石核折損後に上半の半折部を石核に用いて生成された一群である。上半部の最終残核は確認できなかった。石核折損前と後で大きく２つの段階に区分して，以下に剥片剥離の流れを図示する。

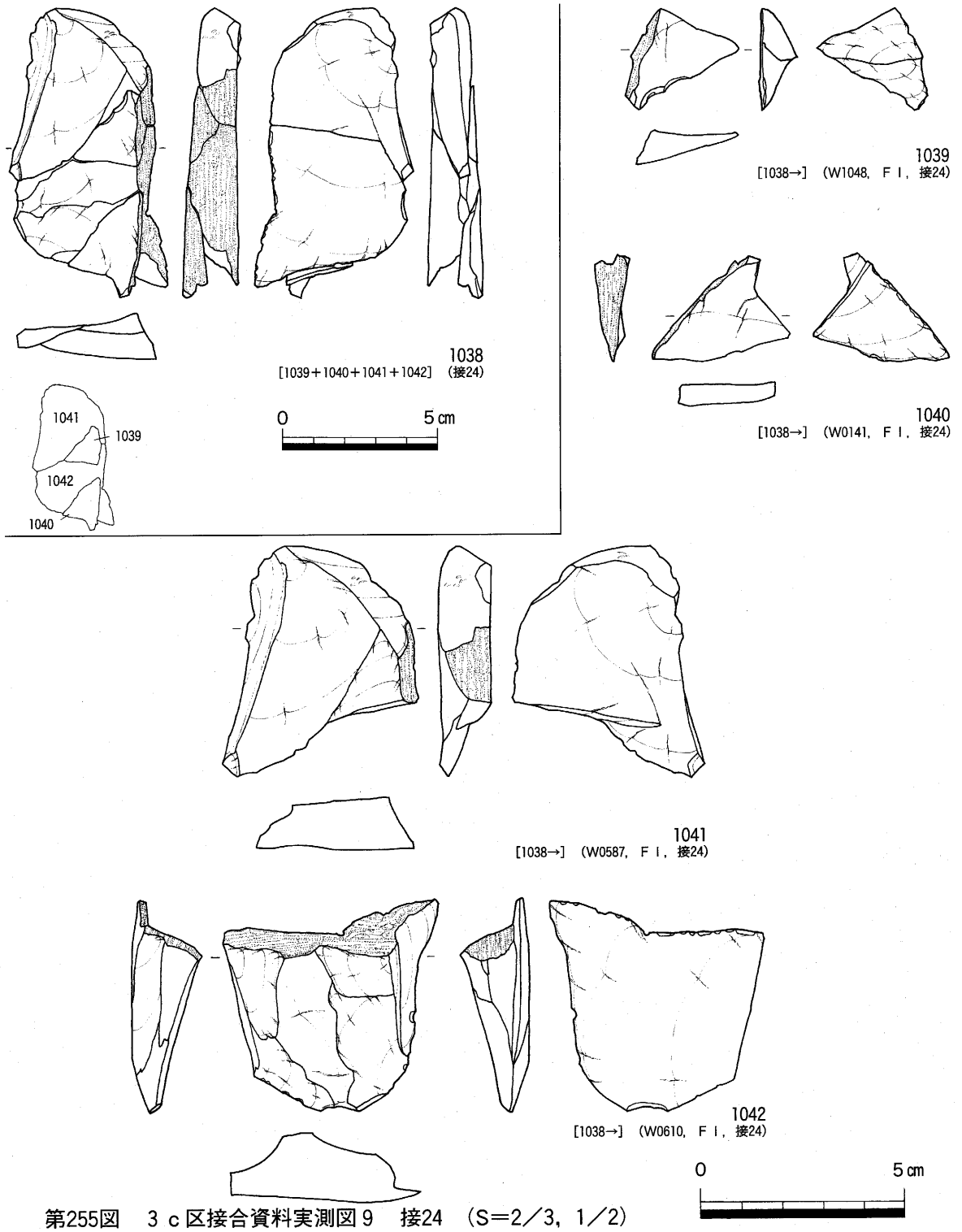


第253図　３ｃ区接合資料23　打点移動模式図



第254図　3 c 区接合資料実測図 8　接23　(S=2／3, 1／2)

石核分割前の①から⑤まで，石核に残るネガティブな剥離面から復元される剥片の幅は概ね100.0㎜前後である。小形の石核素材として成り立ちうる法量を備える。一方で分割後の剥片剥離は，⑦⑧で石核の底面（平坦面）整形が行われ，⑩～⑫で折損面付近の局所的な再加工，続いて⑬⑭で石核幅の減少効果が得られる。残核の奥行はａ面の延長で考える限り40.0㎜を大きく超えるものではなく，⑨から⑭の一連の剥離を打面調整と考えるには無理がある。断面三角形の形状を維持したままそのスリム化をはかったものと想定するのが妥当であろう。したがって，残核を角錐状石器に整形する途上の工程と考えておきたい。分布はブロック３ｓ北端にまとまる。最大接合距離は4.1ｍである。



第255図　３ｃ区接合資料実測図９　接24　（S＝2／3，1／2）

接合資料24（第255図　1038～1042）

側縁に自然面をもつ石核の一端を打撃して，同時割れを生じながら剥離した剥片３点（1039・1041・1042）と，その剥離に先行して主剥離面と逆方向から剥離された剥片の末端部小片が接合する。合計４片で構成される接合資料である。接合状態で長さ94.0㎜，幅51.6㎜，厚さ18.0㎜，重量73.5ｇをはかる。

分布はブロック３ｓの北半，直径1.4ｍほどの範囲に収まる。

接合資料25（第257図　1043～1045）

側縁および底面に自然面をとどめ，石理に沿った平坦な剥離面を打面として打点を左右にずらしながら剥離する剥片２点の接合資料である。接合状態で長さ38.5㎜，幅67.0㎜，厚さ16.5㎜，重量23.0ｇをはかる。分布はブロック３ｓの南側，接合距離は1.5ｍである。

接合資料26（第257図　1046・1047）

剥片剥離終盤の剥片964と，その後に折損した石核に所属する剥片1047が折損面で接合する例である。接合状態で長さ71.5㎜，幅88.5㎜，厚さ21.0㎜，重量80.2ｇをはかる。

断面図に示したように，石核折損前の剥片剥離は厚みのある石核の左右両側から表裏交互に行われる。⑤（964）の打撃において対側縁部を大きく取り込んで剥離したために，石核形状が断面三角形状に変更される。その後，石核が半折し，964側では⑥→⑦→⑧の順で剥片剥離が進行し，一方では不定方向から不定形剥片が剥離された痕跡が1047背面に観察できる。964は剥離後短辺側に小規模な二次加工を施す。

分布は1047がブロック３ｓ南にあり，ＲＦの964がブロック４東端に離れる。接合距離は2.3ｍ。

接合資料27（第258図　1048～1050）

背面の大部分が自然面に覆われる２剥片の接合資料である。70.0㎜ほどの厚みをもつ塊状礫を素材として，そのコーナー部分を表裏左右から不規則に打撃して初期の石核整形を行う。接合状態で長さ100.8㎜，幅63.8㎜，厚さ45.0㎜，重量230.3ｇ。自然面の表面は磨滅をほとんど被っていない。

まず，図上端を前面から数回打撃して打面を整え，1049を上方から打撃して小口部の除去をはかる。次に打点をやや左に移動し，強い打撃を加え1050を剥ぎ取っている。母岩に施される初期の整形である。ブロック内に大形の母岩の状態で石材を持ち込んでいる事例として興味深い。

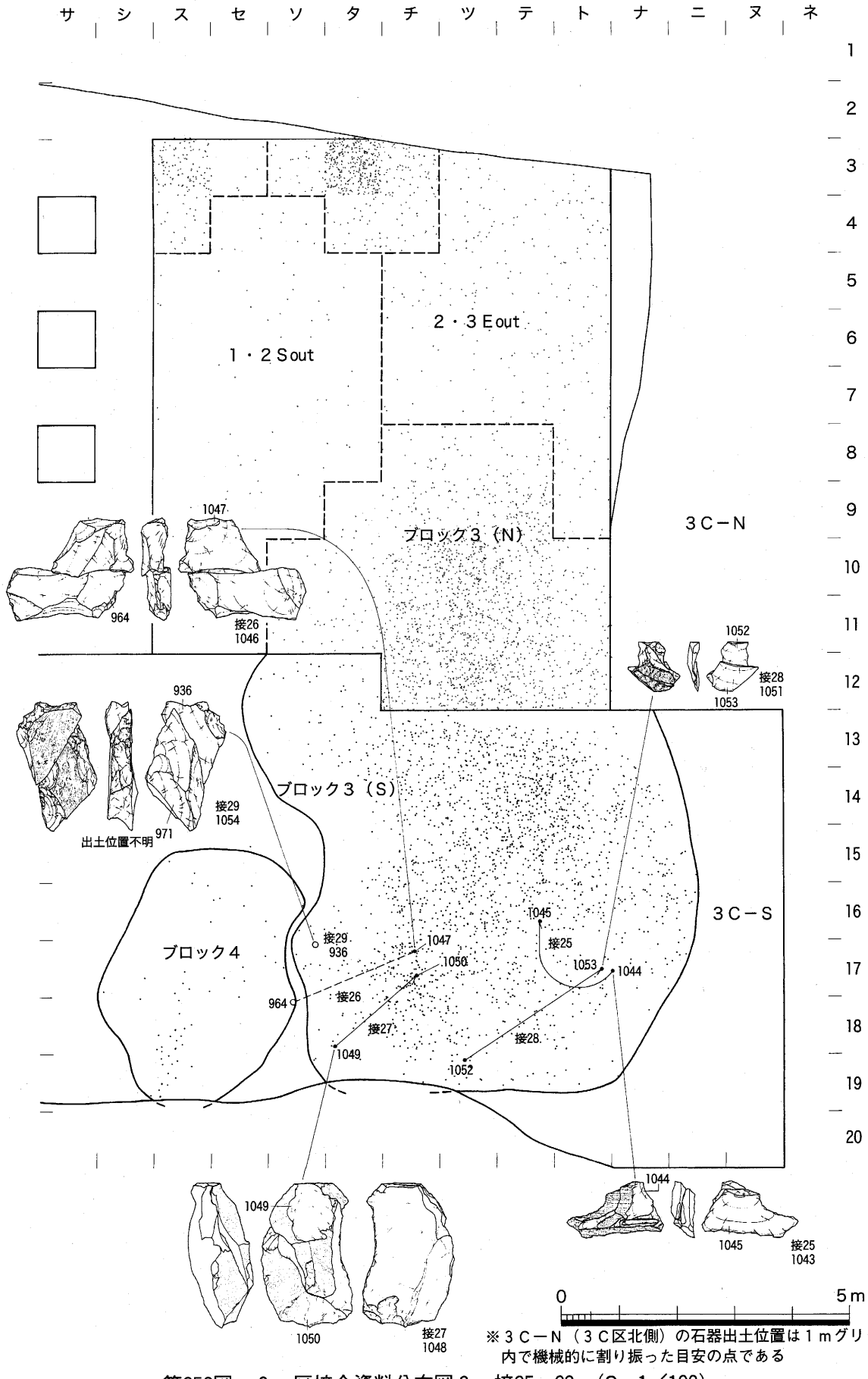
分布はブロック３ｓの南西にある。接合距離は1.9ｍ。

接合資料28（第259図　1051～1053）

背面に自然面をとどめた小剥片の接合である。接合状態で長さ34.0㎜，幅35.8㎜，厚さ8.2㎜，重量5.1ｇ。分布はブロック３ｓの南東にある。接合距離は2.9ｍ。

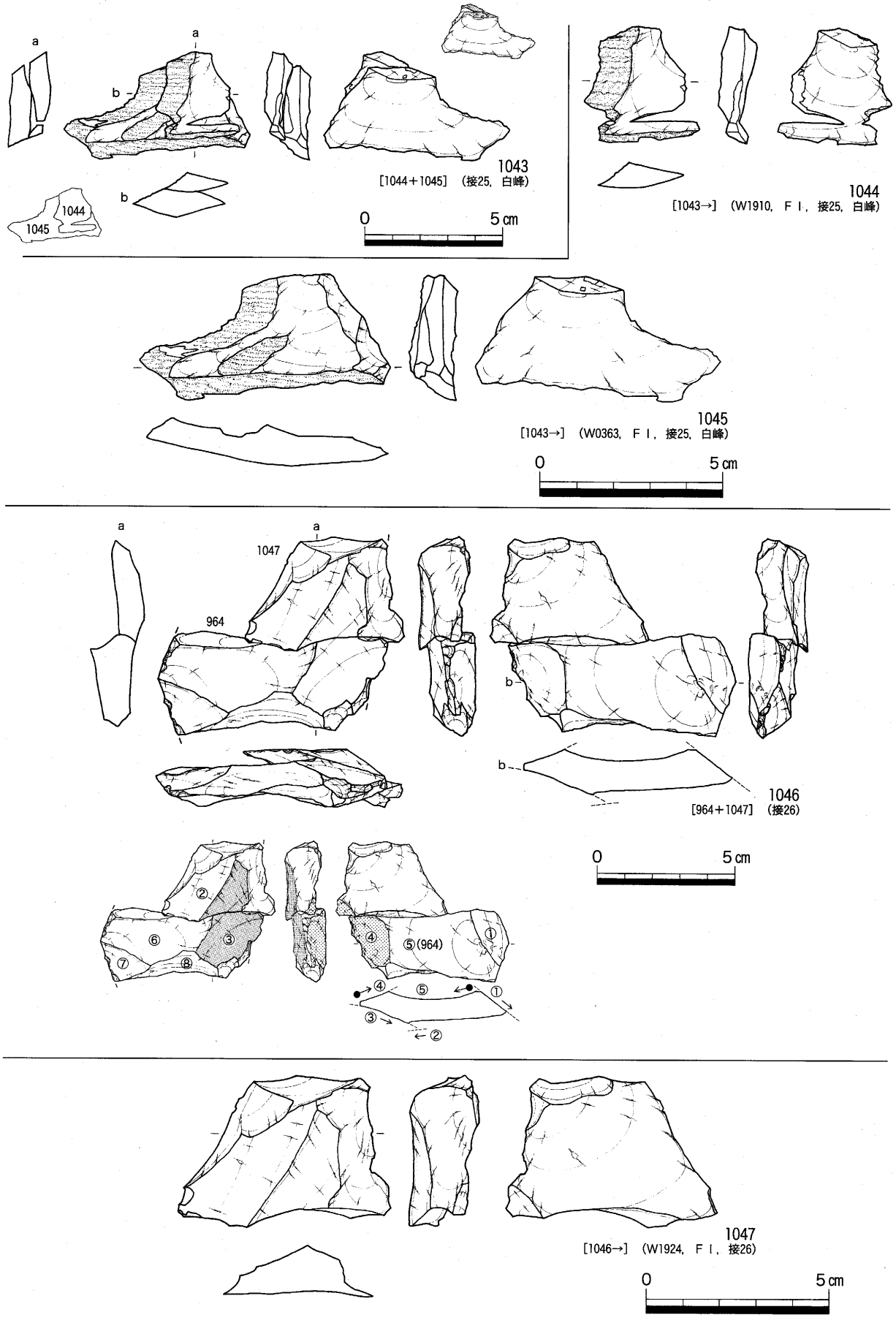
接合資料29（第259図　1054）

角錐状石器（971）とＲＦ（936）の素材面における接合である。接合状態で長さ90.5㎜，幅56.5㎜，厚さ23.0㎜，重量82.8ｇ。971が石核を転用して製作され始めた角錐状石器であることを示す。分布はブロック３ｓにある。ただし971の詳細な出土位置は不明。

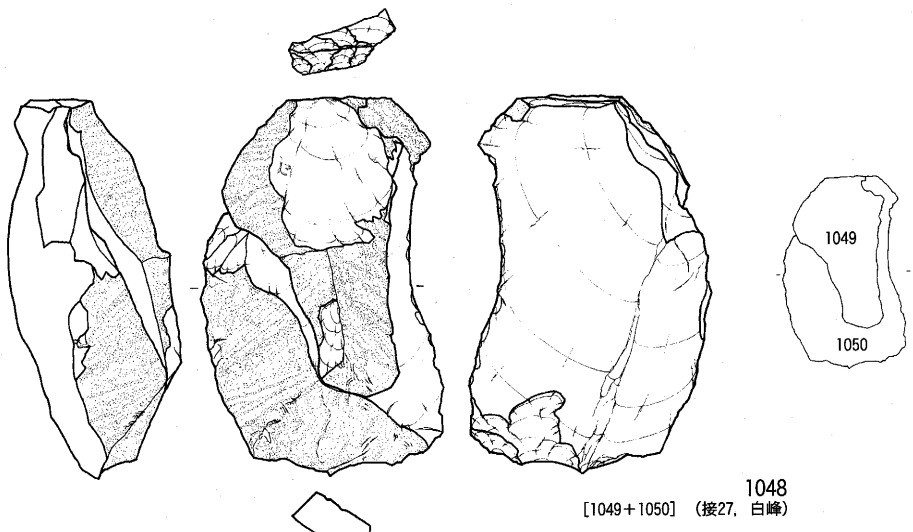


※３Ｃ−Ｎ（３Ｃ区北側）の石器出土位置は１ｍグリッド内で機械的に割り振った目安の点である

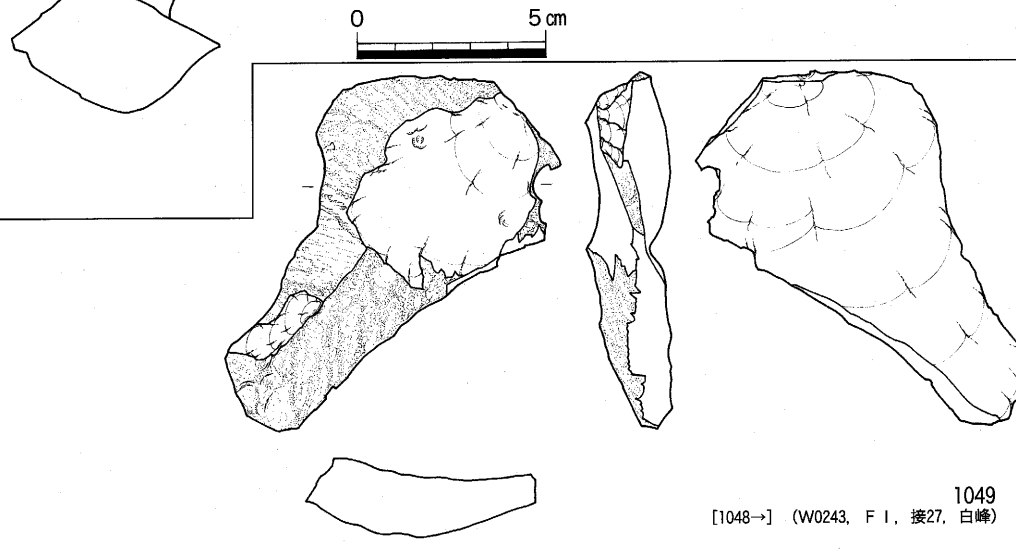
第256図　３ｃ区接合資料分布図３　接25〜29　（S＝1／100）



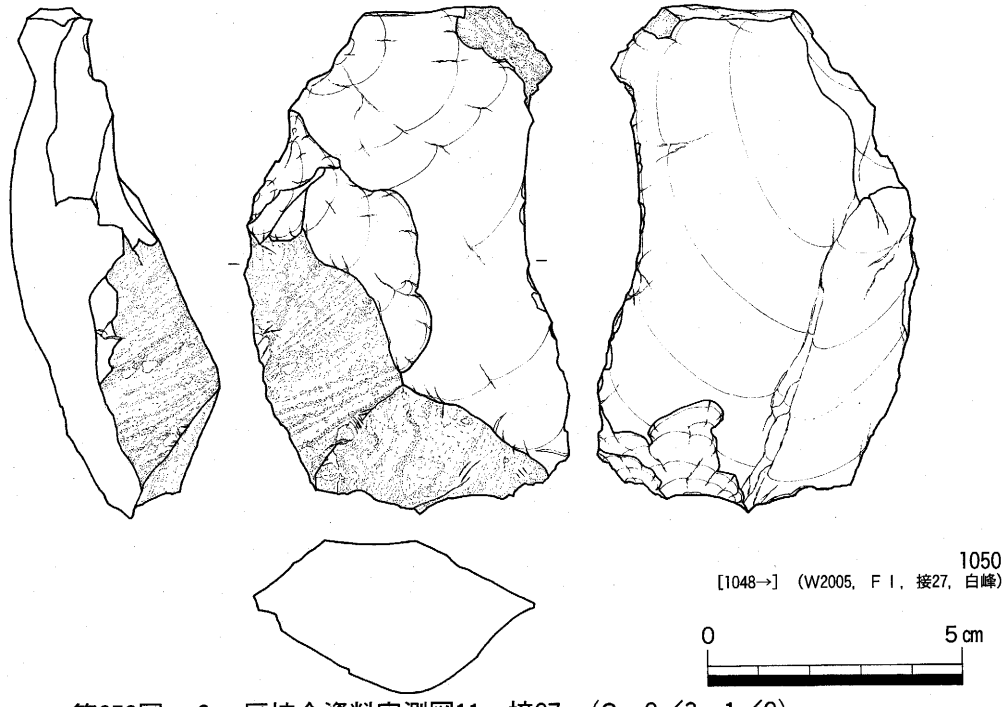
第257図　3 c 区接合資料実測図10　接25～26　(S＝2／3, 1／2)



1048
[1049＋1050]　(接27，白峰)



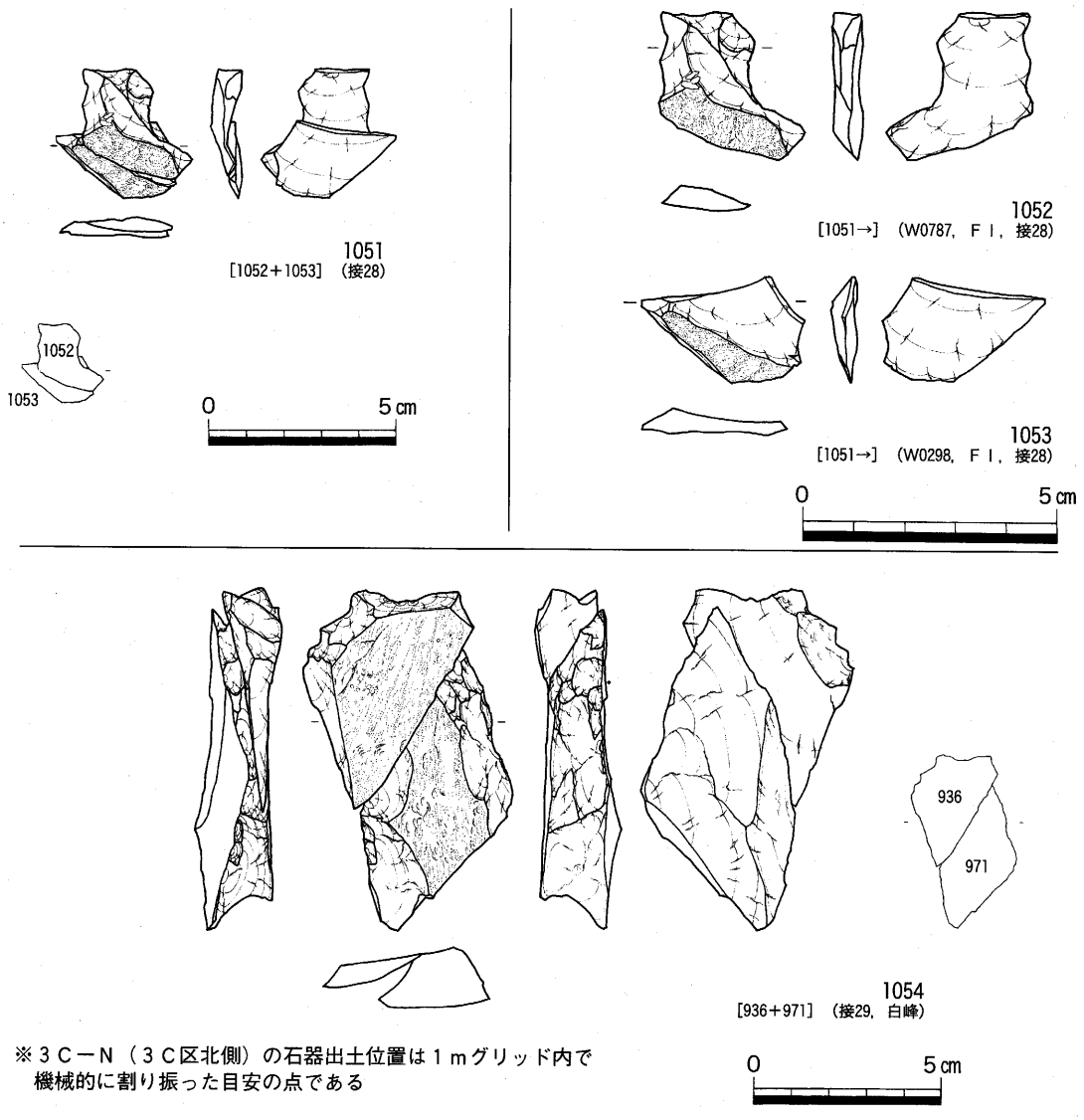
1049
[1048→]　(W0243，ＦⅠ，接27，白峰)



1050
[1048→]　(W2005，ＦⅠ，接27，白峰)

0　5cm

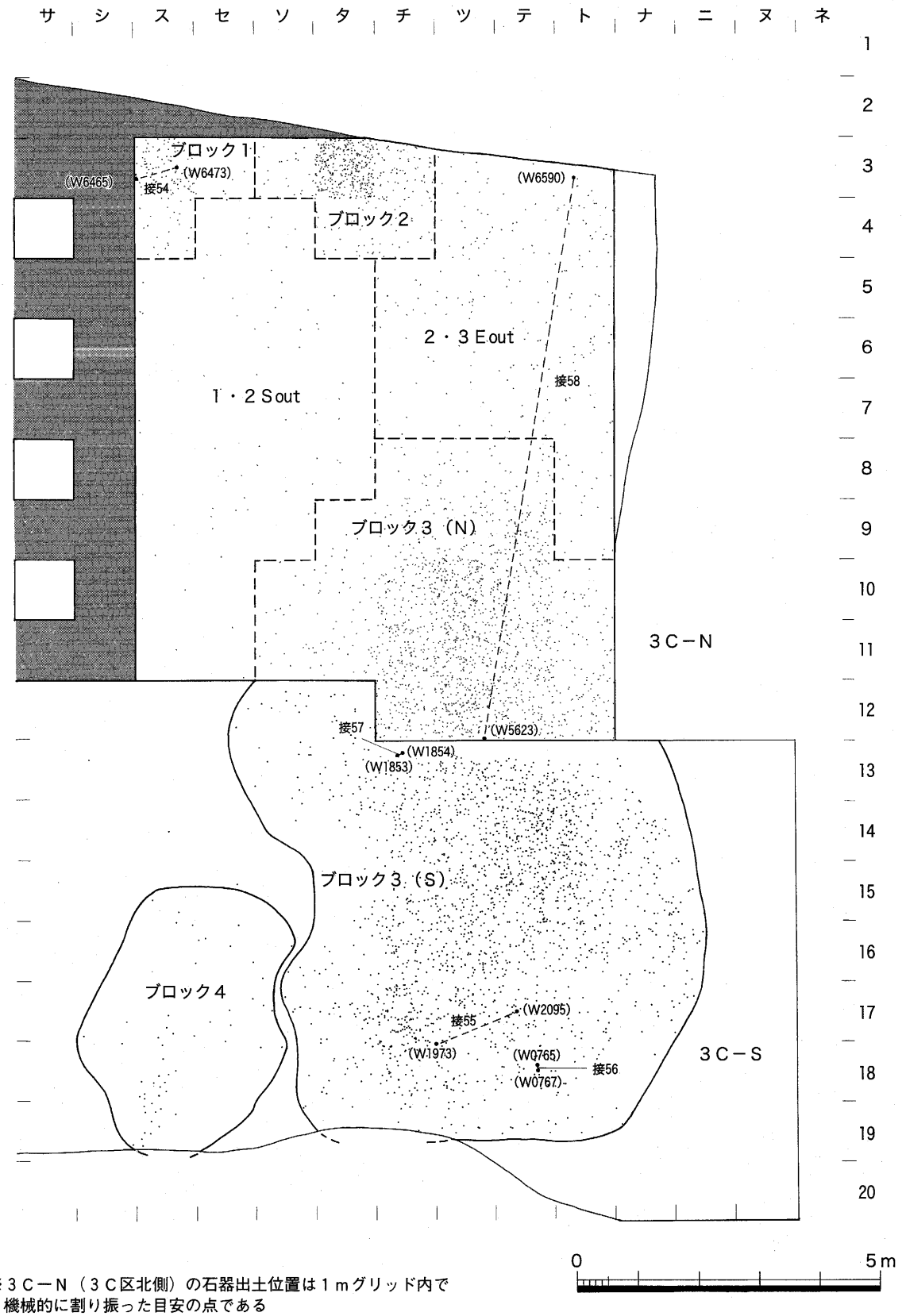
第258図　３ｃ区接合資料実測図11　接27　(S＝2／3，1／2)



第259図　3c区接合資料実測図12　接28～29　(S=2／3, 1／2)

その他の接合資料（第260図）

図化していない接合資料が5点（接54～接58）ある。いずれも剥片のⅡ種接合である。分布は接54がブロック1，接55･接56がブロック3sの南側，接57がブロック3sの北側，接58がブロック2東側とブロック3n南側で9グリッド隔てて接合する。



※３Ｃ－Ｎ（３Ｃ区北側）の石器出土位置は１ｍグリッド内で機械的に割り振った目安の点である

第260図　３ｃ区接合資料分布図４　未報告接合資料（接54～58）（S＝1／100）

第７節　５区の調査

（１）概　要

５区は谷３と谷４の間に広がる幅約100mの扇状地形の中央付近に位置する調査区である。南から北へ緩やかに傾斜しており，標高約37.3mから39.2mの間に石器の分布がみられる。対象地が広いことから，調査は２m角のトレンチをあらかじめ広範囲に設定し，石器出土場所を中心に全面調査に切り替える方法をとった。トレンチ部分を含めて，旧石器包含層まで掘り下げた部分の面積は482㎡ である。石器分布の概要を説明すると，調査地中心付近に3.3点／㎡ の密度で，やや散漫ながら広範囲に分布する石器ブロック１がある。ブロックの北側は１ｂ区に連続するような状況で石器が分布する。しかし，南から北へ石器が二次的に移動したことを示すような，流路状堆積は確認していない。

出土した石器の様相はこれまで報告した各調査区とは異なった特徴をもつ。長さ35㎜ 未満の小形ナイフ形石器が多く，二側縁に整形加工を施すものが多い。また，石核にみられる剥片剥離は，大形の剥片あるいは塊石を素材として，交互，左右に打点をずらし，また各方向に打面・作業面を転移して，大小の多様な剥片を剥出する技術がみられる。石材に関しては，サヌカイトでは金山産城山産などの五色台白峰以外の石材の比率が多く，「ハリ質安山岩」などの山裾の転石も石材として利用する。これらの特徴は調査地西側の３ａ・３ｂ・３ｃ区とは異なり，本調査区北に隣接する１ｂ区に共通する。

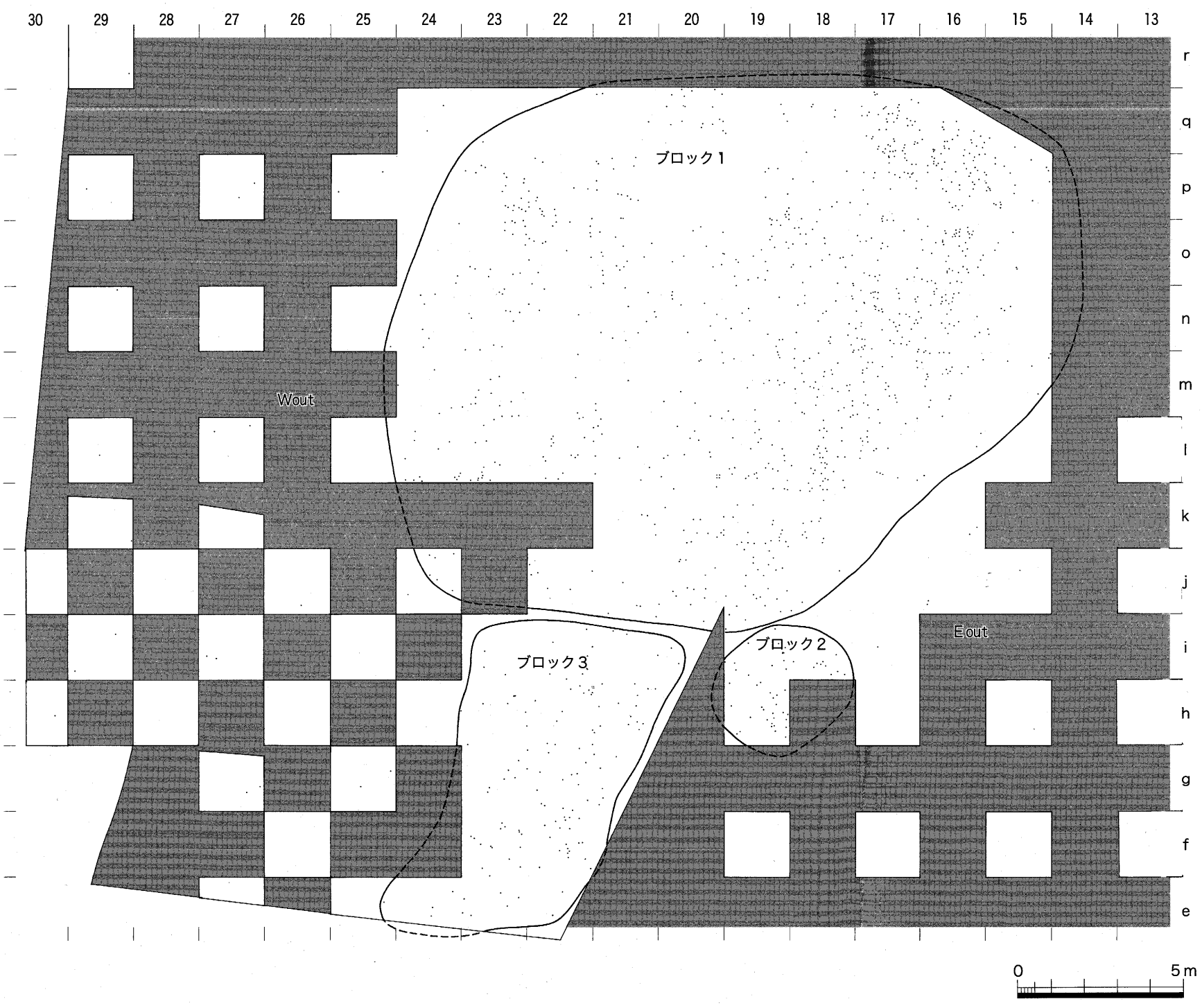
ブロック毎にみると，ブロック１では大形の角錐状石器やナイフ形石器とともに，上記のような特徴的な小形ナイフ形石器が出土する。一方で，ブロック２出土の石器は，大形の角錐状石器・ナイフ形石器を保有し，小形のナイフ形石器は認められない。また，ブロック３では逆に小形ナイフ形石器のみで組成する。ブロック１の石器の様相は，ブロック２およびブロック３をふまえて考えると，複数の石器相が混在するようにもみえる。ブロック１をさらに細分する必要があるかもしれない。分析編に送る。

石器の接合は当調査区では低調である。合計15件，35点の石器接合が認められた。Ⅱ種接合が多く，９件，Ⅰ種接合はブロック１内で６件のみである。一方で，特徴的な石材に基づいて，一部で個体識別作業を行った。詳細はブロック細分に関する点とともに分析編に送るが，合計10個体の区分を行っている。

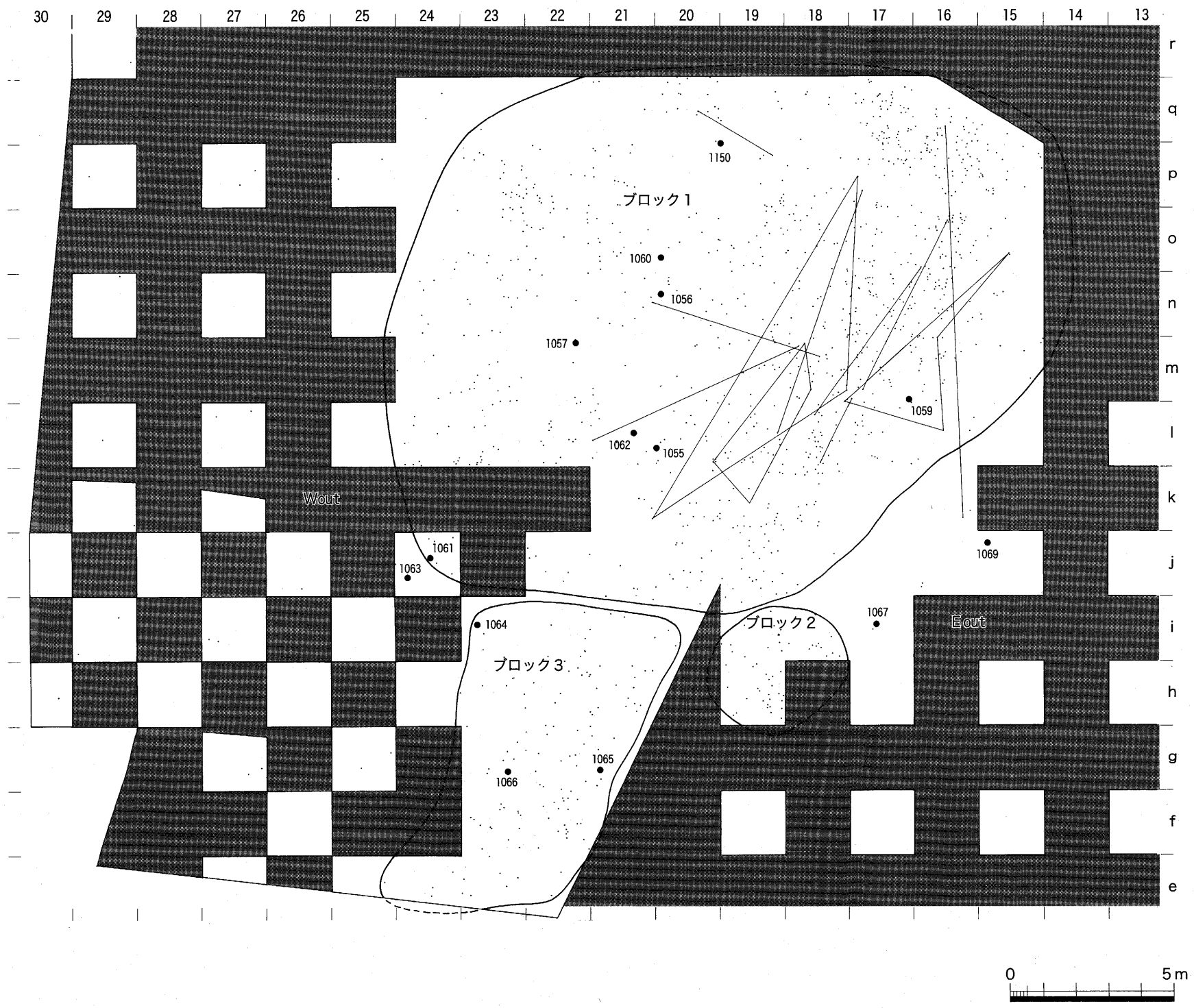
礫は調査面積の割にはさほど多くない。合計16点が出土している。石器ブロック１の中央部分で礫分布のまとまりがあるが，そのほかの多くは単独で出土する。砂岩で表面に亀裂をもち，赤色化するものが多く，花崗岩が少ないのが特徴である。１ｂ区の礫石材の多くが花崗岩である点と対照的である。

（２）層位と石器分布の概要

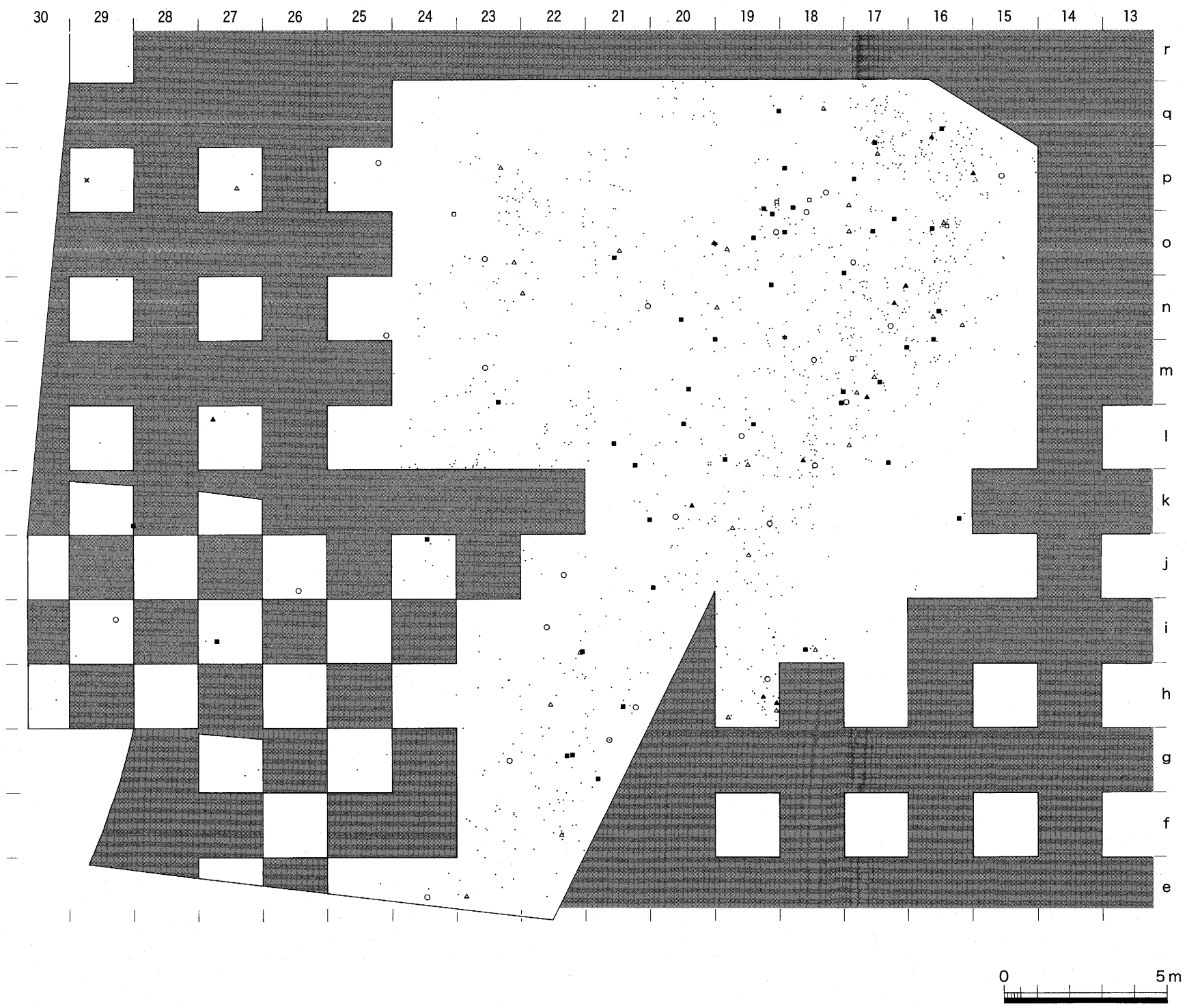
石器の分布は，調査区の中央から北東側にかけて，尾根筋の緩やかな背部に沿って中心がある。東西約20m，南北16約mの規模の大きなブロック1，その南に南北10m，東西３～４mのブロック2，ブロック１ｎ南に直径２mほどの小規模なブロック３がある。それらのブロックの東西外縁部には，1m間隔の方格トレンチで確認した限りであるが，1点／㎡ ほどの散漫な石器分布がみられる。



第261図　5区出土石器全点分布図およびブロック区分（S=1／160）



第262図　5区接合資料分布図および礫分布図（S＝1／160）



第263図　5区石器器種別分布図（S＝1／160）

石器包含層は35～50cm の厚さで残存する。このうち調査区南側は後世の盛土によって古墳時代以前の堆積層が良好にパックされ，逆に調査区北側は石器包含層上部が削平される。古墳時代以前の堆積層で最も上部にあるのは，0層とした粗砂が目立つ厚さ約10cm の暗灰黄色土である。調査区南側にのみ分布する。調査時の所見ではこの層中には石器は含まれていないようである。Ⅰ・Ⅱ層は砂が目立つ黄灰色系の堆積層で，調査区南側では両層が確認できるが，北側ではⅠ層が削平されⅡ層のみが残存する状態である。Ⅲ層は明橙色系の粘土層で，遺跡全域で一般的にみられる。石器は主としてⅡ層とⅢ層上部において出土した。Ⅳ層は堅く締まった濃橙色の基盤層である。なお，調査区南側ではⅢ層を切り込んで黒色粘土層の部分的な落ち込みがあるが，埋土中からは石器は出土していない。

（3）礫

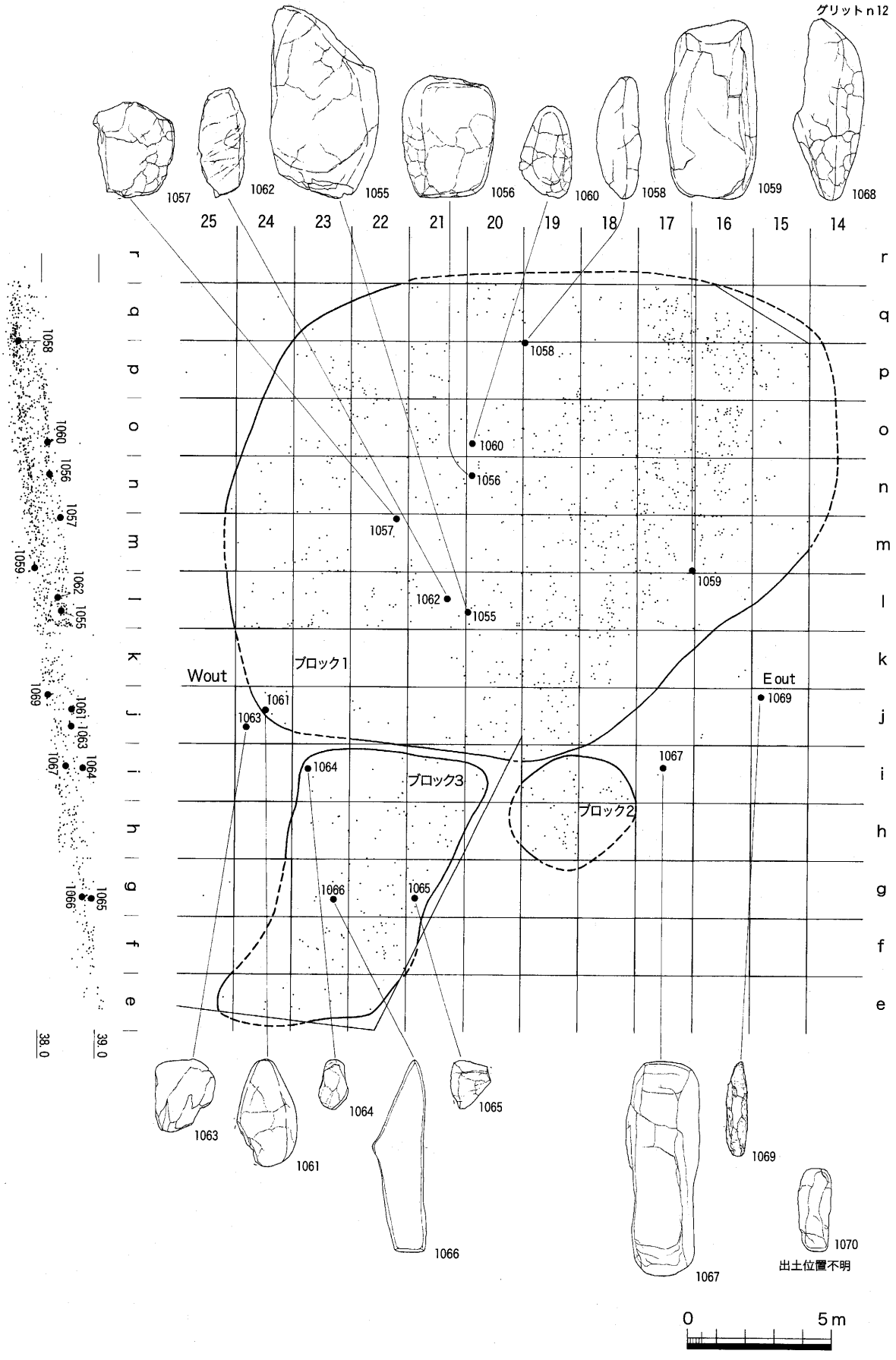
合計16点の礫が出土した。分布はブロック1の西側を中心に，さほど集中することなく散漫に分布する。石材は，砂岩10点，花崗岩1点，安山岩3点のほか，凝灰岩1点，花崗岩中に含まれる石英結晶を使用したものが1点ある。計測値は下表のとおりである。

1055～1059はやや角を留めた砂岩礫で表面に細かな亀裂が認められる。1058以外はすべて破断面をもつ。1059は原礫面片側が赤化する。そのほかの個体には顕著な赤化は認められない。

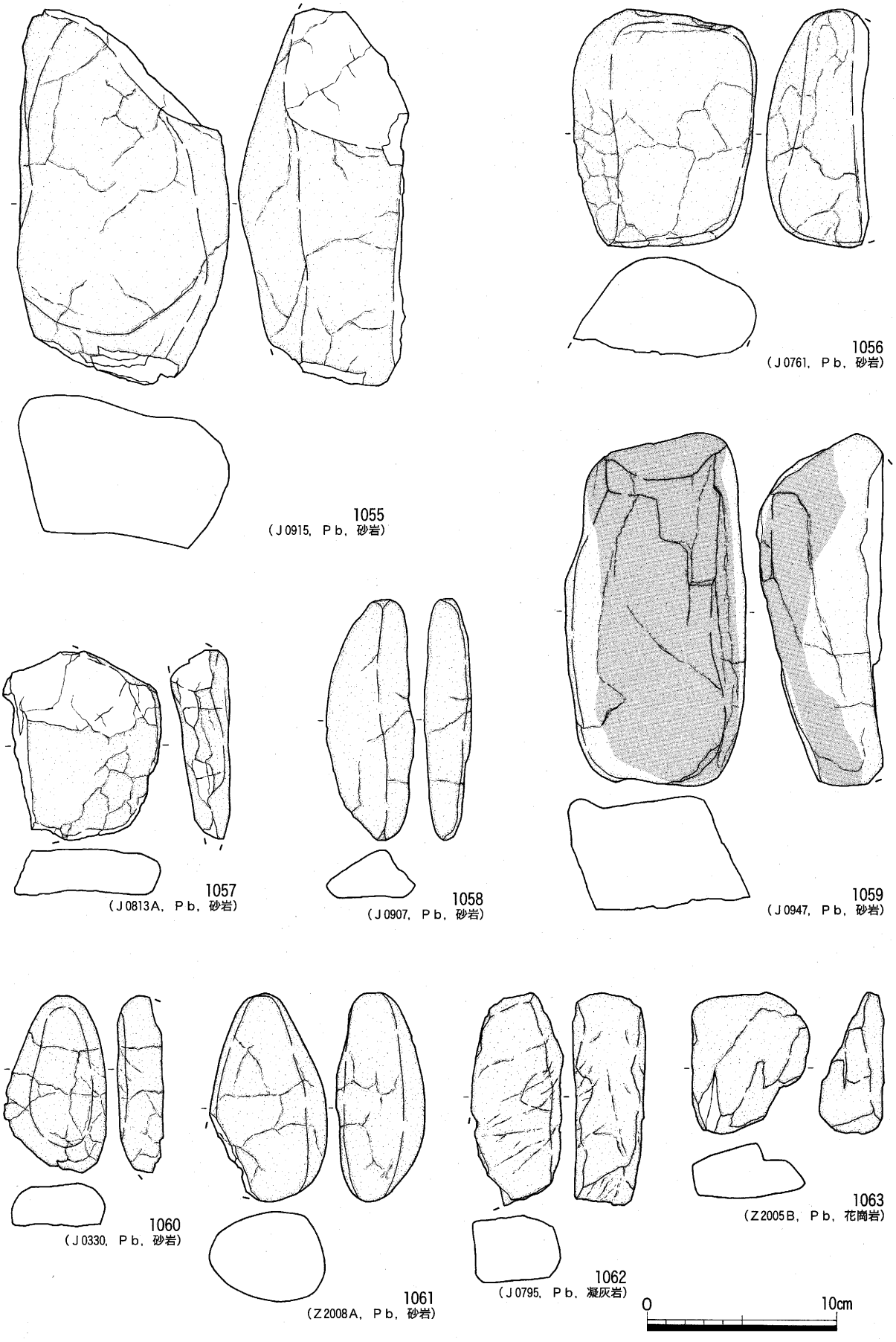
1062は白色に風化した凝灰岩である。図左下は欠損か破断か判断できない。1063は花崗岩の原礫面で覆われる。僅かな亀裂が認められるが，被熱によるものか不明。1064・1065は六ツ目山転石と目される風化顕著な安山岩。器表面に亀裂が顕著に認められ，破断面を有す。1066は堅緻な石質の安山岩である。産地は不明。器表面は白色に風化する。一部磨滅痕と目される箇所もあるが，明確でない。1067・1068は外縁部出土の砂岩礫。長さ20cm ほどで縦長形状。1068は器表面の亀裂と赤化が顕著である。1069は外縁部出土の石英結晶片。当初石器として取り扱ったが，すべての面が節理面かあるいは破断面と認定し，自然礫とした。花崗岩風化土壌である基盤土層中には，このような石英結晶が多少とも含まれるが，大きくても1cm 以下のサイズであり，このような大形の結晶は自然状態では含まれないと考えられる。1070は砂岩原礫面で覆われ，器表面に若干の亀裂がみられる。

番号	取上番号	長×幅×厚（cm）	重量(g)	石　材	亀裂	赤化	付着物	グリッド	備　　考
1055	J0915	13.5×7.5×6.2	2248.3	砂岩	◎	×	×	l20	
1056	J0761	8.6×6.8×3.7	828.0	砂岩	◎	×	×	n20	
1057	J0813A	6.7×5.5×2.1	255.8	砂岩	◎	×	×	m22	
1058	J0907	8.6×3.2×1.8	150.5	砂岩	○	×	×	p19	
1059	J0947	12.5×5.4×4.5	1500.0	砂岩	○	◎	×	m17	
1060	J0330	6.5×3.7×1.7	138.3	砂岩	◎	×	×	o20	
1061	Z2008A	7.5×4.2×3.2	362.5	砂岩	◎	×	×	j24	
1062	J0795	7.8×3.3×2.6	287.5	凝灰岩	×	×	×	l21	
1063	Z2005B	5.2×4.2×2.3	154.0	花崗岩	△	×	×	j24	
1064	Z2037A+B	3.5×2.8×2.1	34.0	安山岩	◎	×	×	i23	破断面で2個体が接合　風化顕著
1065	Z2063B	3.4×2.8×2.0	38.9	安山岩	◎	×	×	g21	風化顕著
1066	Z2053	13.4×3.7×3.2	699.5	安山岩	×	×	×	g23	硬質の安山岩
1067	Z1085	15.0×5.1×4.2	1477.7	砂岩	○	×	×	i17	
1068	J0982	12.7×4.9×3.8	702.2	砂岩	◎	◎	×	n12	
1069	J0026	6.6×1.5×1.9	71.8	石英	×	×	×	j15	一部に剥離痕？
1070	J0832	5.8×2.3×1.3	82.5	砂岩	△	×	×		出土位置不明

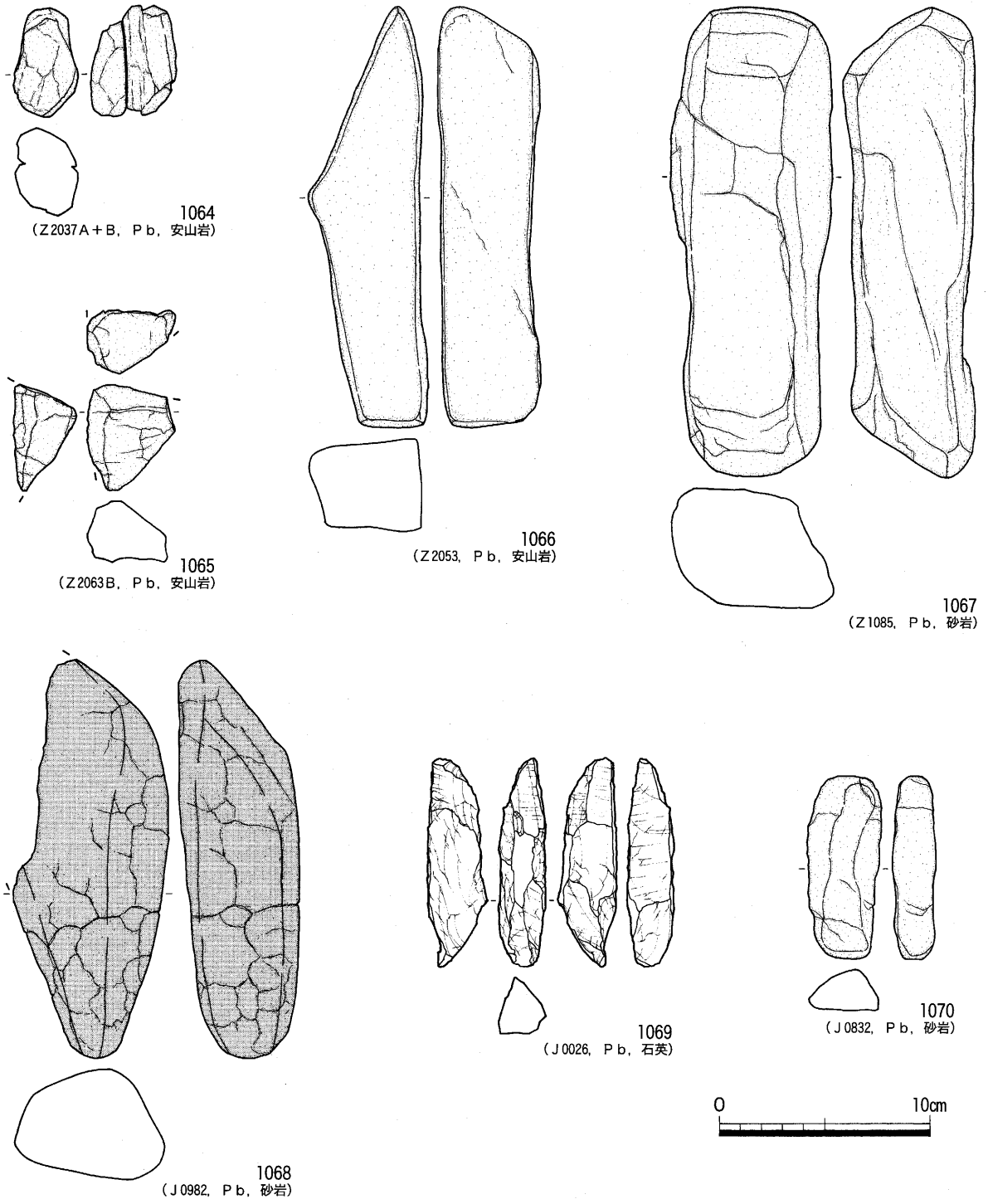
第117表　5区出土礫属性表



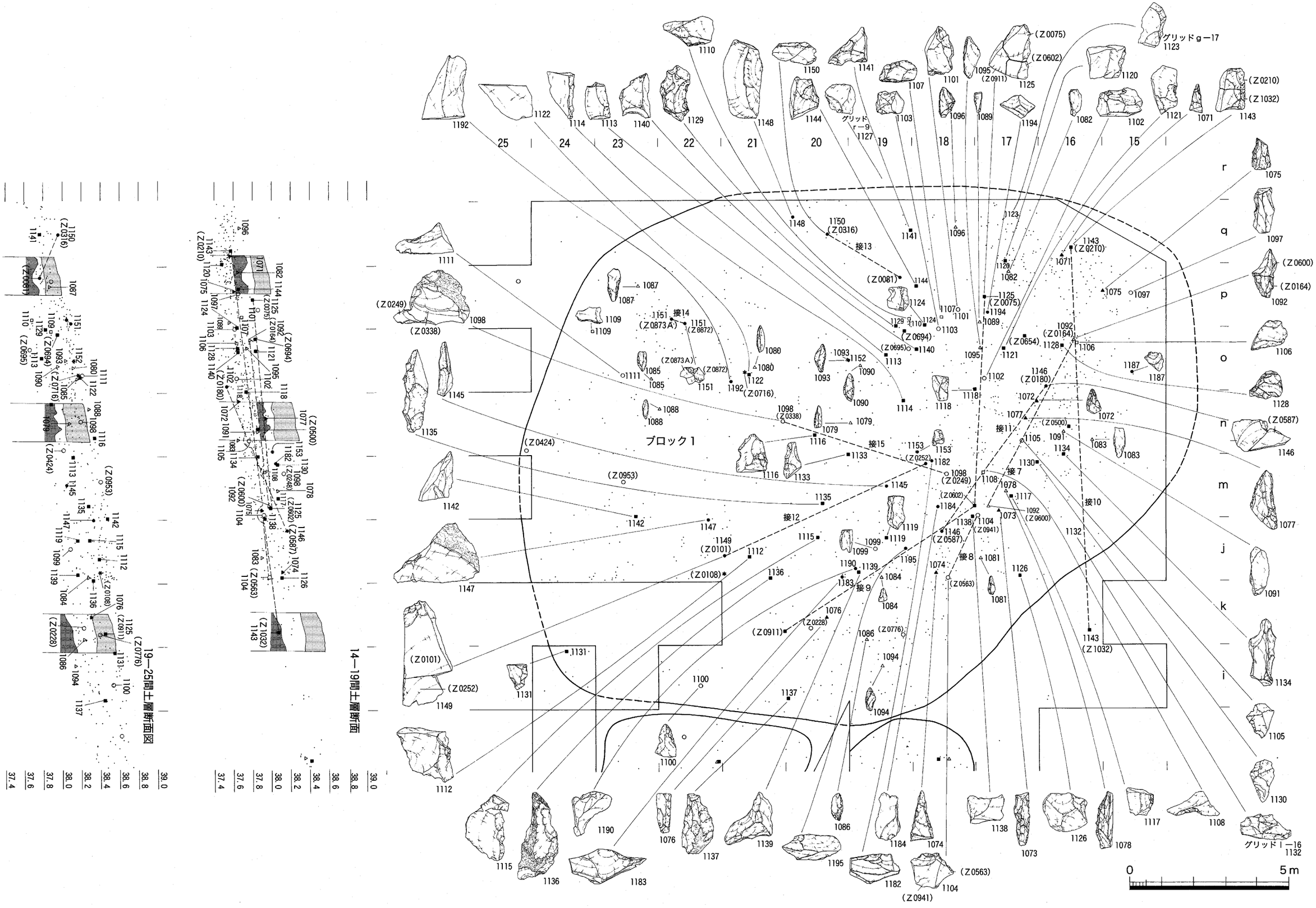
第264図　5区礫分布図　(S=1／200)



第265図　5区出土礫実測図1　（S＝1／3）



第266図　5区出土礫実測図2　（S＝1／3）



第267図　5区ブロック1　器種別石器分布図（S＝1／120　垂直分布S＝1／40）

（4）5区ブロック1

＜石器分布＞

調査区中央から北東に延びる緩やかな尾根背部に沿って，東西に広がりを見せながら分布する規模の大きなブロックである。東西20m，南北16mの面積をもつ。最も石器分布密度が高いのはブロック東側で，接合資料もブロック東側を中心に分布する。ブロック西側は細かくみれば直径２～３mほどの単位で集中部を細分することが可能かもしれないが，明確に境界を区切ることができないため，ここでは便宜上一括して報告し，ブロック内細分については後述する。

ブロック内では，主要器種のⅡ種接合が多くみられる。接合距離は５～12mのものが多い。これまで報告した調査区と比べて接合距離が長く，1b区とも共通する。

ブロック１の石器組成を下表に示した。石核の組成比及び重量組成比が多い。

器種	点数	比率（全）	比率（定形）	重量（g）	重量比（全）	備考
Tr	7	0.7%	8.1%	53.8	1.4%	点数欄の（）はⅡ種接合片で外数とした
Kn	19(1)	1.9%	23.3%	53.2	1.3%	
Sc	5	0.5%	5.8%	37.5	1.0%	
RF	14(2)	1.5%	18.6%	340.5	8.8%	
UF	1	0.1%	1.2%	14.3	0.4%	
Cr	35(2)	3.5%	43.0%	684.6	17.6%	
Fl	717(4)	69.0%		2,658.0	68.2%	
Ch	234	22.4%		46.3	1.2%	
RM	2	0.2%		6.6	0.2%	
GS						
HS						
Sa	2	0.2%		1.4	0.1%	
Po						
合計	1,036(9)	100.0%	100.0%	3,896.2	100.2%	

属性項目		数値
面積	(m^2)	260
石器数	(点)	1045
分布密度	(点/m^2)	4.0
平均重量	(g)	3.7
定形石器保有率	(%)	8.2
定形石器重量比	(%)	30.4
接合個体数	(点)	32
接合率	(%)	3.1
接合重量	(g)	583.5
接合重量比	(%)	15.0

標高（m）	点数
37.2	0
37.3	2
37.4	37
37.5	113
37.6	119
37.7	110
37.8	118
37.9	96
38.0	112
38.1	104
38.2	60
38.3	72
38.4	52
38.5	24
38.6	10
38.7	2
38.8	1
38.9	1
39.0	0

第118表　5区ブロック1　石器分布内容総括表

＜主要石器＞

角錐状石器（1071～1077）

７点の角錐状石器が出土した。完形品はないが，1073～1077は全長70.0～100.0㎜に及ぶものと考えられ，中・大形が主体の構成である。いずれも二面加工品で，裏面に整形加工を施すものはない。断面形は1071・1074・1077が台形，ほかは三角形である。稜上調整は４点にみられる。

1071・1074は先端付近まで断面台形の扁平な器体形状をとどめ，先端の１～２回の整形加工において僅かな尖頭部を作出する。1077は湾曲した剥片を素材として軽度の加工を施すもので，必ずしも定形的でない。1073・1076は他よりやや甲高で，3c区の角錐状石器に近い。

番号	実測	分布	図版	取上番号	長×幅×厚（㎜）	重量(g)	遺存状態	断面形	石材	整形加工	個体･接合	グリッド	備考
1071	268	267		Z0221	29.7×14.2×8.0	2.0	先端のみ	□	An-A	2-W		q16	先端付近まで扁平
1072	268	267		Z0516	26.2×16.5×10.0	2.5	先端のみ	△	An-A	2-S		n17	調整剥片
1073	268	267		Z0599	55.5×17.0×12.0	11.4	半折	△	An-A	2-W		m17	甲高
1074	268	267		Z0570	52.5×24.0×1.0	8.8	半折	□	An-A	2-W		l18	先端付近まで扁平
1075	268	267		Z0529	33.0×19.5×12.5	7.2	先基欠	△	An-C	2-S	個3	p16	国分寺
1076	268	267		Z0223	41.8×16.2×13.2	8.6	半欠	△	An-A	2-W		k20	
1077	268	267		Z0038	62.5×28.0×10.0	13.3	半折	□	An-A	2-S		n17	整形加工軽度

第119表　5区ブロック1　角錐状石器 属性表